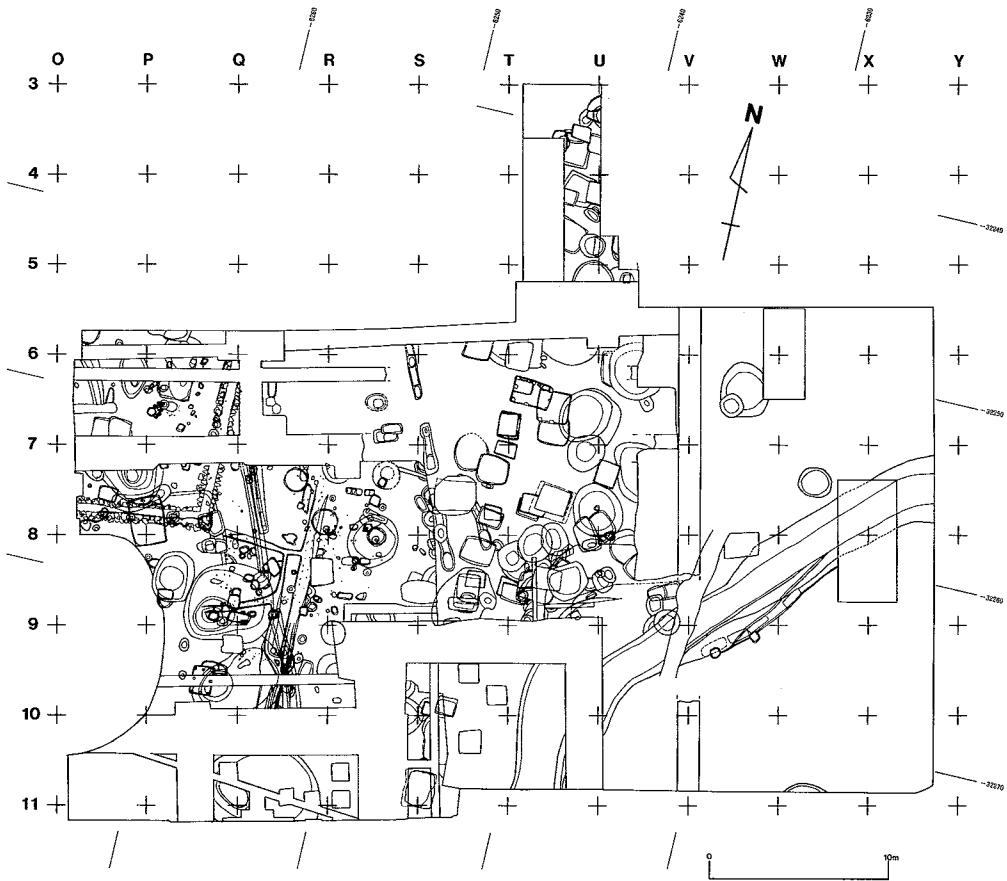


第四章 江戸時代の調査 II

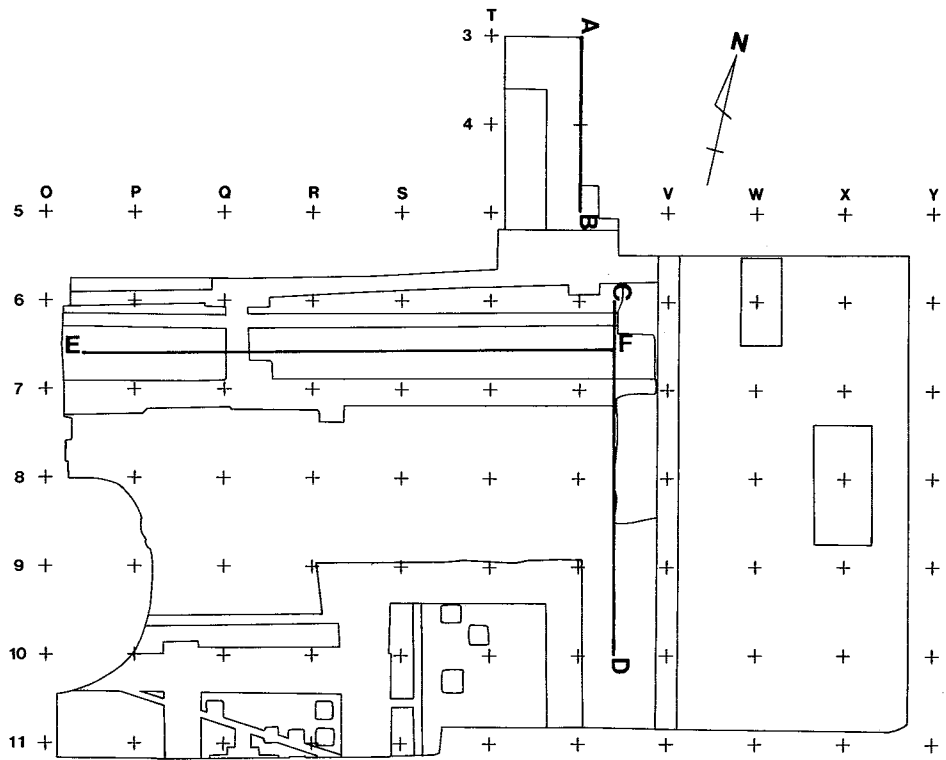
第一節 調査の概要

ここで報告するのは、文学部3号館建設地区(第2図, 第288図)における江戸時代の調査成果である。本地区の江戸時代遺跡の特徴に基づいて、調査の概要を四区に分けて説明する。

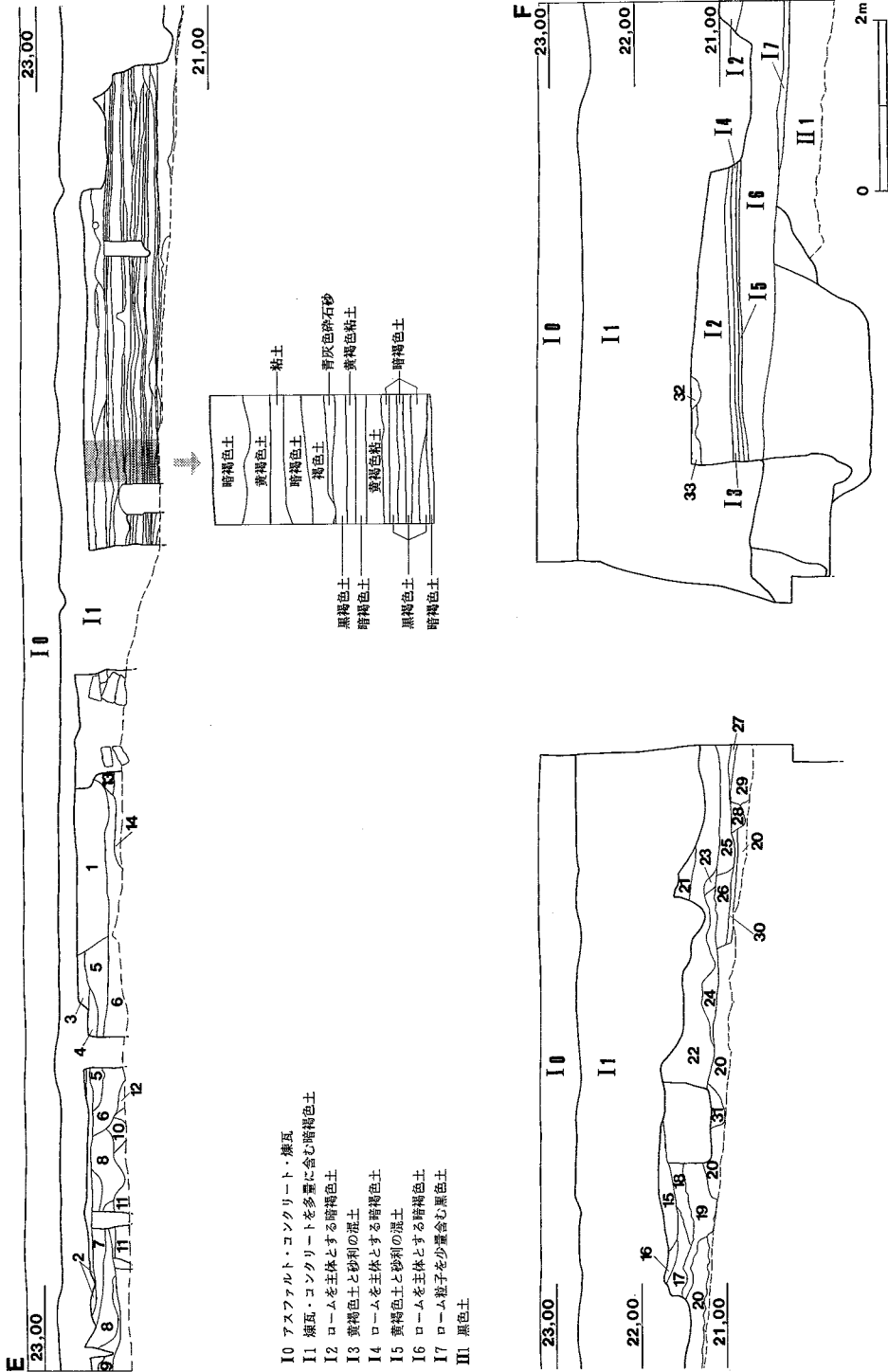
(大塚 達朗)



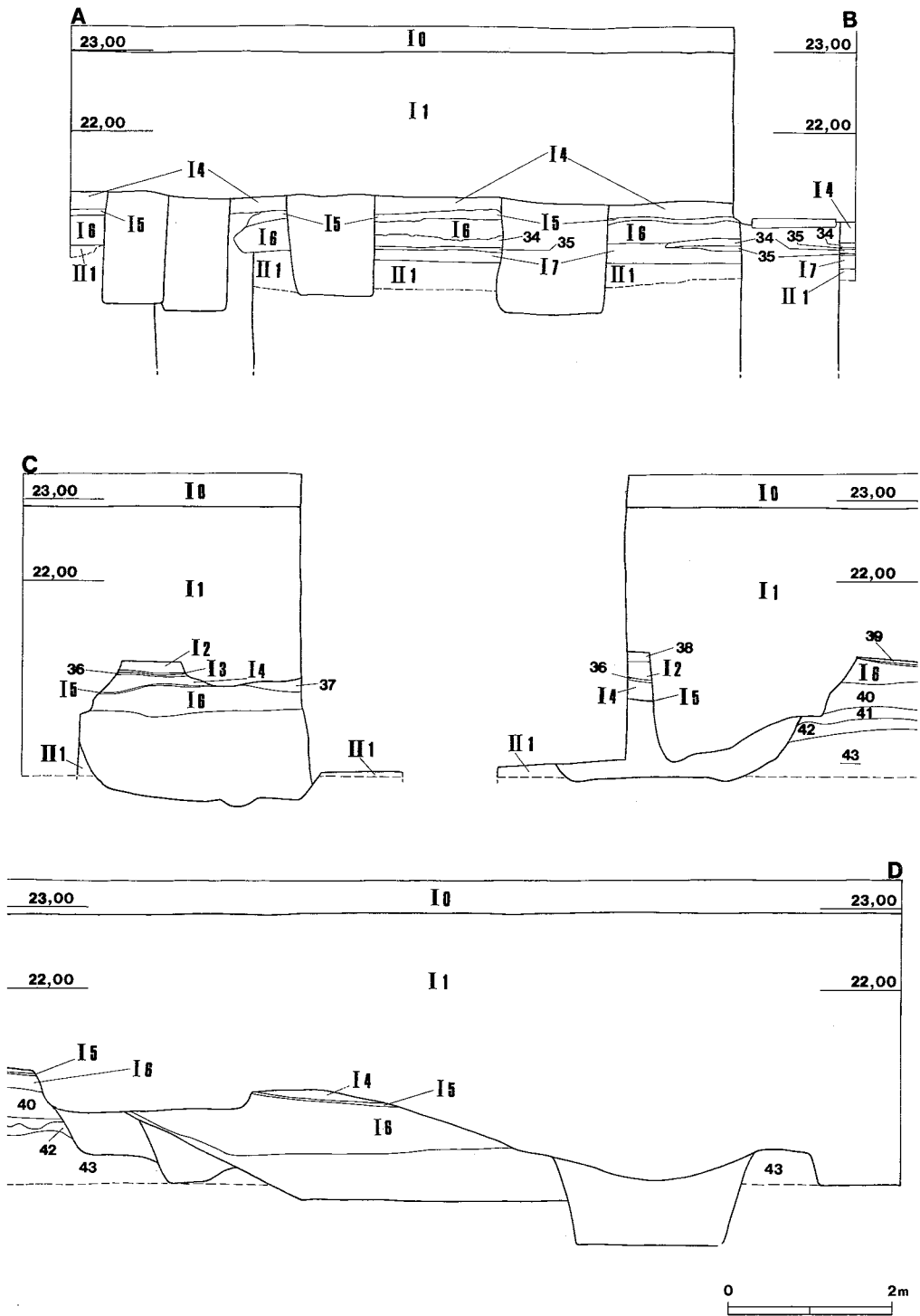
第288図 文学部3号館建設地区江戸時代遺構全体図



第289図 土層断面図の位置



第290図 江戸時代の層序(1)



第291図 江戸時代の層序(2)

土層注記

・東西セクション

- 1層 暗褐色土 (瓦・円礫・ロームブロック・粘土を含む)
- 2層 暗褐色土 (礫・瓦の小破片を含む)
- 3層 砂利層
- 4層 褐色土 (礫・瓦破片・ローム粒子を含む)
- 5層 暗褐色土 (ロームブロック・ローム粒子を多量含む)
- 6層 暗褐色土 (瓦を多量含む)
- 7層 黄褐色土 (瓦・礫を多く含む)
- 8層 暗褐色土 (礫・ロームブロック・ローム粒子・瓦を多く含む)
- 9層 黒褐色土 (赤色粒子・ローム粒子を微量含む)
- 10層 暗褐色土 (ローム粒子を微量含む)
- 11層 暗黄褐色土 (赤色バミスを微量含む)
- 12層 黒褐色土 (ローム粒子・ロームブロックを含む)
- 13層 黄褐色粘土と黒色土の互層
- 14層 褐色土 (円礫を含む)
- 15層 黄褐色土
- 16層 黒褐色土 (粘土粒子・ローム粒子多量含む)
- 17層 黒褐色土 (ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化物粒子微量含む)
- 18層 黒褐色土 (ロームブロック・ローム粒子少量, 粘土ブロック微量含む)
- 19層 黒褐色土 (ローム粒子・粘土粒子を少量含む)
- 20層 黒褐色土 (ローム粒子微量含む)
- 21層 黒褐色土 (小円礫・ローム粒子・ロームブロックを含む)
- 22層 暗褐色土 (ローム粒子・ロームブロックを多量, 炭化物・小円礫・粘土粒子を含む)
- 23層 褐色土 (小円礫を含む)
- 24層 黒褐色土 (ロームブロックを少量含む)
- 25層 砂利 (ロームを含む)

- 26層 褐色土 (ロームブロックを多量含む)
- 27層 褐色土 (粘土粒子を含む)
- 28層 黒褐色土 (ローム粒子・ロームブロック・円礫を含む)
- 29層 黒褐色土 (ローム粒子・ロームブロックを多量含む)
- 30層 黒褐色土 (ローム粒子・小円礫・粘土粒子を多量含む)
- 31層 黒褐色土 (ローム粒子を少量含む)
- 32層 褐色土 (ロームブロック・粒子を多量, 焼土粒子を少量, 粘土粒子を微量含む)
- 33層 暗褐色土 (ローム粒子・焼土粒子を含む)

・南北セクション

- 34層 黒色土
- 35層 破碎砂岩
- 36層 灰色粘質土 (ロームを含む)
- 37層 白色粘質土
- 38層 ロームと灰色土の混土
- 39層 暗灰色土 (砂利・ロームを含む)
- 40層 暗灰色土 (ロームを少量含む)
- 41層 黒色土
- 42層 灰色土
- 43層 暗褐色土 (ロームブロックを含む)

(1) P～S=5～10区の調査

東は、近代の攪乱が一段と深く段状に及んでいるSライン東約1mまで、北・西・南についてはそれぞれ文学部発掘区の北端・西端・南端までをここで扱う。面積にして約500m²の範囲であり、200基の遺構を擁している(第289～293図)。

本地点は法文2号館と総合図書館との間に位置している。調査開始の時点において、その大部分は植込みとなっており、北端と南端が舗装道路に若干かかっていた。

本調査に先立ち、1984年2月に植込み部分のS8・S9両グリッドにかかる位置に2×2mの範囲で試掘を実施した。その際、その試掘坑では地表下1m程で比較的安定したローム質土盛土の上面を確認することができた。しかし、他の試掘坑では近・現代の攪乱がかなり深くにまで及んでいることが判明したことから、翌3月には直交する2×20mのトレンチ2本を入れることになった。東西方向のトレンチはQ区からT区にかけて8ラインの南北1mずつ、南北方向のトレンチはTラインとその東2mまでである。そのうち東西方向のトレンチは地表下に埋設されていた暖房用ビットと重なってしまった為に、さらに北側に1m拡張することとなった。本地区に関しては、この東西方向トレンチが北半を貫通することになったわけであるが、それによって、西側ではローム地山のレベルが高く、東側に行くにしたがってそれが次第に下がっていき、それを補い平地化するために近世に何度かにわたって土盛りが行われている状況が明らかとなった。

同年4月から本調査を開始するにあたり、試掘トレンチから得られた知見をもとに、重機を用いての舗装部分の破碎・撤去と植込み部分の排土とを行った。その結果、上記の暖房用ビット以外にも何本もの水道・電気関係の配管が埋設されていたことが判明し、また発掘区南端が旧帝国大学図書館の基礎によって大きく破壊されていることも明らかとなった。そのほか近代の遺構としては、P8・Q8区に跨がる位置には煉瓦造りの六角形基台が、Q9・R9区に跨がる位置では大甕を埋設した方形の土坑が発見され、旧図書館以外にも帝国大学関係の建造物が存在したことが確認された。

本調査は盛土の層を一枚ずつ剥がしながら遺構の検出を進めていった。その結果、まず、海拔にして22.4～22.5mのレベルを持つ黄褐色土上面において多数の遺構が掘り込まれていることを確認し、これを江戸第一面と仮称した。さらにその下、海拔22.2m前後のレベルを持つ青灰色碎石砂層上面においても比較的多数の遺構を発見した。それらと、さらに下位のレベルで確認された若干の遺構とを併せて江戸第二面の遺構群として一括して把握した。これは、青灰色碎石砂層の広がりが見えなかったこと、および、盛土と似通った土質を埋土として持つ遺構がかなりあり、掘り込み面の確定が厳密にはなし得ないものがあったことによる。

盛土上層の剥ぎとり作業、既ち近世遺構の検出作業は同年10月いっぱいではほぼ完了した。その時点ではローム漸移層ないしソフトロームが露出しており、以後、先縄文時代の調査へと移行し、若干の遺物を検出することに成功した。また、ローム漸移層中および近世の盛土中から少量の縄

文土器も出土している。

このようにして、試掘調査開始以来丸一年にして、1985年1月末にすべての調査を終了することができた。

前述したように、発掘時の地表面下1 m余りは近代の攪乱土壌であり、その下に平均して60cmほどの厚さに近世の土層が堆積している。この層は何度かにわたって人為的に行われた土盛りによって由来している。その土層の模式図を第293図に掲げた。四ヶ所の土層断面図を比較して判るように、地点によってある層が欠けていたり他の層によって置きかえられていたりすることがしばしばである。

最上位の黄褐色土層の上面で多くの遺構が確認されたことから、その面を江戸第一面と仮称したことは先にも述べた。これはその下約30cmほどに広がる青灰色碎石砂層上面より上のすべての土層を1セットとする土盛りの上面ないしその直下の面に営まれたある時期の居住面と考えられるものである。この土盛りはQ・R・S区にわたり、真南北から2~23°の偏差をもって伸びており、約10m程の幅を持ち、中央で厚く両端で薄い断面レンズ状を呈している。特に両端ではローム漸移層の上に直接乗り、次第に薄くなりながら消滅しており、その部分に位置する遺構の時期決定を困難なものにしている。

江戸第一面の下に堆積する青灰色碎石砂層から漸移層直上まで続く厚さ40cm弱の一連の盛土は、ごく少数ながら明らかにその中間に掘り込み面を持つ遺構が存在することから厳密には一つのセットをなすものとは認められないが、種々の理由から一括して江戸第二面として把握したことは前述の通りである。江戸第二面とはいうものの、1603年の江戸開幕以前（ただし家康の入城以降）の遺構を包含している可能性がある。

この盛土も面的な広がりはやや不明瞭ではあるが、上層の盛土とほぼ同様の規模と方向とをもって造成されたものと考えられる。

そしてこの下にはローム漸移層、ソフトローム、ハードロームと続く自然堆積がみられる（以上の土層については第6図、第11図を参照のこと）。

江戸第一面は本郷邸が上屋敷となってから以後、幕末に至るまでの複数の時期の遺構を含んでいるものと思われる。ただし、この面そのものは元禄元年の絵図面が作成された時点の地表面と極めて近いレベルにあるものと思われる。元禄期以降の地表面はより上位に位置し、近・現代の攪乱で削平されてしまったものようである。従って、その時期の遺構は井戸や深い掘り込みをもつ土坑のみが残存しているものと考えられる。元禄期以降の遺構群は真南北の方向性を持つものが多い。R 7-3号溝やS 7-11号、S 7-49号、S 7-39号、S 8-6号、S 7-40号、S 8-7号、S 8-8号、R 8-29号遺構によって構成される方形の建築址、本地区からは外れるが、T・U区に伸びる一連の焼土入り土坑群および焼土入り土坑群を切る「地下式坑」を含む方形の土坑群などがこれに相当する。焼土入り土坑を火災の後片付けに由来するものであるとすれば、その火災は本郷邸がほぼ全焼したといわれる元禄16（1703）年の火事と関係する可能性が高い。

それに対して江戸第二面の遺構群は真南北から22~23°ふれた方向性が特徴的である。R 8-23号, R 9-7号, R10-1号の三つのドーナツ状の掘り込みを持つ土坑を結んだライン, R 7-11号, R 7-12号, R 9-9号の3本の溝の長軸方向, 本発掘区からは外れるが, S 5-1号, T 6-4号, T 7-14号, T 7-15号の4本の幅が狭く両端に深い窪みを持つ土坑を結んだライン, 盛土の長軸方向などがそれに相当する。これらの土坑群は本郷邸が上屋敷になる以前の時期に属するものであると思われる。しかし, 厚さ数10cmの土盛りを行った上に構築されていることを考え併せると, 加賀藩の下屋敷時代の遺構群である可能性が最も高いものと思われる。早くとも1590年に徳川家康が江戸入城して以降のものであろう。

以上のように, 本地区の近世遺構群は, 16, 17世紀の頃から幕末に至る300年近い間にわたって連綿と営まれてきた大名屋敷の変遷の痕を示すものであり, 文献資料の欠を補うに余りある重要な歴史的資料を我々に提供するものである。 (中村 慎一)

(2) U~V=3~5区の調査

U~V=3~5区は文学部2号館と文学部3号館の渡り廊下になる部分であり, 東西4.5m, 南北12m程の部分である(第304, 305図)。南にある共同溝によって, 主な文学部の調査区と隔てられている。西側には, 関東大震災で消失した旧法科大学・文科大学の基礎があり, 最西端の0.5mは文学部2号館の建築の際に掘削され, 埋め戻されたロームを主体にする埋土になっている。地表下2m(標高21.3m)近くまでは近代以降の盛土と考えられる(第291図A-B)。

この部分の基本的な堆積は以下の通りである。10cmの厚さのアスファルト, その下に15cmの厚さの鉄筋入りのコンクリート, 約10cmの厚さのグリ石がわりと考えられる煉瓦の破片からなる層が最上部にある。この下におそらく関東大震災で消失した建物の残土と考えられる50cm内外の厚さの煉瓦・コンクリート片を多量に含む暗褐色土がある。この中には長さが1m以上もあるような煉瓦の塊が入っており, さらに土がきわめてルーズなため, 雨で崩れることもあった。この下には, 若干の煉瓦片などを含む1.2mの厚さの暗褐色土がある。この層にはかなりの量の小砂利が入っている。おそらく, 旧法科大学・文科大学の建物ができた時に一度土地を削平したあと盛った土であろう。この土まで重機で取りのぞき, 調査に入ったが, 調査区の中央には, 高压電気の電線の入っていた鑄鉄管, 雨水排水用の土管などもあり, 部分的に近代以後の土が深部にまで入っていた。

この下からは江戸時代に遺された土層となる。まずより南に続くロームブロックをかなり含む褐色土があり, この下はロームが主体の黄褐色土となる。これはより南の調査区で鍵層となっている盛土と同じ構造である。この下はローム粒の入った黒色土となる。南よりの部分では, この下に砂岩をつぶしたようにみえる薄層があり, ローム粒を少量含む黒色土となる。ここまでが江戸時代の盛土であり, この下は自然堆積になる。自然堆積は黒色土, 漸移層, ソフトローム, ハードロームと続く。自然堆積の層は東に向かって傾斜しているが, 南北方向では4ライン付近がもっ

とも低くなっている。

U～V=3～5区には、21の遺構がある。井戸2と土坑19である。このうち黄褐色土の盛土ができてから後の遺構が19であり、それ以前の遺構はV3-11号土坑(井戸)とU3-10号土坑の2遺構にすぎない。土坑は方形の一辺が2m弱のものの一辺が1m内外のもの、円形・楕円形のもの各種のものがみられる。遺構相互の層位的な観点からの新旧関係は対照表として第316図に掲げる。

U3-1号土坑とU4-2号土坑はいずれも0.8×1.0mぐらいの規模のものであり、その間隔も中心と中心の間でほぼ3.6mを測る。埋土は焼土と焼土塊が主であり、良く類似している。より南にあるU6-6号、U6-5号、T7-11号、T8-10号、T9-1号土坑と一連のものであろう。U3-1号土坑とU4-2号土坑からそれぞれ出土した染付碗が接合している。底面も19.40m前後とほぼ一致した高さである。同じ機能を持ち、同時におそらく火事によって生じた残土によって埋められ、機能を失ったと考えてよいであろう。(藤本 強)

(3) T～V=5～10区の調査

北は6ラインの若干北にある東西方向の共同溝まで、東は本調査の際に調査したUライン東2mまで、西は攪乱が0.6～0.7mの段状になって入るSライン東1mぐらいまで、南は調査区の南端までをここで扱う(第306～313図)。

この地点は調査開始時には、大部分が舗装道路の下になっていた部分であるが、1970年代に正門と赤門を結ぶ道路近くに共同溝が新設されるまでは、電気・ガス・上・下水道・電話の学内の主要幹線が通っているところであり、それらの構築による破壊は想像をこえるものがあつた。またこれらに関する情報がすこぶる乏しく、電気の管が出たといつては指示を持ち、水道の管が出たといつては中断することがしばしばであつた。いずれもはっきりとは調査に際して渡された設備関係の図面に出ていないものであり、担当者の指示も時間がかかり、調査の進行は大きく妨げられた。もっとも甚だしかったのは、高圧電気に関するものであつた。ここには径10cm余の鑄鉄管のなかに高圧用のケーブルが入っているものが、3×3の9本まとまってあつた。これが地表下約2mのところであり、このなかには現用の6,600Vのケーブルが入っているとの話であつたので、パイプを組み、宙吊りにして嚴重に保護をしていた。ところが1ヶ月ほどして、マンホールをあけたところすべてのケーブルは切断済みであることが明らかになつた。その間に要した労力と気の使いようはたいへんなものであつた。これらを接続しているマンホールの撤去も重機が入っている時ならば簡単であつたのに、調査が進行していたため、重機を入れることはできず、すべてコンプレッサーと人手によってせざるを得ない状況になり、多大な費用と時間を要することになつた。

また東側にある共同溝を全面露出させることは、地表下3.0m下にある共同溝を30cmにわたって露出させることになり、またこのなかには現用のガス・水道・電気などのものが数多く入って

いるということであったので、種々の危険が伴うので、建設工事の際の撤去をまって調査を実施することにした。この東にも藤棚をはじめとして数々の建造物があるので、この部分は予備調査の際に入れたテスト・ピットを深掘りして、堆積の状況を見るのにとどめ、本調査を終了した。1985年4～5月に実施した地点については別項で述べる。

この地点の南側、9ラインより南は明治末年にたてられた図書館の基礎によって、大きく壊されていた。この基礎の上面は標高20.15m(地表下3.65m)にあり、さらに下に入っている。この東には現在の図書館の為の共同溝、図書館地下室のための空気の入れかえを凶る風洞があり、ほとんど調査することが不可能であった。この部分には、V～Y=6～10区の調査の項でみる道とそれに付随する若干の遺構がある。

この地点の基本的な層位はU3～U5区の調査の項でみたのと同様である。南の部分は道に関連してくるのでかなり異なるが、北の部分は舗装道路、関東大震災時の盛土、明治時代かと思われる盛土と続き、地表下2mぐらいで、ようやく安定した部分の多い面に達する。この下にも種々の要因で破壊が及んでいる。安定した面になるのは黄褐色土の盛土の上面もしくは若干それを削ったぐらいの面である。この面からは多くの土坑が切りこまれていて、盛土面のほうが少ないような状況になる。盛土のみられるのは、南はほぼ9ラインまでであり、後に述べるY7—101号遺構との関係についてはつかめなかった。盛土面は標高21.5m前後ではほぼ平坦であったものと考えられる(第291図C—D)。西側はTラインの西2～2.4mぐらいにまで達し、北側になるにつれ、広がる傾向をもっている。この盛土の東側の境界はV～Y=6～10区の調査の項でも触れるようについに把握することができなかったが、その幅は10～15mと考えられる。西はスムーズに自然堆積の面とつながる形になるし、南西方向でも同じようなことが云える。この盛土のみられる範囲は台地端が内側にやや湾入しているところで、その湾入の中心は4ライン付近にある。ここを埋め平坦部を広くするというのが盛土のそもそもの目的であったと思われる。従って西側の盛土の線が傾斜に沿って、西側に広がる形になるのであろう。

上面はかなり荒れているので確言はできないが、平坦な面の幅は10m以下であったように思われる。この下は黒味の非常に強い、水分を多量に含む黒色土になり、漸移層、ソフトローム、ハードロームという自然堆積になる部分が多い。若干の盛土を伴う部分もある。

この黄褐色の盛土は先にも触れているように間に砂層などの間層をはさむ構造をもっている。これの上下で様相は大きく変わる。これの下にある遺構は円形のものが多く、植栽の跡と考えられるものがほとんどであり、この盛土を切っている遺構は道の近くの若干の例を除くと方形のものも多く、明らかに居住と密接な関係を持っているものである。これらの方形の土坑を中心とした遺構群は図書館の基礎の間に僅かに残った幅1.4m程の所にも続いている。ここではその上面は破壊されて明らかではないが、Sラインの両側に破壊を免れて僅かにみられる。ここでは、遺構はロームを掘りこむ形で確認されているが、その本来の掘り込み面がどうなっていたか明らかではない。

遺構は密集している。この範囲に110の土坑がある。遺構間の層位的新旧関係はかなり複雑なので第316図に掲げる。盛土下の遺構はすべて円形のものであり、ほとんどは植栽の跡と考えられるものである。このことは屋敷が設けられた直後は、ここは庭園であったものと考えられる。この円形の植栽跡と考えられる土坑は東になるにしたがって数を減じる。

盛土の下にはならないが、切りあい関係からもっとも古いことが考えられるのが、T 7-15, T 7-14, T 6-4号遺構などの幅の狭い長方形で、両端に深い穴のある遺構群である。これらは真北から20度ほど西に偏った方向を持っており、盛土を切る遺構群とは異なった方向を持っている。この方向はSライン以西に見られる溝、たたきしめ面の方向と類似している。より古い時期のものであろう。この性格ははっきりしないが2列になるところから、何らかの建築に関わりのあるものと考えられる。

盛土を切っている遺構群は円形のものもみられるが方形のものが多い。盛土のある部分では、21の土坑のうち、19が方形である。大部分が方形ということができよう。この方形のものはU 9区・T 9区にも見られる。ここは盛土がなく、またU 9区には、V 8-2号遺構を中心にして多くの円形のものが見られる。これはあるいは盛土のつめ方か、もしくは植栽の跡かと思われるものである。

方形のものは類似の方向性をもっている。U 3～U 5区の調査の項でも触れたが、方形の土坑群のなかには、規模が1.0×0.8m前後で、底のレベルが19.7mで、焼土をつめた土坑がある。U 3-1, U 4-2, U 6-5, U 6-6, T 7-11, T 8-10, T 9-1の土坑であるこれらは間に破壊されたものが3つあったと考えられるので、計10の酷似した土坑が一直線上に並ぶことになる。これら相互の間隔はほぼ2間であり、規則正しい配置をしている。おそらく火事に際して一時に廃棄されたものであろう。

これらの方向はほぼ真南北である。法学部の遺構群はこれに直角の真東西をとるものがほとんどである。学内で調査されている他の地点でも類似の状況にある。大きく振れても2～3度、多くは0.5度以内の差で真東西南北を指す例が多い。これから考えると少なくとも18世紀以後においては、真東西南北を地割りの基礎とする設計が斉一的になされていたことが考えられる。これは病院地区の大聖寺藩の上屋敷を含めて云うことができる。

またV 7-1号土坑を除き、一連の土坑群から片側4mの幅のなかに方形の土坑群がすべて含まれることになる。これは先にみた盛土面より若干幅は狭いが類似のものである。くりかえし同じ場所に方形の土坑を構築したことを示しているものということが出来よう。

U 3-1, U 4-2, U 6-5, U 6-6と続く一連の土坑群では、興味ある事実がある。U～V=3～5区ではこの土坑が切り合い関係においてもっとも新しいが、本地点では、U 6-6号土坑はU 6-3号土坑に、T 7-11号土坑はT 7-10号土坑に、T 8-10号土坑はT 8-7・8・9号土坑に切られていてもっとも新しいものではない。そのあとに数度の遺構の重複がみられる。居住区が北から南に動いたことを示すものであろうか。

地下式土坑が5ある。T 7—12・T 8—9・U 7—1・V 7—1・T10—1号土坑である。T10—1号土坑は先述のU 3—1号土坑以下の一連の土坑群の延長線上に位置している。あるいは一連のものかとも考えられるが、埋土がかなり違っているので問題である。

盛土を切っているかもしくは盛土上面と同じような高さから切られている円形の土坑はV 8—2号遺構の傾斜した壁から集中して検出された。おそらくは道の側面を縁取る植栽の跡か道を固めるために土をつめたつめ方の差かと思われるがはっきりしない。いずれにしても道に関係するものであろう。

本地点の北側は居住区、南側は道とそれに関連するものがあつたのが、盛土以後の状況である。方形の土坑のうち、かなりのものはゴミ穴に利用されている。オーヴァーハングしているものも散見され、作りはいずれも入念になされているので、そもそもゴミ穴として作られたものではないと考えるのが妥当であろう。居住に関して設けられた何らかの施設、おそらく穴倉様のものがゴミ穴として再利用されたのであろう。方形の土坑の多くは真南北に近い軸線を持っている。地割りとの関連が考えられる。 (藤本 強)

(4) V～Y=5～10区の調査

調査区のもっとも東にあたる地点であり、1984年の本調査の時点では、現在使用中の数多くの建造物があり、1985年4月～5月にこれらの機能をとめ、工事のための撤去作業がおわつた後に調査を実施した。V=5～10区のうち、西3mの範囲は本調査時に調査している。

本地点は三四郎池に向かって、東に傾斜する斜面にかかつており、かなりの急傾斜でおちていつている。地表の建造物は藤棚だけであるが、地下には、共同溝2本、藤棚の中に抜けている図書館の空調用の風洞、構内電話のためのケーブル、排水用の配管などが埋設されていた。これらはいずれもかなりの深さをもっており、地表下3～4mでようやくその底に達するものが多く、その間もしくは、それより深いところに辛じて残っていた遺構を拾う形の調査であった。

この地点は関東大震災のあとに置いたであろうと考えられる厚い盛土がある。この中には、煉瓦片・コンクリート片が数多く含まれている。その厚さは3mを越えるところもあり、通常の形で調査をすることは不可能であった。

この地点の基本的な層位はおそらく関東大震災後と考えられる厚さ3m前後の盛土、その下に明治年間かと思われるいずれもロームブロックをかなり含む、暗褐色土～黒褐色土がある。その下にロームブロックあるいはロームの細粒を含む黄褐色土もしくは褐色土がある。これがいずれの時期にあたるかは明らかにできなかったが、U～T=3～9区にみられた黄褐色土の盛土とは異なるものである。U～T=3～9区の盛土は間に小砂利などの薄層をはさんでいるものがあり、そうしたものはこの地点の黄褐色土のなかにはみられない。U～T=3～9区の黄褐色土の盛土の東端をみつけるべく努力はしたが、ついにこれを確認することはできなかった。というのは、この盛土の上面は凹凸はあるが、21.0～21.5mあたりであり、その下面も20.5m前後である。こ

ここでは、建造物の下面が20.5mを切るものがかなりあり、構築時の掘り方はさらに深くにまで達している。従って、標高20mより下でないと、安定した面は得られず、確認することはできなかった。

本調査の際に、7ラインの北2mのWラインの西1mから東2mまでと8ライン上のWラインの西1mから3mまでを深掘りしているが、8ライン上では、はっきりとしたものはなく、7ラインの北2mのところでは、小砂利まじりのローム、黄褐色土という堆積はWラインまでであるが、上から黄褐色土→小砂利→黄褐色土というU~T=3~9区にみられるような堆積は確認していない。このような状況を合わせ考えるとU~T=3~9区にみられた盛土はVラインとWラインの間のどこかでなくなっていたと考えるのが妥当であろう。そうすると幅は10~15mぐらいであったとすることができよう。

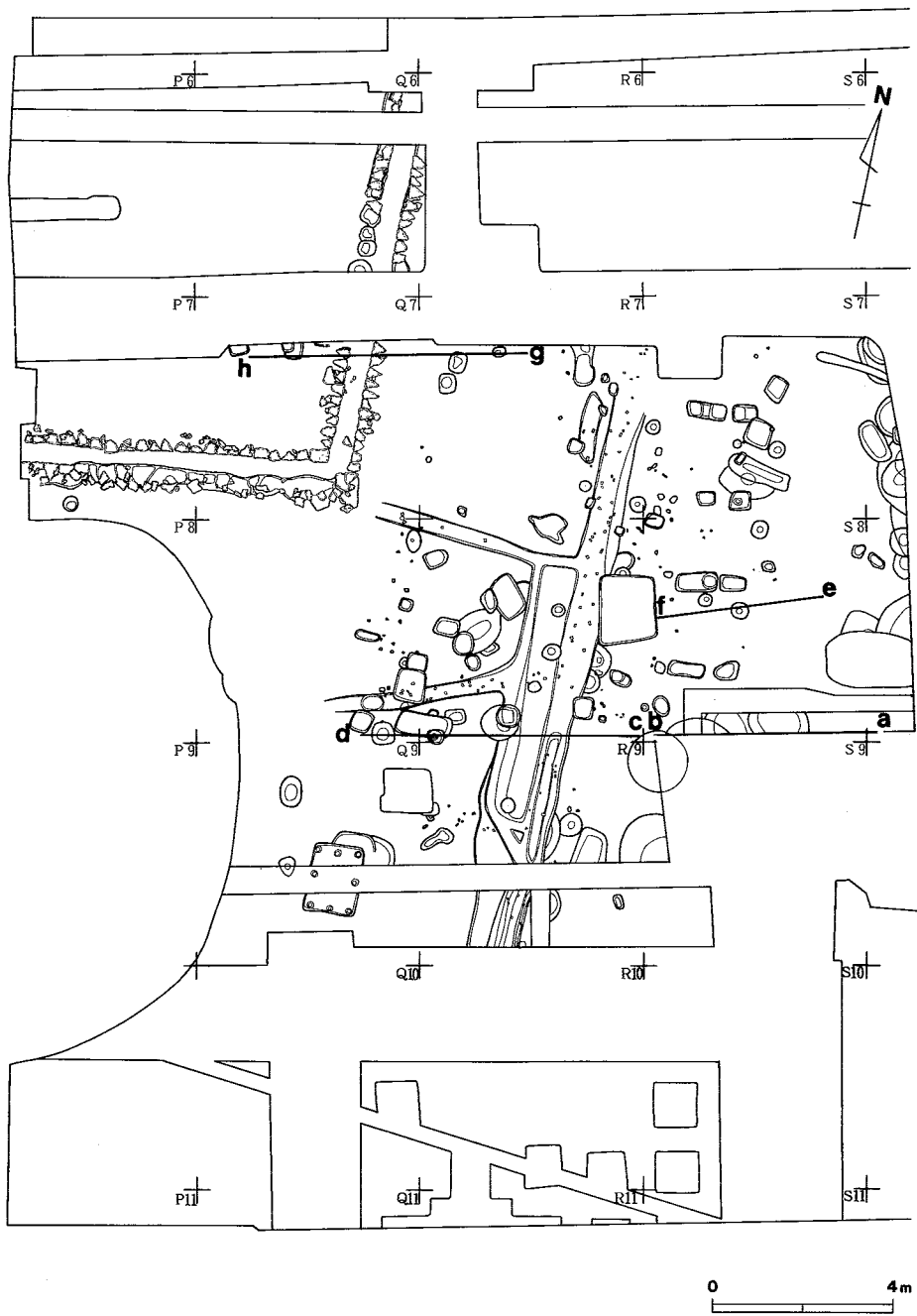
ロームブロックあるいはロームの細粒を含む黄褐色土もしくは褐色土の下は自然堆積となるところが多い。黒色土のある部分が多いが、これが削られてないところもある。これは東よりでは厚く、調査区東端では、1.5mを越える厚さがある。この下は漸移層、ソフトロームと続く。より西に比べると比較的単純である。

この地点には、屋敷と「育徳園」(三四郎池)を結ぶ道、井戸、土坑がある。道は一番完全に追跡できたY7-101号遺構のほか、少なくとも3本のより古い道(X8-101・V8-101・V8-2号遺構)がある。計4本の道があったことは確実である。井戸は1本、土坑は9ある(第314図)。これらのうち、井戸と土坑5は新旧道と層位的な切り合い関係にある。他の土坑4は相互に切りあう2土坑と、単純の2土坑である。より西の地点に比べると遺構数は極端に少ない。これにも述べたように近・現代の建造物による破壊が深部にまで及んでいたこともあるが、そもそも遺構のきわめて少ない地点であったことが主な理由であろう。「育徳園」の一部となっていた庭園というのが主要な性格であったのであろう。土坑のうち、W6-2、X7-1、X10-1号土坑の埋土はローム細粒を含む暗~黒褐色土であり、植木穴と称されているものである。他のものの性格は不明である。W9-1・2号ピットは瓦をかなり含んでいたが、他は遺物をほとんどもっていない。

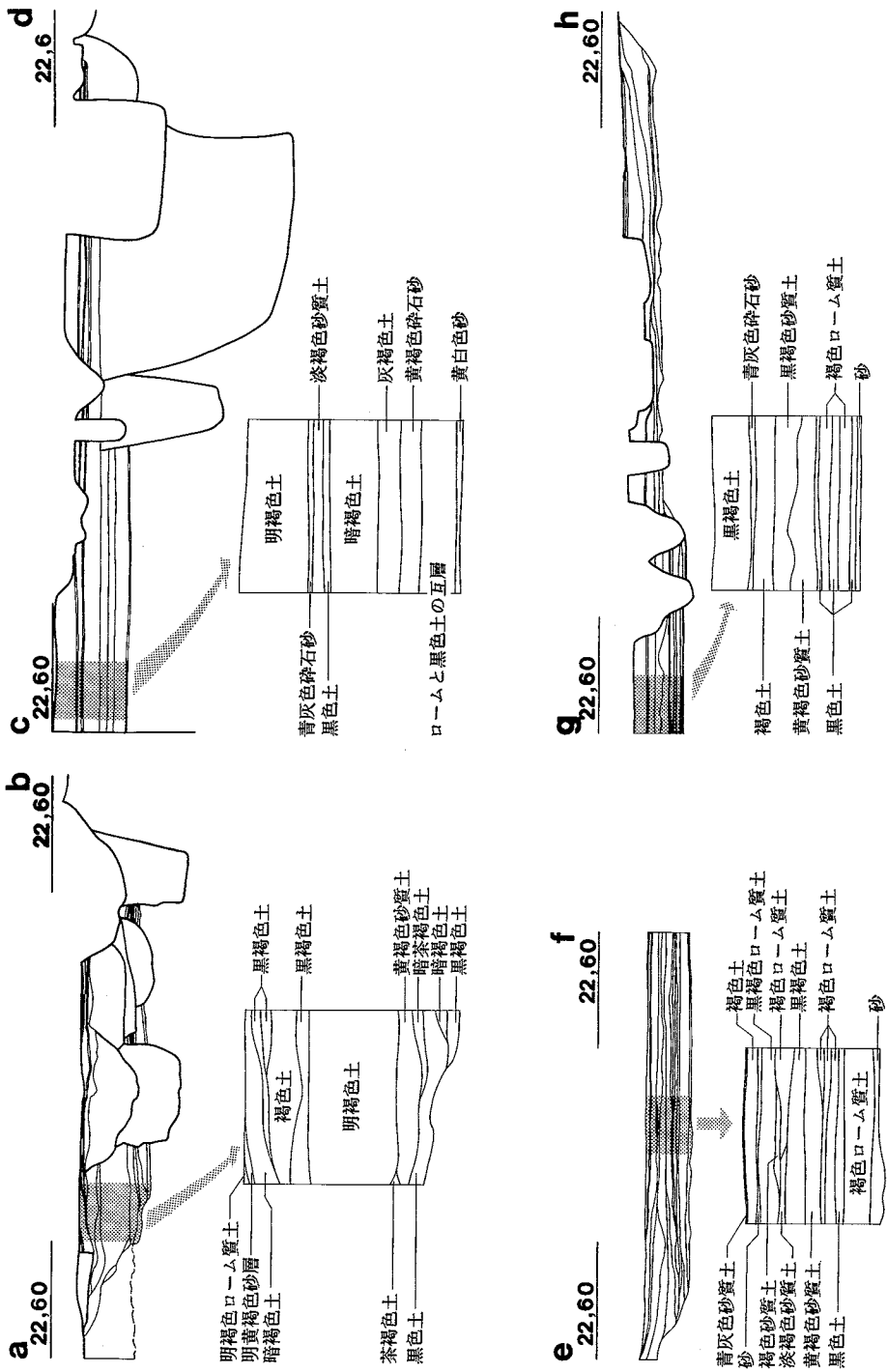
新旧関係は第316図を参照されたい。

X8-101号遺構とV8-101号遺構は道路面に差があるため、複数であろうとしたものである。あるいはより多くのものであった可能性があるが、Y7-101号遺構によって破壊されているのではっきりしない。この地点のもっとも主要な遺構はY7-101号遺構等の道である。この道は本調査の時にU=8~10区で確認されていたもので、ここでは、図書館の基礎の間で確認されていて、新旧2本の溝もしくは道があることが判っていた。この時判っていた旧道はV8-101号遺構に連なるものである。

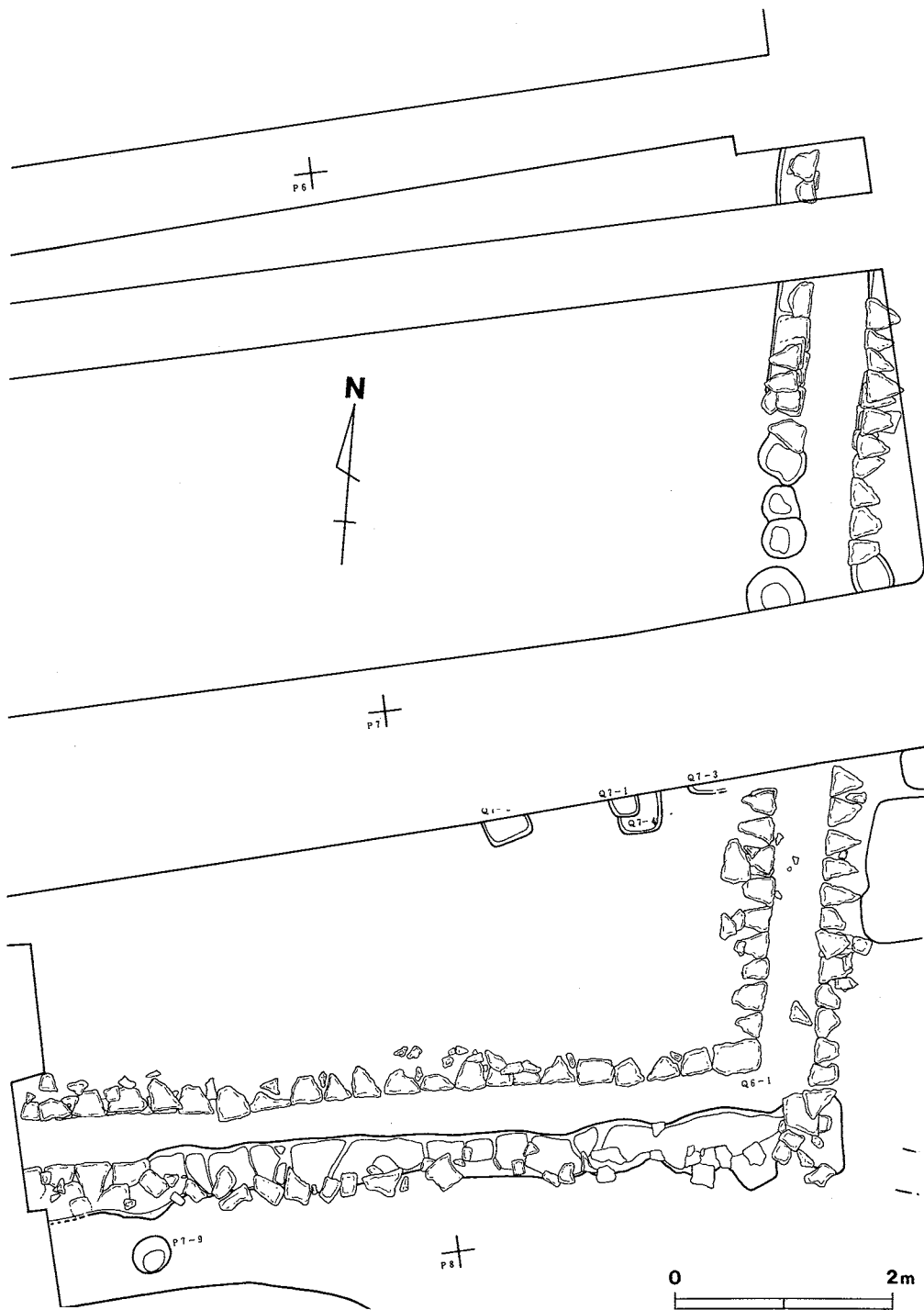
(藤本 強)



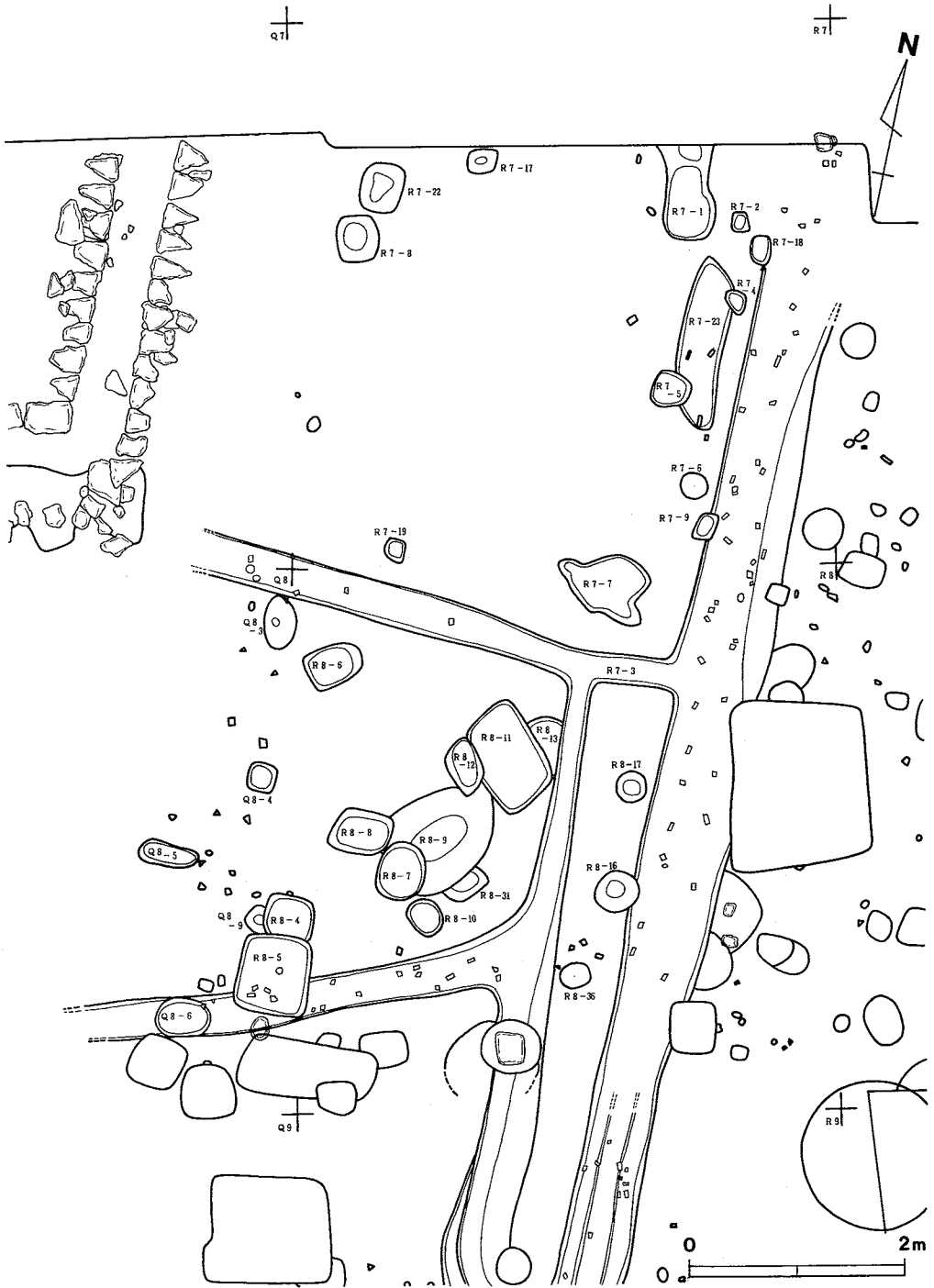
第292図 P~S = 5~10区の調査(1)



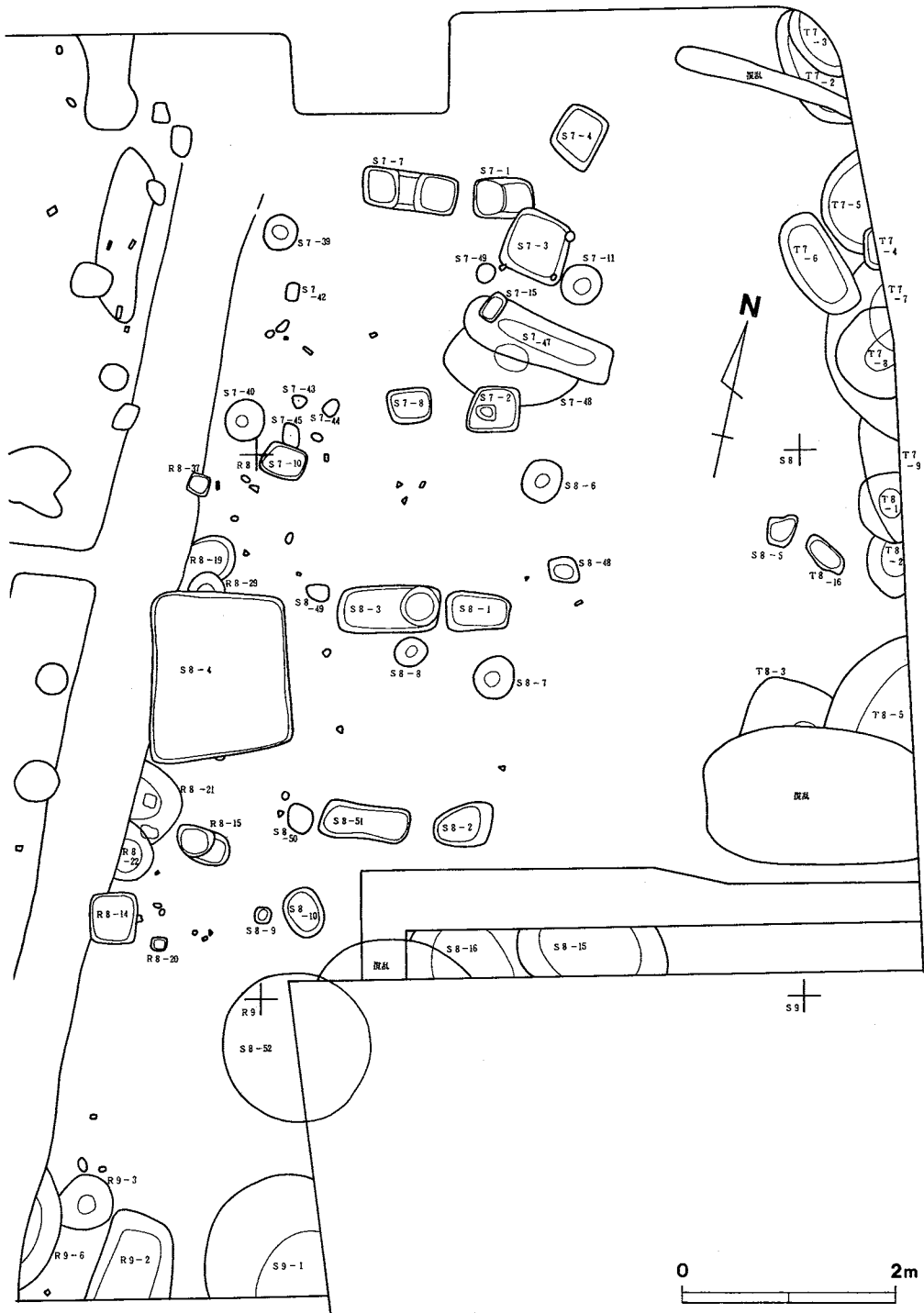
第293図 P ~ S = 5 ~ 10区の調査(2)



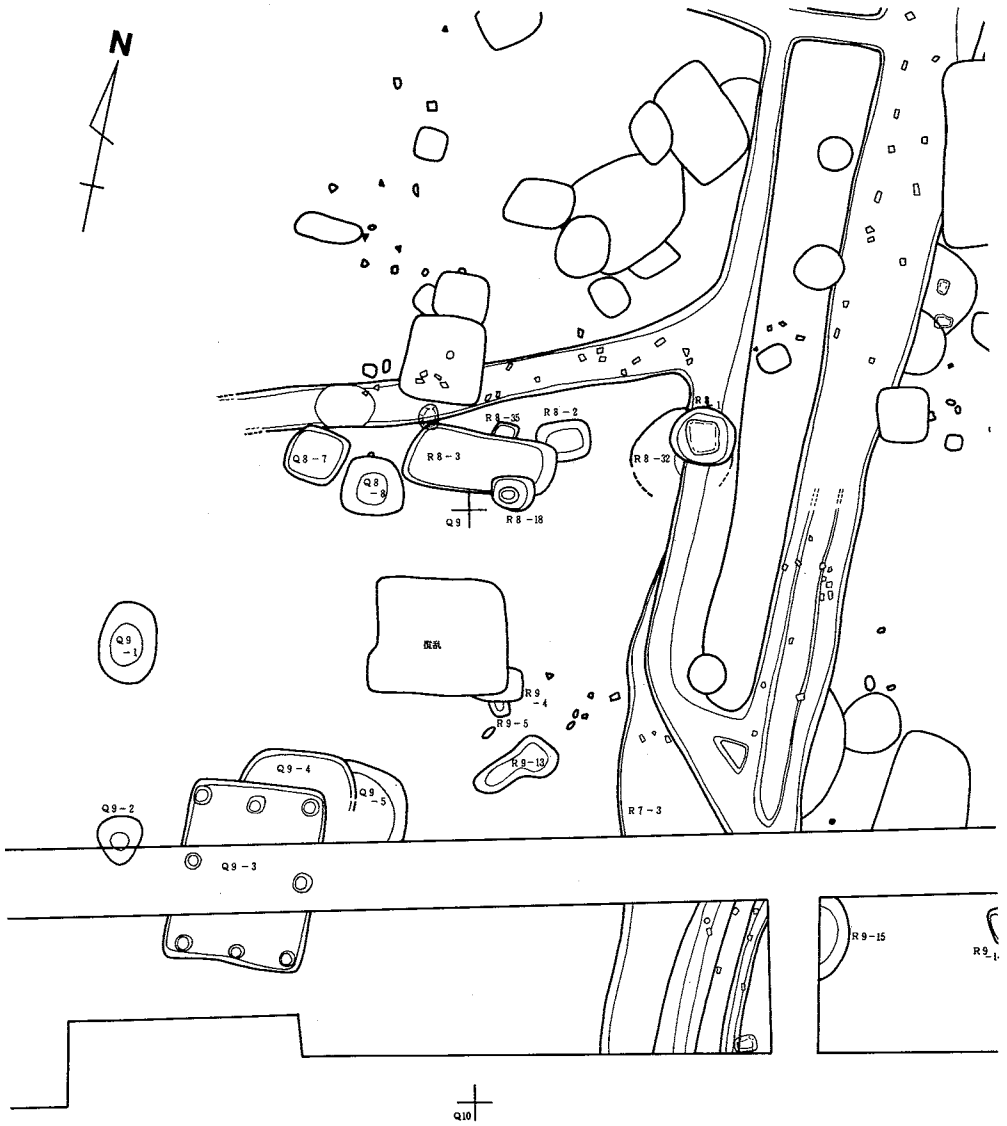
第294図 P~S=5~10区の調査(3)



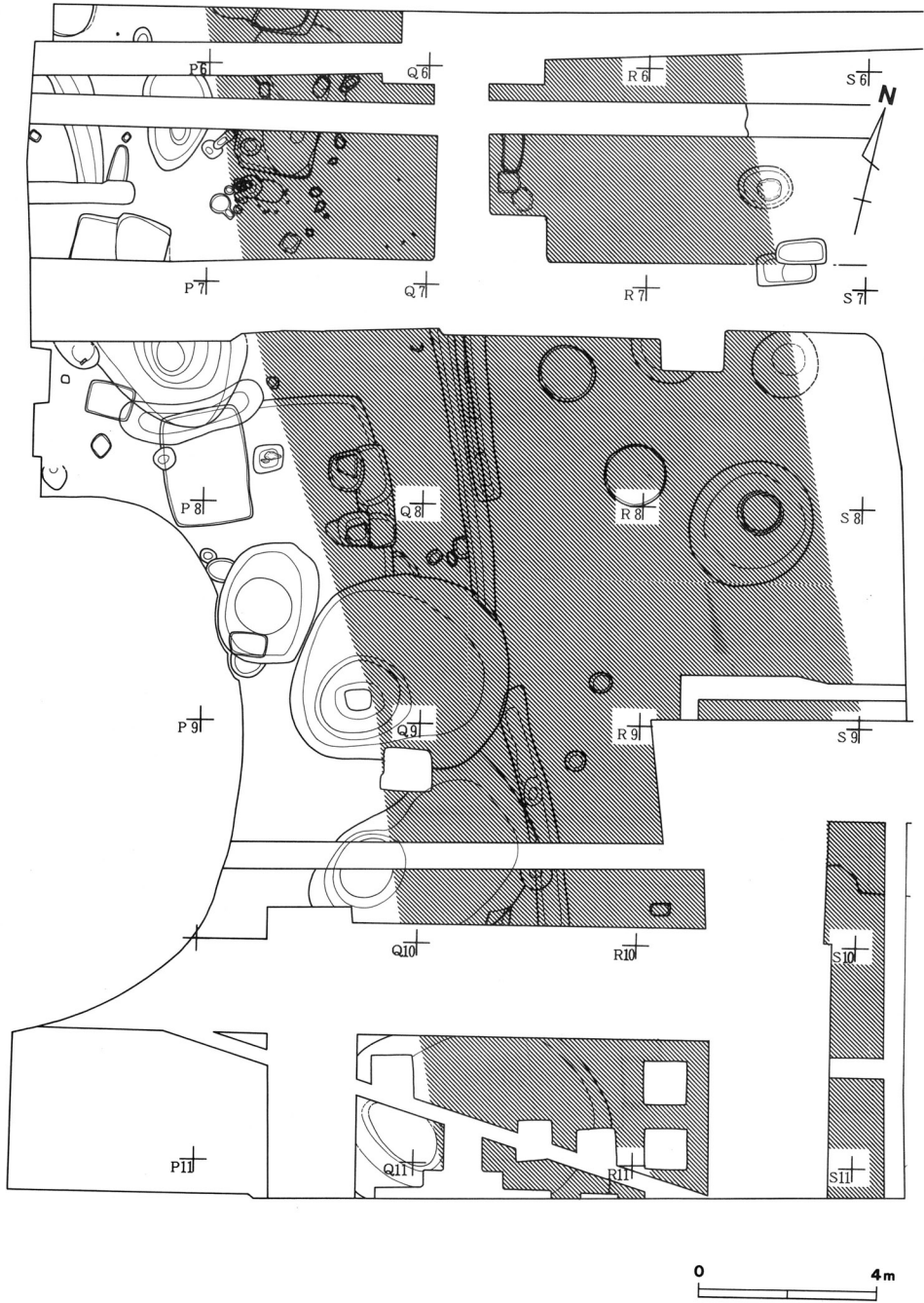
第295図 P~S = 5~10区の調査(4)



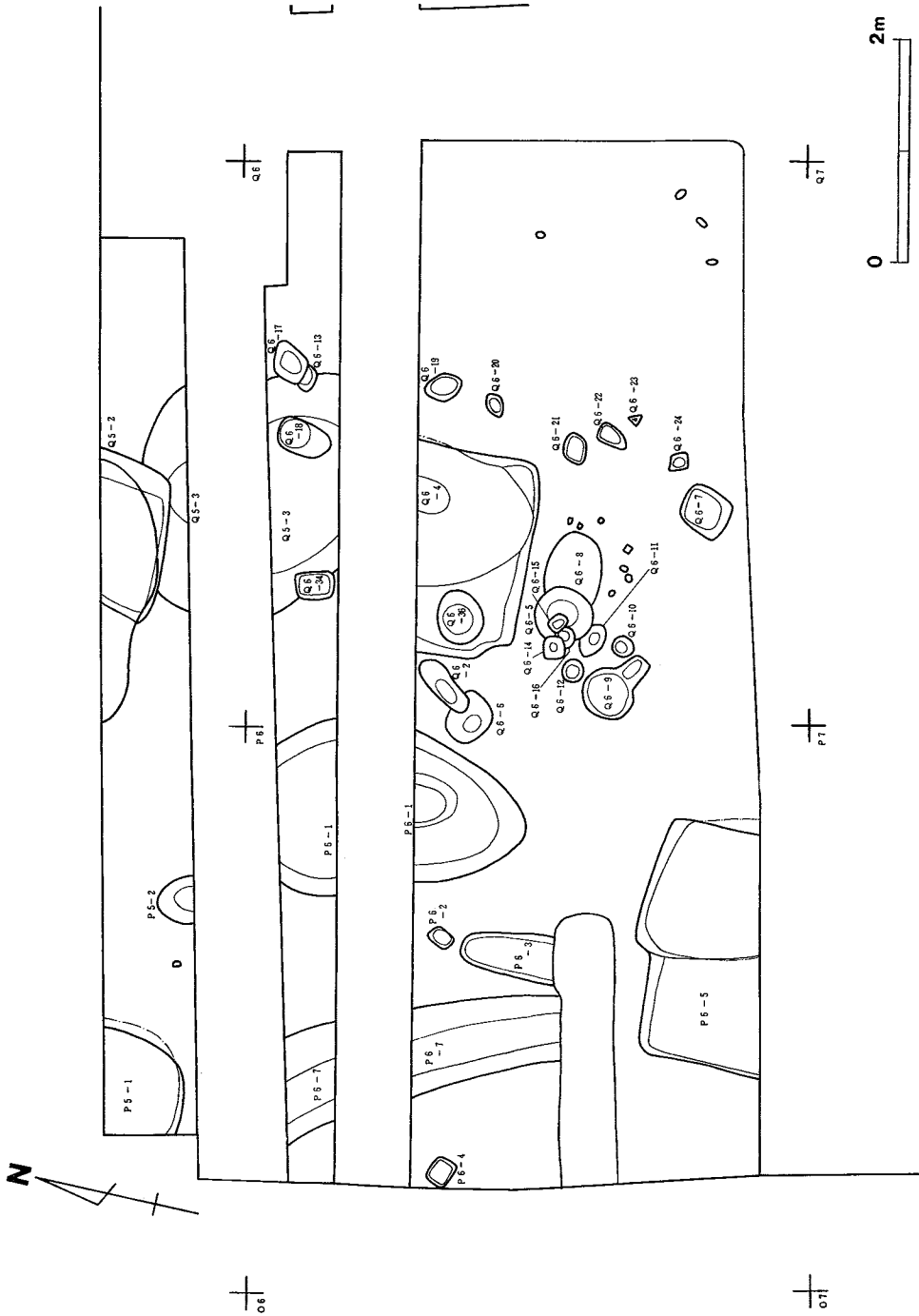
第296図 P~S = 5~10区の調査(5)



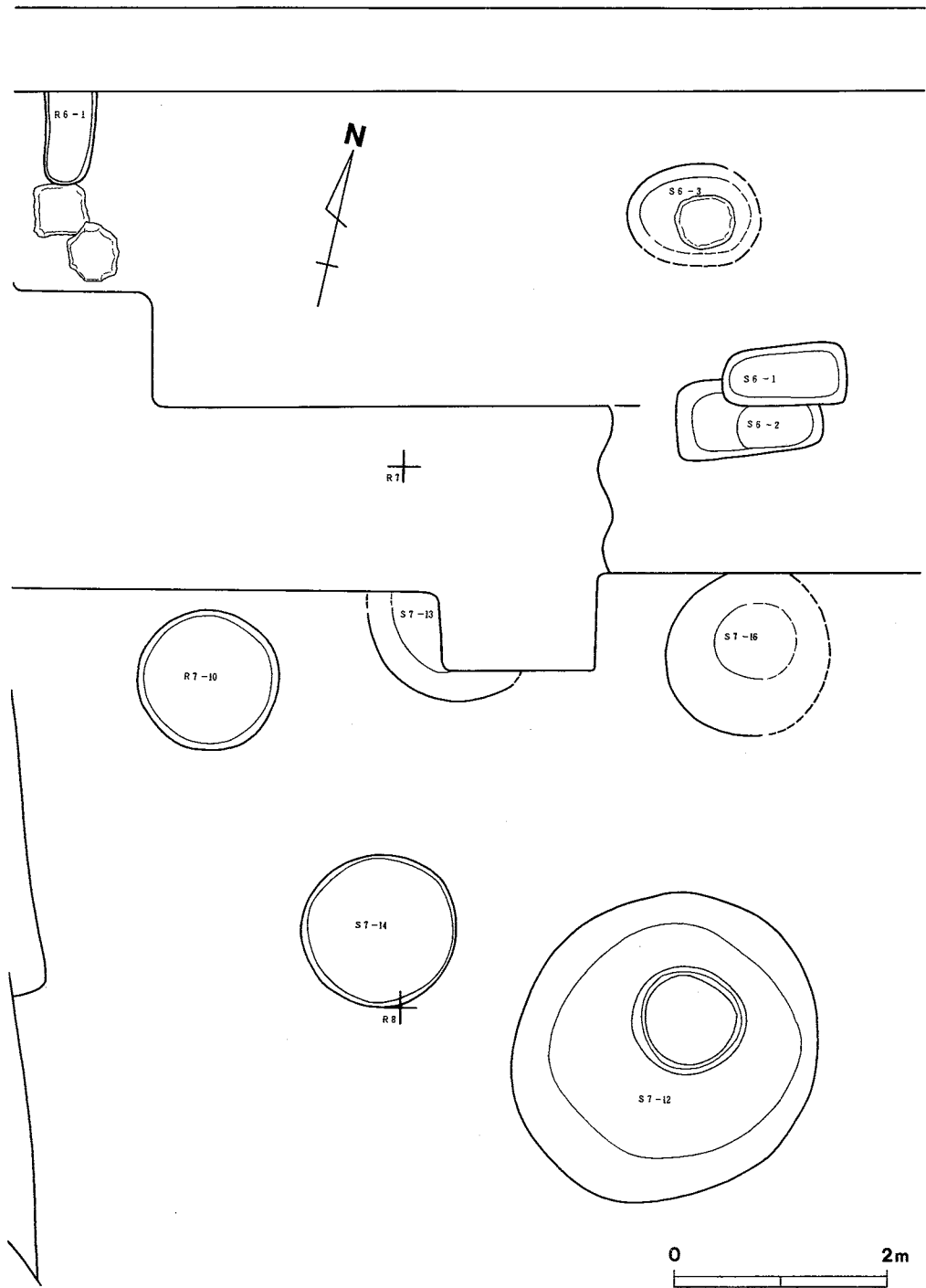
第297図 P~S=5~10区の調査(6)



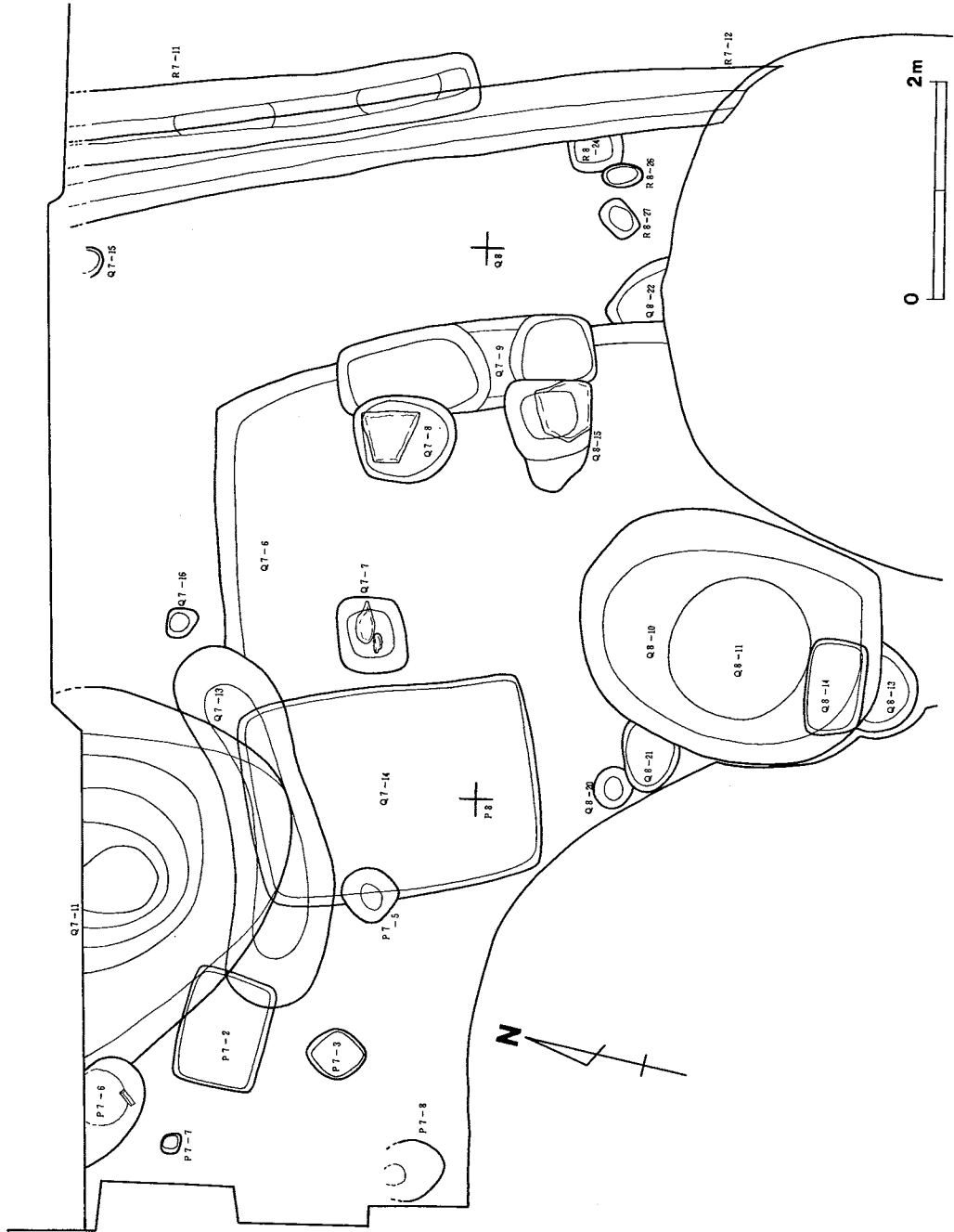
第298図 P～S = 5～10区の調査(7)



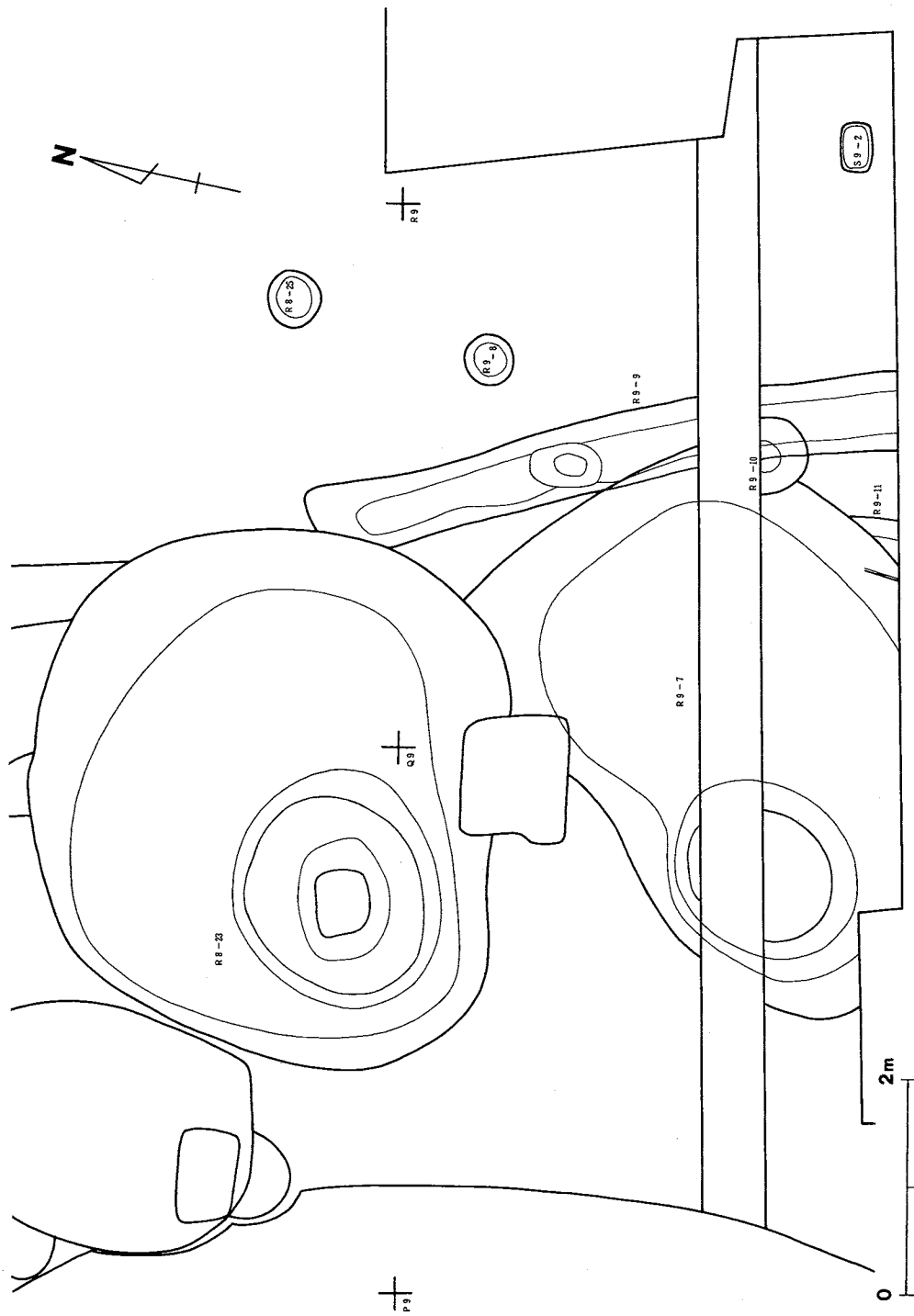
第299図 P ~ S = 5 ~ 10区の調査(8)



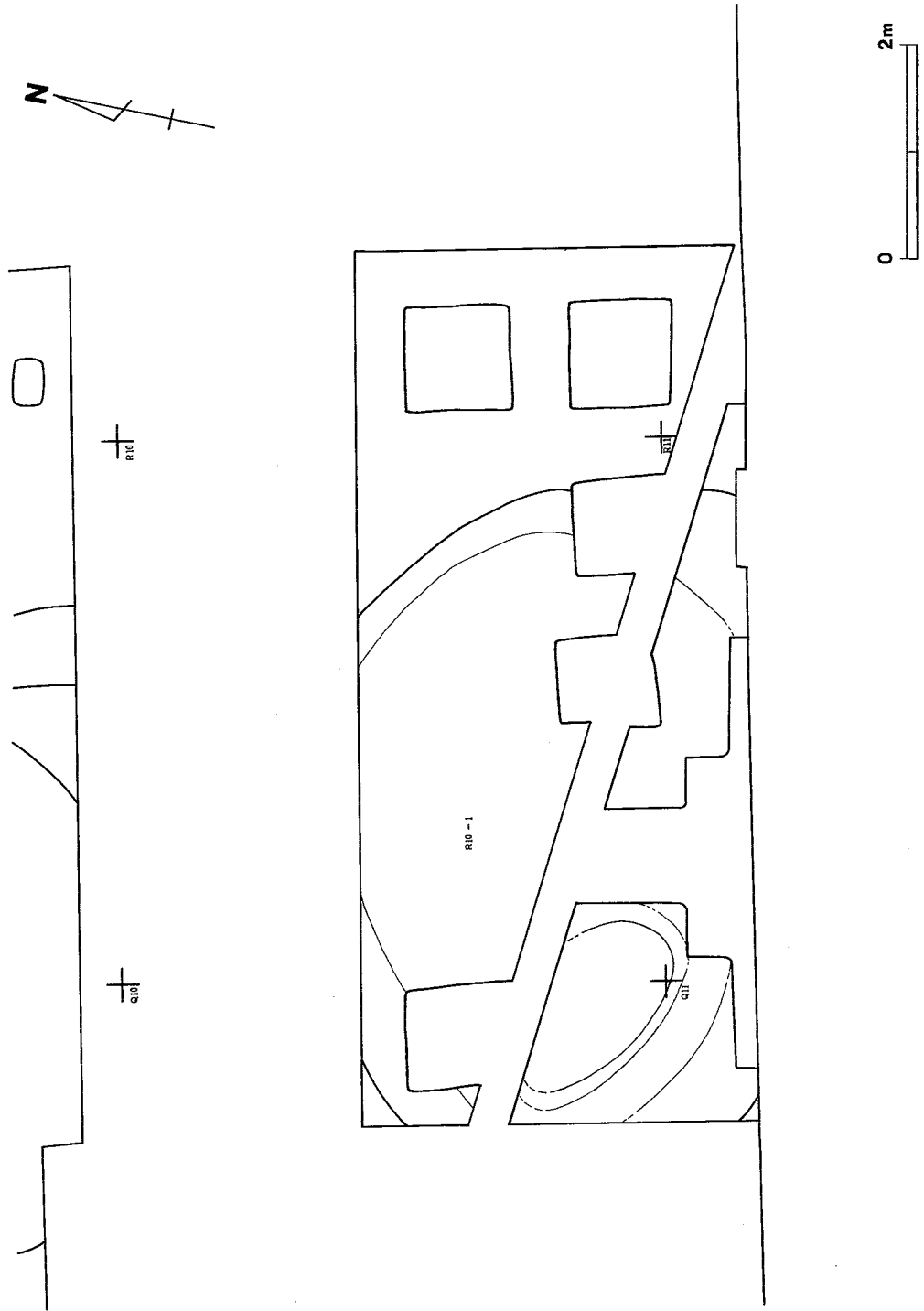
第300図 P～S = 5～10区の調査(9)



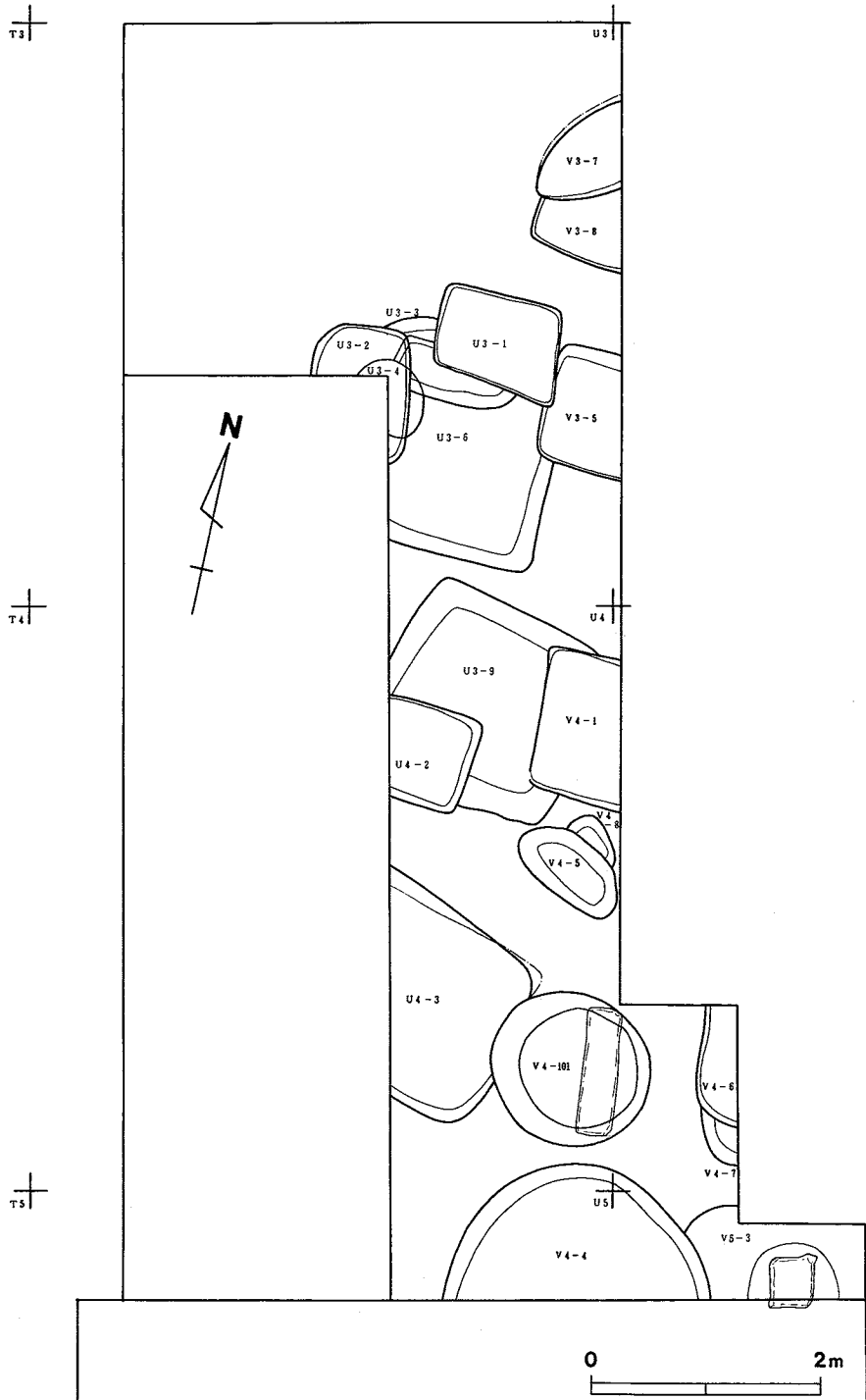
第301図 P~S = 5~10区の調査(10)



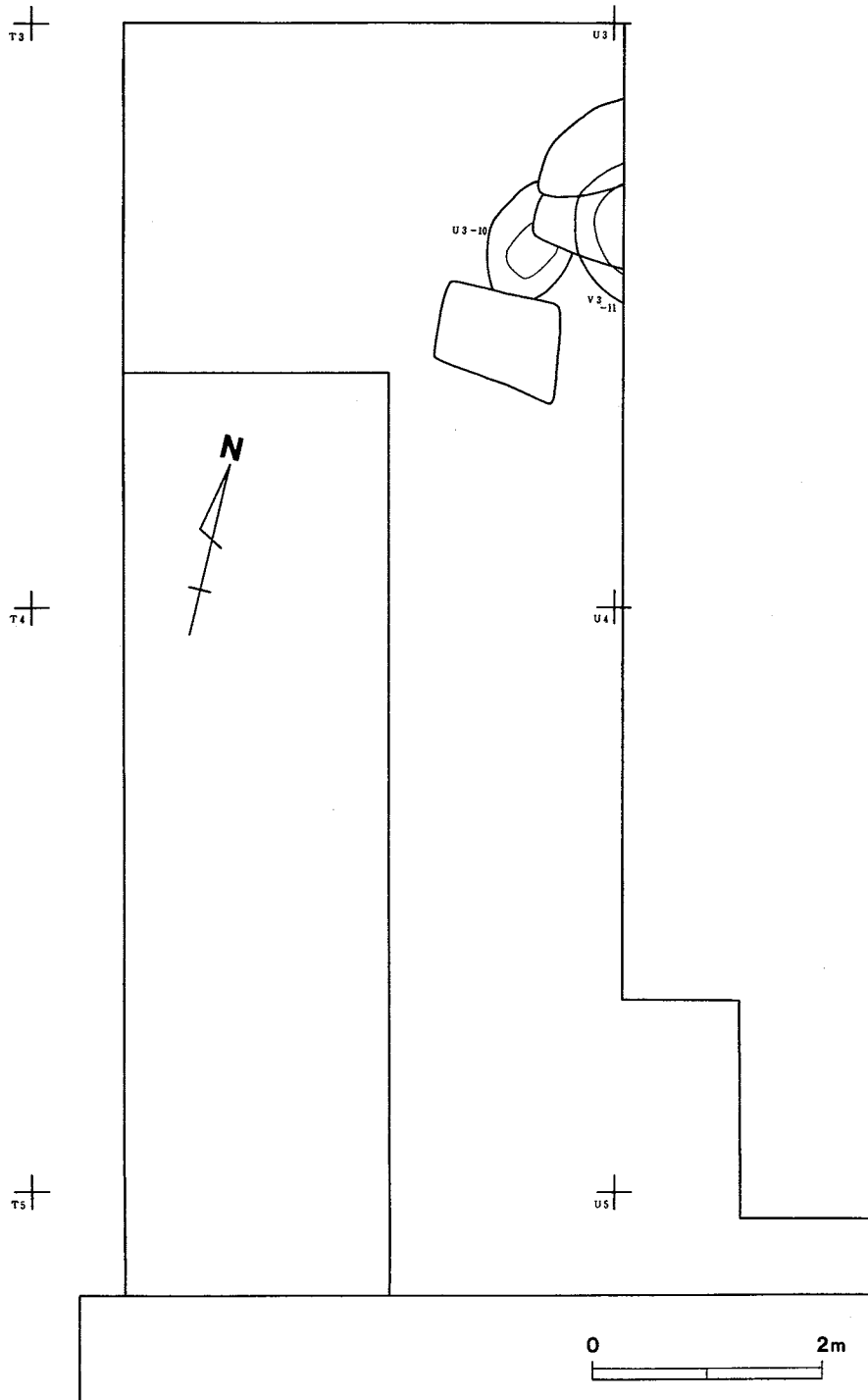
第302図 P～S = 5～10区の調査(11)



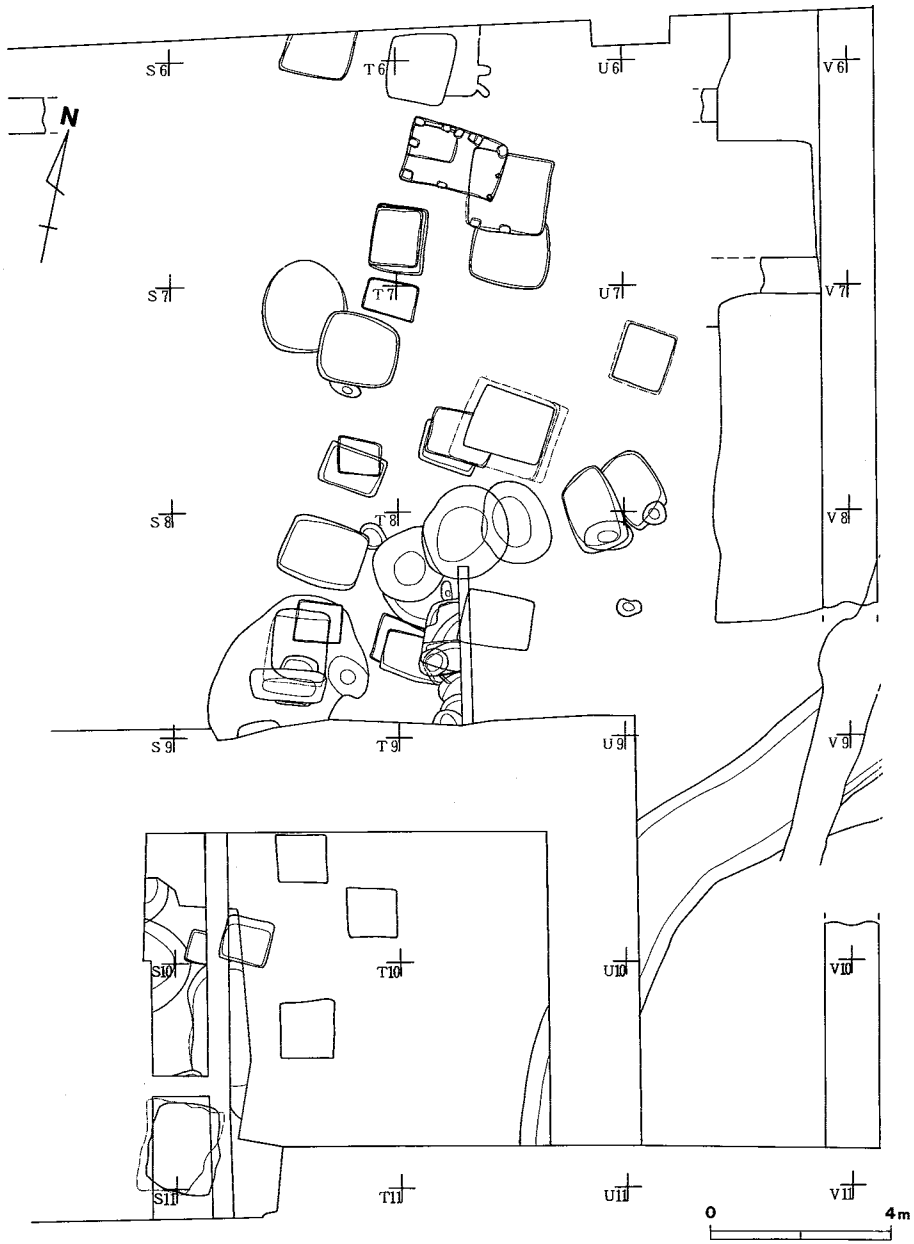
第303図 P～S = 5～10区の調査(12)



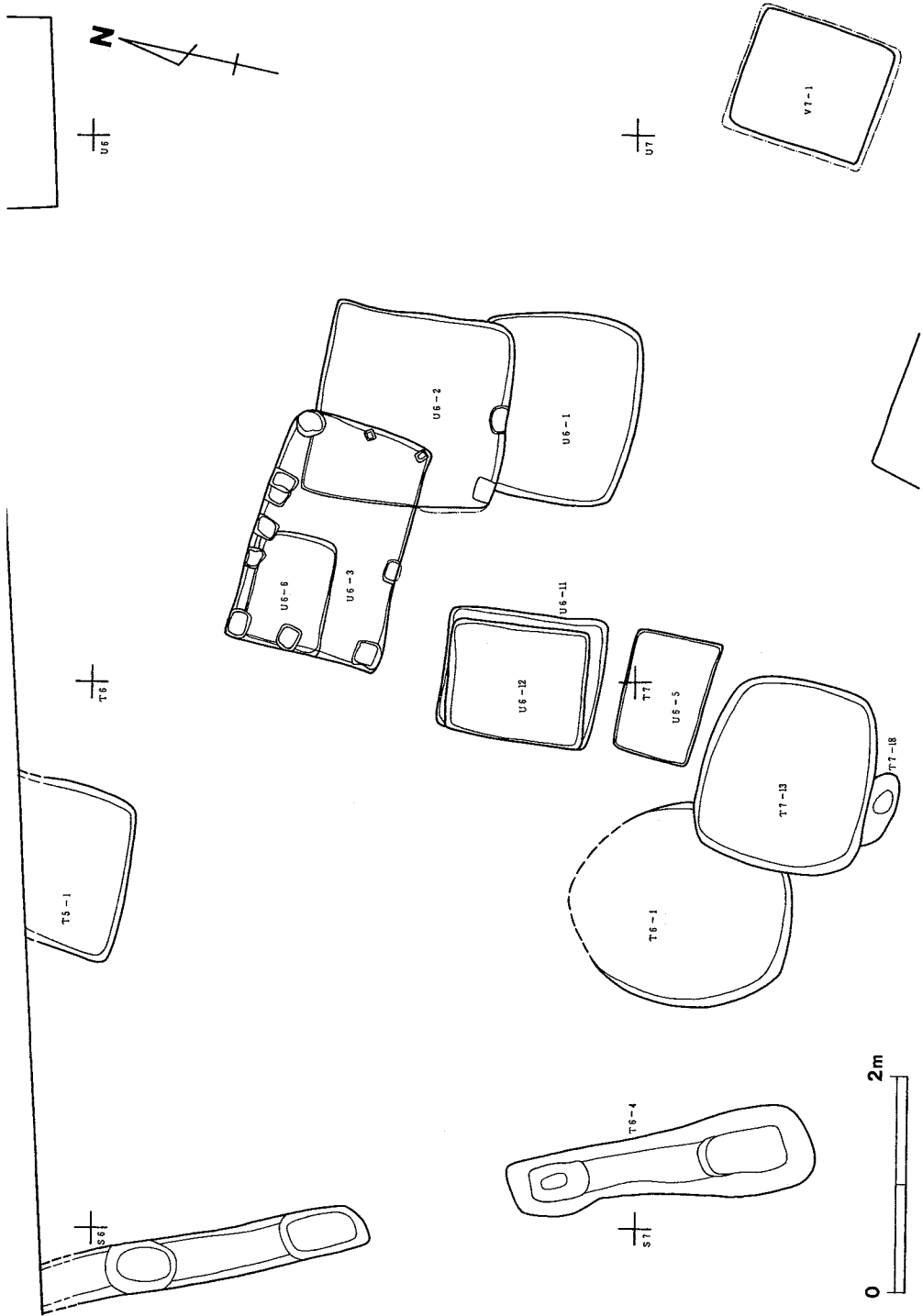
第304図 U～V=3～5区の調査(1)



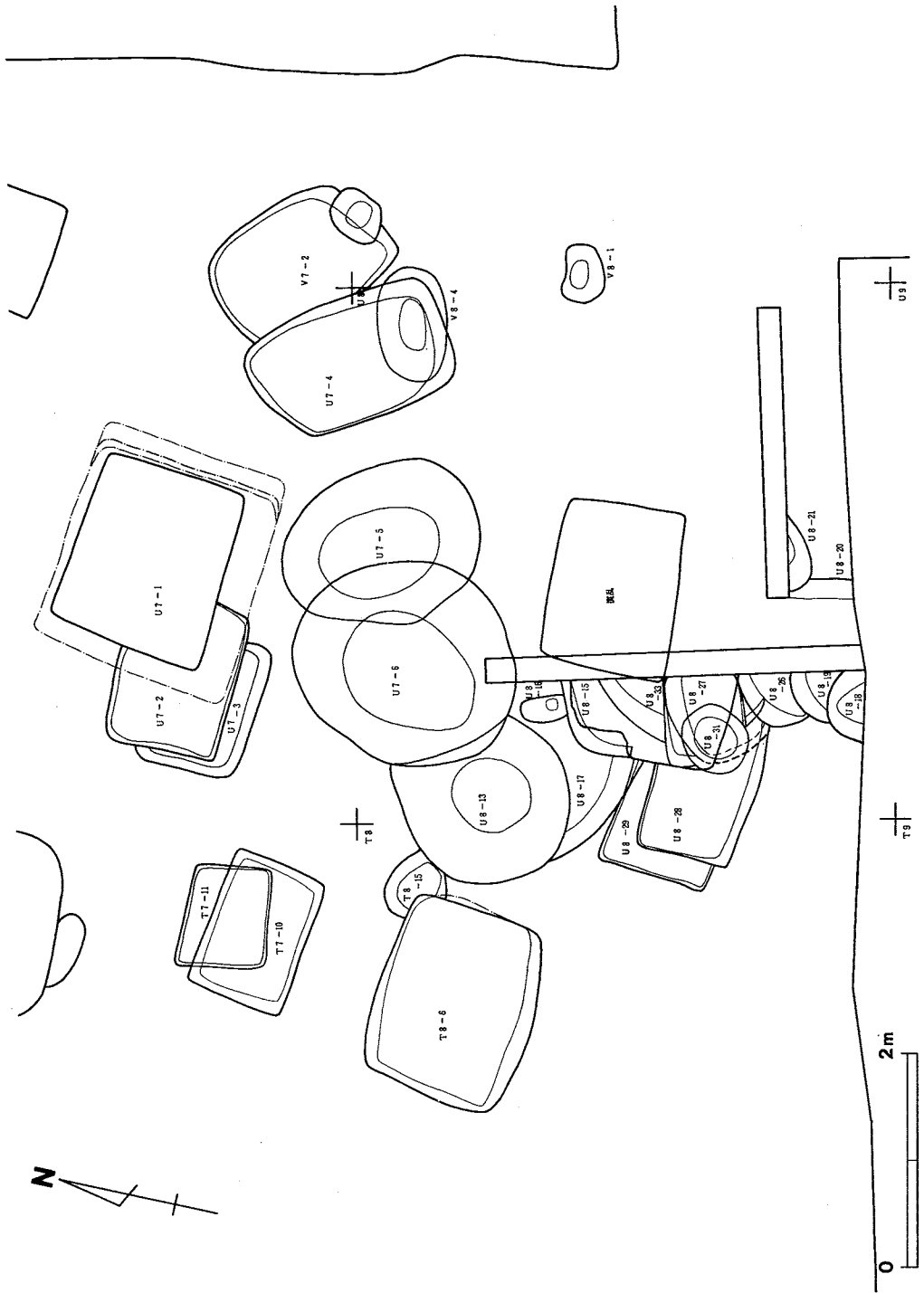
第305図 U～V = 3～5 区の調査(2)



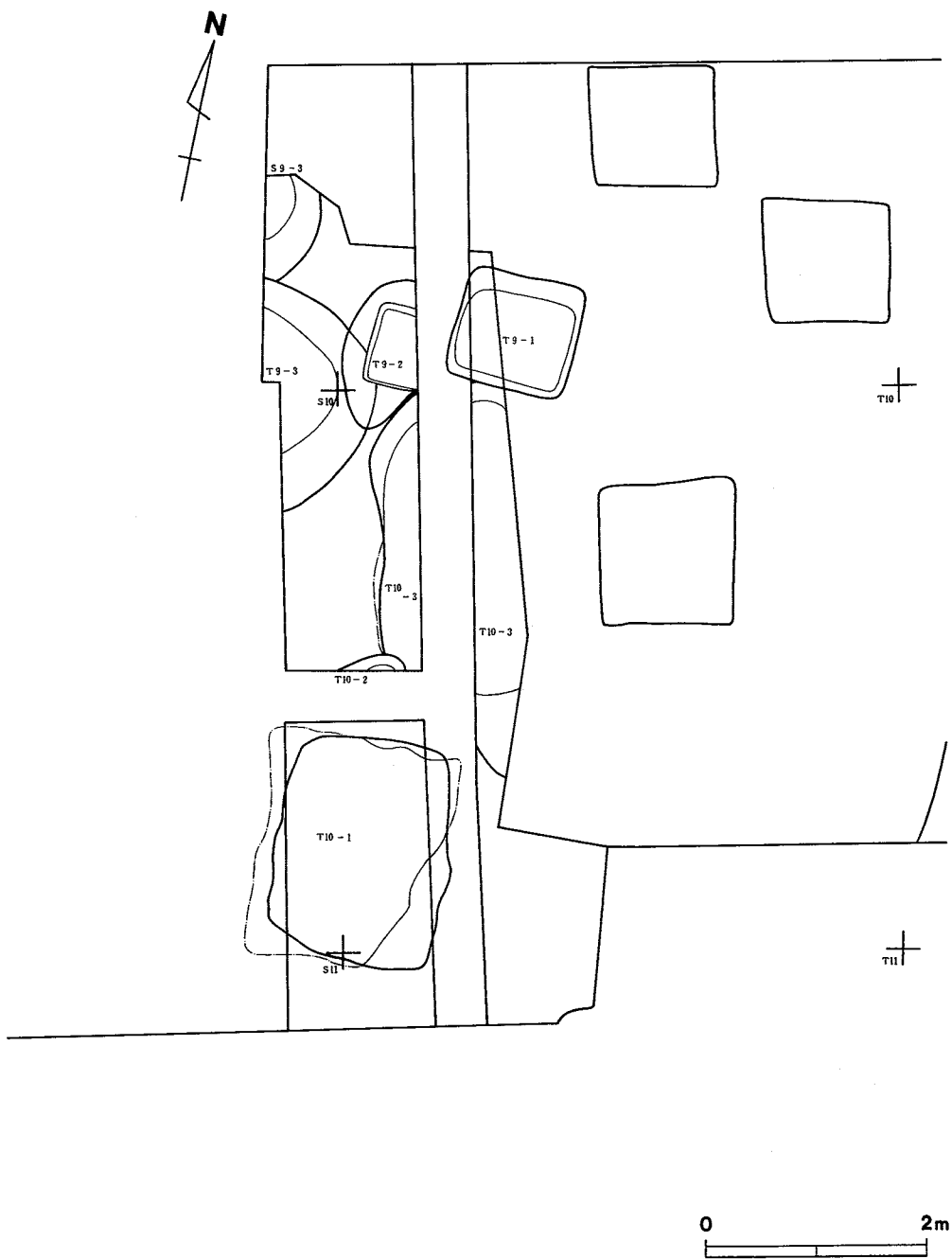
第306図 T~V = 5~10区の調査(1)



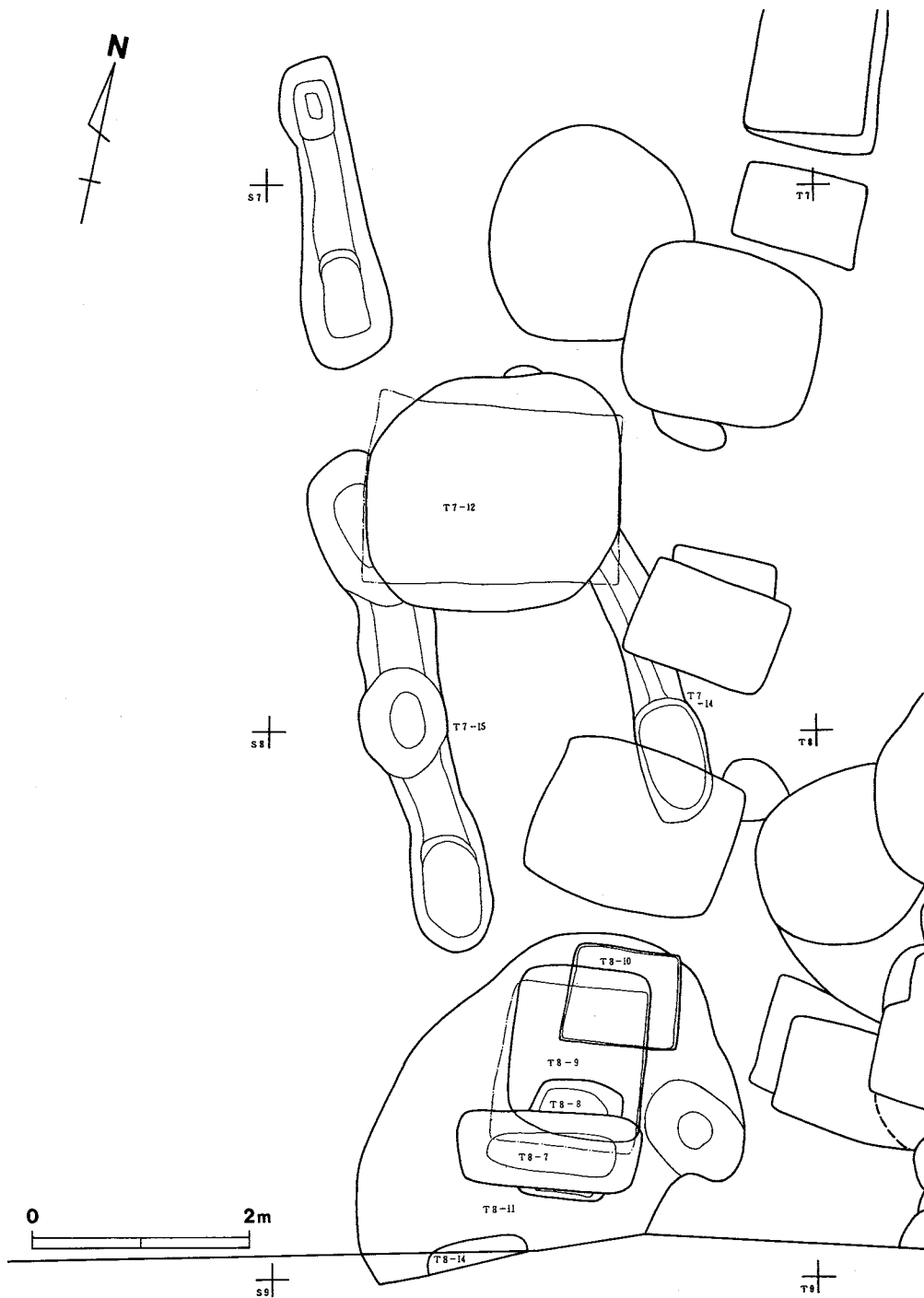
第307図 T~V = 5~10区の調査(2)



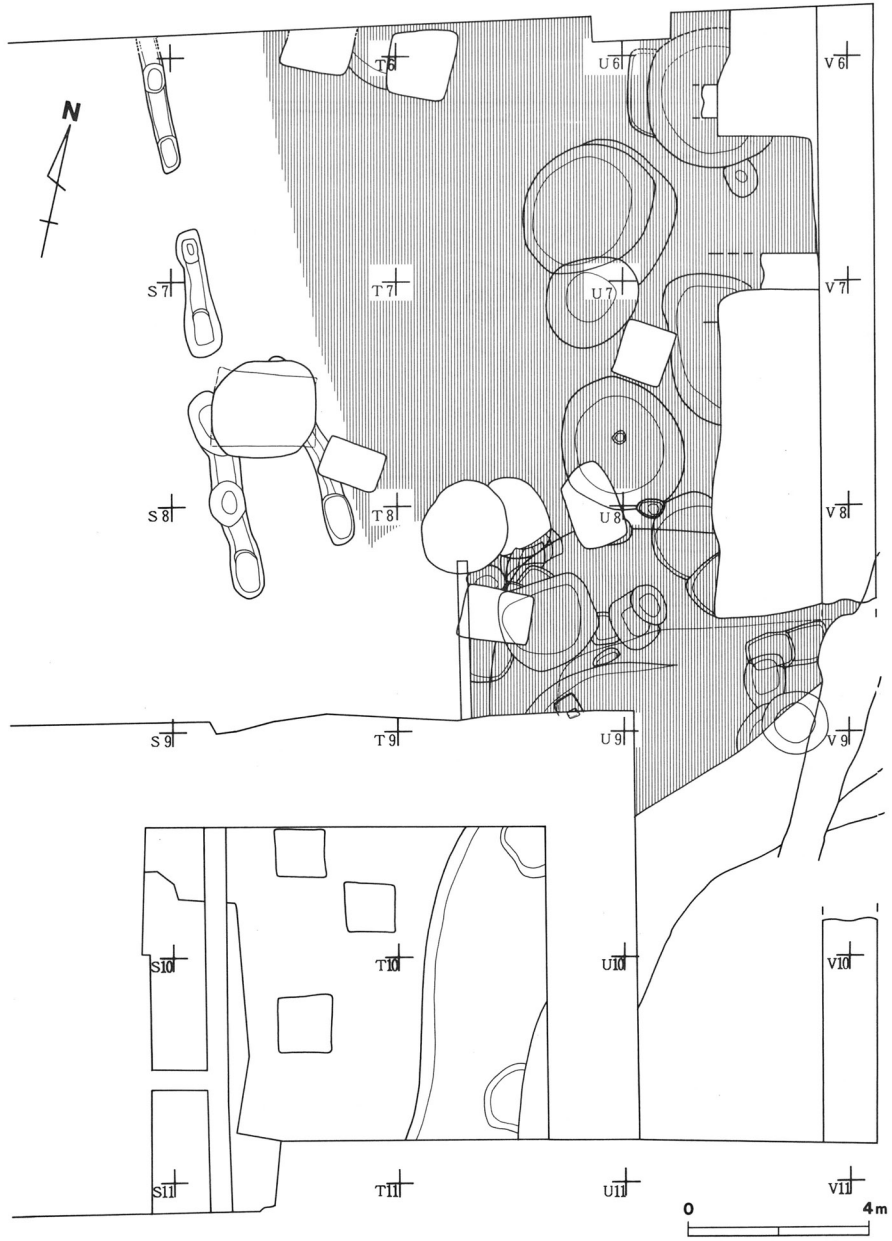
第308図 T~V = 5 ~10区の調査(3)



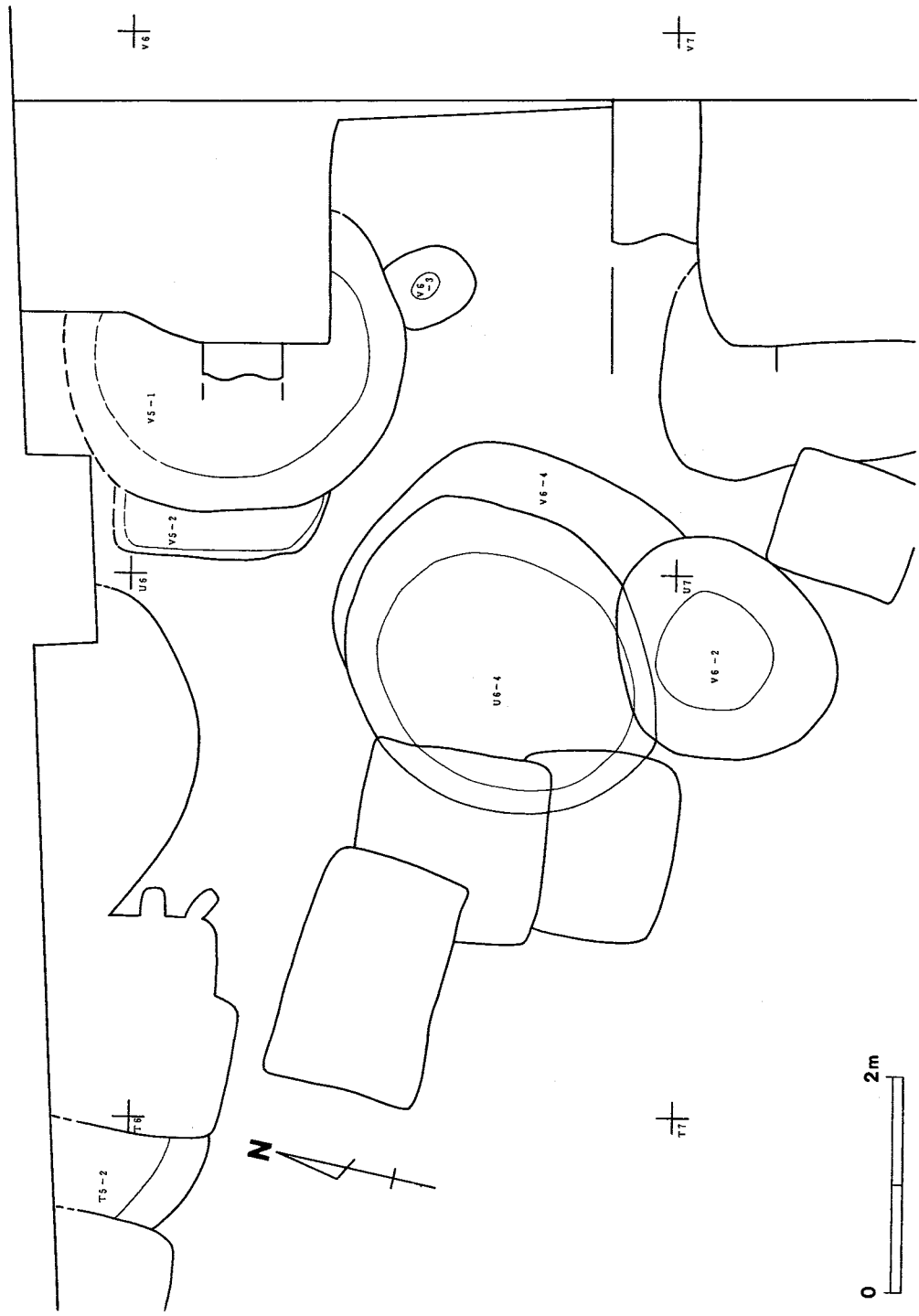
第309図 T~V = 5~10区の調査(4)



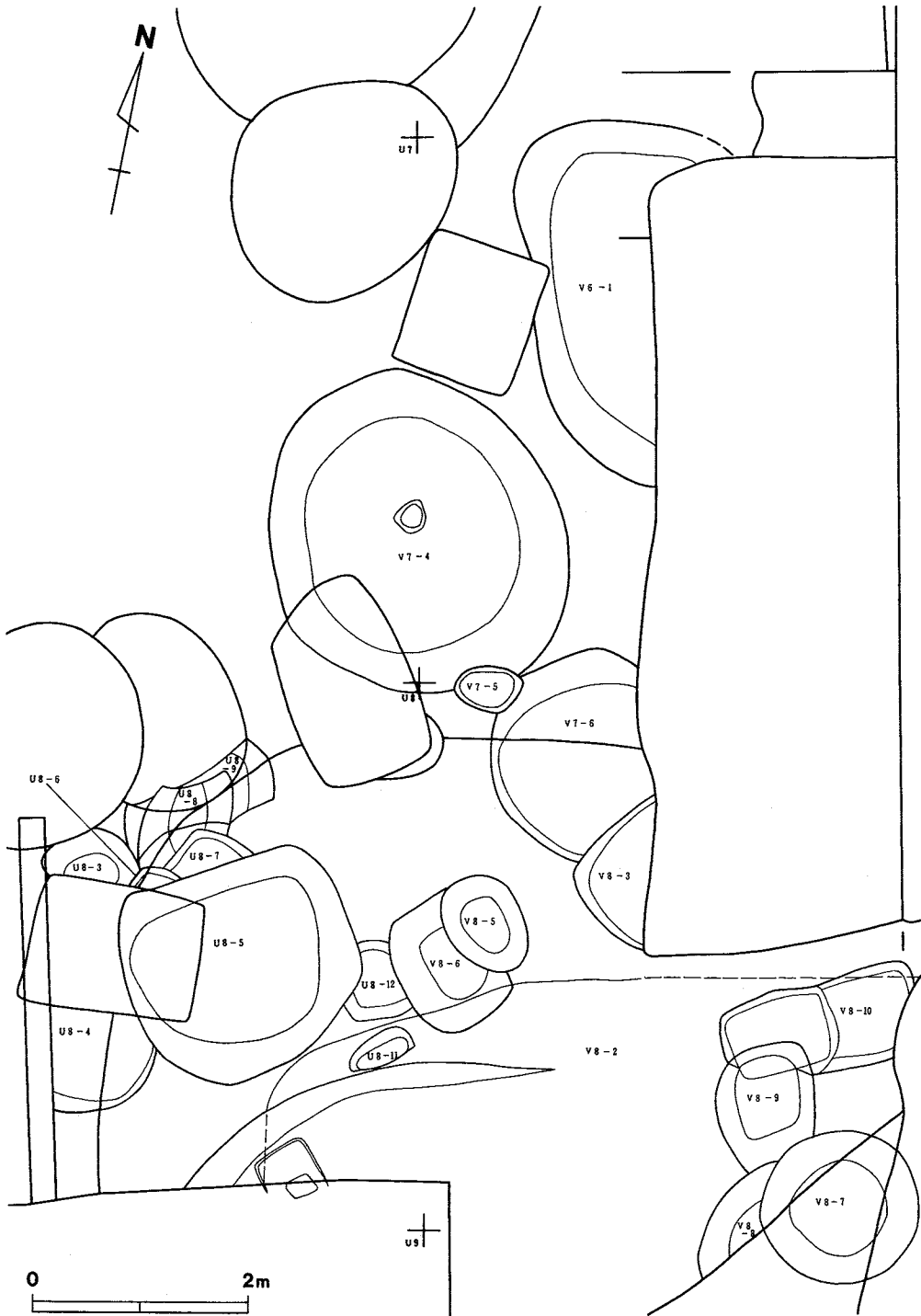
第310図 T~V=5~10区の調査(5)



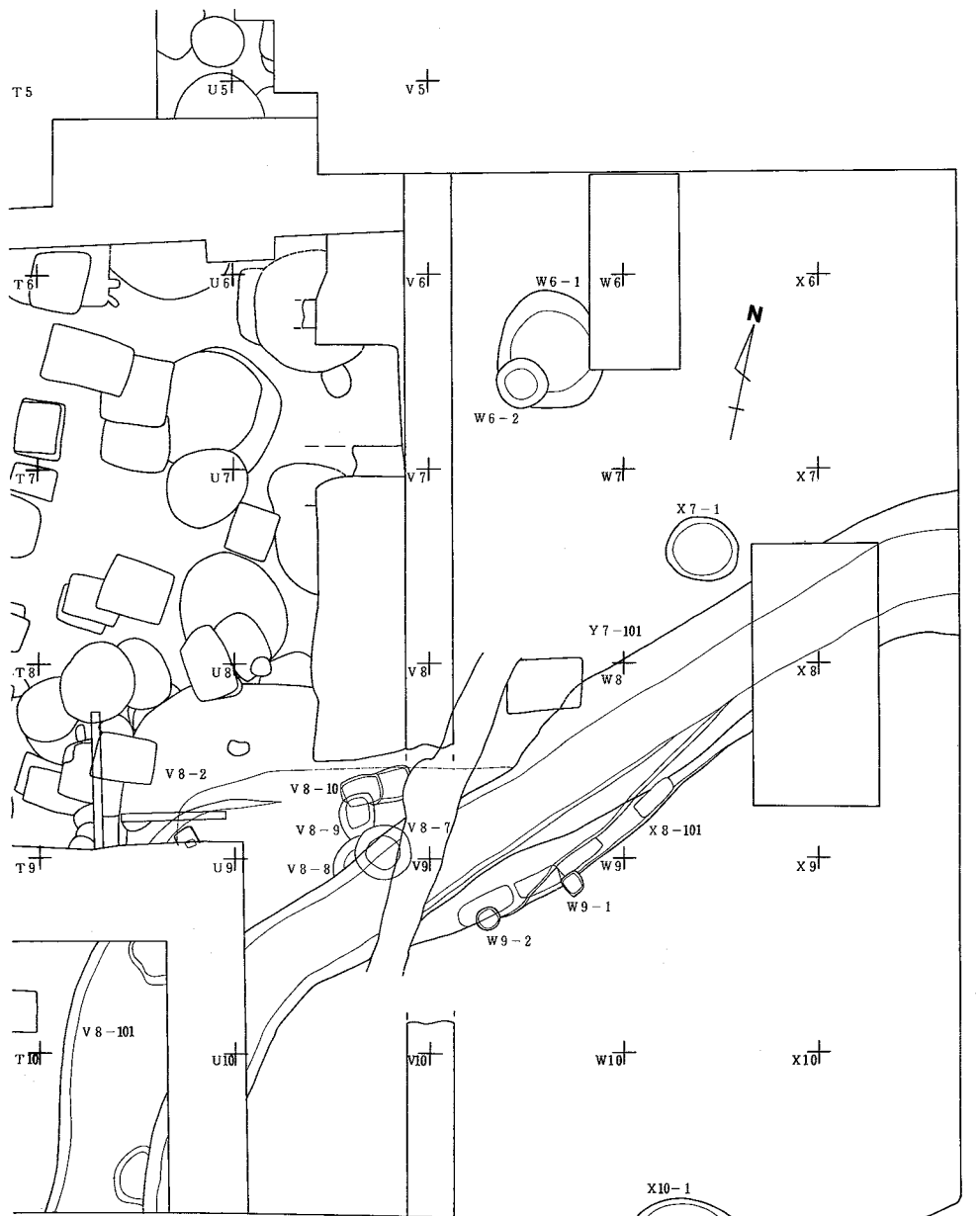
第311図 T~V = 5~10区の調査(6)



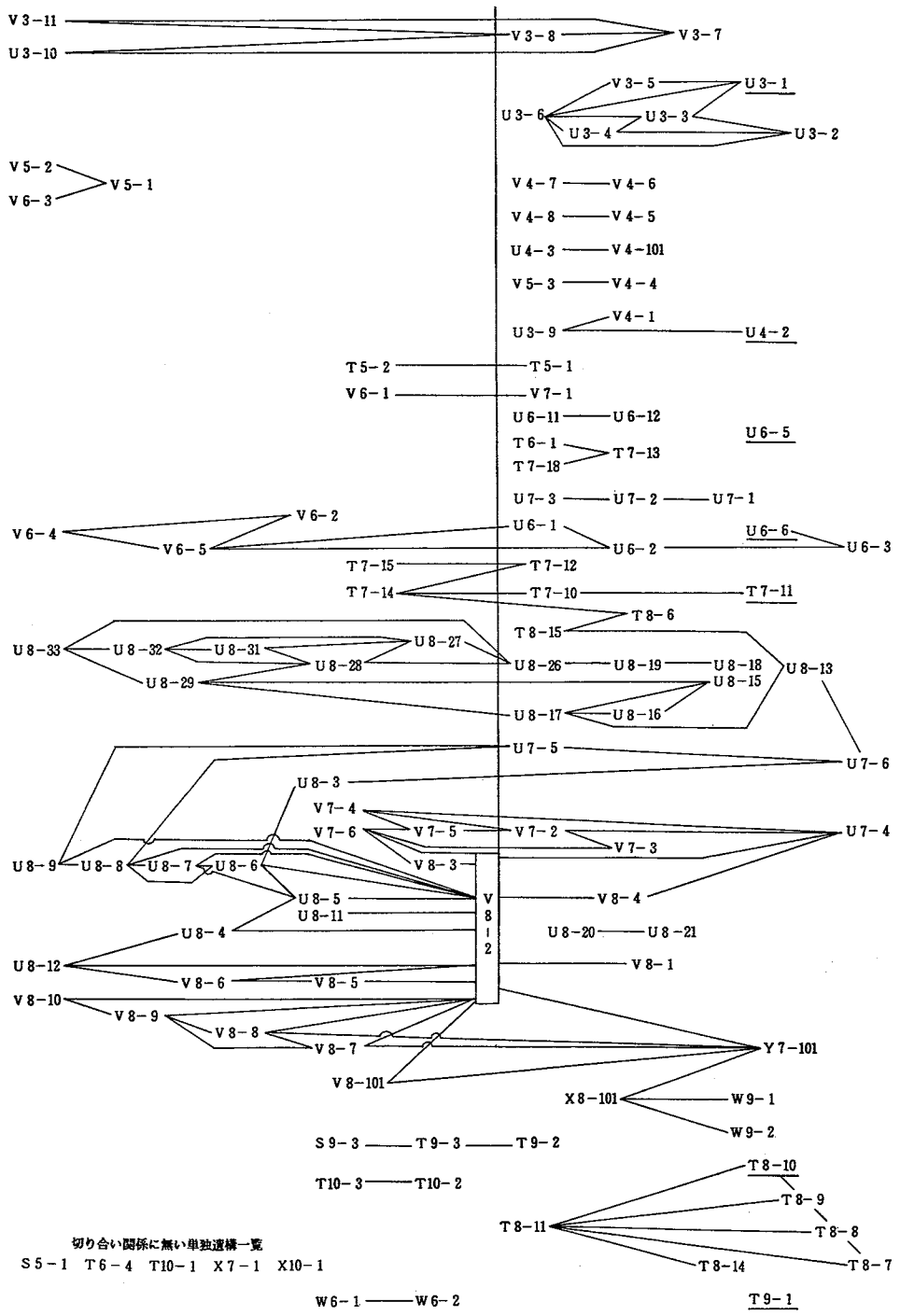
第312図 T~V=5~10区の調査(7)



第313図 T~V = 5 ~10区の調査(8)



第314図 V~Y=5~10区の調査



第316図 切り合い関係図(6)

第二節 遺構各説

(1) P～S=5～10区の遺構

P 7-9号ピット (第317図)

P 7グリッドの南端中央に位置する。

近代の攪乱土層を除去した面、すなわち褐色ローム質土の上面まで削平したところで確認された遺構である。

平面形は径33cmほどの不整形円形を呈し、確認面からの深さは40cmほどである。坑底はほぼ平坦で、坑の南側に片寄っている。埋土は若干の小礫を含む黒褐色土である。遺物は検出されなかった。

遺構の性格は明らかではないが、杭穴かとも思われる。

(中村 慎一)

Q 7-1号ピット (第317図)

平面形は、方形を呈すると思われる。北壁は攪乱を受け残存していない。規模は東西25cm、確認面からの深さ55cmを測る。覆土は3層に分層されるが、何れも暗褐色を呈している。柱痕はみられない。

(成瀬 晃司)

Q 7-2号, 3号ピット (第317図)

Q 7-2号ピットは方形を呈するピットで、その規模は一辺43cm、確認面からの深さ33cmを測る。北側約1/2は攪乱を受け残存していない。覆土は黒褐色土を主体とし、3層に分層される。柱痕はみられない。

Q 7-3号ピットは、遺存状態が極めて悪く、平面形、規模共に不明である。確認面からの深さは27cmを測る。覆土は、ローム粒を多量に含有する褐色土の単一層である。柱痕はみられない。

(成瀬 晃司)

Q 7-4号ピット (第317図)

方形を呈するピットである。Q 7-1号ピットに切られている。その規模は一辺40cmを測り、確認面からの深さは6cmと浅い。覆土はローム粒を含有する暗褐色土の単一層である。

(成瀬 晃司)

Q 6-1号組石遺構 (第318図：図版4)

調査区の北西端O 7区、P 6区、P 7区、Q 6区の江戸第一面に位置する組石の溝状遺構である。平面形は、調査区西端より東へ直線的に延び(西側部分)、Q 8やや西より直角に北に折れて法文2号館の方へと続く(北側部分)「く」の字状を呈している。西方は、法学部調査区には同様の組石遺構が確認されていないことより、途中でいずれかに方向を変えるものと思われる。遺構の遺存状態は良好でなく、西側部分では、その南側の積み石が抜き取られ、わずかに後込めと思われる石が確認されたにすぎず、また、二段以上積み石が遺存していたのは西側部分の西端及び

北側部分の一部のみである。

規模は、東西740cm、南北950cmで、溝幅は40cm、掘り方をも含めると150cmを計測する。石は、他の一般的な組石遺構同様に掘方をあげ、その両側に長方形を向かい合わせるように切石を配し、後や隙間に固定の為の小切石で埋めるという工法である。覆土は、溝の中のほとんどが粘土質の炭化物を多く含む灰褐色を呈し、掘方は、黄褐色土、黒褐色土で固定している。

遺物は、溝中の西側部分の灰褐色土層中からの検出が比較的多いが全体的に散っている。

(堀内 秀樹)

R 7-3号溝 (第319図)

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。本遺構との切り合い関係を有する遺構は多い。まず本遺構を切っているものとしてはQ 8-6号ピット、Q 8-7号ピット、R 7-9号ピット、R 7-18号ピット、R 8-1号ピット、R 8-5号土坑、R 8-14号ピット、R 8-16号ピット、R 8-32号土坑、R 8-37号ピット、R 9-12号ピット、S 8-4号土坑の諸遺構があり、本遺構に切られるものとしてはR 8-13号ピット、R 8-19号ピット、R 8-21号土坑、R 8-22号ピット、R 9-6号土坑の諸遺構がある。

本遺構は互いに連結する数条の溝状部分から成っている。そのうち主軸をなすのは、R 7グリッド東端中部から始まりR 9グリッド南端近くで旧図書館基礎掘り方によって切られるまで、70cm前後の幅で続く長さ13m弱の溝状部分である。ここでこれを主溝部と呼ぶこととする。この主溝部の方向はほぼ正確に南北を指している。主溝部と平行の位置関係にあり、R 8グリッド北半から始まりR 9グリッドの中央部で主溝部と結合する幅22~50cmで長さ6.5m程の溝状部分は側溝部と呼ぶこととする。この側溝部は南端で東南方向へ折れて主溝部と合体する。R 8グリッドの北半で主溝部から分かれて西へ約4.5m伸びる幅36cmほどの溝状部分は第一分枝と呼ぶこととする。側溝部の北端はこの第一分枝に連結して終わっている。最後に、側溝部のほぼ中央から分かれて西南西方向へ4mほどの長さで伸びている溝状部分を第二分枝と呼ぶこととする。

主溝部の南半9ライン付近から南へ3mほどは、中央の中洲状の部分を挟んで溝は二本になっている。その中洲状の部分は近代の土管埋設用掘方の北側で一旦途切れているが、その南側で再び現われ二本の溝を隔てている。また、主溝部と側溝部が結合する位置から南では、二本の溝の西側に緩やかな斜面を成して浅い溝状部分が伸びている。

確認面からの深さは区々であるが、概して言えば北側で浅く南側で深い。最も深いところでは約30cmを測る。また、底面の標高も主溝部の北端で約22.36mと高く、南端で22.06mと低い。

埋土はどの部分でもほぼ一様で、小礫を含む暗褐色土の単純層からなっている。遺物はかなり多く、陶磁器片、瓦片、砥石片、銭(寛永通宝)、骨片等がある。これらの遺物は確認面およびその直下と溝底面直上に多く分布し、その中間にはほとんどなかった。

この溝状遺構に伴うと考えられるものとして小形の杭穴群がある。溝状部分上に穿たれたものが94個、その周辺にあり溝状遺構に関係すると思われるものは50個ほどである。杭穴が最も多い

のは主溝部の上で、主溝部の主軸方向と同じくほぼ正確に南北に連なっており、溝の中軸を挟むように左右交互に並ぶように見受けられる。次に多いのは第二分枝上であり、第一分枝上にも若干存在する。しかし側溝部の上にはない。なお、第一分枝と第二分枝との間を結ぶようにQライン西側に南北方向に連なる一群の杭穴があるが、これもその方向から見て溝状遺構に関係するものと考えてよかろう。これらの杭穴の平面形は区々であるが、長方形のものが最も多く、他に三角形、長円形などもある。確認面からの深さもバラつきが多く、浅いもので3～4cm、深いものでは50cmに達するものもある。ただし大多数は20～30cmである。なお杭穴の確認面は溝状部分の確認面と同じレベルのものが多い。このことから、溝状部分がおそらく人為的に埋められた後にも杭が残っていたことが判る。また、これらの杭穴は壁が比較的完整であることから、あるいは中が空洞になっているものがあることから、杭が打ち込まれたままの状態、それが腐朽して穴だけが残ったものである可能性が高い。

本遺構は、その名称としては溝状遺構と称しているが、文字通り水路としての溝の機能を有していたと考えるよりも、むしろ杭が連続して打ち込まれていることから、何らかの塀や垣根状の構築物の足の部分であると考えたほうがより妥当であろう。ただし、そう考えた際には溝状の窪みの機能が何であったかが問題となるのであるが、溝の底面、壁面の形状に均一性がないことから、これは意識的に掘り窪められたと考えるよりも、例えば雨滴などによって穿たれて形成された痕と想定することも可能であろう。

(中村 慎一)

R 7-1号遺構 (第320図)

文学部調査区の北西部、R 7グリッドの北東隅に位置する。

北側を近代の暖房用のピットにより失っている。黄褐色土盛土上面を切って構築されており、その全体の形は明らかでないが、残存する長辺約65cm、短辺約45cmの不整な長方形を基調とするものと思われる。主軸は真北に対し東へ168°振れる。深さは約35cmを測り、ほぼ垂直な壁と、仕切りによって2つの部分に分かれたやや中央の凹む坑底とを持つ。この仕切りは、ちょうどこの遺構が2つの遺構の切り合いであるかのような様相を与えているが、覆土は一様に締まりの悪い褐色土であり、ここから切り合いを認めることはできなかった。遺物は陶器小片が出土している。遺構の性格は不明である。

(小川 望)

R 7-2号ピット (第320図)

近代の土を除去した面で発見されたもので、0.2×0.15mのほぼ方形のものである。深さも確認面から7cmほどで浅い。鍋底状の形態をしている。杭穴かと思われるが、これと組になると思われるものはない。遺物の出土はない。

(藤本 強)

R 7-4号ピット (第320図)

近代の土を除去したところで検出したものであり、一辺0.2～0.25mの隅丸三角形の平面形をしている。R 7-23号遺構を切っている。深さは0.1mほどであり、杭穴かと思われるがはっきりしない。遺物の出土はない。

(藤本 強)

R 7-5号ピット (第320図)

近代の土を除去したところで発見されたもので、0.3×0.35mの隅丸不整形の平面形をしている。R 7-23号遺構を切っている。深さは0.25mで、やや深い。明確な時期・性格は不明である。杭穴かと思われるが、対になるようなものはない。遺物の出土はない。

(藤本 強)

R 7-23号遺構 (第320図)

R 7グリッドの東側中央に位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。R 7-4号ピットにその東辺を、R 7-5号ピットにその西辺を切られている。また、R 7-3号溝に伴うと考えられる小形の杭穴が3つ坑内に穿たれている。

平面形は略平行四辺形を呈する。長軸方向はR 7-3号溝と平行であり、従ってほぼ正確に南北方向になっている。確認面からの深さは約4cmと浅い。坑底面は平滑である。埋土は灰褐色土の単純層から成っている。遺物は出土していない。

遺構の性格は不明であるが、位置関係や杭穴の存在などから考えて、R 7-3号溝と何らかの有機的关系を有するものかとも思われる。

(中村 慎一)

R 7-6号ピット (第320図)

R 7グリッドの南東隅近くに位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。

直径25cm程の略円形の平面形を呈する。形状は半球状で、確認面からの深さは約7cmを測る。埋土は黒褐色土の単純層から成っている。遺物は出土していない。

遺構の性格は不明である。

(中村 慎一)

R 7-7号遺構 (第320図)

R 7グリッドとR 8グリッドの境界線上ほぼ中央に位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。

不整形の主体部に両翼形の突出部が付いた平面形を呈している。確認面からの深さは約37cmを測る。坑底は平坦で、坑壁の立ち上がりはかなり急である。埋土はローム粒を若干含む茶褐色土の単純層から成っている。出土遺物はなかった。遺構の性格は明らかではない。

(中村 慎一)

R 7-8号ピット (第320図)

R 7グリッドの西端やや北寄りに位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。

平面形は隅丸の略正方形を呈する。確認面からの深さは12cm足らずである。坑底、坑壁には緩やかな凹凸がある。埋土は少量の砂粒を含む灰褐色土の単純層からなっている。遺物の出土はなかった。遺構の性格は明らかではない。

(中村 慎一)

R 7-9号ピット (第320図)

R 7グリッドの東南隅近くに位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。R 7-3号溝の西辺を切っている。

平面形はほぼ平行四辺形を呈している。確認面からの深さは約38cmを測る。坑底は平坦である。埋土は、底部近くに粘性を帯びた灰褐色土が、その上位に茶褐色土が堆積している。出土遺物はない。遺構の性格は不明であるが、杭穴である可能性がある。 (中村 慎一)

R 7-17号ピット (第320図)

R 7グリッドの中央やや北西寄りに位置する。

黄褐色土盛土の剥ぎとり作業中に確認された遺構である。ただし、盛土の途中から掘り込まれたとするよりも、盛土上面ないしはそれよりも上位から掘り込まれたものが、盛土上面では確認できなかったものと思われる。

平面形は隅丸の不整形を呈する。確認面からの深さは約4cmでかなり浅い。埋土はやや黒みを帯びた黄褐色土である。出土遺物はなかった。遺構の性格は不明である。 (中村 慎一)

R 7-18号ピット (第320図)

R 7グリッドの東側やや北寄りに位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。R 7-3号溝の西辺を切っている。

平面形は略長方形を呈する。確認面からの深さは約17cmを測る。坑底は平坦であるが、南へ向かって僅かずつ低くなっている。埋土は黒褐色土の単純層から成っている。出土遺物はない。遺構の性格は明らかではない。 (中村 慎一)

R 7-19号ピット (第320図)

R 7グリッドの西南隅近くに位置する。

黄褐色土盛土の剥ぎ取り作業中に確認された遺構である。ただし、本来は盛土上面ないしはそれよりも上位から掘り込まれた遺構であると考えられる。

平面形は不整形を呈する。確認面からの深さは14cmほどである。坑底、坑壁面には若干の凹凸がある。埋土はやや黒味を帯びた黄褐色土の単純層から成っている。出土遺物はない。遺構の性格は不明である。 (中村 慎一)

R 7-22号ピット (第320図)

R 7-22号ピットはQ 6-1号組石遺構の周辺を精査した際に検出した。平面形は52×40cmの隅丸方形を呈している。遺物の出土は無い。覆土の状態、柱痕の有無、確認面からの深さ、底面の状態等は記録不備の為不明である。 (菅谷 通保)

Q 8-3号ピット (第321図)

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。Q 8グリッドの北東隅R 7-3号溝の西に伸びる一分枝の南辺に接する位置にある。

平面形は長径48cm、短径28cmの長楕円形を呈する。確認面からの深さは約12cmを測る。坑壁

の立ち上がりはゆるやかで、いわゆる皿状を呈する。埋土は黒褐色土の単純層から成っている。遺物の出土はない。遺構の性格は不明である。(中村 慎一)

Q 8-4号ピット (第321図)

Q 8グリッドの東端やや北寄りに位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。

平面形は略正方形を呈する。確認面からの深さは25cm余りである。坑底には若干の凹凸があり、全体的には北西隅に向かってやや低くなっている。

埋土は黒褐色土の単純層から成っている。出土遺物はない。

遺構の性格は不明であるが、R 7-3号遺構の西へ伸びる二筋の分枝の間を結ぶように連なる杭穴列上にあることから、それと何らかの有機関係を有するもの、例えば垣根の支柱穴といったものである可能性がある。(中村 慎一)

Q 8-5号ピット (第321図)

Q 8グリッドの東側ほぼ中央に位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。

平面形は隅丸の不整長方形を呈する。確認面からの深さは約5cmを測る。坑底面、坑壁面ともに平滑で固い。埋土は若干の砂粒を含む黒褐色土の単純層である。出土遺物はない。遺構の性格は明らかではない。(中村 慎一)

Q 8-6号ピット (第321図)

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。Q 8グリッドの東南隅、R 7-3号溝の南西方向に伸びる一分枝に収まる位置にある。ただし、埋土の違いからR 7-3号溝の一部ではなく、それを切る遺構であることが判る。また埋土を除去した際に坑底面で杭穴が確認されており、その杭穴よりも新しいことが確かである。

平面形は不整長楕円形を呈している。確認面からの深さは約20cmを測る。坑底は平坦であり、坑壁の立ち上がりは比較的急である。埋土は淡褐色ローム質土の単純層から成っている。出土遺物はない。遺構の性格は不明である。(中村 慎一)

R 8-5号土坑 (第321図)

近代の土を除去した面で発見されたものであり、R 7-3号溝を追跡している過程で検出された。溝よりは新しい遺構であり、北にあるQ 8-9号ピット、R 8-4号ピットをも切っている。埋土は暗褐色土である。東西0.65m、南北0.75mほどの隅の円いほぼ方形の平面形をしている。深さは0.1mほどで皿状の窪みである。床には、R 7-3号溝に伴う杭穴が5ある。性格は不明である。遺物の出土はない。(藤本 強)

R 8-4号ピット (第321図)

文学部調査区の西部、R 7グリッドとQ 8グリッドの境界線上南寄りに位置する。

Q 8-9号ピットおよびR 8-5号土坑と重複するが、その前後関係は古いほうからQ 8-9

号ピット，R 8—4号ピット，R 8—5号土坑の順であることが切り合い関係より知られる。三者とも黄褐色土盛土上面を切って構築されており，この面を精査する過程で確認された。平面形は，一辺約45cmの隅丸方形を呈し，深さは約25cmを測る。主軸方位は，ほぼ真北に一致する。ほぼ垂直な壁と中央のやや凹む坑底とを持つ。覆土は灰褐色土であり，壁面坑底面共に凹凸を持つ。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。 (小川 望)

Q 8—9号ピット (第321図)

文学部調査区の西部，Q 8グリッドの東側に位置する。

3基の遺構が互いに重複しており，その前後関係は古いほうからQ 8—9号ピット，R 8—4号ピット，R 8—5号土坑の順である。これらの遺構はいずれも黄褐色土盛土上面を切って構築されており，この面を精査する過程で確認された。

平面形は一辺約50cmの隅丸方形を呈するものと思われ，主軸方位は真北に対し東へ109°振れる。深さは約10cmを測り，緩やかに立ち上がる壁と中央の凹む坑底とを持つ。覆土はやや締まりの良い褐色土である。遺物は出土していない。

遺構の性格は不明であり，時期もR 8—4，5号土坑より新しいこと以外明らかでない。

(小川 望)

R 8—6号ピット (第321図)

文学部調査区の西部，R 8グリッドの北西隅に位置する。

黄褐色土盛土上面を切って構築されており，この面を精査する過程で確認された。平面形は長軸約50cm，短軸約35cmの東辺の湾曲した不整な長方形または楕円形であり，主軸方位は真北に対し東へ52°振れる。深さは約10cmを測り，ほぼ垂直な壁と中央のやや凹む坑底とを持つ。覆土は灰褐色土である。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。 (小川 望)

R 8—7号ピット (第321図)

文学部調査区の西部，R 8グリッドの中央西側に位置する。

8基の遺構が互いに重複しているが，直接の切り合いを示すのはR 8—9号土坑とであり，これを切っている。これらの遺構はいずれも黄褐色土盛土上面を切って構築されており，この面を精査する過程で確認された。平面形は長軸約50cm，短軸約45cmの卵形に近い楕円形であり，主軸方位は真北に対し東へ168°振れる。深さは約20cmを測り，ほぼ垂直な壁と中央のやや凹む坑底とを持つ。覆土は灰褐色土である。遺物は出土していない。

遺構の性格は不明であり，時期もR 8—9号土坑より新しいこと以外明らかでない。

(小川 望)

R 8—8号ピット (第321図)

文学部調査区の西部，R 8グリッドの中央西側に位置する。

8基の遺構が互いに重複しているが，直接の切り合いを示すのはR 8—9号土坑とであり，これを切っている。これらの遺構はいずれも黄褐色土盛土上面を切って構築されており，この面を

精査する過程で確認された。平面形は長辺約50cm、短辺約40cmのやや不整な長方形で、主軸方位は真北に対し東へ90°振れる。深さは約12cmを測り、ほぼ垂直な壁と中央のやや凹む坑底とを持つ。覆土は灰褐色土である。遺物は出土していない。

遺構の性格は不明であり、時期もR 8-9号土坑より新しいこと以外明らかでない。

(小川 望)

R 8-12号ピット (第321図)

文学部調査区の西部、R 8グリッドのほぼ中央に位置する。

8基の遺構が互いに重複しており、そのうち当R 8-12号ピットはR 8-9、11号土坑を切っている。これらの遺構はいずれも黄褐色土盛土上面を切って構築されており、この面を精査する過程で確認された。

平面形は長辺約50cm、短辺約30cmのやや歪んだ長方形で、主軸方位は真北に対し東へ140°振れる。深さは約15cmを測り、強く立ち上がる壁とほぼ平坦な坑底とを持つ。覆土は締まりの悪い褐色土である。遺物は出土していない。

遺構の性格は不明であり、時期もR 8-9、11号土坑より新しいこと以外明らかでない。

(小川 望)

R 8-11号土坑 (第321図)

文学部調査区の西部、R 8グリッドのほぼ中央に位置する。

8基の遺構が互いに重複しており、そのうち当R 8-11号土坑はR 8-9号土坑、13号ピットを切り、R 8-12号ピットに切られる。これらの遺構はいずれも黄褐色土盛土上面を切って構築されており、この面を精査する過程で確認された。

平面形は長辺約80cm、短辺約60cmのやや歪んだ長方形で、主軸方位は真北に対し東へ134°振れる。深さは約12cmを測り、強く立ち上がる壁と中央の僅かに凹む坑底とを持つ。覆土はローム粒子を少々含む褐色土である。遺物は出土していない。

遺構の性格は不明であり、時期もR 8-13号ピットより新しいこと以外明らかでない。

(小川 望)

R 8-9号土坑 (第321図)

文学部調査区の西部、R 8グリッドの中央西側に位置する。

8基の遺構が互いに重複しており、そのうち直接の切り合い関係では、本土坑はR 8-31号ピットを切り、R 8-7、8号ピット、11号土坑、12号ピットに切られている。これらの遺構はいずれも黄褐色土盛土上面を切って構築されており、この面を精査する過程で確認された。

平面形は長軸約150cm、短軸約85cmの不整な楕円形で、主軸方位は真北に対し東へ43°振れる。深さは約18cmを測り、きわめてなだらかな壁と平坦な坑底とを持つ皿状を呈する。覆土はやや締まりの良いローム粒子を含む褐色土である。遺物は出土していない。

R 8-31号ピットより新しいこと以外明らかでない。

(小川 望)

R 8-10号ピット (第321図)

文学部調査区の西部，R 8グリッドの中央西側に位置する。

黄褐色土盛土上面を切って構築されており，この面を精査する過程で確認された。

平面形は長軸約35cm，短軸約30cmのやや不整な楕円形で，主軸方位は真北に対し東へ127°振れる。深さは約10cmを測り，強く立ち上がる壁と平坦な坑底とを持つ。覆土はやや締まりの悪い褐色土である。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。 (小川 望)

R 8-13号ピット (第321図)

文学部調査区の西部，R 8グリッドのほぼ中央に位置する。

8基の遺構が互いに重複しているが，直接の切り合いを示すのはR 8-11号土坑とであり，これに切られている。また，R 7-3号溝にも切られている。これらの遺構はいずれも黄褐色土を切って構築されており，この面を精査する過程で確認された。

平面形は径約55cmの円形を呈するものと思われ，深さは約10cmを測る。ほぼ垂直な壁と平坦な坑底とを持つ。覆土は締まりの悪い褐色土である。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。 (小川 望)

R 8-16号ピット (第321図)

R 8グリッドの中央やや南寄りに位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。R 7-3号溝を切っている。

平面形は不整長円形を呈する。確認面からの深さは約15cmを測る。坑底面，坑壁面ともに平滑で，いわゆる鍋底状の形状を示す。埋土は若干の小礫を混じえる暗褐色土の単純層からなっている。遺物は出土していない。遺構の性格は明らかではない。 (中村 慎一)

R 8-17号ピット (第321図)

R 8グリッドのほぼ中央に位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。R 7-3号溝の二本の南北方向に伸びる溝状部分の間に残された土手状部分に位置する。

平面形は径30cmの略円形を呈する。確認面からの深さは約38cmとかなり深い。坑壁の立ち上がりはかなり急である。埋土は，底部近くに厚さ3cmほど灰褐色土が，その上には暗褐色土が堆積していた。出土遺物はない。遺構の性格は明らかではないが，やや大型の杭穴かとも思われる。

(中村 慎一)

R 8-31号ピット (第321図)

R 8グリッドの中央やや西寄りに位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。R 8-9号土坑によって北西部を切られている。

全体の平面形は不明であるが残存部分から類推すれば隅丸の不整形になるものかと思われる。確認面からの深さは9cm足らずである。埋土は暗褐色土の単純層から成っている。遺物としては数片のカキ殻片が出土している。小型のゴミ穴としての機能が推定可能である。

(中村 慎一)

R 8—36号ピット (第321図)

R 8グリッドの南側中央に位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。R 7—3号溝の中洲状の部分に位置するが、溝状部分とは直接の切り合い関係を持たない。

平面形は、短径22cm、長径27cm程の楕円形を呈する。確認面からの深さは18cm弱を測る。坑底面、坑壁面ともに凹凸が目立ち、掘り方は雑である。全体的には擂鉢状を呈し、坑底、坑壁の境界は不明である。埋土は灰褐色土の単純層から成っている。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。

(中村 慎一)

Q 8—7号ピット (第322図)

Q 8グリッドの南東隅近くに位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。R 7—3号溝の南西へ伸びる一分枝の南辺を切っている。

平面形は隅丸の菱形を呈する。確認面からの深さは11cm余りである。坑底面は平坦であり、坑壁の立ち上がりはかなり急である。埋土は黒褐色土の単純層から成っている。出土遺物はない。遺構の性格は不明である。

(中村 慎一)

Q 8—8号ピット (第322図)

Q 8グリッドの南東隅に位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。

平面形は隅丸台形を呈する。確認面からの深さは約11cmを測る。坑底面はやや周囲が高く中央部が凹んでいる。埋土はローム粒子を含む褐色土の単純層からなっている。出土遺物はない。遺構の性格は明らかではない。

(中村 慎一)

Q 9—1号ピット (第322図)

Q 9グリッドの北側ほぼ中央に位置する。

黄褐色土盛土はQ 9グリッドの東端から30～50cm西までで終わっており、それより西では、近代の攪乱土層を除去した面ですでにローム漸移層が露出していた。その漸移層上面で確認された遺構である。

平面形は長径約70cm、短径約45cmの不整長楕円形を呈する。確認面からの深さは13cm足らずである。坑底、坑壁の境界は不明瞭で、いわゆる擂鉢状の形状を呈する。埋土は若干の黒褐色土粒子を含む褐色ローム質土の単純層から成っている。遺物の出土はない。遺構の性格は不明である。

(中村 慎一)

Q 9—2号ピット (第322図)

Q 9グリッドの中央やや西寄りに位置する。

Q 9—1号ピットと同じく、近代の攪乱土層を除去した面、すなわちローム漸移層の上面で確

認められた遺構である。

平面形は隅丸三角形を呈する。各辺長は約40cmである。確認面からの深さは約13cmである。坑底のレベルはやや北側で低く南側が高い。埋土は茶褐色土の単層から成っている。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。 (中村 慎一)

Q 9-3号土坑 (第322図)

東西に走る排水管によって中央部を断ち切れ、また、北側でQ 9-4号土坑を切っている。1.5×1.2mの南北に長い方形・箱形の土坑で、確認面からの深さは0.9mを測る。壁下に沿って、一辺3個ずつ、計8個の周穴が認められる。周穴は直径12~16cm、深さ0.6mの円形で、周穴の間隔は南北方向で約0.6m、東西方向で約0.4mとなる。埋土は上層が灰褐色土層、下層が青灰色土層で、遺物としては瓦片が少量出土している。 (桜井 英治)

Q 9-4号土坑 (第322図)

Q 9-3号土坑に切られ、Q 9-5号土坑を切っている。保存状態が悪く、南半分を欠くが、一辺1.0m程度の隅丸方形を呈したものと推定される。確認面からの深さは0.2mと概して浅い。埋土は細礫を含む灰褐色土層で、遺物はほとんど含まない。 (桜井 英治)

Q 9-5号土坑 (第322図)

Q 9-4号土坑に切られている。遺構の大半が欠失しているために全体の規模・形状は明らかでない。確認面からの深さは0.2m以下ときわめて浅い。埋土はロームブロックを多量に含む褐色土層で、遺物はほとんど含まない。 (桜井 英治)

R 8-1号ピット (第322図)

文学部調査区の西部、R 8グリッドの南部に位置する。

R 7-3号溝およびR 8-32号土坑と重複し、両者を切っている。これらの遺構はいずれも黄褐色土盛土上面を切って構築されており、この面を精査する過程で確認された。

平面形は長軸約65cm、短軸約50cmの楕円形であり、主軸方位は真北に対し東へ78°振れる。深さは約75cmを測り、ほぼ垂直な壁と平坦な坑底とを持つ。

覆土は締まりの悪い褐色土であり、坑底面上に一辺約30cm、厚さ約10cmの粗く加工された平石が検出された。遺物は、染付碗等の陶磁器、瓦片が出土している。

遺構の形態や礎石と思われる石の存在から、なんらかの柱穴とも思われるが、対応すると考えられる遺構がなく、その性格は明確にし得ない。またその構築の時期もR 7-3号溝、R 8-32号土坑より新しいといえるのみである。 (小川 望)

R 8-32号土坑 (第322図)

文学部調査区の西部、R 8グリッドの南部に位置する。

R 7-3号溝を切り、R 8-1号ピットに切られる。三者とも黄褐色土盛土上面を切って構築されており、この面を精査する過程で検出された。

平面形は径約45cmの円形、深さは30cmを測り、やや丸みを帯びた坑底を持つ播鉢状を呈する。

覆土はやや締まりの良い明褐色土である。遺物は出土していない。

遺構の性格は不明であり、時期も R 7-3 号溝より新しいこと以外明らかでない。

(小川 望)

R 8-18号ピット (第322図)

R 8 グリッドの南西隅に位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。R 8-3号遺構の南辺を切っている。

平面形は隅丸の不整形を呈する。確認面から最深部までの深さは約64cmを測る。確認面から28cm 足らずのところまで坑壁は内側へ折れて段を成しており、そこから再び垂直に近く落ち込み坑底に至る。埋土は褐色のローム質土の単純層からなっている。ただし底部近くではやや径の大きなローム粒が主体となっている。遺物の出土はない。遺構の性格は明らかではないが、やや大形の杭穴でもあろうか。

(中村 慎一)

R 8-3号遺構 (第322図)

Q 8, R 8 両グリッドの南端にまたがって位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。R 8-2号ピット, R 8-35号ピットを切っており、一方, R 8-18号ピットによって切られている。

平面形は略平行四辺形を呈する。長辺長約1.2m, 短辺長約0.5mを測る。長軸方向はほぼ東西方向を向いている。確認面からの深さは約75cmである。坑底は平坦であり、坑壁はほぼ垂直に切り立っている。埋土は、底部に厚さ30cmほどのロームブロックが、その上に若干の小礫と焼土粒や灰白色土粒を含む褐色土層が堆積している。遺物としては数点の瓦片が出土している。

遺構の性格は明らかではないが、長軸方向がほぼ正確に東西に向くことや、坑壁がほぼ垂直に立ち上がることから、単なる植栽痕やゴミ穴ではない何らかの機能が推定されるべきであろう。

(中村 慎一)

R 8-2号ピット (第322図)

R 8 グリッドの南西隅近くに位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。R 8-3号遺構によって東南隅を切られている。

平面形は隅丸の略長方形を呈する。確認面からの深さは約13cmを測る。坑底面、坑壁面には若干の凹凸がある。埋土は径数 cm のロームブロックを主体とする褐色土の単純層からなっている。遺物としては若干の陶磁器片と瓦片が出土している。遺構の性格は必ずしも明らかではないが、最終的にはゴミ穴として機能していたものようである。

(中村 慎一)

R 8-35号ピット (第322図)

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。R 8-3号遺構によって切られている。

全体の平面形は不明だが、隅丸方形を呈するものと推定される。確認面からの深さは約10cmである。坑底面、坑壁面ともに平滑で、両者の境界は明瞭である。埋土は若干の茶褐色土粒子を含む褐色ローム質土の単純層からなっている。遺物としては3点の瓦片が出土している。遺構の性

格は明らかではないが、小形のゴミ穴である可能性がある。

(中村 慎一)

R 9-4号ピット (第322図)

R 9グリッドの西端北寄りに位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。R 9-5号ピットを切っており、一方、近代の遺構(大甕埋設用の掘り方)によって西北部過半を切られている。

全体の平面形は不明であるが、略方形を呈するものかとも推定される。確認面から残存部分最深部までの深さは約40cmを測る。坑壁の立ち上がりは緩やかであり、従って坑底の面積は小さくなるはずであるが、近代遺構によって切られており、確認できなかった。埋土は若干の小礫を含む暗褐色土の単純層から成っている。ただし、上方ではローム質土の割合がやや高い。出土遺物はない。遺構の性格は明らかではないが、やや大形の杭穴である可能性があろう。

(中村 慎一)

R 9-5号ピット (第322図)

R 9グリッドの西端北寄りに位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。R 9-4号ピットによって切られている。

全体の平面形は明らかではないが、隅丸方形を呈するものかとも推定される。確認面からの深さは11cm足らずである。坑底面、坑壁面にはやや凹凸がある。埋土はロームブロックを主体とする褐色土の単純層から成っている。出土遺物はない。遺構の性格は明らかではない。

(中村 慎一)

R 9-12号ピット (第322図)

R 9グリッドの中央やや北西寄りに位置する。

黄褐色土盛土の剥ぎとり作業中に確認された遺構である。ただし、盛土の途中から掘り込まれた遺構というよりも、本来は盛土上面ないしはそれよりも上位から掘り込まれたものを盛土上面において確認できなかったものと思われる。

平面形は径32cmほどの略円形を呈する。全体の形状は半球形で、坑底と坑壁の境界は不分明である。確認面からの深さは36cm余りを測る。埋土は砂粒を含む黄褐色土の単純層から成っている。出土遺物はない。遺構の性格は明らかではないが、やや大形の杭穴である可能性がある。

(中村 慎一)

R 9-13号ピット (第322図)

R 9グリッドの西端ほぼ中央に位置する。

黄褐色土盛土の剥ぎとり作業中に確認された遺構である。ただし、本来は盛土上面ないしはそれよりも上位から掘り込まれたものと思われる。

平面形は不整で、概略ヒョウタン形を呈している。確認面からの深さは7cm足らずである。坑底面、坑壁面ともに凹凸があり、全体的に掘り方は雑である。埋土は若干の黒褐色土粒子を含む褐色ローム質土の単純層から成っている。遺物の出土はない。遺構の性格は不明である。

(中村 慎一)

S 7-1・2号, S 8-1・2号ピット (第323図)

S 7区からS 8区の中央やや西よりに、北より若干西よりに軸をもって並ぶ四遺構である。形はかなりまちまちであるが、底面のレベルは類似のものをもっており、埋土もロームを含む暗褐～褐色土と類似している。相互の距離も1.8～2.0m とほぼ一定している。このやや西にやはり形状は異なるが、ほぼ同様の軸で並ぶS 7-7号遺構、S 7-8号ピット、S 8-3・51号遺構がある。これは若干深さが違い、底面のレベルにバラツキがある。あるいは同一の機能をもっていたのかとも思うがはっきりしない。これら四遺構についてはまとめて後に記述する。

S 7-1号ピットは東西0.55m、南北0.35mで、深さは東側が0.25m、西側が0.4mで底面には段差がある。この南1.9mにS 7-2号ピットがある。S 7-2号ピットは一辺0.4m強の不整隅丸方形であり、底面中央やや西よりに一辺0.2m弱、深さ0.2mの杭穴様のものがある。埋土は類似しているので、同一時期であろう。この南1.8mにS 8-1号ピットがある。東西0.6m弱、南北0.35m、深さ0.3m強の長方形のものである。この南2.0mにS 8-2号ピットがある。0.5×0.4mの不整形方形をしていて、深さは0.4m弱である。S 7-1号ピットはS 7-3号ピットに切られ、S 7-2号ピットはS 7-48号土坑を切っている。いずれも黄褐色土盛土の上面で検出されている。形こそ違うが、これら四遺構は有機的連関をもっていたと考えるのが妥当であろう。底面のレベルは22.0～22.1m前後とほぼ一致している。埋土もロームをかなり含む暗褐色～褐色土であり、比較的固くしまっており、椀瓦を含む瓦の破片をかなり包含していた。かなり太い杭列かとも思われるがはっきりしない。S 7-7号遺構、S 7-8号ピット、S 8-3・51号遺構と続くものとも何らかの関係があったものかと思われる。それが同時にあったのか、時期を異にしてあったのかは不明である。同時にあったのならば、両側に杭を並べるようなものを考える必要があるが、時期を異にするならば、建て換えを考える必要がある。より北と、より南にこれらに連なるものかがあったかどうかに関しては、攪乱がひどく不明である。 (藤本 強)

S 7-7号遺構, S 7-8号ピット, S 8-3・51号遺構 (第323図)

S 7区からS 8区にかけて、S 7-1・2号、S 8-1・2号ピットと続く四遺構の0.5～0.7m西にみられるおそらく一連かと考えられる遺構群である。形状は隅丸長方形を基礎にしながらもかなりまちまちである。深さもちがい、S 7-1号～S 8-2号ピットで底面のレベルはほぼ同一であったものの、ここではかなりのバラツキがある。S 7-7号遺構が22.1m、S 7-8号ピットが21.95m、S 8-3号遺構が22.29m、S 8-5号遺構が22.05mと0.3m以上の違いがある。しかし、それぞれ対応するもののすぐ西にあり、これら四遺構は北よりやや西に偏った軸をもっていて、これはS 7-1号～S 8-2号ピットまでの四遺構のもつ軸とほぼ同一であること、それぞれの埋土もロームを含む暗褐～褐色土と類似し、比較的固くしまっていることなどを考えると一連の有機的機能をもったものと考えるのが妥当であろう。

S 7-7号遺構は長軸0.9m弱、短軸0.35mで、深さは東側と西側の部分が深くなっていて、

もっとも深いところで、0.5mある。つまっている土は深い部分で若干の違いがあり、あるいは別のものである可能性も考えたが、単なる土の埋り方の違いである可能性が強いように思われる。この南1.9mにS7-8号ピットがある。0.4×0.3mの隅丸方形の平面形であり、0.5mの深さがある。この南1.8mにS8-3号遺構がある。東側は円形に若干深くなっているが、同一の埋土であるので、同一時期と考えられる。長軸0.9m強、短軸0.4mの隅丸長方形である。S8-51号遺構はこの南2.0mの位置にあり、長軸0.8m強、短軸0.3mで、深さは0.35mである。一連の遺構と考えられよう。これらとS7-1号～S8-2号ピットの関係については、S7-1号～S8-2号ピットの項ですでに述べている。椀瓦を含む瓦が出土している。杭穴であろうと思われるが明確ではない。

(藤本 強)

R8-29号, S7-11・39・40・49号, S8-6・7・8号ピット (第324図)

文学部調査区の中央北西寄り、S7・S8グリッドの西部にその大半が位置する。

黄褐色土盛土面を精査する過程で検出された。これらのうちR8-29号ピットはR8-19号ピット、S8-4号土坑と重複するが、その新旧関係は古いほうからR8-19号ピット、R8-29号ピット、S8-4号土坑の順であることが切り合い関係から知られる。

全体が南北に長い長方形をなすように並び、各遺構の中心間の距離からみた規模は北辺2.8m、南辺2.8m、東辺3.6m、西辺3.4mであり、西辺がやや短い。各辺は三基の遺構により構成され、それぞれの中心間の距離は北辺東から0.9m、1.9m、南辺東から0.8m、2.0m、東辺北から1.8m、1.8m、西辺北から1.8m、1.4mである。また、この長方形の主軸は、ほぼ真北を向く。

それぞれの遺構はいずれも円形の平面形を有し、壁のなだらかに立ち上がる浅い皿状を呈する。その規模は、R8-29号ピットが直径33cm、深さ6cm、S7-11号ピットが直径37cm、深さ4cm、S7-39号ピットが直径32cm、深さ1cm、S7-40号ピットが直径37cm、深さ4cm、S7-49号ピットが直径17cm、深さ1cm、S8-6号ピットが直径37cm、深さ5.5cm、S8-7号ピットが直径38cm、深さ3.5cm、S8-8号ピットが直径30cm、深さ2cmである。

覆土はS7-49号ピットを除いていずれも坑底付近に砂利が、その上部に灰白色の粘質土がはいり、よく締まっている。S7-49号ピットは、よく締まった灰白色の粘質土のみを覆土とする。

いずれの遺構も遺物は出土していない。

遺構間の距離や、その規格性、配置などからこれは1間×1間半の一つの遺構を構成する柱穴群としての把握が可能であろう。また、すぐ西側にR7-3号溝を伴い、その方向が当遺構群の主軸方位と一致すること、その時期が、共に江戸第一面に属し、R8-19号ピットより新しくS8-4号土坑より古いことから、この遺構群と溝状遺構とが同時に存在した可能性も指摘される。

(小川 望)

R8-37号ピット (第325図)

R8グリッド東北隅に位置する。

近代の攪乱土層を除去した面、即ち黄褐色土盛土上面で確認された遺構である。R7-3号溝

の東辺を切っている。

平面形は隅丸の略正方形を呈する。坑底は平坦で、坑壁の立ち上がりは垂直に近い。確認面からの深さは約17cmである。埋土は灰褐色ローム質土の単純層から成っている。出土遺物はない。

遺構の性格は明らかではないが、杭穴かとも思われる。 (中村 慎一)

S 7-3号ピット (第325図)

黄褐色土盛土の上面で検出された遺構で、一辺0.6mの隅丸の略正方形である。深さは6cmと浅い。S 7-1号ピットを切っている。性格は不明である。遺物は出土していない。

(藤本 強)

S 7-4号ピット (第325図)

黄褐色土盛土上面で検出された。0.5m弱の一辺をもつ隅丸正方形であり、深さは0.3mほどである。S 7-3号ピットとは南北に並ぶようにみえるが、形態・深さに差がある。積極的に何かを云える根拠はない。性格は不明とせざるを得ない。遺物は灰釉皿、瓦等出土している。

(藤本 強)

S 7-10号ピット (第325図)

黄褐色土盛土の上面で検出された遺構である。東西0.4m、南北0.3mの略方形の平面形をもち、0.35mの深さがある。内部には、灰がかなりの量入っていた。S 7-45号ピットを切っている。性格ははっきりしないが、灰が入っていることで周辺の他の遺構とは区別されよう。遺物は白磁碗が出土している。

(藤本 強)

S 7-15号ピット (第325図)

文学部調査区の中央北西寄り S 7 グリッドの中央南側に位置する。

江戸第一面を精査する過程で検出された。S 7-47号遺構および S 7-48号土坑と重複するが、その新旧関係は古いほうから S 7-48号土坑、S 7-47号遺構、S 7-15号ピットの順であることが切り合い関係から知られる。三者とも黄褐色土盛土上面を切って構築されている。

平面形は縦30cm、横15cmの隅丸長方形、主軸は真北に対し東へ約20°振れる。深さは確認面より15cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底面はやや丸みを帯びる。壁面・坑底面ともに凹凸を持つ。覆土は、やや縮まりの弱い暗褐色土からなる。

遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。

(小川 望)

S 7-42・43・44・45号ピット (第325図)

文学部調査区の中央北西寄り S 7 グリッドの南西隅に位置する。

江戸第一面を精査する過程で検出された。S 7-45号ピットが S 7-10号ピットによって切られている。いずれも黄褐色土盛土上面を切って構築されている。

これら四基の遺構は北から S 7-42、S 7-43、S 7-44、S 7-45号ピットの順に並ぶが、その配置において特に意味を見出せない。

平面形は S 7-42号ピットが縦20cm、横13cmの隅丸長方形、主軸方位はほぼ真北・S 7-43

号ピットが縦、横14cmの台形に近い不整な方形。S 7-44号ピットが長軸18cm、短軸12cmの楕円形、主軸方位は真北より東へ22°振れる。S 7-45号ピットが長軸20cm、短軸15cmの楕円形もしくは長円、主軸方位は真北より東へ168°振れる。深さは確認面よりそれぞれ6.5cm、4.5cm、10cm、18.5cmである。いずれもなだらかに立ち上がる壁が丸みを帯びた坑底にそのまま移行する皿状もしくは鉢状を呈する。すべて覆土は、やや縮まりの弱い暗褐色土からなる。いずれの遺構も遺物は出土していない。

遺構の性格は不明であるが、これら4基の遺構が類似の形態を持ち、覆土も同一であることから同一の目的で同時期に構築されたものである可能性が強い。 (小川 望)

S 7-47号遺構 (第325図)

文学部調査区の中央北西寄り、S 7グリッドに位置する。

S 7-15号ピットおよびS 7-48号土坑と重複するが、その新旧関係は古いほうからS 7-48号土坑、S 7-47号遺構、S 7-15号ピットの順である。これら三者とも黄褐色土盛土上面を切って構築されており、この面を精査する過程で検出された。

平面形は長軸約1.4m、短軸約0.5mの不整な楕円もしくは隅丸長方形で、主軸は真北に対し東へ97°振れる。深さは最も深いところで8cmを測り、緩やかな立ち上がりを持つ非常に浅い皿状を呈する。縮まりの悪い褐色土を覆土とする。遺物は出土していない。遺構の性格は明らかではない。 (小川 望)

S 7-48号土坑 (第325図)

文学部調査区の中央北西寄り、S 7グリッド南側中央に位置する。

S 7-2号ピットおよびS 7-47号遺構に切られているが、三者とも黄褐色土盛土上面を切って構築されており、この面を精査する過程で検出された。

平面形は長軸約1.3m、短軸約0.5mの不整な楕円で、主軸は真北にほぼ直交する。深さは約15cmを測り、緩やかな立ち上がりを持つ浅い皿状を呈する。縮まりの悪い褐色土を覆土とする。遺物は出土していない。遺構の性格は明らかではない。 (小川 望)

R 8-14号ピット (第326図)

S 7・S 8区などに拡がるロームを主体とする黄褐色土盛土面の上面で確認された遺構で、R 7-3号溝を切っている。一辺0.45mの隅丸正方形の平面形であり、7cmほどの深さのある土坑である。性格は不明である。遺物は出土していない。 (藤本 強)

R 8-15号ピット (第326図)

黄褐色土盛土の上面で発見された遺構であり、0.5×0.3mの楕円形であり、深さは6～7cmである。埋土に微妙な差があり、西のものが若干明い色をしていた。この点を重視すれば、西の0.3mの円形のもの新しく、東側の部分がやはり0.3mほどの円形の穴になり、これが古いということになるが、単なる埋土の違いの可能性もある。この点ははっきりしなかった。性格は不明である。遺物は出土していない。

(藤本 強)

R 8-19号ピット (第326図)

文学部調査区の中央西寄り，R 8グリッド北東隅に位置する。

R 7-3号溝，R 8-29号ピットおよびS 8-4号土坑と重複するが，これらの新旧関係は古いほうからR 8-19号ピット，R 7-3号溝とR 8-29号ピット，S 8-4号土坑の順である。いずれも黄褐色土盛土上面を切って構築されており，この面を精査する過程で検出された。

平面形は長軸約0.7m，短軸約0.4mの楕円で，主軸は真北に対し東へ50°振れる。深さは約9cmを測り，やや緩やかに立ち上がる壁とほぼ平坦な坑底とを持つ。締まりの悪い褐色土を覆土とする。遺物は出土していない。遺構の性格は明らかではない。(小川 望)

R 8-20号ピット (第326図)

文学部調査区の中央西寄り，R 8グリッドに位置する。

黄褐色土盛土上面を切って構築されており，この面を精査する過程で検出された。

平面形は長軸約15cm，短軸約12cmの隅丸長方形で，主軸は真北に対し東へ77°振れる。深さは12cmを測り，鋭く立ち上がる壁とほぼ平坦な坑底とを持つ。覆土はローム粒子を僅かに含む締まりの悪い褐色土からなる。遺物は出土していない。

S 8-9号ピットとともに，なんらかの柱穴とも思われるが，遺構の性格は明らかではない。

(小川 望)

R 8-22号ピット (第326図)

文学部調査区の中央西寄り，R 8グリッドに位置する。

R 8-21号土坑およびR 7-3号溝と重複するが，これらの新旧関係は前述したように古いほうからR 8-21号土坑，R 8-22号ピット，R 7-3号溝の順である。三者とも黄褐色土盛土上面を切って構築されており，この面を精査する過程で検出された。

平面形は径約0.5mのやや不整な円形もしくは楕円形を呈するものと思われる。深さは約10cmを測り，緩やかに立ち上がる浅い皿状を呈する。覆土は締まりの弱いやや粘性のある暗褐色土からなる。遺物は出土していない。

遺構の性格は明らかでなく，時期もR 8-21号土坑より新しいことが知られるのみである。

(小川 望)

R 8-21号土坑 (第326図)

文学部調査区の中央西寄り，R 8グリッドに位置する。

R 8-22号ピットおよびR 7-3号溝と重複するが，これらの新旧関係は古いほうからR 8-21号土坑，R 8-22号ピット，R 7-3号溝の順である。三者とも黄褐色土盛土上面を切って構築されており，この面を精査する過程で検出された。

平面形は径約0.8mのやや不整な円形もしくは楕円形を呈するものと思われる。深さは約6cmを測り，緩やかに立ち上がる浅い皿状を呈する。覆土はやや粘性のある暗褐色土からなり，拳大

の礫が2個坑底面上にみいだされた。遺物は出土していない。遺構の性格は明らかではない。

(小川 望)

S 8-4号土坑 (第326図)

文学部調査区の中央北西寄り R 8 グリッドにその大半があり、東辺が S 8 グリッドにかかる。

R 7-3号溝および R 8-29号ピットと重複するが、両者を切る最も新しい遺構である。これら三者とも黄褐色土盛土上面を切って構築されており、この面を精査する過程で検出された。

平面形は隅丸の方形であるが、東辺約1.3m、西辺約1.5mと、やや台形気味である。残り二辺は北辺約1.2m、南辺約1.3mを測る。主軸方位は真北に対し東へ約160°振れる。深さは確認面より約0.8mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、かなり強い屈曲をもって坑底面と交わる。坑底面は中央がやや凹み、とくに北西のコーナー付近において著しい。壁面および坑底面は粗い調整が施され、僅かに工具痕と思われる凹凸を残す。

覆土の堆積は大きく三層に分かれる。下層はロームブロックを多く含む強く締まった暗黄褐色土が、3~4cmの厚さに薄く堆積している。中層は覆土の大半を占めるほぼ均質な暗褐色土からなり、貝殻や遺物はみなこの層にふくまれる。上層はやや明るい褐色土を主体とし、煉瓦や砂利が含まれる比較的締まりの悪い層である。下層は、いわゆる貼り床的な印象を与えるものであり、構築直後もしくは使用中に床面を平坦にする目的でなされたものと思われる。上層はおそらく遺構が一旦完全に埋まった後きわめて新しい時期に属する土が押し込まれてできたものと思われる。遺物は、瓦片、鉄製品が出土している。当遺構は恐らく貯蔵用の施設として構築され、廃絶後ゴミ捨て穴とされたものと思われる。

(小川 望)

S 8-9号ピット (第326図)

文学部調査区の中央西寄り、R 8 グリッドと S 8 グリッドの境界線上に位置する。

黄褐色土盛土上面を切って構築されており、この面を精査する過程で検出された。

平面形は長軸約16cm、短軸約15cmの円に近い隅丸方形で、主軸は真北に対し東へ168°振れる。深さは10cmを測り、緩く立ち上がる壁とほぼ平坦な坑底とを持つ。覆土はローム粒子を僅かに含む締まりの悪い褐色土からなる。遺物は出土していない。

R 8-20号ピットと同様、なんらかの柱穴とも思われるが、遺構の性格は明らかではない。

(小川 望)

S 8-10号ピット (第326図)

文学部調査区の中央西寄り、S 8 グリッドの南西隅に位置する。

黄褐色土盛土上面を切って構築されており、この面を精査する過程で検出された。

平面形は長軸約44cm、短軸約36cmの楕円形で、主軸は真北に対し東へ140°振れる。深さは15cmを測り、鋭く立ち上がる壁とほぼ平坦な坑底とを持つ。覆土は締まりの悪い褐色土からなる。遺物は出土していない。遺構の性格は明らかではない。

(小川 望)

S 8-48号ピット (第326図)

S 8 グリッド北側ほぼ中央に位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。

平面形は不整形である。確認面からの深さは約5 cm と浅い。坑底はほぼ平坦であるが、坑壁には若干の凹凸がある。埋土は締りの悪い茶褐色土の単純層から成っている。遺物としては若干の瓦片が出土している。遺構の性格は明らかではない。 (中村 慎一)

S 8—49号ピット (第326図)

S 8 グリッドの西端近く北寄りに位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。

平面形は長辺20cm, 短辺14cm の隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは8 cm と浅く、皿状の形態を有している。埋土は灰褐色土の単純層から成っている。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。 (中村 慎一)

S 8—50号ピット (第326図)

S 8 グリッドの西端南寄りに位置する。

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。

平面形は隅丸方形を呈する。各辺長は20~22cm を測る。確認面からの深さは10cm 足らずである。全体の形状は鍋底状で、坑底、坑壁の境界は不分明である。埋土は灰褐色土の単純層から成っている。遺物は出土していない。遺構の性格は明らかではない。 (中村 慎一)

S 8—15号土坑 (第327図)

S 8 グリッドの南端に位置し、北側を土管のための溝に、また南側を旧図書館の基礎によって切られて残った、幅20cm の土手状の部分で確認することができた。長軸1.4m の楕円形土坑で、東西方向に主軸をもち、西側でS 8—16号土坑を切っていた。確認面からの深さは80cm で、壁及び底部には凹凸が目立った。覆土は大きく上下2層に分けられ、上層は小礫・瓦片を含むかたくしまった暗褐色土で、下層はボソボソしてしまりが無い暗茶褐色土であった。本遺構の性格は明確ではないが、形態や下層の覆土の状態から植栽痕ではないかと考えられる。 (倉林 真砂斗)

S 8—16号土坑 (第327図)

S 8 グリッドの南端に位置し、東側をS 8—15号土坑に切られ、西側は攪乱を受けているために規模・形態は明確ではないが、S 8—15号土坑に類似する遺構であると考えられる。確認面からの深さは40~50cm で、底部には凹凸が目立った。覆土はローム粒子・直径2~3 cm の小ロームブロック・黒色粒子・小礫を含む暗褐色土で上層はかたくしまり、下層は小礫が多く、また大きめの粘土ブロックも含んであまりしまっていなかった。瓦片が数点出土した。本遺構の性格は明確ではないが、S 8—15号土坑と同様植栽痕ではないかと考えられる。 (倉林 真砂斗)

S 8—52号井戸 (第327図：図版3)

文学部調査区の中央西寄り、R 9 グリッド杭上にかかる。

旧図書館の基礎により破壊されており、これを除去する際に確認されている。

直径約135cmの正円の平面と、ほぼ垂直な壁を持つ。壁の崩落の危険があったため、坑底まで掘り下げてはいない。

覆土は基本的に三つの部分に分かれる。すなわち壁の内側に同心円状に入る詰め込まれたような感じの黒色土からなる部分、その内側の、多量の瓦とその間隙を埋める焼土とから成る部分、およびそれらの上部に押し込まれたように入るきわめて締まりの良い部分である。前二者の間には僅かに木質の残存がみられ、この遺構が一旦大きく掘られた後桶状のものが入られ、その外側と壁との間に土が充填されたものであることがうかがわれる。

遺物は、きわめて多量の瓦の他、染付蓋、瑠璃釉鉢といった陶磁器、釘などの金属製品、および木質の材である。このうち、瓦は乱雑ではあるが、ぎっしりと詰め込まれたように入り、それに釘などが伴う。陶磁器類は、主に上部の締まった層より出土している。

この遺構は、その形態や二重構造を示す覆土の状態から、井戸として構築されたものと思われる。(小川 望)

R 9-2号土坑 (第328図)

文学部調査区の中央南西寄り、R 9グリッドの中央東寄りに位置する。

調査区南寄りを東西に走る土管の掘り方によってその南半を失っており、土管を除去する際に確認された。黄褐色土盛土上面を切って構築されている。

平面形は残存する長辺約90cm、短辺約65cmのやや不整な長方形で、深さは約10cmを測る。主軸方位はほぼ真北に一致する。緩やかに坑底へ至る壁とほぼ平坦な坑底とを持つ。覆土は締まりの悪い褐色土からなる。遺物は出土していない。遺構の性格は明らかではない。(小川 望)

R 9-6号土坑 (第328図)

文学部調査区の中央南西寄り、R 9グリッドのほぼ中央に位置する。

R 7-3号溝に切られ、R 9-3号ピットを切っている。三者とも黄褐色土盛土上面を切って構築されており、この面を精査する過程で検出された。

その大半が切り合いにより失われているため、平面形や大きさは明らかでないが、径約1.7mの円形を呈するものと思われる。深さは最も深いところで約20cmを測る。壁は緩く立ち上がり、坑底面は中央へ向かって僅かに傾斜する。覆土は締まりの悪い褐色土からなる。遺物は出土していない。植栽痕かとも思われるが遺構の性格は明らかではない。(小川 望)

R 9-3号ピット (第328図)

文学部調査区の中央南西寄り、R 9グリッドのほぼ中央に位置する。

黄褐色土盛土上面を切って構築されており、この面を精査する過程で検出された。

平面形は径約50cmのやや不整な円で、深さは約7cmを測る。なだらかに坑底へ至る壁を持つ浅い皿状を呈する。覆土はローム粒子を含む締まりの悪い褐色土からなる。遺物は出土していない。遺構の性格は明らかではない。(小川 望)

R 9-14号ピット (第328図)

R 9 グリッドの東側やや南寄りに位置する。

黄褐色土盛土の剥ぎ取り作業中に確認された遺構である。しかし、その確認面で他に多くの遺構が確認されているわけではなく、また、黄褐色土盛土が比較的均一であって、ごく短期間に造成されたものと考えられることから、恐らくこの遺構は、本来黄褐色土盛土の上面ないしはそれよりも上位から掘り込まれていたものと判断される。

平面形は隅丸の略長方形を呈する。確認面からの深さは約12cmである。埋土は暗黄褐色土の単純層からなっている。出土遺物はない。遺構の性格は明らかではない。(中村 慎一)

R 9-15号ピット (第328図)

黄褐色土盛土の上面で確認された遺構である。その西半と北端を近代の土管埋設用掘方によって切られている。

土管掘方の西側にはこれに対応すると思われる遺構は検出されていないので、土管掘方内で完結するものと考えられる。全体の平面形は長径70cm程度の長楕円形を呈するものと推定される。残存部での確認面からの深さは14cm余りである。埋土は小礫を含む茶褐色土の単純層から成っている。出土遺物はない。遺構の性格は明らかではない。(中村 慎一)

S 9-1号土坑 (第328図)

文学部調査区の中央南西寄り、R 9 グリッドと S 9 グリッドの境界線のほぼ中央に位置する。

調査区南寄りを東西に走る土管の掘り方および旧図書館の基礎によってその南半、東半を失っており、基礎を除去する際に確認された。黄褐色土盛土上面を切って構築されている。

平面形は残存部より推定すれば径1.5m~2mの円または楕円形であり、緩やかに立ち上がる壁とほぼ平坦な坑底とを持つ播鉢状を呈する。深さは約50cmを測る。覆土は締まりの悪い褐色土からなり、遺物は伴っていない。植栽痕かとも思われるが遺構の性格は明らかではない。

(小川 望)

T 8-5号土坑 (第328図)

T 8 グリッド西縁中ほどに位置し、西側で T 8-3号土坑を切り、南側を明治以降の土坑に切られる円形土坑の一部である。全体のごく一部が残っているだけで、規模は不明である。検出した部分での確認面からの深さは50cmで、壁・底部には凹凸が目立った。覆土はローム粒子・ロームブロックを全体的に含むしまりのない茶褐色土で、下部に大形のロームブロックが多かった。出土遺物は認められなかった。本遺構は推定される規模・形態及び覆土から、植栽痕と考えられる。(倉林 真砂斗)

T 8-3号土坑 (第328図)

S 8 グリッドと T 8 グリッドにまたがって確認でき、東側を T 8-5号土坑に、南側をレンガ片を含む明治以降の土坑に切られていた。ローム粒子混じりの暗茶褐色土が染み状に広がっていたため、プランでは T 8-5号土坑と別遺構と認識するのは困難であったが、南側の攪乱部分を完掘後北壁を精査してその存在を確認することができた。大部分が消滅していたので、形態・規

模は不明である。検出しえた部分での確認面からの深さは、30cmほどであった。覆土はローム粒子・直径2～3cmのロームブロックを含む暗茶褐色土で、あまりしまっていなかった。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。
(倉林 真砂斗)

S 8-5号ピット (第329図)

S 8杭の南0.8mほどのところにある1辺0.3mぐらいの不整形のピットである。深さは0.3mほどと比較的深い。形はいかにも整っていない。埋土は黒褐色土を主体にするものであり、あるいは植栽に関係するものかもしれない。すぐ東に形は違うがほぼ同様の性格が考えられるT 8-6号ピットがある。遺物は出土していない。
(藤本 強)

T 7-3号土坑 (第329図)

T 7グリッド北西部に位置し、T 7-2号土坑を切っていた円形の土坑の一部であった。規模・主軸方向は不明であり、確認面からの深さは20cmほどであった。暗茶褐色土を覆土とする。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。
(倉林 真砂斗)

T 7-2号土坑 (第329図)

T 7グリッドの北西部に位置し、一部S 7グリッドにかかっていた。北側をT 7-3号土坑に切られていた。西北-東南方向に主軸をもつ、長軸1.2mほどの楕円形を呈する土坑と考えられる。確認面からの深さは1.1mほどで、底部は比較的平坦であった。覆土は暗茶褐色土の単純層から成っている。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。
(倉林 真砂斗)

T 7-4号ピット (第329図)

T 7グリッド西端に近いところに位置し、T 7-5号土坑・T 7-7号土坑を切っているのが確認できた。攪乱・削平により大部分は消滅していたが、一辺30cmほどの隅丸方形土坑であると考えられる。確認面からの深さは40cmであった。覆土は暗茶褐色土である。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。
(倉林 真砂斗)

T 7-6号土坑 (第329図)

T 7グリッドの西端中央部、T 7-4号ピット・T 7-5号土坑の西側に位置し、一部S 7グリッドにかかっていた。西北-東南方向に主軸をもつ、長軸1m、短軸0.5mの長楕円形の土坑で、確認面からの深さは20cm足らずと浅く皿状を呈していた。東南部でT 7-7号土坑を切っていた。覆土はローム粒子や砂利を含む茶褐色土で、かたくしまっていた。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。
(倉林 真砂斗)

T 7-8号土坑 (第329図)

T 7グリッドの西南コーナー近くに位置し、T 7-7号土坑の覆土中に掘り込まれていた。直径80cmほどの円形土坑で、確認面からの深さは50cmほどであった。壁・底部には凹凸が目立っていた。覆土は上下二層に大別される。下層は茶褐色土、上層は暗茶褐色土である。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は明確ではないが、規模の小さい植栽痕ではないかと考えられる。
(倉林 真砂斗)

T 7-5号土坑 (第329図)

T 7グリッドの西端中央部に位置し、南側を T 7-4号ピットに切られていた。東半分は既に消滅していたが、直径1 mほどの円形土坑で、確認面からの深さが10cm 足らずと浅く皿状を呈していた。覆土は若干の灰白色粘土粒を含む暗茶褐色土である。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。 (倉林 真砂斗)

T 7-7号土坑 (第329図)

T 7グリッド西南コーナーに位置し、北側を T 7-4号ピット・T 7-6号土坑に切られ、南側で T 7-9号土坑を切っていた。また覆土中には T 7-8号土坑が掘り込まれていた。確認した時は既に東半分が消滅していたが、復元推定すると直径1.8m ほどの円形土坑と考えられる。確認面からの深さは60cm ほどで、底面・壁には凹凸が目立ち、北側の壁は南側に比べて急であった。覆土はロームを主体とする明茶褐色土である。瓦片が出土した。本遺構は、規模・形態・覆土から植栽痕ではないかと考えられる。 (倉林 真砂斗)

T 8-1号土坑 (第329図)

T 8グリッドの北西部に位置し、T 7-9号土坑・T 8-2号土坑を切っていた。直径60cm ほどの不整形円形土坑と考えられ、確認面からの深さは40cm であった。茶褐色土を覆土とする。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。 (倉林 真砂斗)

T 7-9号土坑 (第329図)

T 8グリッド北西部にその大部分があり、一部 T 7グリッドにかかっていた。北側を T 7-7号土坑に、南側を T 8-1号土坑・T 8-2号土坑に切られていた。T 7-7号土坑に類似する大形円形土坑の一部と考えられるが、本来の規模は明確ではない。図 a-b セクションにかろうじてかかっていたため、底部を検出するには至らず、残存部分の確認面からの深さは1 m ほどであった。覆土は二層に大別される。下層はロームを主体とする明黄褐色土、上層は黒褐色土である。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は明確ではないが、推定される規模・形態と覆土からは植栽痕の一部と考えられる。 (倉林 真砂斗)

T 8-2号土坑 (第329図)

T 8グリッドの北西部に位置し、北側で T 7-9号土坑を切り、また T 8-1号土坑に切られていた。S ラインのすぐ東側で確認できた一連の切り合い関係をもつ土坑群の南端にあたる。直径60cm 前後の円形土坑であると考えられ、確認面からの深さは30cm を測った。深さは若干浅いが、規模・形態は T 8-1号土坑に類似していた。黒褐色土を覆土とする。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。 (倉林 真砂斗)

T 8-16号ピット (第329図)

S 8杭の南南東1.0m ほどのところにある不整形円形のピットである。長径0.4m、短径0.2m、深さ0.35m ほどのものであり、埋土は暗褐色土を主体にしたものである。0.5m ほど西に形は異なるが類似の性格をもつのではないかと思われる S 8-5号ピットがある。植栽に関したものである

可能性がある。遺物の出土はない。

(藤本 強)

P 5-1 号土坑 (第330図)

P 5 グリッドの南端やや西寄りに位置する。

文学部発掘区の西北部では、元来ローム地山の上面の標高が高い。従って、近代の攪乱土層を除去した段階でローム漸移層が露出していた。本遺構もその漸移層面で確認された遺構である。

発掘区の正に西北端に位置し、遺構の過半は発掘区外にあるため全体の平面形は不明である。確認面からの深さは約 5 cm を測る。東壁はオーバーハングし巾着状を呈する。埋土はかなり多量の小礫を含む黒褐色土の単純層から成っている。遺物としては数点の瓦片が出土している。遺構の性格は明らかではないが、一種のゴミ穴である可能性があろう。

(中村 慎一)

P 5-2 号ピット (第330図)

P 5 グリッドの南端ほぼ中央に位置する。

近代の攪乱土層を除去した面、即ちローム漸移層面で確認された遺構である。

遺構の南半は近代の土管溝によって切られており、全体の平面形は明らかではないが、長円形を呈するものと推測される。確認面からの深さは約 6 cm と浅い。埋土は、西半部にロームが、それを覆うように東半部には黒褐色土が堆積している。遺物の出土はなかった。遺構の性格は不明である。

(中村 慎一)

P 6-1 号土坑 (第330図)

文学部調査区の北西隅、P 6 グリッドの北東部、Q 6 グリッドに僅かにかかる。

電気の配管など近現代の攪乱を受けており、これを除去する過程でその存在が確認されたが、確認面は灰色碎石砂層の下、ローム漸移層の上面である。

平面形は、残存する長軸約 2.3m、短軸約 1.6m の不整な楕円形もしくは卵形で、比較的なだらかな立ち上がりで中央に向かってやや傾斜する坑底とを持つ。主軸方位は真北に対し東へ 168° 振れる。確認面より坑底までの深さは約 30cm を測る。また坑底面中央南寄りに、残存する長軸約 35cm 短軸約 30cm の楕円形の落ち込みがあり、主軸方位は真北に対し東へ 159° 振れる。坑底面からの深さは約 50cm を測り、ほぼ垂直な壁とほぼ平坦な底面を持つ。覆土は大きく三層に分かれる。すなわち、中央の落ち込みの底面上に入るロームを主体とする層、その上部の黒色土を主体とし、ローム粒子を含む層、最上部の焼土粒子を含む茶褐色土層である。遺物は出土していない。植栽痕かとも思われるが遺構の性格は不明であり、時期も明らかでない。

(小川 望)

P 6-2 号ピット (第330図)

文学部調査区の北西隅、P 6 グリッドの中央東側に位置する。

近現代の層の直下に残存しており、この層を除去する過程で確認された。

平面形は 20cm×15cm の長方形で、主軸方位は真北より東へ 30° 振れる。深さは約 8 cm を測り、ほぼ垂直な壁と平坦な坑底とを持つ。覆土は締まりの悪い褐色土である。遺物は出土していない。その形状からなんらかの柱穴とも思われるが遺構の性格は不明であり、時期も明らかでない。

(小川 望)

P 6-3号遺構 (第330図)

文学部調査区の北西隅，P 6グリッドの中央東側に位置する。

近現代の層の直下に残存しており，この層を除去する過程で確認された。

南側が削平されており形態等明らかでないが，平面形は幅20cm，残存する長さ40cmの楕円もしくは長円形を呈していたものと思われ，主軸方位はほぼ真南北に一致する。深さは約10cmを測り，ほぼ垂直な壁と平坦な坑底とを持つ。

覆土はローム粒子を含む締まりの悪い褐色土である。遺物は出土していない。遺構の性格は不明であり，時期も明らかでない。

(小川 望)

P 6-4号ピット (第330図)

文学部調査区の北西隅，P 6グリッドとO 6グリッドの境界線上に位置する。

近現代の層の直下に残存しており，この層を除去する過程で確認された。

平面形は25cm×20cmの長方形で，主軸方位は真北より東へ85°振れる。深さは約25cmを測り，ほぼ垂直な壁と平坦な坑底とを持つ。覆土は締まりの悪い褐色土である。遺物は出土していない。

P 6-2号ピットと共にその形状からなんらかの柱穴とも思われるが遺構の性格は不明であり，時期も明らかでない。

(小川 望)

P 6-7号溝 (第330図)

P 6グリッドの北半に位置する。

ローム漸移層の上面で確認された遺構である。P 6グリッドの北西隅から西半中央部にかけ約2.6mほどの長さの部分が確認されているが，西端と途中を近代の土管埋設用掘り方によって切られている。

幅60～80cmの溝状の窪みであり，確認面からの深さは10cm余りを測る。埋土は茶褐色ローム質土の単純層から成っている。出土遺物はない。形状としてはいわゆる溝状を呈するが，壁面や底面の形状及び埋土の状態から見て通水の機能を担っていたものとは考えられない。他の機能が推定されるべきであるが，それが何であるかは不明である。

(中村 慎一)

Q 5-2号土坑 (第331図)

Q 5グリッドの南端西寄りに位置する。

二枚の褐色砂質土層の間に淡黒色土がサンドイッチ状に挟まれる三和土層の上面で確認された遺構である。発掘区の北端に位置するため遺構の北半は発掘区外にある。また発掘部分もその上部の大半は近代の遺構によって切られている。また一方，Q 5-3号土坑を切っている。

全体の平面形は不明であるが，隅丸の平行四辺形を呈するものと推測される。南辺長は約1.3mである。残存部の坑辺の方向から推して，東一西，南一北方向を意識して構築されたものと思われる。発掘区北端の土層図から見ると，確認面が遺構の掘り込み面であったことが判る。その面からの深さは2.66mである。坑壁の立ち上がりはほぼ垂直である。坑底には凹凸がある。埋

土は底部から順に、ロームブロックを主体とする黄褐色土、灰褐色粘質土、焼土を主体とする紅褐色土の三層に大別される。そのうち紅褐色土層が大半を占めるが、堆積の厚さは約2.2mに達しており、坑口から20cm程盛り上がり、坑外へあふれている。この土層中には数枚の黒色炭化物層が層状ないしはレンズ状に薄く堆積している。なお、本土坑中に近代の土坑が深く落ち込んでいるが、これは本土坑の埋土が軟弱であったために、近代土坑の埋土が自重で沈み込んだものと思われる。遺物としては陶磁器片と瓦片がそれぞれ数点ずつ出土している。

本土坑は本来は恐らく貯蔵用に作られたものであろうが、火災後の後片付けに際して、焼土をもって埋め戻されたものであろう。(中村 慎一)

Q 5-3号土坑 (第331図)

Q 5, Q 6 両グリッドの境界線上に位置する。

黒色土と褐色ローム質土の互層からなる三和土層の上面で確認された遺構である。黄褐色砂層によりバックされている。Q 5-2号土坑, Q 6-13, Q 6-17, Q 6-18, Q 6-34号ピットによって切られている。

遺構の中半部と南端を、東西に走る近代の土管掘り方によって切られているが、全体としては径2 m余りの不整形円形を呈するものと推測される。確認面からの深さは約40cmを測る。坑底、坑壁の境界は不明瞭で、いわゆる播鉢状の形状を示す。埋土は、底部近くにロームブロックが、その上に茶褐色土が堆積している。いずれも締まりはよい。土層の堆積状態から見て、人為的に埋められたものと思われる。出土遺物はない。遺構の性格は不明である。(中村 慎一)

Q 6-4号土坑 (第331図)

文学部調査区の北西隅, Q 6 グリッド中央やや北西寄りに位置する。

近現代の層の直下、灰色碎石砂層を切って構築されており、北半分を電気の配管により失っている。この配管を除去する過程で確認された。

平面形は東西約90cm, 残存する東西約20cmの南西コーナーを欠く不整形隅丸方形もしくは長方形で、主軸方位は真北より東へ89°振れる。深さは約50cmを測り、ほぼ垂直な壁と平坦な坑底とを持ち、坑底東側に、比高差25cmを測るさらなる落ち込みが認められる。この落ち込みは、緩やかに傾斜する壁とやや丸みを持った坑底とを持ち、播鉢状を呈する。覆土は落ち込み部分にロームブロックを多く含む明褐色土、その上層に灰白色土が堆積する。遺物は出土していない。遺構の性格は不明であり、時期も明らかでない。(小川 望)

P 6-5号土坑 (第332図)

文学部調査区の北西隅, P 6 グリッドの中央南側に位置する。

南半を暖房用のピットにより破壊されており、その全体の形態等は明らかにし得なかった。近現代の堆積層を除去した段階で、ロームへの漸移層上面を確認面として検出された。

平面形は、東西約1 m, 残存する南北約0.6mを測り、北辺東側が一段北へ張りだした長方形を呈するものと思われる。主軸方位は真北にほぼ一致する。壁は東辺で強くオーバーハングする他

はほぼ垂直である。壁面はきわめて平滑で、入念に調整されている。坑底面は西側が一段高く、東側坑底面との比高差約60cmを測る。この坑底面に認められる段差は、平面北辺に認められる張り出し部と一致し、ちょうど2基の遺構が切り合っているかのような印象を与えるが、土層セクションの観察からは、これが1基であると考えられ、拡張などが想定される。深さは、確認面より西側坑底面まで約110cm、東側坑底面まで約170cmを測る。

覆土は大きく四層に分かれる。すなわち、下段の底面上に薄く堆積するローム粒子を主体とする層、その上部の茶褐色土を主体とし遺物を多く含む層、その上部の焼土粒子を含む暗褐色土を主体とし、上半に瓦を多く含む層、さらに最上部のローム粒子、ロームブロックを主体とする層である。

遺物は、碗、徳利等の陶磁器の他瓦片が出土している。

当遺構は、長方形の平面形を持つ地下式坑として構築され、その後西側もしくは東側に拡張されて使用され、最終的にはゴミ穴としてゴミがおそらく二度以上にわたって投棄されたものと考えられる。

(小川 望)

Q 6-2号土坑 (第333図)

Q 6グリッドの西端北寄りに位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。Q 6-6号ピットを切っている。

やや胴部のくびれた長円形の平面形を有している。長径は60cm弱である。確認面からの深さは39cm余りを測る。坑底面、坑壁面ともに凹凸が多く、掘り方は雑である。埋土は黒褐色土の単純層から成っている。遺物の出土はない。遺構の性格は明らかではない。

(中村 慎一)

Q 6-6号ピット (第333図)

P 6, Q 6両グリッドの境界線上に位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。Q 6-2号ピットによって切られている。

平面形は胴張りの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは約31cmを測る。坑底面、坑壁面には若干の凹凸がある。埋土は暗褐色土の単純層から成っている。出土遺物はない。遺構の性格は明らかではない。

(中村 慎一)

Q 6-7号ピット (第333図)

Q 6グリッドの南端やや西寄りに位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。

平面形は隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは34cm足らずである。坑底は平坦でしっかりしている。坑壁の立ち上がりはかなり急である。埋土は、下半部には赤褐色の焼土が、上半部には茶褐色土が堆積している。焼土中には若干の炭化物粒子が含まれている。出土遺物としては陶磁器片、瓦片、鉄釘がある。本遺構本来の機能は必ずしも明らかではないが、最終的には火災の後片付けに際してゴミ穴として利用されたものであらうと思われる。

(中村 慎一)

Q 6-9号ピット (第333図)

文学部調査区の北西隅、Q 6 グリッドの中央西側に位置する。

遺構は近現代の層の直下に残存しており、この層を除去する過程で確認された。

平面形は径50cm 弱のやや不整な円に25cm×18cmの長方形が付属しており、あるいは2つの遺構とも考えられるが覆土からはこれを分離し得なかった。円形の部分は強く立ち上がる壁とほぼ平坦な坑底とを持ち、長方形の部分はほぼ垂直に立ち上がる壁と円形の部分に向かって傾斜する坑底とを持つ。確認面よりの深さは、円形の部分が約50.5cm、長方形の部分が約23cmを測る。長方形の部分の主軸方位は、真北より東へ118°振れる。覆土はローム粒子を含む締まりの悪い褐色土である。遺物は瓦片、鉄釘が出土している。遺構の性格は不明であるが、なんらかの円形の遺構に、副木的な施設が設けられたものとも考えられる。 (小川 望)

Q 6-10号ピット (第333図)

文学部調査区の北西隅、Q 6 グリッドの中央西側に位置する。

遺構は近現代の層の直下に残存しており、この層を除去する過程で確認された。

平面形は径20cm 弱の不整な円で、緩やかな立ち上がりの壁とやや丸みのある坑底を持った鉢状を呈する。覆土はローム粒子を多く含むやや締まりの悪い暗褐色土である。遺物は出土していない。遺構の性格は不明であり、時期も明らかでない。 (小川 望)

Q 6-12号ピット (第333図)

文学部調査区の北西隅、Q 6 グリッドの中央西側に位置する。

遺構は近現代の層の直下に残存しており、この層を除去する過程で確認された。

平面形は径20cm 強の不整な円で、緩やかな立ち上がりの壁とやや丸みのある坑底を持った鉢状を呈する。

覆土はローム粒子を多く含むやや締まりの悪い暗褐色土である。遺物は出土していない。遺構の性格は不明であり、時期も明らかでない。 (小川 望)

Q 6-14号ピット (第333図)

文学部調査区の北西隅、Q 6 グリッドの中央西側に位置する。

六基の遺構が重複しており、当Q 6-14号ピットはQ 6-5号ピット、Q 6-16号ピットを切っている。これらの遺構は近現代の層の直下に残存しており、この層を除去する過程で確認された。

平面形は一辺約20cmの隅丸正方形で、緩やかに立ち上がる壁と丸みを持った坑底とを持つ。覆土は締まりの悪い褐色土である。遺物は出土していない。植栽痕かとも思われるが遺構の性格は不明であり、時期も明らかでない。 (小川 望)

Q 6-15号ピット (第333図)

文学部調査区の北西隅、Q 6 グリッドの中央西側に位置する。

六基の遺構が重複しており、当Q 6-15号ピットはQ 6-5号ピット、Q 6-16号ピットを切っている。これらの遺構は近現代の層の直下に残存しており、この層を除去する過程で確認さ

れた。

平面形は17cm×13cmの隅丸長方形で、主軸方位は、真北より東へ122°振れる。強く立ち上がる壁とほぼ平坦な坑底とを持つ。覆土は締まりの悪い褐色土である。遺物は出土していない。なんらかの柱穴かとも思われるが遺構の性格は不明であり、時期も明らかでない。(小川 望)

Q 6-16号ピット (第333図)

文学部調査区の北西隅、Q 6グリッドの中央西側に位置する。

六基の遺構が重複しており、当Q 6-16号ピットはQ 6-5号ピットを切り、Q 6-14・15号ピットに切られている。これらの遺構は近現代の層の直下に残存しており、この層を除去する過程で確認された。

平面形は径約20cmの不整な円で、緩やかな立ち上がりの壁とやや丸みのある坑底を持った浅い皿状を呈する。覆土はローム粒子を多く含むやや締まりの悪い暗褐色土である。遺物は出土していない。遺構の性格は不明であり、時期も明らかでない。(小川 望)

Q 6-5号ピット (第333図)

文学部調査区の北西隅、Q 6グリッドの中央西側に位置する。

六基の遺構が重複しており、当Q 6-5号ピットはQ 6-8号ピット、Q 6-11号ピットを切り、Q 6-14・15・16号ピットに切られている。これらの遺構は近現代の層の直下に残存しており、この層を除去する過程で確認された。

平面形は径約50cmの円形で、緩やかに立ち上がる壁を持つ楕円状を呈する。覆土はローム粒子を若干含むやや締まりの悪い明褐色土である。遺物は楕鉢等の陶磁器の他、瓦片、鉄釘が出土している。植栽痕かとも思われるが遺構の性格は不明であり、時期も明らかでない。

(小川 望)

Q 6-8号ピット (第333図)

文学部調査区の北西隅、Q 6グリッドの中央西寄りに位置する。

六基の遺構が重複しており、当Q 6-8号ピットはQ 6-5号ピットに切られている。これらの遺構は近現代の層の直下に残存しており、この層を除去する過程で確認された。

平面形は東西約70cm、南北約50cmの楕円形を呈すると思われ、主軸方位は真北に対し東へ86°振れる。壁は強く立ち上がり、坑底はやや丸みを持っている。覆土はローム粒子を僅かに含むやや締まりの悪い暗褐色土である。遺物は出土していない。植栽痕かとも思われるが遺構の性格は不明であり、時期も明らかでない。(小川 望)

Q 6-11号ピット (第333図)

文学部調査区の北西隅、Q 6グリッドの中央西側に位置する。

六基の遺構が重複しており、当Q 6-11号ピットはQ 6-5号ピットに切られている。これらの遺構は近現代の層の直下に残存しており、この層を除去する過程で確認された。

平面形は東西約30cm、南北約20cmの楕円形を呈すると思われ、主軸方位は真北に対し東へ110°

振れる。緩やかに立ち上がる壁がそのまま坑底に至る浅い皿状を呈する。覆土はローム粒子を僅かに含むやや締まりの悪い暗褐色土である。遺物は出土していない。遺構の性格は不明であり、時期も明らかでない。(小川 望)

Q 6-17号ピット (第333図)

Q 6グリッド北端東寄りに位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。Q 5-3号土坑およびQ 6-13号ピットを切っている。

平面形は隅丸の不整形を呈する。確認面からの深さは約43cmを測る。坑底は平坦でしっかりしている。坑壁の立ち上がりはかなり急である。埋土は暗褐色土の単純層から成っている。分層はできなかったが、底部近くにはやや多くのローム粒子が含まれていた。遺物としては数点の瓦片が出土している。遺構の性格は必ずしも明らかではないが、最終的にはゴミ穴として利用されたものである可能性が高い。(中村 慎一)

Q 6-13号ピット (第333図)

Q 6グリッドの北端東寄りに位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。Q 5-3号土坑を切っており、一方、Q 6-17号ピットによって切られている。

全体の平面形は隅丸の長方形を呈するものと推測される。確認面からの深さは18cm 不足である。坑底面、坑壁面にはやや凹凸がある。埋土は若干のローム粒を含む褐色土の単純層から成っている。遺物の出土はない。遺構の性格は不明である。(中村 慎一)

Q 6-18号ピット (第333図)

Q 6グリッド北端中央に位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。Q 5-3号土坑の東南部に入れ子状に位置している。埋土の違いからQ 5-3号土坑よりも新しい別の遺構であることが明らかである。

平面形は胴張りの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは約44cmを測る。坑底は土坑の北端に片寄っている。

埋土は、若干の小礫を含む暗褐色土が深さにして八分目ほどまで堆積しており、それより上部にはロームを主体とする褐色土が堆積している。出土遺物はない。遺構の性格は不明である。

(中村 慎一)

Q 6-19号ピット (第333図)

Q 6グリッドの中央やや北東寄りに位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。

平面は概略菱形を呈するが、坑辺には若干の出入がある。確認面からの深さは約33cmを測る。坑底は平坦であり、坑壁の立ち上がりは急である。埋土は暗褐色土の単純層から成っている。出土遺物はない。遺構の性格は不明である。(中村 慎一)

Q 6-20号ピット (第333図)

Q 6グリッドのほぼ中央に位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。

平面形は不整形を呈する。確認面からの深さは10cm余りである。坑底面、坑壁面ともに凹凸があり、掘り方は雑である。埋土は暗褐色土の単純層から成っている。ただし坑口付近ではやや砂粒が多く含まれている。出土遺物はない。遺構の性格は不明である。 (中村 慎一)

Q 6-21号ピット (第333図)

Q 6グリッドのほぼ中央に位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。

平面形は略長方形を呈する。確認面からの深さは31cm余りを測る。坑底面、坑壁面ともに平滑で固く締っている。坑壁の立ち上がりはほぼ垂直に近い。埋土は中半部まで赤褐色焼土が、その上部に焼土粒を含む灰褐色土が堆積している。遺物の出土はない。本遺構当初の機能は必ずしも明らかではないが、最終的には焼土の捨て穴として利用されたものであろう。 (中村 慎一)

Q 6-22号ピット (第333図)

Q 6グリッドの中央やや南寄りに位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。

平面形は略三角形を呈するが、坑辺には若干の出入がある。確認面からの深さは21cm余りである。坑底面、坑壁面ともに凹凸がある。埋土は焼土を主体とする暗紅色土の単純層からなっている。ただし坑口部近くではやや黒色土の割合が高い。出土遺物はない。本遺構当初の機能は明らかではないが、最終的には焼土の捨て穴として利用されたものであろう。 (中村 慎一)

Q 6-23号ピット (第333図)

Q 6グリッドの中央南寄りに位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。

平面形は略正三角形を呈する。辺長は約12cmである。確認面からの深さは8cm弱と浅い。坑底は西南角に片寄っている。坑底、坑壁の境界および坑壁同士の境界は直線的で明瞭である。埋土はサラサラした感じの黒褐色土の単純層から成っている。遺物は出土していない。遺構の性格は不明であるが、杭穴である可能性が高い。 (中村 慎一)

Q 6-24号ピット (第333図)

Q 6グリッドの南側中央に位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。

平面形は不整形を呈するが、坑辺には若干の出入りがある。確認面からの深さは16cm弱である。坑底面、坑壁面ともに凹凸がある。埋土は、底部近くにロームを主体とする褐色土が、その上には暗褐色土が堆積している。遺物の出土はない。遺構の性格は明らかではない。

(中村 慎一)

Q 6-34号ピット (第333図)

Q 6 グリッドの北西隅近くに位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。

平面形は隅丸長方形を呈する。長辺長は約34cm、短辺長は約24cmを測る。確認面からの深さは34cm 足らずである。坑底のレベルは南側に向かってやや低くなっている。坑底面、坑壁面ともに平滑で固く締っている。坑壁の立ち上がりはほぼ垂直に近い。埋土はロームを主体とする褐色土の単純層から成っている。土質は緻密で堅硬である。出土遺物はない。遺構の性格は明らかではない。(中村 慎一)

Q 6-37号ピット (第333図)

Q 6 グリッドの西端近く、やや北寄りに位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。

平面形は概略卵形を呈する。長径は約48cm、短径は約40cmである。確認面からの深さは50cm 余りを測る。坑底面、坑壁面ともに固くしっかりしており、両者の境界は明瞭である。埋土は、底部近くにロームを主体とする褐色土が堆積し、その上を暗褐色土が覆っている。遺物の出土はない。遺構の性格は不明である。(中村 慎一)

R 6-1号土坑 (第334図)

文学部調査区中央西より、R 6 グリッドのほぼ中央に位置する。

北半を電気の配管によって失っており、これを除去する際に検出された。ソフトローム上面を確認面とする。

平面形は東西50cm、残存する南北90cmの楕円もしくは隅丸長方形を呈すると思われ、主軸方位は真北に対し東へ174°振れる。ほぼ垂直な壁と平坦な坑底とを持ち、確認面よりの深さは約60cmを測る。覆土は灰褐色砂質土である。遺物は出土していない。

すぐ南側に隅を落とし両面が平坦に加工された一辺約50cm厚さ約20cmの石と、径50cm余りの平たい自然石とが検出されているが、当遺構との関係は明らかでなく、また当遺構の性格も明らかでない。時期も不明である。(小川 望)

S 6-1号土坑 (第334図)

S 6 グリッドの南端やや東寄りに位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。S 6-2号土坑の北東角を切っている。

平面形はほぼ隅丸長方形を呈するが西側の短辺はやや短い。長軸長は約114cm、短軸長は55cm前後である。確認面からの深さは約33cmを測る。坑底面は平坦で固くしっかりしている。坑壁面も平滑である。埋土はロームを主体とし、そこに黒色土粒と小礫が混じる褐色土の単純層から成っている。出土遺物はない。本遺構は何らかの建造物の基礎に関係する遺構かとも思われるが、これに対応するであろう遺構が他に検出されてはいない。(中村 慎一)

S 6-2号土坑 (第334図)

S 6 グリッドの南端中央に位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。S 6-1 号土坑によって北東角を切られている。

平面形は隅丸長方形を呈する。坑底は東半部分が深く窪んでおり最深部を形成する。西半部は東へ向かって傾斜している。確認面からの深さは17cmほどである。埋土はローム粒を含む暗褐色土の単純層から成っている。ボソボソとしており締りは悪い。遺物の出土はない。遺構の性格は明らかではない。

(中村 慎一)

S 6-3 号土坑 (第334図)

文学部調査区中央西より、S 6 グリッドのほぼ中央に位置する。

ソフトローム上面にまで達する近代以降の層を除去する過程で確認された。

東辺および南辺を攪乱により失っているが、平面形は東西120cm、南北90cmの楕円を呈すると思われ、主軸方位は真北に対し東へ78°振れる。中央やや東よりに長軸方向55cm、短軸方向50cmの石が検出された。上面は平坦に加工され、下部は自然のままであり、礫が根石としていけこまれていた。緩やかに立ち上がる壁と凹凸の激しい坑底とを持ち、確認面よりの深さは約60cmを測る。覆土は上層が締まりの悪いローム粒子、下層が締まりの良い黒色土である。遺物は出土していない。礎石を埋設した土坑と考えられるが、これに対応すると思われる遺構はない。構築の時期は明らかでない。

(小川 望)

R 7-10号土坑 (第335図)

R 7 グリッド中央北東寄りに位置する。

その上面が凹凸になっているところの褐色土盛土層を剥ぎ取った段階で露出した面、すなわち青灰色碎石砂層上面で確認された遺構である。

平面形はほぼ正確に正円形を呈する。直径は約130cmである。確認面からの深さはおよそ20cmを測る。坑底面、坑壁面ともに平滑で固い。坑壁の立ち上がりはほぼ垂直である。埋土は、坑口近くまで褐色土が堆積しており、その上を黒色土が薄く覆っている。遺物は出土していない。

本土坑は、S 7-14号土坑とともに、平面形がほぼ正円を呈すること、直径が130~140cmであることにおいて、井戸の性格に通じるところがあり注目される。なお、本土坑とS 7-14号土坑とが対を成して何らかの機能を担っていたものであるか否かは判断し得ない。

(中村 慎一)

S 7-14号土坑 (第335図)

ポイント R 8 の北側に位置する。

青灰色砂層面で確認された遺構である。

平面形はほぼ正円形を呈する。直径は約140cmである。確認面からの深さはおよそ20cmを測る。坑底面、坑壁面ともに平滑で固い。坑壁の立ち上がりはほぼ垂直である。埋土は褐色土の単純層から成っている。遺物としては瓦片が一片出土している。

本遺構は形状がR 7-10号土坑に相似しており、埋土の性質も近い。R 7-10号土坑同様、遺構の性格は明らかではないが、単なるゴミ穴や植栽痕ではなからう。

(中村 慎一)

S 7-12号土坑 (第336図)

文学部調査区中央やや西寄り、S 7グリッドとS 8グリッドの境界上に位置する。

ソフトローム上面まで削平する過程で確認された。

平面形は南北300cm、東西270cmの楕円を呈し、主軸方位は真北に対し東へ25°振れる。坑底中央やや北寄りに、径約100cm、幅10cmの溝状の落ち込みが認められた。落ち込みの内側は坑底面よりやや低く、比高差約10cmを測る。緩やかに立ち上る壁とやや中央の盛り上がる坑底とを持ち、壁面および坑底面は凹凸が激しく、調整はなされていない。確認面よりの深さは約75cmを測る。

覆土はローム粒子を多く含む締まりのやや悪い明褐色土が一様に堆積する。

遺物は徳利・鉢等の陶磁器の他、瓦片が出土している。

いわゆる植栽痕と考えられるが、これを保証する材料はない。遺物より知られる構築の時期は、あまり明瞭ではないが、18世紀後半頃と思われる。

(小川 望)

S 7-13号土坑 (第336図)

文学部調査区中央西より、R 7グリッドおよびS 7グリッドの境界上に位置する。

ソフトローム上面まで削平する過程で確認された。

北半および東半の大部分が暖房用のビットによって失われているが、平面形は径約170cm前後の円を呈すると思われる。強く立ち上る壁とほぼ平坦な坑底とを持ち、確認面よりの深さは約55cmを測る。覆土はローム粒子を多く含む締まりのやや悪い明褐色土が一様に堆積する。遺物は出土していない。S 7-12、16号土坑と同様植栽痕と考えられ、覆土の状況などから、同時期に植樹帯を形成していたとも考えられる。

(小川 望)

S 7-16号土坑 (第336図)

文学部調査区中央やや西寄り、R 8グリッド北寄りに位置する。

ソフトローム上面まで削平する過程で確認された。

北辺の一部が暖房用のビットによって失われ、東半が近代以降の攪乱により失われているが、平面形は径約170cm前後の円を呈すると思われる。緩やかに立ち上る壁と丸みを帯びた坑底とを持ち、確認面よりの深さは約60cmを測る。覆土はローム粒子を多く含む締まりのやや悪い明褐色土が一様に堆積する。遺物は出土していない。S 7-12、13号土坑と同様植栽痕と考えられ、覆土の状況などから、同時期に植樹帯を形成していたとも考えられる。

(小川 望)

P 7-3号ピット (第337図)

文学部調査区の北西部、P 7グリッドの中央南側に位置する。

ソフトローム上面まで削平する過程で確認された。

平面形は東西45cm、南北55cmのやや隅丸のひし形を呈し、主軸方位は真北に対し東へ168°振れる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は平坦である。確認面よりの深さは約45cmを測る。覆土はローム粒子を少々含む暗褐色土である。遺物は陶磁器小片が出土している。柱穴に類する遺構と

も考えられるが、その性格は明らかでない。

(小川 望)

P 7-5号ピット (第337図)

文学部調査区の北西部、P 7グリッドの南東側に位置する。

Q 7-14号土坑と平面的に重複するが、この遺構を切って構築されている。ソフトローム上面まで削平する過程で確認された。

平面形は径約50cmの不整な円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がり、やや丸みを持った坑底に至る播鉢状をなす。確認面よりの深さは約50cmを測る。覆土はローム粒子を多く含む明褐色土よりなる。遺物は出土していない。植栽痕に類する遺構とも考えられるが、遺構の性格、時期ともに明らかでない。

(小川 望)

P 7-6号土坑 (第337図)

P 7グリッドの中央やや北西寄りに位置する。

ローム漸移層上面に部分的に広がる混ローム褐色土層(若干の焼土粒を含む)上面まで削平する過程で確認された遺構である。Q 7-11号土坑を切っている。

近代遺構によってその北半を破壊されており、全体形は不明であるが、長円形を呈するものと推測される。坑壁面には出入りが多く、掘り方は雑である。確認面からの深さは55cm強を測る。埋土は底部から順に、ロームブロック、灰褐色土、褐色ローム質土、黒褐色土が堆積している。そのうち後二者は、あたかも本土坑をバックするかのようによく坑口部を覆っている。遺物としては数点の瓦片が出土している。遺構の性格は必ずしも明確ではないが、最終的にはゴミ穴として利用された可能性が高い。

(中村 慎一)

Q 7-11号土坑 (第337図)

文学部調査区の北西部、P 7グリッドの東半に大半があり、Q 7グリッドに多少かかる。

調査区北よりを東西に走る暖房用のピットによって北半を失っている。また、P 7-2号土坑、Q 7-13号遺構、14号土坑を切り、P 7-6号土坑に切られている。ソフトローム上面まで削平する過程で確認された。

平面形は正確には知り得ないが、残存部は東西約3.4m、南北約1.9mにおよび、不整な楕円形を呈するものとみられる。壁はなだらかに立ち上がり、大きく起伏する坑底に至る。確認面よりの深さは約65cmを測る。覆土は坑底面上に黄褐色土の薄層が入り、その上部東寄りに焼土を多く含む赤褐色土が、西側の大半に黒褐色土が堆積する。遺物は出土していない。植栽痕に類する遺構とも考えられるが、遺構の性格時期ともに明らかでない。

(小川 望)

Q 7-13号遺構 (第337図)

文学部調査区の北西部、P 7グリッドとQ 7グリッドの境界に位置する。

P 7-2号土坑、Q 7-6、14号土坑を切り、Q 7-11号土坑に切られる。これらの遺構はいずれもソフトローム上面まで削平する過程で確認された。

平面形は長軸約335cm、短軸約95cmの不整な楕円形を呈し、半ばのくびれた、強く立ち上がる

壁と僅かに起伏する坑底とを持つ。確認面よりの深さは約50cmを測る。覆土は上半にロームが主体で黒色土の混じる黄褐色土層が入り、その下部に焼土が僅かに含まれる暗黄褐色土が堆積する。遺物は出土していない。遺構の時期性格ともに明らかでない。(小川 望)

P 7-7号ピット (第337図)

P 7グリッドの中央やや西寄りに位置する。

ローム漸移層上に部分的に広がる混ローム褐色土層(若干の焼土粒を含む)面まで削平する過程で確認された遺構である。

平面形は隅丸長方形を呈する。長軸長約18cm, 短軸長約16cmを測る。確認面からの深さは26cm 足らずである。坑底面, 坑壁面ともに固くしっかりしている。坑壁の立ち上がりはほぼ垂直に近い。埋土はパサパサした感じの灰白色土の単純層から成っている。遺物としては数点の瓦片とシジミの貝殻が少量出土している。小型のゴミ穴としての性格が考えられる。(中村 慎一)

P 7-8号ピット (第337図)

P 7グリッドの南西隅近くに位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。近代の攪乱によって北端部分を破壊されている。

平面形は長円形ないしは卵形を呈するものと思われる。確認面からの深さは約21cmである。坑底は土坑の北側に片寄っており、坑壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は茶褐色土の単純層から成っており、若干の小礫を含んでいる。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。

(中村 慎一)

Q 7-16号ピット (第337図)

文学部調査区の北西部, Q 7グリッドの中央西側に位置する。

ソフトローム上面まで削平する過程で確認された。

平面形は南北約30cm, 東西約25cmの台形に近い隅丸の長方形で、主軸方位は真北より東へ170°振れる。壁は強く立ち上がり、やや丸みを持った坑底に至る。確認面よりの深さは26cmを測る。覆土はローム粒子を多く含む明褐色土よりなる。遺物は出土していない。遺構の性格時期ともに明らかでない。(小川 望)

P 7-2号土坑 (第338図)

文学部調査区の北西部, P 7グリッドの中央南東側に位置する。

平面的にQ 7-11号土坑およびQ 7-13号遺構と重複するが、その新旧関係は古いほうからQ 7-13号遺構, Q 7-2号土坑, Q 7-11号土坑の順である。これらはいずれもソフトローム上面まで削平する過程で確認された。

平面形は東西102cm, 南北78cmのやや隅丸の長方形を呈し、主軸方位は真北に対し東へ95°振れる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上半部で僅かに外反する。坑底は中央が凹み、やや丸底気味であり、緩やかに壁に移行する。壁面および坑底面は平滑であり、丁寧に調整が施されている。確認面よりの深さは、230cmを測る。覆土は大きく四層に分かれる。すなわち坑底より約三分の一

の深さまで堆積するロームブロック、ローム粒子を多く含む層、そのうえに約四分の三まで堆積し、遺物を多く含む暗褐色の層、そのうえに約六分の五まで堆積する明褐色の層、最上部に堆積する焼土を多く含む暗褐色の層である。

遺物は徳利・香炉等の陶磁器の他、瓦片が出土している。

当遺構はロームの天井を持たない大形の竪穴状の土坑であり、廃絶後に何度にもわたってゴミなどが投げ込まれたものと考えられる。 (小川 望)

Q 7-14号土坑 (第338図)

文学部調査区の北西部、P 8グリッド杭上に位置する。

P 7-5号ピット、Q 7-11号土坑、13号遺構にそれぞれ切られている。これらの遺構はソフトローム上面まで削平する過程で確認された。

平面形は南北約135cm、東西約95cmの隅丸の長方形で、主軸方位は真北より東へ151°振れる。壁はほぼ垂直で、やや凹凸を持った坑底に至る。確認面よりの深さは北側で約55cm、南側で約70cmを測る。覆土の大半は砂からなるが、上半はやや灰色、下半は暗褐色を帯びており、坑底面上に暗褐色土の薄層が入る。

遺物は皿等の陶磁器の他、瓦片が出土している。

遺構の性格は明らかでないが、砂を主体とする覆土を持つ点は周辺にみられない特徴であり、この遺構のなんらかの機能を示唆するものとも考えられる。遺構の時期に関しては、出土遺物が18世紀前半頃に位置付けられるといえるのみである。 (小川 望)

Q 8-10号土坑 (第339図)

Q 8グリッドの西半に位置する。

Q 8-11号井戸の外側をとり囲むように掘り込まれた遺構であり、ローム漸移層上面まで削平することで確認された。Q 8-13号土坑、Q 8-14号土坑、Q 8-21号ピットを切っている。

平面形はやや不整な小判形を呈する。長軸方向はほぼ南北を指している。確認面からの深さは約70cmを測る。坑底は平坦で、固くしっかりとしている。坑壁の立ち上がりは垂直に近い。坑壁面には若干の出入りがある。埋土は底から3分の1程までは灰白色粘土ブロックからなる固く締った土層が、その上にはやや軟弱なローム質褐色土層が堆積していた。遺物としては瓦片、陶磁器片が出土しているが、その数量はそれほど多くはない。

平面的位置および土層断面の観察から推して、本遺構はQ 8-11号井戸の外枠掘方と考えられる。その内部には、木製の井桁が組まれていたものと推定されるが、その直接の痕跡を認めることはできなかった。 (中村 慎一)

Q 8-11号井戸 (第339図)

Q 8グリッド西側中央に位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。Q 8-10号土坑のほぼ中央に位置する。

平面形はほぼ正円である。開口部はややラップ状に広がっているが、確認面下70cm以下では壁

は垂直で、直径は125cm弱である。発掘の時点では、本遺構の東南半を覆うように近代のレンガ積み基台がまだ残っており、壁の崩落の危険もあることから、確認面から140cmほど掘り下げたのみで完掘はできなかった。従って深さは不明である。また同じ理由から、遺構の正中線上に土層断面図のラインを設定することもできなかった。埋土は、確認面から下方へ向かって順に、ローム（5cmほどの厚さでレンズ状に堆積）、黒褐色ローム質土（25cm余りの厚さでレンズ状に堆積）、黒褐色土（確認面下60cmあたりまで）、灰色粘土となっている。なお、壁面に接して4～5cmの厚さで、ボソボソとして極めて締まりの悪い黒褐色土が同じ円状に堆積していたが、これは井戸の木枠の痕跡を示すものと考えられる。遺物は暗褐色土層、灰褐色土層中に特に多い。その種類は多様で、瓦片、陶磁器片、銅釘などがある。暗褐色土層中にはとりわけ瓦片が多く、火熱を受けたもののがかなりの割合を占める。一方、灰褐色土層中では陶磁器片の割合が高くなるという傾向が見てとれる。

本遺構はその形態からして井戸であることはほぼ間違いない。井戸としての使用が途絶した後に人為的に埋められたものである。 (中村 慎一)

Q 8—14号土坑（第339図）

Q 8グリッド西側中央やや南寄りに位置する。

Q 8—13号土坑の底面で確認された遺構である。Q 8—10号土坑によって切られており、本来の掘り込み面は不明である。一方、Q 8—13号土坑を切っている。

平面形は略長方形を呈する。残存部分の深さは38cmほどである。坑底面、坑壁面ともに平滑で固い。埋土は黄褐色砂を主体とする砂質土で、部分的には灰白色砂が主体となっている。遺物は磁器片が2点出土している。遺構の性格は不明である。 (中村 慎一)

Q 8—13号土坑（第339図）

Q 8グリッド南西隅近くに位置する。

ローム漸移層面で確認された遺構である。Q 8—14号土坑に切られ、さらにQ 8—10号土坑によって切られている。

平面形はほぼ円形を呈するものと推測される。確認面からの深さは約85cmである。坑底面、坑壁面ともに平滑で、しっかりと掘られている。埋土はボソボソした感じの黒褐色土の単純層から成っている。ただし底部近くではややローム粒の割合が高い。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。Q 8—10号土坑よりも前に掘られていた遺構であり、井戸と有機的関係を有するものではないように思われる。 (中村 慎一)

Q 8—21号ピット（第339図）

調査区西縁Q 8—20号ピットに隣接する。ローム漸移層面まで削平する過程で検出。東側はQ 8—10号土坑に切られ、西端はQ 8—20号ピットを切っている。

平面形は東西に長い楕円形を呈し、推定0.7×0.55m、深さは確認面より0.47m、底面はほぼ平坦であり、壁面はなだらか。覆土は粘性を帯びた灰黒色土である。出土遺物なし。遺構の性格・

時期共に不明であるが、あるいは植栽痕か。

(小俣 悟)

Q 8-20号ピット (第339図)

調査区西縁 Q 8 区西辺付近に位置し、ローム漸移層面まで削平する過程で検出。Q 8-21号ピットに切られている。

直径約0.4mの不整円形を呈し、深さは確認面より0.33m。播鉢状で壁面はなだらか。覆土は粘性を帯びた灰黒色土である。出土遺物なし。遺構の性格・時期共に不明であるが、あるいは植栽痕か。

(小俣 悟)

Q 7-7号土坑 (第340図)

Q 6-1号組石遺構の石を除去し、底面を精査した結果確認できた一辺60~70cmの方形を呈する土坑で、覆土はローム粒子・砂利を含む暗茶褐色土でかたくしまっていた。Q 7-6号土坑の中に位置し、同土坑を切って構築されている。2つの偏平な石が、平らな面を上に向けて底部に密着して検出され、Q 7-8号土坑の大石を除去した状態に類似していた。本遺構と Q 7-8号土坑の大石の中心間の長さは約1.8m(一間)あり、形態の類似や配置から建造物の基礎として、Q 7-8号土坑及び Q 8-15号土坑と一連のものと考えられる。出土遺物は認められなかった。

(倉林 真砂斗)

Q 7-8号土坑 (第340図)

Q 6-1号組石遺構のコーナー部分の石が、本遺構に伴う大石の上面に直にのっていたため、Q 7-7号土坑と同様、Q 6-1号組石遺構の周辺を精査して確認することができた。南北1m、東西0.8mの楕円形状の土坑である。確認面からの深さは東で40cm、西で30cmを測り、大石の上面と確認面のレベルはほぼ同じであった。Q 6-1号組石遺構による攪乱のためプランでは明確に確認できなかったが、土層断面の観察から Q 7-9号遺構を切っていることが分かった。北によって台形状の大石が据えられていた。この大石は東側では底部に直接のっていたが、西側では一辺10cm前後の偏平な石が根石として用いられていた。根石が含まれる大石の下の土層は砂利を含むロームブロックで、大石と壁との間には小さい瓦片を多量に含む灰色土層が充填されていた。出土遺物は細かく破碎された瓦片だけであった。

本遺構の大石の中心と、Q 7-7号土坑の中心及び Q 8-15号土坑の大石の上面で1.8m(一間)の長さを測ることができ、建造物の基礎として相互に関連をもつと考えられる。

(倉林 真砂斗)

Q 8-15号土坑 (第340図)

本遺構に伴う大石は、Q 7-6号土坑に充填されていた砂利層からわずかに上面を覗かせていたため、周辺を精査したところ砂利の比較的少ない部分が認められた。それでも全体のプランを明確に確認することができなかつたため、砂利を完全に除去してから精査し直し、一辺70~80cmの方形のプランを確認することができた。ただし西辺上場は扇状に削り取られている。東側で Q 7-9号遺構を切っていた。深さは30cmで、Q 7-8号土坑と同様大石の上面と確認面のレベル

はほぼ一致していたが、本遺構の大石は南によって据えられ、根石を伴わないで底部に直接のついていた。覆土は上部に砂利を含む堅くしまった暗茶褐色土で、出土遺物は認められなかった。

(倉林 真砂斗)

Q 7-9号遺構 (第340図)

Q 7グリッドからQ 8グリッドにかけて確認できた、全長2.4m、最大幅0.8mの細長い長方形を呈する土坑で、西に振れた南北方向に主軸をもっていた。プラン確認時はQ 7-6号土坑との区別ができなかったが、覆土が砂利をあまり含まない暗灰色土であったこと、また完掘後東辺が東へ10cmほど突出したことから別遺構として把握した。西側をQ 7-8号土坑・Q 8-15号土坑に切られていた。南に片寄って幅20から30cmのブリッジ状の掘り残しが認められた。このような形態、本遺構の全長とQ 7-8号土坑の北辺からQ 8-15号土坑の南辺までの長さがほぼ等しいこと、またこれらの底部のレベルがほぼ等しいことなどから礎石や柱根などは確認できなかったものの、機能的に対応関係にあるQ 7-8号土坑・Q 8-15号土坑と同様の性格をもつと考えられる。出土遺物は認められなかった。

(倉林 真砂斗)

Q 7-6号土坑 (第340図)

文学部調査区の西端近く、Q 7グリッドからQ 8グリッドにかけて確認できた掘り込みで、北側をQ 6-1号組石遺構・Q 7-13号遺構に、南側をR 8-23号土坑に切られていたために立ち上がりを追うことができず、全体プランを確認することはできなかった。確認できた部分で東西2.2m、南北4.2mであった。東側では確認面からの深さは40cmを測り、西に向かって底部のレベルは上がり西端では20cmほどで、全体にわたって砂利が層をなして充填されていた。東辺の一部をQ 7-9号遺構に切られ、砂利を除去しながら、Q 7-8・Q 8-15号土坑が更にQ 7-9号遺構を切っている状況を確認できた。出土遺物には陶磁器片と瓦片がある。

以上の諸遺構の前後関係を、切り合い関係及び遺構間の相互関係を考慮して整理すると、Q 7-6号土坑→Q 7-9号遺構→Q 7-7号土坑・Q 7-8号土坑・Q 8-15号土坑となる。切り合い関係が認められるものの、全体的な配置や向きをみると各々が全く無関係に構築されたとは考え難い。井戸に向かってQ 7-6号土坑のレベルは高くなり、それに対応して砂利敷は薄くなって消滅するため、井戸との切り合い関係を確認することはできなかった。しかし隣接するこの井戸の存在を考慮すると、関連する建造物が存在し、その周囲に排水機能を考えて厚い砂利敷がなされたと考えられることは可能である。Q 7-7号土坑の南側、Q 8-15号土坑の西側に類似の痕跡を捜したが、Q 7-6号土坑の底部のレベルが高くなることと関係してか認められなかった。

(倉林 真砂斗)

Q 7-15号ピット (第341図)

文学部調査区の北西部、Q 7グリッドの東縁に位置する。

灰色砕石砂層上面を確認面とし、この面を精査する過程で確認された。

近世以降の暖房用のピットによってその北半を失っているが、平面形は短軸約25cm、長軸は

30～40cm に及ぶ楕円形を呈していたものと思われ、主軸方位は真北に対し東へ135°振れる。ほぼ垂直に立ち上がる壁と、平坦な坑底とを持つ。確認面よりの深さは約35cm を測る。覆土は締まりのきわめて悪い黒褐色土よりなる。遺物は出土していない。

東側を南北に走る2本の溝状遺構（R 7—11, 12号溝）とともに灰色碎石砂層を切っており、どちらかに付随する遺構の可能性もあるが、その時期や性格は明らかでない。植栽痕に類する遺構とも考えられるが、遺構の性格時期ともに明らかでない。（小川 望）

Q 8—22号土坑（第341図）

Q 8グリッドの東端北寄りに位置する。

青灰色碎石砂層上面で確認された遺構である。Q 7—6号土坑およびR 8—23号土坑に切られている。

全体形は不明であるが、坑辺には出入りがあり不整である。確認面からの深さは8 cm 余りと浅い。坑底面には若干の凹凸がある。埋土はローム粒の混じる褐色土の単純層から成っている。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。（中村 慎一）

R 7—12号溝（第341図）

文学部調査区の西端、R 7およびR 8グリッドの西半を南北に走る。

R 7—11号溝と並行していて、これを切っており、また、R 8—23号土坑によって南端を切られている。三者とも灰色碎石砂層を切って構築されており、この層の上面を精査する過程で確認された。さらに、調査区を東西に走る近代以降の暖房用ビットにより北側が失われている。

平面形は太いところで75cm、細いところで50cm 前後の幅を有する溝状を呈する。主軸方位は真北に対し東へ156°振れる。壁は緩やかに立ち上がり、東辺にはテラス状の段が認められる。確認面よりの深さは、最も深いところで60cm、浅いところで50cm を測る。覆土は、上層に灰白色粘土が、中層に礫とローム粒子を多く含む褐色土が、下層に灰色砂質土が入る。遺物は出土していない。

坑底面に傾斜の認められないことなどからみて、R 7—11号溝と同様通水のための溝としての機能は考え難く、なんらかの構造物に付随する施設と思われる。構築の時期は灰色碎石砂層より新しいこと以外明らかでない。（小川 望）

R 7—11号溝（第341図）

文学部調査区の西端、R 7グリッドの西半を南北に走る。

R 7—12号溝と並行しており、これに切られている。また、両者とも灰色碎石砂層を切って構築されており、この層の上面を精査する過程で確認された。さらに、調査区を東西に走る近代以降の暖房用ビットにより北側が失われている。

平面形は広いところで70cm、細いところで50cm 前後の幅を有する溝状を呈し、隅丸長方形の末端が南側に認められる。主軸方位は真北に対し東へ156°振れる。壁は緩やかに立ち上がり、東辺には僅かに段が認められる部分もある。底面には二カ所に楕円形のくぼみが認められる。南側

のくぼみは長さ約70cm, 北側のくぼみは長さ約95cm であり, ともに比高差約10cm を測る。確認面よりの深さは, 最も深いところで85cm, 浅いところで50cm を測る。覆土は, 上層に大きなローム粒子を含む黒褐色土が, 下層に締まりの弱い黒褐色土が入る。遺物は出土していない。

坑底面に傾斜の認められないことや, 坑底部のくぼみなどからみて, 通水のための溝としての機能は考え難く, なんらかの構造物に付随する施設と思われる。構築の時期は灰色碎石砂層より新しいこと以外明らかでない。 (小川 望)

R 8—26号ピット (第341図)

R 8グリッドの北西隅近くに位置する。

青灰色碎石砂層の上面で確認された遺構である。R 8—24号ピットの西辺を一部切っている。平面形は長円形を呈する。長軸長約35cm, 短軸長約20cm である。確認面からの深さは5 cm 余りとかかなり浅い。坑底面, 坑壁面ともに若干の凹凸があり, 掘り方は雑である。埋土は少量の小礫を含む暗褐色砂質土の単純層から成っている。遺物の出土はない。遺構の性格は不明である。

(中村 慎一)

R 8—24号ピット (第341図)

文学部調査区の西端, Q 8グリッドの北西隅に位置する。

R 7—12号溝およびR 8—26号ピットと重複するが, 両者によって切られている。これらの遺構は灰色碎石砂層を切って構築されており, この層の上面を精査する過程で確認された。

平面形は南北50cm, 残存する東西30cm の隅丸の長方形もしくは正方形を呈すると思われる, 南北方向の軸は真北に対し東へ160°振れる。強く立ち上がる壁とほぼ平坦な坑底とを持ち, 確認面よりの深さは約7 cm を測る。覆土は締まりの悪い褐色土である。遺物は出土していない。

礎石などの据えられていた痕とも思われるが, 遺構の性格は明らかでなく, 時期も不明である。

(小川 望)

R 8—27号ピット (第341図)

R 8グリッドの北西隅近くに位置する。

青灰色碎石砂層の上面で確認された遺構である。

平面形はやや胴張りの隅丸長方形を呈する。長辺長は約35cm, 短辺長は約26cm である。確認面からの深さは5 cm 弱とかかなり浅い。坑底面, 坑壁面ともに凹凸があり, 掘り方は雑である。埋土は若干の小礫を含む暗褐色砂質土の単純層から成っており, R 8—26号ピットのそれと同じであった。出土遺物はない。遺構の性格は不明である。

(中村 慎一)

R 8—23号土坑 (第342・343図: 図版4)

ポイントQ 9で接する4つのグリッドに跨って位置する。

青灰色碎石砂層上面で確認された遺構である。Q 7—6, Q 8—22号土坑, R 7—12号溝, R 9—7号土坑, R 9—9号溝の各遺構を切っている。一方, 近代土坑により南辺の一部を切られている。

平面形は不整形を呈し、径は4.3m～5.0mである。土坑の東南に片寄った位置に、直径約1.8m、高さ1.3mの大きさにローム地山が円柱状に掘り残されている。この円柱状部分が二次的に積まれたものではなく、ローム地山そのものであることは、漸移層およびブラックバンドが観察されることから明らかである。さらにこの円柱の上には四角錐台状に黒色土が乗っていた。確認面から坑底までの深さは2.0m弱である。坑底面は平坦で、しっかりと掘られている。坑壁面には掘り具の痕、いわゆる工具痕が明瞭に残っていた。

埋土は大きく6層に分けることができる。底部から順に、暗褐色土、ローム、黒褐色土、淡褐色砂質土、黒褐色土、暗褐色土となっている。概して、どの層もやや粘性を帯びており、比較的よく締まっている。遺物はほとんど出土しておらず、瓦片と金属片が少数検出されたのみである。なお、この埋土は、その土質から見ても明らかに人為的に埋められたものである。

本遺構の機能、性格を決定することはかなり難しい。まず、工具痕が明瞭に残されていることから、掘られて後しばらくの間、風雨にさらされていたり、水が湛えられていたと考えることは困難である。つまり掘られて間もないうちに埋め戻されたと考えべきである。また、遺物や焼土などがほとんど見られないことから、ゴミ穴としての機能も想定し難い。残る可能性として、植栽に関わる遺構としての性格が考えられよう。しかし、その場合も、円筒状の土柱を残す必要性は説明しきれない。因みに、土柱の上面には黄褐色砂が厚さ1～2mmに薄く堆積していたが、これが何を意味するものであるかも不明である。本遺構と同様の規模と形状とを有する遺構として、他にR9-7号土坑、R10-1号土坑とがある。本土坑を含めたこれら3遺構は一列に並んでおり、その方向は南北軸から約22度ずれている。この角度は文学部発掘区内の古い段階の遺構群に特徴的に見られる方向性である。

(中村 慎一)

R9-7号土坑 (第344・345図)

文学部調査区の西端部、R9グリッドとQ9グリッドの境界上に位置する。

R9-9、11号溝を切り、R8-23号土坑およびR9-10号土坑に切られる。このうち、当R9-7号土坑およびR9-9、11号溝は灰色碎石砂層によりバックされている。

遺構中央を近代以降の土管の掘り方によって破壊されており、また北端をR8-23号土坑および近代以降の土坑により、さらに南辺を旧図書館の基礎により破壊されており、この基礎の周囲を掘り下げる際に確認された。

残存する部分より推定される平面形は長軸約525cm、短軸約360cmで北西辺のやや凹む楕円形もしくは隅丸長方形であり、西側のコーナー寄りに最大径140cmに及ぶやや不整形な円形の範囲が確認面より25cmほど下げられたところで截円錐形に残っており、ために平面形は大きく歪んだドーナツ形にも見える。主軸方位は真北に対し東へ138°振れる。壁は緩くたちあがり、上半部で僅かに外反する。坑底は大きく起伏し部分的に強い屈曲を示して壁へ移行する。壁面および坑底面は工具痕とみられる凹凸が著しい。確認面よりの深さは、最も深いところで120cmを測る。覆土は大きく四層に分かれる。すなわち坑底より約三分の一の深さまで堆積するロームブロック、ロー

ム粒子を主体とする黄褐色ローム質土層、その上に約三分の二まで堆積するロームブロック、ローム粒子をまだら状に多く含む暗黄褐色土層、その上に約四分の三まで堆積する明褐色土層、最上部に堆積するローム粒子を含む暗褐色層である。

遺物は陶磁器小片と瓦片、鉄製品が出土している。

当遺構は R 8—23号土坑および R10～1号土坑と共にそのドーナツ状の平面形によって特徴付けられるものであるが、その性格を明らかにしうるものは今のところ存在せず、植栽痕の一種であろうとの予想がなされるのみである。構築の時期は灰色碎石砂層の形成される以前である。

(小川 望)

R 8—25号ピット (第346図)

文学部調査区の西部、R 8グリッドの南東隅に位置する。

青灰色碎石砂層上面を確認面とし、この面を精査する過程で確認された。

平面形は径約50cmのやや不整な円形を呈し、緩やかに立ち上がる壁と平坦な坑底をもつ。確認面よりの深さは約15cmを測る。覆土は締まりの悪い暗褐色土よりなる。遺物は出土していない。R 9—8号ピット、10号土坑と共になんらかの柱穴列を形成するとも考えられるが今のところその時期性格ともに明らかでない。

(小川 望)

R 9—8号ピット (第346図)

R 9グリッドの北東隅近くに位置する。

青灰色碎石砂層上面で確認された遺構である。

平面形はほぼ正円を呈する。直径は約46cmを測る。確認面からの深さは16cm余りである。坑底は平坦であり、坑壁の立ち上がりは比較的緩やかである。埋土は暗褐色土の単純層から成っている。出土遺物はない。

本遺構を含めて、R 8—25号ピット、R 9—10号土坑の3遺構は、その規模は異なるものの、ほぼ正確に南北方向に並んでいる。何らかの有機的關係にある柱穴列とも考えられるが確定的ではない。

(中村 慎一)

R 9—10号土坑 (第346図)

R 9グリッドの中央南寄りに位置する。

青灰色碎石砂層上面で確認された遺構である。R 9—7号土坑、R 9—9号溝を切っている。一方、近代の土管埋設用掘り方により北半を破壊されている。

全体の平面形は略円形を呈するものと推定される。直径は約70cmである。確認面からの深さは80cm弱を測る。坑底面、坑壁面ともに平滑で、しっかりと掘られている。埋土は、ロームブロックを主体とする褐色土が下半に、若干の砂粒を含む灰褐色土が上半に堆積していた。出土遺物はない。遺構の性格は必ずしも明らかではないが、R 8—25号ピット、R 9—8号ピットとともに柱穴列を成す可能性がある。

(中村 慎一)

R 8—101号溝 (第346図)

ローム漸移層上面で確認された遺構である。残存部は R 8 グリッド南端から R 9 グリッド南端にかけて伸びているが、それより南は旧図書館基礎によって破壊されている。また、土管理設用掘り方によっても一部寸断されている。R 8—23号土坑, R 9—7号土坑, R 9—10号土坑によって切られている。

70cm 前後の幅で続く溝状の遺構である。主軸方向は、南北軸から23°ほどずれている。北端の立ち上がりは R 8 グリッド南端にあるが、旧図書館基礎に破壊されているために南端の立ち上がりは不明である。残存部の長さは5.4m 程である。残存部の中央よりやや北寄りに不整長円形の一段深い窪みが穿たれている。確認面からその窪みの底までの深さは87cm 余り、それ以外の底部までの深さは75cm 前後である。底面、壁面ともに若干の凹凸がある。埋土は2層に大別される。下半には締りの悪い黒褐色土が、上半にはローム主体の暗褐色土が堆積している。また部分的にはその上に黒色土が薄く乗っている。遺物は出土していない。形態は“溝状”であるが、埋土各層の厚さが部分部分で区々であること、また各層の上面に凹凸が著しいことから見て、水を湛えていたものとは思われない。恐らく何らかの建造物の基礎に関わる遺構であろう。なお、南北軸から23度ほど西へふれる方向は文学部発掘区内の古い段階の遺構群に特徴的な方向性である。

(中村 慎一)

R 9—11号溝 (第346図)

R 9 グリッドの南端西寄りに位置する。

ローム漸移層面まで削平する過程で確認された遺構である。北側を R 9—7号土坑に切られており、また南側を旧図書館基礎によって破壊されている。

残存部分からの推定では、55cm 前後の幅でほぼ南北方向に伸びる溝状の遺構であろうと考えられる。確認面からの深さは約45cm を測る。底面、壁面ともに若干の凹凸がある。埋土は大きく4層に分かれる。底部から順に、黒褐色土、明褐色砂質土、暗褐色ローム質土、明褐色砂質土が堆積している。各層いずれも締まりはよい。遺物は出土していない。

本遺構も埋土の堆積状況から見て、流水ないしは湛水の機能を担っていたものとは考え難く、従って、何らかの建造物の基礎に関わる遺構と考えたい。

(中村 慎一)

S 9—2号ピット (第346図)

文学部調査区の西部、S 9 グリッドの南西隅に位置する。

青灰色碎石砂層上面を確認面とし、この面を精査する過程で確認された。

平面形は45cm×30cm の隅丸長方形を呈しほぼ垂直に立ち上がる壁と平坦な坑底をもつ。確認面よりの深さは約15cm を測る。覆土は締まりの悪い暗褐色土よりなる。遺物は出土していない。なんらかの柱穴とも考えられるが今のところその時期性格ともに明らかでない。(小川 望)

R10—1号土坑 (第347～349図)

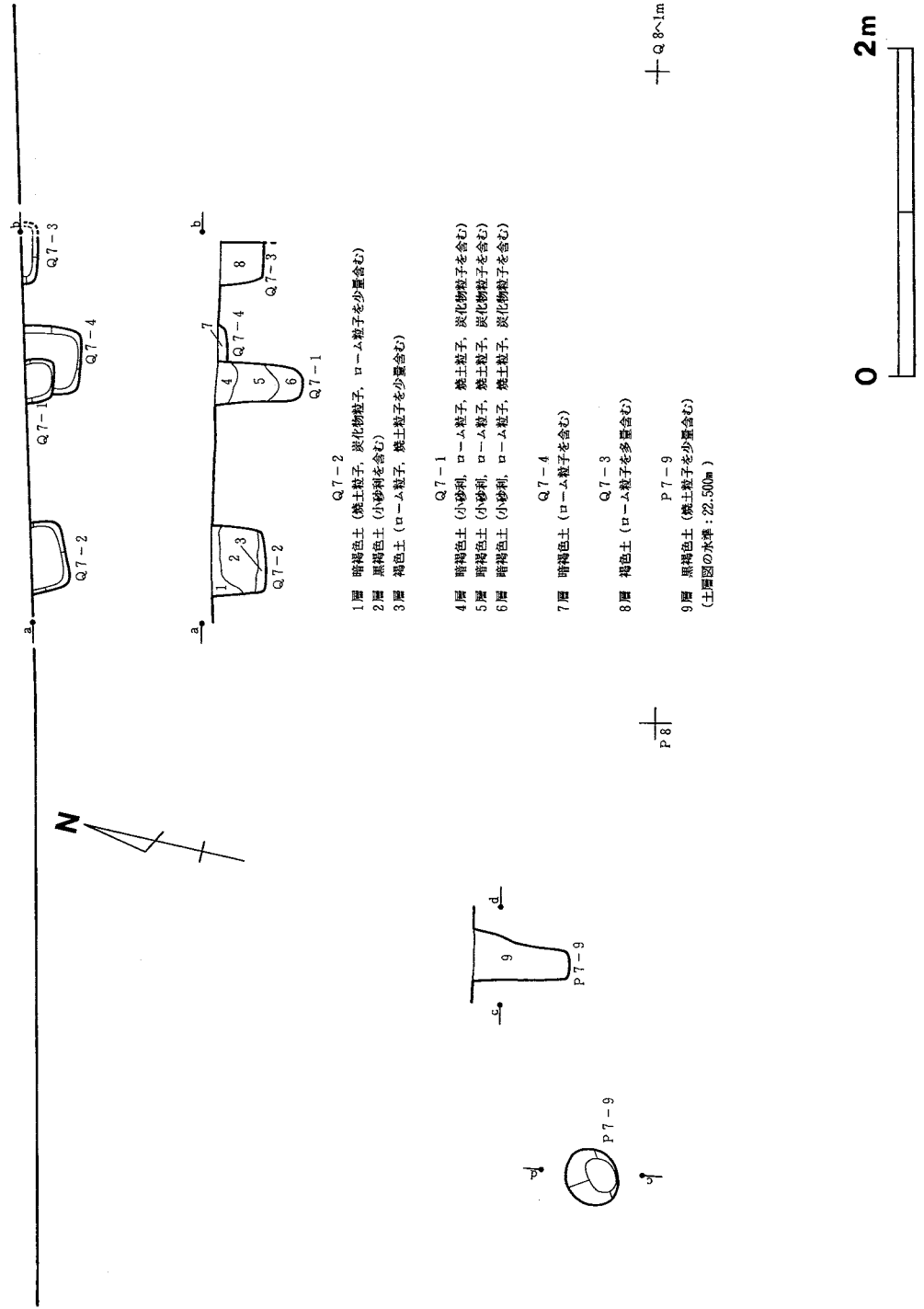
調査区南西隅、旧図書館基礎の間中において灰色碎石砂層の面に検出された。上面は旧図書館基礎のみならず導管の攪乱を受け、調査区等の制約から遺構の全体を把握しづらいが、平面形は

報告篇第四章 江戸時代の調査 II

東西に長い楕円形を呈し、推定規模6.5m。西側には円柱状の掘り残し部分あり。底面は確認面から最深1.8m、壁際では1.0mで中央へなだらかに傾斜している。壁の立ち上がりは急であり、底面・壁面共にやや凹凸が目立ち、壁面は工具痕とも推測される。覆土は全体にロームを主体として基本的には11層に分れ、下層はしまりが悪く上層はしまりが良い。全体的に粘性を帯びている。堆積はほぼ一様で人為的である。上層には10cm前後の砂利層が広がっている。また円柱状部分の上面にも数cmの黒色の堆積土が広がっている。出土遺物は極めて少なく瀬戸・美濃等の播鉢片のみである。

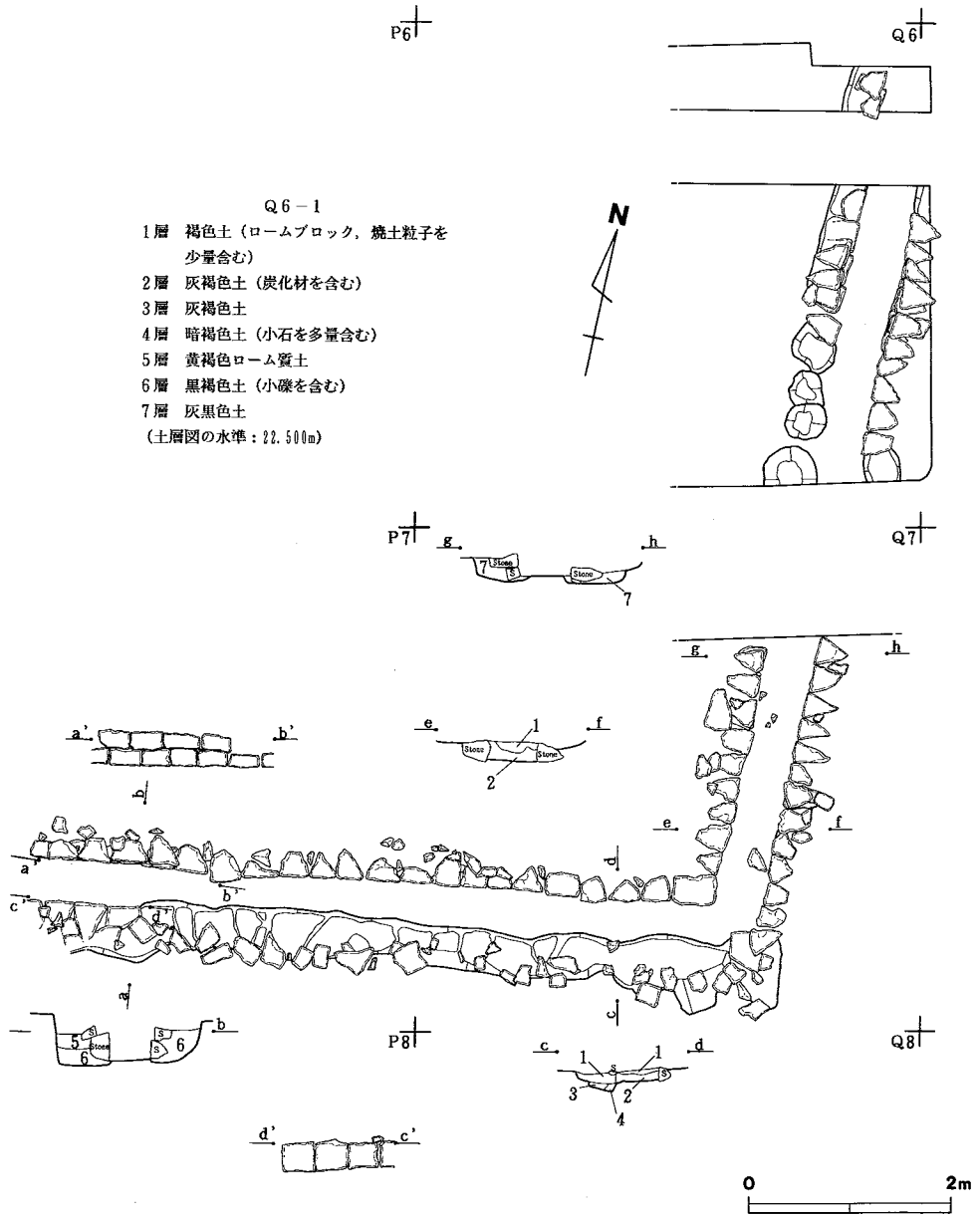
この遺構は北側のR 8-23号土坑、R 9-7号土坑と同形態、ほぼ同規模であり、更にはほぼ直線的に並ぶ。故に性格的にも一連のものと推測される。現状では類例を知見せず性格は明らかにしえないが、調査状況においても生活遺構の可能性は少ない。

(小俣 悟)

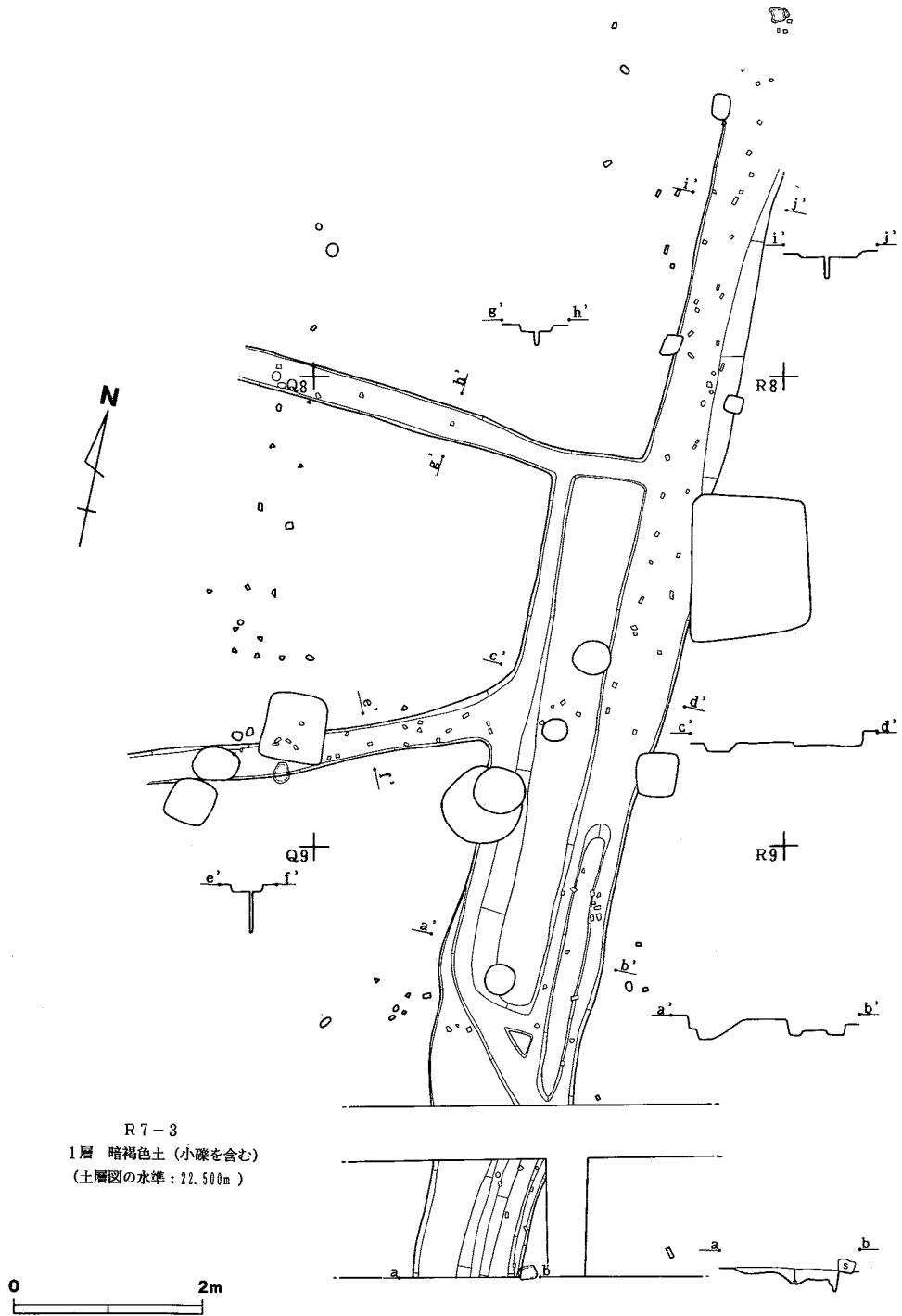


- Q7-2
 1層 暗褐色土 (焼土粒子, 炭化物粒子, ローム粒子を少量含む)
 2層 黒褐色土 (小砂利を含む)
 3層 褐色土 (ローム粒子, 焼土粒子を少量含む)
- Q7-1
 4層 暗褐色土 (小砂利, ローム粒子, 焼土粒子, 炭化物粒子を含む)
 5層 暗褐色土 (小砂利, ローム粒子, 焼土粒子, 炭化物粒子を含む)
 6層 暗褐色土 (小砂利, ローム粒子, 焼土粒子, 炭化物粒子を含む)
- Q7-4
 7層 暗褐色土 (ローム粒子を含む)
 8層 褐色土 (ローム粒子を多量含む)
 9層 黒褐色土 (焼土粒子を少量含む)
 (土層図の水深: 22.50m)

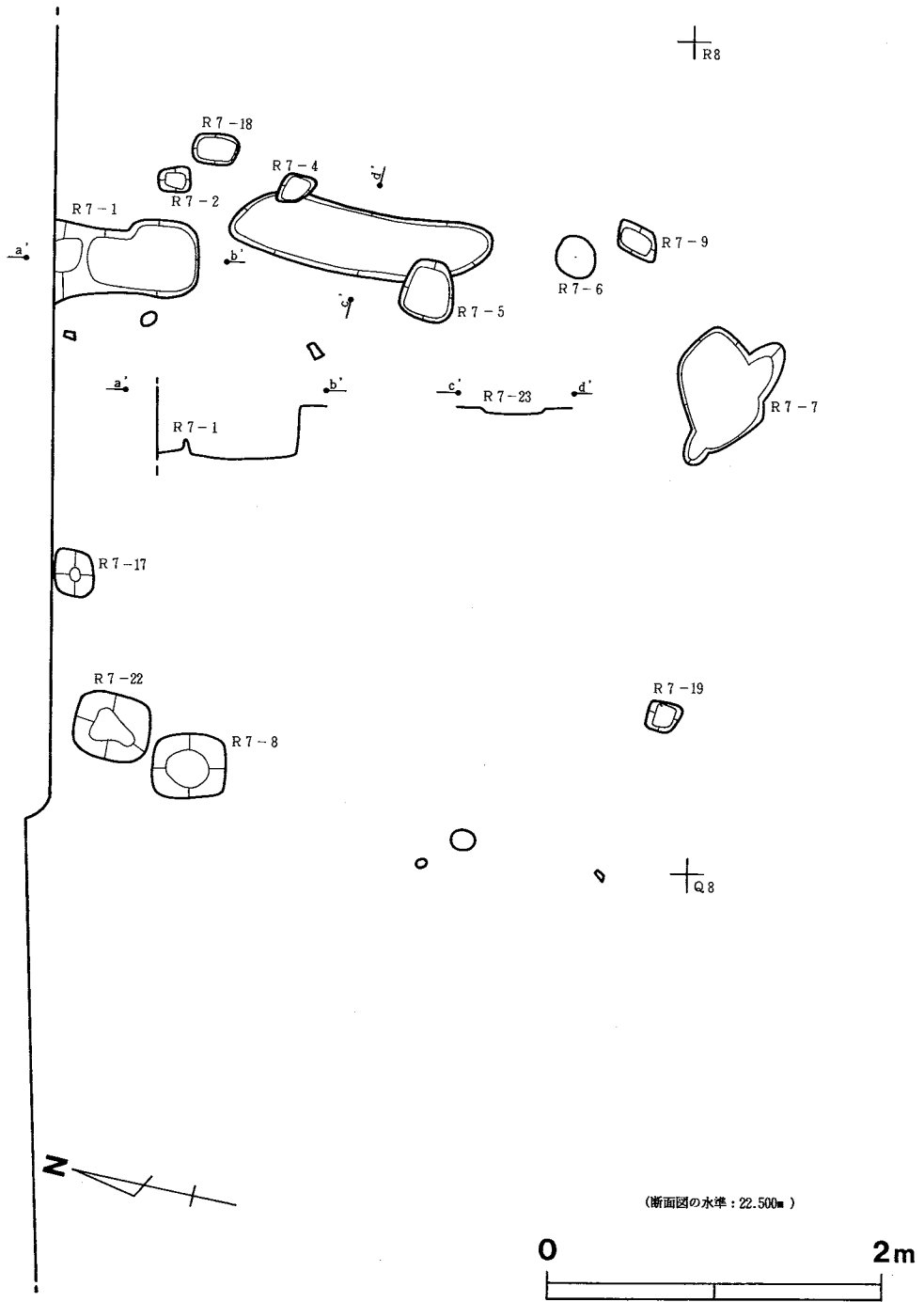
第317図 P ~ S = 5 ~ 10区の遺構(1)



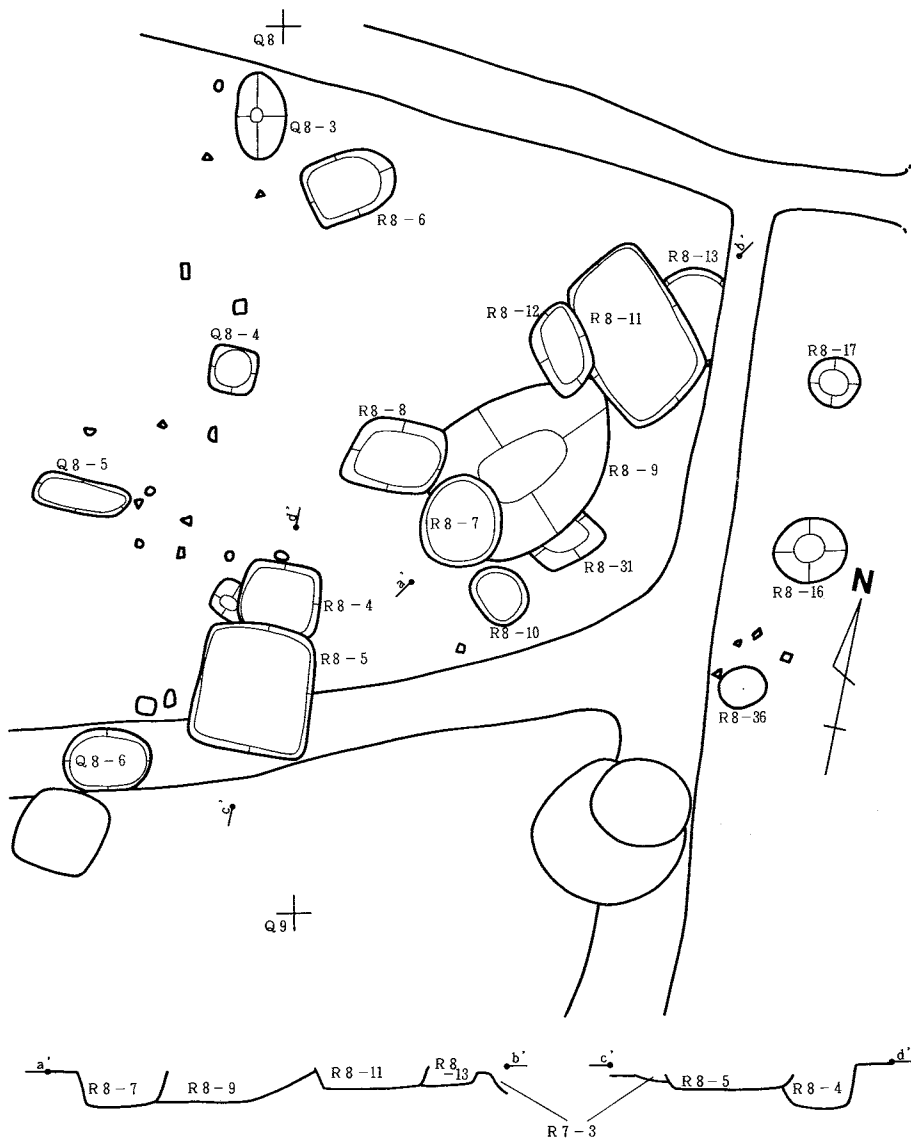
第318図 P~S=5~10区の遺構(2)



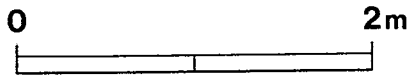
第319図 P~S=5~10区の遺構(3)



第320図 P～S = 5～10区の遺構(4)

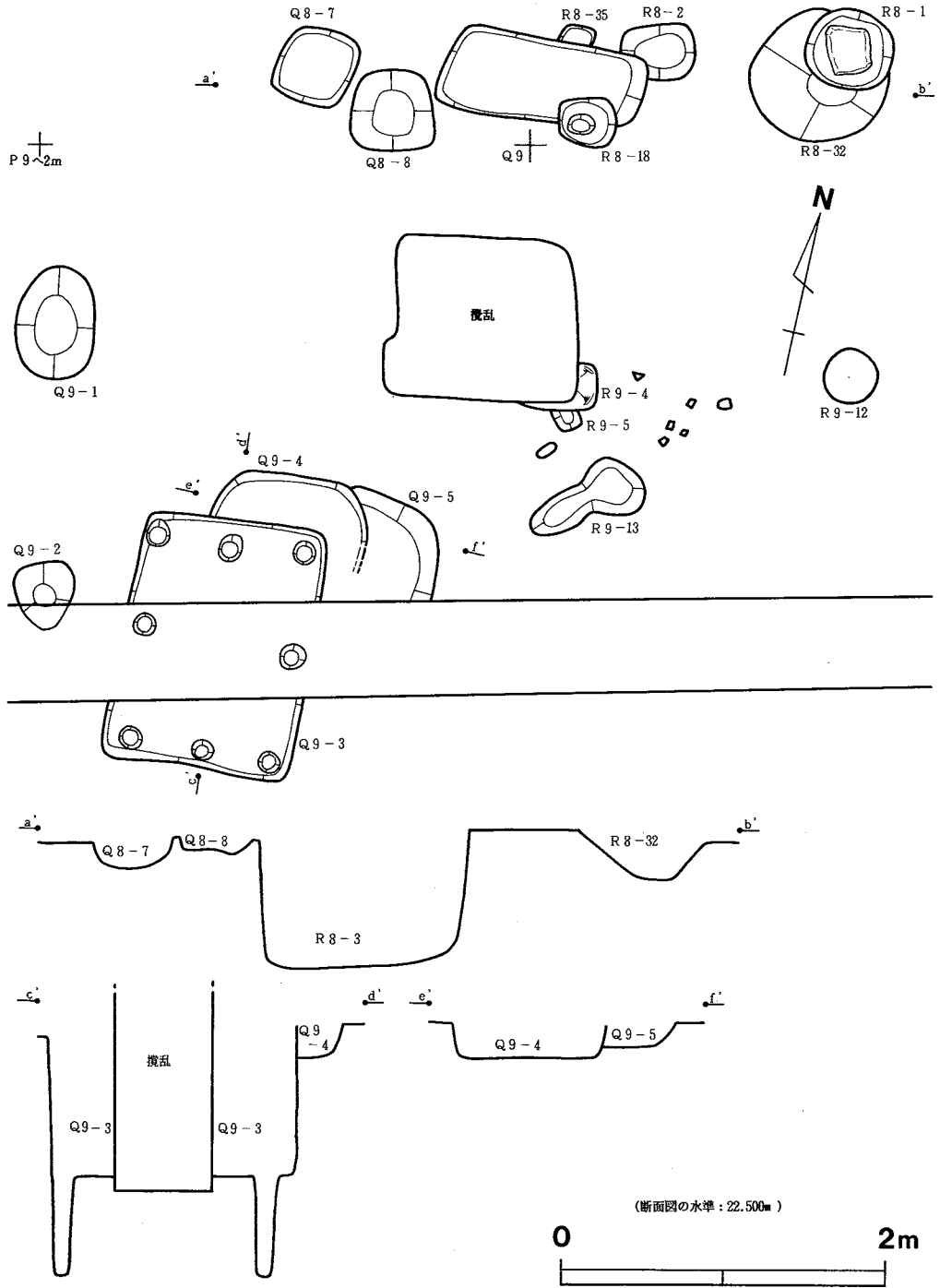


(断面図の水準: 22.500m)

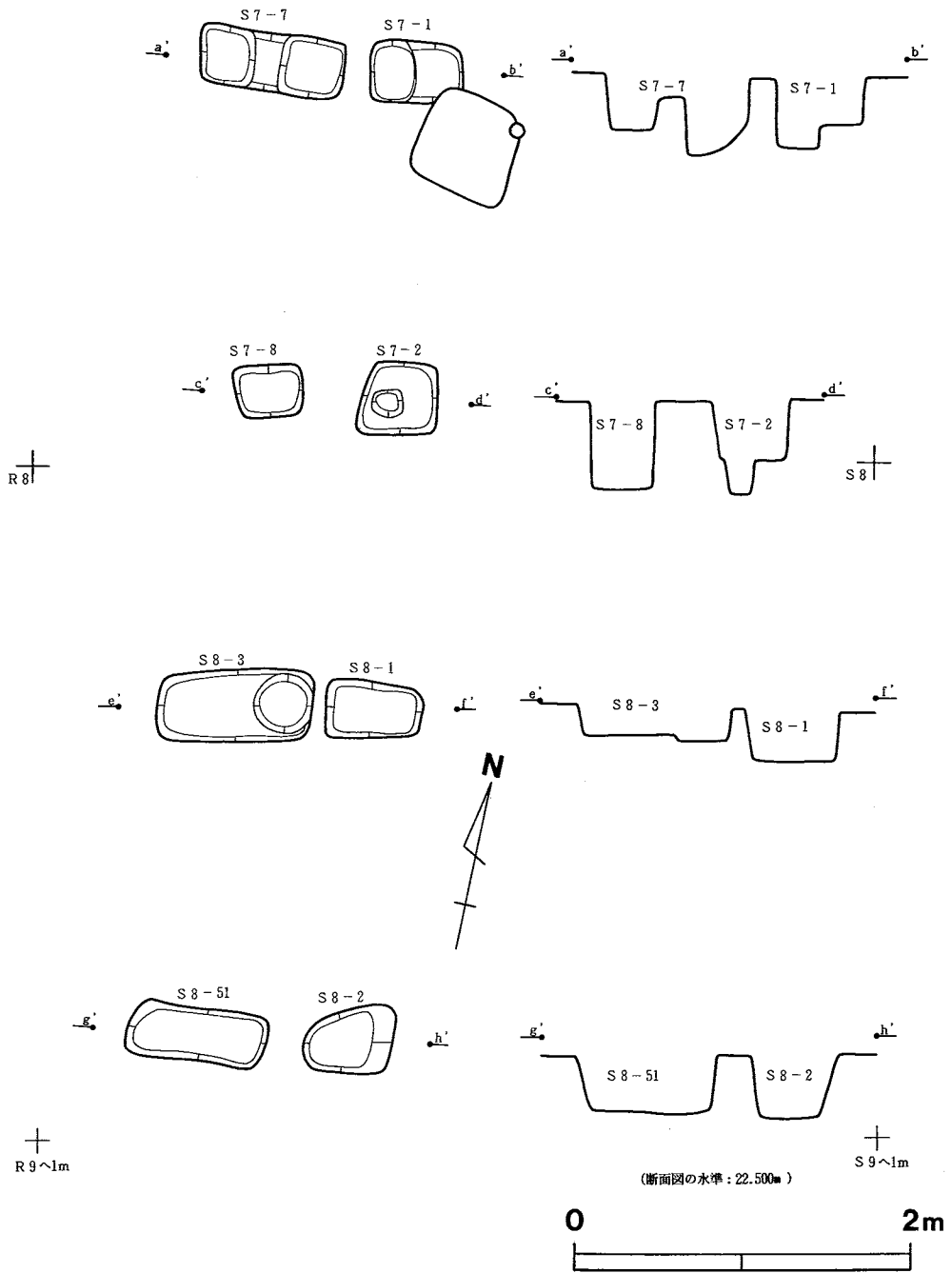


第321図 P~S=5~10区の遺構(5)

報告篇第四章 江戸時代の調査 II

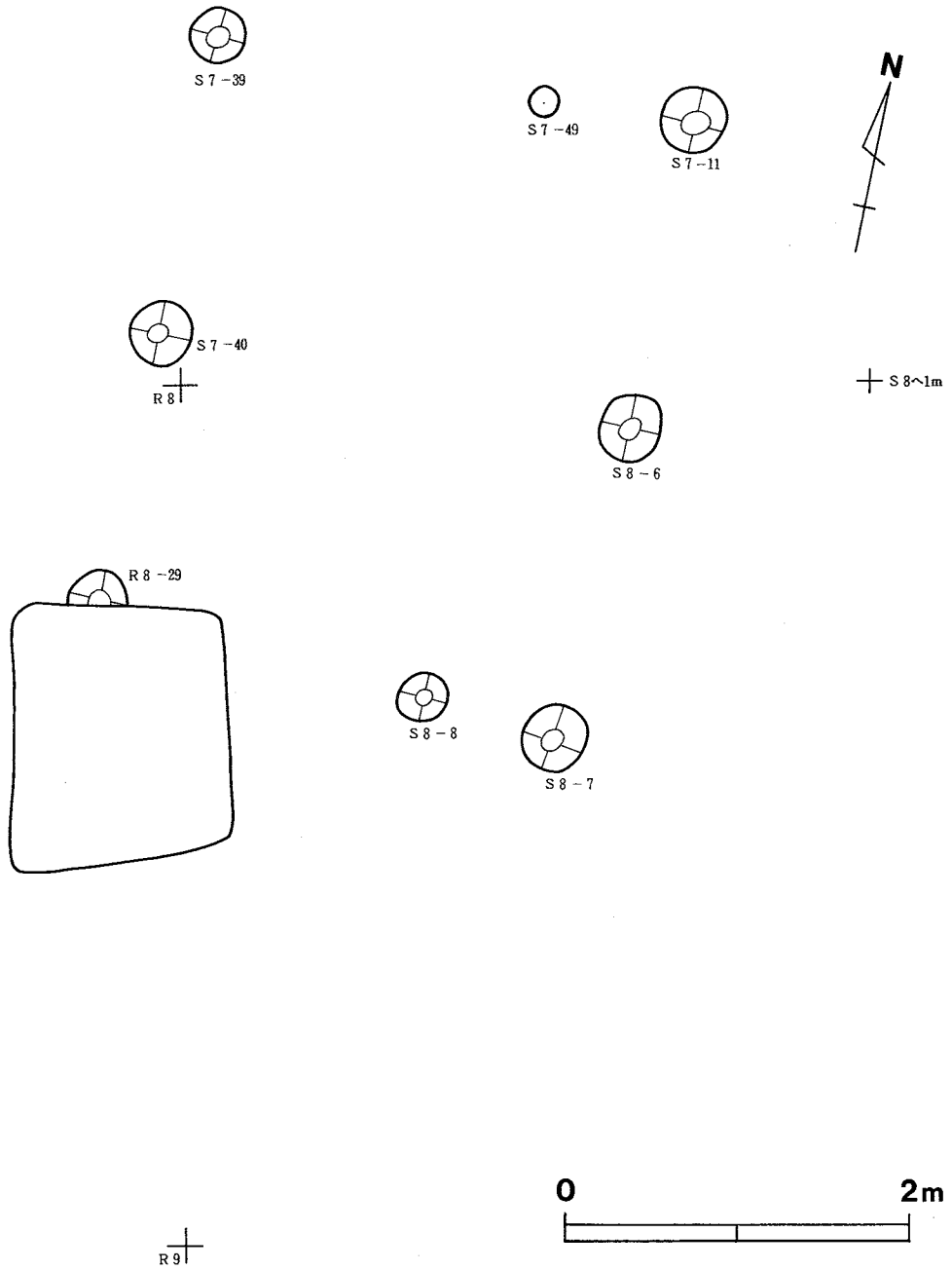


第322図 P~S = 5~10区の遺構(6)

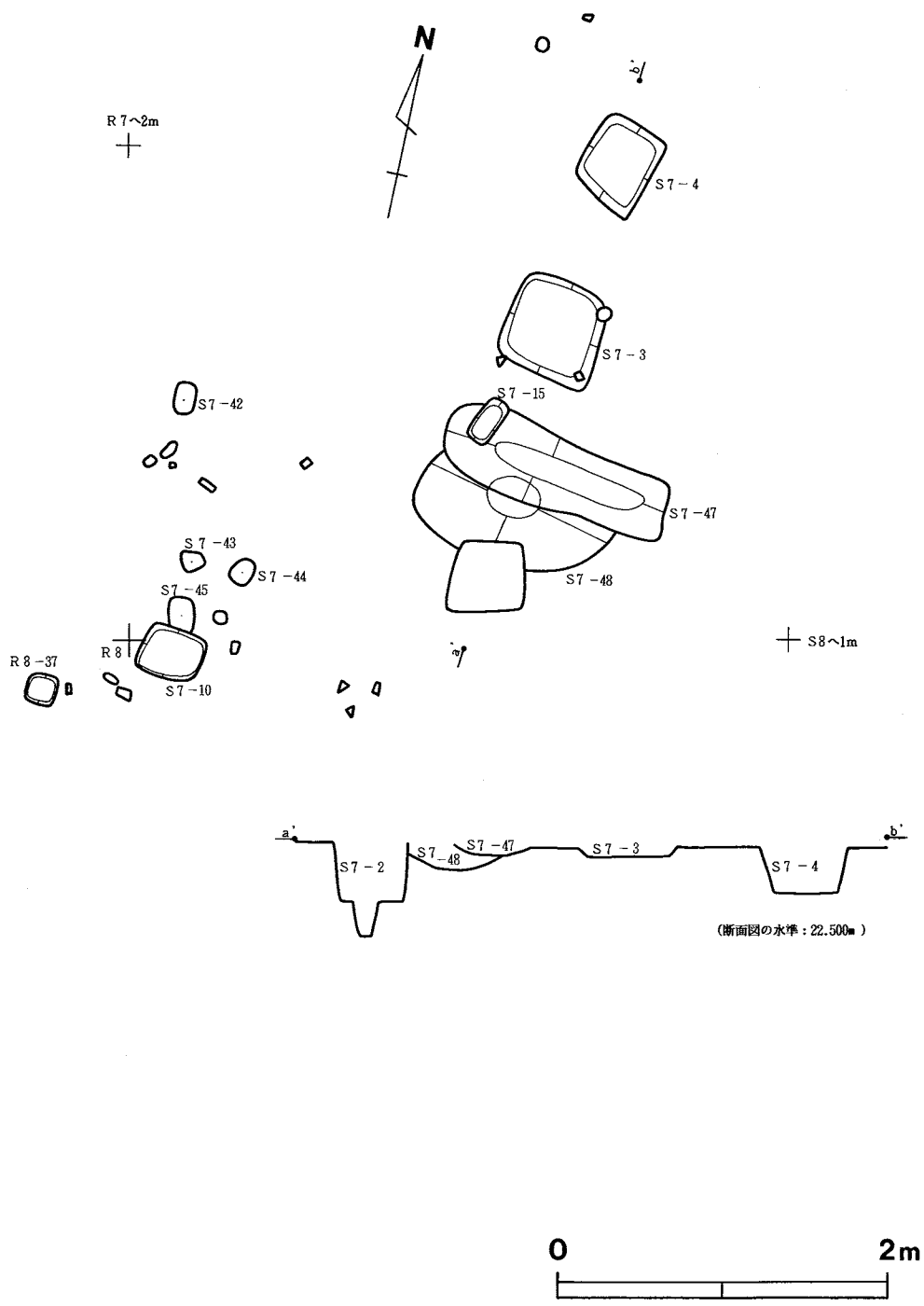


第323図 P~S=5~10区の遺構(7)

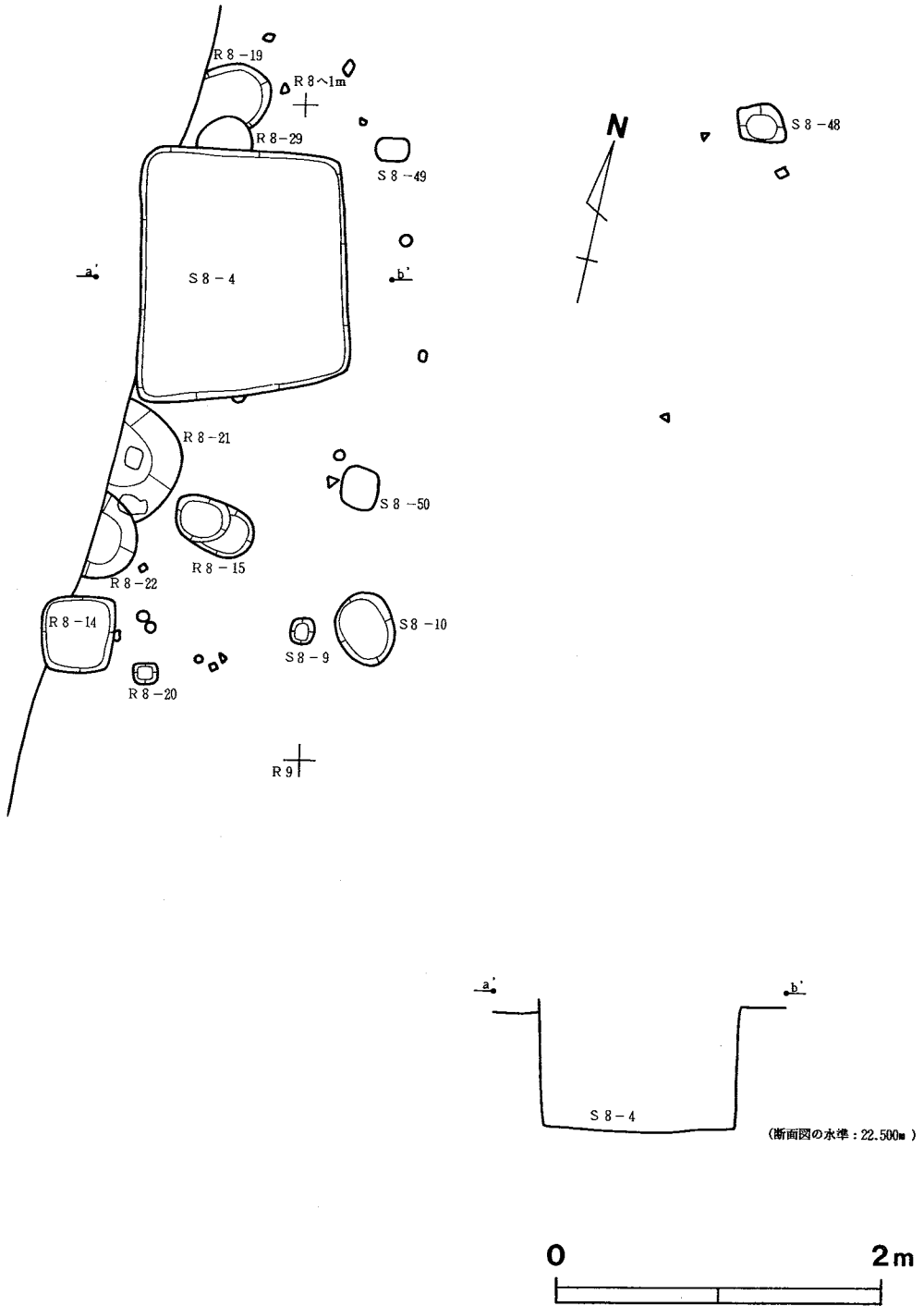
報告篇第四章 江戸時代の調査 II



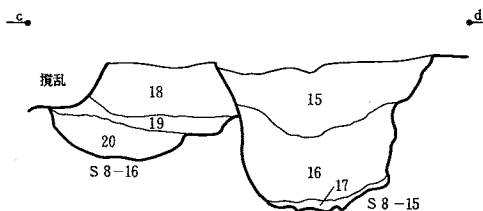
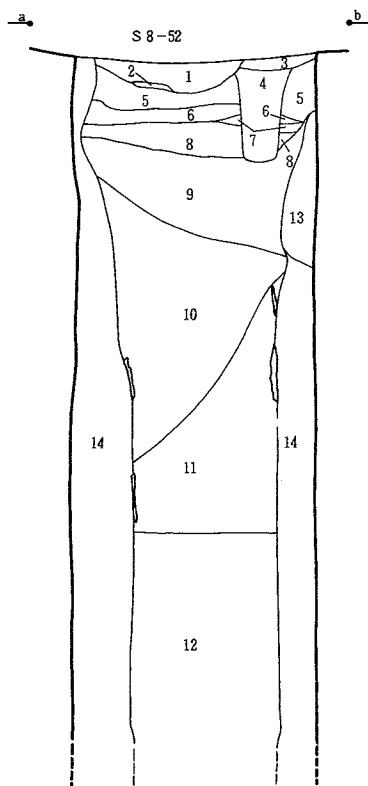
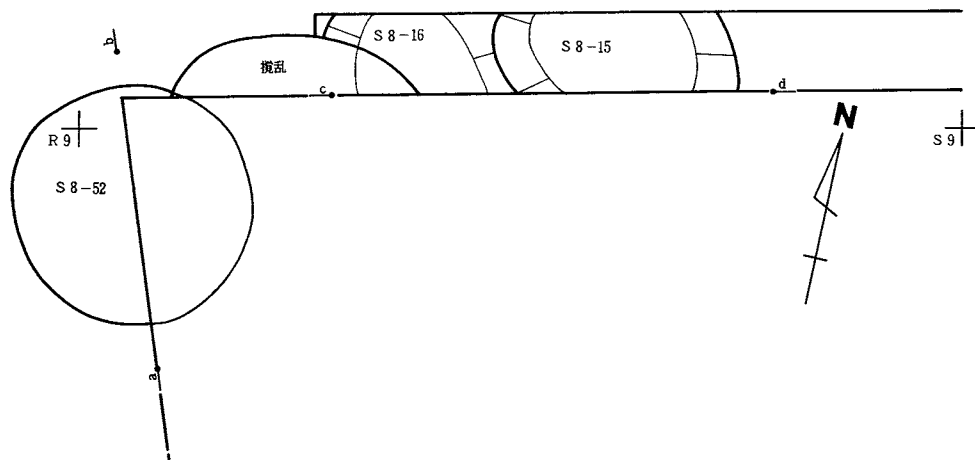
第324図 P~S=5~10区の遺構(8)



第325図 P~S=5~10区の遺構(9)



第326図 P~S=5~10区の遺構(10)

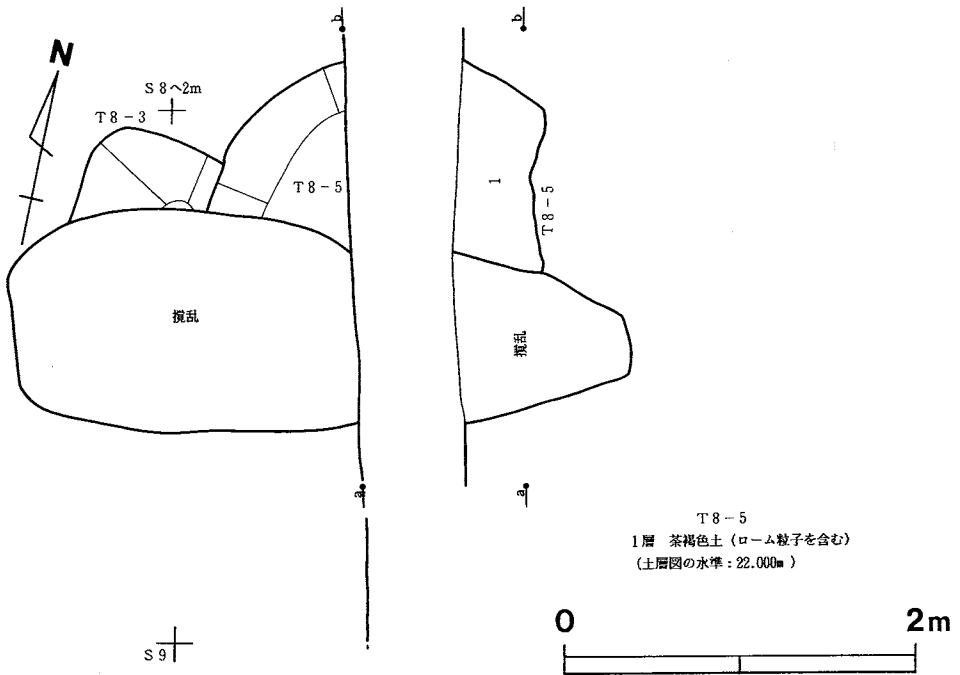
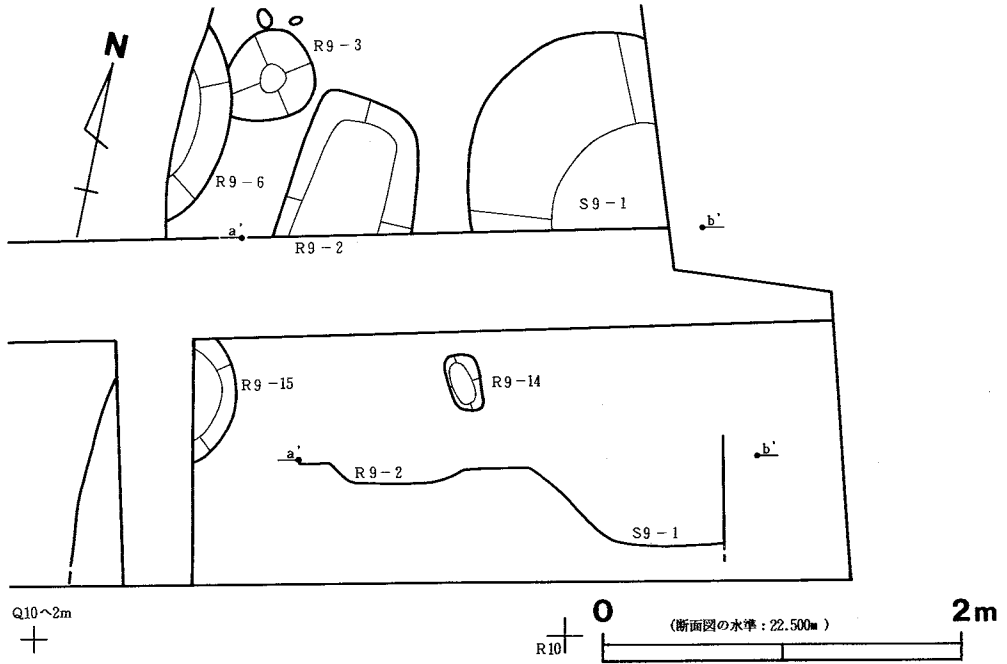


- | | |
|---|---|
| <p>S 8-52</p> <p>1層 茶褐色土 (ローム粒子を少量含む)</p> <p>2層 暗灰色粘質土</p> <p>3層 明褐色土 (ローム粒子, 小砂利を多量含む)</p> <p>4層 灰褐色土 (粘土粒子, 焼土粒子を多量含む)</p> <p>5層 黒色土 (ローム粒子, ロームブロックを多量含む)</p> <p>6層 黒褐色土 (ローム粒子を少量含む)</p> <p>7層 黒色土 (ローム粒子, ロームブロックを多量含む)</p> <p>8層 暗灰褐色土 (粘土粒子を多量, 炭化物を含む)</p> <p>9層 瓦 (間隙に焼土を含む)</p> <p>10層 瓦 (間隙に焼土を含む)</p> <p>11層 瓦 (間隙に焼土を多量含む)</p> <p>12層 瓦 (間隙に焼土を含む)</p> <p>13層 暗褐色土 (砂利, 砂を多量含む)</p> <p>14層 黒色土 (白色粘土ブロック, ローム粒子, ロームブロックを多量含む)</p> | <p>S 8-15</p> <p>15層 暗褐色土 (ローム粒子, ロームブロック, 黒色粒子, 小礫, 瓦を含む)</p> <p>16層 暗茶褐色土 (ローム粒子, ロームブロック, 黒色粒子, 黒色土ブロックを多量, 小礫を少量含む)</p> <p>17層 暗茶褐色土 (黒色粒子, ローム粒子を含む)</p> |
|---|---|

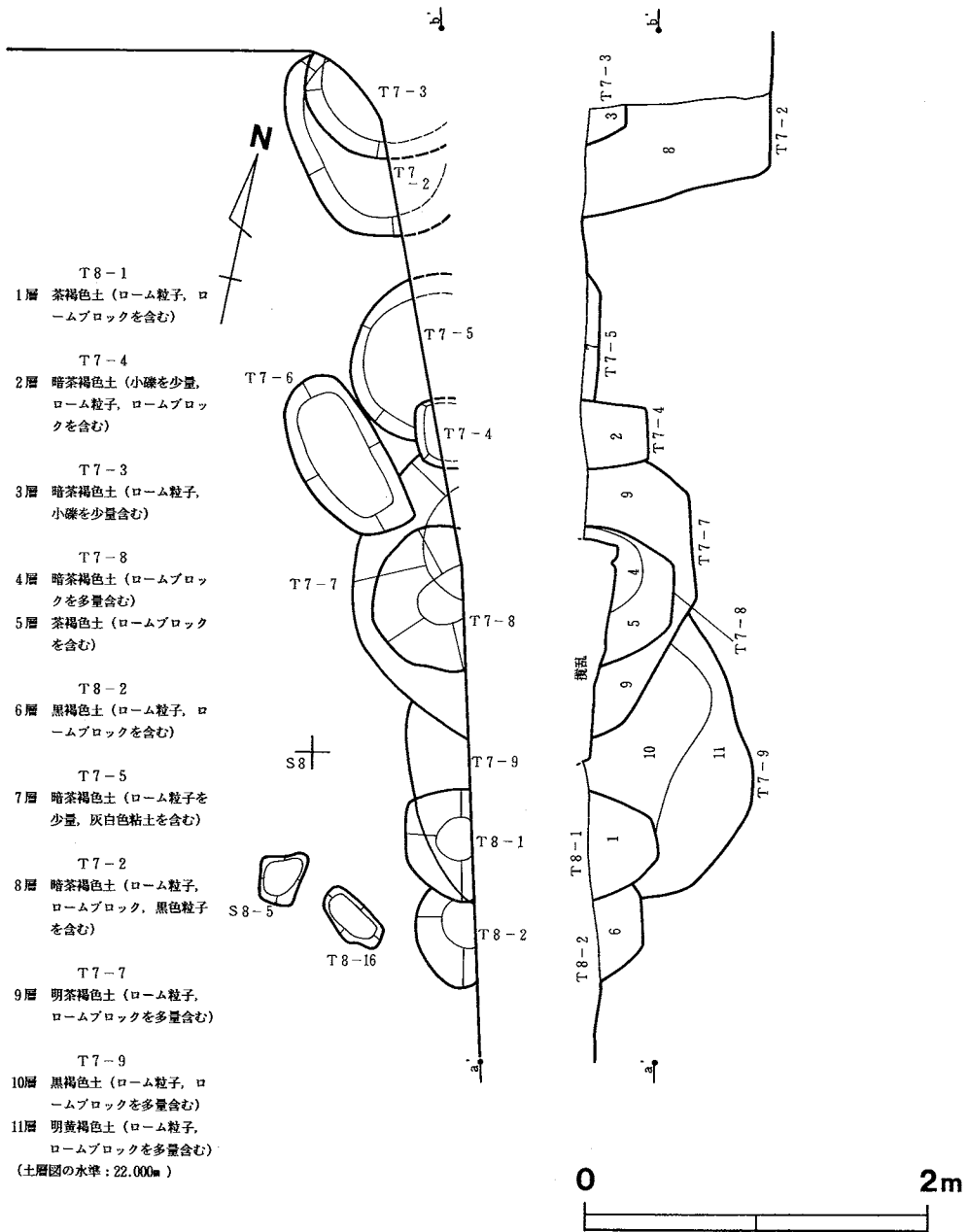


第327図 P ~ S = 5 ~ 10区の遺構(11)

報告篇第四章 江戸時代の調査 II

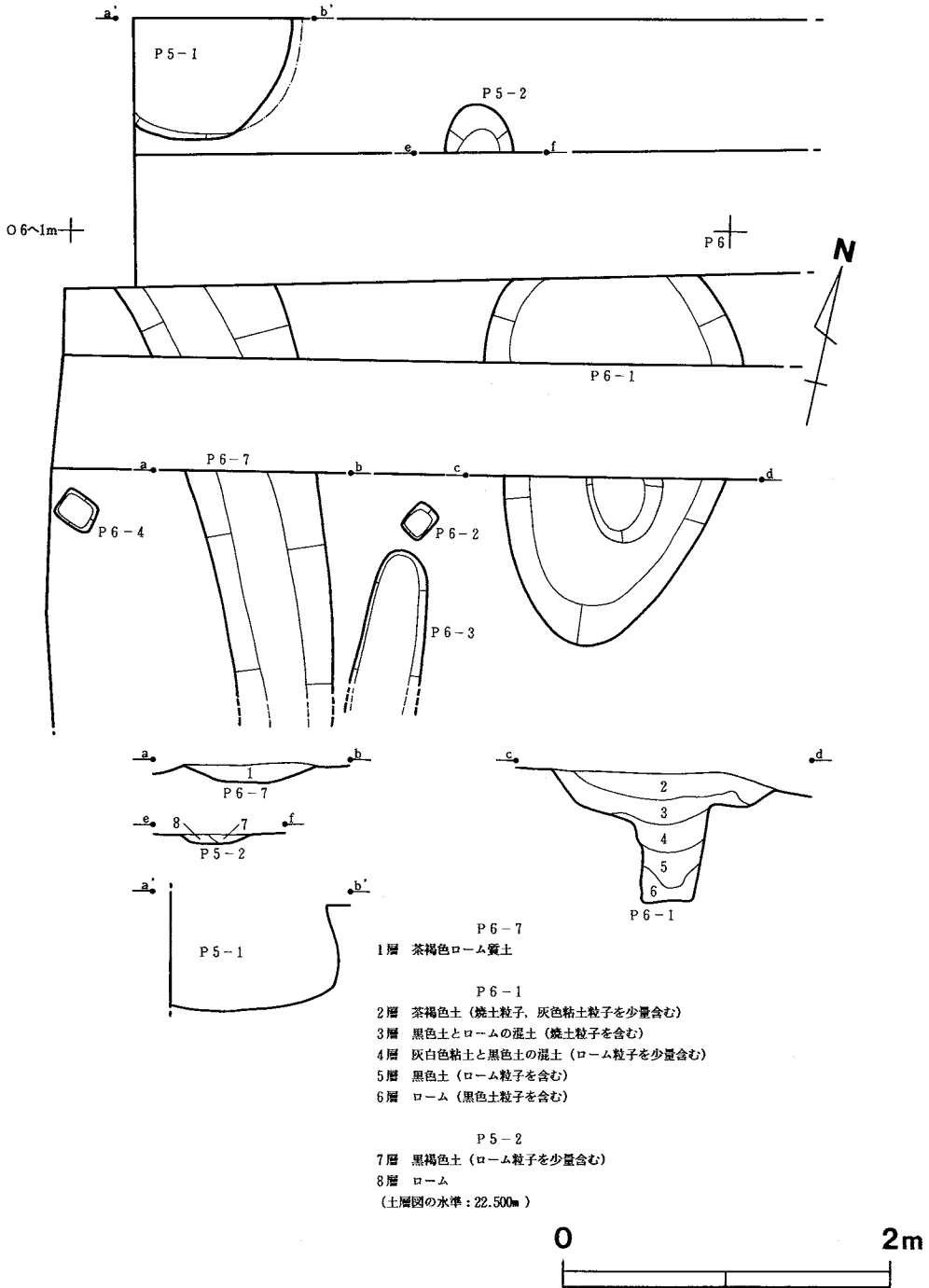


第328図 P~S = 5~10区の遺構(12)

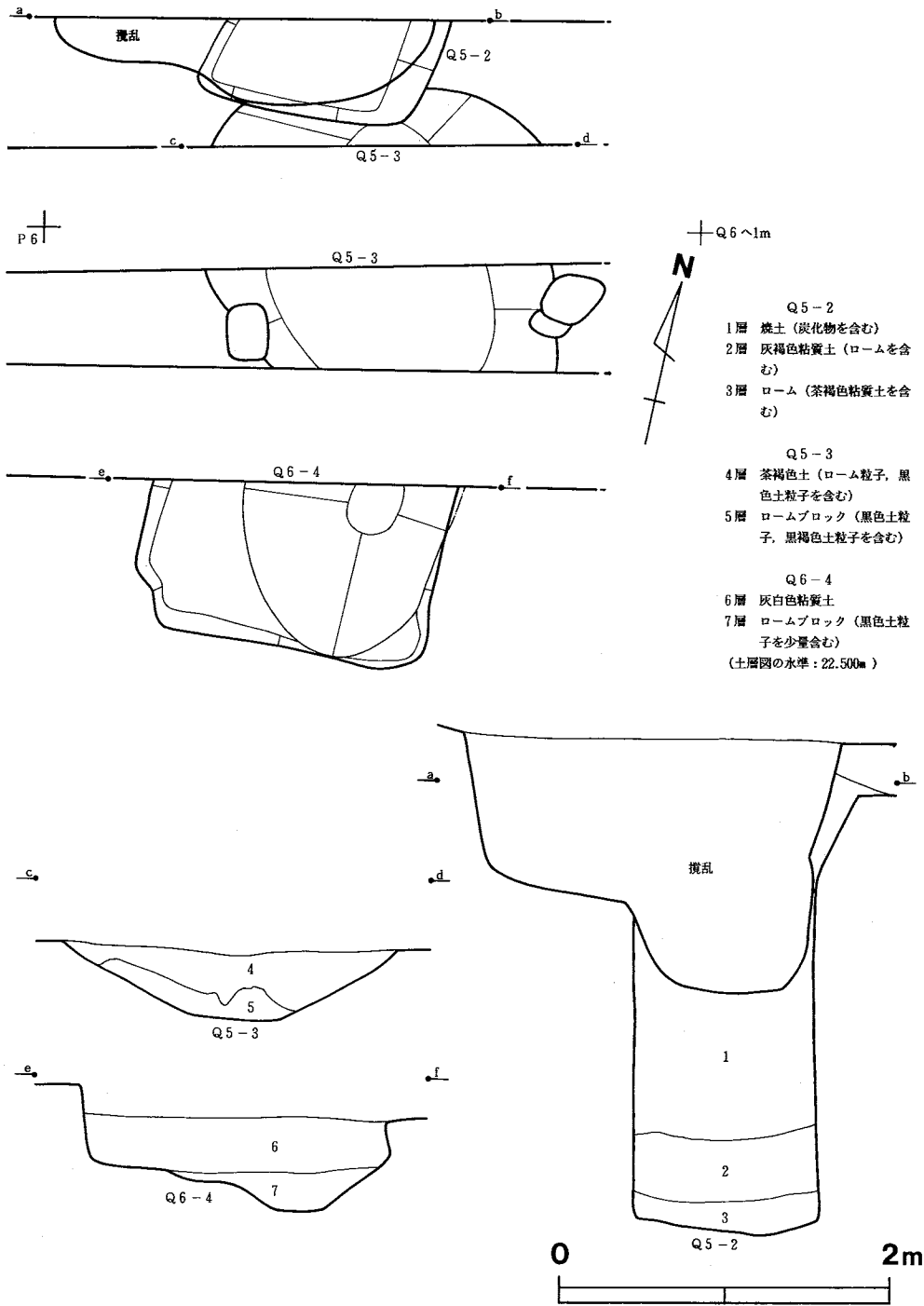


第329図 P~S=5~10区の遺構(13)

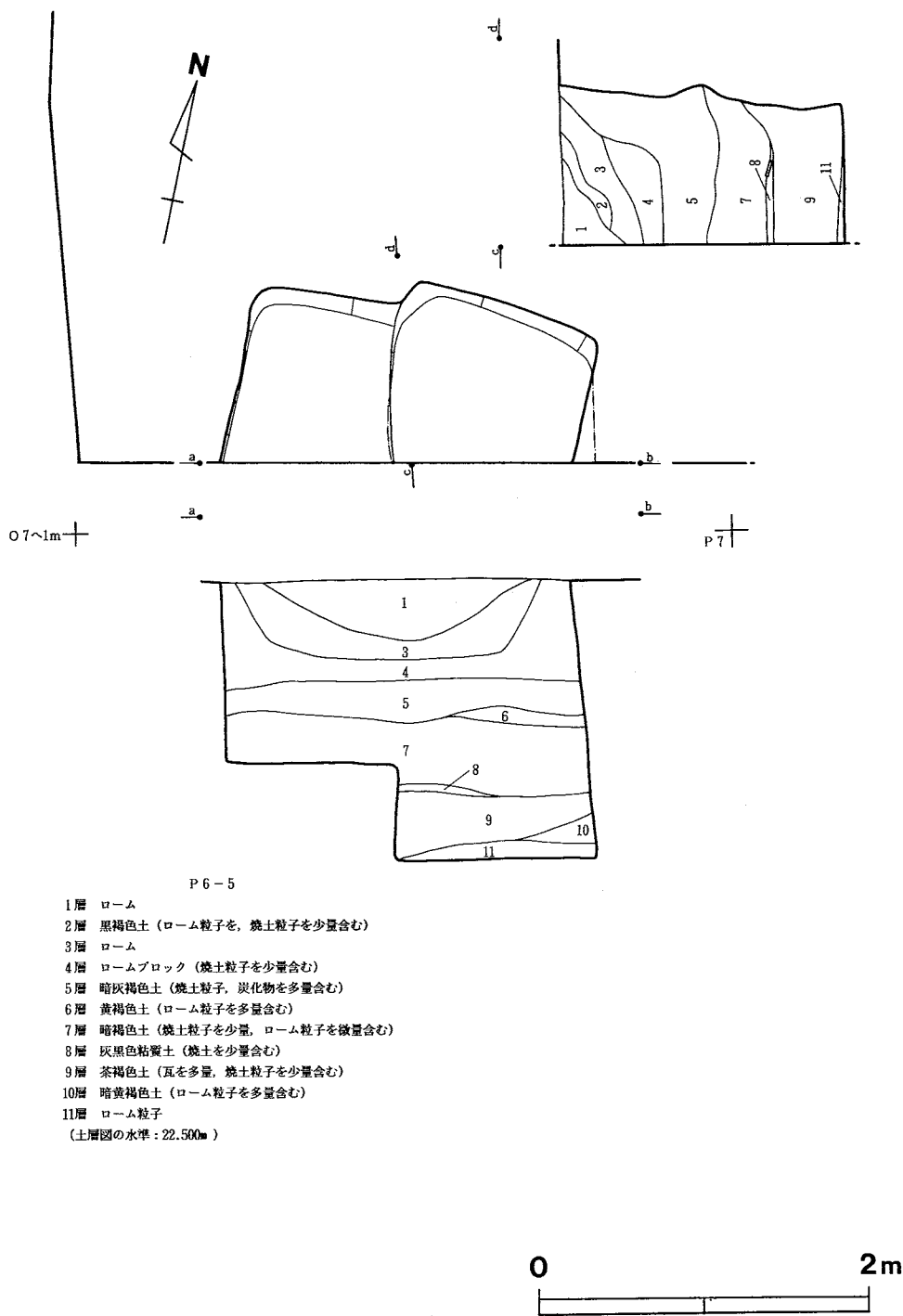
報告篇第四章 江戸時代の調査 II



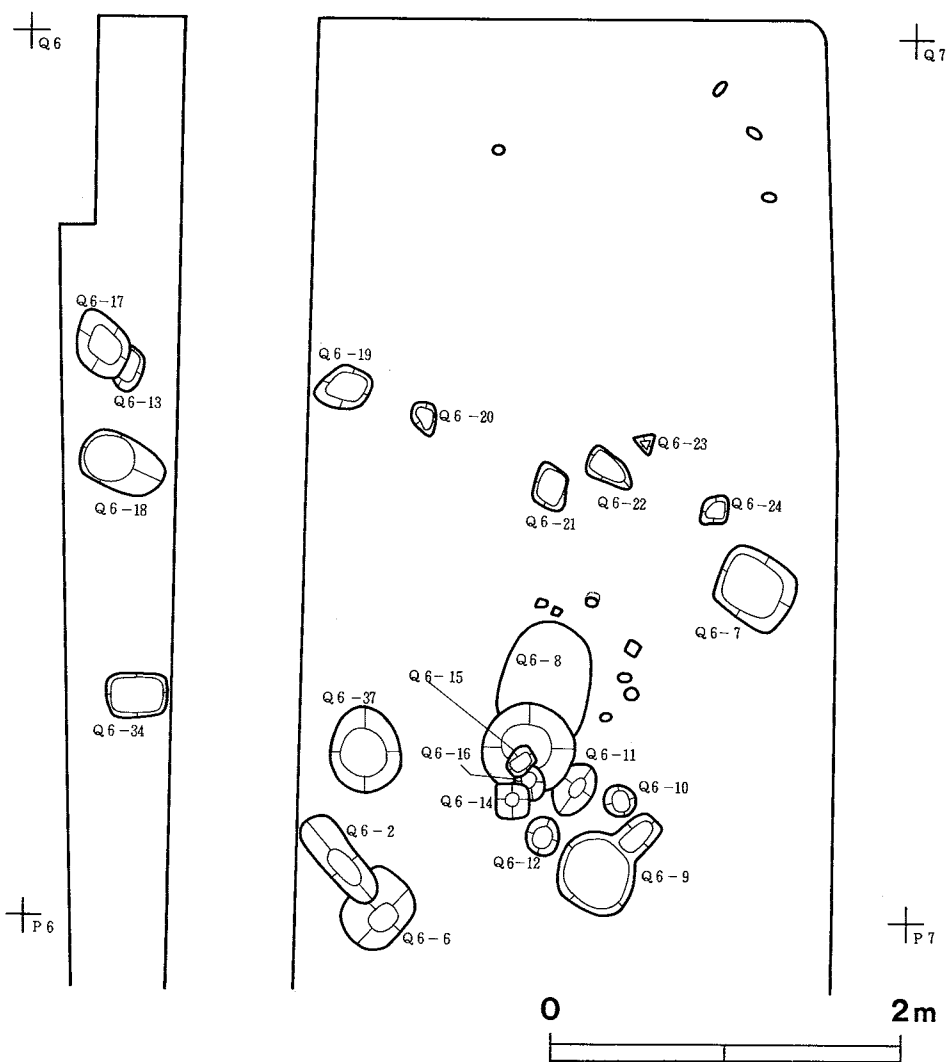
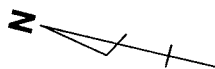
第330図 P~S=5~10区の遺構(14)



第331図 P~S = 5~10区の遺構(15)

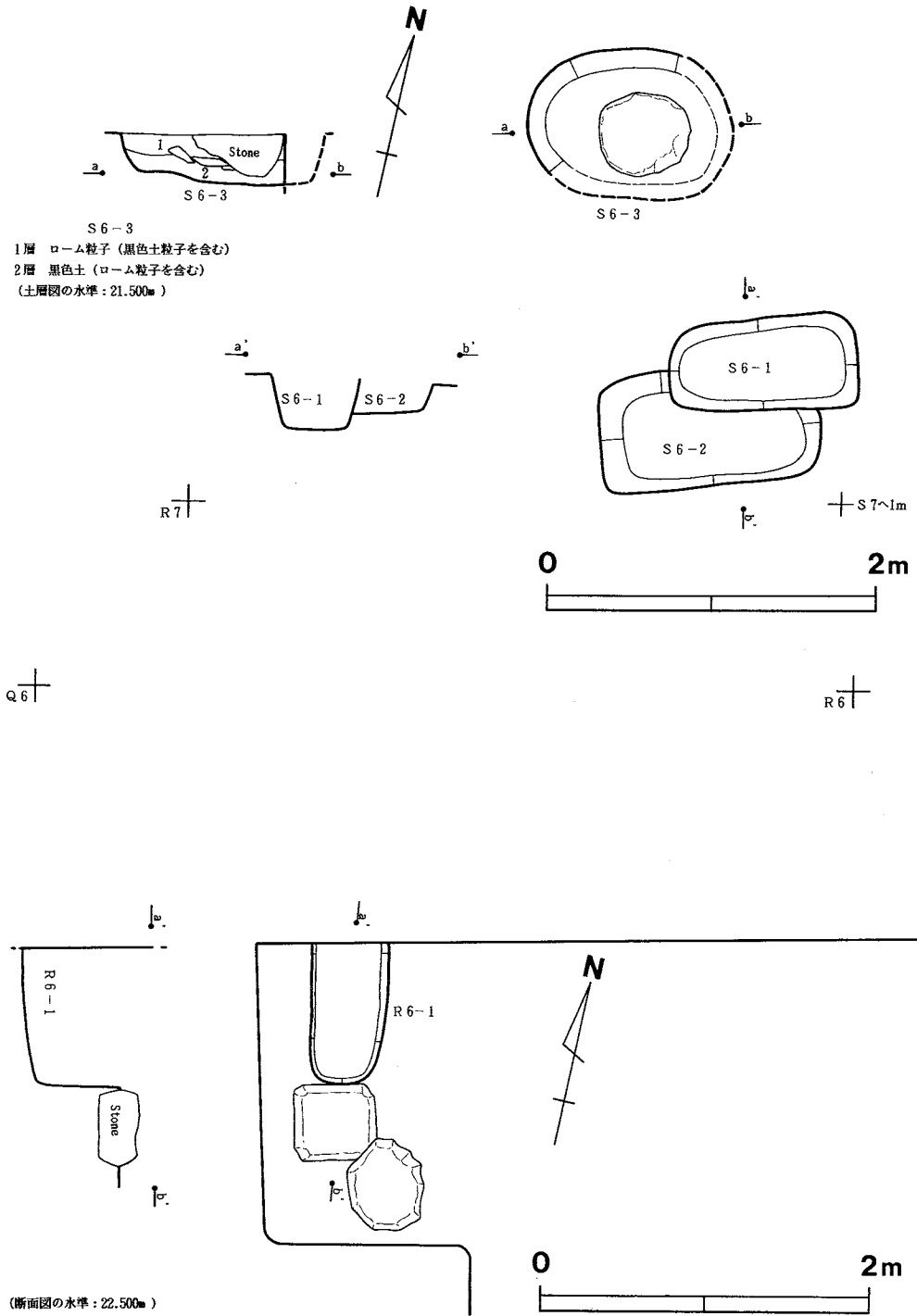


第332図 P ~ S = 5 ~ 10区の遺構(16)



第333図 P ~ S = 5 ~ 10区の遺構(17)

報告篇第四章 江戸時代の調査 II

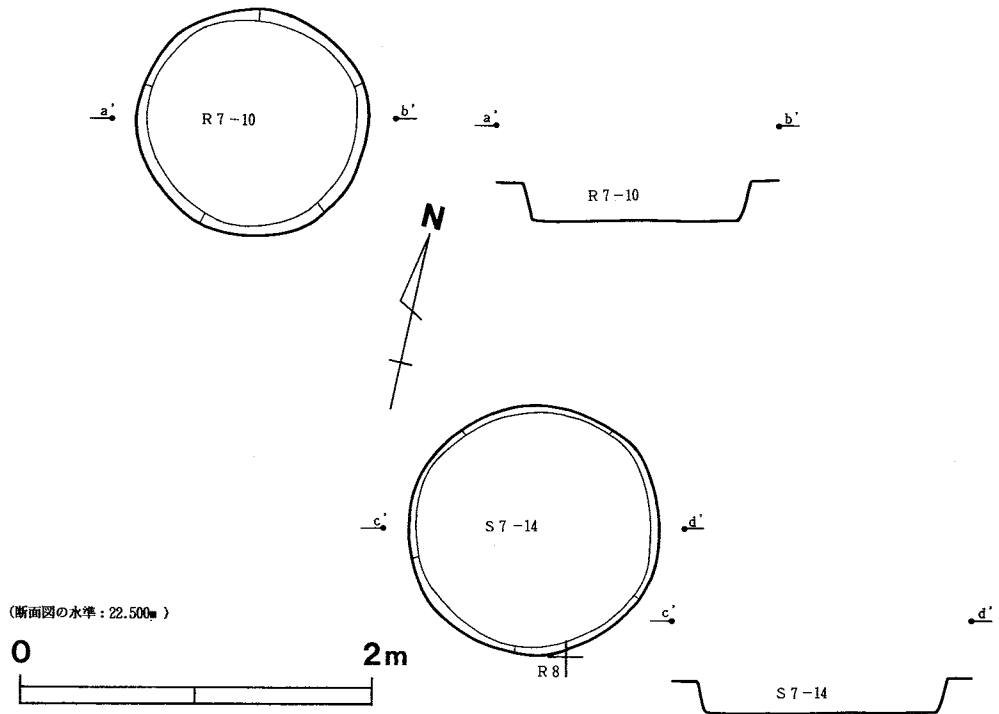


S6-3
 1層 ローム粒子 (黒色土粒子を含む)
 2層 黒色土 (ローム粒子を含む)
 (土層図の水準: 21.500m)

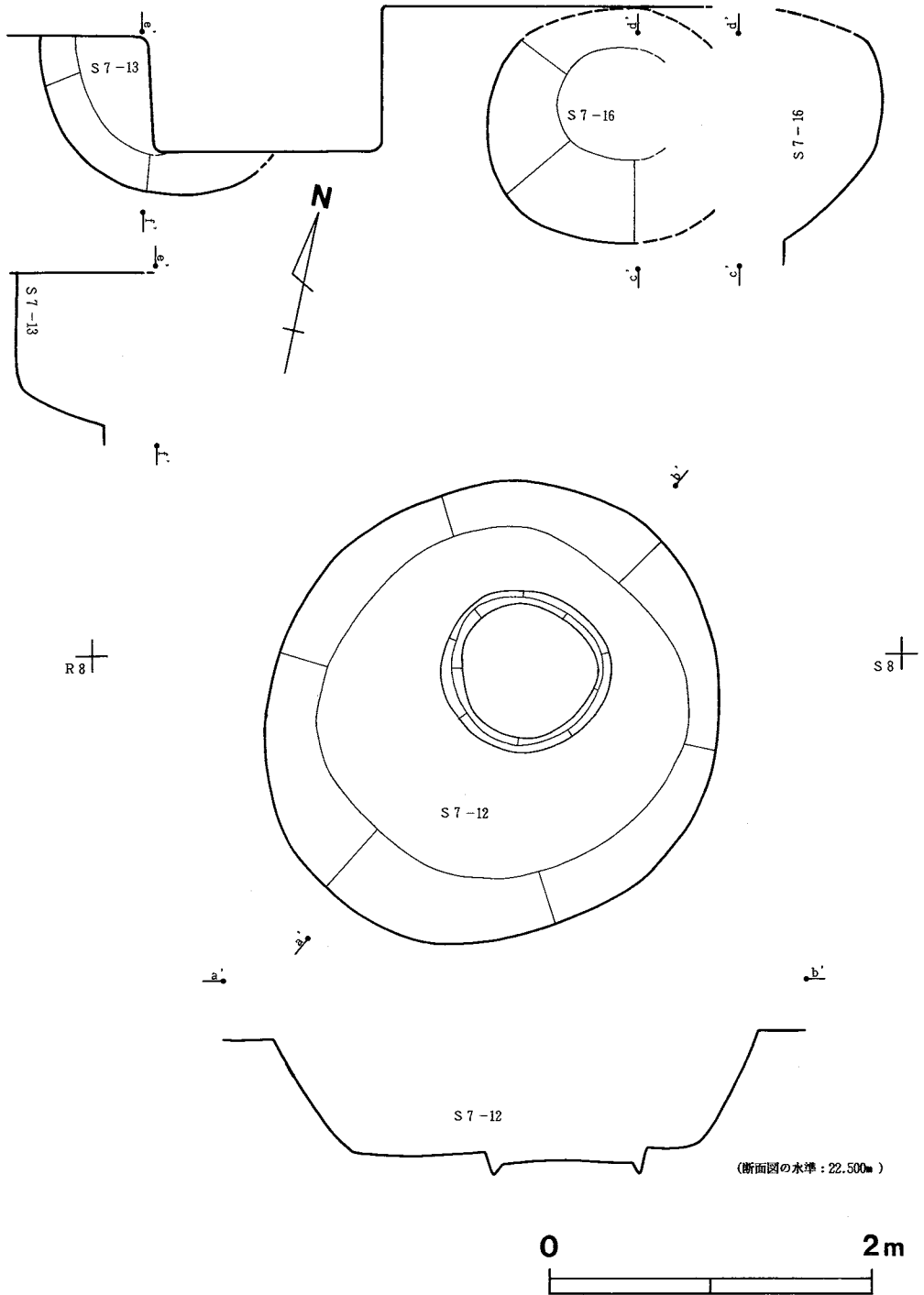
(断面図の水準: 22.500m)

第334図 P~S=5~10区の遺構(18)

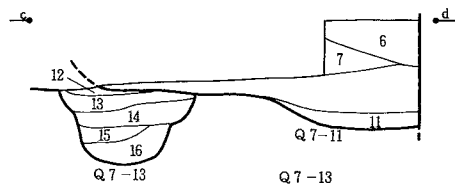
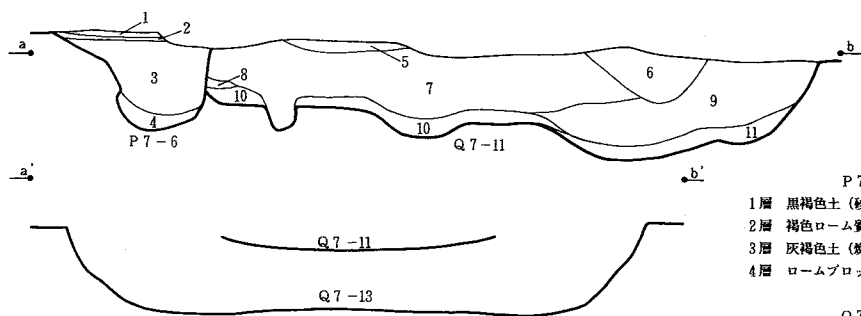
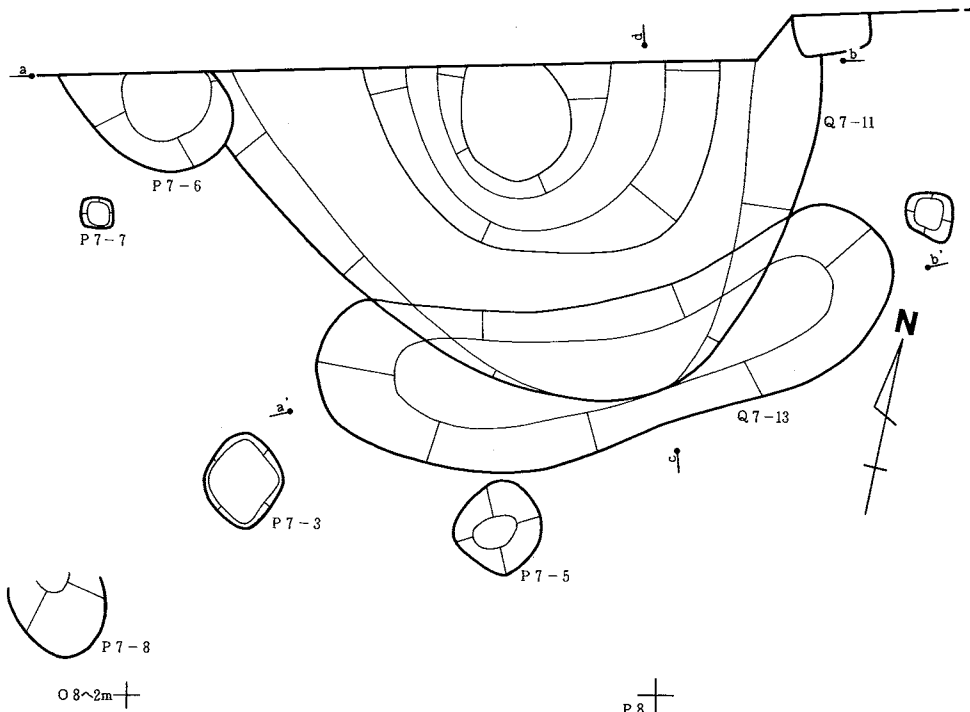
R7



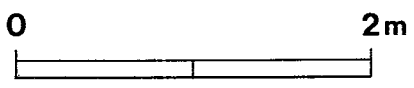
第335図 P~S = 5~10区の遺構(19)



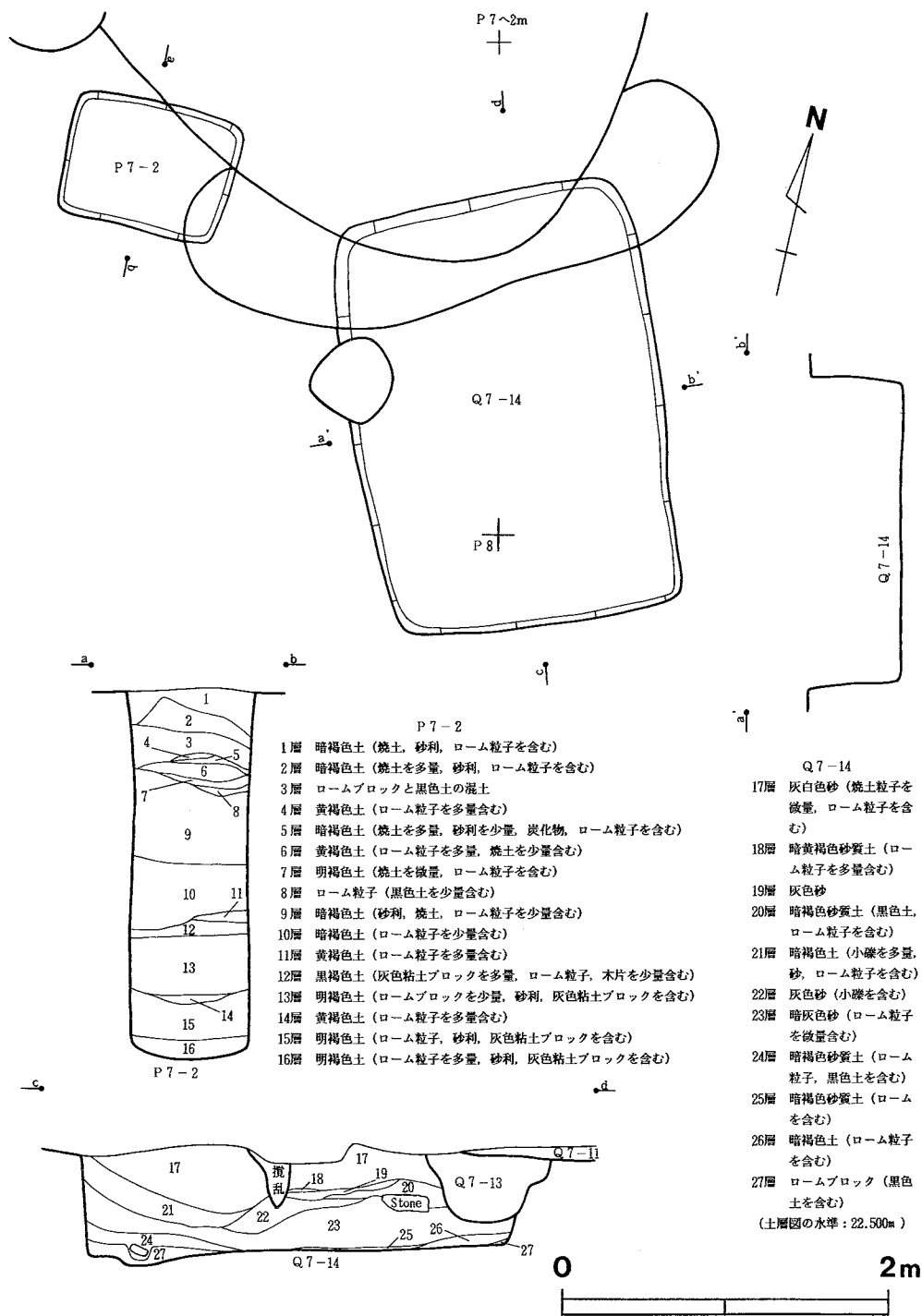
第336図 P ~ S = 5 ~ 10区の遺構(20)



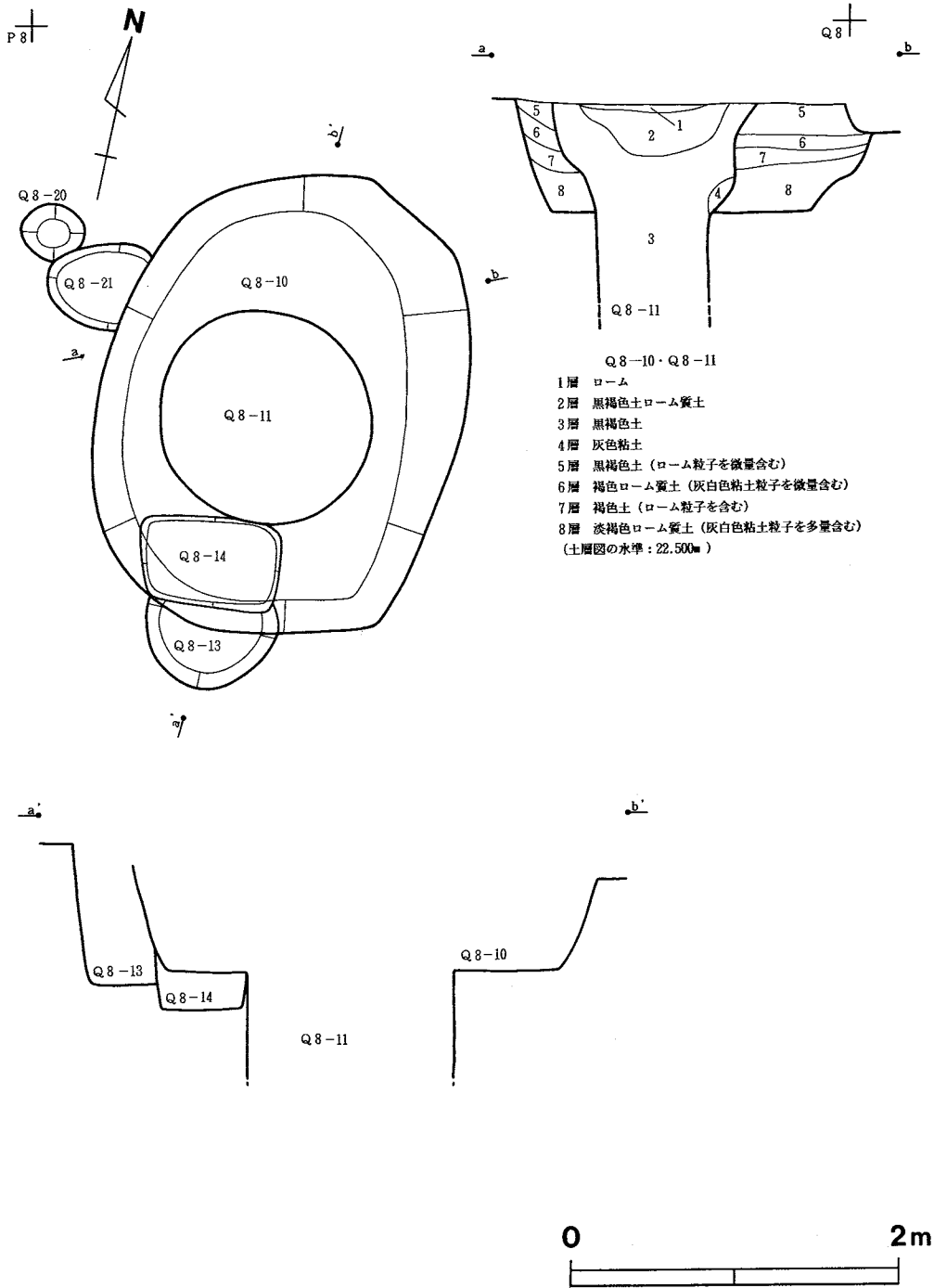
- P 7-6**
- 1層 黒褐色土 (砂を微量含む)
 - 2層 褐色ローム質土
 - 3層 灰褐色土 (焼土粒子を微量含む)
 - 4層 ロームブロック
- Q 7-11**
- 5層 褐色ローム質土
 - 6層 灰色粘質土
 - 7層 黒褐色土 (ローム粒子, 炭化物, 焼土粒子を含む)
 - 8層 黒褐色土 (焼土粒子を微量, ローム粒子を含む)
 - 9層 赤褐色土 (焼土粒子, 炭化物を多量含む)
 - 10層 褐色ローム質土
 - 11層 褐色ローム質土 (黒色土粒子, 焼土粒子を微量含む)
- Q 7-13**
- 12層 ローム (黒色土を含む)
 - 13層 ローム (黒色土粒子を含む)
 - 14層 明褐色土 (焼土粒子, 黄色砂を含む)
 - 15層 ローム (焼土粒子を微量, 黒色土を含む)
 - 16層 黒色土 (ローム粒子を多量, 焼土を微量含む)
- (土層図の水準: 22.500m)



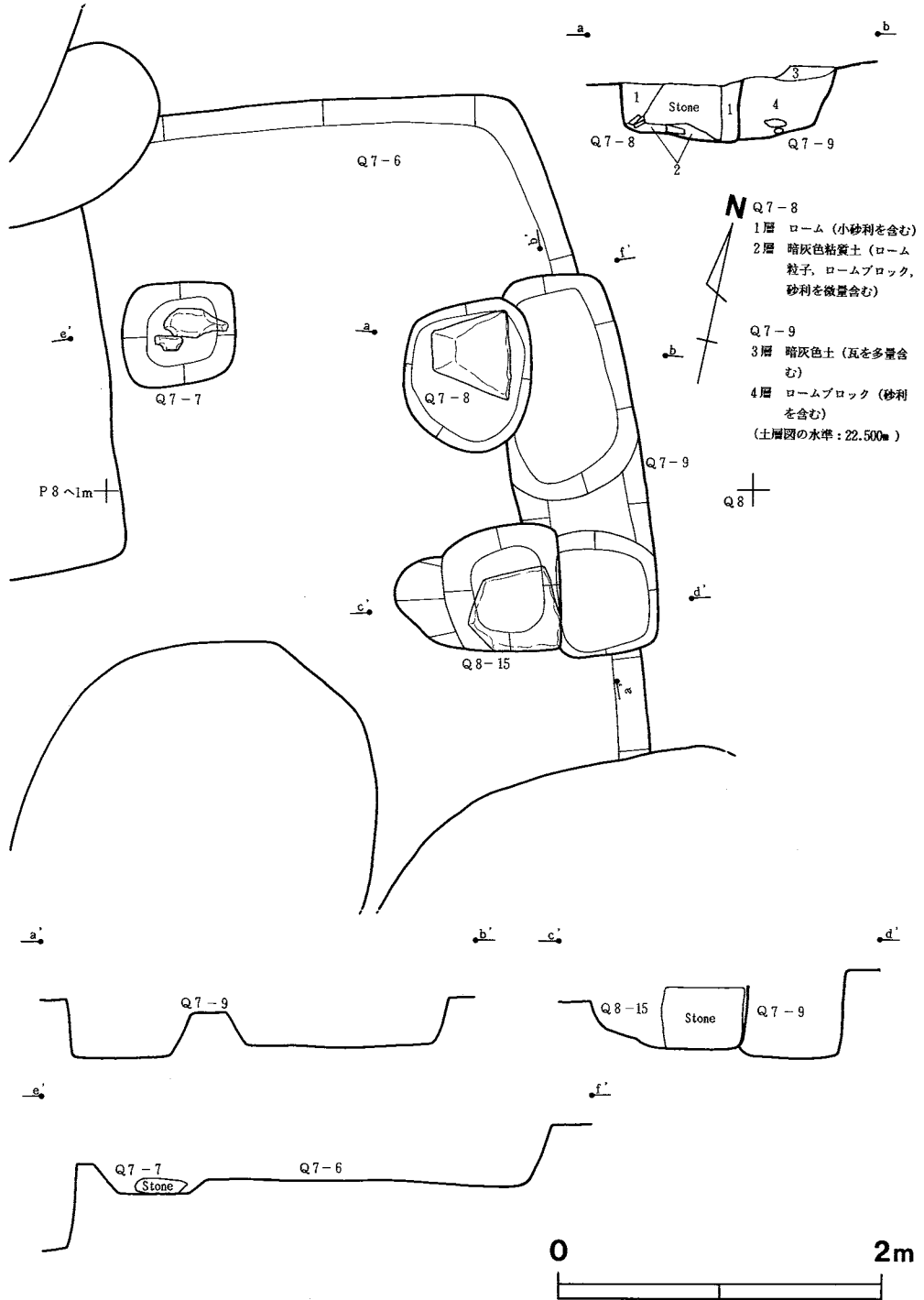
第337図 P ~ S = 5 ~ 10区の遺構(21)



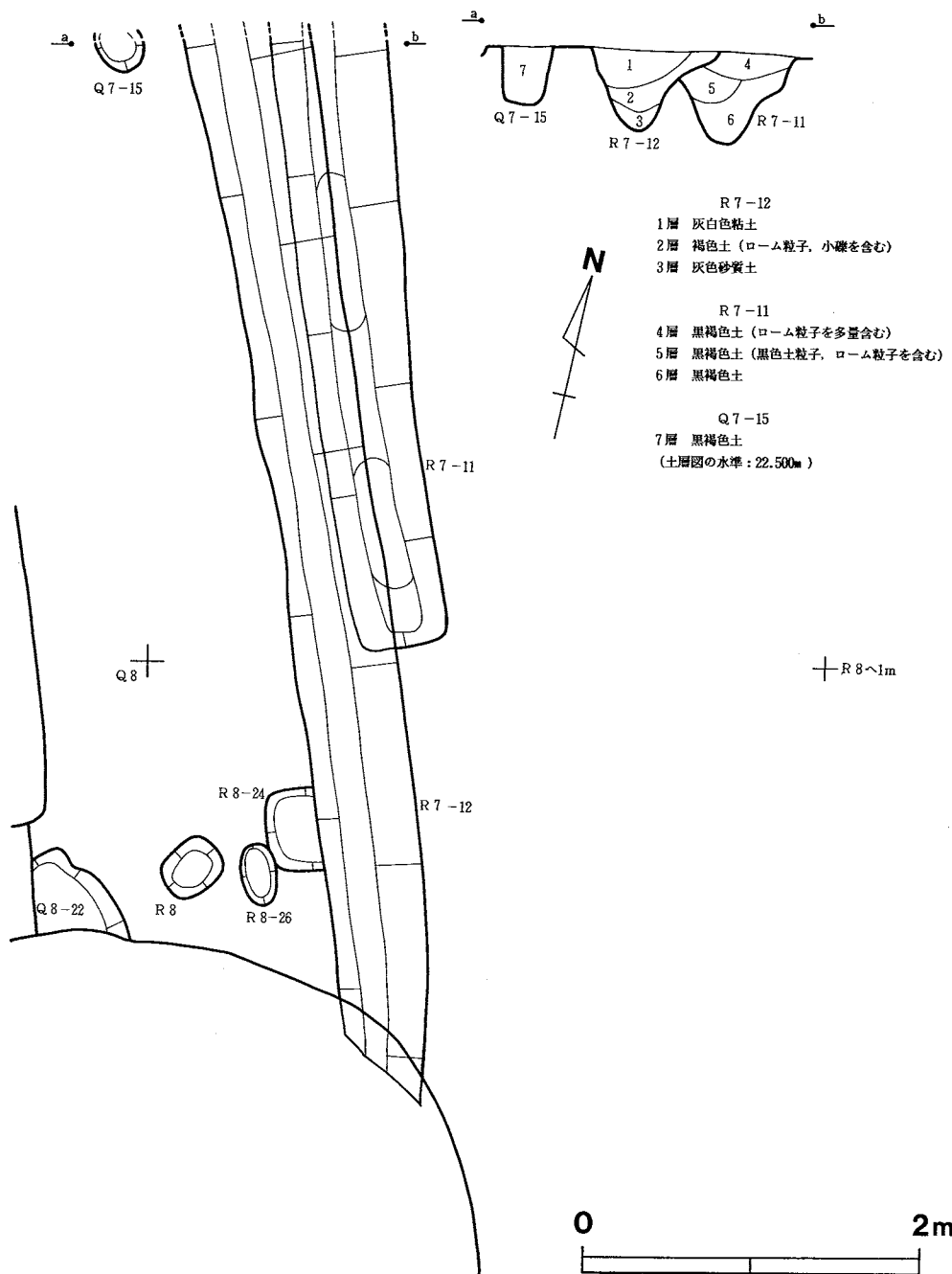
第338図 P ~ S = 5 ~ 10区の遺構(22)



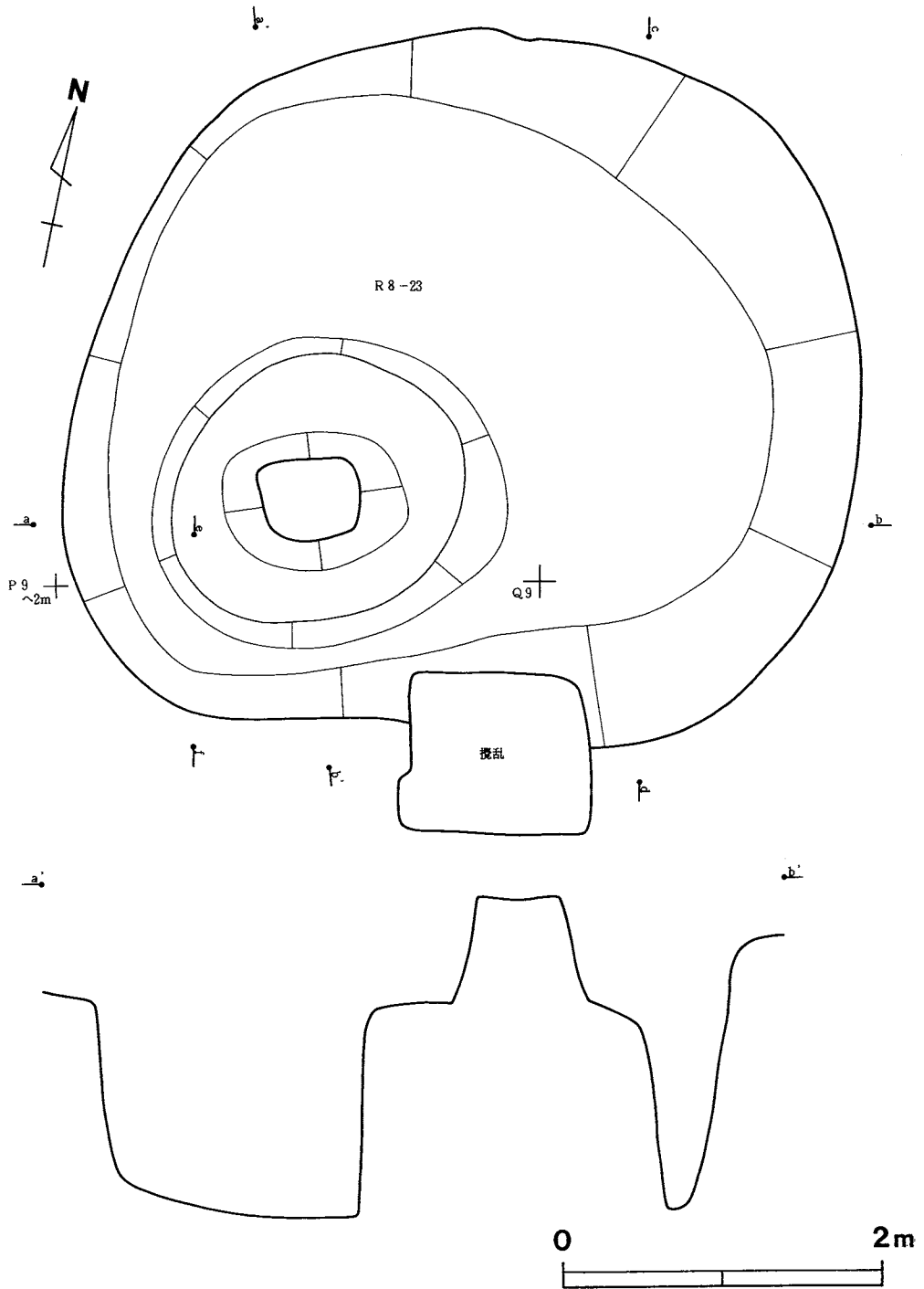
第339図 P~S = 5~10区の遺構(23)



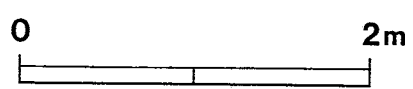
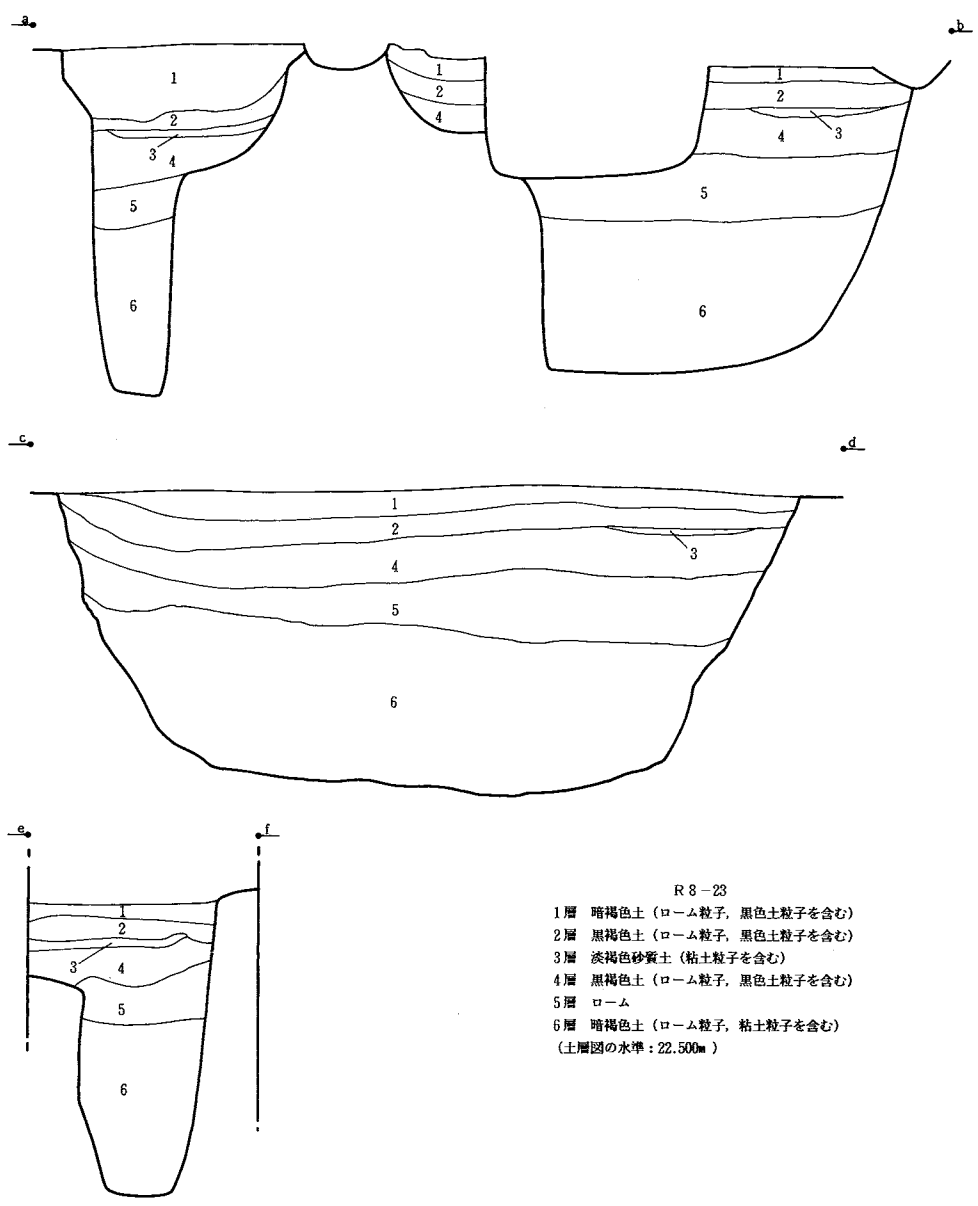
第340図 P~S=5~10区の遺構(24)



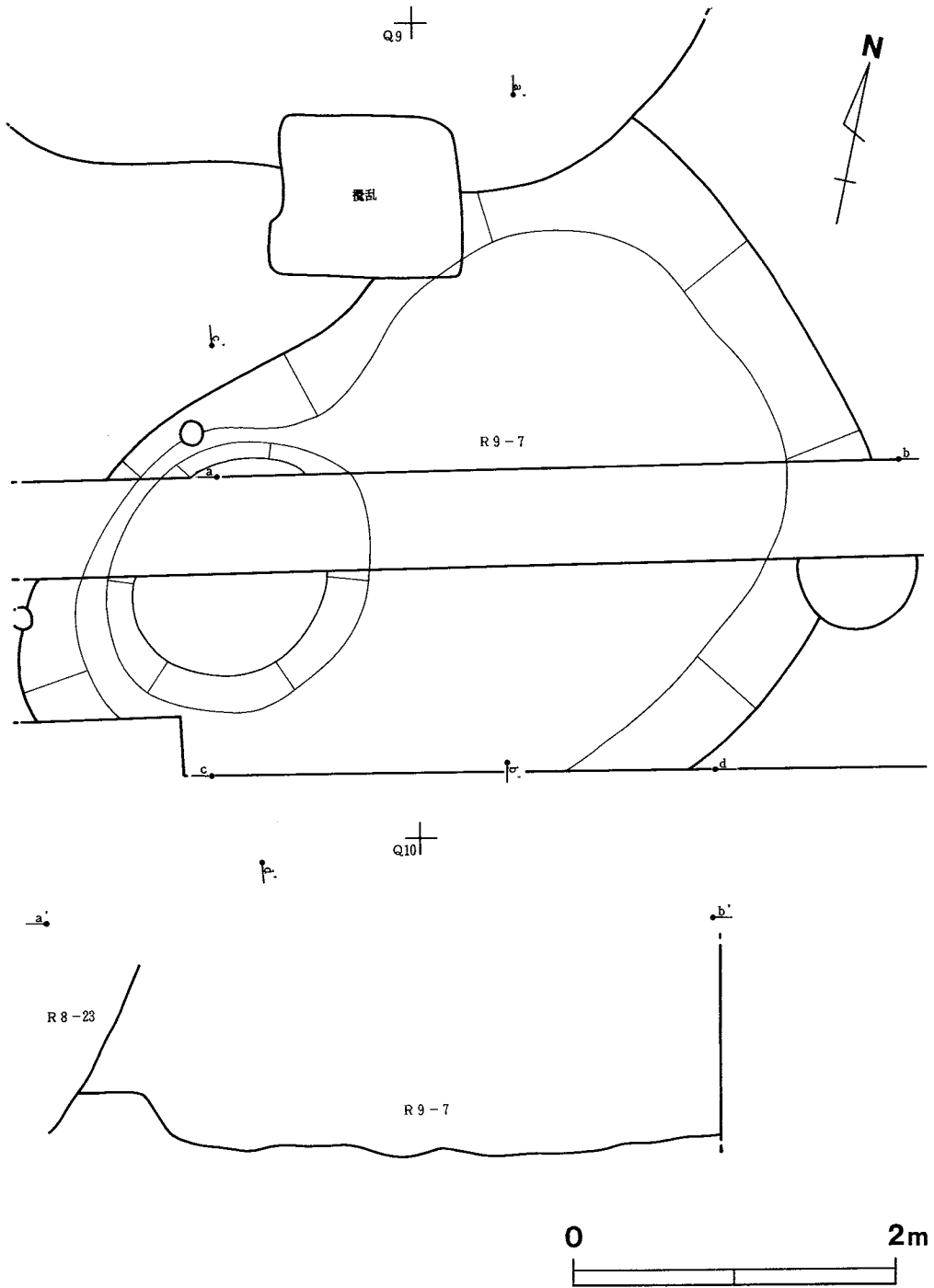
第341図 P~S = 5~10区の遺構(25)



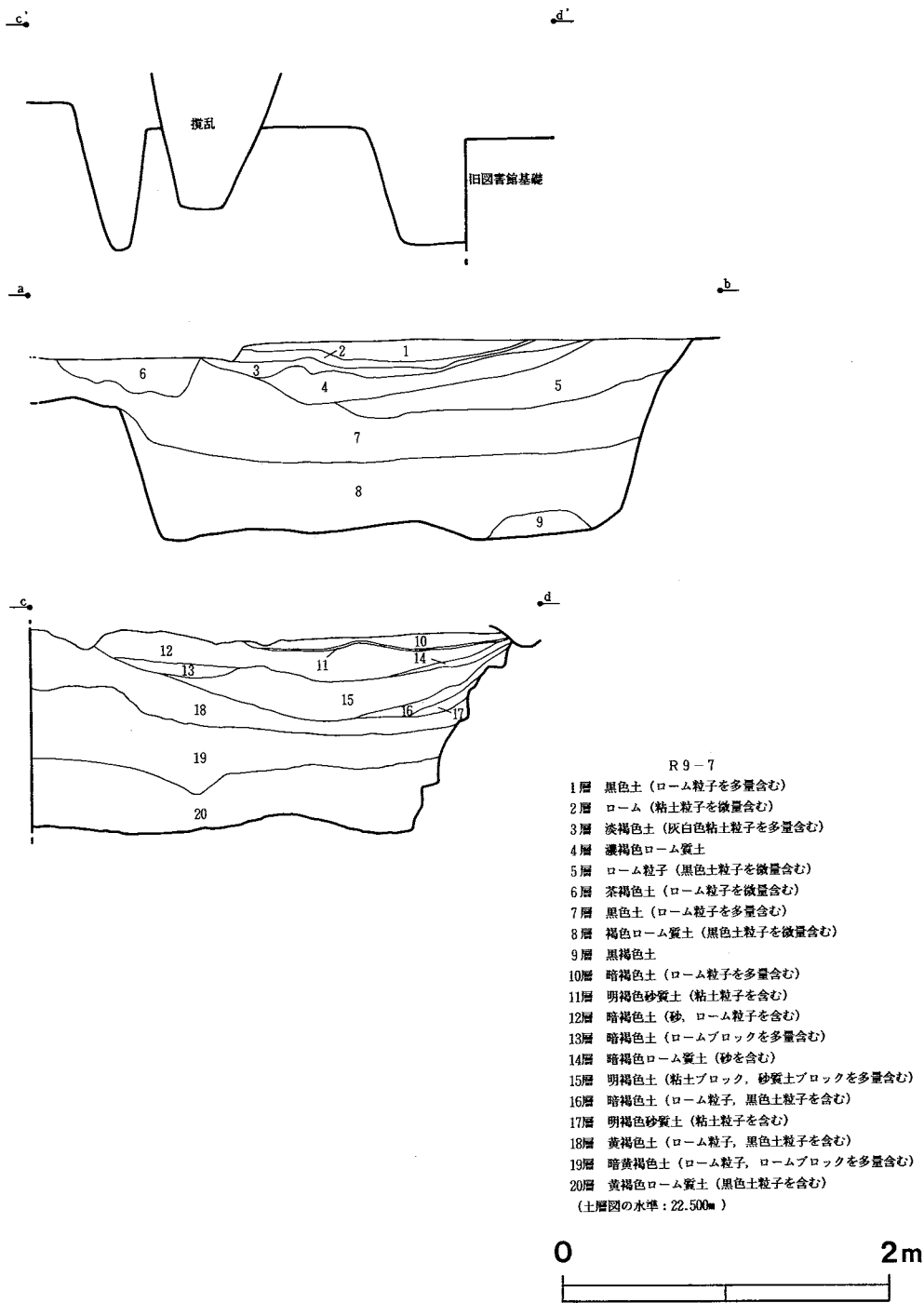
第342図 P~S = 5~10区の遺構(26)



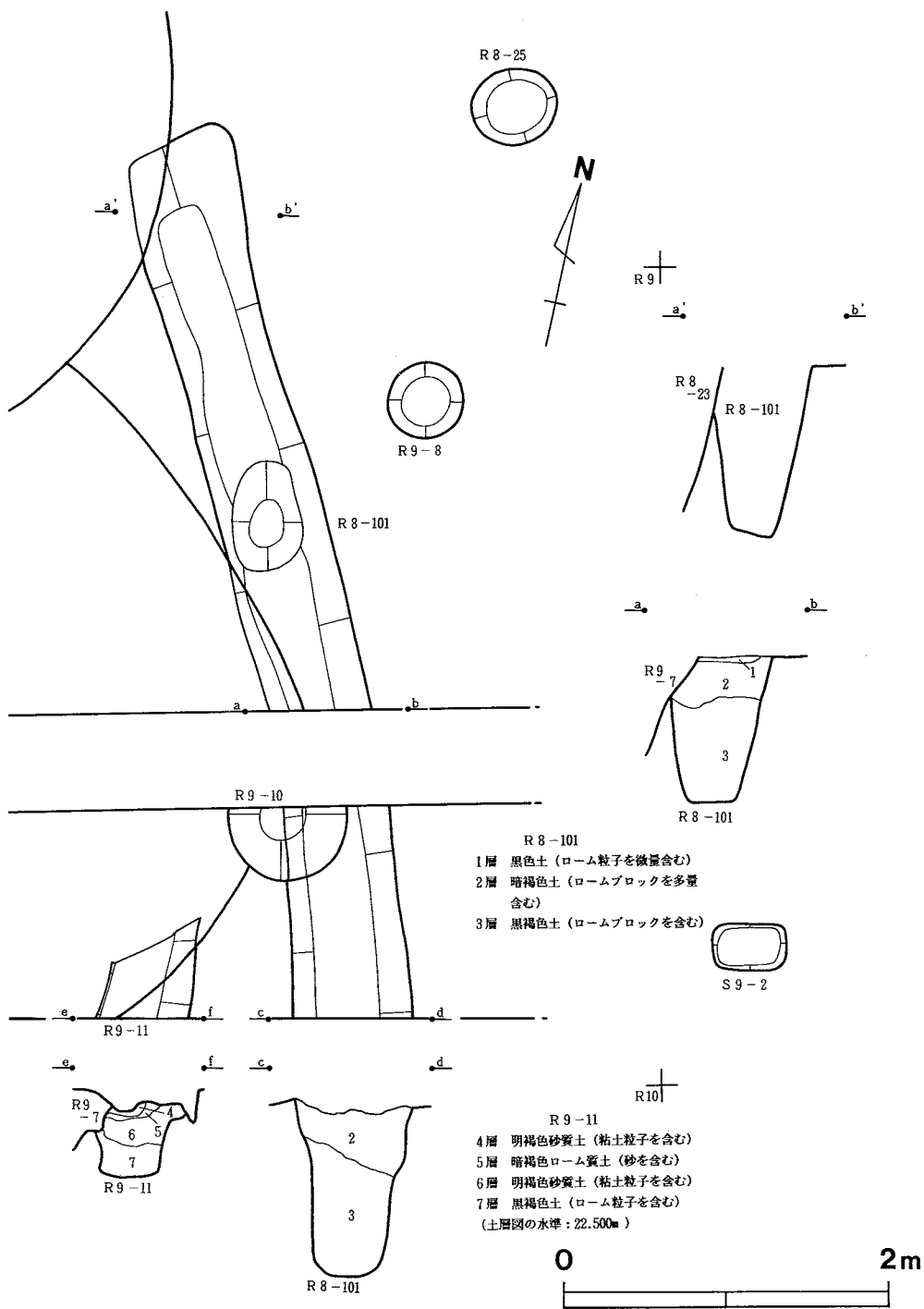
第343図 P ~ S = 5 ~ 10区の遺構(27)



第344図 P~S=5~10区の遺構(28)

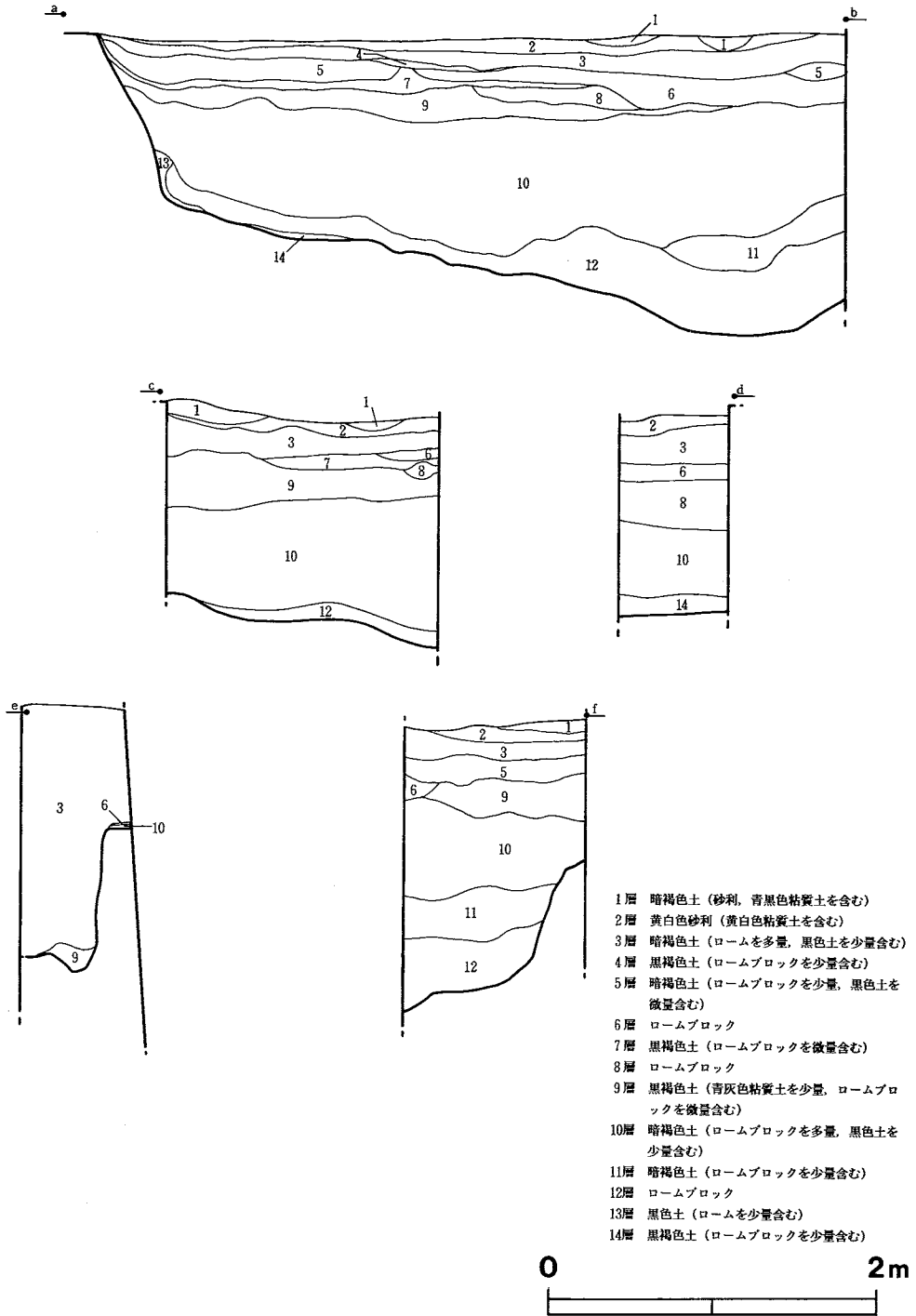


第345図 P~S = 5~10区の遺構(29)

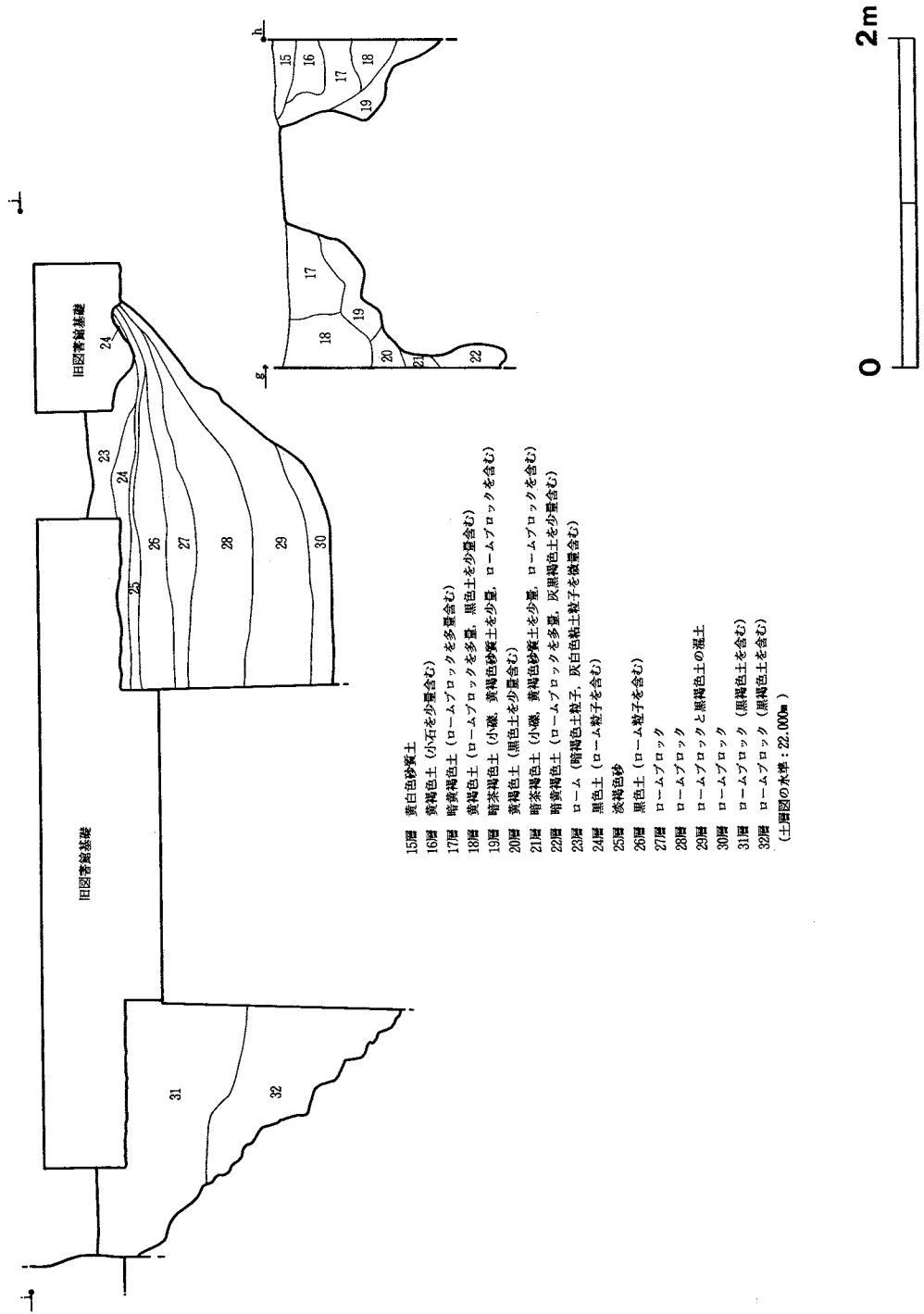


第346図 P~S=5~10区の遺構(30)

報告篇第四章 江戸時代の調査 II



第348図 P～S = 5～10区の遺構(32)



- 15層 黄白砂質土
 - 16層 黄褐色土 (小石を少量含む)
 - 17層 暗黄褐色土 (ロームブロックを多量含む)
 - 18層 黄褐色土 (ロームブロックを多量、黒色土を少量含む)
 - 19層 暗茶褐色土 (小礫、黄褐色砂質土を少量、ロームブロックを含む)
 - 20層 黄褐色土 (黒色土を少量含む)
 - 21層 暗茶褐色土 (小礫、黄褐色砂質土を少量、ロームブロックを含む)
 - 22層 暗黄褐色土 (ロームブロックを多量、灰黒褐色土を少量含む)
 - 23層 ローム (暗褐色土粒子、灰白粘土粒子を少量含む)
 - 24層 黒色土 (ローム粒子を含む)
 - 25層 漆褐色砂
 - 26層 黒色土 (ローム粒子を含む)
 - 27層 ロームブロック
 - 28層 ロームブロック
 - 29層 ロームブロックと黒褐色土の混土
 - 30層 ロームブロック
 - 31層 ロームブロック (黒褐色土を含む)
 - 32層 ロームブロック (黒褐色土を含む)
- (土層図の水準：22.00m)

第349図 P～S = 5～10区の遺構(33)

(2) U~V=3~5区の遺構

U 3-1号土坑 (第350図)

黄褐色盛土面で焼土のつまったものとして確認された土坑である。U 3-2号土坑とともにこの付近ではもっとも新しい土坑である。U 3-3・5・6・10号土坑を直接的に切っている。やや不整の長方形をしており、0.8×1.0mの規模をもっている。壁面はほぼ垂直であり、下面が若干小さいという構造をしている。埋土は最上部の0.6mほどは焼土と壁土でも焼けたのではないかと考えられる10~15cmの焼土塊からなっており、他の土はほとんど入っていない。その下に0.2mの厚さの灰層がある。この下は10cmの厚さの粘質の暗褐色土になり、この下に5cm内外の厚さのロームが主体の黄褐色土があり、坑底になっている。いずれの層もほぼ水平の堆積であり、自然に埋まった状態ではない。最下層の黄褐色土、あるいはその上の粘質の暗褐色土が使用当時の堆積であったのかもしれない。その上の灰層と焼土は明らかに人為的に埋めもどしたものと考えることが妥当であろう。

遺物はこの調査区の中かの遺構としては多い部類になるが、その大部分は焼土から出土している、底面近くの二つの層からはほとんど出土をみていない。陶磁器・瓦・煙管の雁首が代表的なものである。これらはいずれも火を受けていることは明らかであり、焼土とともに火事後始末をした際に埋められたものであろう。

本土坑の機能・用途については不明であるが、ほぼ同時期、同じ埋土を持つ土坑がU 4-2号土坑をはじめとして、一直線上に現在確認できているものだけで7個あり、その中間には、近代以後の建築によって、なお3個あったことが推定される。これらはほぼ2間置きにあり、その底面のレベルはほぼ19.4m内外とほぼ一定している。これが大きな手掛かりになると思われるが、現状では不明とせざるを得ない。 (藤本 強)

U 3-2号土坑 (第350図)

やはり黄褐色土盛土面で確認されたもので、U 3-3・4・6号土坑を直接的に切っている。U 3-1号土坑とともにこの周辺ではもっとも新しい。平面形は隅丸の長方形で、規模は南北1.2m、東西0.8m強であったと思われるが、南西側のかかなりの部分を法科大学・文科大学の建物の基礎によって破壊されているのではっきりしない。深さは0.4m前後で、底は鍋底状を呈している。埋土はそれぞれが10cm前後の厚さをもつもので、上から焼土まじりの黒色土、灰まじりの褐色土、焼土となっている。U 3-1号土坑との関係ははっきりしないが、同時に捨てられた可能性も否定できない。遺物は瓦の小片が中心であり、比較的上部から出土している。 (藤本 強)

U 3-3号土坑 (第350図)

U 3-1・2号土坑調査中にその壁面に焼土・焼土塊を含む部分があり、それを掘り上げ、確認した。かなりの部分をU 3-1号・U 3-2号土坑によって切られている。埋土は焼土・焼土塊を多量に含む褐色土である。1.2×0.6mぐらゐの大きさの楕円形の土坑かと思われるが、全容

は把めない。U 3-4号・6号土坑を切っている。深さは確認面から0.4mほどである。遺物は焼土にまじって、瓦の破片がある。 (藤本 強)

V 3-5号土坑 (第350図)

黄褐色土の盛土上面で確認されたもので、東側は調査区の外にでている。一辺1.0mぐらいの方形のものであったものと思われる。西側は上部をU 3-1号土坑によって切られ、U 3-6号土坑の東北端を切っている。埋土は小砂利と焼土をまじえる暗褐色土である。遺物は瓦の小片が主体である。 (藤本 強)

V 3-7・8号土坑 (第350図)

いずれも黄褐色土上面で確認されたもので、東側は調査区の外に出ている。V 3-7号土坑はV 3-8号土坑を切っていて、両者ともV 3-11号井戸を切っている。またV 3-8号土坑はU 3-10号土坑を切っている。どちらも不整形の平面形をしており、暗褐色土、黒色土を主体にする埋土をもっている。V 3-8号土坑には小砂利が主体になるところもみられる。遺物はほとんどみられない。 (藤本 強)

U 3-4号土坑 (第351図)

上部をU 3-2, 3号土坑に切られ、わずかに残っていた土坑である。一辺0.6mぐらいの隅丸方形の土坑であり、U 3-6号土坑の坑底をわずかに切っている。南西部は旧法科大学・文科大学の基礎によって破壊されている。黄褐色土を埋土としており、坑底近くに径4~5cmの円礫が3見られた。遺物はない。 (藤本 強)

U 3-6号土坑 (第351図)

やはり黄褐色土の盛土の上面で確認されたものであるが、この面から確認された遺構の中では、もっとも古い。U 3-1・2・3・4・V 3-5号土坑に切られている。南側は比較的残りがよいが、西南部は旧法科大学・文科大学の基礎によって壊されている。1.7×1.6mぐらいの規模の長方形の土坑である。深さは確認されたところから約0.6mである。周辺の他の土坑と異なり、自然に堆積したのではないかと思われる層序をみせている。上から焼土・ローム細粒・小砂利を含む褐色土、焼土を含む暗褐色土になり、この下に焼土塊がより多くなる暗褐色土があり、灰を含む暗褐色土が中央部から北にかけての坑底のすぐ上にみられる。遺物は焼土、焼土塊を含む暗褐色土にみられ、瓦の小片が多い。他のものより若干大きく、堆積が自然堆積と考えられる点あるいは用途の違いがあったのではないかと思われるが、明確ではない。 (藤本 強)

V 4-1号土坑 (第351図)

黄褐色土上面で確認された土坑で、東半は調査区の外に出ている。U 3-9号土坑を切っている。一辺1.2m強の方形の土坑である。埋土は小砂利と焼土をまじえた暗褐色土であるが、坑底の一部に黒色土がみられ、上面の一部に黄白色の粘土がみられる。一時に埋められた可能性が強い。遺物は陶磁器少量と瓦が出土している。 (藤本 強)

U 4-2号土坑 (第351図)

黄褐色盛土上面で発見された遺構で、先にも述べたように U 3-1 号土坑など酷似した様相を呈している。西端は旧法科大学・文科大学の基礎によって破壊されている。0.8×1.0m ぐらいの長方形の平面形をもっていただけと考えられる。埋土は焼土・焼土塊を含む層が上部にあり、その下には暗褐色土の層を介しつつ、灰、ローム主体の黄褐色土が水平に堆積している。U 3-1 号土坑と基本的に同一の堆積である。U 3-9 号土坑を切っている。坑底の高さも 19.4m と U 3-1 号土坑とほぼ同じである。遺物は陶磁器、瓦片がある。ほとんどは焼土・焼土塊のなかから出土している。 (藤本 強)

U 3-9 号土坑 (第351図)

主要部を U 4 区にもつ土坑である。V 4-1, U 4-2 号土坑に切られている。U 3-6 号土坑と同様にやや大型の土坑である。1.8~1.9m 前後のやや丸味をおびた平面形をしている。やはり黄褐色土の上面から掘られたことが確認されている土坑で、埋土は自然堆積と思われる様相を呈している。上は小砂利を多量に含む黄褐色土であり、下はロームの細粒を含む黒色土になっている。坑底は鍋底状であり、若干の凹凸がある。遺物は少ない。 (藤本 強)

V 4-5・8 号土坑 (第351図)

V 4-5 号土坑は 1 m×0.6m 弱の平面形の、深さ 0.3m ほどの浅い土坑である。東北側により古い径 0.4m、深さ 0.2m の浅い V 4-8 号土坑があり、これを切っている。埋土はローム・焼土粒の入った黒色土である。

この二つの土坑は黄褐色土の盛土から掘られていて、その性格・内容は不明である。遺物は少ない。 (藤本 強)

V 4-101号井戸 (第352図)

黄褐色土盛土上面から掘られている井戸である。径 1.3m の素掘りのものであり、幅 20cm 強のローム・ブロックを含む黄褐色土がめぐっている。従って、井筒は径 0.9m ほどである。この黄褐色土は井筒と素掘りの間につめられたもので、V 3-11号井戸と同様におそらく木からなる井筒があったものと思われるが痕跡も認められなかった。やはり黄褐色土の断面は垂直であるので、桶による井筒ではなかったものと考えられる。井戸の上面かと思われるところには、長さ 1 m 強、幅 0.3m、厚さ 0.1m の長方形の切り石があった。これは当初井戸に直接関係するものかとも考えられたが、同様の石が 2ヶ井戸のなかから立ってあらわれた。また層位の所見からも、積極的に井戸と関係をもつとする根拠も得られなかったので、偶然に井戸が埋められる時にここにおかれたものとするのがより妥当であろうと考えている。埋土は上部が灰・砂利を多量に含む灰褐色土で、下部は大型ローム・ブロック、大型の円礫を多量に含む暗褐色土になっている。先述の板石はこの下部の暗褐色土に入っていた。堆積の状況を見ると意図的に埋められた可能性が強いように思われる。遺物は陶磁器等が少量出土している。 (藤本 強)

U 4-3 号土坑 (第352図)

やはり黄褐色土の上面で確認されたもので、東側は V 4-101号井戸で切られ、西側は旧法科大

学・文科大学の基礎によって壊されている。一辺1.7~1.8m ぐらいの長方形の土坑であり、U 3-1号土坑などと類似している。底は鍋底状であり、凹凸もみられ、深さは0.6m 内外である。埋土は若干の灰を含む暗褐色土である。遺物は少ない。(藤本 強)

V 4-6・7号土坑 (第352図)

V 4-6・7号土坑の東側は調査区の外に出ている。6号土坑が7号土坑を切っている。いずれも0.3m と0.2m という浅い土坑であり、その全容は不明である。埋土は暗褐色土を主体にするものである。

この二つの土坑は黄褐色土の盛土から掘られていて、その性格・内容は不明である。遺物は少ない。(藤本 強)

V 4-4号土坑 (第352図)

やはり、黄褐色土上面で確認されたもので、V 5-3号土坑を切っており、共同溝作成時に南半が壊されている。径3 m 程の円形の土坑である。深さは0.5m ほどで、灰、小砂利を含む暗褐色土の埋土をもっている。坑底は鍋底状である。遺物は陶磁器が少量出土している。

(藤本 強)

V 5-3号土坑 (第352図)

V 5-1・2号土坑は共同溝の南にあるので、その記載にゆずる。V 5-3号土坑は北・東は調査区外にでており、西はV 4-4号土坑に、南は共同溝によって壊されているのでその全容は明らかではない。やや複雑な様相をしており、これまでに述べた土坑とは性格が異なるものと考えられる。おそらく2 m をこえる大きさの隅丸方形の浅い掘りこみを作り、その中心を0.8m の円形にさらに掘りさげ、その底に一辺0.4m、厚さ0.2m の略正方形の石を置いたもので、石の上面と円形の掘りこみの上面との高さは同一である。これに砂利、ローム、白色粘土をまぜたものをつめ、つき固めている。おそらく建築物の基礎の一部であったものと考えられるが、はっきりしない。遺物はほとんどない。(藤本 強)

U 3-10号土坑 (第353図)

U~V=3~5区内で、V 3-11号井戸とともに黄褐色の盛土下にある遺構である。U 3-1、V 3-8号土坑に切られている。埋土はロームブロックを含む黒色土であり、確認したところからの深さは約0.25m である。鍋底状の0.7×1.0m ぐらいの楕円形の土坑と思われる。遺物はほとんど見られない。小規模ではあるがより南に数多くある盛土下の土坑群と同様の用途であったのであろうか。(藤本 強)

V 3-11号井戸 (第353図)

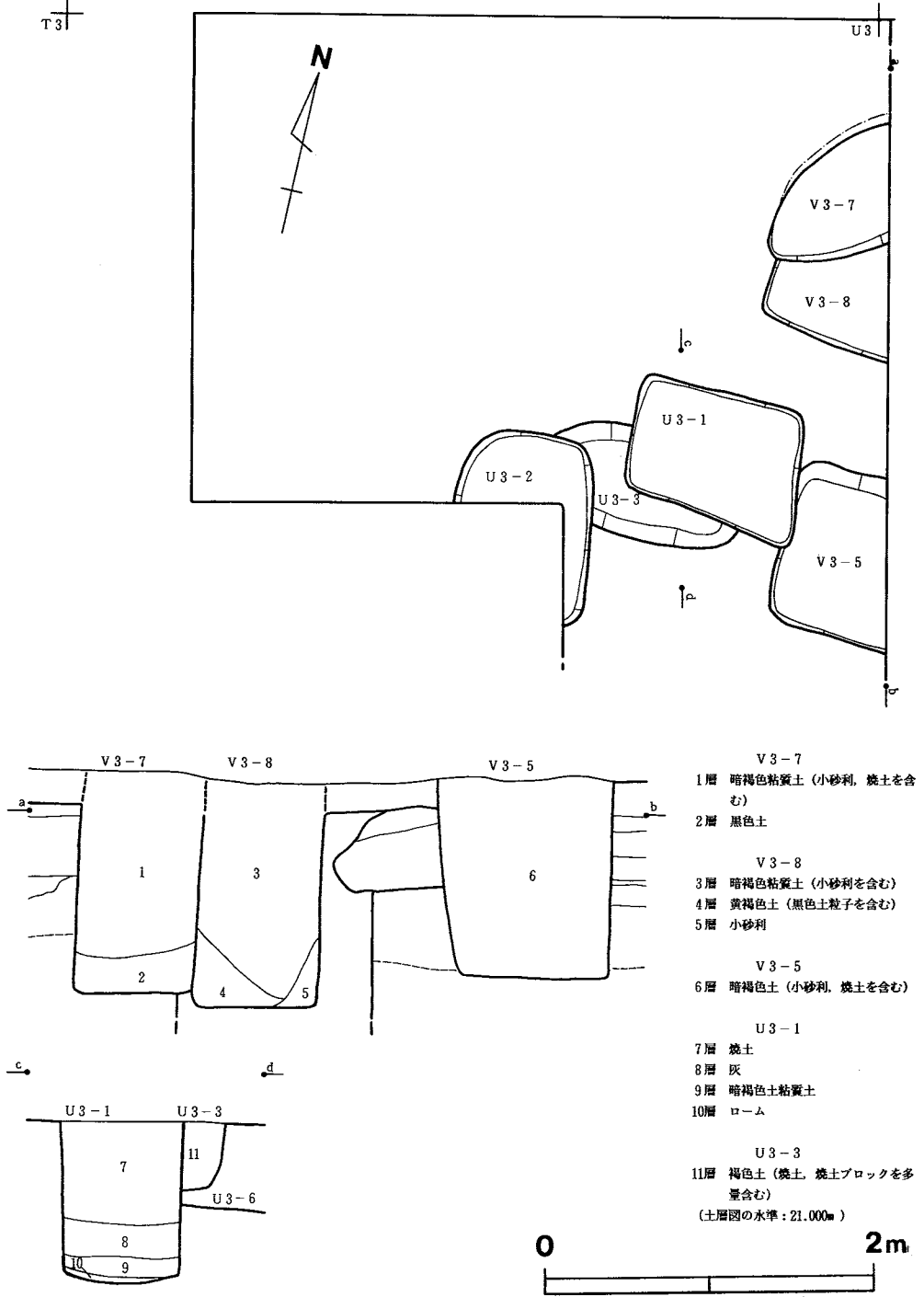
やはり黄褐色土盛土下の遺構である。V 3-8号土坑の下で発見したもので、半分以上調査区の東に出ている。調査区の東端で1.2m あるので、より直径は大きく1.4m ぐらいはあったものと思われる。井戸はローム層を掘りぬいているものと思われるが、上部の土がきわめて崩れやすいので完掘していない。素掘りであり、壁面はほぼ垂直である。井戸の素掘りした面の内側、ほぼ

報告篇第四章 江戸時代の調査 II

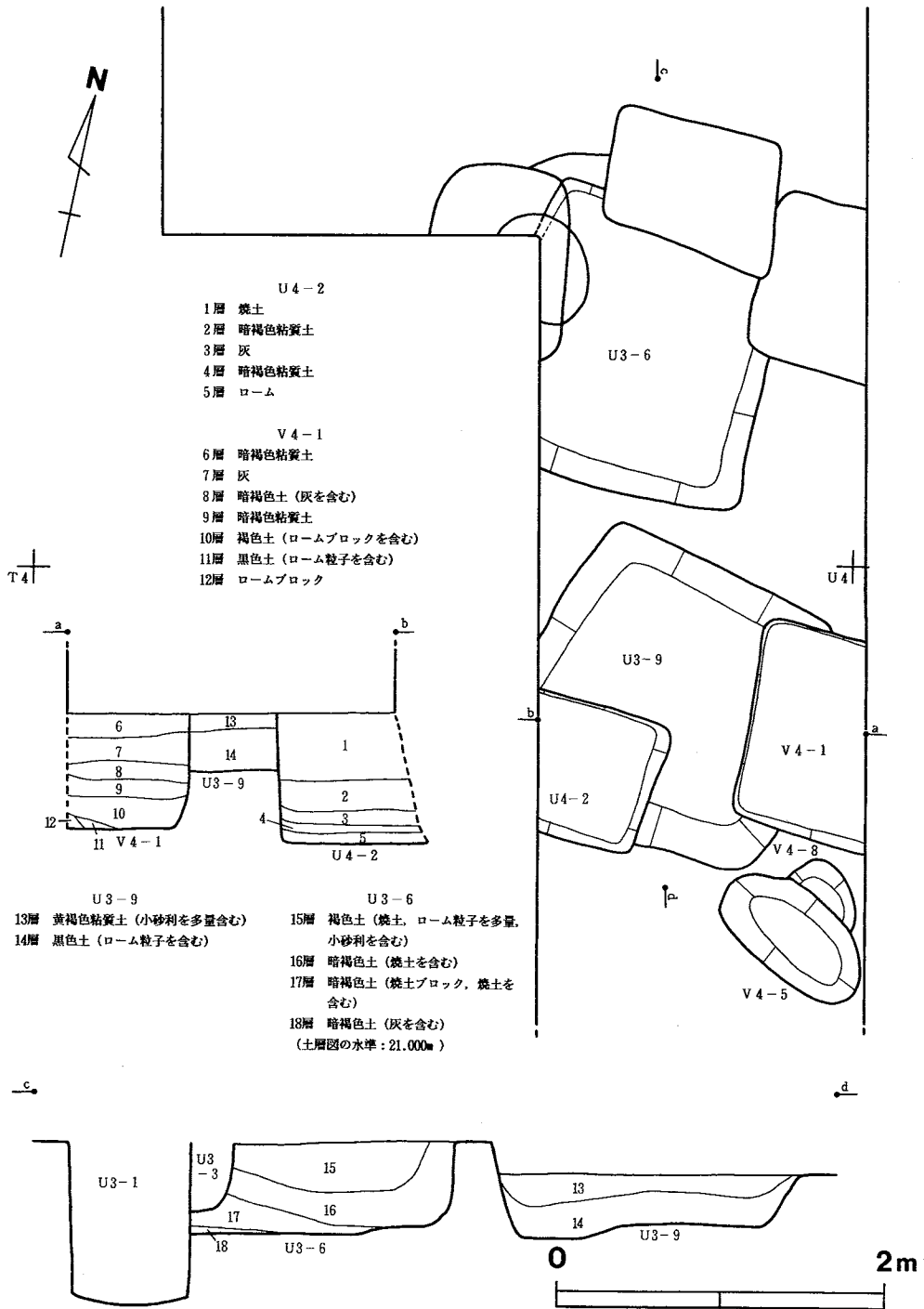
0.25mのところまではロームを主体にする黄褐色土がつめられている。これは均質であり、明らかに何らかのもので井筒を作り、井筒と素掘りとの間につめたものであろう。おそらく木質のもので井筒は作られていたのであろうが、痕跡すら残っていなかった。井筒の直径は0.9mぐらいであったものと考えられる。桶ならば、その断面は傾斜することが常であるが、この井戸では埋土の断面は垂直であるので、桶ではないと考えるのが妥当であろう。埋土は上部1.2mまでは焼土のまじった暗褐色土であり、その下0.7mは黒褐色土になる。これらの下面はいずれも水平であり、埋めもどされたことを示している。その下は、瓦と1辺20～30cmの角礫を主体とするもので、土はほとんどみられず、これらの間には空隙が見られる。遺物は上部にはほとんどなく、下部の瓦と角礫からなる層の瓦のみである。

(藤本 強)

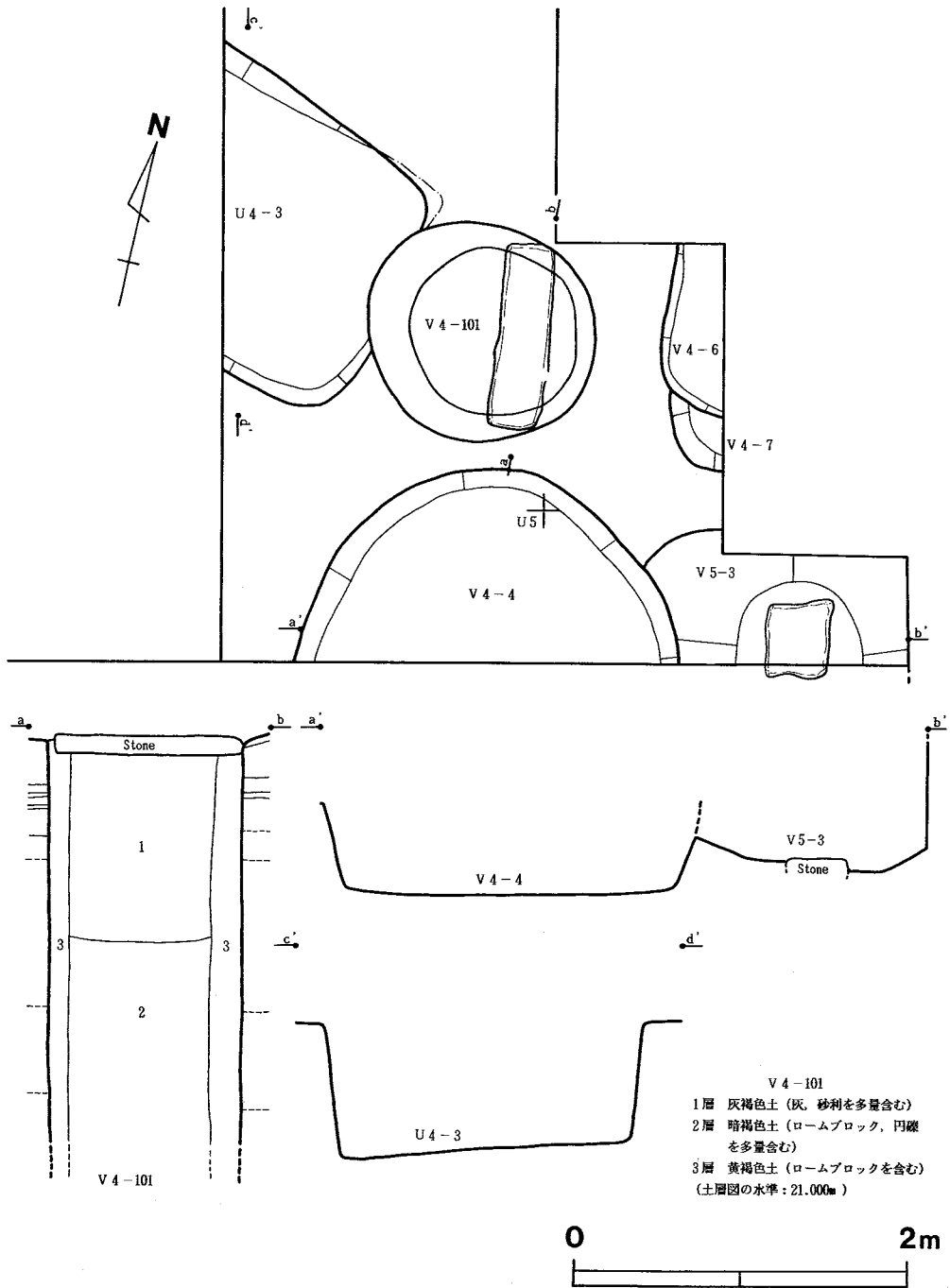
T3



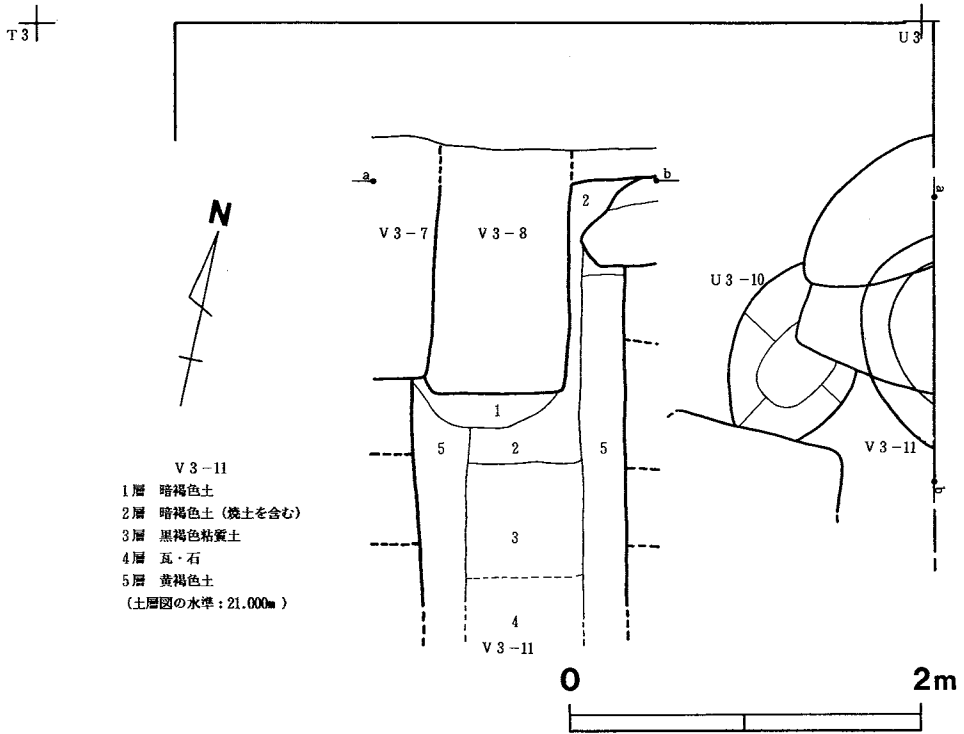
第350図 T~V=3~5区の遺構(1)



第351図 T~V=3~5区の遺構(2)



第352図 T~V = 3~5 区の遺構(3)



第353図 T~V=3~5区の遺構(4)

(3) T~V=5~10区の遺構

U 6-3号土坑 (第354・355図)

やはり黄褐色土の盛土を切っている土坑である。1984年3月の予備調査の際に一部を確認した土坑で、文学部建設予定地で最初に確認された遺構である。この土坑の北側には、電気配管用のマンホールがあり、これの構築時に上部は大きく破壊されている。この構築の際の掘り方は標高20.2m(地表下3.2m)に達しており、その下には遺構がないと考えていたが、この遺構の調査が進むにつれ、マンホールの下に20cmほどではあるが遺構が残っていることが明らかになった。そこで解体の専門家を入れ、このマンホールをコンプレッサーによって壊し、調査をすることにした。ここでも近・現代の構築物によって調査の進展は大きく妨げられた。このような状況下にあったので、遺構は下部から20~50cmが残っているだけであったが多くの遺物が出土した。埋土は上部にローム粒・黒色土粒の多量に入った暗褐色土が、下部に灰色粘土ブロックを多量に含む暗褐色土があり、南壁の壁際に粘質を欠く暗褐色土がみられる。一時に埋めたものではないように思われる。遺物は上部の暗褐色土にも包含されているが、下部の灰色粘土を含む層にたいへん多く包含されていた。素焼きのものを主にして数多くの陶磁器類、漆器のかけらなどが中心である。なお、本土坑出土の青磁の鉢にT 7-13号土坑出土の破片が接合している。

遺構は、東西2.2m、南北1.4mの長方形をしており、深さは確認できているところで0.5mである。U 6-2、U 6-6号土坑を切っている。上部は先述した通り、北側半分はマンホールの下、西側にも近・現代の土坑があり、上部は壊されている。底面には、1辺が20~10cm、深さ15~25cmの方形の杭穴が11ある。東・西・南面は3杭穴、北面は6杭穴によって、土留めのものを留めていたのであろう。壁はほぼ垂直にたちあがっている。北面の杭穴は切りあっているものもあり、作りかえている可能性がある。底面はほぼ水平ではあるが、U 6-2、U 6-6号土坑の埋土を底面にしているところでは別に何らの施設も施さずに埋土をそのまま底面にしている。

用途は不明であるが、廃棄後ゴミ穴に使われていたことは確実である。(藤本 強)

U 6-2号土坑 (第354・355図)

やはり黄褐色の盛土を切っている遺構で、V 6-5・U 6-1号土坑を切り、U 6-3号土坑を切っている。埋土は焼土や焼土塊を多量に含む暗褐色土である。火事の後始末に際して一時に投げこまれたと考えるのが妥当であろう。東西1.7m、南北1.9mの隅の若干円い方形をしている。深さは確認できた所で1.3mある。南面のU 6-1号土坑に面した所には、0.2×0.15m、深さ0.15mの方形の杭穴がみられる。壁面にはほぼピタリとついており、U 6-1号土坑がくずれてこないように土留めとして用いられた杭用の穴であろう。これは東南の角と東壁の中央にもあった可能性が強いが、V 6-5号土坑の埋土に作られていて、形がかなり変形していたので、はっきりとしたことは判らない。もしあったならば東壁と南壁には土留め用の木壁が設けられていたことになろう。床は水平であり、壁に垂直もしくは若干オーヴァーハング気味である。U 6-3号土坑

の底面の、僅か2～3 cm下に底面が確認できている。

(藤本 強)

U 6-1号土坑 (第354・355図)

先述した黄褐色土の盛土を切っている土坑である。黄褐色土の盛土下の遺構であるV 6-5号土坑を切り、U 6-2号土坑に切られている。1辺1.3mの各辺が若干胴張りをもった土坑である。底面は平らで、壁もほぼ垂直にたちあがっている。深さは確認できたところから1.35mである。埋土はレンズ状の堆積をみせており、自然に埋ったことを示していよう。壁面近くにロームが主体の黄褐色土、その上に黒色土があり、その上は焼土粒・ローム粒を含む暗褐色土・黒褐色土がレンズ状に堆積している。遺物はかわらけ、瓦などが暗褐色土・黒褐色土から出土している。

(藤本 強)

U 6-6号土坑 (第354図)

U 6-3号土坑の下部に、3号土坑の底面より0.3mほど下に底面をもつ土坑である。このなかにU 6-3号土坑の杭穴が4はっきりと掘りこまれているので、新旧関係は明らかである。1.0×0.7mの長方形である。埋土は小砂利、ローム粒、焼土粒まじりの褐色土である。底面は標高19.7mと若干高いが、U 3-1、U 4-2、U 6-5……と続く一連の土坑群の一つであろう。規模、埋土も矛盾しない。遺物はほとんどみられない。

U 3-1・U 4-2号土坑はその周辺の土坑群のなかではもっとも新しいものであるのに、U 6-6号土坑はそのあとにU 6-3号土坑が作られている。土地利用の中心が次第に南に移っていったことを示すものであろうか。

(藤本 強)

U 6-9号土坑

調査区北側、U 6グリッドの北西端に位置し、ローム漸移層面を削平する過程で検出された。南側はU 6-3号土坑及びU 6-6号土坑と重複するが、新旧関係はU 6-3、6号土坑よりも古い。

平面形は南北に長い楕円形を呈し、現存長1 m、幅0.95m、深さは確認面から0.4mであり擋鉢状である。底面は狭くL字状を呈し、壁面はなだらか。

覆土は4層に分層されるが、主として暗褐色土と黒褐色土で粘性を有し、しまりは良好である。出土遺物はなく、遺構の時期・性格ともに不明であるが、あるいは植栽痕とも考えられる。

(小俣 悟)

U 6-12号土坑 (第356図)

T 6グリッドとU 6グリッドの境界部分南半部に位置し、ロームを用いた薄い盛土を切って構築されていた。プラン確認の際、U 6-11号土坑との切り合い関係は認められなかったが、本遺構に含まれる炭化物やローム粒子混じりの黒色土がU 6-11号土坑に全く含まれないこと、また底部に明確なプランをなして10cmの段差が認められたことから別遺構であると認定した。東西1.1m、南北1.25mの長方形を呈する土坑で、U 6-11号土坑に比べて若干小さい。確認面からの深さは60cmで、U 6-11号土坑と同様底部に凹凸は認められず、平滑であった。出土遺物は認め

られなかった。本遺構の性格は U 6—11号土坑と同様に、建造物に付属して廃棄以外、例えば貯蔵などを目的に利用された蓋然性が高いと考えられる。

(倉林 真砂斗)

U 6—11号土坑 (第356図)

T 6グリッドと U 6グリッドの境界部分南半部に位置し、ロームを用いた薄い盛土を切って構築されていた。西辺を揃えるようにして U 6—12号土坑に切られていた。東西1.2m、南北1.5mの長方形の土坑で、確認面からの深さは50cmで、U 6—12号土坑の底部よりも10cm浅かった。壁・底部には凹凸は認められず、平滑であった。覆土は粘土粒を含む灰色がかかった茶褐色土で、しまりはなかった。出土遺物は認められなかった。

本遺構は壁・底部が平滑で全体の形が整っていることから、ゴミ穴を目的として掘られたとは考え難い。また東側調査区では、南北方向の配列を形成する方形の土坑群が2列存在し、本遺構は U 6—12号土坑と共に西側の列に属している。しかし他の土坑が東西方向に主軸をもつものに対し、本遺構と U 6—12号土坑は南北方向に主軸をもち、主軸方向を重視すればむしろ V 7—1号土坑と関連する可能性もある。いずれにしても他の方形土坑との位置関係も考慮すると、無秩序に掘削されたのではなく建造物と直接関連した遺構と推定できる。

(倉林 真砂斗)

U 6—5号土坑 (第356図)

1.2×0.8mの東西に長い方形・箱形の土坑で、確認面からの深さは1.5mを測る。四壁はほぼ垂直に切り整えられており、壁面の調整もきわめて丁寧である。埋土は上層が黒褐色土層と灰層の互層、下層がロームブロックを含む暗褐色土層となっている。遺物としては若干の瓦・陶磁器片が出土している程度である。

(桜井 英治)

T 7—13号土坑 (第356図：図版3)

T 7グリッドの北東コーナー付近に位置し、盛土に伴う薄い砂利・砂質土層を切っていた。西側で T 6—1号土坑を、南側で T 7—18号ピットを切っていた。東西1.8m、南北1.6mの東西方向に主軸をもつ隅丸長方形を呈する土坑である。確認面からの深さは70cmであった。壁や底部には工具痕が認められ、特に壁に凹凸が目立った。褐色系の第2層から第11層までは遺物はほとんど含まず、第10・11層は壁際に厚く堆積していた。第12層は炭化物の小片を多く含んで粘性が強く、釘がかたまって出土した。第13層の上層は遺物を全く含まず、下層でかわらけ・徳利・碗・播鉢・瓦などの完形あるいは器形復元可能な遺物が多く出土した。この層で出土した鉢の破片が、U 6—3号土坑の下層で出土した鉢の破片と接合して完形になった。

本遺構の性格であるが、土層堆積状態や第13層における遺物出土状態からみて、掘削後早い段階でゴミ穴として利用された後、埋め戻されたと考えられる。他の方形土坑と南北の列を形成するが、壁の仕上げが丁寧でないこと、出土遺物が多い点で、丁寧に長方形に掘られた土坑群と様相が異なる。

(倉林 真砂斗)

T 7—18号ピット (第356図)

T 7グリッドの東側部分の中ほどに位置し、北側を T 7—13号土坑に切られていた。盛土に伴

う薄い砂利・砂質土層を切って掘り込まれていた。東西70cm, 深さ20cmほどの楕円形の土坑である。覆土はしまりのないローム・砂利混じりの茶褐色土で, 出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。 (倉林 真砂斗)

T 6-1号土坑 (第356図)

T 6グリッドの南縁部に位置し, 大部分がT 7グリッドにかかっていた。盛土に伴う薄い砂利・砂質土層を切っていたことが確認できた。東側をT 7-13号土坑に切られ, 北側は既に削平されていた。直径2 m前後の円形土坑で, 確認面からの深さは20cmと浅く, 皿状を呈していた。覆土はローム粒子を含むしまりが無い明茶褐色土で, 遺物は認められなかった。底部には凹凸が認められ, 規模・形態・覆土からみて植栽痕の上部が削平されたものと考えられる。

(倉林 真砂斗)

T 5-1号土坑 (第357図)

T 5グリッドとT 6グリッドの境界部分に位置し, 調査区の北縁にかかっていたために, 全体を検出することはできなかった。盛土に伴う薄い砂利・砂質土層を切っていた。東西1.5m, 深さ約1 mの方形を呈する土坑と考えられる。覆土は2層に分けられ, 上層は焼土粒子混じりの灰色粘質土で, 下層は直径2~3 cmのロームブロックが混じる粘性のある褐色土である。壁・底部に工具痕は認められず平滑で, 丁寧に掘られていた。遺物は認められなかった。本遺構の北辺は未検出であるが, 東側調査区に多く認められる, 東西方向に主軸をもつ方形土坑の一つと考えられる。東側で確認できた, 南北に列をなして展開する類似の遺構群の一つとして捉えることはできないが, 規模・形態・主軸方向の類似性から他の大部分の方形土坑と同様に, 建造物に伴って規則的な配置がなされた穴倉のような性格をもつと考えられる。 (倉林 真砂斗)

V 7-1号土坑 (第357図)

文学部調査区の東縁, V 7グリッドの西辺に位置する。

平面的にはV 6-1号土坑と僅かに重複するが, V 6-1号土坑をバックするローム盛土上面で確認されており, これらの新旧関係は古いほうからV 6-1号土坑, ローム盛土, V 7-1号土坑の順であることが知られる。平面形はやや隅丸の方形を呈し, 開口部において長辺約1.3m, 短辺約1.1m, 坑底部において長辺約1.4m, 短辺約1.2mを測り, 主軸方位は概ね真北である。深さは確認面より約1.1mを測る。壁は僅かに内傾しつつもほぼ垂直に立ち上がり, 強く屈曲して坑底部に至る。壁面は丁寧に調整されており平滑であるが, 坑底面は中央部が若干凹み工具痕と思われる凹凸を僅かに残す。覆土は概ね三層に分かれる。ロームブロックを多量に含む黄褐色土を主体とし, しまりのある上層, 粘性の強い暗灰褐色土からなり, 播鉢, 瓦などの遺物を含む中層, および黄褐色土を主体とする下層である。中層の遺物は上位に鉢が, その下に瓦が集中して出土しており, すでに述べたU 7-1号土坑にみられた覆土堆積状態および遺物出土状態との強い類似が指摘される。事実, 当遺構とU 7-1号土坑との間で遺構間接合が1例みられ, 両遺構が同時期に開口しており, おそらくはほぼ同時に遺物の投棄, 埋め戻しがなされたものと考えられる。

検出された遺物のうち磁器は染付の碗3・皿1である。陶器は灰釉碗および京焼風の土瓶各1・尾呂釉の徳利1・志戸呂徳利2・灰釉徳利1のほか播鉢の破片2であり、このうちの灰釉徳利は前述のU7-1号土坑からとの遺構間接合例である。この他素焼きの角火鉢も1点出土している。

当遺構は、U7-1号土坑と同様地下式坑として構築され、その後ゴミ捨て穴とされたものと思われる。

構築の時期は、やはりローム盛土の後であり、その廃絶は18世紀中～後にあたるものと考えられる。(小川 望)

S5-1号遺構 (第358図)

S6グリッド北東隅にその大部分があるが、S5グリッド、T6グリッドにも若干かかっている。

近代の攪乱土層を除去した面、即ちローム漸移層上面で確認された遺構である。ただし本来の掘り込み面はより上位にあったものと思われる。

幅45cm前後の溝状の窪みである。その北半は近代遺構によって破壊されており、立ち上がりは確認されなかった。残存部の長さは約2.8mを測る。残存部北端近くと南端とは一段深い窪みが穿たれている。その中心間の距離は約1.8mである。長軸方向は真南北から22°ほど西へ振れている。確認面からの深さは、北側の窪みで約18cm、南側の窪みで約6cm、その他の部分では数cmである。

埋土はローム粒の混じる暗褐色土の単純層から成っている。遺物は出土していない。

本遺構は規模及び方向性から見て、T6-4号遺構、T7-15号遺構と一連のものと考えられる。窪みの間の距離がおよそ1.8m(一間)であることから、何らかの建造物の基礎に関わる遺構であろうと推定される。(中村 慎一)

T6-4号遺構 (第358図)

T6グリッドの南西コーナーからT7グリッドの北西コーナーにかけて位置し、自然堆積層である黒色土上面を精査して確認できた。

全長2.8m、幅50～80cmの細長い遺構で、若干西に振れる南北方向に主軸をもっていた。北側で25cm、南側で10cmほど土坑状に掘り下げてあった。覆土は直径1～2cmの小ロームブロックを多量に含むしまりがない黒褐色土で、掘り下げてある部分には直径5cm前後のロームブロックが多く見られた。遺物は認められなかった。

本遺構の性格であるが、両端の掘り込み底部の中心間の長さが約1.8m(1間)であることから、柱を立てることと関連があると考えられる。さらに類似する遺構である、S5-1・T7-15号遺構とともに一直線に並ぶことと無関係ではない。しかし柱痕や礎石は認められず、また両端の掘り込み底部のレベルが異なるなど、注意すべき点が多い。(倉林 真砂斗)

U7-1号土坑 (第359図)

文学部調査区の東縁に近く、U 7グリッドのほぼ中央部に位置する。

U 7-2号土坑およびU 7-3号土坑と重複するが、U 7-2号土坑を直接切り、U 7-2号土坑がU 7-3号土坑を切るため、三者の新旧関係は古いほうからU 7-3、U 7-2、U 7-1の順である。また、三者ともにローム盛土を切って構築されている。

土層観察用のセクションをTライン東2mに設定し掘り下げた段階でその存在がすでに認められていたが、上部に存在する攪乱により、構築面は必ずしも明確な形でとらえ得なかった。

開口部および坑底部の平面形はやや隅丸の方形を呈し、開口部において長辺約1.7m、短辺約1.4m、坑底部において長辺約2.2m、短辺約1.9mを測り、主軸は真北にほぼ直交する。深さは確認面より約1.3mを測る。

開口部は坑底面の直上やや北よりに位置し、壁は北辺においては僅かに内傾しつつもほぼ垂直に立ち上がるのに対し、東、西、および南辺においては坑底面より70cmの高さまで強くオーバーハングした後、ほぼ垂直に開口部へと至る。このうち東辺では坑底面が立ち上がる前に、開口部東辺の鉛直下付近で比高差6cmの段を有する。

北壁および残りの三辺の垂直な壁においては、きわめて入念に調整が施されており、平滑であるが、オーバーハングした部分には工具痕が多く認められ、坑底面もいくぶんの凹凸を有する。

覆土の堆積は基本的に三つの部分に分かれる。すなわち暗褐色土を主体とし、しまりのある上層、ほぼ均質な暗褐色土からなり、徳利などの遺物の大半を含む中層、およびその上半に瓦を多く含む灰褐色土、黄褐色土を主体とする下層である。このうち、全体の約三分の一を占める下層は中央部の盛り上がったいわゆる自然堆積を示し、この遺構が廃絶した当初は、比較的ゆっくりと廃棄がなされ、その後まとまった形で徳利などが投棄されていた過程を示しているものと考えられる。また、その上位のしまった層は、当遺構をバックした層が押し込まれるようにして形成されたものとみなしうる。

出土遺物のうち、磁器は染付碗1・無文の仏餉具1の他微量の細片のみである。陶器はもっとも多いものとして尾呂および志戸呂の徳利が数個体みられ、この他土瓶2・皿1・播鉢片2などがある。素焼きの製品には角火鉢1がある。

当遺構は、地下式坑として構築され、廃絶のしばらくのちにゴミ捨て穴とされたものと考えられる。

構築の時期は、ローム盛土のなされた後であり、その大部分が埋められたのは遺物から推定すると、18世紀中～後にあたるものと考えられる。 (小川 望)

U 7-2号土坑 (第359図)

U 7グリッドの南西部に位置する。

U 7-1号土坑およびU 7-3号土坑と重複し、それらの新旧関係は前述したように古いほうからU 7-3、U 7-2、U 7-1の順であり、ローム盛土を切って構築されている。

U 7-1号土坑とともに、Tライン東2mに設定されたセクション上で確認されたが、やはり

その確認面については詳らかではない。

U 7-1号土坑によってその北東部が四分の一ほど失われてはいるが長辺1.4m、短辺約1.0mを測る隅丸長方形の平面形を有し、主軸方位はU 7-1号土坑と同じく真北に対し直交する。深さは確認面と認定された面より約0.5mを測る。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、僅かなまみりを似て平坦な坑底に至る。壁・坑底ともに工具痕と思われる若干の凹凸を有する。覆土は粘性のある、強く締まった明褐色土を主とし、横位の堆積を示す。遺物は、瀬戸美濃系播鉢の小片1・染付碗の小片1のみである。遺構の性格は明らかでない。

構築の時期はローム盛土より新しく、18世紀中～後以前に構築されたと思われるU 7-1号土坑より前であるといえるのみである。(小川 望)

U 7-3号土坑 (第359図)

U 7グリッドの南西部に位置する。

U 7-1号土坑およびU 7-3号土坑と重複し、それらの新旧関係は前述のごとく古いほうからU 7-3、U 7-2、U 7-1の順であり、3者ともにローム盛土を切って構築されている。

Tライン東2mに設定されたセクション用のサブレンチを掘り下げた際にセクションの反対側の面に確認され、その確認面はローム盛土である。

U 7-2号土坑によってその大半が失われてはいるが長辺約1.3m、短辺約0.9mを測る隅丸長方形の平面形を有し、主軸方位はU 7-1、U 7-2号土坑とほぼ同じく真北に対しほぼ直交するものと思われる。深さは確認面より約0.2mを測る。

壁は比較的緩やかに立ち上がり平坦な坑底に至る。壁、坑底ともに若干の凹凸を有する。

覆土は粘性のある、強く締まった黄褐色土からなる。遺物は、検出されていない。遺構の性格は明らかでない。

構築の時期はU 7-2号土坑に準じ、これよりも古い。(小川 望)

T 7-11号土坑 (第360図)

T 7-10号土坑を切る。東西0.9m、南北0.7～0.8mのゆがんだ方形(台形に近い)の土坑で、10号土坑同様、東西に長い、方向は多少ずれている。確認面からの深さは0.5mを測るが、10号土坑と重複する部分では10号土坑の埋土が沈下して0.6m程度となる。埋土は焼土ブロックを多量に含む褐色土で、遺物としては若干の瓦片・鉄滓等が出土している程度である。

(桜井 英治)

T 7-10号土坑 (第360図)

T 7-11号土坑に切られている。1.3×0.9mの東西に長い方形・箱形の土坑で、確認面からの深さは1.7mを測る。四壁はほぼ垂直に切り整えられており、壁面の調整もきわめて丁寧である。埋土は暗褐色土層と灰層の互層で、底部付近に黄白色砂礫・灰褐色土層・黒褐色粘質土層が薄い堆積をみせる。遺物としては瓦・陶磁器片・鉄釘・鉄滓等が出土している。(桜井 英治)

T 8-6号土坑 (第360図)

T 8グリッドの北東コーナー付近に位置し、東側でT 8-15号ピットを切っていた。また東側で、盛土に伴う薄い砂利・砂質土層を切っている状況を確認することができた。

東西1.8m、南北1.5mの隅丸長方形を呈し、東辺は一部若干オーバーハングしていた。確認面からの深さは40~60cmで、壁・底部には凹凸が認められた。覆土は大きく2層に分けられ、8層と9層の間には粘土層が薄く堆積していた。8層では焼土塊が南から北へ傾斜してレンズ状に堆積し、また南壁に沿って細かい焼土粒が厚くみられ、2次焼成を受けた瓦片や陶磁器片が出土した。9層からは2次焼成を受けていない大形の瓦片(丸瓦中心)が多く出土した。

本遺構は、T 7-13号土坑と規模・形態・主軸方向が類似し、西辺がほぼ一直線上に揃っている。また他の方形土坑と共に、基本的には南北方向の配列を形成することから、建造物に伴って一定の規律のもとに掘削されたと考えられる。また覆土からみて、第9層によって下半部が埋没した後、火事の後始末の為に利用されたことがうかがえる。(倉林 真砂斗)

V 7-3号ピット (第361図)

近代の攪乱土層を除去した面で確認された遺構である。確認面の高さは標高21.10mで、この付近では最も高く、従って最も新しい遺構の一つである可能性が高い。V 7-2号土坑、U 7-4号土坑の上面をバックする薄層からなる盛土を切っており、少なくともこれら両遺構よりも新しいことは確実である。

平面形は径約50cmの不整円形を呈する。確認面からの深さは約40cmである。坑壁の立ち上がりは比較的急である。

埋土は多くの小礫を含む黒褐色土の単純層から成っている。遺物は出土していない。遺構の性格は明らかではない。(中村 慎一)

U 7-4号土坑 (第361図)

近代の攪乱土層を除去した面で確認された遺構である。確認面はローム盛土よりも上位にあるが、掘り込みの大部分はローム盛土中にかかっている。V 7-2号土坑とほぼ平行の位置関係にあり、その西南辺を切っており、またV 8-4号土坑の上場の大部分をも切っている。一方、数枚の薄層からなる盛土によって東半部を覆われている。

平面形は不整長方形を呈する。短辺長は約70cm、長辺長は1.4~1.8mである。確認面からの深さは約60cmを測る。坑底はほぼ平坦で、坑壁の立ち上がりは垂直に近い。

埋土は、底部にはロームブロックを主体とする褐色土が厚さ10cmほどに堆積し、上半には締りの悪い黒褐色土が堆積している。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。

(中村 慎一)

V 7-2号土坑 (第361図)

近代の攪乱土層を除去した面で確認された遺構である。確認面は黄褐色ローム盛土よりも上位にあるが、掘り込みはその大部分がローム盛土にかかっている。U 7-4号土坑とほぼ並行の位

置関係にあり、西南辺の大部分はそれによって切られている。また、数枚の薄層からなる盛土によってバックされている。

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向は北西—東南である。長辺は1.5m 余り、短辺は1.0m 余りの長さを有し、確認面からの深さは約50cm を測る。坑壁の立ち上がりはやや急であり、坑底は緩やかな凹凸を有している。

埋土は、下半の灰褐色ローム質土と上半の黄褐色ローム質土の2層から成っている。その灰褐色ローム質土層中から加曾利 B 式の縄文土器片が1点出土している。これはこの土坑の埋め戻しに用いた土砂中に混入していたものと考えられるが、この土坑の西北辺から約50cm 隔った地点の盛土中から2点の縄文土器片が検出されていることと考え合わせると、ほぼ原位置に近く存在していた可能性も否定できない。他に中国製色絵片も出土している。なお、遺構の性格は不明である。

(中村 慎一)

V 8—4号土坑 (第361図)

U 8グリッドの北東コーナーに位置し、東端がV 8グリッドにかかっていた。本遺構は盛土よりも上部の層から掘り込まれ、底部は盛土面にとどいていなかった。上部をU 7—4号土坑に切られていた。長軸1.05m、短軸0.6m の東西方向に主軸をもつ楕円形を呈する土坑で、確認面からの深さは、20cm ほどであった。覆土は淡橙黄色の粘質土を斑点状に含む暗茶褐色土で、しまりがなくボソボソであった。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。

(倉林 真砂斗)

V 8—1号ピット (第361図)

近代の攪乱土層を除去した面で確認された小型の遺構である。V 8—2号遺構(播鉢状の窪み)の埋土上面に掘り込まれている。

平面形は不整形を呈する。確認面からの深さは約15cm を測る。坑底面、坑壁面ともに若干の凹凸がある。

埋土は暗褐色土の単純層から成っている。遺物は出土していない。

遺構の性格は不明である。V 8—2号遺構の埋土の一部を土色の違いから遺構と誤認した可能性もある。

(中村 慎一)

U 7—6号土坑 (第362図)

U 7グリッドとU 8グリッドの境界部分西寄りに位置し、大部分はU 8グリッドにかかっていた。ロームを用いた薄い盛土を切って掘り込まれ、東側でU 7—5号土坑を、西側でU 8—13号土坑を切っていた。

東西1.9m、南北2.1m の不整形土坑で、確認面からの深さは一番深いところで30cm ほどであり、皿状を呈していた。壁・底部には凹凸が認められた。覆土はローム粒子・ロームブロックを多く含みしまっていた。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は、U 7—5号土坑と同様、規模・形態などから植栽痕と考えられる。

(倉林 真砂斗)

U 7—5号土坑 (第362図)

U 7グリッドとU 8グリッドの境界部分の中ほどに位置し、ロームを用いた盛土を切って掘り込まれていた。西側をU 7—6号土坑に切られていた。

東西1.7m、南北1.8mの不整円形の土坑で、確認面からの深さは60cmであった。壁や底部には、凹凸が目立った。上部3層はローム粒子やロームブロックを多く含んでしまりがなく、下部2層は含有物をほとんど含まない、しまりがある暗茶褐色土・黒褐色土からなっていた。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は、形態・規模などから植栽痕と考えられる。

(倉林 真砂斗)

U 8—13号土坑 (第362図)

U 8グリッドの北西コーナーに位置し、西側はT 8グリッドにかかっていた。西側でT 8—15号ピットを、南側でU 8—17号土坑を切り、東側をU 7—6号土坑に切られていた。薄い砂利・砂質土層を切っており、盛土がなされてから掘り込まれた遺構である。

直径1.7mほどの不整円形土坑で、確認面からの深さは45cmを測り、底部には凹凸が目立った。覆土はローム粒子・ロームブロック・黒色土粒を含む茶褐色土で、出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は形態・規模などから植栽痕と考えられる。

(倉林 真砂斗)

T 8—15号ピット (第362図)

T 8グリッドの北東コーナーに位置し、盛土に伴う薄い砂利・砂質土層を切って掘り込まれていた。東側をU 8—13号土坑に、西側をT 8—6号土坑に切られていた。

直径60cmほどの不整円形土坑で、確認面からの深さは15~20cmであった。覆土はしまりのないローム粒子混じりの暗茶褐色土で、出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。

(倉林 真砂斗)

U 8—15号土坑 (第363図)

U 8グリッドの西端中ほどに位置し、北側でU 8—16号ピットを、西側でU 8—17号土坑を切り、南側でU 8—29・U 8—33号土坑に切られていた。本遺構は著しく攪乱を受け、第363図a—bセクションにより存在を確認できた。U 8—17号土坑が西端で薄い砂利・砂質土層を切っていたことから、U 8—17号土坑を切る本遺構は盛土がなされてから掘り込まれたものとして把握することができた。

大部分攪乱を受けていたため、形態・規模は不明である。覆土はローム粒子を全体的に含み、部分的に大きな黒色土塊を含む暗茶褐色土で、かたくしまっていた。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。

(倉林 真砂斗)

U 8—16号ピット (第363図)

U 8グリッドの西端北よりに位置し、U 8—17号土坑を切り、南辺をU 8—15号土坑に切られていた。周囲は削平を受けていたためか、ロームの盛土に伴う薄い砂利・砂質土層は認められなかったが、U 8—17号土坑を切ることから盛土以後の遺構として把握することができた。

推定で長軸50cm、短軸25cmの、南北に主軸をもつ長楕円形を呈する土坑で、確認面からの深さは20cmほどであった。覆土はしまりがなく暗茶褐色土で、出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。

(倉林 真砂斗)

U 8-17号土坑 (第363図)

U 8グリッドの西端中ほどで確認できた。一部 T 8グリッドにかかり、この部分で薄い砂利・砂質土層を切っていた。他遺構との切り合い関係は、U 8-13・U 8-15号土坑、U 8-16号ピットに切られ、U 8-29号土坑を切っていることが認められた。

規模は明確でないが、不整形を呈する皿状の土坑と考えられる。確認面からの深さは、20cmほどで、底部には凹凸が認められた。覆土はローム粒子を含む黒褐色土でしまっていた。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は明確でないが、推定される規模・形態から植栽痕と考えられる。

(倉林 真砂斗)

U 8-18号土坑 (第363図)

U 8-18・U 8-19・U 8-26・U 8-27号土坑の周辺は攪乱を受けていたため、焼土粒子を含む茶褐色土が染み状に広がっていた。従って明確にプランを把握することが困難で、第363図 a-b セクションにより各々の存在を確認することができた。またロームを用いた盛土に伴う薄い砂利・砂質土層を切る U 8-28号土坑を、切り合い関係において一番古い U 8-27号土坑が切っていたことから、これらの土坑群はすべて盛土がなされてから掘り込まれたものとして把握することができた。

U 8-18号土坑は U 8グリッドの南端西寄りに位置し、旧図書館の基礎により南半分は消滅していた。また北側で U 8-19号土坑を切っていた。

規模は明確でないが、楕円形を呈する土坑と考えられ、確認面からの深さは20cmほどであった。覆土は粘土粒子を全体的に含む暗茶褐色土で、粘性があった。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。

(倉林 真砂斗)

U 8-19号土坑 (第363図)

第363図 a-b セクションにより確認できた遺構で、U 8グリッドの南端西寄りに位置していた。南側を U 8-18号土坑に切られ、北側で U 8-26号土坑を切っていた。

規模は明確ではないが、円形土坑の一部であると考えられ、確認面からの深さは20cmほどであった。覆土は複雑に分けられ、2層は U 8-18号土坑の覆土に類似するが粘土粒子を多く含んでしまった暗茶褐色土、3層は灰色粘質土、4層はローム粒子・黒色粒子を密に含んでしまっている暗黄褐色土、5層はローム粒子を若干含んでしまりがなく、粘性がある暗茶褐色土であった。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。

(倉林 真砂斗)

U 8-26号土坑 (第363図)

U 8グリッドの南西部に位置し、第363図 a-b セクションで確認できた遺構である。北側で U 8-27・U 8-28・U 8-33号土坑を切り、南側で U 8-19号土坑に切られていた。

規模は明確ではないが、円形土坑の一部と考えられ、確認面からの深さは約30cmであった。覆土は全体的にローム粒子・ロームブロックを含んでしまっていて、出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。(倉林 真砂斗)

U 8-27号土坑 (第363図)

U 8グリッドの西半部中ほどに位置し、全体的に著しく攪乱を受けていた。第363図 e-f セクションから U 8-28号土坑を切っていたことが、また a-b セクションから U 8-26号土坑に切られていたことが確認できた。

規模は明確でないが、隅丸方形を呈する土坑と考えられる。確認面からの深さは10cmほどであった。覆土は全体的に径2～3 cmのロームブロックを含む、しまった茶褐色土で、出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。(倉林 真砂斗)

U 8-28号土坑 (第363図)

U 8グリッドの西端部中ほどに位置し、西側は T 8グリッドにかかっていた。本遺構及び U 8-29号土坑は、焼土粒を密に含んで堅く締まっていた暗茶褐色土が不正円形に広がるプランとして確認できた。長軸方向を揃える形で U 8-29号土坑を切り、また南側でロームを用いた盛土に伴う薄い砂利・砂質土層を切っていることが確認できた。

長軸を東西にもつ、南北1 mの長方形を呈する土坑である。東西長は東側を U 8-27号土坑に切れ、また攪乱を受けていることから不明であった。確認面からの深さは35cmで、底部には凹凸は認められなかった。覆土は上下2層に分けられ、上層である13層は特に東側で焼土粒子を多く含んでしまっており、14層は上層ほど焼土粒子を含まず、しまりが無い暗茶褐色土であった。陶磁器・瓦片が上層から出土した。

本遺構の性格は出土遺物からは明確ではないが、底面及びわずかに検出できた壁が平滑で丁寧掘削してあることから、当初からゴミ穴として使用されたとは考え難い。本遺構に切られる U 8-29号土坑と共に、北約5 mの所に存在する U 7-2・U 7-3号土坑とは規模・形態が類似しており、また主軸方向が一致している。更に5 m北には規模は異なるが、やはり方形を呈する U 6-1・U 6-2号土坑が存在している。これらの土坑群は、西辺を揃えてほぼ等間隔に位置して南北方向の列を形成し、規模・形態が類似する土坑と2～3回の切り合い関係をもっている。調査区全体に目を転じて認識できるこのような在り方は、各々の土坑が相互に無関係に掘削されたのではなく、建造物に伴って機能していたために規則的な配置がなされたことを示唆している。このような状況を踏まえると本遺構の性格は、居住と関連する貯蔵を目的とした、穴倉のようなものとして捉えることが妥当であると考えられる。(倉林 真砂斗)

U 8-29号土坑 (第363図)

U 8グリッドの西端中ほどに位置し、西側が T 8グリッドにかかっていた。北辺を U 8-17号土坑に切れ、また主軸を揃えて大部分を U 8-28号土坑に切られていた。東側は攪乱を受けているため、東壁の立ち上がりを確認することはできなかった。北辺と U 8-17号土坑との間、わ

ずかに掘り残された部分で、ロームを用いた盛土に伴う薄い砂利・砂質土層を切っているのが確認できた。

東西方向に長軸をもつ南北1 mの長方形土坑で、U 8—28号土坑と同様東西長は不明である。確認面からの深さは25cmで、U 8—28号土坑の底部よりも10cmほど浅かった。壁・底部には工具痕は認められず、平滑であった。覆土はローム粒子や小ロームブロックを密に含んで、かたくしまっていた。瓦片が数点出土した。

本遺構の性格はU 8—28号土坑に準じ、居住と関連する貯蔵を目的とした、穴倉のようなものと考えられる。 (倉林 真砂斗)

U 8—21号ピット (第363図)

U 8グリッドの南端中ほどに位置し、北側にいれたトレンチにより確認することができた。西側でU 8—20号ピットを切る、楕円形を呈すると考えられる土坑である。規模は推定で、長軸80 cm、短軸50cmほどで、確認面からの深さは30cmほどであった。覆土は砂利混じりのしまった暗茶褐色土で、出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。 (倉林 真砂斗)

U 8—20号ピット (第363図)

ほぼ9ラインに一致する、旧図書館の基礎が及んでいた部分の北端のセクションによって確認できた遺構で、南側は基礎により消滅していた。また北側をU 8—21号ピットに切られ、西側の立ち上がりは攪乱により確認できなかった。

全体の規模・形態は不明である。覆土はローム粒子混じりのしまった暗茶褐色土で、出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。 (倉林 真砂斗)

U 8—31号ピット (第364図)

U 8グリッドの西端中ほどに位置し、U 8—27号土坑及びU 8—28号土坑検出後に確認できた遺構である。従って上部をU 8—27・U 8—28号土坑に切られており、またU 8—32号土坑を切っていた。本遺構とロームによる盛土との関係は不明である。

直径60cmほどの円形土坑で、確認面からの深さは約20cmであった。覆土は直径5 cmほどのロームブロックを全体的に斑点状に含む暗黄褐色土で、西によって底部から数cm浮いた状態で一辺10cm前後の不整形の角礫が、5×10cmの板状の礫の上ののって検出できた。東に若干傾斜していたが平らな面を上に向けており、礎石として機能していた可能性はあるが、柱痕を確認することはできず、また近辺に類似の遺構は検出されなかった。瓦片が数点出土した。

(倉林 真砂斗)

U 8—32号土坑 (第364図)

U 8グリッドの西端に位置し、U 8—31号ピットと同様U 8—27号土坑及びU 8—28号土坑検出後に確認できた遺構である。U 8—27・U 8—28号土坑・U 8—31号ピットに切られ、U 8—33号土坑を切っていた。ロームによる盛土との関係は不明である。

長軸が85cm、短軸が75cmの東西方向に主軸をもつ方形土坑と考えられる。確認面からの深さ

は約20cmであった。覆土はローム粒を密に含む明茶褐色土で、しまっていた。瓦片が数点出土した。本遺構は方形土坑の中で最も小さく、類似の遺構は見当たらず性格は不明である。

(倉林 真砂斗)

U 8-33号土坑 (第364図)

U 8グリッドの西端中ほどに位置し、南半分はU 8-26・U 8-27・U 8-32号土坑に切られていた。ロームによる盛土より明らかに古い土坑を除くと、本遺構はU 8グリッド西半部で最も古くなるが、盛土との関係は不明である。

直径1.5m以上の円形土坑と考えられ、確認面からの深さは15cm前後であった。覆土は下部に直径5cm前後のロームブロックを多く含むしまった黒褐色土で、瓦片が数点出土した。底部には凹凸が目立ち、形態・覆土・推定される規模などを考え合わせると、本遺構は植栽痕と考えられる。遺構確認のためのトレンチや他の遺構に著しく切られているために明確ではないが、プランからは本来U 8-4号土坑と一連の円形土坑であった可能性がある。

(倉林 真砂斗)

T 9-1号土坑 (第365図)

文学部調査区中央南側、T 9グリッド南端に位置する。

旧図書館基礎により東側の大半を破壊され、また西辺付近を近代以降の土管の埋設により攪乱されており、これらを除去する過程で確認された。

平面形は長辺約110cm、短辺約95cmのやや隅丸の長方形を呈し、主軸方位は真北に対し東へ95°振れる。ほぼ垂直な壁と中央部がやや丸みを帯びる坑底とを持ち、確認面よりの深さは約220cmを測る。覆土は大きく四層に分かれる。坑底面上に10cmほどの厚さのローム粒子主体の層があり、そのうえ三分の一が暗褐色土、三分の一が焼土を多く含む赤褐色土、残り三分の一が焼土からなる層である。遺物は碗等の陶磁器の他、瓦片、銅製品が出土している。

当遺構はロームの天井を持たない大形の縦穴状の土坑であり、まとめて述べた南北に列をなして並ぶ一連の遺構のうちの最南端のものと考えられる。構築の時期は、出土遺物からは明瞭ではないが遺構配置からみて18世紀に比定されよう。

(小川 望)

T 9-2号土坑 (第365図)

T 9グリッドの南西隅に位置する。

ポイントS10の東70cmをほぼ南北方向に伸びる近代の土管埋設用掘り方内の埋土を除去した際に土層断面で確認された遺構である。平面的にはローム漸移層上面を確認面とする。T 9-3号土坑を切っている。

遺構東半を近代の土管掘り方により破壊されているが、全体の平面形は方形を呈するものと推定される。軸方向はほぼ正確に南北を指している。西辺長は70cmである。確認面からの深さは41cmを測る。坑底面、坑壁面ともに平滑で、丹念に調整されている。埋土は焼土を主体とする暗褐色土の単純層から成っており、それは坑口から20~40cm外まであふれ出ている(図二点鎖線)。遺物としては瓦片と陶磁器片が出土している。

本土坑の構築当初の機能は明らかではないが、最終的には火災の後片付けに際して、焼土をもって埋め戻されたものであろう。(中村 慎一)

T 9—3 号土坑 (第365図)

ポイント S10で接する4つのグリッドに跨がる位置にある。

近代の攪乱土層を除去した面、即ち青灰色碎石砂層上面で確認された遺構である。S 9—3号土坑を切っており、一方、T 9—2号土坑により切られている。

旧図書館基礎により西半を破壊されているが、全体の平面形は略円形を呈するものと推測される。推定直径は約2.1mである。確認面からの深さは30cm余りを測る。坑底面、坑壁面ともに若干の凹凸を有する皿状の土坑である。

埋土は大きく3層に分かれる。底部及び側縁部に暗褐色土が、その上に部分的に褐色ロームが、そして中央部には黒色土が堆積していた。遺物としては少量の瓦片が出土している。遺構の性格は不明である。(中村 慎一)

S 9—3 号土坑 (第365図)

S 9グリッドの南東隅近くに位置する。

青灰色碎石砂層の上面で確認された遺構である。T 9—3号土坑によって切られている。

北半及び西半の大部分を旧図書館基礎によって破壊されている為、全体の平面形は不明である。残存部における確認面からの深さは約74cmを測る。坑底面、坑壁面ともに凹凸があり、掘り方は雑である。埋土は大きく4層に分かれるが、いずれもロームを主体とする。遺物は出土していない。遺構の性格は明らかではないが、一種の植栽痕である可能性が高い。(中村 慎一)

T10—2 号ピット (第366図)

T10グリッドの西辺中央に位置する。

近代の土管埋設掘り方の埋土を除去する過程で土層断面において確認された遺構である。平面的には、この周辺に局地的に広がる黄褐色土盛土の上面を確認面とする。T10—3号土坑を切っている。

その大部分を近代の土管掘り方によって破壊されている為に全体形は不明である。確認面からの深さは約24cmを測る。埋土は暗褐色土の単純層から成っている。遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。(中村 慎一)

T10—3 号土坑 (第366図)

T10グリッド西北隅に位置する。

近代の攪乱土層を除去した面、即ち青灰色碎石砂層上面で確認された遺構である。T10—2号ピットによって切られている。

東半及び南北中軸部分が近代の破壊を受けているが、全体の平面形は不整な長楕円形を呈するものと推測される。長軸方向は真南北から約22°西へ振れている。長軸長は3.6m、短軸長は2.0m程になるものかと推定される。確認面からの深さは最深部で約90cmを測る。坑底面、坑壁面とも

に大小の凹凸が多く、掘り方は雑である。埋土は、ロームブロック層が大半を占めるが、底部付近には何枚もの土層が複雑に入り組んで堆積している。そのうちの何枚かの層には炭化物や焼土を含むものがある。遺物としては瓦片及び陶磁器片が出土している。遺構の性格は不明である。ゴミ穴と呼ぶほど出土遺物の量は多くない。一種の植栽痕かとも思われるが、底部の土層堆積のあり方がそれにはそぐわない。いずれにしても、しばらくの期間は開口していたものと思われる。

(中村 慎一)

T10—1号土坑 (第367図)

文学部調査区中央南端、T10グリッドとS10グリッドの境界線上に位置する。

東辺付近を近代以降の土管の埋設により攪乱されており、これを除去する過程で確認された。

平面形は長辺約200cm、短辺約150cmの不整な長方形を呈し、主軸方位は真北にはほぼ一致する。坑底の平面形は、開口部と同様不整であり、また坑底面や壁面の凹凸も激しく、工具痕も多く認められる。確認面よりの深さは約170cmを測る。覆土は大きく四層に分かれる。坑底面上に北から南に流れるように堆積するローム粒子を主体とする層、その上の10cmほどの厚さの灰褐色粘質土の層、その上のローム粒子と黒色土の混土からなる層、そしてその上の褐色土を主体とする層である。このうち灰褐色粘質土の層は、銅銭を始めとする多くの遺物を伴う層である。

遺物は天目茶碗、染付猪口・仏花瓶、徳利、灰釉皿等の多くの陶磁器の他、瓦、銅銭・キセル等の金属製品、ガラス製品等多種の物が出土している。

やや不整な形態や粗い調整などの相違点は認められはするものの、オーバーハングする立ち上がり有することからこれをU7—1号土坑、V7—1号土坑などと同様地下式坑の一つとして位置付けることができよう。いずれにせよ最終的には、いわばゴミ穴として何度かにわたる投棄がなされたものと考えられる。

そういう意味では構築の時期は明確にし得ないが、出土遺物などからみて廃絶の時期は、18世紀中葉頃と考えられる。

(小川 望)

T7—12号土坑 (第368図)

T7グリッドのほぼ中央部に位置し、自然堆積層である黒色土の上面で、焼土粒を含む褐色土の不整円形のプランとして確認された。T7—14・T7—15号遺構を切っていた。

完掘した結果、各コーナー及び南壁でオーバーハングした状況が認められた。東西2.3m、南北は東辺で1.8m、西辺で1.9mを測り、底部の平面形が長方形を呈する天井をもつ地下式坑であることが分かった。確認面からの深さは1.7mであった。壁・底面は平滑で工具痕は認められず、壁と覆土の間にはわずかな隙間があった。覆土は大きく6層に分けられ、陶磁器・瓦片はほとんど第4層の明茶褐色土から出土した。またこの層は小円礫の多さが目立った。第6層の東壁側は大形ロームブロックからなり、全体として遺物・小円礫・焼土塊等は全く含まなかった。壁際に特に厚く堆積し、天井部が崩落した結果形成されたと考えられる。本遺構は天井をもつ地下式坑と認定でき、土層堆積状況からは天井部分が崩落した後に人為的に埋められたと考えられる。

(倉林 真砂斗)

T 7-14号遺構 (第369図)

T 7グリッドの南東部分で確認でき、南端はT 8グリッドにかかっていた。T 7-10・T 7-12・T 8-6号土坑に切られ、北端部分はT 8-6号土坑の北壁において、わずかな掘り込みとして認められた。本遺構のすぐ東側で、盛土に伴う薄い砂利・砂質土層が消滅し、自然堆積層である黒色土の上面で確認できた。

全長約4.5m、幅約50cmの細長い遺構で、若干北に振れる西北方向に主軸をもっていた。南端は主軸に沿って、長軸1.2mの土坑状に掘り込まれていた。覆土はローム粒子を含む暗茶褐色土で下層部分はしまりがなく、掘り込まれている部分の底部付近にはロームブロックが多かった。確認面からの深さは、溝状部分で約20cm、掘り込み部分で約70cmであった。出土遺物は認められなかった。本遺構は、全長は異なるものの形態・覆土・主軸方向が類似していることから、T 6-4号遺構と同様に柱を立てるために掘削されたと考えられる。

(倉林 真砂斗)

T 7-15号遺構 (第369図)

T 7グリッドの南西部分からT 8グリッドの北西部分にかけて確認できた遺構で、北端部分をT 7-12号土坑に切られていた。自然堆積層である黒色土上面で確認でき、プラン確認時は中心付近の円形土坑状の掘り込みを別遺構と認定したが、覆土や南北両端の類似の掘り込みとの位置関係から、同一の遺構として把握した。

全長4.7m、幅60~70cmの細長い遺構で、若干北に振れる西北方向に主軸をもっていた。3ヶ所において土坑状の掘り込みが認められ、覆土はほとんどが直径5cmほどの小ロームブロックであった。確認面からの深さは、溝状部分は15~30cm、深く掘り込まれている部分は30~60cmであった。出土遺物は認められなかった。

本遺構は、S 5-1・T 6-4・T 7-14号遺構と覆土・形態が類似し、S 5-1・T 6-4号遺構と一直線に、T 7-14号遺構と平行になるように位置している。また3ヶ所ある掘り込み部分の中心間の長さが約1.8m(1間)であることから、やはり柱を立てるために掘削されたと考えられる。

(倉林 真砂斗)

T 8-7号土坑 (第370図)

T 8-8・9号土坑を切る新しい土坑で、1.6×0.7mの東西に長い隅丸方形を呈している。確認面からの深さは0.3~0.4mと概して浅く、埋土は暗黄褐色土と灰黒色土が主体である。埋土中にはガラス片が多く含まれていることから、近・現代の遺構と判断される。遺物としては、若干の瓦・陶磁器片が出土している程度である。

(桜井 英治)

T 8-8号土坑 (第370図)

T 8-7号土坑に切られ、T 8-9号土坑を切っている。T 8-7号土坑と重複する部分が大きいため、遺構の大半が欠失しているが、残存部分からみて、東西0.9m、南北1.1m程度の楕円形乃至は隅丸方形を呈したものと推定される。確認面からの深さは0.3mと、T 8-7号土坑より

も若干浅くなっている。埋土は茶褐色土が主体で、遺物はほとんど含まない。(桜井 英治)

T 8-9号土坑 (第370図：図版3)

T 8-7・8号土坑に切られ、T 8-10号土坑を切っている。平面形は、上・底面ともに方形を呈し、上面で1.2×1.6m、底面で1.3×1.4mを測る。確認面からの深さは1.1mで、底面は平坦である。全体として箱形に近いが、下半部がやや南西方向に張り出して袋状を呈している。埋土は、上層では黄褐色土層と暗褐色土層の、下層では焼土層と灰層の互層となっており、下層、特に灰層中には遺物が集中してみられる。各層ともに北から南へ急角度に落ち込んでおり、人為的な土砂の投げ込みが行なわれた可能性が強い。

下層から底面にかけて多量の遺物が出土しているが、特に灰層中からの出土量が多く、遺物の種類も豊富である。徳利・摺鉢・小皿・仏餉器・水注・茶入・猪口などの陶磁器類をはじめ、カワラケ・角火鉢・焼塩壺などの土師質土器や、角釘・銭・錠前・金具などの金属製品、保存は悪いが漆器類も出土している。完形乃至完形に近い製品が多い点、陶磁器類に比して瓦の出土量がきわめて乏しい点などに特徴がみられる。火事場整理に際して日用品のみを一括廃棄した可能性もあろう。(桜井 英治)

T 8-10号土坑 (第370図：図版3)

南西側上半分をT 8-9号土坑に切られている。1.0×0.9mの方形・箱形の土坑で、確認面からの深さは1.8mを測る。四壁はほぼ垂直に切り整えられており、壁面の調整もきわめて丁寧である。埋土は軟かい茶褐色土で、焼土塊を多量に含んでいる。遺物は、上層から土師質鍋が一個体出土している以外、特筆すべきものはみられない。(桜井 英治)

T 8-11号土坑 (第370図)

T 8-7~10・14号土坑周囲に広がるシミ状の土坑で、北東-南西方向に長い不整形な楕円を呈している。南端部を欠くが、大きさは4.0×2.8m程度と推定される。確認面からの深さは0.2m以下と浅く、東端部に1.0×0.7m、深さ0.3mの円形の小土坑を伴っている。埋土は黒色土とロームブロックの混合土からなり、東端部では黄色味が多少強くなる。遺物をほとんど含まず、埋土も硬質であることから、地業層である可能性もある。(桜井 英治)

T 8-14号土坑 (第370図)

T 8-11号土坑を切る。遺構の大半が攪乱を受けているために全体の規模・形状は明らかではない。埋土に焼土・ガラス片等を含む新しい土坑である。(桜井 英治)

T 5-2号土坑 (第371図)

T 5グリッドの南東コーナーからT 6グリッドの北東コーナーにかけて、盛土に伴う薄い砂利・砂質土層の下で確認できた遺構である。

調査区の北縁に位置し、東側を近代以降の土坑に、西側をT 5-1号土坑に切られていたため全形は明確ではないが、円形土坑の一部であると考えられる。検出できた部分での、確認面からの深さは80cmほどであった。覆土はしまりが無いローム粒子混じりの暗茶褐色土で、遺物は摺鉢

片が出土している。推定される規模や形態、また覆土から本遺構は植栽痕と認定できる土坑の一部であると考えられる。

(倉林 真砂斗)

V 5-1号土坑 (第371図)

V 6グリッドにその大部分があり、推定しうる形態・規模から北側の一部がV 5グリッドにかかっていると判断した。調査区の北東コーナーにかかり、また北側に土管列があったために全体を検出し得なかった。ロームを用いた盛土を除去した段階で検出できた、東に向かって傾斜する自然堆積層である、黒色土上面で確認することができた。西側でV 5-2号土坑を、南側でV 6-3号ピットを切っていた。

検出できた部分から判断すると、直径3 m前後の円形土坑と考えられる。確認面からの深さは1 mであった。壁の立ち上がりは急で、西壁の一部では深さ40cmで若干傾斜が変換していた。また壁・底部には凹凸が認められた。覆土は全体的にしまっていて、セクションでは西から東へ傾斜して堆積している状況が認められた。特に下層(第3層・第4層)は、ローム粒子・ロームブロックを含まず、壁際に厚く堆積し中心に向かって傾斜している状況が顕著であった。出土遺物は認められなかった。

本遺構の性格は、推定される規模・形態から植栽痕と考えられる。覆土に砂利やロームブロックが含まれないのは、盛土がなされる以前に掘削されたことが一因となっているのであろう。また盛土に伴う砂利・砂質土層を切って確認できた類似の形態や規模をもつ土坑が、上部を削平されて浅かったのに対し、本遺構はロームを用いた厚い盛土に直接覆われていたために、少なくとも盛土を行なった段階での深さを保っていた。

(倉林 真砂斗)

V 5-2号土坑 (第371図)

V 6グリッドの北東コーナーに位置し、北側の部分がわずかにV 5グリッドにかかっていた。V 5-1号土坑と同様に厚い盛土を除去し、自然堆積層である黒色土上面を精査して確認できた遺構である。東側をV 5-1号土坑に切られていた。推定で南北2 mほどの皿状土坑で、深さはV 5-1号土坑に切られる部分で約20cmであった。北側はV 5-1号土坑と同様土管列に切られていたが、土管直下における土層の状態から、破線のように北壁を推定した。覆土は均質でしまりがないボソボソの暗茶褐色土で、出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。

(倉林 真砂斗)

V 6-3号ピット (第371図)

V 6グリッドのはほぼ中央部に位置し、盛土下の自然堆積層である黒色土上面で確認できた。北側をV 5-1号土坑に切られていた。推定で長軸90cm、短軸70cmの楕円形の皿状土坑で、確認面からの深さは約10cmであった。覆土はV 5-2号土坑に類似し、しまりがなくボソボソの暗茶褐色土で、出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。

(倉林 真砂斗)

V 6-5号土坑 (第372図)

黄褐色土盛土下に発見された遺構で、U 6-1・2、V 6-2号土坑に切られ、V 6-4号土

坑を切っている。東西3.0m, 南北2.7m, 深さは確認面から1.0mの鍋底状を呈する土坑である。底面, 壁面ともに凹凸がある。埋土は黒色土粒や白色粘土粒を含む黒褐色土・暗褐色土が大部分で, 底面近くの10cm強は砂まじりの堆積になっている。遺物はほとんどなく, 植栽に関するものではないかと思われる。底面, 壁面は自然堆積の部分が多い。(藤本 強)

V 6-2号土坑 (第372図)

黄褐色盛土下の遺構で, V 6-5, V 6-4号土坑を切っている。径2.0mの不整円形の土坑で, 深さは0.6mである。鍋底状を呈しており, 底面・壁面ともに凹凸がいちじりしい。埋土は黄灰色粘土もしくはロームを主体とする黄褐色土を層状もしくはブロック状にもつ褐色~黒褐色土である。遺物はほとんどない。植栽の跡と考えるのが妥当であろう。(藤本 強)

V 6-4号土坑 (第372図)

黄褐色盛土下の遺構である。大部分をV 6-5号土坑に切られ, さらに南側の一部はV 6-2号土坑に切られ, ごく一部が残存しているにすぎない。規模, 深さともに不明であるが, 径3m以上の不整円形もしくは楕円形であったものと思われる。深さは0.4mは確認できるがそれ以上は不明である。鍋底状を呈していたものと思われる。埋土は黒色土粒を含む暗褐色土であり, V 6-5号土坑の上部の埋土と酷似している。植栽の跡であろう。遺物はみられない。

(藤本 強)

V 7-4号土坑 (第373図)

黄褐色ローム盛土を剥がした面で確認された遺構である。従って, 盛土よりも古い時期のものとして認定される。東南端をV 7-5号ピットにより切られている。

平面形は径2.7~3.0mの不整円形を呈する。確認面からの深さは60cmほどであり, 坑底は平滑である。坑底と坑壁との境界は明瞭で, 立ち上がりの角度は60°ほどである。坑底のほぼ中央には径20cm, 深さ15cmほどの小穴が穿たれている。

埋土の層序は自然堆積のそれに近いが, 一時期に土坑の周囲から土砂を投げ入れて埋め戻したものと考えられる。遺物としては, 埋土中から数点の縄文土器片が得られているが, 本来この遺構に伴うものであるかどうかは不明である。

遺構の性格は明らかではないが, これが近世に属するものであるとすれば, 植栽痕である可能性が高いと思われる。(中村 慎一)

V 7-5号ピット (第373図)

黄褐色ローム盛土を剥いだ面で確認された小型の遺構である。V 7-4号土坑の東南端を切っている。

平面形は, 最長辺長約65cm, 最短辺長約40cmの不整隅丸三角形を呈する。確認面からの深さは40cmほどである。坑壁の立ち上がりはほぼ垂直に近く, 壁下半で一度内側へ折れて坑底に至る。

埋土はサラサラして締りの悪い黒色土の単純層から成っている。遺物は検出されていない。遺

構の性格は不明である。

(中村 慎一)

V 6-1号土坑 (第374図)

文学部調査区の東端, V 7グリッドにその大部分があり, V 6グリッドに北縁の一部がかかる。東半は調査区外にあって完掘されていない。

V 7-1号土坑と西辺が僅かに重複するが, V 7-1号土坑の壁面の観察や, ローム盛土との切り合い関係からこれらが古いほうから V 6-1号土坑, ローム盛土, V 7-1号土坑の順であることが知られる。さらに, 覆土上半が明治以降の暖房用の施設などにより失われている。

平面形は不整な楕円もしくは長円を呈し, 長軸3.3m, 残存する最大幅約1.7mを測り, 主軸方位は真北から東へ約150°振れる。深さは確認面より約0.9mを測り, ゆるやかに起伏する坑底となだらかな立ち上がりの壁とを持つ。覆土はロームブロックを多く含む暗灰色土を主体とし, 北側の立ち上がり付近にローム粒子を微量含む黒色土の堆積がみられる。遺物は, 灰釉陶器の小片が1点のみ出土している。遺構の性格は明らかではないが, 植栽痕ともおもわれる。構築の時期は, ローム盛土より古いことが知られるのみである。

(小川 望)

V 8-3号土坑 (第374図)

文学部調査区の東端, V 8グリッド中央に検出された土坑。東半は調査区外にあって完掘されていない。

V 7-6号土坑およびV 8-2号遺構と重複するが, 切り合い関係や土層セクションの観察から, 古いほうから V 7-6号土坑, V 8-3号土坑, V 8-2号遺構の順であることが知られる。

調査区東端沿いにサブトレを設定し, ローム面まで下げた際にその存在を確認している。ローム盛土層によってバックされている。

完掘されていないためその平面形は明らかでないが, 調査された部分から推定すれば, やや不整な方形を呈するものと思われ, 調査区内の北西辺, 南西辺ともに約1.0mを測る。深さは確認面より約0.7mを測り, ほぼ平坦な坑底とやや切り立った壁とをもつ。覆土はロームを主体とする。遺物は, 出土していない。遺構の性格は明らかでないが, V 6-1号土坑, V 7-6号土坑などと同様植栽痕ともおもわれる。構築の時期は, ローム盛土より古いことが知られるのみである。

(小川 望)

V 7-6号土坑 (第374図)

文学部調査区の東端, V 8グリッドにその大部分があり, V 7グリッドに北縁の一部がかかる。東縁は調査区外にあって完掘されていない。

V 7-5号ピット, V 8-2号遺構, およびV 8-3号土坑と重複するが, 切り合い関係や土層セクションの観察から, 当 V 7-6号土坑がもっとも古いことが知られる。

調査区東端沿いにサブトレを設定し, ローム面まで下げた際にその存在を確認している。ローム盛土層によってバックされている。

平面形は不整な円形を呈するものと思われ, 残存する最大径約2.0mを測る。深さは確認面より

約0.6mを測り、ほぼ平坦な坑底とやや切り立った壁とを有する。覆土はロームブロックを多く含む暗灰色土を下層に、砂利・灰色土・ロームブロックを含む茶褐色土を上層に持つ。遺物は、出土していない。遺構の性格は明らかでないが、V 6-1号土坑などと同様植栽痕ともおもわれる。構築の時期は、ローム盛土より古いことが知られるのみである。(小川 望)

U 8-5号土坑 (第375図)

U 8グリッドの中ほどに位置し、ロームを用いた厚い盛土に覆われていた、V 8-2号遺構の覆土を除去した段階で確認できた土坑群のひとつである。西側を近代以降の土坑に切られ、U 8-4・U 8-6・U 8-7・U 8-12号土坑を切っていた。

東西2.1m、南北1.9mを測り、南辺が弧状にせりだす土坑である。確認面からの深さは、一番深い所で80cmを測った。西壁は東壁に比べて急で、ローム粒子・ロームブロックを多量に含む黄褐色土が壁際に厚く堆積していた。またローム粒子をほとんど含まない堅くしまった黒色土が最下層を形成していた。壁・底部には工具痕が明瞭に残っている部分があり、凹凸が目立った。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は明確ではないが、規模・形態などから植栽痕と考えられる。(倉林 真砂斗)

U 8-3号土坑 (第375図)

U 8グリッドの中心部分から少し北によったところに位置し、北側をU 7-6号土坑、南側を近代以降の土坑に切られていた。またU 8-6号土坑を切り、U 8-5号土坑及びU 8-9号土坑との切り合い関係は不明であった。付近における複雑な切り合い関係のため、盛土に伴う、砂利・砂質土層との関係を平面的に確認することはできなかったが、Tラインより東へ2mのところの南北セクションから、盛土以前の遺構として把握した。

長軸90cm、短軸70cmほどの東西方向に主軸をもつ、楕円形を呈する土坑と考えられる。確認面からの深さは、50cmほどであった。覆土はロームブロック・黒色土ブロックを多く含んでしまっていた。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。(倉林 真砂斗)

U 8-4号土坑 (第375図)

U 8グリッドの中心部分から南よりのところで確認できた遺構で、北側をU 8-5号土坑及び近代以降の土坑に切られ、また西側にサブトレンチをいれた関係で形態を明らかにし得なかった。U 8-5号土坑に切られることから、盛土以前の遺構と考えられる。

本遺構は隅丸方形土坑あるいは不整形土坑の一部と考えられるが、規模は不明である。覆土はローム粒子・ロームブロックを多く含む、しまりがある黒褐色土で、最下層にはロームブロックが多量に見られた。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。

(倉林 真砂斗)

U 8-6号土坑 (第375図)

U 8グリッドの中心から少し北よりのところに位置し、U 8-3・U 8-5号土坑に切られ、U 8-7・U 8-8号土坑を切っていた。また上部をV 8-2号遺構に切られていたことから、

盛土がなされる以前に掘り込まれた土坑であることがわかる。

隅丸方形土坑の一部と考えられるが、規模は不明である。確認面からの深さは10cmほどで、覆土は砂利混じりの黄褐色砂質土であった。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。
(倉林 真砂斗)

U 8-7号土坑 (第375図)

U 8グリッドの中心から少し北によった所に位置し、U 8-5号土坑の北壁を精査して確認できた。西側でU 8-6号土坑に、南側でU 8-5号土坑に切られ、北側でU 8-8・U 8-9号土坑を切っていた。またU 8-6号土坑と同様、上部をV 8-2号遺構に切られていたため、盛土がなされる以前に掘り込まれたことがわかる。

隅丸方形土坑の一部と考えられるが、規模は不明である。確認面からの深さは20cmほどで、覆土はローム粒子混じりのしまりがある暗茶褐色土であった。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。
(倉林 真砂斗)

U 8-8号土坑 (第375図)

U 8グリッドの北半部中ほどに位置し、U 8-9号土坑の覆土を掘り込んでいた。南側でU 8-6・U 8-7号土坑・V 8-2号遺構に、北側でU 7-5号土坑に切られていた。V 8-2号遺構の壁を精査した段階で確認でき、盛土がなされる以前の遺構であると判断した。

推定で長軸1.2m、短軸0.8mの南北に主軸をもつ楕円形を呈する土坑と考えられ、確認面からの深さは20cmほどであった。覆土はローム粒子・ロームブロックを含むしまりがない茶褐色土で、出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。
(倉林 真砂斗)

U 8-9号土坑 (第375図)

U 8グリッドの北半部中ほどに位置し、南側でV 8-2号遺構に、北側でU 7-5号土坑に切られ、U 8-8号土坑によって覆土を掘り込まれていた。U 8-8号土坑と同様V 8-2号遺構の北壁を精査して確認できた。従って盛土がなされる以前の遺構である。

推定で長軸1.5m、短軸1.2mの南北方向に主軸をもつ楕円形を呈する土坑と考えられ、確認面からの深さは30cmほどであった。覆土は底部直上に砂利を多く含む、かたくしまった黄褐色砂質土で、出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。
(倉林 真砂斗)

V 8-5号土坑 (第375図)

V 8グリッドの西端中ほどに位置し、主としてロームブロックからなるV 8-2号遺構の覆土である明黄褐色土を除去した段階で確認できた。西側でV 8-6号土坑を切っていた。V 8-2号遺構に切られることから、盛土がなされる以前の遺構である。

長軸約1m、短軸0.7mの楕円形を呈する土坑で、確認面からの深さは30cmほどであった。覆土は直径5cmほどのロームブロックを含むしまりがない茶褐色土で、出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。
(倉林 真砂斗)

V 8-6号土坑 (第375図)

V 8 グリッドの西端中ほどに位置し、西側は U 8 グリッドにかかっていた。V 8-2 号遺構の覆土を除去した段階で確認でき、上部を斜めに削平されていた。東側を V 8-5 号土坑に切られ、西側で U 8-12 号土坑を切っていた。V 8-2 号遺構に切られることから、盛土がなされる以前の遺構である。

長軸1.2m、短軸約0.9mの隅丸長方形を呈する土坑で、主軸方向は西北-東南方向であった。覆土は大きく2層に分けられ、第1層はローム粒子・直径2~3cmのロームブロックを含むしまった茶褐色土で、第2層は1層よりもロームが少ない暗茶褐色土で部分的にかたくしまっていた。部分的にロームブロックを多量に含む第3層が認められた。出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。 (倉林 真砂斗)

U 8-12号土坑 (第375図)

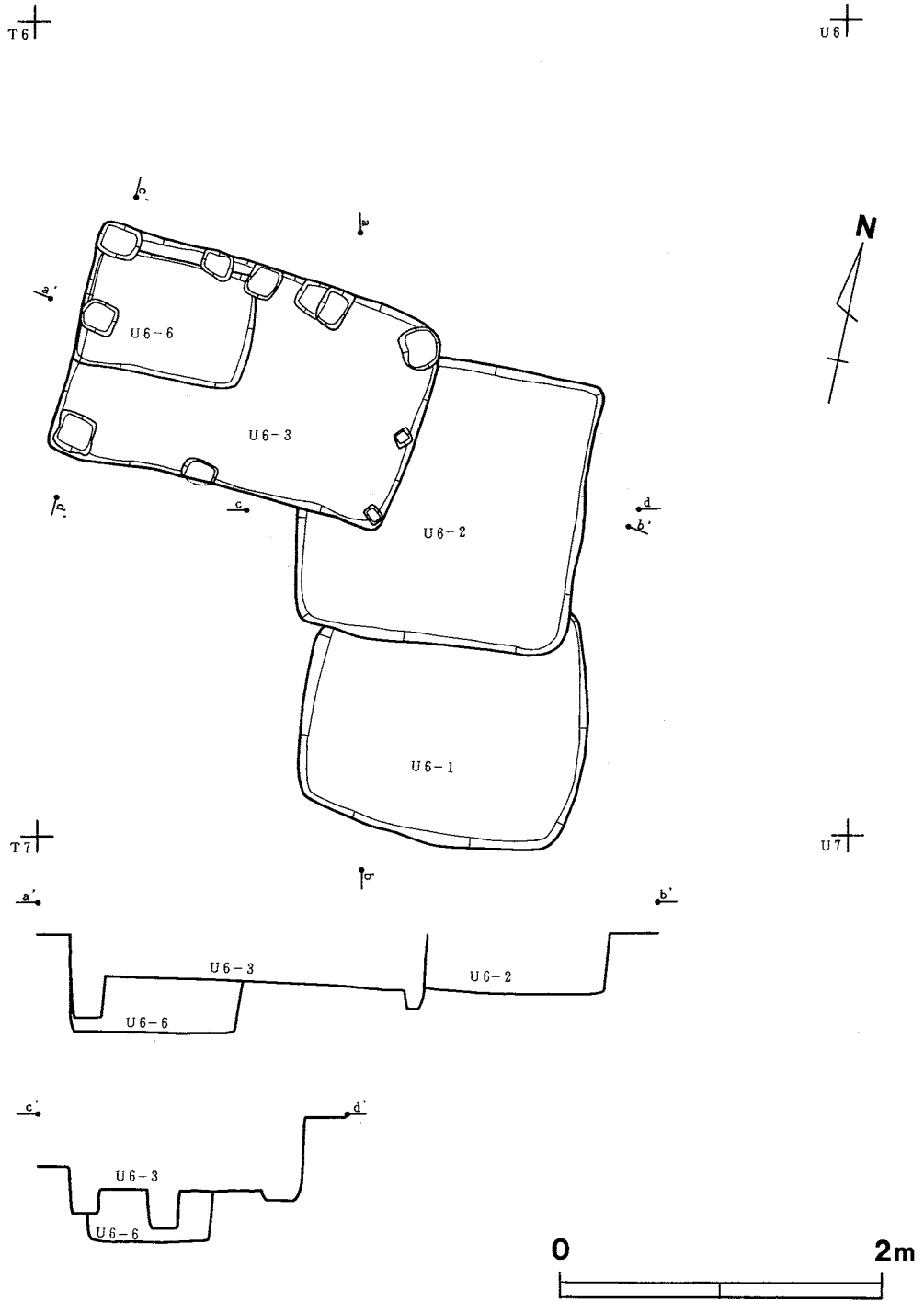
U 8 グリッドの東端中ほどに位置し、東側を V 8-6 号土坑に、西側を U 8-5 号土坑に切られていた。また上部を V 8-2 号遺構によって削平されたと考えられる。V 8-2 号遺構の覆土を除去した段階で確認できたため、盛土がなされる以前の遺構である。

直径70cmほどの不整形土坑と考えられ、確認面からの深さは20cmほどであった。底部には凹凸が認められた。覆土はローム粒子・ロームブロックを密に含んでかたくしまった黄褐色土で、出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。 (倉林 真砂斗)

U 8-11号ピット (第375図)

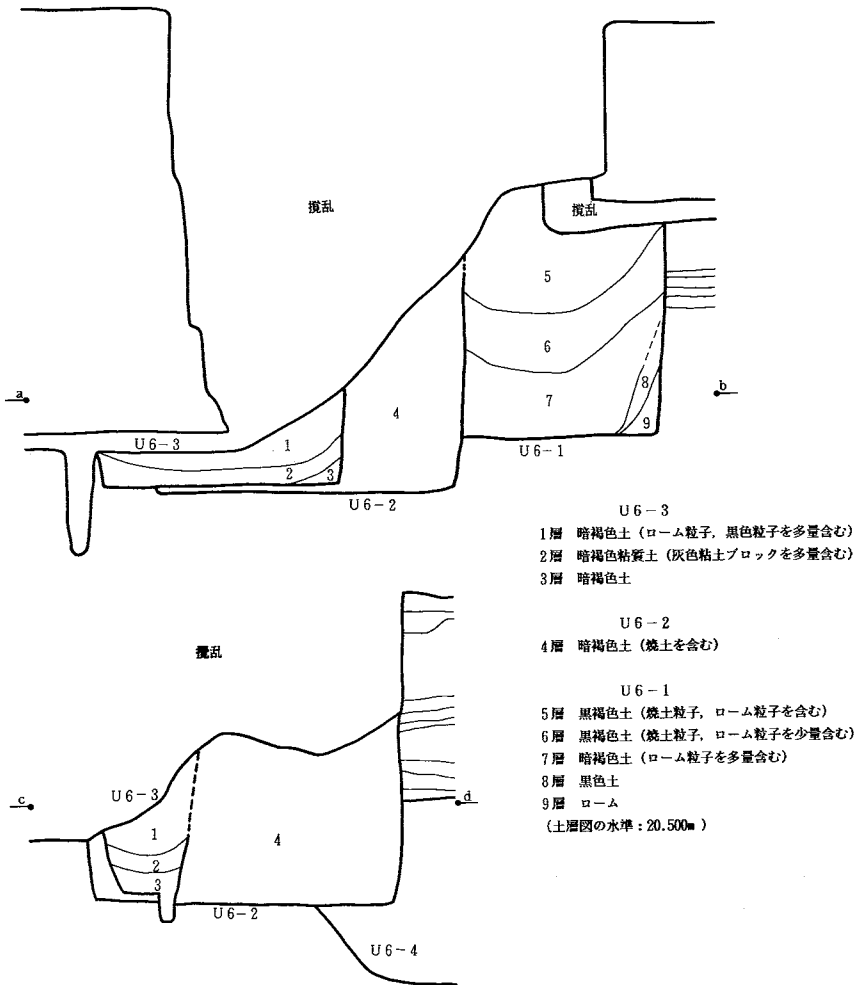
U 8 グリッドの東端南寄りに位置し、V 8-2 号遺構の底部付近で確認できた。上部は V 8-2 号遺構によって著しく削平を受け、本来の規模を保っていないと考えられる。V 8-2 号遺構に切られることから、盛土がなされる以前の遺構である。

長軸65cm、短軸30cmであるが、南へ傾斜する削平により南辺は下端がなく、階段状を呈していた。覆土はローム粒を含むしまりが少ない茶褐色土で、出土遺物は認められなかった。本遺構の性格は不明である。 (倉林 真砂斗)

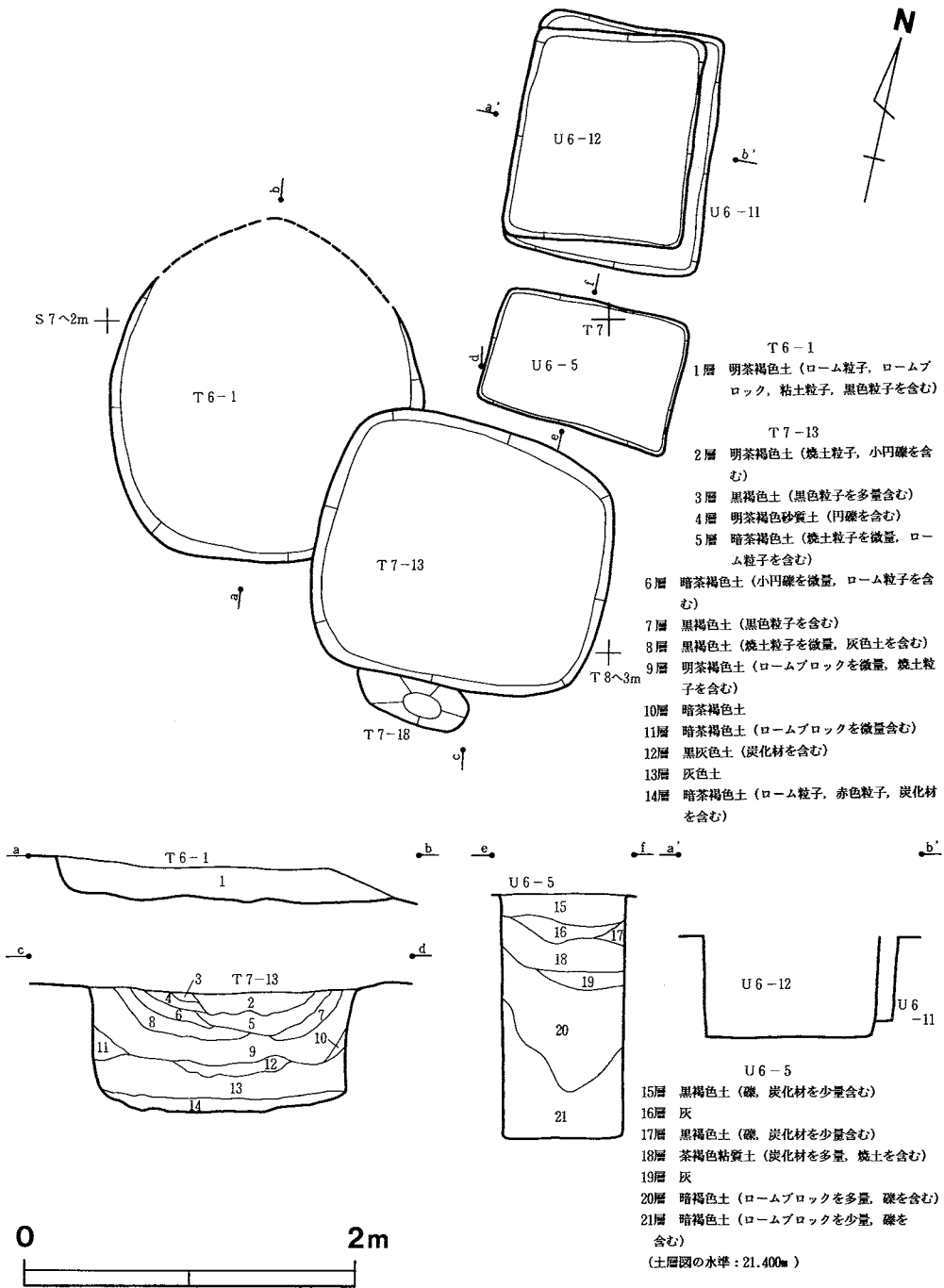


第354図 T~V=5~10区の遺構(1)

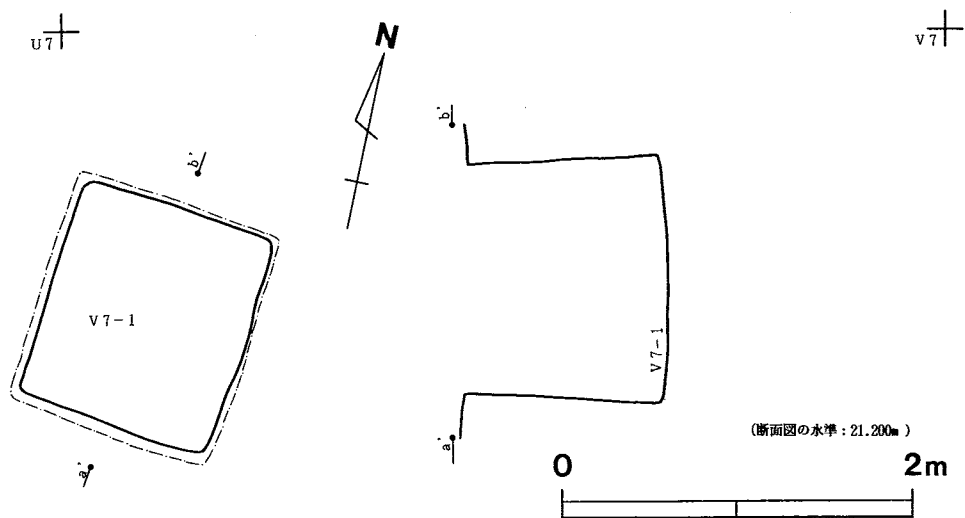
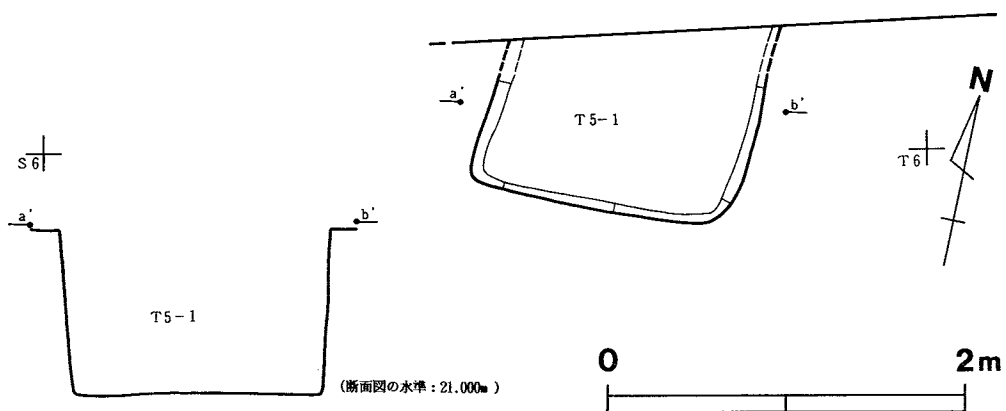
報告篇第四章 江戸時代の調査 II



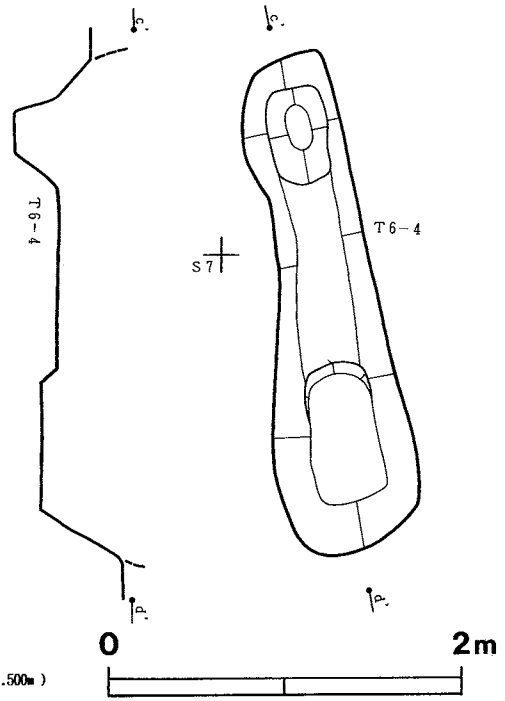
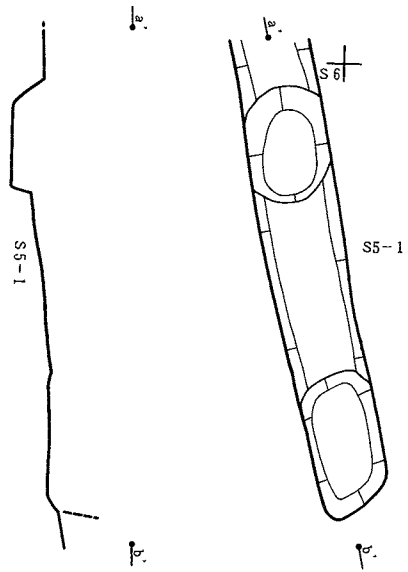
第355図 T~V = 5~10区の遺構(2)



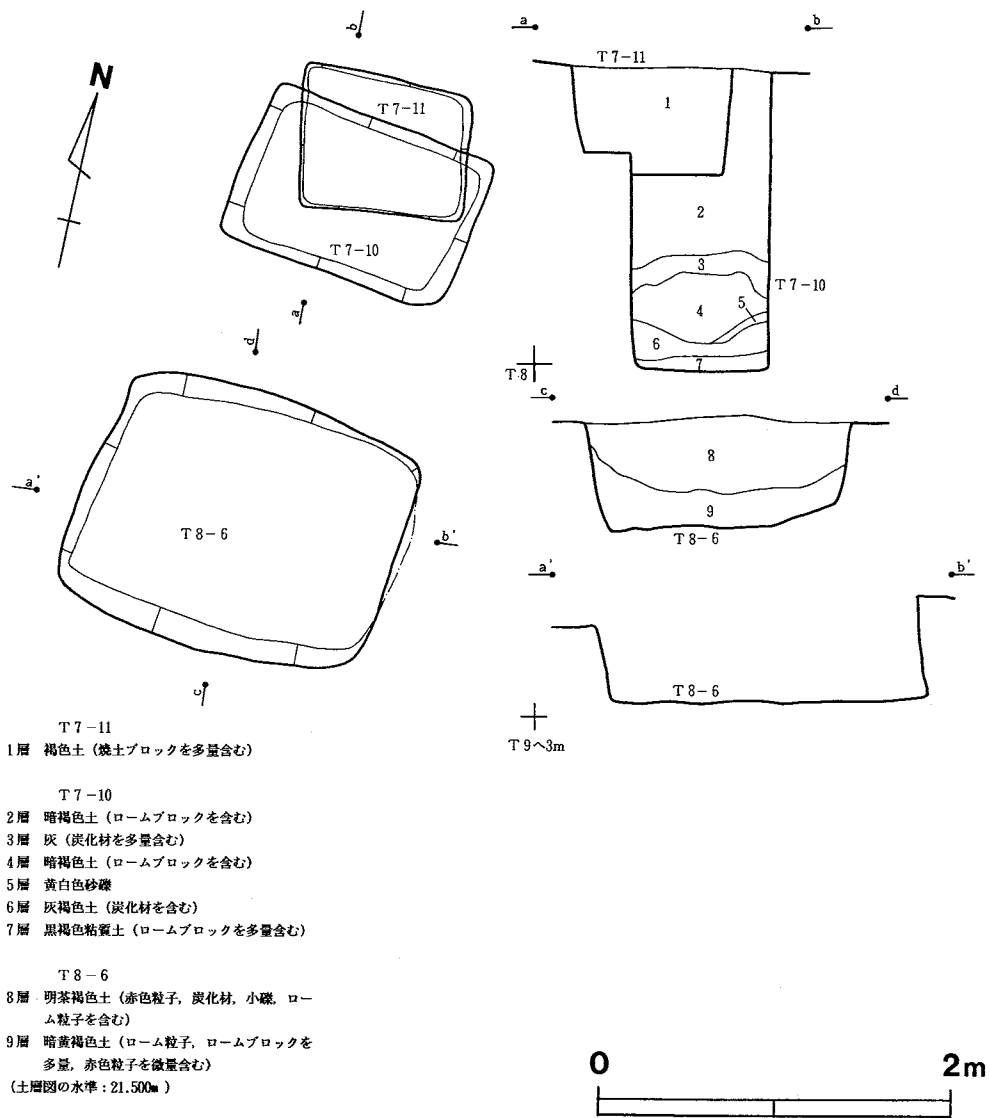
第356図 T~V = 5~10区の遺構(3)



第357図 T~V = 5~10区の遺構(4)



第358図 T～V = 5～10区の遺構(5)

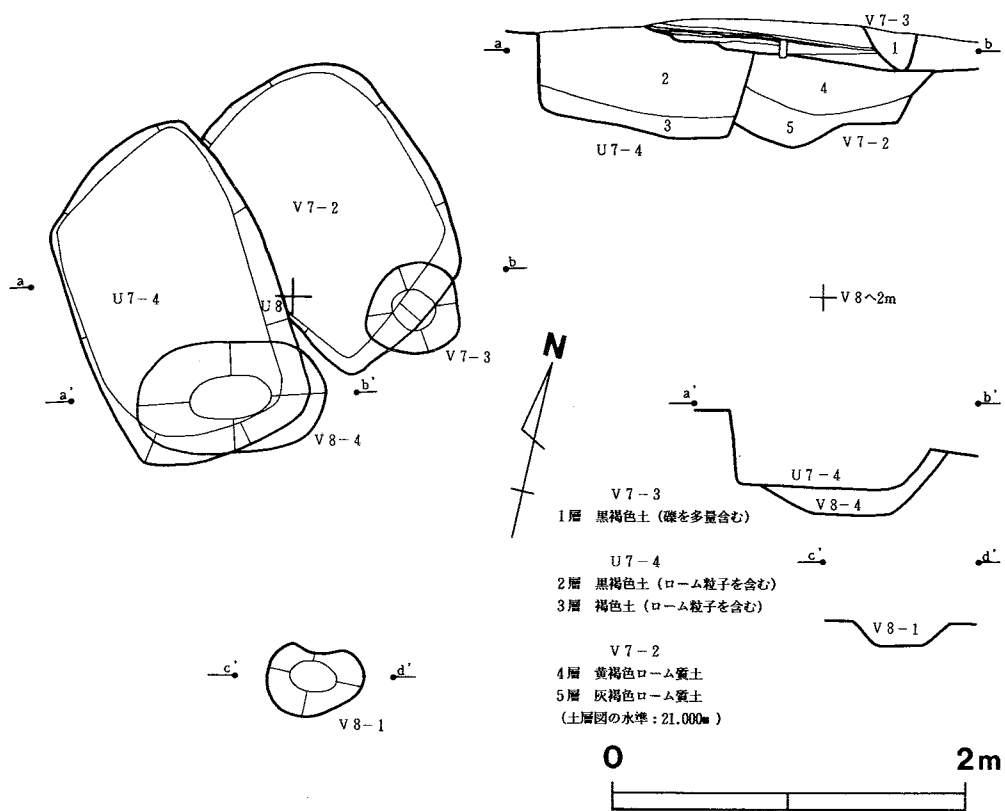


T 7-11
1層 褐色土（焼土ブロックを多量含む）

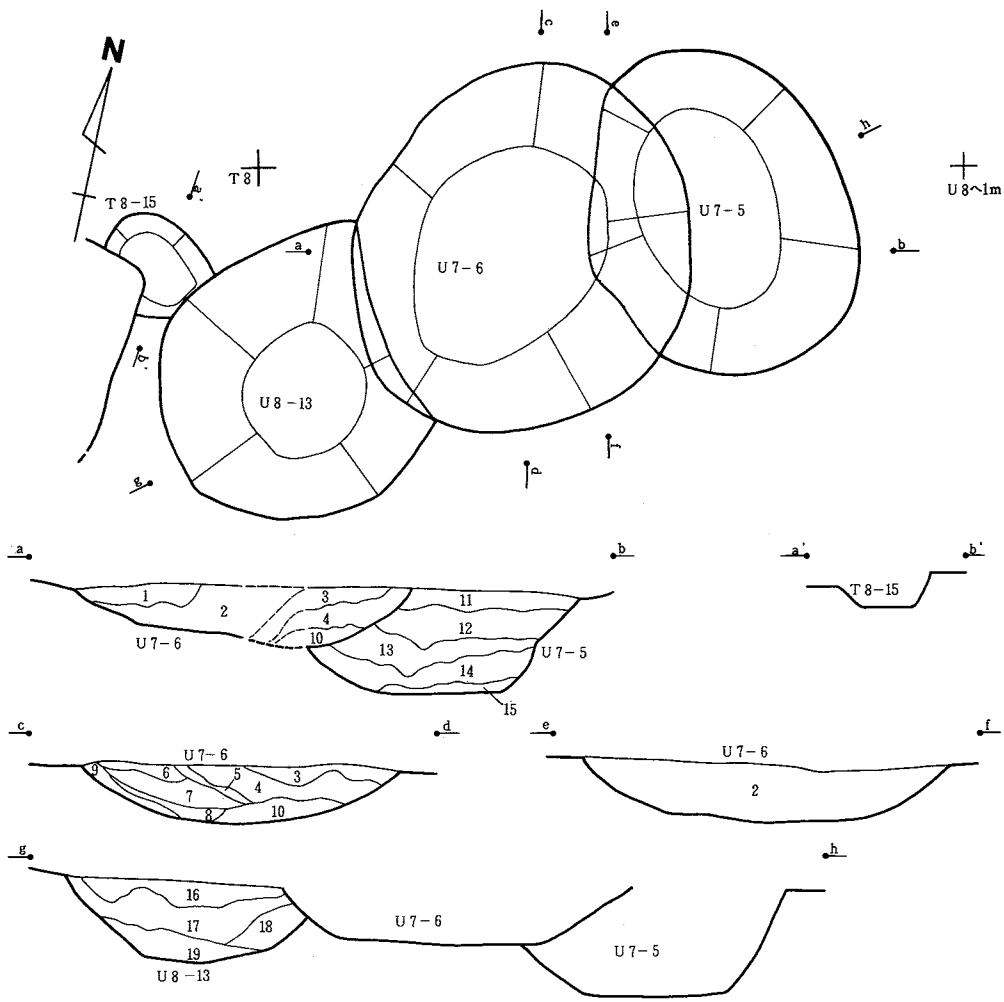
- T 7-10
- 2層 暗褐色土（ロームブロックを含む）
 - 3層 灰（炭化材を多量含む）
 - 4層 暗褐色土（ロームブロックを含む）
 - 5層 黄白色砂礫
 - 6層 灰褐色土（炭化材を含む）
 - 7層 黒褐色粘質土（ロームブロックを多量含む）

- T 8-6
- 8層 明茶褐色土（赤色粒子、炭化材、小礫、ローム粒子を含む）
 - 9層 暗黄褐色土（ローム粒子、ロームブロックを多量、赤色粒子を微量含む）
- （土層図の水準：21.500m）

第360図 T～V＝5～10区の遺構（7）



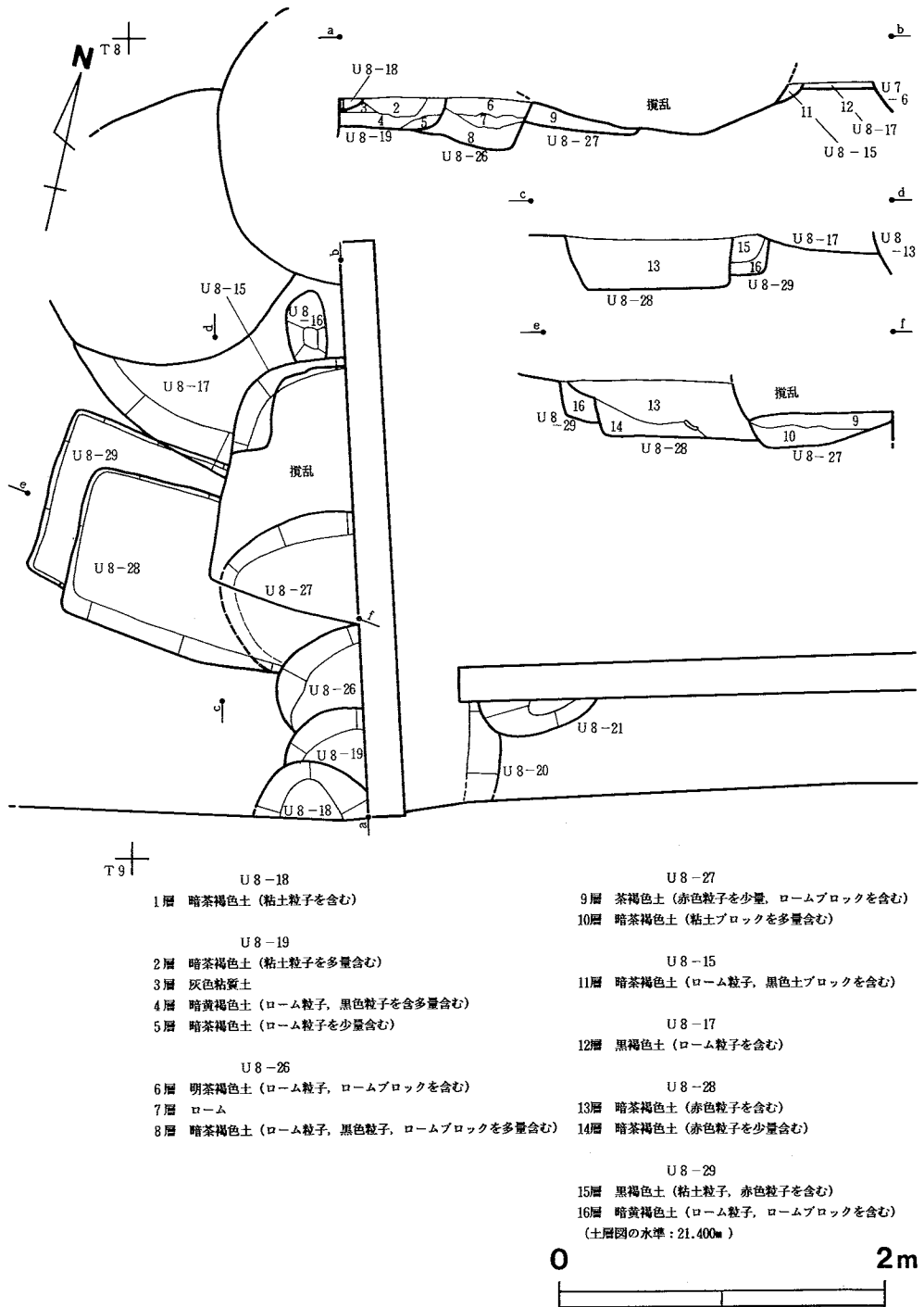
第361図 T~V=5~10区の遺構(8)



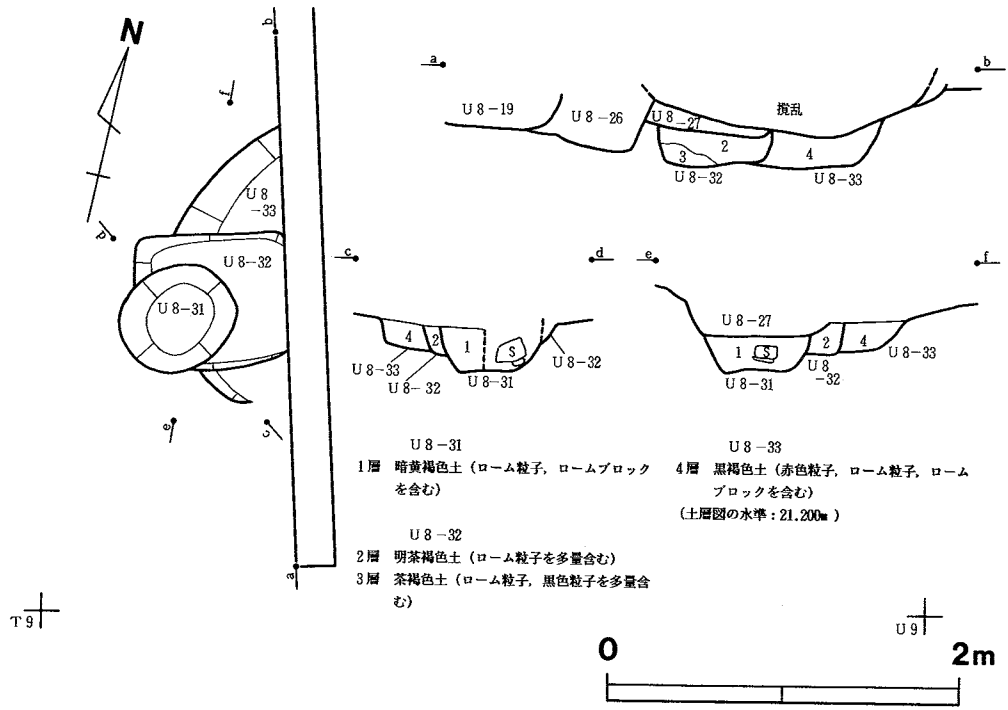
- | U 7-6 | | U 7-5 | | U 8-13 | |
|-------|-------------------------------------|-------|---------------------------------|--------|---------------------------------|
| 1層 | 暗灰色土 (ローム粒子, 粘土ブロックを含む) | 11層 | 暗茶褐色土 (ローム粒子, 小礫を含む) | 16層 | 明茶褐色土 (ローム粒子を含む) |
| 2層 | 暗茶褐色土 (ローム粒子, ロームブロック, 粘土ブロックを多量含む) | 12層 | 明茶褐色土 (ローム粒子, 黒色粒子, ロームブロックを含む) | 17層 | 暗茶褐色土 (黒色粒子, ロームブロック, ローム粒子を含む) |
| 3層 | 暗褐色土 (ローム粒子を多量含む) | 13層 | 黄褐色土 (ロームブロックを多量含む) | 18層 | 暗茶褐色土 (黒色粒子を含む) |
| 4層 | 暗褐色土 (ロームブロック, ローム粒子を多量含む) | 14層 | 暗茶褐色土 | 19層 | 暗茶褐色土 (ロームブロックを含む) |
| 5層 | 黒褐色土 | 15層 | 黒褐色土 (ローム粒子を少量含む) | | (土層図の水準: 21.300m) |
| 6層 | 暗褐色土 (ローム粒子を含む) | | | | |
| 7層 | 暗褐色土 (ローム粒子を多量含む) | | | | |
| 8層 | 黒褐色土 (粘土粒子を微量, ローム粒子を含む) | | | | |
| 9層 | 褐色土 (ローム粒子, ロームブロックを含む) | | | | |
| 10層 | 褐色土 (ロームブロックを多量含む) | | | | |

第362図 T~V = 5~10区の遺構(9)

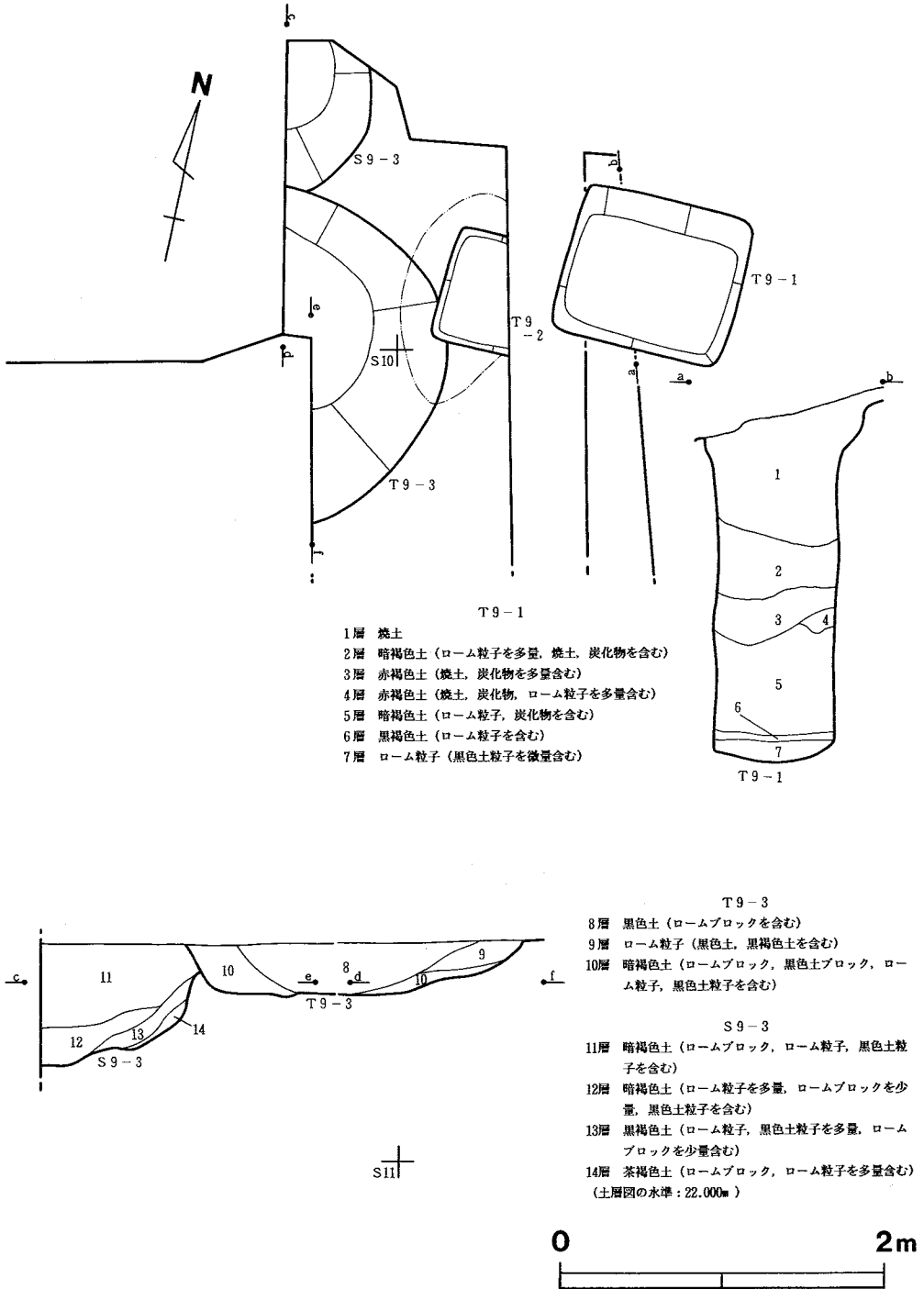
報告篇第四章 江戸時代の調査 II



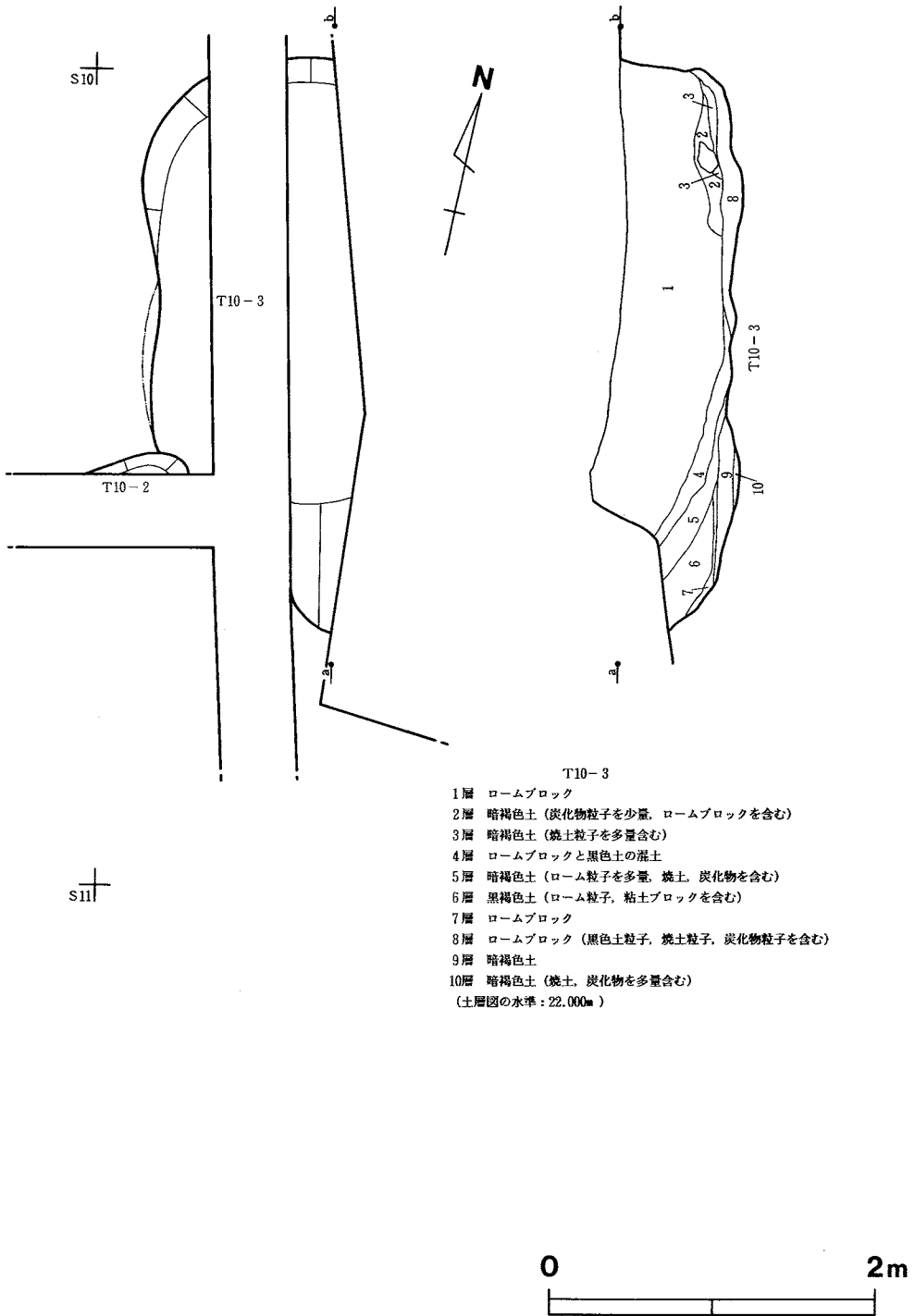
第363図 T~V=5~10区の遺構(10)



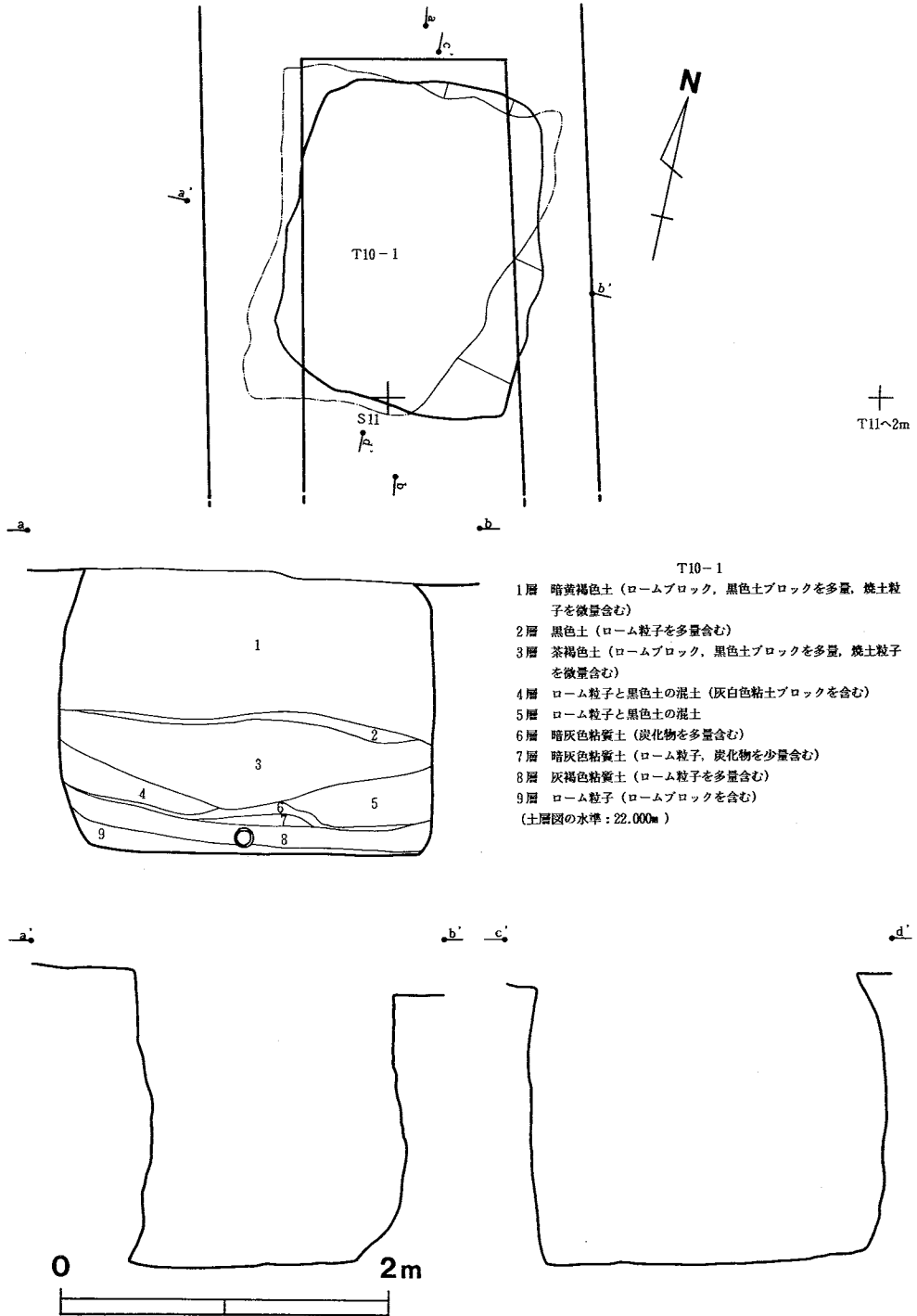
第364図 T~V=5~10区の遺構(11)



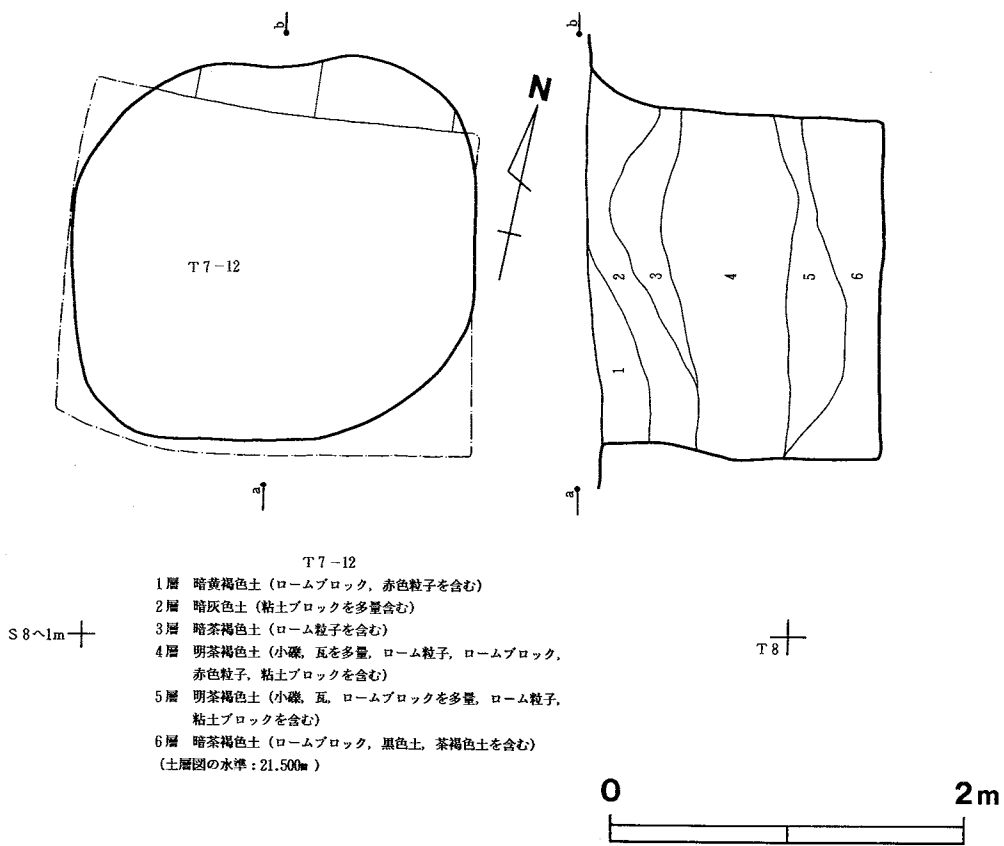
第365図 T~V = 5~10区の遺構(12)



第366図 T~V = 5~10区の遺構(13)

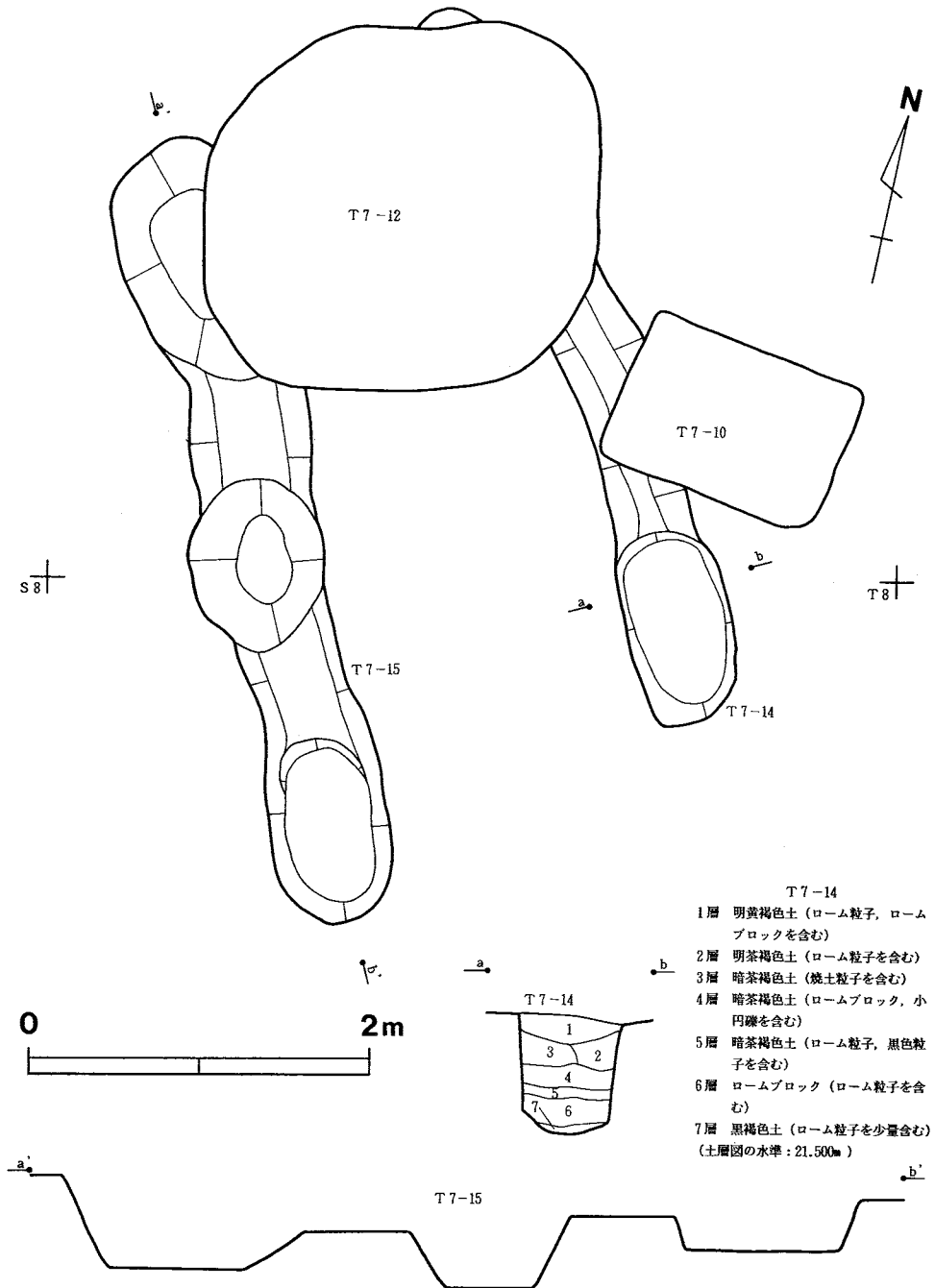


第367図 T~V=5~10区の遺構(14)

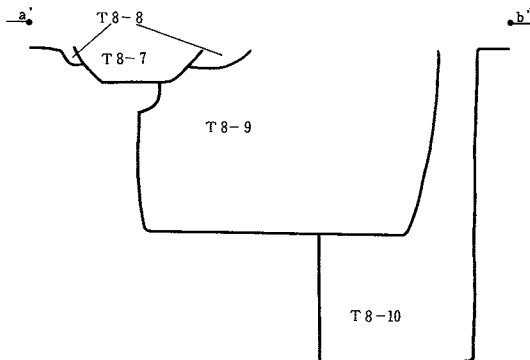
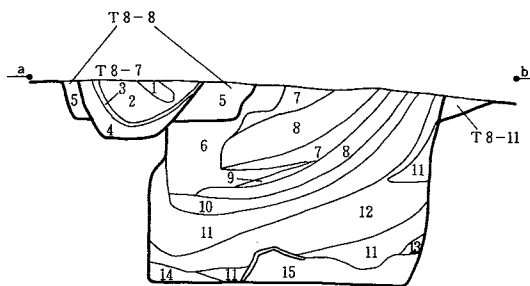
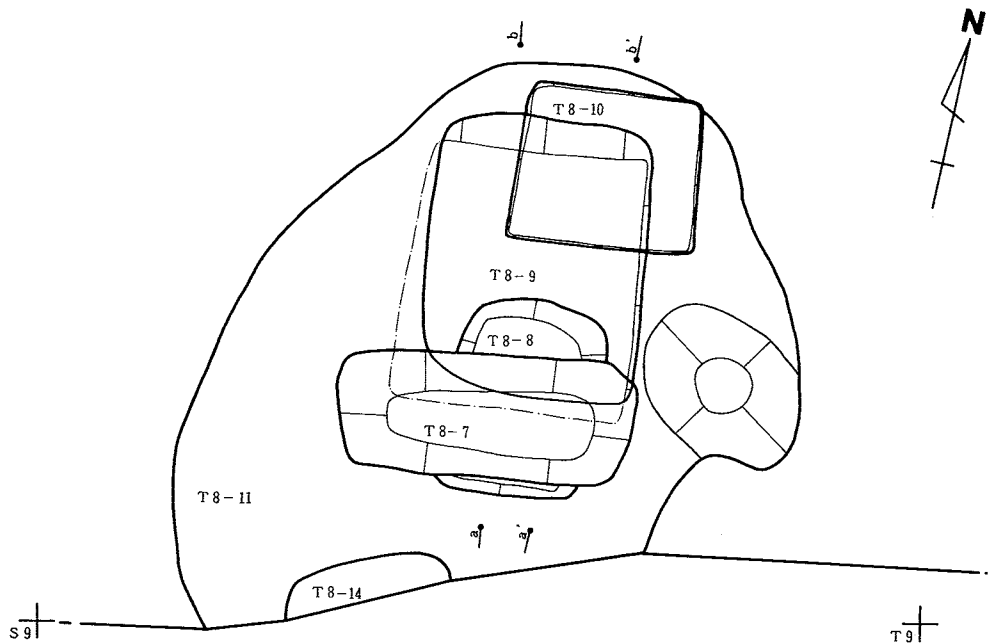


- T 7-12
- 1層 暗黄褐色土 (ロームブロック, 赤色粒子を含む)
 - 2層 暗灰色土 (粘土ブロックを多量含む)
 - 3層 暗茶褐色土 (ローム粒子を含む)
 - 4層 明茶褐色土 (小礫, 瓦を多量, ローム粒子, ロームブロック, 赤色粒子, 粘土ブロックを含む)
 - 5層 明茶褐色土 (小礫, 瓦, ロームブロックを多量, ローム粒子, 粘土ブロックを含む)
 - 6層 暗茶褐色土 (ロームブロック, 黒色土, 茶褐色土を含む)
- (土層図の水準: 21.500m)

第368図 T~V = 5~10区の遺構(15)



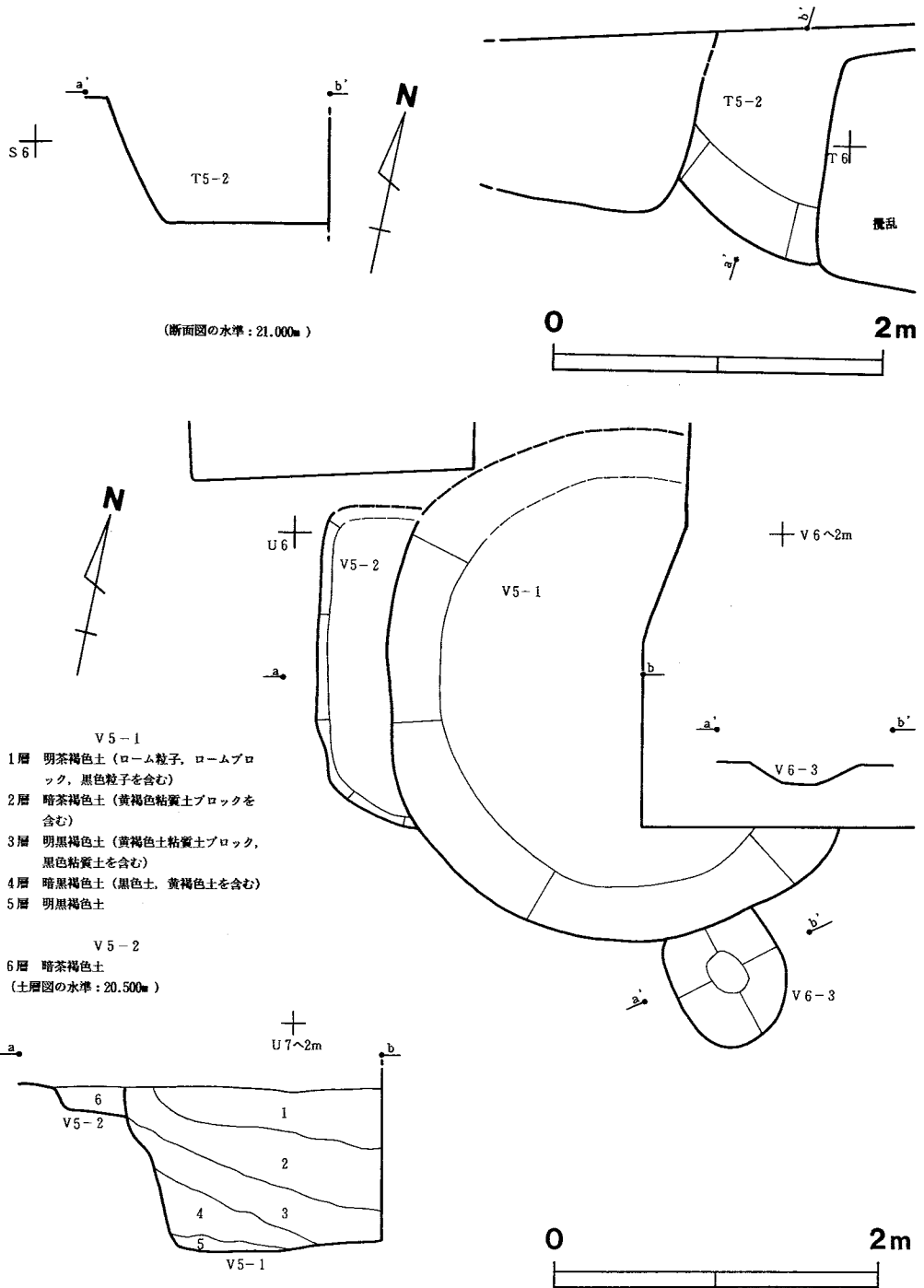
第369図 T~V = 5~10区の遺構(16)



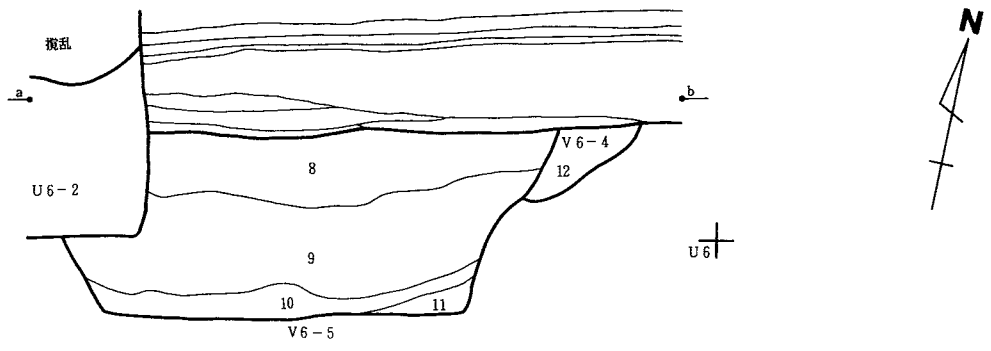
- T8-7**
- 1層 灰褐色粘質土 (礫, ガラスを含む)
 - 2層 暗黄褐色粘質土 (黒褐色土, 礫, ガラスを含む)
 - 3層 灰白色粘土
 - 4層 灰黒色粘質土 (焼土, ローム粒子を少量含む)
- T8-8**
- 5層 茶褐色粘質土 (焼土粒子を多量, ローム粒子を少量含む)
- T8-9**
- 6層 黄褐色土と黒褐色土の混土
 - 7層 黄褐色土ローム質土
 - 8層 暗褐色粘質土 (礫, 焼土ブロックを含む)
 - 9層 黒色粘質土 (凝灰岩ブロックを含む)
 - 10層 焼土 (褐色土を含む)
 - 11層 白色灰 (炭化材, 瓦を多量含む)
 - 12層 黄褐色ローム質土
 - 13層 黒色土とロームの混土
 - 14層 褐色土 (焼土ブロックを多量含む)
- (土層図の水準: 21.500m)



第370図 T~V = 5~10区の遺構(17)

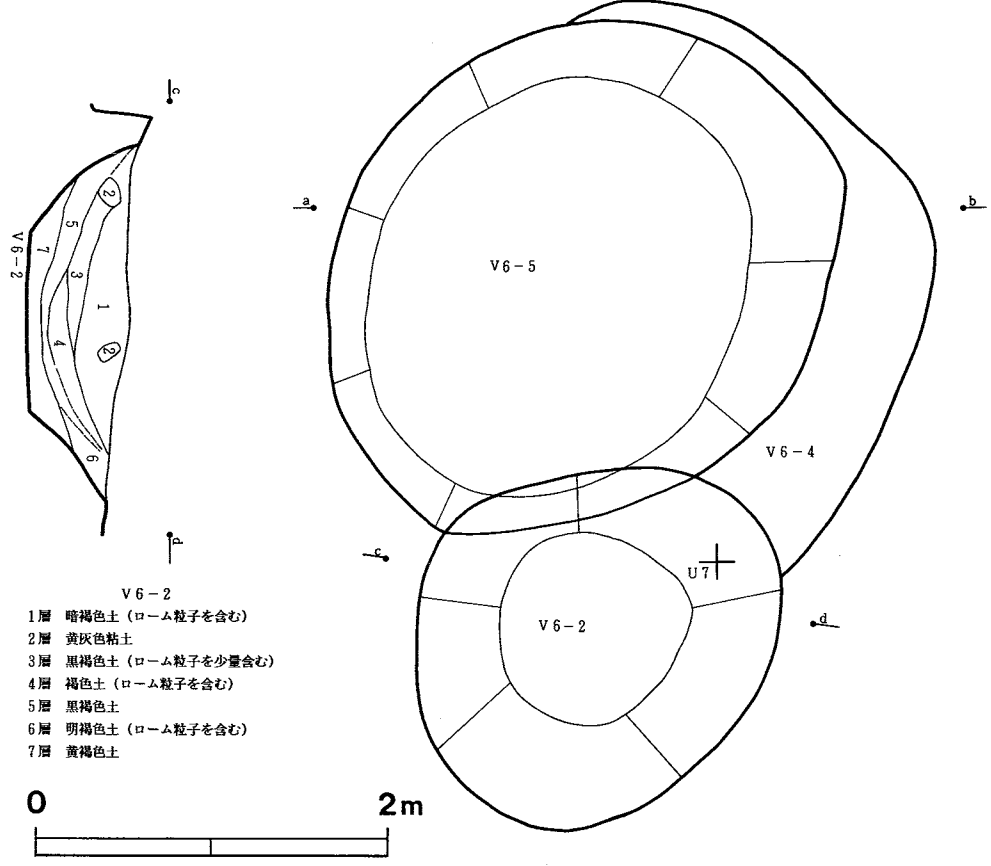


第371図 T~V = 5~10区の遺構(18)



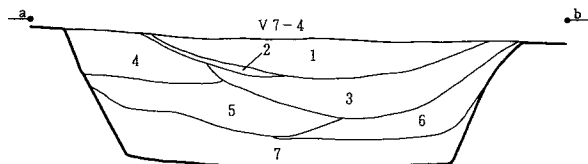
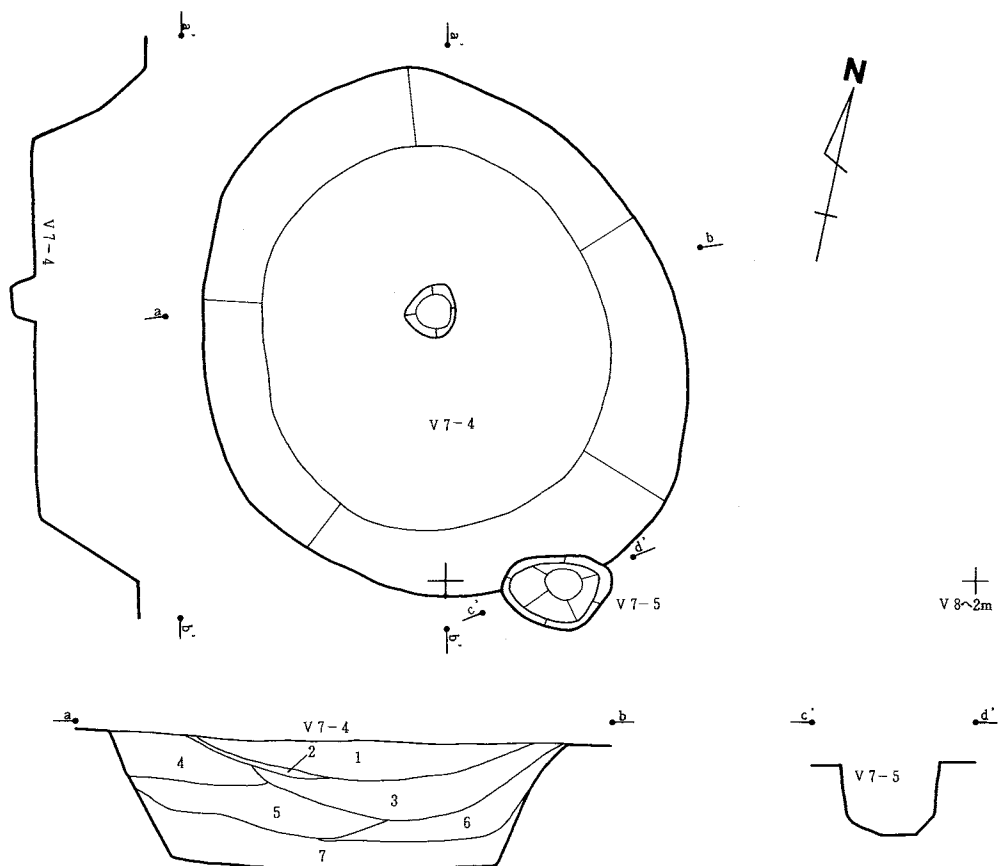
- V 6 - 5
- 8層 暗褐色土（ロームブロック，ローム粒子を多量含む）
 - 9層 黒褐色土（ロームブロック，ローム粒子を少量含む）
 - 10層 黒褐色土
 - 11層 ローム

- V 6 - 4
- 12層 暗褐色土（ロームブロックを多量含む）
- （土層図の水準：20.700m）



- V 6 - 2
- 1層 暗褐色土（ローム粒子を含む）
 - 2層 黄灰色粘土
 - 3層 黒褐色土（ローム粒子を少量含む）
 - 4層 褐色土（ローム粒子を含む）
 - 5層 黒褐色土
 - 6層 明褐色土（ローム粒子を含む）
 - 7層 黄褐色土

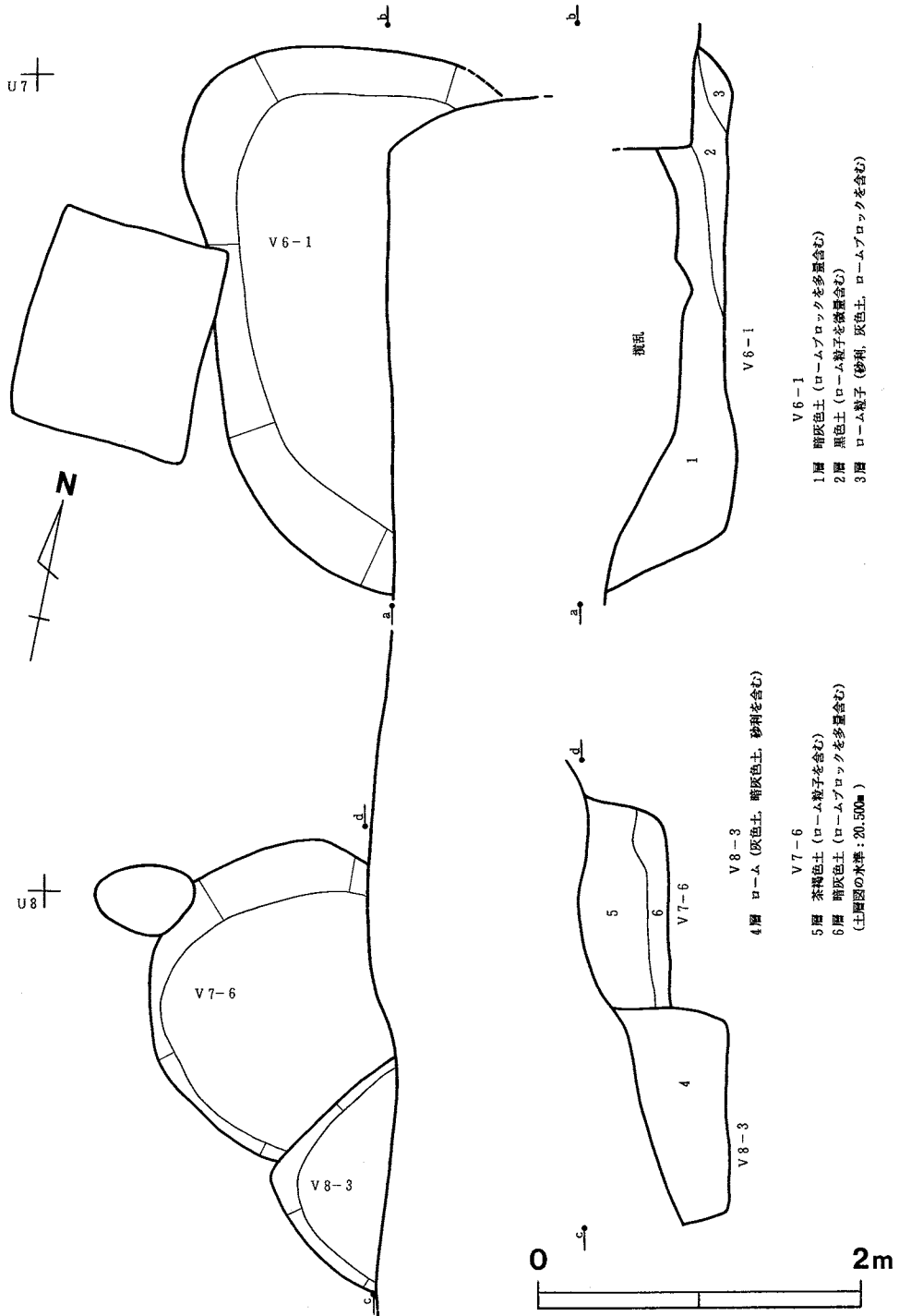
第372図 T～V = 5～10区の遺構(19)



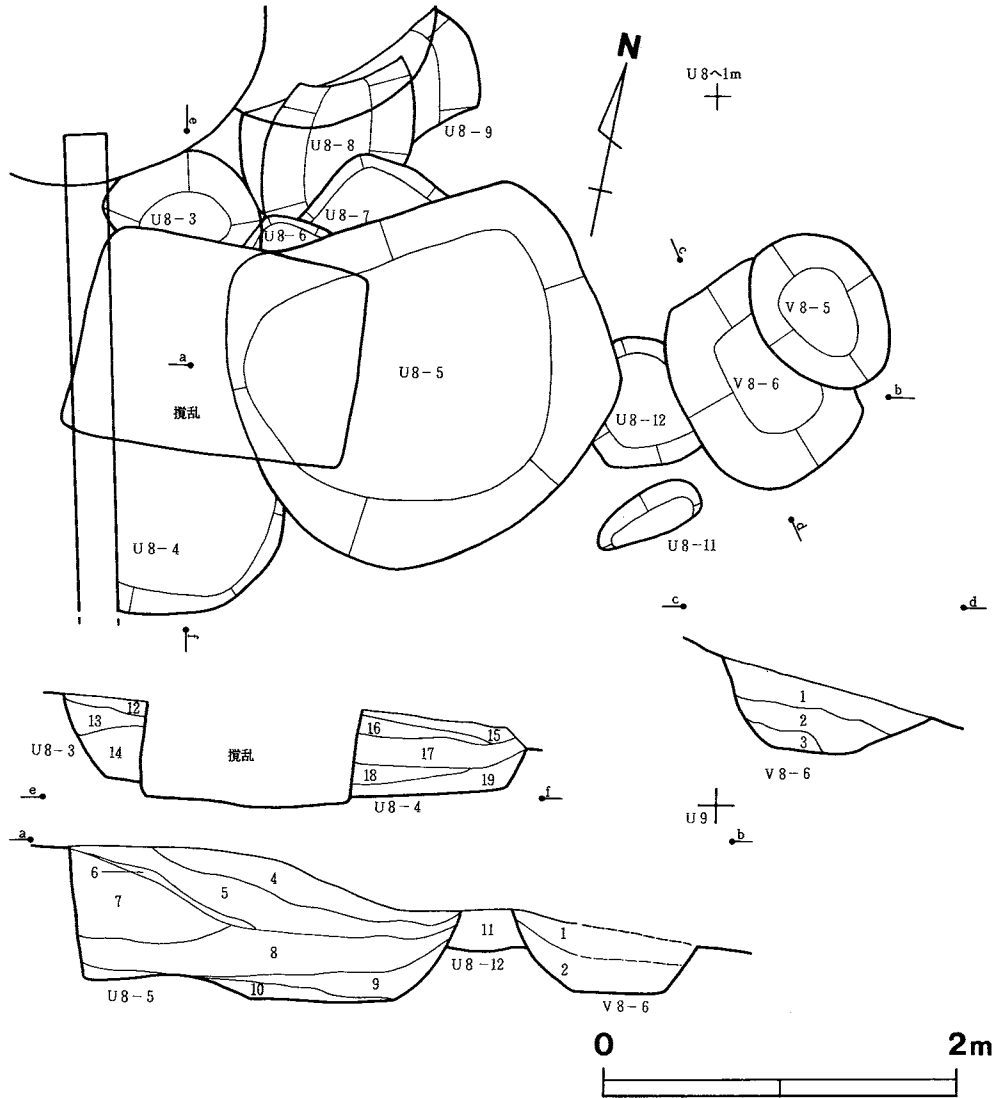
- V 7 - 4
- 1層 褐色土 (ロームを少量含む)
 - 2層 茶褐色土
 - 3層 黒褐色土
 - 4層 褐色土 (ローム粒子を多量含む)
 - 5層 褐色土 (ローム粒子, 淡褐色粘質土粒子を含む)
 - 6層 茶褐色土 (ローム粒子, 淡褐色粘質土粒子を含む)
 - 7層 ローム
- (土層図の水準: 20.700m)



第373図 T ~ V = 5 ~ 10区の遺構(20)



第374図 T ~ V = 5 ~ 10区の遺構 (21)



- V 8 - 6**
- 1層 茶褐色土 (ローム粒子, ロームブロックを含む)
 - 2層 暗茶褐色土 (ローム粒子, ロームブロックを少量含む)
 - 3層 黄褐色土 (ロームブロックを多量含む)
- U 8 - 5**
- 4層 茶褐色土 (ローム粒子, ロームブロック, 小礫, 瓦を多量含む)
 - 5層 茶褐色土 (ローム粒子, ロームブロックを含む)
 - 6層 黒褐色土 (ローム粒子を少量含む)

- 7層 黄褐色土 (ローム粒子, ロームブロックを多量含む)
 - 8層 暗茶褐色土 (ローム粒子, ロームブロックを含む)
 - 9層 明茶褐色土 (ローム粒子, ロームブロックを多量含む)
 - 10層 黒色土 (ローム粒子を微量含む)
- V 8 - 2**
- 11層 黄褐色土 (ローム粒子, ロームブロックを多量含む)

- U 8 - 3**
- 12層 褐色土 (ロームブロックを多量含む)
 - 13層 褐色土 (ロームブロック, 黒色土ブロックを含む)
 - 14層 褐色土 (ロームブロック, 黒色土ブロックを多量含む)
 - 15層 黒褐色土 (ローム粒子を多量含む)
 - 16層 黒褐色土 (ローム粒子を少量含む)
 - 17層 黒褐色土 (ローム粒子, ロームブロックを多量含む)
 - 18層 黒褐色土 (ローム粒子を含む)
 - 19層 暗黄褐色土 (ロームブロックを多量含む)
(土層図の水準: 20.500m)

第375図 T ~ V = 5 ~ 10区の遺構 (22)

(4) V～Y=5～10区の遺構

W 9-1・2号ピット (第376図)

W 9区に発見した形状は若干異なるが、規模・埋土ともによく似た土坑である。V 8-101号遺構の掘り方を切っている。調査時の所見によると、新道を埋めている土の一部を切っているようにもみえたが、確言できない。V 8-101号遺構より新しいことは確実であるが、Y 7-101号遺構との関係は不明である。W 9-1号ピットはV 8-101号遺構の石に接して作られているし、W 9-2号ピットは石の抜き跡を埋めた土を切って作られている。両者とも瓦の小さな破片を多量につめられていた。瓦の間に若干の暗褐色土が入っていた。

1号ピットは一辺0.5mの不整形をしており、深さは0.5mある。2号ピットは1辺0.5mの隅丸方形もしくは径0.5mの不整形円形という平面形をしている。深さは0.4mである。

両者の位置は中心距離で2.2m離れており、Y 7-101号遺構の肩からは1～1.2m離れている。類似の遺構であるので有機的連関があったと考えるのが妥当であろうが、はっきりしない。また道にほぼ平行して、両者があることから、道との関連も考えられるがはっきりしない。

(藤本 強)

Y 7-101号遺構 (第376～378図：図版4)

本調査の時に、U10区で図書館の基礎に壊され、辛うじて両側が確認されたものである。1985年の調査はこの道の延長を探ることが主な目的であった。屋敷と「育徳園」を結ぶものであり、当遺構以前にも、ほぼ同じところを通るより古い旧道が2本はあったことが確認されている。これらは当遺構によって大きく破壊されている。

U10区では、南北方向に近いが、V 9区で向きをかえ、南西―東北方向になり、池畔に至っていたものであろう。

上の幅は約2m、底幅約1.4mで、底には厚さ20cmの小砂利が敷きつめられている。小砂利は径2～3cmの粒の揃った円礫である。道はほとんどのところで切り通し状になっていたものと考えられる。その深さは必ずしもはっきりしないが、Y 7区では、約2m、U10区では2mをこえる深さがあったことが確認できる。Y 7、X 7・8、W 8・9、V 8・9区では黒色土からロームへと続く自然堆積を掘って作られている。U10区の東壁はロームを掘っているが、西壁は旧道(X 8-101・V 8-101号遺構)を埋めた版築状の固くしまった堆積を切っている。W・Vにおいても上部は旧道を埋めた土を切っているが、ここも版築状の構造はみられないが、しっかりとたたきしめられた埋土を切っている。東側の部分では確認できなかったが、U10区においては、東壁にも、西壁にも壁面に意図的に灰色の粘土の薄層を貼りつけている。底は玉砂利、壁は灰色粘土という装飾効果を意識した道である。

版築状の構造は厚さが2m近くもあり、10～20cmおきに薄層をはさむものであり、黄褐色土、褐色土、黒褐色土、灰色粘土、白色粘土、砂岩粉末などからなっていて、しっかりとたたきしめ

られている。

道を埋めているのは黄褐色土、黒色土、茶褐色土などであり、いわゆるレンズ状の堆積をみせている。遺物はほとんどみられない。

道の傾斜は南西の部分では、水平距離3 mで0.1mほどくだるというきわめてゆるやかなものであるが、しだいに傾斜を強め、もっとも急なところでは、3 mで0.45mくだっている。

(藤本 強)

X 8—101号遺構 (第377図)

U 9・10区でまず確認されたもので、Y 7—101号遺構の西側と北側をとりまくような形でみられる。東側と南側はY 7—101号遺構によって壊されたためか確認できていない。東の延長部もしだいに判らなくなる。東端は土管の掘り方ではっきりしなくなる。あるいはY 7—101号遺構に完全に壊されていることも考えられる。

U 9・10区では、一度ロームまで掘り、その上に小砂利まじりのロームを敷きつめているが、V 8区に入ると、ロームの上には黒色土の薄層があるだけである。その上は新道構築に関わると思われる盛土になる。Y 7—101号遺構の項でも触れたように、U 9・10区では版築状の構造をもつ土によって埋められている。

Y 7—101号遺構と異なり、壁面は素掘りのままであったものと考えられる。なお、U 9・10区の版築状の構造を確認した面に径1 m強、深さ20~30cmの土坑様のものが3ヶ認められた。これは図書館の基礎の近くでもあり、あるいは土が崩落した跡に再堆積したものか、構造を作る際の工程によってもたらされたかはっきりしないものである。土は周辺と類似している。また、道の掘削面には、浅い鍋底状の掘りこみが3認められた。いずれも深さは10~20cmであり、つまっているのは小砂利まじりのロームである。これらは工程上できてしまった掘りすぎの部分の埋めたと考えるのが妥当であろう。

X 8—101号遺構はV 8—7・8・9・10号土坑を切って作られており、Y 7—101号遺構によって壊されている。

(藤本 強)

V 8—2号遺構 (第376~378図)

V 8区からU 8区にかけて西及び北壁を弧状に確認したもので、U 7—4・V 8—1・V 8—4号土坑、Y 7—101号遺構によって切られ、U 8—4・5・6・7・8・9・11・12、V 7—6、V 8—3・5・6・7・8・9・10号土坑、V 8—101号遺構を切っている。

壁を明確に確認できたのは旧図書館基礎から調査不能区域の間のみであるが、T列とU列の間に設定したセクション等から西壁は南側に、北壁は東側にそれぞれグリッドとほぼ同じ方向で直線的に伸びているものと思われ、Y 7—101・X 8—101・V 8—101号遺構等と同様の道状の遺構のほぼ90度に曲がる部分がV 8区からU 8区にかけての部分であると考えられる。確認できた限りでは壁は非常に緩やかに直線的に立ち上がっており、床面から壁にかけては掘り方の上に薄く粘土を貼り付けてあったものらしい。床面の高さはU 8区の旧図書館基礎付近では標高20.14

m, Y 7-101号遺構北壁との接点で19.46mを計り東に向かうに従って低くなっている。

V 8-2号遺構の覆土の上半は15・17層がローム16層が砂利の薄層で、T~V区にかけて見られたロームによる盛土の延長と考えられる。その下には10~20cmおきに薄層をはさむ、黄褐色土、褐色土、黒褐色土、灰色粘土、白色粘土、砂岩粉末などからなる版築状の覆土が厚さが2 m近くもあり、しっかりとたたきしめられている。(桜井 英治)

V 8-101号遺構 (第376, 378, 379図)

X 8・W 8・9区で確認されたもので、Y 7-101号遺構によって、大部分を壊されている。これが発見されたところでは、X 8-101号遺構より、0.4mほど深い。西側は土管の掘り方によって壊され、はっきりしないが、Y 7-101号遺構とほぼ一致していたのではないかと思われる。東側はしだいに高度をさげ、Y 7-101号遺構に一致する。この道の壁面には、切り石が置かれていたようである。長さ1.2m、幅0.35m、厚さ0.6mの切石が3とその抜き跡1が確認されている。自然堆積の黒色土と漸移層を掘り、そこに石を据え、壁面にしている。これが何段積まれていたかは不明である。底には何の施設も確認できなかった。

V 8-101号遺構を埋めているローム主体の黄褐色土はよくたたきしめられている。間には黒色土、灰白色粘土もはさまれている。この埋土を切って、Y 7-101号遺構、W 9-1・2号ピットが作られている。

X 8-101・V 8-101号遺構はともにその東側部分のはっきりしなくなるが、これはY 7-101号遺構と一致するためと考えるのがもっとも妥当であろう。V 8-101号遺構は明らかに一致しているし、X 8-101号遺構が土管の掘り方によってはっきりしなくなるのも、しだいにY 7-101号遺構に近づいてくるためと考えることができよう。(藤本 強)

X 7-1号・X10-1号土坑 (第376, 379図)

両者ともローム主体の黄褐色土によっておおわれていた。このロームが何なのかは先にも触れたとおり、よく判っていない。

X 7-1号土坑は径1.8m、深さ0.3mの鍋底状を呈する円形のもので、埋土は黒色土の混じる褐色土である。

X10-1号土坑は全形は不明である。過半は調査区の外にある。現状で2.2mあるので、径3 m近い土坑であろう。深さは1.3mを測る。埋土は下部がロームブロック混じりの黒色土、上部はロームブロック混じりの暗褐色土である。両者とも遺物はほとんどない。

両土坑とも植栽に関係すると考えるのが妥当である。規模は若干違うが、埋土もローム+黒色土ということで類似している。(藤本 強)

V 8-7号井戸 (第380図)

V 8-9区とV 8-8区にまたがって、発見されたもので、V 8-8・9号土坑を切っている。これを埋めた土を切って、X 8-101号遺構・Y 7-101号遺構が作られている。東側の部分はいわゆるイタチ掘りによる土管の掘り方によってかなり破壊されている。径1.4mの素掘りの穴を

掘り、その中に径0.8mの井筒を設け、外周0.3mには、ローム・ブロックまじりの褐色土をつめている。この褐色土はしめられていないが、その上部にのるローム細粒まじりの暗褐色土はよくしめられている。井筒につままっているのは黒色土であり、意図的につまられたもののようで、均一な層である。さらに最上部にロームブロックまじりの褐色土がある。これもおそらく、X 8-101号遺構構築時につめたものであろう。かなりの深さが予想されるため、完掘はしていない。遺物は少ない。

V 3・V 4区井戸（V 3-11・V 4-101号井戸）と類似した構造の井戸である。

（藤本 強）

V 8-8・9・10号土坑（第380図）

V 8区で切りあって発見された土坑である。10号土坑がもっとも古く、9・8号土坑と続き、9・8号土坑はV 8-7号井戸によってきられている。

V 8-8号土坑はV 8-7号井戸・X 8-101・Y 7-101号遺構によって切られ、ごく少部分が残っているに過ぎない。平面形は円形もしくは楕円形であったと考えられるが、規模については判らない。規模は1 mから2 mの間であったものであろう。深さは確認できたところで0.8mほどである。底は鍋底状を呈する。埋土はロームまじりの暗褐色土である。

V 8-9号土坑はV 8-7号井戸・V 8-8号土坑・X 8-101号遺構によって切られ、V 8-10号土坑を切っている。1 m弱×1.2m前後の不整隅丸方形もしくは楕円形の土坑である。壁はゆるやかにたちあがっており、床も鍋底状を呈している。深さは確認できた所で、0.8mである。埋土はロームをまじえる黄褐色土である。

V 8-10号土坑はこの近くの遺構のなかでは、もっとも古いもので、V 8-9号土坑によって切られている。東側は土管の掘り方で壊されている。長さ1.9m、幅0.8mの長方形の土坑であり、底面は2段になっている。底面・壁面とも凹凸があり、仕上げはよくない。底面は北が南よりも0.1m高い。南側の低くなっている部分の底は南北0.9m、東西0.65mで、そのほぼ中央に0.3×0.2 m、厚さ5 cmの平石が置かれていた。埋土はロームまじりの黄褐色土である。深さは南側の深いところで1.1mである。

これら3土坑の性格ははっきりしない。いずれの土坑の埋土も1層であり、かなり均一なものではあるが、しめられていない。建築物の基礎とするにはいささか問題があろう。8号土坑はあるいは植栽の跡と考えるのがもっともよいように思われるが、V 8-9・10号土坑は植栽跡とするには、深さが深すぎるし、壁も比較的垂直に近い。V 8-9・10号土坑に関しては性格不明とせざるを得ない。

（藤本 強）

W 6-1・2号土坑（第381図）

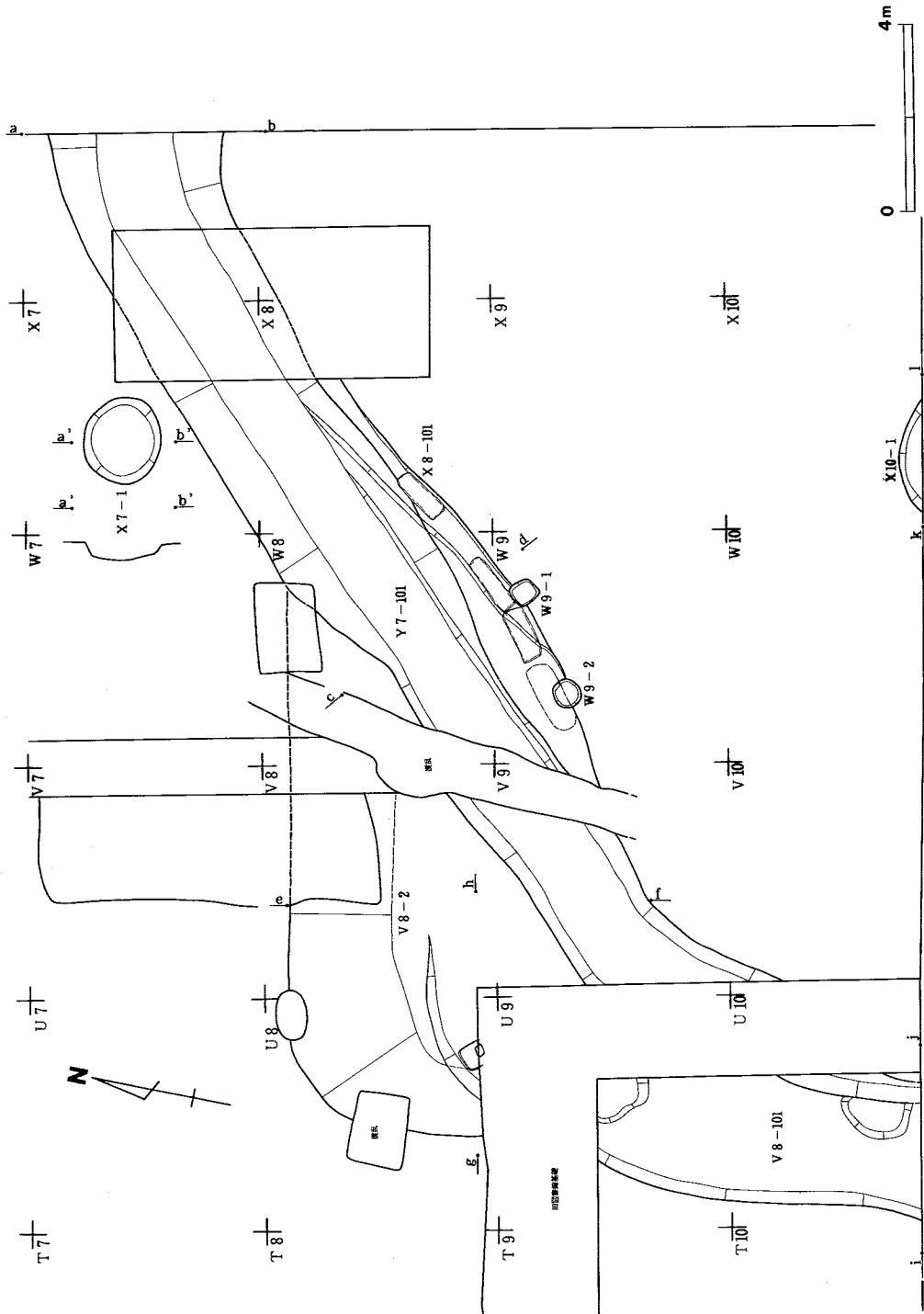
W 6区内で発見された2土坑である。この付近は攪乱がひどく、標高19.4m付近にならないと安定した面は出現しない。部分的には、これより上部でロームの盛土があることもあるが、自然堆積の黒色土に入って、少し掘り上げた所で安定した面になる。W 6のポイント周辺の攪乱はさ

らに深く、W 6-1号土坑の底よりもさらに深い。これは大型の排水用の柵のあとである。

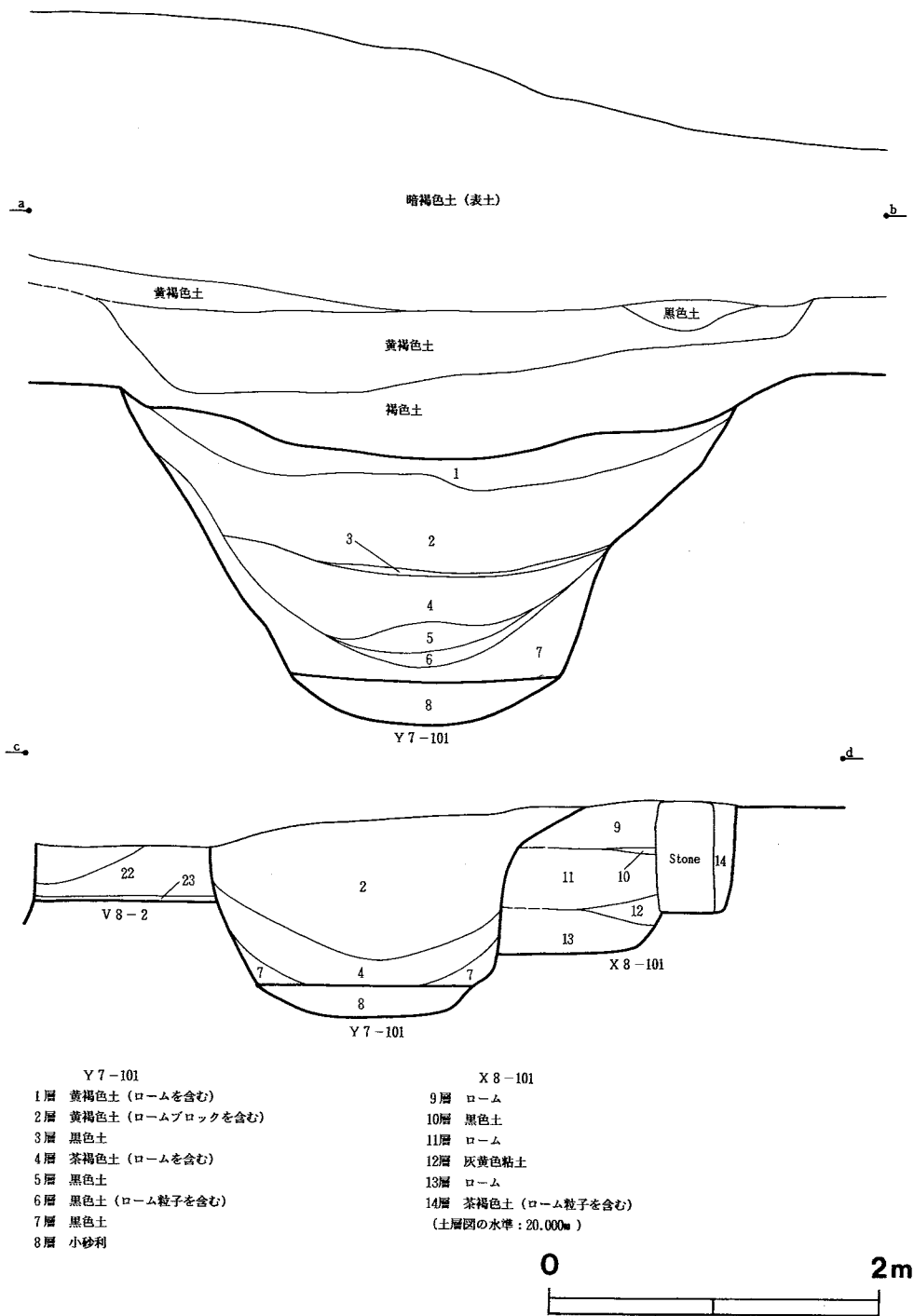
W 6-1号土坑は径3.0mの大型の円形の土坑であり、確認したところから0.4mの深さがあり、鍋底状を呈している。南西側を2号土坑に北東側を排水柵によって壊されている。埋土はロームの細粒を含む暗褐色土である。下に薄い黄褐色土がある。典型的な植栽の跡である。

W 6-2号土坑は径1.2m強の円形の土坑で、上側の壁は比較的垂直であるが、下部はすぼまり、深さは確認面から1.6mある。底には、ロームブロックを若干まじえる黒褐色土がある。これが遺構使用～廃棄時の埋土である。その上には柔らかい凝灰岩質の切石のかけらを多量に含む暗褐色土がある。この切石は長さが30～40cmにおよぶものもあり、一部分は面取りがされているが、多くの部分にはなく、何らかのものに利用されていたものがなくなると、壊して捨てたか、利用する際に出た屑を捨てたものかであろう。石の観察によると後者の可能性が強い。W 6-2号土坑の本来の用途は不明である。

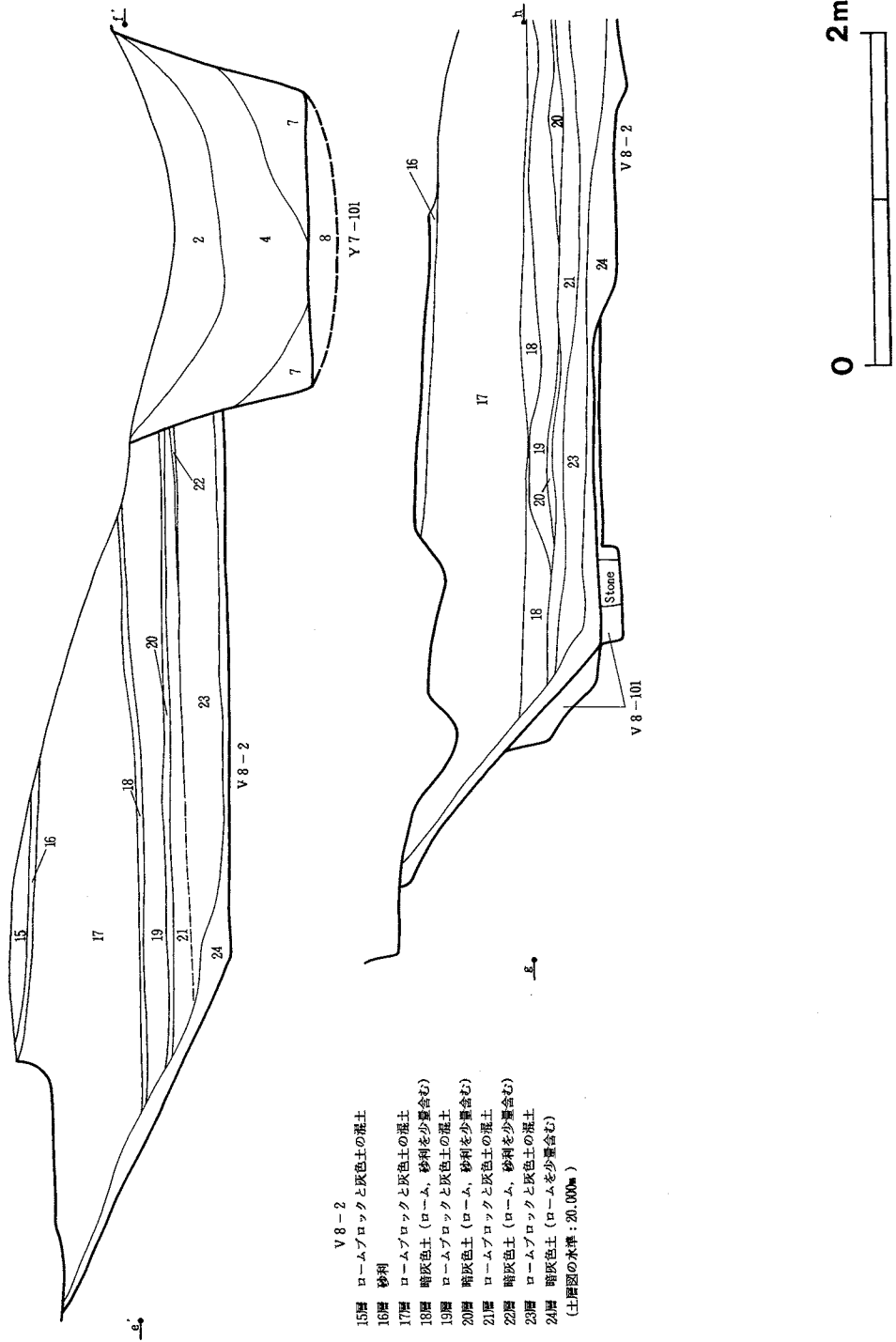
(藤本 強)



第376図 V~X=5~10区の遺構(1)

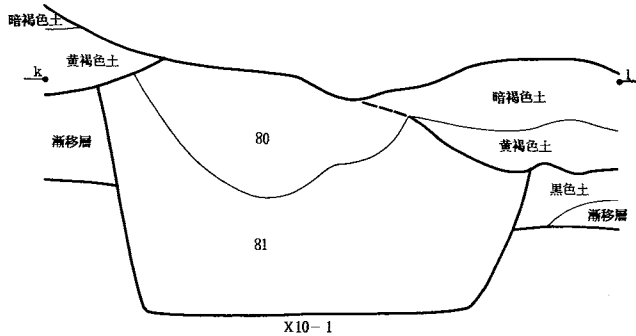
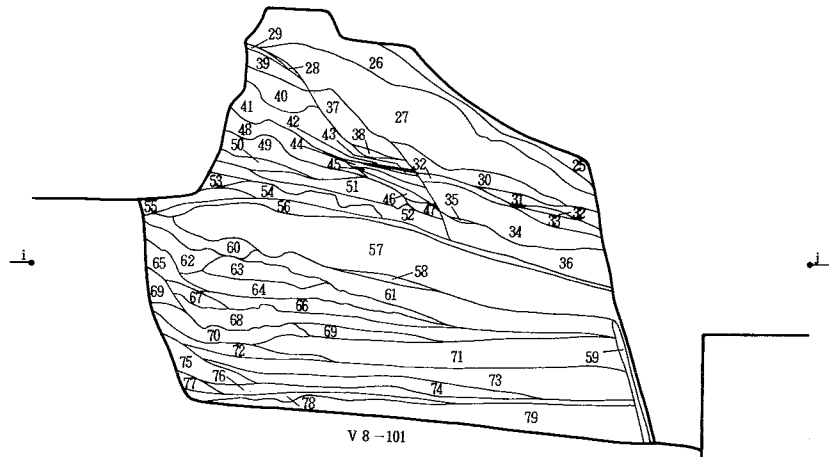


第377図 V~X = 5~10区の遺構(2)



- V 8 - 2
 15層 ロームブロックと灰色土の混土
 16層 砂利
 17層 ロームブロックと灰色土の混土
 18層 暗灰色土 (ローム, 砂利を少量含む)
 19層 ロームブロックと灰色土の混土
 20層 暗灰色土 (ローム, 砂利を少量含む)
 21層 ロームブロックと灰色土の混土
 22層 暗灰色土 (ローム, 砂利を少量含む)
 23層 ロームブロックと灰色土の混土
 24層 暗灰色土 (ロームを少量含む)
 (土層図の水準: 20.000m)

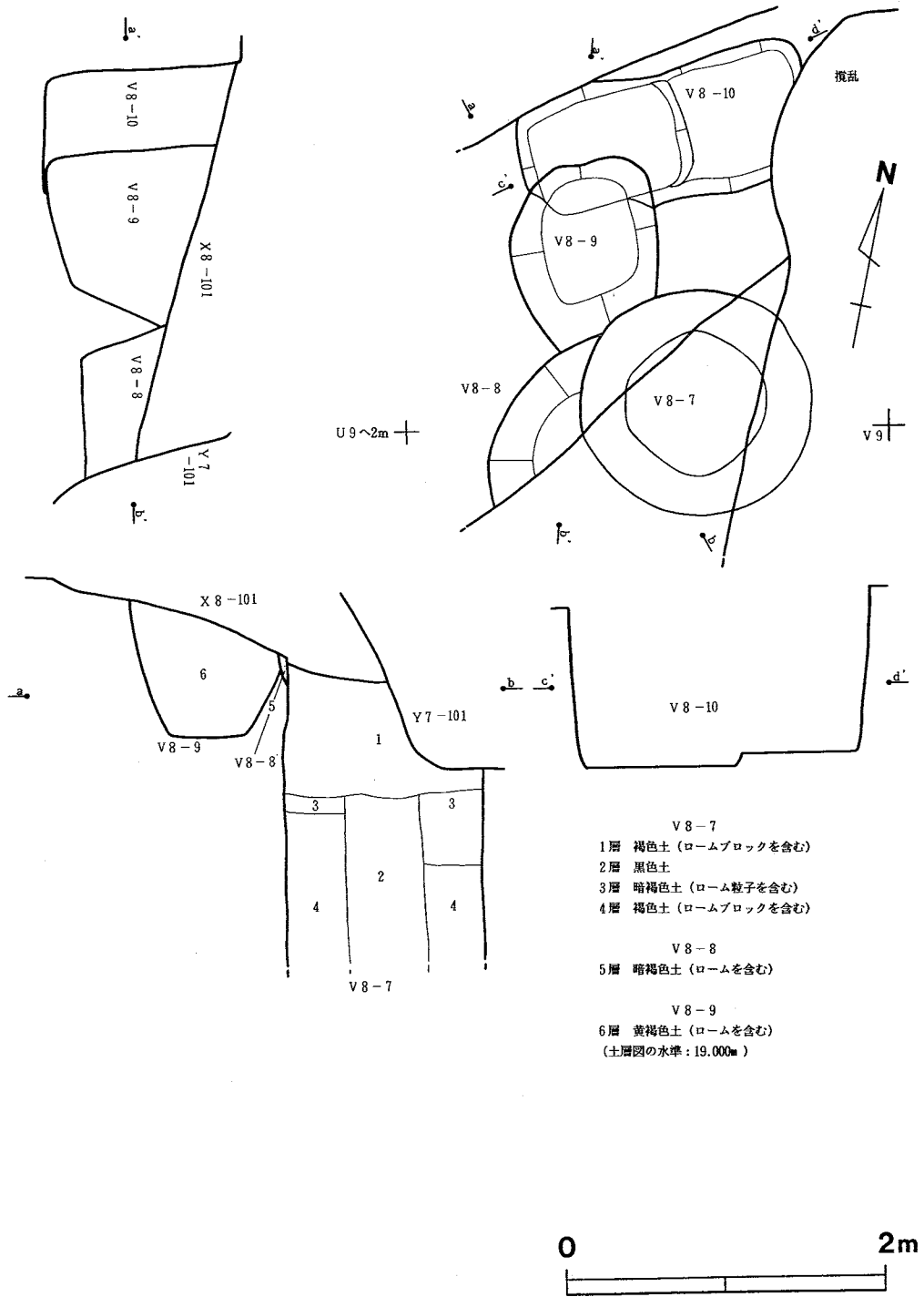
第378図 V ~ X = 5 ~ 10区の遺構(3)



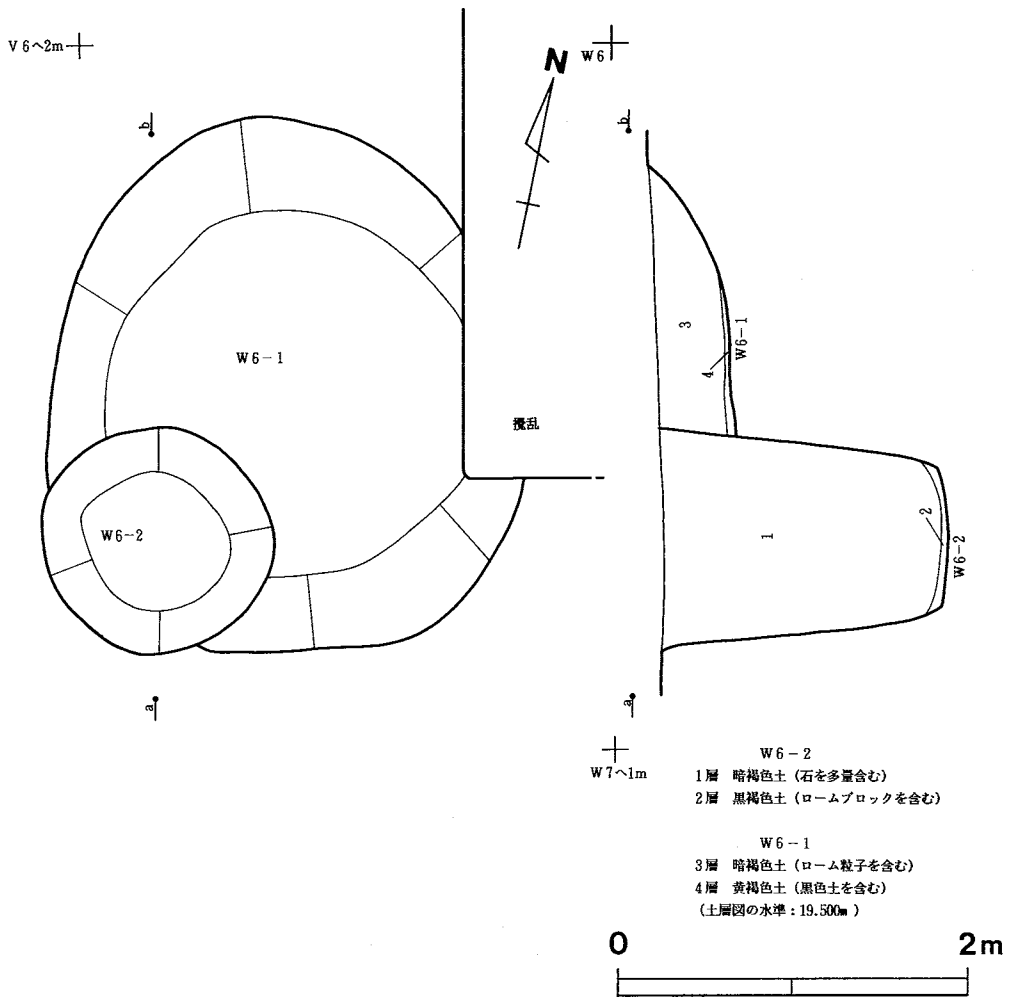
- V 8-101
- | | | |
|--|---|------------------------------------|
| 25層 暗褐色土 (ローム粒子, 黒色粒子を多量含む) | 42層 褐色土 (ローム粒子, 黒色粒子, 白色粘土粒子を含む) | 67層 褐色土 (ロームブロック, 黒色土ブロックを含む) |
| 26層 暗褐色土 (粘土粒子, 粘土ブロック, ローム粒子を多量含む) | 43層 暗黄褐色土 | 68層 ロームブロック |
| 27層 暗褐色土 (ローム粒子, ロームブロック, 灰色粘土粒子を多量含む) | 44層 褐色土 (黒色粒子, 白色粘土粒子を含む) | 69層 暗褐色土 (ローム粒子, 黒色粒子を多量含む) |
| 28層 褐色土 (ローム粒子を少量含む) | 45層 暗黄褐色土 | 70層 褐色土 (ローム粒子を少量含む) |
| 29層 灰褐色土 | 46層 褐色土 (山砂粒子を含む) | 71層 ロームブロック |
| 30層 暗褐色土 (ローム粒子を多量含む) | 47層 褐色土 (ローム粒子を多量含む) | 72層 褐色土 (白色粘土ブロックを多量, 燈褐色土粘土粒子を含む) |
| 31層 褐色土 (ローム粒子を多量含む) | 48層 暗褐色土 (黒色粒子を多量, 褐色粘土, 白色山砂ブロックを少量含む) | 73層 褐色土 (黄色山砂, 燈褐色粒子, 朱褐色粒子を多量含む) |
| 32層 褐色土 (ローム粒子を少量含む) | 49層 淡茶褐色土 (粘土ブロック, 山砂ブロックを多量含む) | 74層 褐色土 (黄褐色山砂粒子を多量含む) |
| 33層 暗黄褐色土 (ローム粒子を多量含む) | 50層 黒褐色土 (ロームブロックを含む) | 75層 ローム粒子 |
| 34層 黒褐色土 (ロームブロック, 白色粘土ブロックを少量含む) | 51層 ロームブロック (明灰褐色粘土ブロックを少量含む) | 76層 黒褐色土 (ローム粒子を含む) |
| 35層 ロームブロック | 52層 黄褐色山砂 (白色山砂ブロック, 燈褐色山砂ブロックを含む) | 77層 褐色土 (ローム粒子を多量含む) |
| 36層 黒色土 | 53層 白色山砂 | 78層 暗褐色土 (ローム粒子を多量含む) |
| 37層 暗褐色土 (ローム粒子を多量, 黒色粒子, 山砂を少量含む) | 54層 暗黄褐色土 | 79層 暗褐色土 (ローム粒子, 小砂利を含む) |
| 38層 暗褐色土 (ロームブロックを含む) | 55層 白色山砂 (暗褐色土ブロックを含む) | |
| 39層 褐色土 (ロームブロック, ローム粒子, 黒色粒子を少量含む) | 56層 黒褐色土 (ローム粒子を含む) | |
| 40層 明灰褐色粘土 (燈褐色粘土ブロック, 燈褐色山砂を含む) | 57層 粘土 (黄褐色山砂ブロックを多量含む) | |
| 41層 ロームブロック | 58層 暗黄褐色土 | |
| | 59層 灰色粘土 | |
- X10-1
- | |
|-----------------------|
| 80層 暗褐色土 (ロームブロックを含む) |
| 81層 黒色土 (ロームブロックを含む) |
- (土層図の水準: 20.000m)



第379図 V~X = 5~10区の遺構(4)



第380図 V~X=5~10区の遺構(5)



第381図 V~X=5~10区の遺構(6)

第三節 遺物各説

(1) 陶器・磁器・土器

文学部3号館建設地区出土の陶磁器類は数百点と多くはなく、出土した遺構も限られている。遺存状態も良好な遺物は少ない。時期的にはほぼ江戸時代全般に亘り出土してはいるが、主体を占めているのは18世紀前葉～中葉前後である。その他幕末頃の遺物も若干見られる。

陶磁器類の図示は比較的遺存の良好な物に限定しているが、一部小片も含めている。遺物は遺構単位で図示・説明を行なう。説明については観察表を作成し、概説を加える。その他遺構外出土の中国製磁器等も図示し、観察表による説明を行なう。なお概説・観察表における器種分類、計測、特徴、産地等については法学部地区の表記と同じ基準である。

(小俣 悟, 津野 仁, 菅谷 通保, 石井 聖子)

P～S= 5～10区江戸第一面遺構出土の陶器・磁器・土器

第382図1～11, 14: Q 6-1号遺構

小片を含め総量は約30点と、文学部地区では多く出土しているが、時期的な幅がかなり長く見られる。古手の遺物は量的には多く出土しているが大半は小片であり、図示しえるのは限定され、8～12が古手の遺物である。これら古手の遺物は、おそらくQ 6-1号遺構に切られている遺構に伴う遺物が混入したものであると思われる。これらの遺物には被熱しているものも見られる。

碗・皿類は出土が多く、特に肥前染付が主体であり、端反碗・輪花皿等が見られる。他に瀬戸・美濃の染付皿・灰釉皿や肥前の刷毛目碗等も出土している。

徳利では全体を欠くが、瀬戸・美濃の灰釉徳利、志戸呂の徳利が出土している。灰釉徳利は肩部の条線が消えており、釉調は淡緑色である。また灰釉の灯明皿及び灯明受皿も出土している。その他備前系播鉢片や土瓶片も出土している。

瀬戸・美濃の染付皿や灰釉徳利、灰釉灯明皿及び肥前の端反碗等は19世紀代に比定されるが、染付輪花皿、刷毛目碗等は18世紀代に比定される。遺構の時期は19世紀代の遺物に対応すると思われる。

第382図12・13: R 7-3号遺構

総量は多い方であるが、大半は小片であり図示は極めて限られる。

灰釉片口は瀬戸・美濃、染付仏餉具は肥前である。その他では碗・皿類が多く出土しているが主体は肥前染付である。印判・五弁花を有する染付も見られる。染付以外では瀬戸・美濃の灰釉碗が出土しており、また土器では無釉の灯明受皿等が出土している。以上から時期としては18世紀前半～中葉を主体としよう。

第382図16: R 8-1号土坑

図示以外の陶磁器類は出土していない。

16は小形の播鉢であり薄手硬質、胎土は若干砂粒を含み緻密である。外面は茶褐色でくすんでいる。口縁部は外側へ丸く、播目も細い。胎土・色調からあるいは志戸呂系統とも思われる。

第382図17：S 7—4号土坑

図示以外の陶磁器類は出土していない。

17は瀬戸・美濃の灰釉皿である。厚手で高台は低く、18世紀前半頃に比定されようか。

第382図15：S 7—10号土坑

図示以外の陶磁器類は出土していない。

15は肥前の白磁小碗であり、不明瞭ではあるが18世紀代に比定されようか。

第383図1～5：S 8—52号井戸

総量は約10点と少なく、大半は小片であり遺存は悪い。

肥前端反碗の染付蓋、瀬戸・美濃の染付花生、染付蓋物あるいは現状では産地不明の陶器が見られる。その他緑釉皿片等少量ながら時期的に古い様相の陶磁器片も混在している。

3は肥前瑠璃釉の脚部片であり、台鉢の三足の一部とも思われる。瑠璃釉地に白線の部分は胎土を盛り上げて描出している。胎土は緻密、釉調・作りも丁寧であり、おそらく鍋島藩窯系であろう。

主体となる時期は、端反碗蓋、瀬戸・美濃の染付等から19世紀中葉前後に比定されるが、一部18世紀代に比定される陶磁器が見られる。

P～S= 5—10区江戸第二面遺構出土の陶器・磁器・土器

第383図6～11、第384図3：Q 5—2号土坑

総量は約10点と少なく、完存は見られないが、かなり図示しえる。大半が被熱しており特に德利類は顕著である。出土は焼土と混在しており、火災等によりほぼ同時期に廃棄されたものと思われる。

碗・皿類は少なく、蛇ノ目釉剥ぎ灰釉皿、鉄絵碗の他には印判染付碗片等が出土しているのみである。德利はかなり全形が遺存し、瀬戸・美濃の鉄釉、大形德利で、肩部に二重の条線を有する物と志戸呂が出土しており、共に口縁部は外反する。その他土器火鉢は明瞭に赤彩されている。

以上灰釉皿や德利あるいは染付碗等から、時期的には17世紀後半～18世紀前半の幅になるが、あまり古くはならないだろう。

第384図1・2・4：P 6—5号土坑

総量は10数点とあまり多くはなく、出土の大半が小片であり、図示できる物は少ない。

碗・皿類では瀬戸・美濃の掛分碗の他には灰釉碗、染付碗・皿等小片が出土している。德利では志戸呂の底部片以外、瀬戸・美濃の灰釉德利片も出土している。

器高が高めの掛分碗等の碗類、德利等から時期的には18世紀前半～中葉に比定される。

第384図6・7：P 7-2号土坑

総量は数点のみで大半が小片である。一部の遺物は被熱している。

6は青磁香炉で底部を欠損する。7は徳利の体部であり、大きく凹ませそこに人形を貼付けている。色調は茶褐色で備前風であるが、胎土は若干軟質である。他には菊皿、染付碗等の小片が出土している。時期は明瞭ではないが、主として18世紀前半頃に比定されよう。

第384図5：Q 7-14号土坑

総量は数点と少なく大半が小片である。

5は文様を欠損するが、肥前の山水文皿である。釉調は透明感が薄く、作りも鋭さがなく後出的な様相を示す。他に灰釉碗、鉄釉徳利片も出土しており、時期的には18世紀前半頃に比定されよう。

第384図8：Q 8-10号土坑

総量は数点と少なく全て小片である。

8は焙烙の体部小片である。体部は直立気味で口縁部肥厚する。他には瀬戸・美濃の播鉢等が出土している。時期は不明瞭だが、以上からおそらく18世紀前半～中葉に比定されよう。

第384図9：Q 8-11号土坑

総量は10数点と少なく全て小片である。

9は中国製青花皿の体部小片であり、全体に被熱している。胎土は灰色の陶器質で、釉はくすみ、呉須手と言われる雑器である。その他では印判染付の碗・皿類・肥前の緑釉皿、灰釉碗等が出土しており、時期的には18世紀前半頃に比定されよう。

第384図10・11：Q 7-6号土坑

総量は数点と少なく全て小片である。被熱している物も含まれる。

10は中国製青花で方形皿と思われる。11は中国製色絵皿で輪花状になると思われる。共に体部小片であるが、胎土は緻密で釉調も良好である。その他には灰釉碗、鉄釉徳利、山水文碗等の小片が出土しており、時期的には18世紀前半頃に比定されよう。

U～V= 3～5区遺構出土の陶器・磁器・土器

第385図1・2：U 3-1号土坑

総量は10数点と少なく大半は小片である。また多くは顕著に被熱している。

1は呉須手碗であり、2の皿と共に肥前の京焼風陶器である。作りは丁寧であり高台が高い。他には瀬戸・美濃の播鉢、鉄釉徳利片等が出土しており、時期的には、以上から17世紀後半～18世紀前半に比定される。

第385図3・4：U 3-6号土坑

総量は数点と少なく、多くは小片である。全体的に顕著に被熱している。

3は青磁蓋物の体部片であり、胎土は緻密で作りも丁寧である。4は土器で小鉢の底部片であ

る。他には瀬戸・美濃の播鉢、鉄釉德利片等が出土しており、時期的には17世紀後半～18世紀前半に比定されようか。

第385図5：V 4—1号土坑

図示以外の陶磁器類は出土していない。

5は土器製正方形火鉢であるが、口縁部のみ遺存している。全体的に顕著に被熱しており、器面は脆い。このような火鉢は、今回の調査では18世紀前半～中葉の遺物と伴出することが多い。

第385図6・8：U 4—2号土坑

図示以外の陶磁器類は出土していない。共に顕著に被熱している。

6は瀬戸・美濃の鉄釉播鉢であり、釉は黒味を帯する。8は染付香炉であり、底部を欠損する。時期的には不明瞭であるが、17世紀後半～18世紀前半に比定されようか。

第385図7・10：V 4—101号土坑

図示以外の陶磁器類は出土していない。

7は肥前の染付碗であり、10は志戸呂の德利で底部片である。時期は不明瞭であるが、18世紀代でも後半には下らないであろう。

第385図9・11・12，第386図1：U 4—3号土坑

総量は数点と少なく、大半は小片である。

碗・皿類は染付碗，山水文皿等肥前が主体である。德利では灰釉德利の他鉄釉德利も出土している。また焙烙は体部が直立気味である。以上から時期的には18世紀前半を主体としよう。

第386図2：V 4—4号土坑

総量は数点と少なく大半が小片である。

2は瀬戸・美濃の鉄釉德利で、底部片である。体部下端から底部は無釉である。その他小片でも德利が主として見られ、時期的には18世紀前半～中葉に比定される。

T～V＝5—10区盛土を切る遺構出土の陶器・磁器・土器

第386図3～11，第387図，第388図1：U 6—3号土坑

総量は数10点とかなり出土しており、完形も見られる。一部の遺物は被熱している。

碗・皿類は中でも多く出土しており、3～5は遺存が良好である。刷毛目碗は薄手で作りが丁寧である。灰釉碗には高台内に墨書が見られる。その他には染付碗・皿類が多く出土している。鉢類では青磁の五弁花鉢，灰釉片口等が出土している。片口の高台内にはへう記号が見られる。染付蓋は作りが丁寧である。

德利では鉄釉船德利が出土しているが、体部上半部を欠損する。その他では瀬戸・美濃や志戸呂の德利片が出土している。仏花瓶は口縁部を欠損するが器高は高そう、掛分である。

土器も数点出土しているが、中でも方形火鉢は3点復元できる。内面はいずれも丁寧に調整され赤彩あるいは黒彩されている。底部に足を有さず、他の火鉢類とは様相が相違している。他に

丸形火鉢等も出土している。

以上主として碗類から、時期的には18世紀前半～中葉に比定されよう。

第388図3・6：U 6—5号土坑

図示以外の陶磁器類は出土していない。

6は瀬戸・美濃の船徳利であり、黒味を帯する鉄釉を施釉している。3は信楽系の播鉢であり、口縁に方形の縁帯を有する。時期的には不明瞭だが、18世紀前半頃に比定されようか。

第388図2・4・5，第389図，第390図1～5：T 7—13号土坑

総量は数10点とかなり多く出土しており、完形も多く見られる。遺存の良好な遺物は特に遺構の下層から集中して出土しているようである。

碗・皿類は多く、完形も数点出土しているが、特に碗類が多い。しかも灰釉碗・皿，鉄釉碗等と遺存の良好な物は主として瀬戸・美濃製であるが、刷毛目碗，白磁碗等も見られる。389—10の染付蓋物と390—2の土師質小鉢は入れ子状態で出土している。蓋物が小鉢の中にギリギリの状態が入っており、使用時の状態を表わす可能性が高く特異な例である。

徳利類では灰釉徳利が3点，完形で出土しており，他に鉄釉徳利や小片では志戸呂の徳利も出土している。鉄釉播鉢が大・小形と出土しており，小形は頸部の屈曲が丸くなる。鉄釉瘦瓶も出土しており，肩部はかなり張っている。以上は主として瀬戸・美濃製である。土器では瓦燈が，蓋部と台部の一組出土している。蓋部は天井部を欠損しているが，台部は完形である。

時期的には，碗類や徳利等から18世紀前半～中葉に比定される。

第390図6～8，第391図，第392図1・2・4：V 7—1号土坑

総量は数10点とかなり多く出土しているが，完形は少なく，遺存はあまり良好ではない。

碗・皿類は多くはないが遺存は良好である。染付碗，灰釉碗の他，山水文碗の小片も出土している。瀬戸・美濃製では灰釉碗の他鉄釉徳利が出土しているが，底部に墨書が見られる。

播鉢が多く出土しているが，大半が備前系播鉢であり，瀬戸・美濃及び信楽系播鉢は小片も含め全く出土していない。備前系播鉢はかなり薄手であり，口縁帯も発達していない。その他第391図1は肥前系播鉢と思われる。底部を含め全面に鉄釉を施釉し，口縁は大きく外反し，底部脇に高台を貼付ける形体である。

時期的には，碗・皿類や徳利等から18世紀前半～中葉に比定される。

第392図3・5～12，第393図1・3：U 7—1号土坑

総量は数10点とかなり多く出土しているが，小形品以外完形は少ない。

碗・皿類は少なく，染付碗・灰釉皿以外では白磁碗等が出土している。徳利では瀬戸・美濃の徳利，志戸呂の徳利が出土しているが完形はない。瀬戸・美濃の徳利は釉調が飴色で寸胴形である。色絵土瓶は口縁が小片に打ち欠かれているが京都系であろう。播鉢は底部片であるがV 7—1号土坑出土と同じく肥前系であろう。

時期的には，碗・皿類等から18世紀中葉前後に比定されようが，飴釉の徳利等により後出的な

様相が見られる。

第393図 2・7 : T 7—10号土坑

総量は数点と少なく、完形はない。全体的に被熱している。

2は肥前染付の仏花瓶であり、ほぼ全形が推測できる。7は瀬戸・美濃の鉄釉徳利である。時期的には18世紀前半頃に比定されようか。

第393図 6 : V 7—2号土坑

図示以外の陶磁器類は出土していない。

6は中国製色絵皿であり、見込み部分の小片であり、稜を有する。折縁になる形体であろう。見込に笹葉文が見られ、黒い粹線が有る。釉調はくすんでいる。時期は明末に比定される。

第393図 4 : T 9—1号土坑

総量は数点と少なく、大半が小片である。

4は呉須手の碗で遺存は良い。胎土は緻密で硬質、見込に皿足ハマ痕を有する。

第393図 5・8 : T10—3号土坑

総量は数点と少なく、大半が小片である。一部は被熱している。

5・8は共に肥前染付皿である。その他には瀬戸・美濃の灰釉皿、鉄釉徳利が出土している。時期的には18世紀前半～中葉に比定されよう。

第393図 9～13, 第394図 1～8 : T10—1号土坑

総量は数10点とかなり多く出土しており、完形も多い。一部は被熱している。

碗・皿類は灰釉碗・皿、天目茶碗等瀬戸・美濃製が中心であるが、染付猪口等も見られる。第394図2は瀬戸・美濃の上下掛分徳利であり、肩部に条線を有しない。他に志戸呂の徳利片も見られる。灯明皿では瀬戸・美濃の鉄釉灯明皿と無釉の台脚付灯明皿が出土している。鉄釉灯明皿は釉調が鉛色で、口縁に灯心受を貼付ける。また焙烙も出土している。

土器質の第394図6と獣脚（第394図7・8）はおそらく同一個体をなすであろう。6は口縁部であり、三足を有する火鉢類であろう。作りは丁寧であり、口縁部・脚部とも赤彩されているようである。他に図示できないが体部と思われる破片が出土しているが明確ではない。

時期的には碗・皿類、焙烙等から、18世紀前半～中葉に比定されよう。

T～V = 5～10区盛土との関連不明な遺構出土の陶器・磁器・土器

第394図 9・11 : T 7—12号土坑

総量は数点と少なく、大半は小片である。

11は陶器の香炉であり、胎土は砂粒を多く含みザラつき、色調は暗褐色である。法学部4号館建設地区出土の「岩倉山」銘と類似している。9は染付碗である。他には瀬戸・美濃の鉄釉徳利片が出土しており、時期的には不明瞭であるが、18世紀前半～中葉に比定されようか。

第394図 10・12・13, 第395～397図, 第398図 1 : T 8—9土坑

総量は数10点とかなり多く出土しており、完形も多く見られる。遺存の良好な遺物は大半が、遺構の底面付近から出土しているようである。

碗・皿類は多いが、半数以上が小片である。多くは染付碗・皿であり、印判も見られる。また灰釉碗皿等瀬戸・美濃製も見られる。徳利類では瀬戸・美濃の鉄釉徳利、船徳利が多く出土している。船徳利には釘書が見られる。

その他土器製香炉・風炉や、瀬戸・美濃の茶入等非日常的な製品も数点出土しており、茶入等から推測すれば茶道具関係かとも思われる。

時期的には、染付碗・皿、灰釉碗・皿や徳利等から18世紀前半～中葉に比定される。

T～V= 5～10区盛土下遺構出土の陶器・磁器・土器

第398図2：T 5—2号土坑

総量は数点と少なく大半が小片である。多くは被熱している。

2は瀬戸・美濃の鉄釉徳利である。釉調は黒味を帯し、口縁短かい。その他に鉄釉徳利、染付碗等の小片が出土しており、時期的には18世紀代の前半頃に比定されよう。

(小俣 悟, 津野 仁, 菅谷 通保, 石井 聖子)

文学部3号館建設地区出土陶器類まとめ

文学部3号館建設地区からの出土遺物は少なくしかも小片が多いが、出土傾向は法学部4号館建設地区と類似している。地下式土坑、井戸等を中心に18世紀代が多いが、19世紀代もいくらか多い。また溝状遺構等からもまとめて出土している。

第I期 不明である。

第II期 Q 5—2号土坑が該当する。瀬戸・美濃の灰釉系徳利、志戸呂の徳利等が見られる。火鉢では内湾する土師質火鉢があり、赤彩されている。土師質赤彩の角火鉢も見える。大半は被熱している。

第III期 U 6—3号土坑, T 7—13号土坑, V 7—1号土坑, U 7—1号土坑, T10—1号土坑, T8—9号土坑等が該当する。ほぼ完型の物もかなり出土しており、遺物量は多い。

碗・皿類はあまり多くはない。特に肥前京焼風陶器は少ない。染付は法学部地区と共にくらわんか碗と共に波佐見系は少ない。高台内には角棹渦福銘が見られる。また青磁類もほとんど見られない。鉢類には青磁も見られる。

搦鉢は集中して出土する土坑があり、大半が備前系搦鉢で薄手小型である。他に肥前系搦鉢が見られる。一般的には瀬戸・美濃の鉄釉搦鉢である。

徳利では瀬戸・美濃の灰釉系徳利や志戸呂の徳利が多い。瀬戸・美濃の大型鉄釉徳利には灰釉掛けのない形態も見える。また鉄釉と灰釉を上下に掛分して肩部に条線を有しない形態もある。

土瓶も出現しており、京都系色絵土瓶であり、器高が低く丸みが強い。

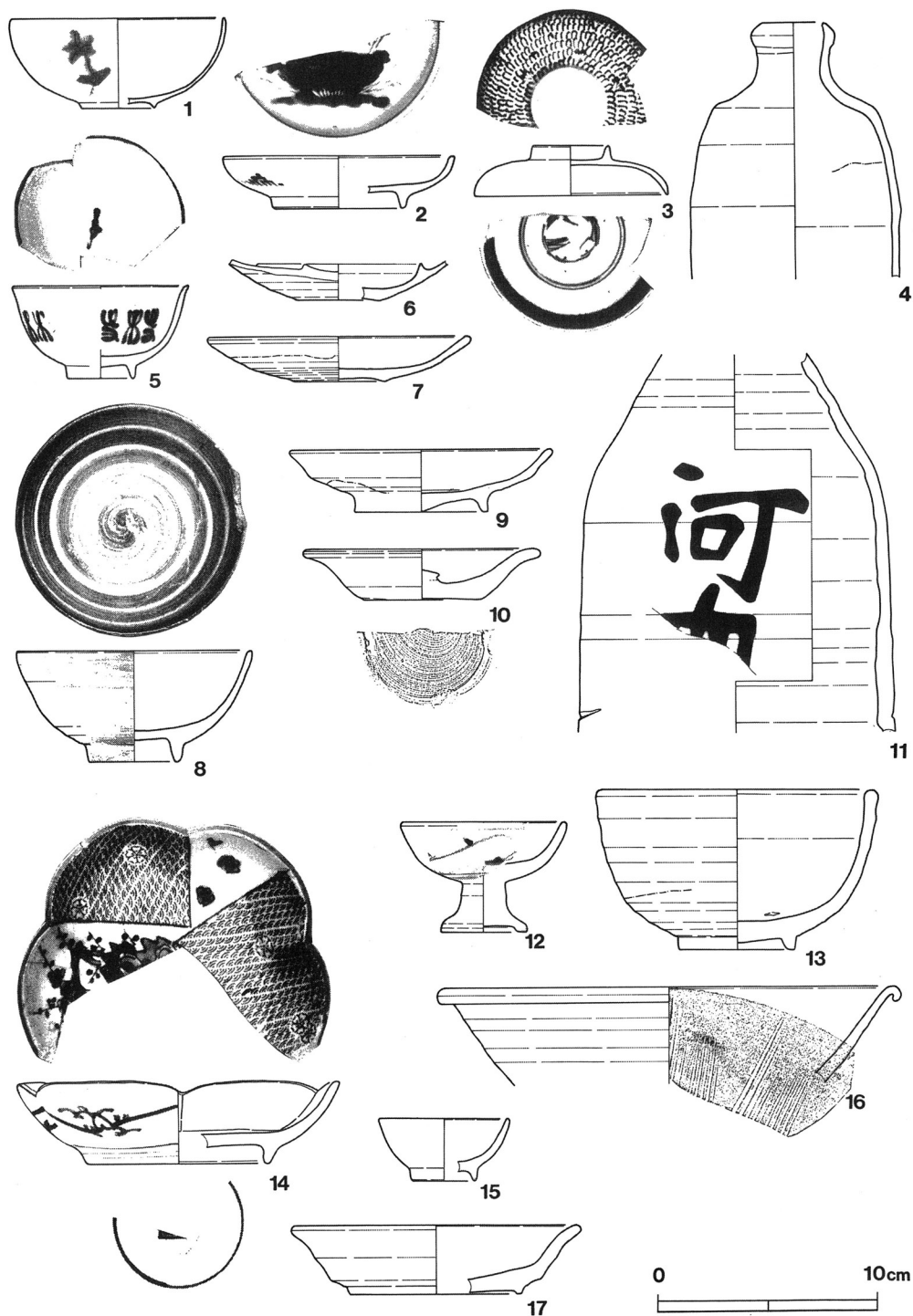
火鉢類はあまり見られないが、土師質方形火鉢を集中して出土する土坑がある。土師質鐙付火鉢もあり、獸脚を付し内面赤彩の形態。

灯明具では瀬戸・美濃の鉄釉灯明皿が見える。黄褐色で芯受を貼付する。土製の台脚付灯明皿が出現しており無釉である。他に瓦燈も見える。

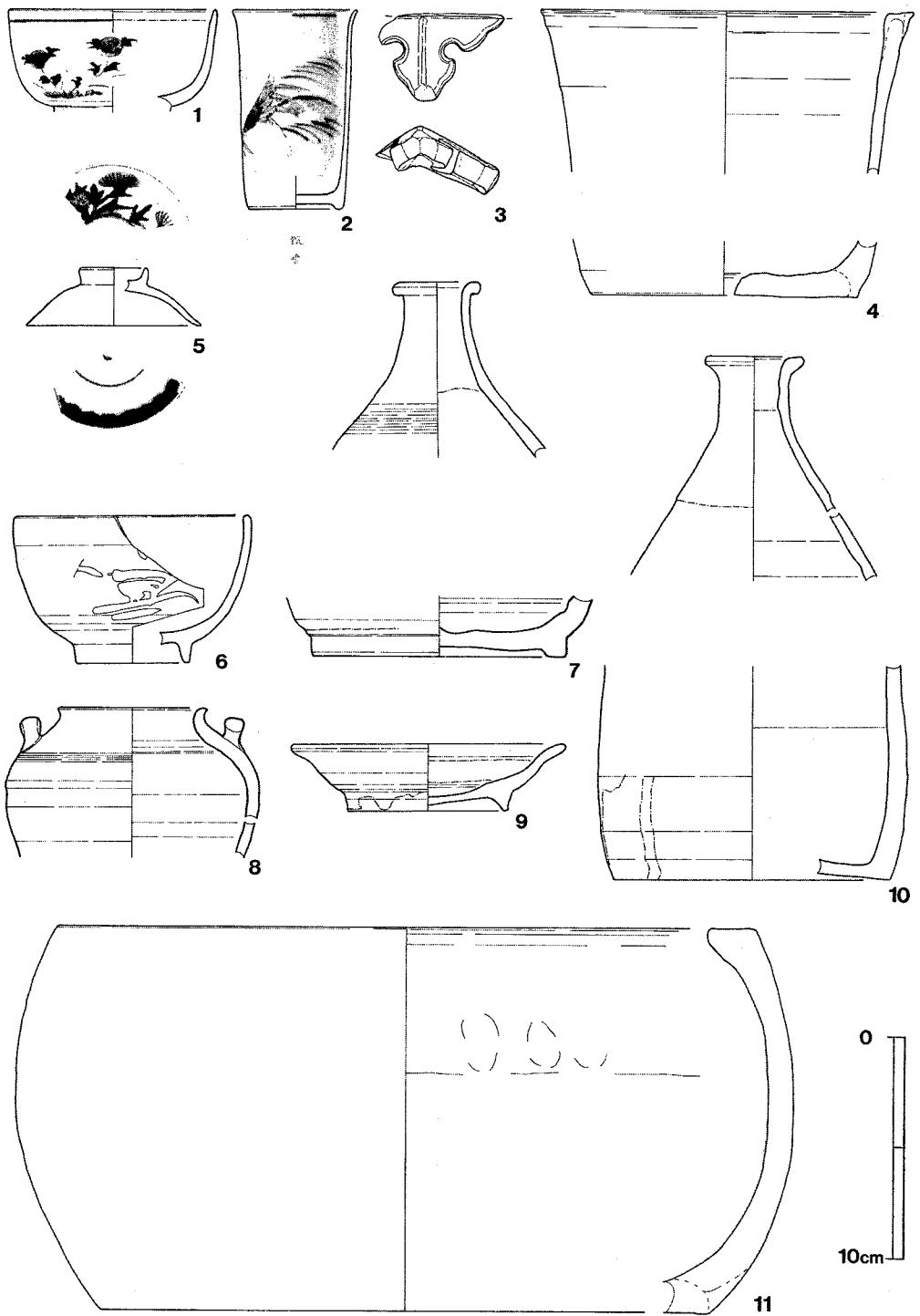
中国製青花等も見えるが、法学部地区ではⅡ・Ⅲ期に集中するようである。量的には少く大半は小片であり、ほとんど碗・皿類である。

第Ⅳ期 不明である。

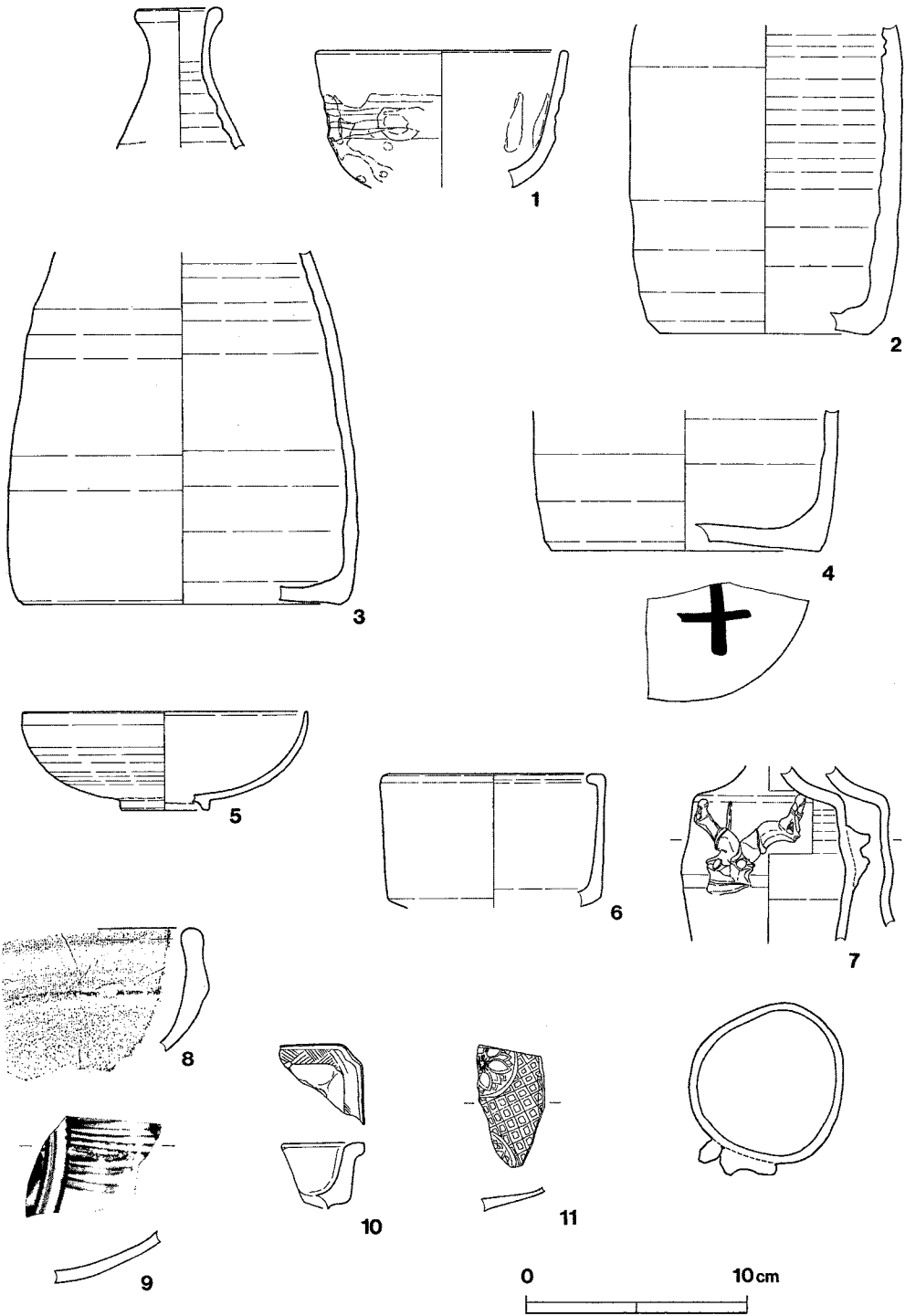
第Ⅴ期 Q 6—1号遺構, S 8—52号土坑等が該当するが少量である。染付では瀬戸・美濃系も出現し、端反碗等が見える。灯明具では信楽系灰釉灯明皿・受皿が見える。 (小俣 悟)



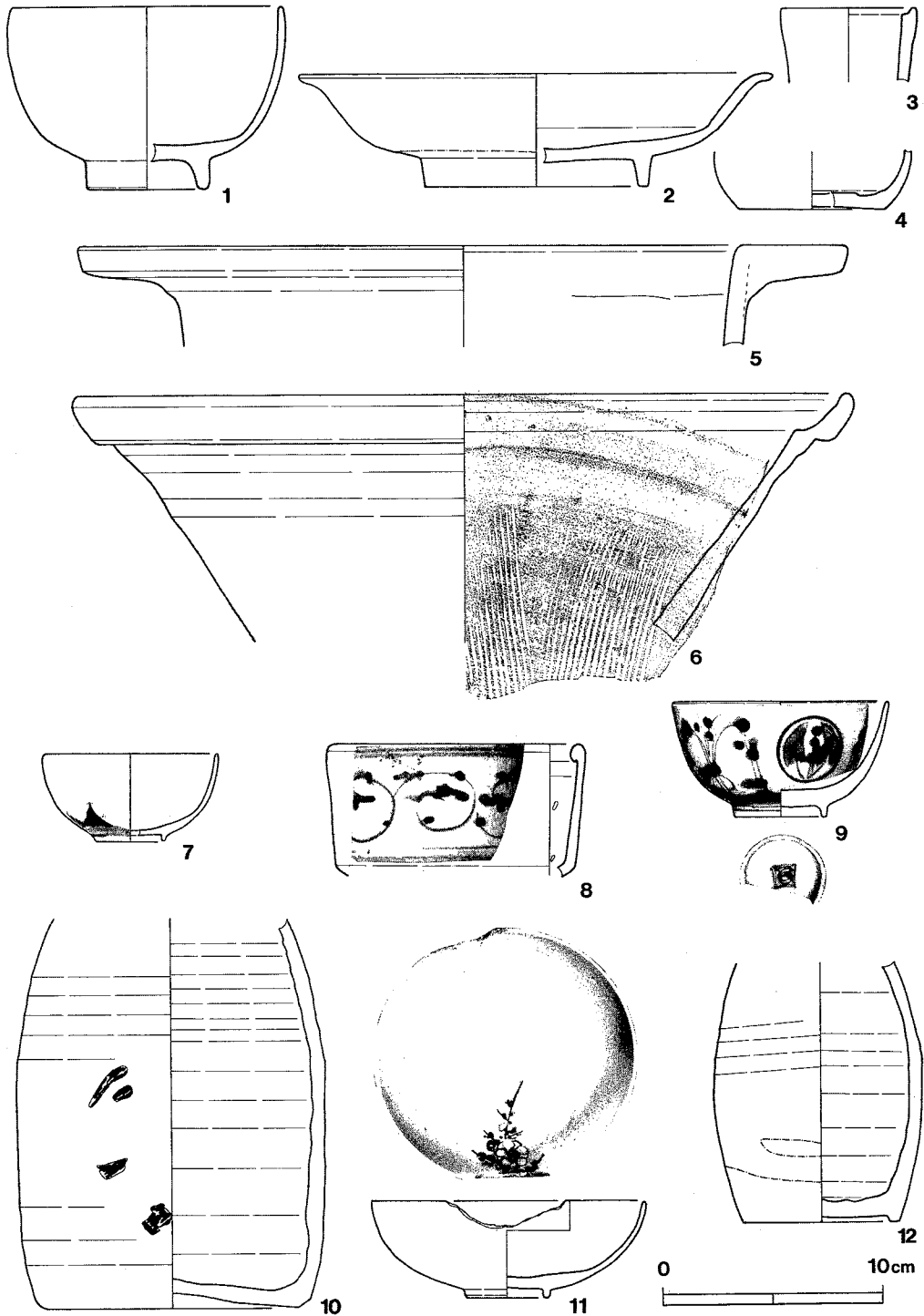
第382図 陶器・磁器・土器(1)



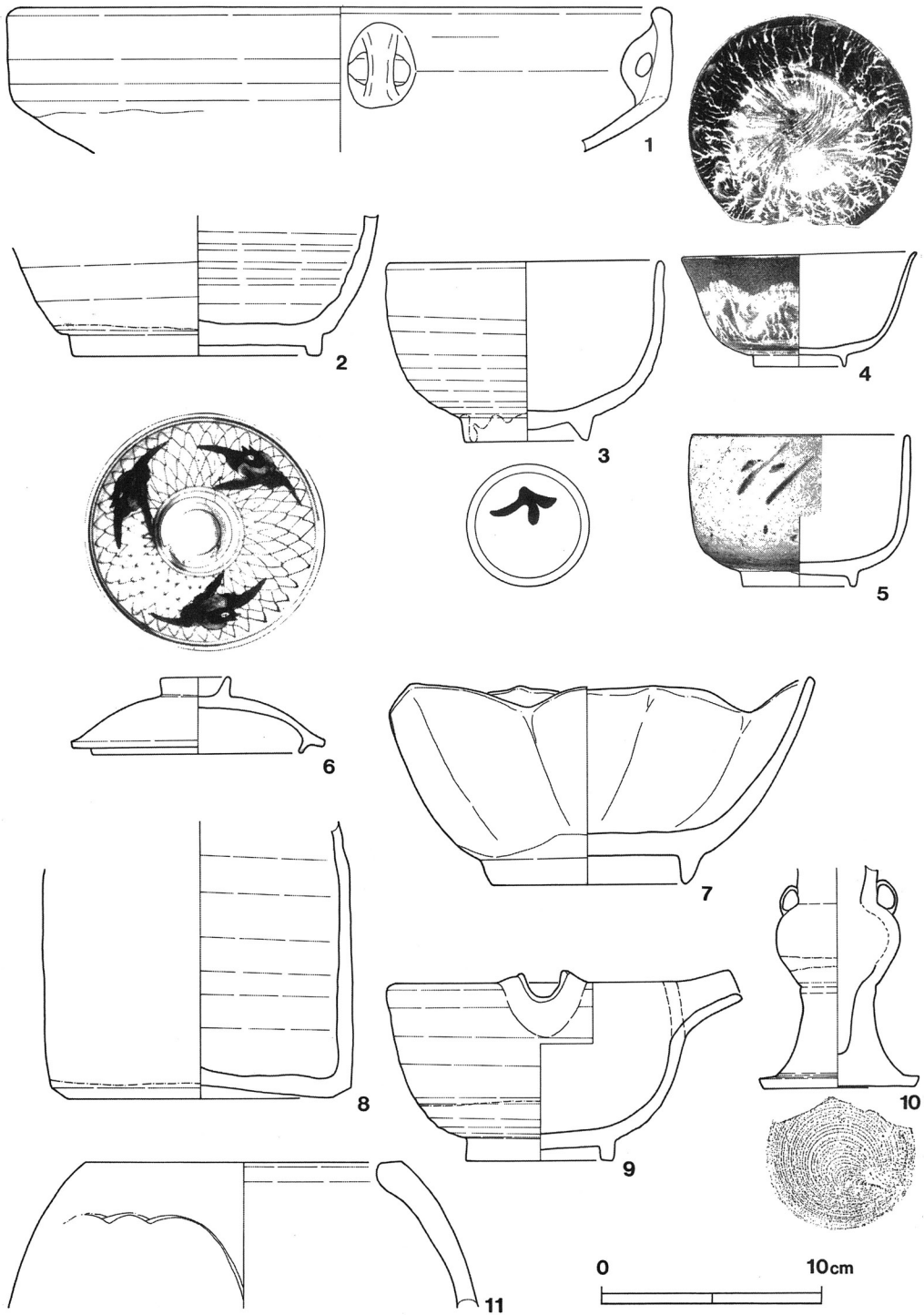
第383図 陶器・磁器・土器(2)



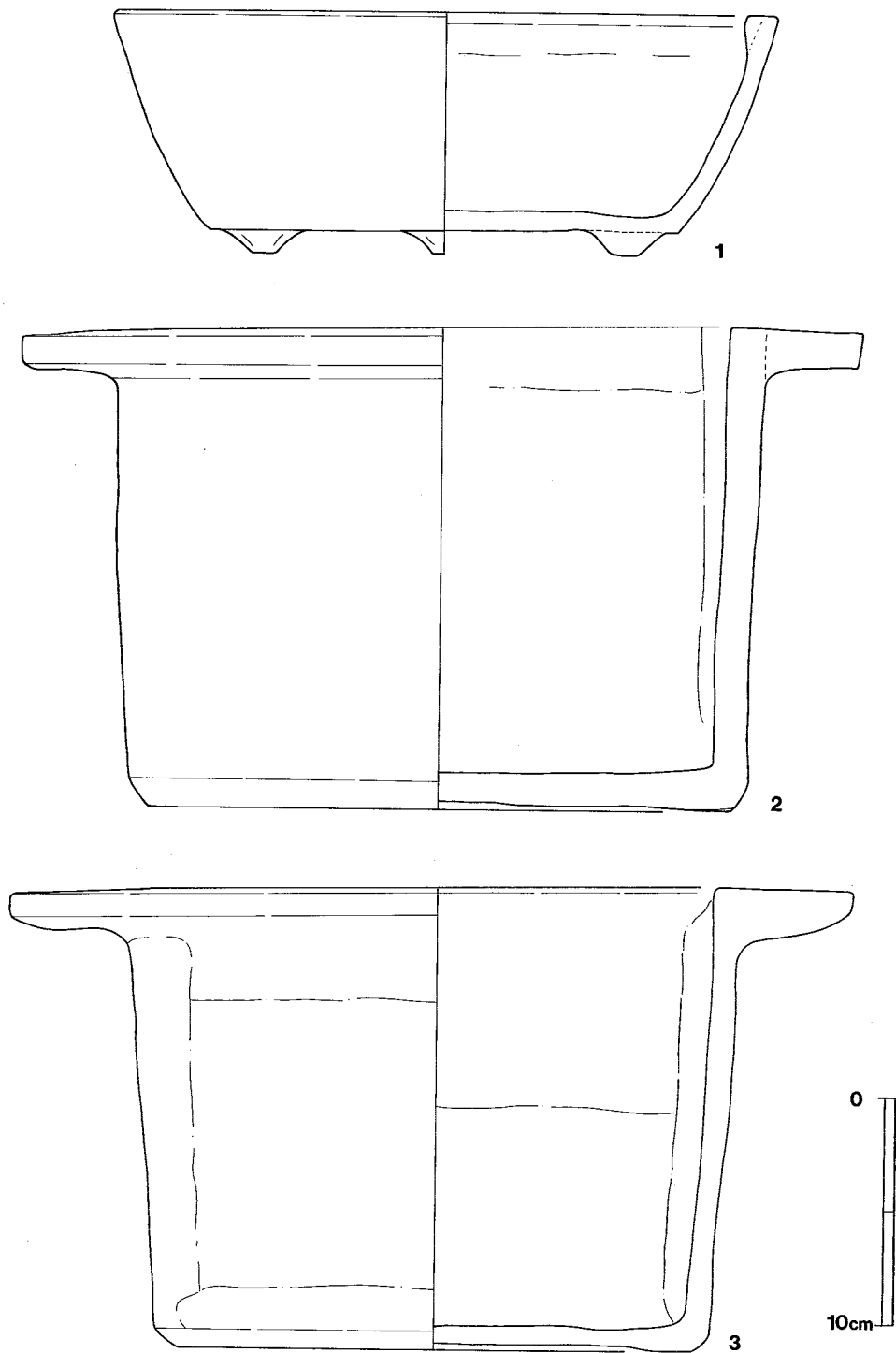
第384図 陶器・磁器・土器(3)



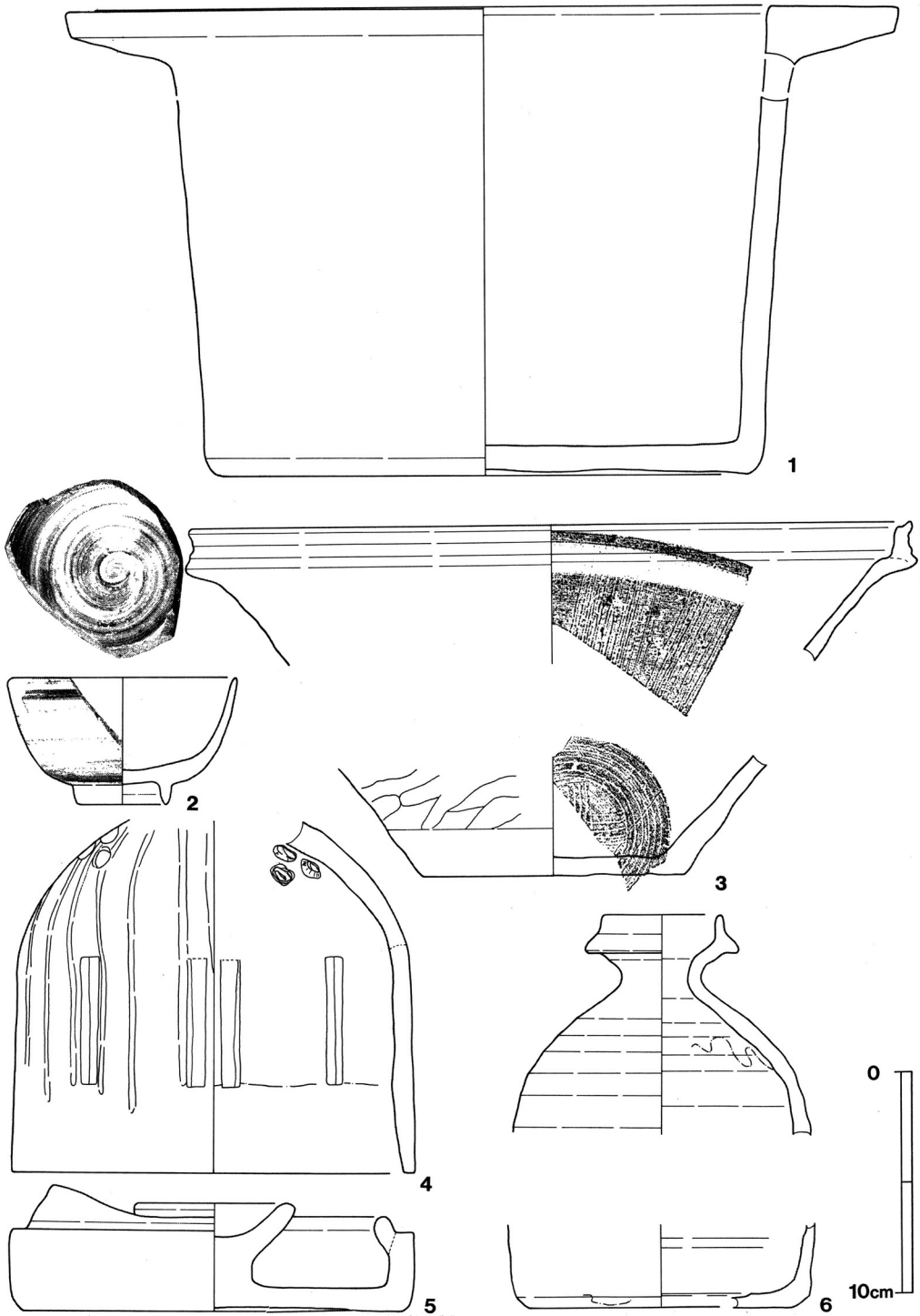
第385図 陶器・磁器・土器(4)



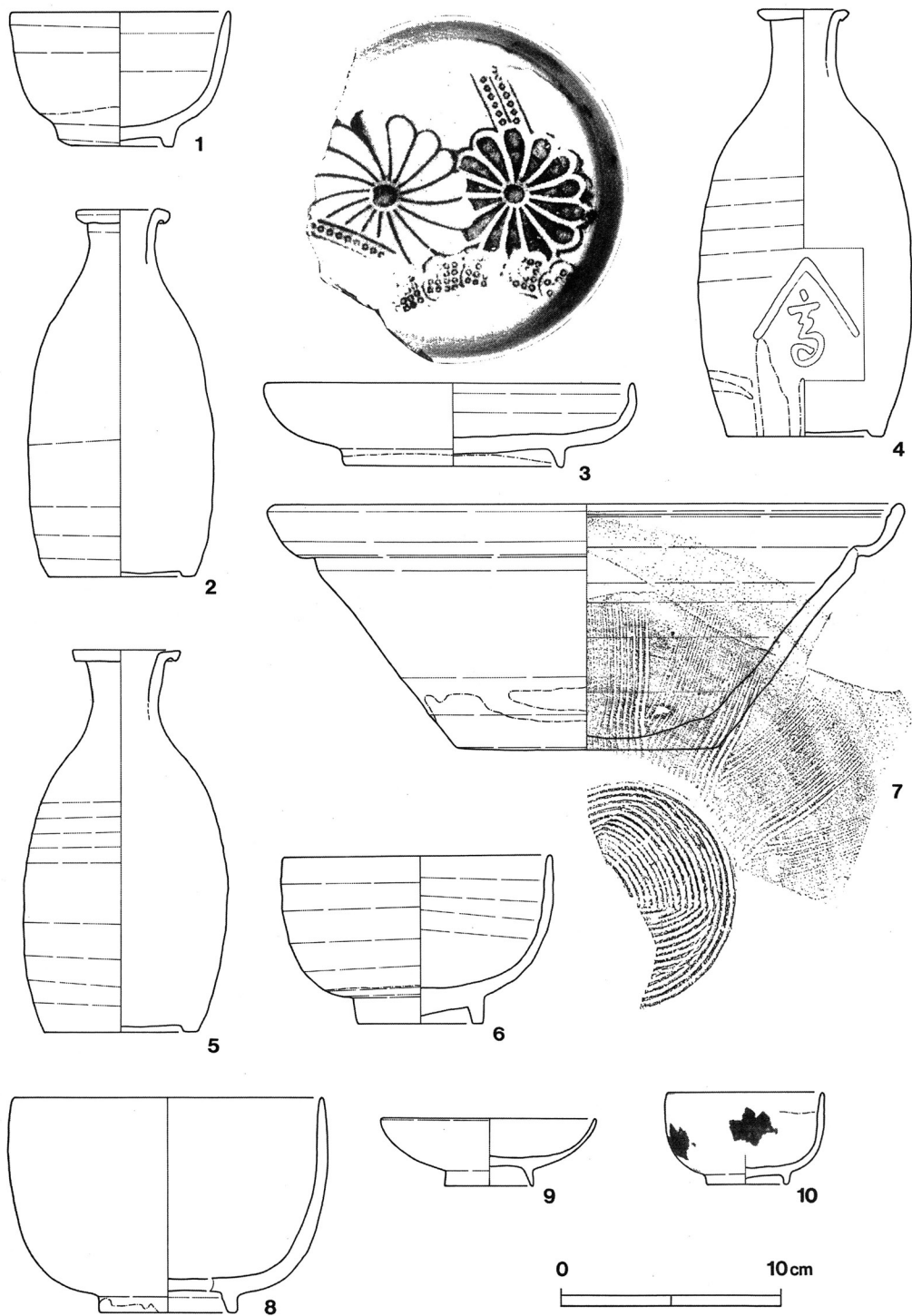
第386図 陶器・磁器・土器(5)



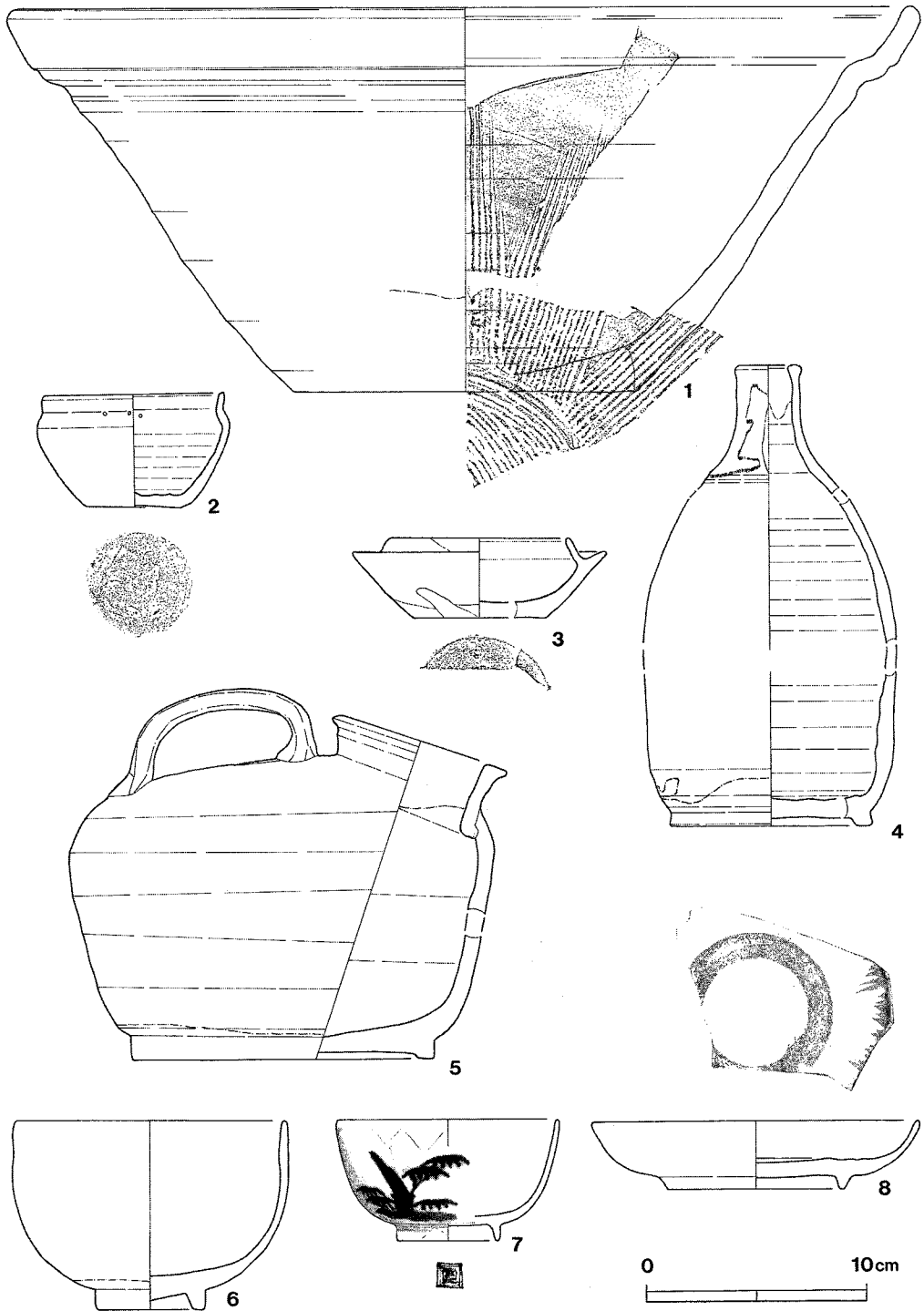
第387图 陶器·磁器·土器(6)



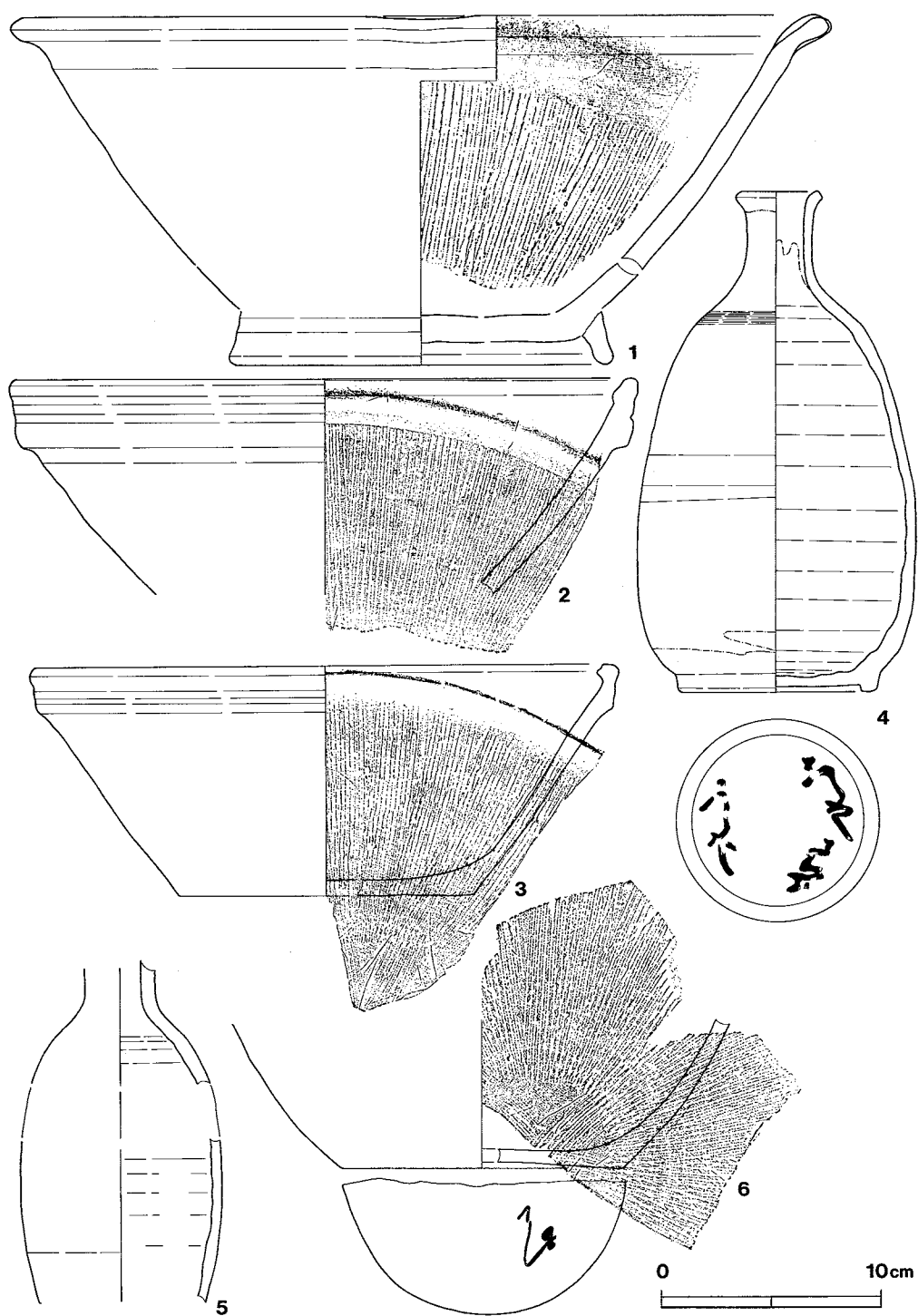
第388図 陶器・磁器・土器(7)



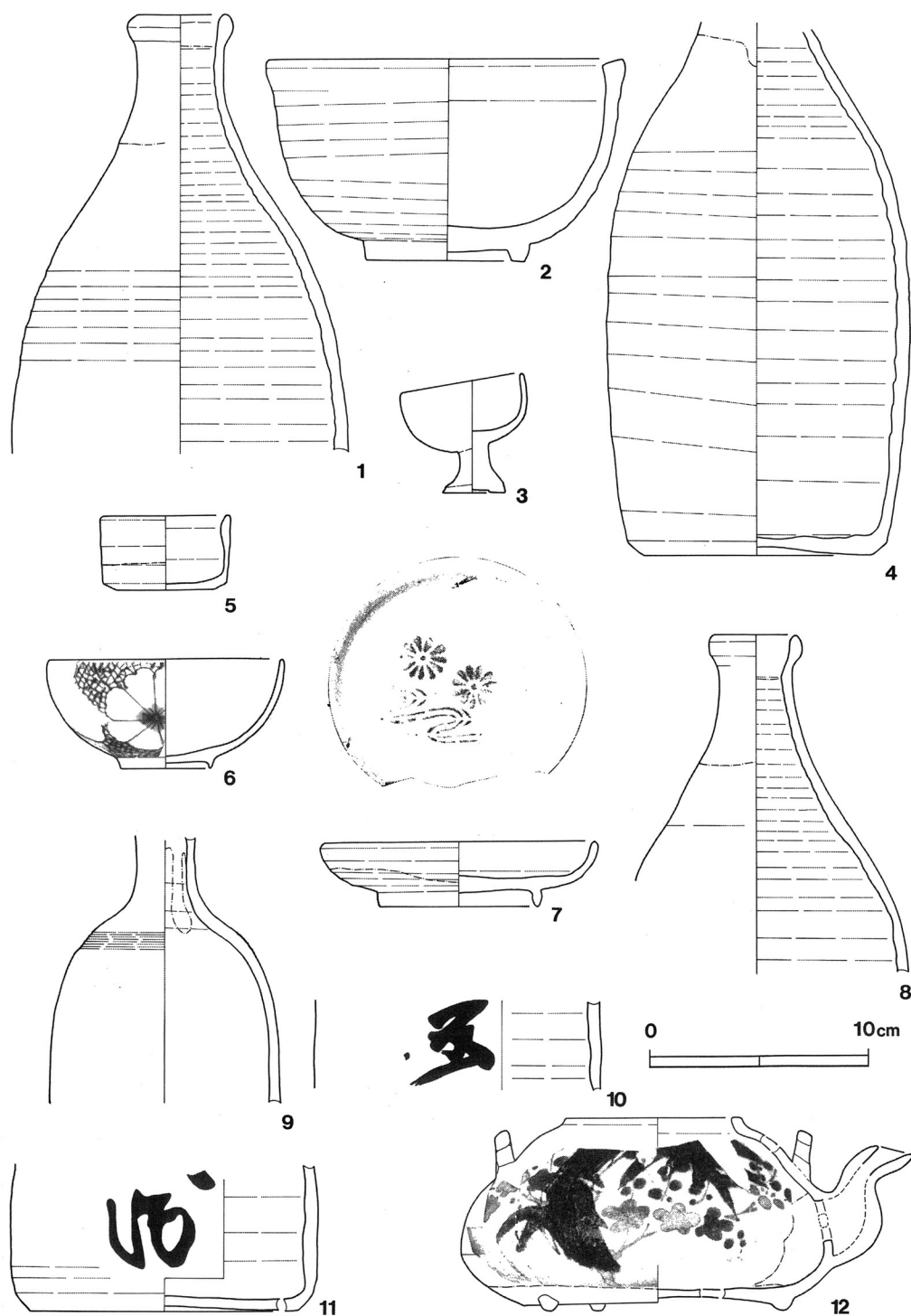
第389图 陶器·磁器·土器(8)



第390図 陶器・磁器・土器(9)



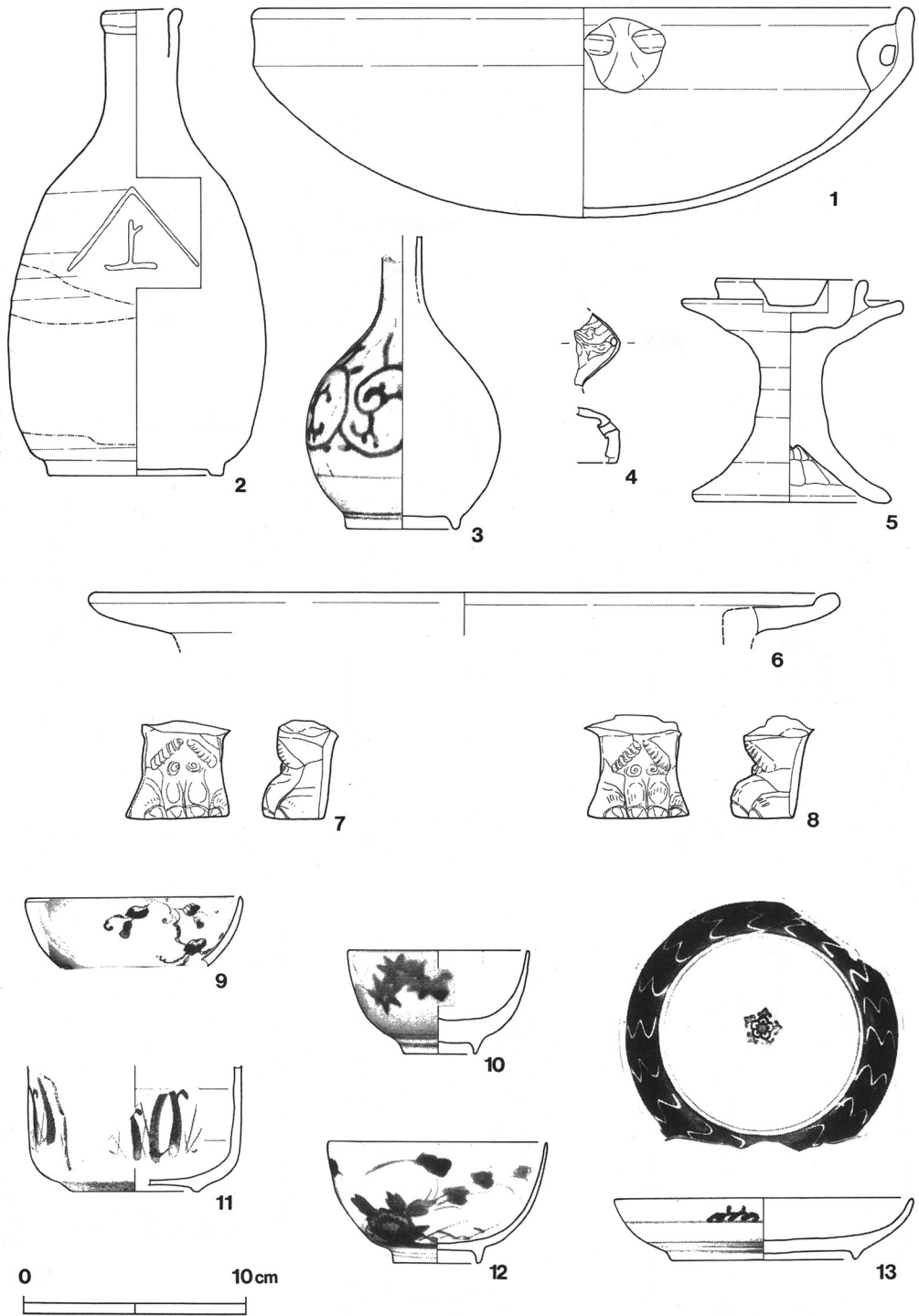
第391図 陶器・磁器・土器(10)



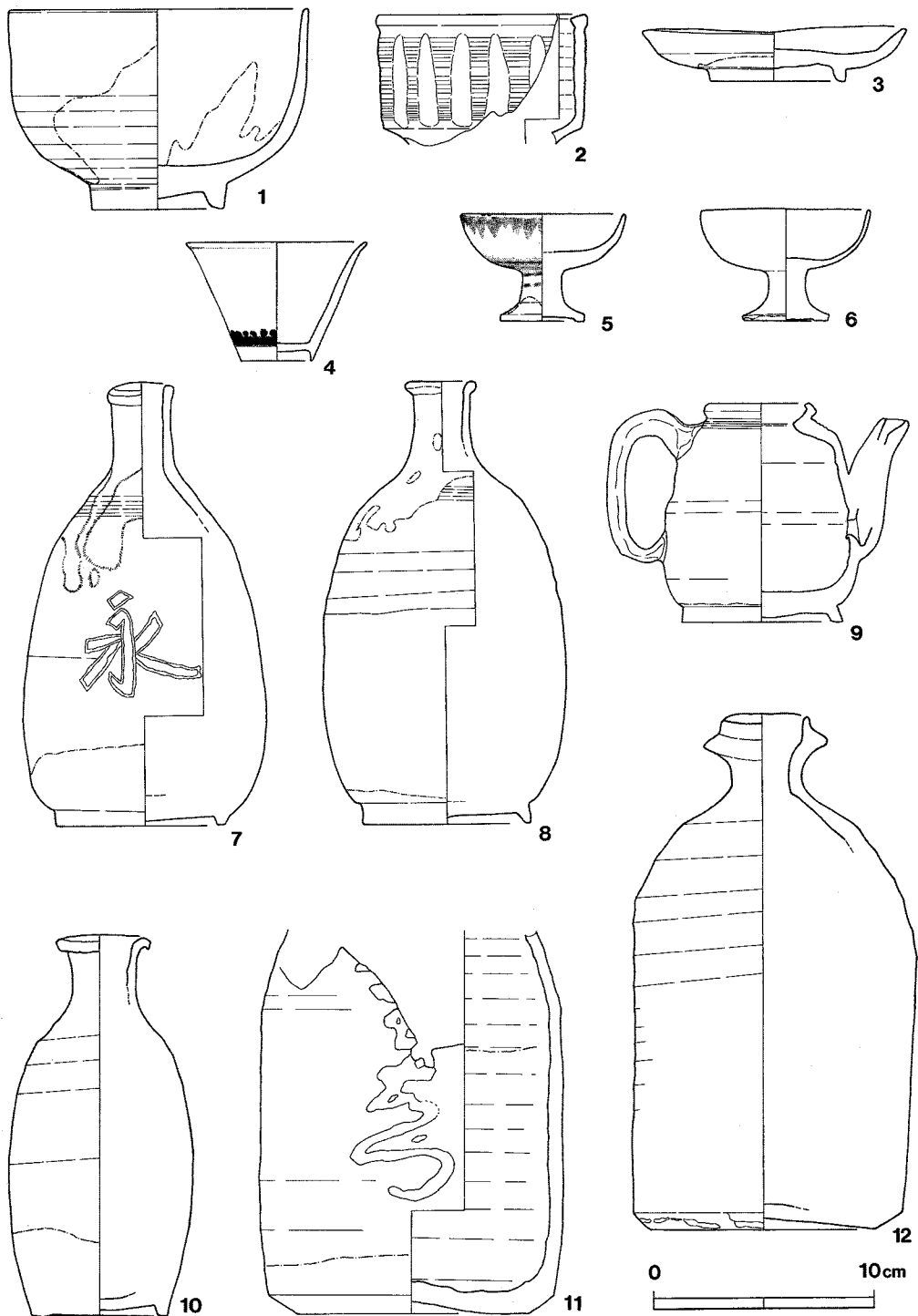
第392図 陶器・磁器・土器(11)



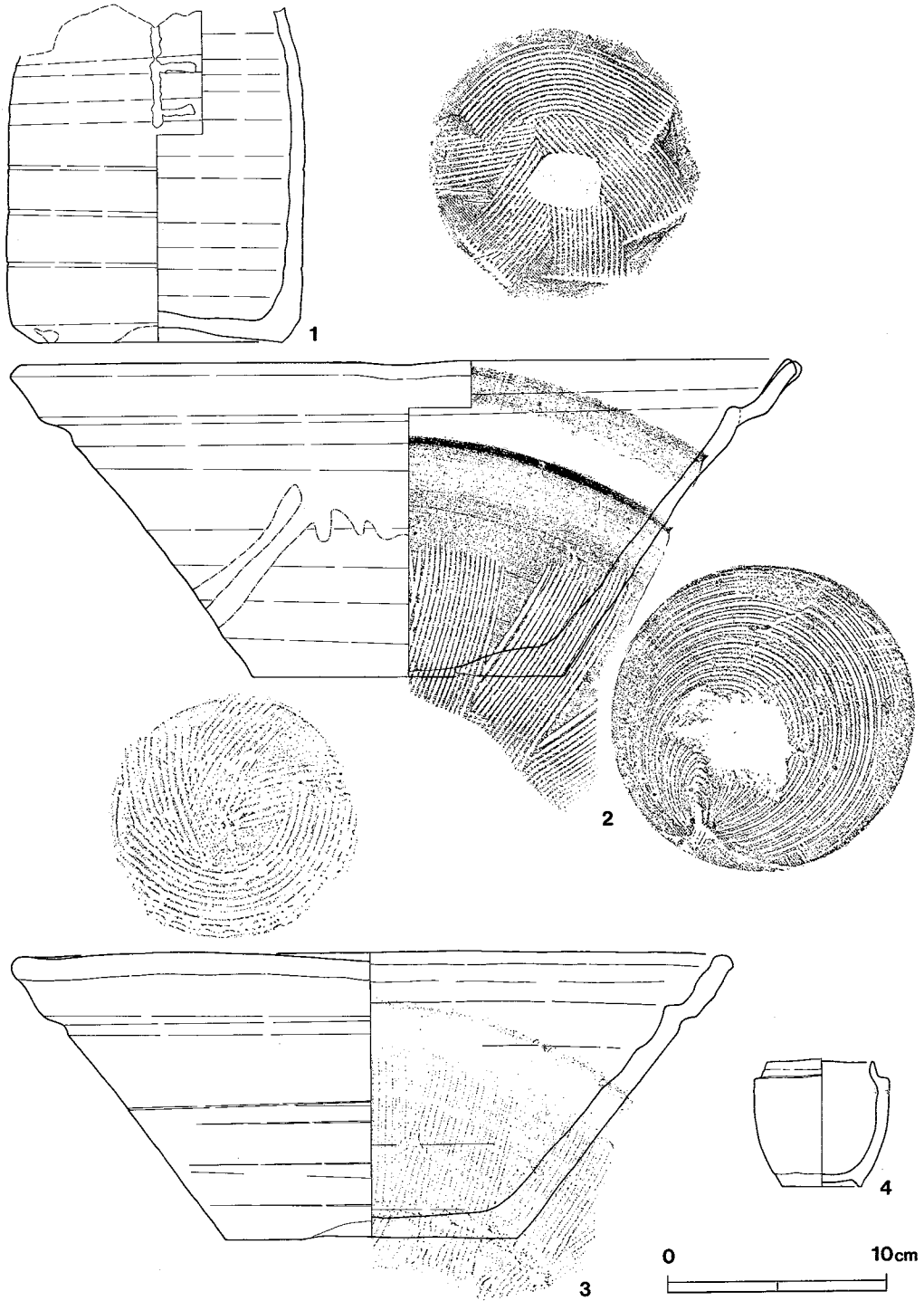
第393図 陶器・磁器・土器(12)



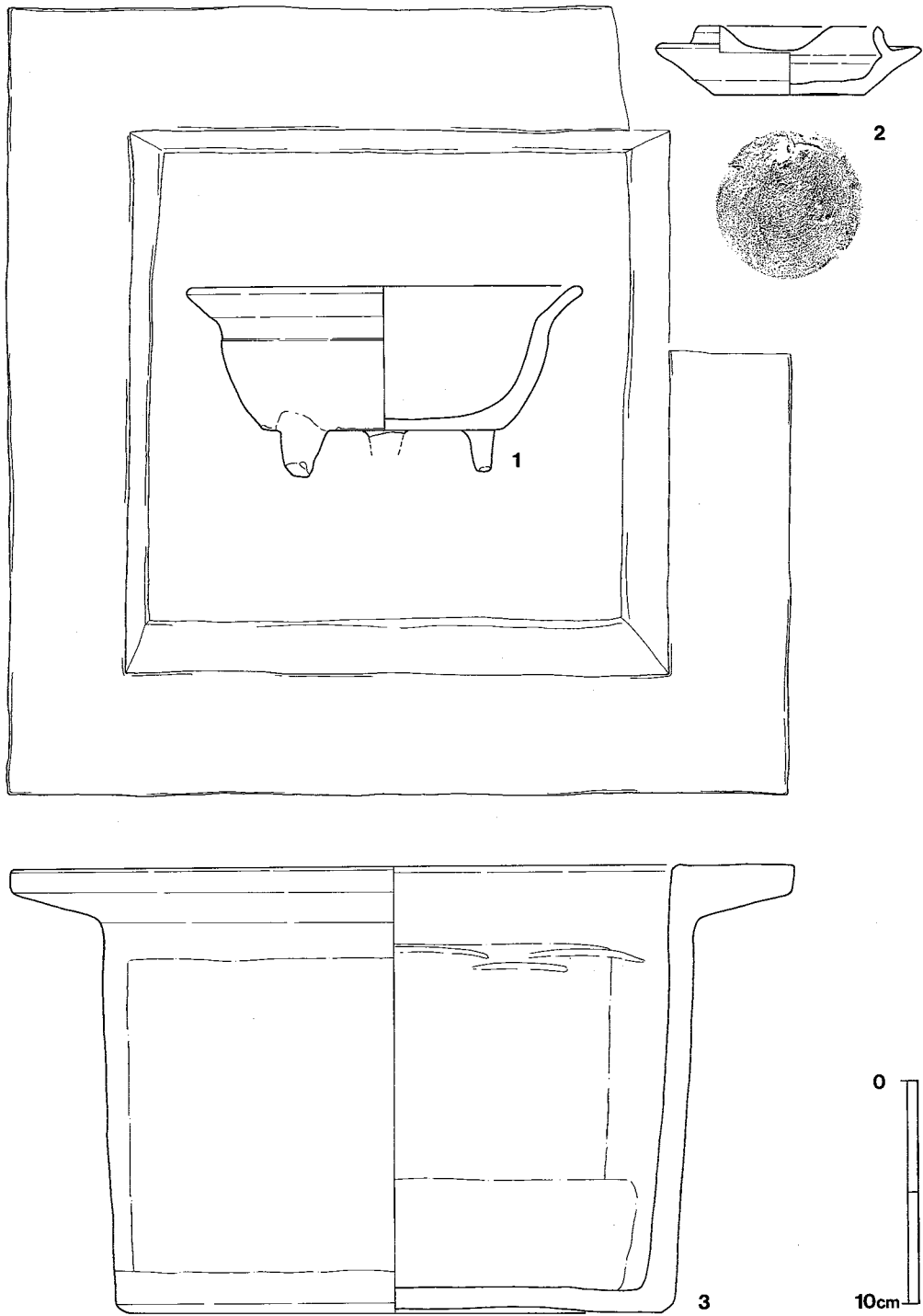
第394図 陶器・磁器・土器(13)



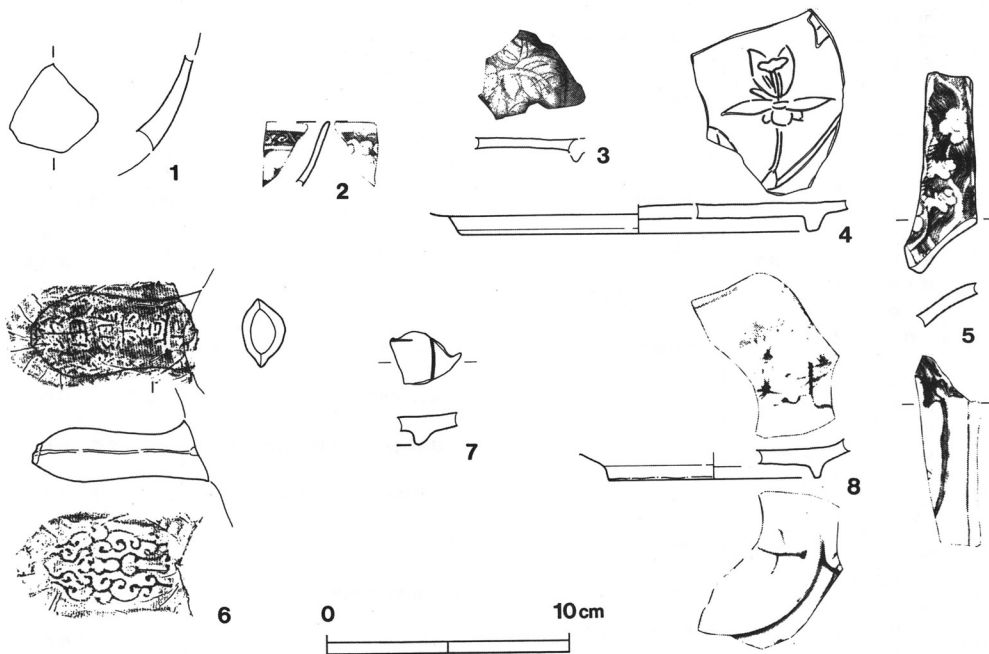
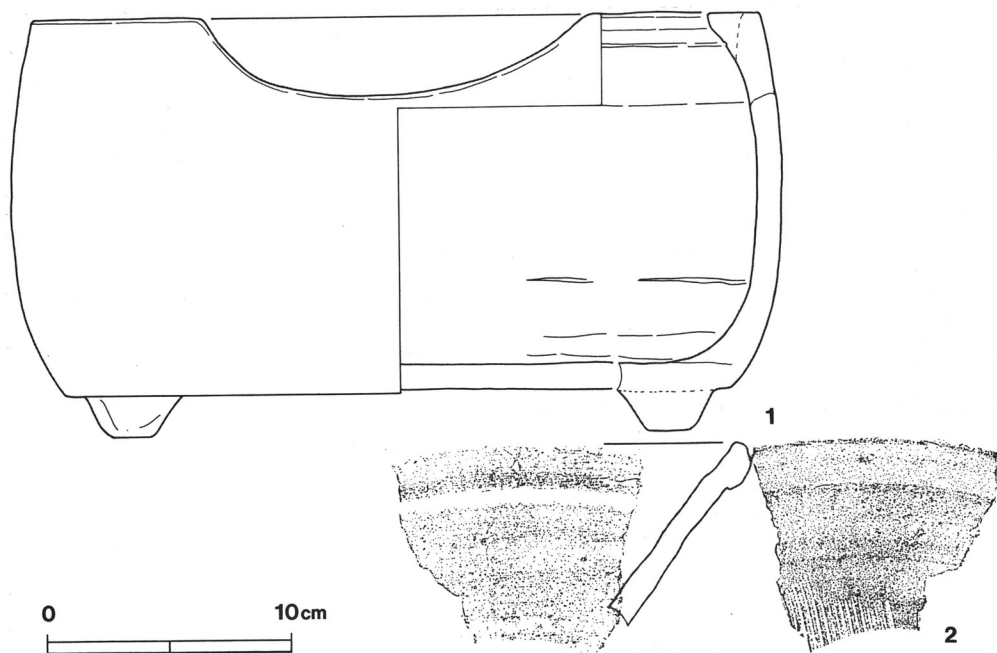
第395図 陶器・磁器・土器(14)



第396図 陶器・磁器・土器(15)



第397図 陶器・磁器・土器(16)



第398図 陶器・磁器・土器(17)

表16 陶器・磁器・土器観察表

番号	器種	法量・遺存		成形・調整	施釉・文様等	産地	備考	
1図1	碗 磁器	9.6	3.3	4.1 1/4	高台削出し	染付, 外面に根引松文	肥前	
1図2	皿 磁器	10.4	5.6	2.4 1/2	高台削出し	染付, 見込に草花文, 外面に帆掛文	瀬戸・美濃	
1図3	蓋 磁器	8.8	3.5	2.3 2/3	環状鈕削出し	染付, 外面に鹿ノ子文	肥前	
1図4	德利 陶器	2.8	—	— 完	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
1図5	碗 磁器	7.9	3.0	4.2 2/3	高台削出し	染付, 口銹, 外面に変形文字, 見込に変形文	肥前	端反形
1図6	灯明皿 陶器	—	7.4	3.8 1/3	受部貼付け	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
1図7	灯明皿 陶器	11.7	4.1	2.0 3/4	底部削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
1図8	碗 陶器	10.5	4.1	5.0 完	高台削出し, 見込蛇ノ目釉剥ぎ	内外面に刷毛目		
1図9	皿 磁器	11.7	6.1	2.9 1/2	高台削出し, 見込み重積み痕	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
1図10	蓋 陶器	10.8	9.8	5.3 2/3	ボタン状鈕削出し, 回転糸切痕残す		瀬戸・美濃	
1図11	德利 陶器	—	—	— 1/3	体部削り		志戸呂	体部に墨書
1図12	仏餉具 陶器	7.4	3.9	5.0 1/4	脚部底面削出し	染付, 外面に草花文	肥前	
1図13	片口 陶器	12.3	5.3	7.3 1/2	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
1図14	皿 磁器	14.2	8.3	3.7 2/3	高台削出し, 体部型打ちで六面成形	染付, 口銹	肥前	
1図15	小碗 磁器	5.9	2.8	2.8 1/2	高台削出し	白磁	肥前	
1図16	播鉢 陶器	21.0	—	— 1/4	口縁部を外側へ丸く折返し胎土は緻密	口縁部に鉄釉施釉, 播目10条		
1図17	皿 陶器	12.8	7.8	3.1 1/4	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
2図1	蓋物 磁器	9.3	—	— 1/3	高台削出し	染付, 外面に草花文, 口唇部釉剥ぎ	肥前	
2図2	花生 磁器	5.6	4.1	9.1 底部完	萁筒底削出し	染付, 外面にカニ文, 底裏に銘「甄舎」	瀬戸・美濃	
2図3	鉢 磁器	—	—	— 底部片	左右貼付け?	瑠璃釉施釉	肥前	台鉢の一部 鍋島藩窯系 口縁部にス ス付着
2図4	植木鉢 土器	16.8	12.0	— 1/3	体部ナデ, 肩部中央に穿孔			
2図5	蓋 磁器	7.9	2.9	2.6 1/3	環状鈕削出し	染付, 外面に松文, 内面に雲文	肥前	
2図6	碗 陶器	10.5	5.1	6.7 1/3	高台削出し	高台内施釉, 外面に鉄絵	京都系	被熱
2図7	德利 陶器	3.2	11.4	— 1/3	高台削出し	鉄釉施釉後灰釉掛, 肩部に条線	瀬戸・美濃	被熱
2図8	壺 陶器	3.3	14.3	— 1/4	体部削り	鉄釉施釉, 肩部に条線	瀬戸・美濃	被熱
2図9	皿 陶器	12.3	7.3	3.0 (完)	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	被熱
2図10	德利 陶器	4.3	12.6	— (完)	体部削り	口縁部鉄釉施釉	志戸呂	被熱著しい
2図11	火鉢 土器	6.4	—	— 1/2	輪積み成形, 外面ミガキ, 内面ナデ	外面赤彩		被熱
3図1	碗 陶器	11.2	—	— 1/3	体部指押し	鉄釉施釉, 内面灰釉掛分	瀬戸・美濃	拳骨形

報告篇第四章 江戸時代の調査 II

3図2	德利陶器	—	9.5	—	底部 1/4	体部削り		志戸呂	
3図3	德利陶器	3.3	14.3	—	口縁部 (完)	体部削り	口縁部鉄釉施釉	志戸呂	被熱著しい
3図4	德利陶器	—	12.3	—	底部 1/4	体部・底部削出し		志戸呂	底部に墨書
3図5	碗陶器	13.9	4.0	4.5	1/3	高台削出し	透明釉施釉	肥前	
3図6	香炉磁器	10.0	—	—	口縁部 1/3	口縁内側へ折返	青磁	肥前	被熱
3図7	德利陶器	—	—	—	体部完	体部指押し	鉄釉施釉, 体部に貼付け人形か	備前系	
3図8	焙烙土器	—	—	—	—	ロクロ調整			
3図9	皿磁器	—	—	—	—	胎土は粗く灰色	青花, 見込に草丈, 貫入著しい	中国	呉須手
3図10	皿磁器	—	—	—	口縁部 1/3	型打ち成形, 口縁部ほぼ直角に外反	青花	中国	被熱, 古染付
3図11	皿磁器	—	—	—	底部 1/3	体部型打ち, 口縁は輪花か	色絵, 見込に呉須で蓮花文, 地文は赤絵	中国	
4図1	碗陶器	12.2	5.2	8.3	1/3	高台削出し, 砂熔着	高台内施釉, 高台内に印刻痕有り	肥前	被熱著しい 呉須手
4図2	皿陶器	21.2	10.2	5.1	1/3	高台削出し, 見込に目痕	透明釉施釉	肥前	
4図3	香炉磁器	6.2	4.8	—	口縁部 1/2	胎土平滑	青磁, 外面釉施厚い	肥前	被熱著しい
4図4	鉢土器	—	6.6	—	底部 1/3	ロクロ調整, 底面に回転糸切痕残す			
4図5	火鉢土器	35.0	25.3	—	—	板組み成形, 口縁部・内面ミガキ, 口縁部は外折	口縁部上面及び内面赤彩		被熱
4図6	播鉢陶器	35.0	—	—	口縁部 1/5	体部削り, 口縁部折返し	鉄釉施釉, 播目14条	瀬戸・美濃	被熱
4図7	碗磁器	8.0	3.0	4.0	底部 1/3	高台削出し	染付, 外面に海浜風景か	肥前	
4図8	香炉陶器	11.0	—	—	口縁部 1/3	口縁内側へ折返	染付, 外面に唐草文	肥前	被熱著しい 陶胎質
4図9	碗陶器	9.8	4.2	5.2	1/2	高台削出し	染付, 外面に草花文と丸文, 高台内に渦福銘	肥前	
4図10	德利陶器	—	11.4	—	底部 1/2	体部, 底部削出し	鉄釉施釉, 底部釉払取り	志戸呂	体部及び底部に墨書
4図11	皿陶器	12.4	3.7	4.4	(完)	高台削出し	透明釉施釉, 内面に鉄と呉須で梅樹文	京都系	
4図12	德利陶器	—	7.1	—	底部完	蒼筈底削出し	灰釉施釉, 鉄釉掛け	瀬戸・美濃	
5図1	焙烙土器	29.0	—	—	—	ロクロ調整, 内耳貼付け			
5図2	德利陶器	—	11.1	—	底部完	高台削出し	鉄釉施釉後灰釉掛, 底部無釉	瀬戸・美濃	
5図3	碗陶器	12.4	5.5	8.2	(完)	高台削出し	灰釉施釉, 部分的に青味を帯びる	瀬戸・美濃	高台内に墨書
5図4	碗陶器	10.7	4.1	5.2	(完)	高台削出し	高台内施釉, 内外面刷毛目, 口鏽	肥前	現川系
5図5	碗陶器	9.8	5.2	6.9	1/2	高台削出し	灰釉施釉, 外面に呉須絵	瀬戸・美濃	
5図6	蓋磁器	11.3	10.1	9.4	完	環状鈕削出し	染付, 外面に一重網目と鳥文	肥前	
5図7	小鉢陶器	20.4	8.8	9.4	完	高台削出し, 体部型打ちで五弁花成形	青磁, 施釉厚い	肥前	
5図8	德利陶器	—	12.0	—	底部完	底部削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
5図9	片口陶器	13.4	6.7	8.1	完	高台削出し, 体部削り, 見込に三足ピン痕	灰釉施釉, 高台内へラ記号?	瀬戸・美濃	被熱

5 図10	仏花瓶 陶器	—	6.9	—	底部完	底部に回転糸痕残す	鉄釉, 上部に灰釉掛分	瀬戸・美濃	
5 図11	風炉 土器	14.4	—	—	口縁部 1/5	輪積み成形, 外面ミガキ, 窓有り	外面赤彩		
6 図1	火鉢 土器	29.2	20.8	10.7	(完)	輪積み成形, 外面削り後ナデ, 三足貼付け	外面赤彩		
6 図2	火鉢 土器	37.2	25.6	26.0	(完)	板組み成形, 口縁部・内面ミガキ	口縁部・内面赤彩		
6 図3	火鉢 土器	35.0	25.0	23.0	(完)	板組み成形, 口縁部・内面ミガキ	口縁部・内面黒彩か		
7 図1	火鉢 土器	38.0	26.5	24.0	(完)	板組み成形, 口縁部・内面ミガキ	口縁部・内面赤彩		全体に磨滅 著しい
7 図2	碗 陶器	10.2	4.0	5.8	底部完	高台削出し, 砂熔着	高台内施釉, 内外面刷毛目	肥前	
7 図3	播鉢 土器	32.8	12.0	—	底部 1/3	輪積み成形, 上半ナデ	播目7条	信楽系	播目磨滅
7 図4	瓦 土器	18.4	—	—	1/2	輪積み成形, 外面ミガキ, 長方形・円形のスリット有り	外面縦縞状に黒彩?		蓋, 7 図5 とセット 台部, 内面 にスス
7 図5	瓦 土器	18.3	15.4	6.6	完	ロクロ調整, 内底面に坏部・口唇貼付け	外面・坏部黒彩?		
7 図6	德利 陶器	5.2	—	—	口縁部完	底部削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
8 図1	碗 陶器	10.9	4.6	6.2	完	高台削出し, 胎土は砂粒多く淡黄色	鉄釉施釉	瀬戸・美濃 系	口唇部全体 に打痕
8 図2	德利 陶器	3.6	6.7	16.8	完	萁筥底削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
8 図3	皿 陶器	16.2	9.9	3.8	(完)	高台削出し	灰釉, 高台内施釉, 見込に摺絵, 鉄と呉須で菊花文	瀬戸・美濃	御深井系
8 図4	德利 陶器	3.8	7.2	19.5	完	萁筥底削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	体部に釘書
8 図5	德利 陶器	5.0	7.0	17.4	完	萁筥底削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
8 図6	碗 陶器	12.2	5.7	7.7	(完)	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
8 図7	播鉢 陶器	28.6	12.0	11.2	1/2	頸部湾曲し, 口縁部内面に沈線有り, 底部は回転糸切	鉄釉施釉, 播目18条	瀬戸・美濃	
8 図8	碗 陶器	14.0	6.2	9.8	1/3	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
8 図9	皿 磁器	9.8	4.0	3.0	(完)	高台削出し	白磁	肥前	
8 図10	磁蓋 磁器	7.2	3.7	4.2	完	高台削出し	染付, 印判で桐文, 口縁部内面無釉	肥前	
9 図1	播鉢 陶器	40.4	15.6	17.5	1/5	体部削り, 底部回転糸切痕残す	鉄釉施釉, 播目17条	瀬戸・美濃	
9 図2	鉢 土器	8.1	4.4	5.2	(完)	ロクロ成形, 穿孔は対に2個と1個, 底部回転糸切			
9 図3	灯明皿 土器	11.4	8.0	6.1	1/3	ロクロ成形, 受部貼付け, 底部に回転糸切痕残す			
9 図4	德利 陶器	2.5	9.0	—	1/2	高台削出し	鉄釉施釉後灰釉掛	瀬戸・美濃	
9 図5	罍瓶 陶器	8.1	13.6	15.6	(完)	高台削出し, 肩部に把手貼付, 肩部に三足ビン痕	鉄釉施釉, 肩部中央, 把手貼付部に条線	瀬戸・美濃	
9 図6	碗 磁器	10.0	4.5	5.5	2/3	高台削出し	染付, 外面に松竹梅文, 高台内に銘有	肥前	
9 図7	碗 陶器	12.2	4.8	8.6	底部完	灰釉施釉	瀬戸・美濃	底部スス付 着	
9 図8	皿 磁器	13.9	7.1	3.1	底部 2/3	高台削出し, 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	染付, 内面に雨降文	肥前	
10 図1	播鉢 陶器	36.4	17.0	—	1/3	高台は貼付け, 口縁直下を広く凹ませる, 口縁部外反	鉄釉, 高台部も施釉, 播目9条	肥前系	胎土は砂粒 含み硬質
10 図2	播鉢 陶器	28.2	—	—	口縁部 1/4	口縁帯に二条線, 内面の突帯弱い	播目9条	備前系	

報告篇第四章 江戸時代の調査 II

10図3	播 陶 器	鉢 器	26.4	13.4	10.5	口縁帯に二条線, 内面に一条突帯 有り	播目条	備前系		
10図4	徳 陶 器	利 器	3.5	8.6	23.0 (完)	高台削出し, 肩部に条線	鉄釉施釉後部分的に灰釉掛	瀬戸・美濃	底部に墨書	
10図5	徳 陶 器	利 器	—	—	—	碁笥底削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃		
10図6	播 陶 器	鉢 器	—	12.8	—	底部上底気味	播目9条	備前系	底部に墨書	
11図1	徳 陶 器	利 器	4.0	—	—	口縁部 (完)	口縁部鉄釉施釉	志戸呂		
11図2	片 陶 器	口 器	16.2	7.3	9.3 (完)	高台削出し, 体部削り	灰釉施釉	瀬戸・美濃		
11図3	仏 磁 器	鉢 器	5.5	2.9	5.5 (完)	脚部底面削出し	白磁	肥前		
11図4	徳 陶 器	利 器	—	10.5	—	体部・底削り	口縁部鉄釉施釉	志戸呂		
11図5	餌 陶 器	入 器	5.6	4.4	3.4 2/3	底部に回転糸切痕残す	灰釉施釉	瀬戸・美濃		
11図6	碗 磁 器	碗 器	10.6	4.0	5.0 1/3	高台削出し	染付, 菊散らし文	肥前		
11図7	陶 器	皿 器	12.4	7.2	3.0 (完)	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃		
11図8	徳 陶 器	利 器	3.8	—	—	口縁部 (完)	口縁部鉄釉施釉	志戸呂		
11図9	徳 陶 器	利 器	—	—	—	体部 (完)	鉄釉施釉	瀬戸・美濃		
11図10	徳 陶 器	利 器	—	—	—	体部削り		志戸呂	体部に墨書	
11図11	徳 陶 器	利 器	—	12.2	—	体部削り		志戸呂	体部に墨書	
11図12	土 陶 器	瓶 器	8.0	12.4	8.8	三足貼付け	色絵, 梅樹文	京都系		
12図1	火 土 器	鉢 器	34.6	25.2	—	板組み成形, 口縁部・内面ミガキ			磨滅著しい	
12図2	仏 磁 器	花瓶 器	2.0	4.1	15.2	口縁部完	高台削出し	染付, 唐草文	肥前	
12図3	播 陶 器	鉢 器	—	—	—	高台は底部脇に貼付け, 胎土は砂 粒含み硬質, 暗褐色	鉄釉, 底部も施釉, 播目12条以上	肥前系		
12図4	碗 陶 器	碗 器	13.5	5.3	7.8	高台削出し, 高台内螺旋状, 体部 削出し, 見込に四足痕	透明釉施釉		胎土は緻密 で, 灰白色	
12図5	碗 磁 器	碗 器	10.5	5.8	2.2 1/3	高台削出し	染付, 亀甲に唐草文	肥前		
12図6	碗 磁 器	碗 器	—	—	—	胎土緻密	色絵, 梓線に緑色で笹文	中国		
12図7	徳 陶 器	利 器	3.4	—	—	口縁部 (完)	鉄釉施釉後灰釉掛け, 肩部に条線	瀬戸・美濃	被熱	
12図8	碗 磁 器	碗 器	13.5	7.3	3.3 1/4	高台削出し, 砂熔着	染付, 墨弾き	肥前		
12図9	碗 陶 器	碗 器	9.0	3.7	4.9	高台削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	天目	
12図10	蓋 陶 器	蓋 器	3.4	1.2	—	鈕削出し? 回転糸切痕残す		瀬戸・美濃		
12図11	碗 陶 器	碗 器	12.0	5.2	7.6 2/3	高台削出し, 三足ピン痕	灰釉施釉	瀬戸・美濃		
12図12	灯 陶 器	明 器	7.8	4.0	2.2 (完)	碁笥底削出し, 見込に三足ピン痕, 芯受け貼付け	鉄釉施釉	瀬戸・美濃		
12図13	皿 陶 器	皿 器	12.0	3.9	3.1 2/3	高台削出し, 見込に重積み痕	灰釉施釉	瀬戸・美濃		
12図14	仏 磁 器	鉢 器	—	3.8	—	口 底削り	染付, 坏部下端に圈線	肥前		
12図15	猪 磁 器	猪 器	8.0	4.8	6.1 (完)	碁笥底削出し	染付, 雷文に柴垣文, 見込に五弁 花, 高台内漏福銘	肥前	口鏝	

13図1	焙土磁器	29.4	9.5	口縁部 (完)	輪積み成形			
13図2	德利磁器	3.2	7.7	21.2 完	高台削出し	鉄釉, 体部上半灰釉掛け		体部に釘書
13図3	仏花瓶磁器	—	5.0	— 底部完	高台削出し, 砂熔着	染付, 唐草文	肥前	
13図4	水滴陶器	—	—	—	型打ち成形, 角に注口	灰釉施釉, 文様は不明だが, 暗緑色	瀬戸・美濃	御深井系
13図5	灯明皿土器	9.8	6.6	8.7 (完)	全面ロクロ調整, 台脚部内面取り, 受部に切込み			
13図6	火鉢土器	33.4	—	— 口縁部 1/4	輪積み成形, 全面ミガキ			
13図7	火鉢土器	—	—	— 脚部片	手捏ね成形	獅子面を有す		13図6と同一か
13図8	火鉢土器	—	—	—	手捏ね成形	獅子面を有す		13図6と同一か
13図9	碗磁器	9.7	—	— 口縁部 1/2		染付, 蔓草文	肥前	
13図10	碗磁器	8.1	3.2	4.7 (完)	高台削出し, 砂熔着	染付, 印判で楓文	肥前	
13図11	香炉磁器	—	5.9	— 底部 1/2	碁笥底削出し, 胎土は砂粒多く灰黄色	鉄絵で草文, 化粧掛けは厚い		京都承か, 口唇に打痕
13図12	碗磁器	9.8	4.0	5.5 1/2	高台削出し	染付, 印判で草花文	肥前	
13図13	皿磁器	13.5	8.2	2.8 (完)	高台削出し, 高台内にハリ支え痕	染付, 墨弾きで波文, 見込に印判で五弁花	肥前	
14図1	碗陶器	13.5	5.9	9.1 底部完	高台削出し	灰釉施釉		
14図2	香炉陶器	9.4	—	— 1/3	体部条線を巡らし縦位ノミ削ぎ	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
14図3	皿陶器	11.8	6.1	2.3 完	高台削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
14図4	猪口磁器	8.0	3.2	5.4 (完)	碁笥底削出し, 砂熔着	染付, 点列	肥前	
14図5	仏鉤具磁器	7.4	3.8	4.9 口縁部 1/2	台脚底部を削出し	染付, 雨降文	肥前	
14図6	仏鉤具磁器	7.6	3.8	7.6 完	台脚底部を削出し	白磁	肥前	
14図7	德利陶器	2.7	7.5	20.1 完	高台削出し	鉄釉施釉後灰釉掛け, 肩部に条線	瀬戸・美濃	
14図8	德利陶器	3.1	7.7	19.9 完	高台削出し	鉄釉施釉後灰釉掛け, 肩部に条線	瀬戸・美濃	
14図9	水注陶器	4.2	7.3	10.0 完	高台削出し	鉄釉施釉, 肩部に条線	瀬戸・美濃	
14図10	德利陶器	3.7	6.2	17.2 完	碁笥底削出し	灰釉施釉	瀬戸・美濃	
14図11	德利陶器	—	10.4	— 底部完	底部削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
14図12	德利陶器	3.8	10.2	23.2 完	底部削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
15図1	德利陶器	—	11.1	— 底部完	底部削出し, 体部に螺旋状沈線有り	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
15図2	播鉢陶器	35.0	14.2	14.5 完	体部削り, 底部回転糸切痕残す	鉄釉施釉, 播目17条	瀬戸・美濃	底部穿孔
15図3	播鉢陶器	32.2	13.4	13.1 完	体部削り, 底部回転糸切痕残す	鉄釉施釉, 播目17条	瀬戸・美濃	
15図4	茶入陶器	6.2	4.9	3.6 (完)	碁笥底削出し	鉄釉施釉	瀬戸・美濃	
16図1	香炉土器	17.6	10.9	8.6 (完)	輪積み成形			
16図2	灯明皿土器	11.6	8.6	6.7 完	ロクロ成形, 受部貼付け			

報告篇第四章 江戸時代の調査 II

16図3	火鉢 土器	36.4 20.2	25.6 17.3	24.0 (完)	板組み成形、口縁部・内面ミガキ	口縁部・内面赤彩		
17図1	風炉 土器	30.0	27.4	17.3 (完)	輪積み成形、外面ミガキ、足貼付け			
17図2	播鉢 陶器	—	—	—	口縁部折返し	鉄釉施釉、播目13条か	瀬戸・美濃	被熱
18図1	碗 磁器	—	—	—	胎土は緻密で極めて平滑	黄釉	中国	被熱
18図2	碗 磁器	—	—	—		青花	中国	被熱
18図3	皿 磁器	—	—	—		青花、見込に樹文	中国	
18図4	皿 磁器	—	14.3 底部	— 1/4	高台削出し、高台内カナナ目明瞭	青花、見込に釘彫りで花卉文	中国	
18図5	皿 磁器	—	—	—	口縁部は輪花状か	青花、内面に波濤と梅花文	中国	被熱
18図6	碗 陶器	—	—	—	上面・下面貼付け、文様を浮彫り	黒色釉施釉、上・下面に唐草文、 下面に「四楽喜」銘		行平の把手
18図7	皿 磁器	—	—	—	高台削出し、砂熔着	青花	中国	
18図8	皿 磁器	—	8.8 底部	— 1/3	高台削出し	染付、見込に草花文、高台内に銘 「大明」か	肥前	

(2) かわらけ

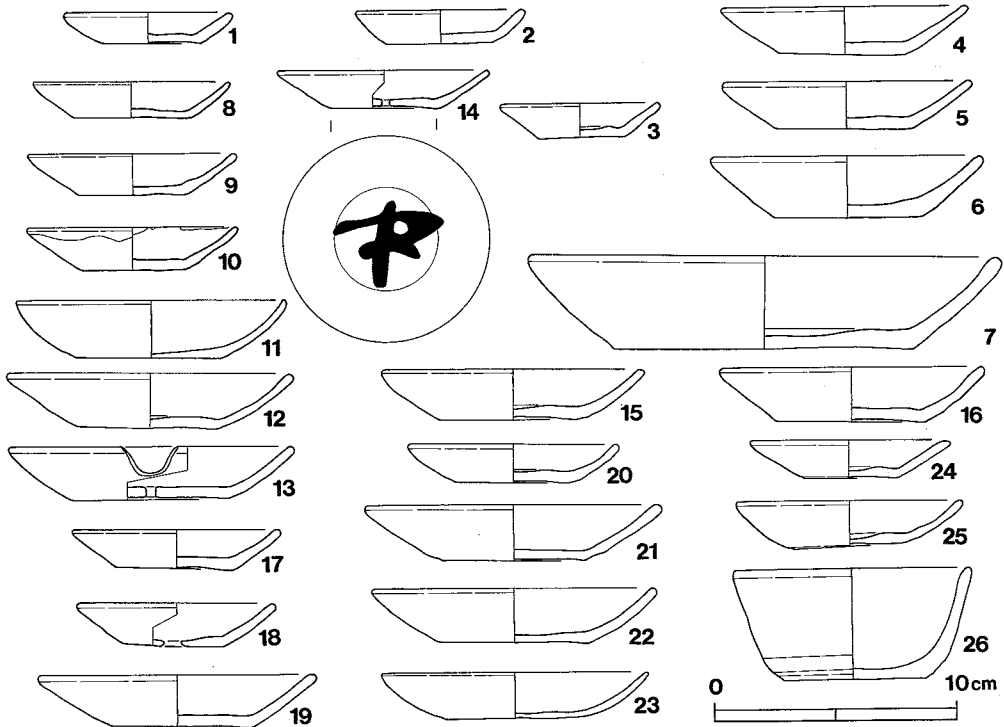
本項で取り扱うかわらけも第三章と同様に1/2以上遺存している個体の約半数をランダムに抽出した。本地区では、法学部4号館建設地区のような多量のかわらけを出土する大型土坑はなく、出土するかわらけの組成も異なっている。器種組成では、B7-2号土坑と類似する遺構が多く、AIm類(8~10, 14, 17, 18, 20, 24), AIo類(12, 13, 19, 21, 22), BIa類(11, 23)の外 AIb類(3), AIh類(7), やや様相が異なり疑問符付きながら AId類(4, 5, 15, 16), AIn類(6)など法学部地区と共通する器種の外に, AIj類(1, 2) 5B II b類(26)のように本地点のみで出土している器種もある。AIj類は、口径6.4~6.7cm, 底径4.0~4.3cm, 器高1.3~1.4cmで、ほぼ平底または僅かに上底気味の底部から短く丸みを持って立ち上がり、体部4~4.5mmと厚く、端部は丸く、底部内面は平らなものと同様な渦巻き状の凹凸が見られるものである。また、B II b類は、口径9.6cm, 底径5.9cm, 器高4.6cmと椀型で、平らながら、中央が僅かに盛り上がり、底部内面と体部内面の境は不明瞭である。また、本地区のかわらけは、法学部地区と違って口縁部に灯芯油痕のあるものが多く、本地区の時期、利用形態を考えるうえで、問題となろう。なお第400図に底部の拓影を法学部地区と合わせ掲げる。 (上田 真)

表17 かわらけ計測表

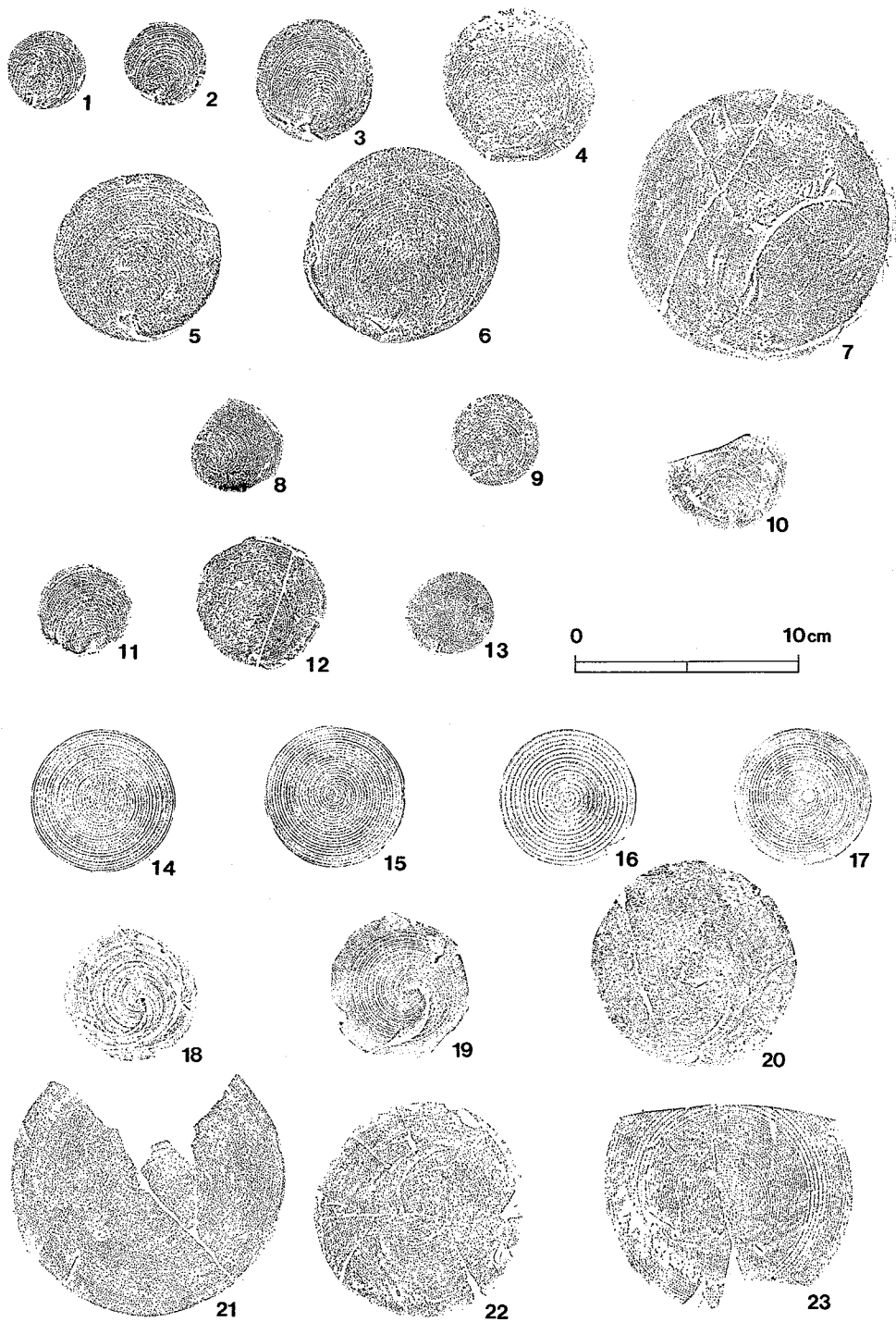
図版 番号	出土遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)	底面	外面	内面	備考
1	T9-1号	6.7	4.0	1.3	29.7	左回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	灯芯油痕
2	包含層	6.4	4.3	1.4	16.6	"	"	"	
3	P7-2号	6.5	3.4	1.5	20.8	"	"	"	灯芯油痕
4	T7-13号	10.1	5.1	2.0	56.5	"	"	"	
5	"	10.3	5.4	2.0	57.1	"	"	"	
6	"	11.1	6.0	2.6	94.8	"	"	"	灯芯油痕
7	"	19.2	12.4	3.9	282.7	中心糸切り	"	"	
8	T8-9号	8.1	4.7	1.5	29.8	左回転糸切り	"	"	ほぼ完形、灯芯油痕
9	"	8.4	4.3	1.7	27.0	"	"	"	灯芯油痕
10	"	8.6	4.3	1.8	37.7	"	"	"	" 完形
11	"	11.6	5.8	2.3	38.2	回転へら削り	回転へら削り	回転ナデ	底部内外面黒色処理
12	"	11.7	6.5	2.2	73.8	左回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	灯芯油痕、口唇切込
13	"	11.0	6.0	2.4	82.3	"	"	"	"、完形、底部穿孔
14	"	8.6	4.4	1.6	38.6	"	"	"	底部穿孔、底面墨書
15	Q6-1石組遺構	10.0	5.6	1.8	55.6	"	"	"	[中]
16	T8-6号	10.7	6.1	2.3	54.4	中心糸切り	"	"	
17	U6-3号	8.6	4.9	1.7	40.0	左回転糸切り	"	"	灯芯油痕
18	"	8.1	4.2	1.8	34.2	"	"	"	底部穿孔、内面墨塗
19	"	11.3	5.8	2.2	61.6	"	"	"	灯芯油痕
20	T10-1号	8.6	4.6	1.6	29.8	"	"	"	底面墨書「中」
21	"	11.6	6.2	2.3	59.6	"	"	"	" 「キ」?
22	"	12.0	6.0	2.3	50.5	"	"	"	
23	"	10.9	5.5	1.9	37.8	回転へら削り	回転へら削り	回転ナデ	底部内外面黒色処理
24	U6-1号	8.1	3.8	1.6	34.6	左回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	完形、灯芯油痕
25	"	9.2	4.6	2.0	35.3	"	"	"	灯芯油痕
26	包含層	9.6	5.9	4.6	106.9	回転へら削り	回転へら削り	回転ナデ	

表18 底面拓本個体一覧 (口径, 底径, 器高の単位はcm)

拓本番号	図版番号	出土遺構	口径	底径	器高	備考
1	(3)-1	E7-5号土坑	5.7	3.7	1.3	
2	(3)-2	"	7.7	3.6	1.9	
3	—	"	10.4	5.4	2.0	
4	—	"	12.7	7.2	2.5	
5	—	C7-3号土坑	13.4	7.4	2.8	
6	(2)-48	"	14.5	8.6	2.7	
7	(1)-45	C7-2号土坑	19.7	11.8	4.2	
8	文-2	包含層	6.4	4.3	1.4	
9	(6)-12	D8-7号土坑	10.0	4.1	2.4	
10	—	E11-1号土坑	11.3	5.8	2.0	右回転糸切り
11	文-12	T8-9号	11.6	5.8	2.3	
12	—	B7-2号土坑	8.6	4.0	1.7	
13	(6)-37	包含層	7.2	4.3	1.3	
14	—	C7-2号土坑	11.0	6.5	2.9	渦巻状の溝
15	(3)-39	E7-5号土坑	10.8	6.5	2.9	"
16	—	"	10.8	6.2	2.4	"
17	(4)-55	F8-1号土坑	10.6	6.2	2.7	"
18	文-16	T8-6号	10.7	6.1	2.3	中心糸切り
19	(6)-33	E7-7号土坑	12.8	6.7	2.3	"
20	(3)-37	E7-5号土坑	16.4	9.5	3.4	"
21	—	C4-1号土坑	—	11.2	—	"
22	(3)-36	E7-5号土坑	16.3	9.8	3.3	"
23	文-7	T7-13号	19.2	12.4	3.9	"



第399図 かわらけ



第400図 かわらけ底面拓影

(3) 瓦類

瓦類は、軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、熨斗瓦、面戸瓦、輪違い、鬼瓦がみられる。分類は、法学部4号館建設地区の記述に準じ、分類番号は同一である。

1. 軒丸瓦 (第401図, 第402図1~6)

軒丸瓦は、無剣梅鉢紋、剣梅鉢紋、連珠三つ巴文の3種類がみられる。

無剣梅鉢紋

1類 花卉の断面形が稜線にあり長方形をなす。

范型2: 瓦当径115mm, 文様区径82mm, 花卉径22mm, 中心径15mmである。色調は暗灰色。

胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。Q-6号土坑から1点検出された。丸瓦部との接合痕がみられ、弧状に刻まれている。(401-2)

范型3: 復元した瓦当径115mm, 文様区径81mm, 花卉径22mm, 中心径は不明である。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。Q-8-10号土坑から1点検出された。(401-3)

范型4: 復元した瓦当径130mm, 文様区径94mm, 花卉径27mm, 中心径は不明である。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。1点表採された。(401-9)

范型5: 復元した瓦当径141mm, 文様区径101mm, 花卉径28mm, 中心径は不明である。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。江戸第一面中から1点検出された。(401-6)

范型6: 瓦当径153mm, 文様区径115mm, 花卉径35mm, 中心径20mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。江戸第一面中から1点検出された。(401-5)

范型7: 復元した瓦当径163mm, 文様区径123mm, 花卉径31mm, 中心径は不明である。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。丸瓦部との接合痕がみられ、弧状に楕目が刻まれている。江戸第一面中から3点, T-9-3号土坑, W-6-1号土坑から1点ずつ, 計5点検出された。(401-1)

3類 花卉の断面形に稜線がなくかまぼこ状である。

范型1: 中心と花卉のみ残存している。良好な資料が法学部地区から検出されている。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。丸瓦部との接合痕がみられ、縦に楕目が刻まれている。T-6-7号土坑から1点検出された。(401-4)

范型2: 復元した瓦当径164mm, 文様区径118mm, 花卉径29mm, 中心径は22mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。U-4-3号土坑から1点検出された。(401-7)

范型3: 復元した瓦当径137mm, 文様区径101mm, 花卉径25mm, 中心径は不明である。色調

は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。W 9—2号土坑から1点検出された。(401—8)

剣梅鉢紋

1類 花卉の断面形が稜線にあり長方形をなす資料は、文学部地点から検出されなかった。

2類 花卉の断面形が稜線になくかまぼこ状である。

範型1：瓦当径164mm，文様区径118mm，花卉径29mm，中心径は22mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。丸瓦部は、全面に刺し縫いが施され、一部が押し潰されて不明瞭になっている。U 7—1号土坑から1点検出された。(402—1)

範型3：復元した瓦当径163mm，文様区径112mm，花卉径35mm。法学部地点から良好な資料がみられる。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。1点表採された。(401—12)

範型4：復元した瓦当径161mm，文様区径110mm，花卉径33mm，中心径22mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。1点表採された。(401—11)

範型14：復元した瓦当径164mm，文様区径114mm，花卉径28mm，中心径は不明である。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。1点表採された。(401—10)

範型15：復元した瓦当径155mm，文様区径115mm，花卉径35mm，中心径は不明である。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。1点表採された。(401—13)

連珠三つ巴には5文様みられる。法学部地点と同文の資料はみられない。

11類 A右。瓦当径170mm，内区径75mm，珠文数16個。巴長は5分の3周，断面形はドーム状である。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。U 3—4号土坑から1点検出された。(402—2)

12類 A右。復元した瓦当径170mm，内区径84mm，珠文数16個。巴長は2分の1周弱，断面形はドーム状である。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。W 9—2号土坑から1点検出された。(402—3)

13類 B右。瓦当径154mm，内区径72mm，珠文数16個，径14mmである。巴長は長いとおもわれ，断面形はドーム状である。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。T 7—12号土坑から1点検出された。(402—4)

14類 C右。瓦当径152mm，内区径60mm，珠文数は16個，径14mmである。巴長が5分の2周，断面形はドーム状である。丸瓦部との接合部がみられ，弧状に櫛目が刻まれている。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。S 8—52号土坑から1点検出された。(402—5)

15類 C右。瓦当径158mm, 内区径66mm, 珠文数は14個, 径14mmである。巴長が5分の2周, 断面径は三角形状をしている。色調は暗灰色。胎土は明灰色で白色粒を含む。焼成は良好。W 9-1号土坑から1点検出された。(402-6)

2. 軒平瓦 (第402図7・8, 第403図1~5)

軒平瓦には4種類みられる。すべて均整唐草文である。

2類 3 箆型みられる。法学部地区と同箆資料は1点みられる。

箆型1: 中心飾りと唐草が残存しているが, 摩耗が激しい。U 7-1号土坑から1点検出された。(403-4)

箆型6: 3-1は隅軒平で平瓦部が斜めに切断されている。瓦当厚44mm, 文様区幅142mmである。Q 6-3号土坑, U 4-3号土坑から1点ずつ検出された。(403-1)

箆型7: 403-2は, 唐草と子葉のみ残存している。瓦当厚46mmである。T 6-1号土坑から1点検出された。(403-2)

4類 文様構成は2類と同一であり, 第一唐草が単線になっている部分だけ異なる。瓦当厚43mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。Q 8-10号土坑, S 8-2号ピットから1点ずつ検出された。(403-3・5)

5類 中心飾りと唐草2反転で構成されていることが, 御殿下記念館地点から検出された同箆資料からわかる。瓦当の形状が周縁下部が中央で弧状に垂れ下がっていて, 文様区が広がっている。中心飾りに点珠に無剣梅鉢文を配している。第一唐草は重線で長く巻き込みは少なく, 第二唐草は重線で短い。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。U 7-1号土坑から1点検出された。(402-7)

6類 中心飾りと唐草2反転で構成されている。中心飾りは, 点珠にU字状の中央, Y字状の脇部によって構成される。唐草は巻き込み先端に丸みを帯び, 第二唐草が中心飾りの点珠まで長く伸びている。瓦当幅は226mm, 厚さは37mm, 文様区幅125mmであり, 小型である。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。U 6-3号土坑から2点検出された。(402-8)

3. 軒棧瓦 (第403図6~12, 404図)

軒棧瓦は軒平部7種類, 軒丸部12種類がみられる。軒平部はすべて均整唐草文である。軒平部1類から6類までは軒平瓦2類と文様構成は同一で, 各部の表現が異なるだけである。軒丸部には, 三つ巴文と連珠三つ巴文がみられる。

軒平部13類 唐草2反転と子葉のみが確認できる。唐草の巻き込み部先端は丸みを帯び膨らんでいる。子葉は唐草まで伸びている。軒丸部との接合痕の櫛目が縦方向に刻まれている。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。T 8-1号土坑から1点検出された。(403-11)

軒平部14類 唐草2反転と子葉のみが確認できる。唐草の巻き込み部先端が円盤状に肥大化し,

子葉は唐草の方向にかなり伸びてきている。全体に肉厚になっている。範崩れによって子葉と唐草がくっついている。軒丸部は連珠3つ巴文であり、瓦当径74mm、内区径24mm。珠文数8個である。巴長は3分の1周、断面形はドーム状である。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。1点表採された。(404-1)

軒平部15類 中心飾りの構成が軒平瓦2類と同一である。唐草は軒平部2類同様に肥大化し、子葉もまた肥大化し、長大化している。唐草の山が低くなっている。全体的に肉厚である。文様区幅が150mm、右周縁に「丸に七」の刻印が押されている。被熱により燈変色しているため色調、胎土、焼成は不明。S 8-52号土坑から8点検出された。(403-6)

軒平部16類 中心飾りが異なるだけで唐草、子葉は軒平部15類と同じである。中心飾りは中央の分割線がなくなり、上部が大きい。脇は内線と外線が離れ、独立した単位のようにになっている。文様区幅は142mm。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。S 8-52号土坑から1点検出された。(403-7)

軒平部17類 中心飾りが異なるだけで唐草、子葉は軒平部15類である。中心飾りは中央の分割線がなくなり、上部が大きい。脇は単線になる。被熱により燈変色しているため色調、胎土、焼成は不明。S 8-52号土坑から2点検出された。(403-8・9)

軒平部18類 中心飾りと子葉の一部のみが確認できる。中心飾りは中央の分割線がなく、下部が大きい。脇は重線である。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。S 8-52号土坑から1点検出された。(403-10)

軒平部19類 中心飾りと唐草2反転と子葉から構成される。中心飾りは三葉と上部に点珠が7つ配されている。唐草はいずれも上向きの重線で、内線は巻き込みが浅く、外線は巻き込みが深く、くびれが2か所にみられる。子葉は短く、くびれが1か所みられる。色調は黒灰色。胎土は明灰色。雲母を多量に含む。焼成は良好堅緻。S 8-52号土坑から1点検出された。(403-12)

軒丸部三つ巴文はC右の1種類のみである。

軒丸部11類 瓦当径71mm、内区径36mm。巴長は3分の1周、断面形はドーム状である。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。一部被熱により燈変色している。S 8-52号土坑から1点検出された。(404-2)

軒丸部連珠三つ巴文は10種類みられ、いずれもC右である。

軒丸部12類 瓦当径76mm、内区径28mm。珠文数11個。巴長は5分の2周強、断面形は三角形である。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。一部被熱により燈変色している。S 8-52号土坑から1点検出された。(404-3)

軒丸部13類 瓦当径80mm、内区径25mm。珠文数11個。巴長は3分の1周、断面形は三角形であ

る。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。一部被熱により燈変色している。S 8—52号土坑から1点検出された。(404—5)

軒丸部14類 瓦当径78mm, 内区径27mm。珠文数10個。巴長は2分の1周弱, 断面形は三角形である。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。一部被熱により燈変色している。S 8—52号土坑から1点検出された。(404—6)

軒丸部15類 瓦当径73mm, 内区径25mm。珠文数9個。巴長は5分の2周強, 断面形は三角形である。被熱により燈変色している。S 8—52号土坑から1点検出された。(404—7)

軒丸部16類 瓦当径77mm, 内区径25mm。珠文数9個。巴長は3分の1周, 断面形はドーム状である。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。一部被熱により燈変色している。S 8—52号土坑から1点検出された。(404—4)

軒丸部17類 瓦当径74mm, 内区径28mm。珠文数8個。巴長は5分の2周強, 断面形はドーム状である。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。一部被熱により燈変色している。S 8—52号土坑から1点検出された。(404—10)

軒丸部18類 瓦当径73mm, 内区径25mm。珠文数8個。巴長は5分の2周弱, 断面形はドーム状である。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。一部被熱により燈変色している。S 8—52号土坑から1点検出された。(404—11)

軒丸部19類 瓦当径79mm, 内区径25mm。珠文数8個。巴長は5分の2周強, 断面形はドーム状である。被熱により燈変色している。S 8—52号土坑から1点検出された。(404—12)

軒丸部20類 瓦当径75mm, 内区径23mm。珠文数8個。巴長は3分の1周強, 断面形はドーム状である。被熱により燈変色している。S 8—52号土坑から1点検出された。(404—9)

軒丸部21類 瓦当径89mm, 内区径18mm。珠文数8個。巴長は5分の2周強, 断面形は台形である。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。一部被熱により燈変色している。S 8—52号土坑から1点検出された。(404—8)

4. 丸瓦 (第405~408図)

丸瓦は4種類みられる。資料は幅と玉縁長が計測可能なものとした。すべての丸瓦は凸面に縦方向のへらなでがなされ、凹面では玉縁、側縁で2度、頭部で1度面取りがなされている。分類は法量(玉縁長など)、凹面の布袋痕、製作痕による。

1類 幅160mm, 玉縁長aは40mmで長めである。布袋痕は全体に刺し縫いが密に施され、刺し縫いの間から布目がみられる。斜めに抜き取り紐痕がみられるのが特徴である。405—2では、模骨痕が左側に凸レンズ状にみられ、回りは少し深くなっている。釘穴が径19mm, 肩から56mmに穿たれている。色調は灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅緻。U 4—3号土坑から1点検出された。(405—2)

2類 幅155mm, 玉縁長aは29mm以上である。布袋痕は全体に刺し縫いが密に施されている。

棒状圧痕は全体にみられ、先端が丸みを帯びている。模骨痕は側縁に接してみられる。釘穴が2か所みられ、径は16, 17mmと小さい。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。T 8—6号土坑から1点検出された。(405—1)

3類 全長300mm前後、幅150~160mm、玉縁長aは26mm以下と短い。布袋痕は全体に刺し縫いが密に施されている。押し潰されて不明瞭になる。棒状圧痕をもつ資料も多く、圧痕は全体にみられ、先端が平坦である。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。T 7—11号土坑、T 7—13号土坑、T 8—1号土坑、U 7—1号土坑から1点ずつ検出された。(406—1, 407—1)

4類 幅118mm、玉縁長a28mmである。玉縁の付け根に幅10mmの溝がある。凹面布袋痕は玉縁付近に刺し縫いが密に施され、体部では荒く施されている刺し縫いも観察できる。刺し縫いに太い紐が使われたために刺し縫いの単位が大きい。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。Q 7—6号土坑から2点、W 9—2号土坑から1点検出された。(406—2)

5類 全長280mm前後、幅140mm、玉縁長a18mm以下と短い。側縁の面取りの角度とがほとんどないのが特徴である。棒状圧痕が3~5本かならずみられ、深く施されている。布袋痕は刺し縫いが全体に密に施されている。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。被熱により燈変色した資料が多い。S 8—52号土坑から検出されている。(407—2, 408—1・2)

5. 平瓦 (第409図1・2)

平瓦は法量のわかるものを資料化し、2種類に分類した。平瓦は、凹面が丁寧に磨かれ狭端、側縁は面取りがなされている。凸面は軽く撫でられる程度で砂粒がみられる。狭端側には弓状の圧痕がみられる。狭端面、側面は丁寧に磨かれ、広端面のみに砂粒などが付着している。

1類 広端幅215mm、厚さ20mmと小型である。U 6—3号土坑から1点検出された。(409—2)

2類 全長272mm、広端幅248mm、狭端幅232mm、厚さ20mmと中型である。1点表採された。(409—1)

2種類ともに色調は灰色。胎土は内部が灰色、外側は明灰色。焼成は良好。

6. 棧瓦 (第409図3)

本資料の棧瓦は特殊なもので、切り込みがなく大型である。幅が300mm、厚さ30mm弧深28mmである。凹面は丁寧に磨きが施され、凸面は撫でられている。径12mmの釘穴が木口よりの中心に斜めに穿たれている。色調は黒灰色。胎土は明灰色。焼成は良好堅微。ローム盛土中より検出された。

7. 熨斗瓦 (第410図, 第411図1~7)

熨斗瓦は文様が7種類みられ、いずれも均整唐草文である。

- 1 類 中心飾りと二反転する唐草と子葉からなる。中心飾りは8の字状の中央に外側にくびれをもつ脇区からなり、唐草は巻き込みが小さく、子葉は上側にくびれをもち、湾曲する。1類は凹面に分割線が焼成前に刻まれ、焼成後に分割されている。1類は凹面に交差する櫛目があるかないかで細分でき、ある資料をA類、ない資料をB類とする。文学部地点ではB類のみ検出された。
- B類 中心飾りが3范型、右子葉1范型、左子葉1范型、左子葉が5范型が確認できた。中心飾りと左子葉が2范型対応できる。凹面には砂粒の付着があまりみられない。厚さ25~30mm、分割幅は140mm前後である。色調は灰色~暗灰色。胎土は内部が灰色、外側は明灰色。焼成は良好。(410-1~7)
- 2 類 1類と文様構成は同じであるが、中心飾りに点珠がみられ、子葉が長くなり、線が細めになり全体にシャープになっている。子葉のみ確認ができた。分割線は1類と同じである。凹面はへら磨きがなされている。分割幅は144mmである。色調は暗灰色。胎土は内部が灰色、外側は明灰色。焼成は良好。(410-8)
- 5 類 中心飾りに2反転する唐草と子葉2単位からなる。文様がすべてつながっている。中心飾りは、中央に円形が2単位、脇区は下部でつながり、上部でも先端が接している。子葉は山が2つで先端は上を向いている。分割線は凸面に刻まれている。凹凸面ともにへら磨きがされている。厚さ25~30mm、分割幅133mmである。色調は黒灰色。胎土は内部が灰色、外側は明灰色。焼成は良好堅緻。被熱により燈変色した資料が多い。S 8-53号土坑から26点検出された。(410-9)
- 7 類 中心飾りと波打つ唐草に子葉が2か所につき。中心飾りは5枚の花弁をもつ花を象ったように5か所がくびれ、内部に丸が上下に配される。唐草は完全につながり、葉の形をした子葉が上下に配されている。分割線は凸面に刻まれている。凹凸面ともにへら磨きがされている。色調は黒灰色。胎土は内部が灰色、外側は明灰色。焼成は良好堅緻。被熱により燈変色した資料が多い。S 8-53号土坑から28点検出された。(410-10)
- 8 類 陽刻によっても文様があらわされている。中心飾りは無剣梅鉢である。唐草は4反転確認できる。唐草は重線で線が細くシャープである。第3唐草が三か月状で、外線に突起がみられる。4は凹面に13条の櫛目が施されている。凸面は軽く撫でられ、凹面は砂粒が付着している。厚さは4が38mm、5が32mmである。色調は暗灰色。胎土は内部が灰色、外側は明灰色。焼成は良好。U 4-3号土坑(411-4)から1点、江戸第一面中(411-5)から1点が検出され、4点が表採された。(411-4・5)
- 9 類 唐草のみ残存している。3反転まで確認できた。唐草は巻き込みが深く先端は丸みを帯びている。厚さは26~28mmである。色調は暗灰色。胎土は内部が灰色、外側は明灰色。焼成は良好。U 4-3号土坑(411-1)から1点が検出され、1点が表採(411-2)された。(411-1・2)

- 10類 中心飾りのみ残存している。軸のない梅鉢であり、中心、花卉ともに張りつけられている。文様面が50mmと厚いが、凹面が湾曲し細くなり、厚さが35mmになる。両面ともに撫でられている。分割線は凹面に深く刻まれている。分割幅は180mmである。色調は暗灰色。胎土は内部が灰色、外側は明灰色。焼成は良好。1点表採された。(411-6)
- 11類 陽刻によって文様があらわされている。唐草が3反転確認できる。唐草は巻き込みが少なく、肉厚で稜線があり、断面形は三角形になる。文様面が32mmと厚く、内側では22mmと薄くなる。両面ともに撫でられている。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。U 6-3号土坑から1点検出された。(411-7)
- 12類 無文の熨斗瓦である。両面とも磨きが施されている。分割線は凸面に刻まれている。厚さは36mmである。色調は黒灰色。胎土は内部が灰色、外側は明灰色。焼成は良好堅緻。被熱により燈変色した資料が多い。S 8-52号土坑から10点検出された。(411-3)

8. 特殊瓦 (第411図8~13)

平面形が長方形で、断面形は側縁近くで屈曲し細くなっている。側縁は平坦に面取りがされている。凸面は丁寧に磨かれている。中央に溝がみられる。片方の木口には凹面側に突起をもち、凸面溝と噛み合わせられるようになっている。平瓦として使用されたと思われる。幅は194mm、溝までの長さが110mm、復元長は230mm、厚さ18mmである。13は斜めに切断され、切断部に突起がある。寄棟造りの下り棟に接する部分に使用された筋違と呼ばれる道具瓦である。色調は黒灰色~暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。ただし、6のみ胎土が内部で暗灰色、外側で黄灰色。焼成は不良軟質。

A: 凹面は丁寧に磨かれた資料 Q 7-6号土坑から9点(411-8・11・12・13)、U 8-33号土坑、江戸第一面中から1点ずつ、計11点検出された。

B: 全体に布目が残る資料 W 9-1号土坑(411-9)、U 4-3号土坑(411-10)から1点ずつ、計2点。検出された。

9. 道具瓦 (第412図2~4)

輪違い瓦、面戸瓦がみられる。

輪違い(412-3)は棟込みの瓦の一種である。平面形は台形になる。丸瓦を切断して造られたため、凹面に布目がみられ、刺し縫いが全体に密に施されている。切断は焼成前になされ、切断面は奇麗に削られている。凸面は縦方向にへらけずりされている。色調は灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。R10-1号土坑から検出された。

面戸瓦は丸瓦と平瓦が棟に接する部分に使用される。412-2・4は丸瓦を斜めに切断して造られている。寄棟造りの下り棟に使用され「カツオブシメント」と呼ばれている。凹面は切断部にも面取りが施され、切断面は奇麗に削られている。布袋痕は刺し縫いが全体に施されている。縦

幅74mmである。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。Q 7-6号土坑から10点検出された。

10. 鬼瓦 (第412図5・6)

鬼瓦は2点資料化した。412-6は足部の残存であり、表面は突線により文様が表現されているが欠落が激しい。裏面は製作痕がよく残っているが、周縁は内外ともに面取りされている。412-5は周縁の一部である。表面は丁寧に磨かれ、裏面はV字状にくぼんでいる。周縁の幅は25mmである。2点ともに色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。412-5はU 6-3号土坑から検出され、412-6は表採された。

11. 海鼠瓦 (第412図1)

1類 屈曲がなく板状で、正方形である。辺の中央にくぼみがあり、釘で瓦を固定するために使用されていた。表面はへら磨きされ縁が面取りされていて、辺にそって漆喰痕が带状に残っている。裏面は軽くなでられている。色調は暗灰色。胎土は明灰色。焼成は良好。U 8-2号土坑から検出された。(412-1)

12. 刻印 (第413図)

丸瓦に4種類、平瓦に1種類、棧瓦に7種類、軒棧瓦に2種類みられる。

丸瓦(413-1~4)は凸面玉縁よりの中央に捺されている。1は「丸に一」2は「12弁の菊花」3・4は「丸に■」。

平瓦(413-5・6・7)は狭端面中央に捺されている。5は「丸に一」、6は陽刻の「丸に平」、7は「丸に♥」。

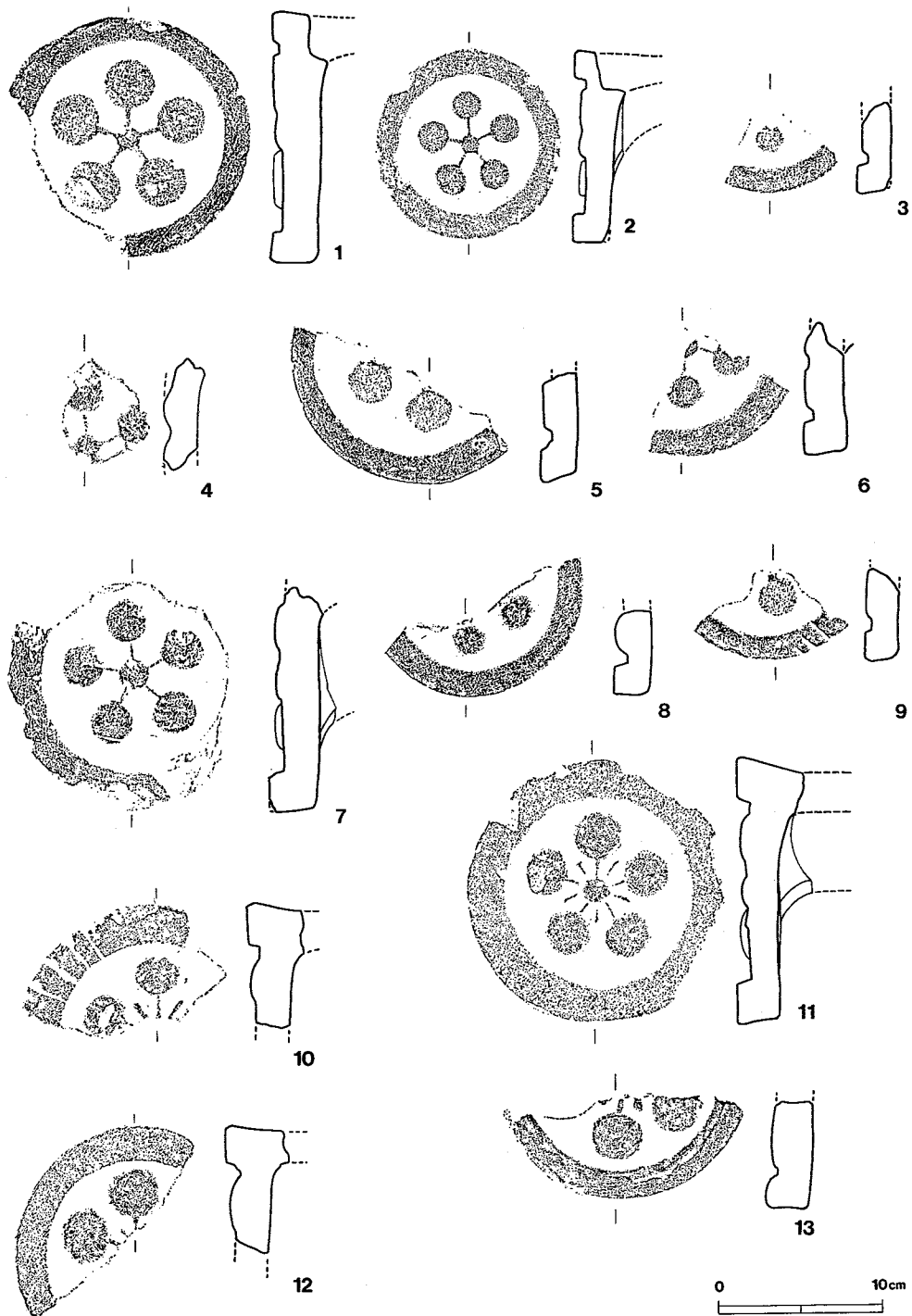
棧瓦(413-8~13)は平部切り込み側の中央に捺されている。8・9は「山に庄」、10は「山に庄七」、11は「丸に庄」、12は「四角に清」、13は「丸に■」。

軒棧瓦(413-14・15)は右周縁に捺されている。14は「山に庄七」、15は「丸に七」。

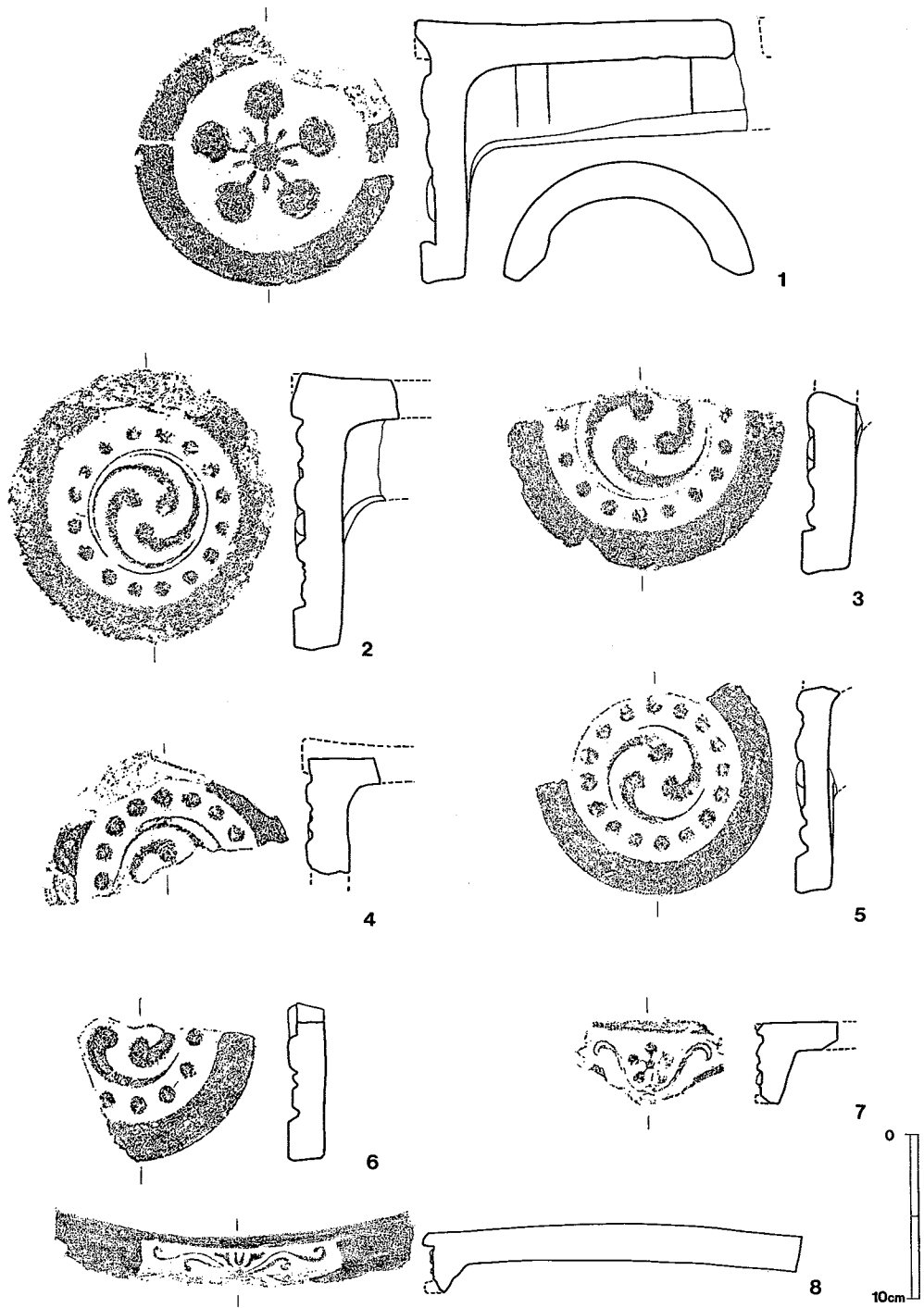
5・8・9・14は被熱により燈変色している。

T 8-6号土坑から1・5、U 4-1号土坑から2、T 7-1号土坑から6、U 7-1号土坑から7、S 8-52号土坑から8・13・15が検出された。3・4・9~14は表採された。

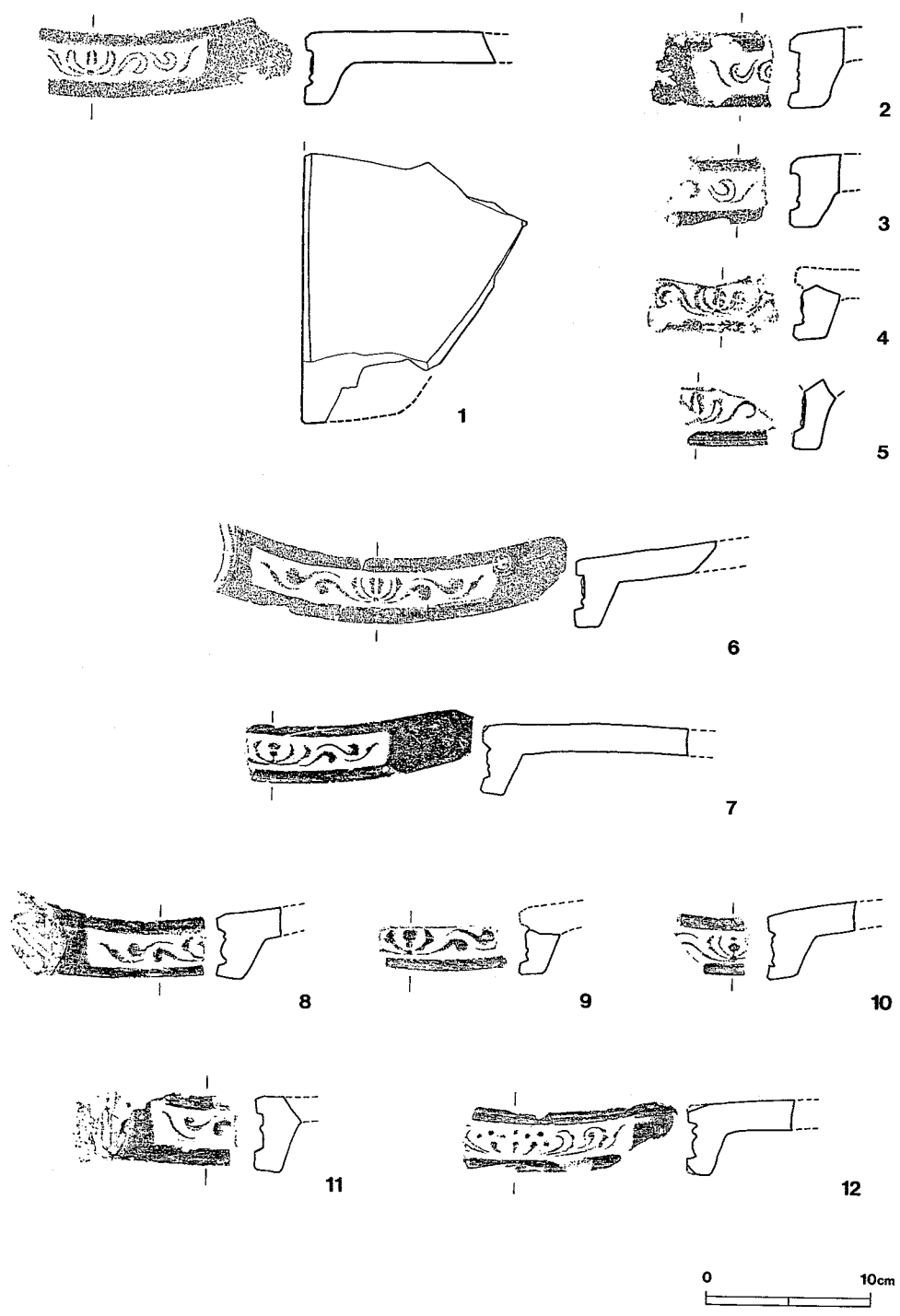
(加藤 晃)



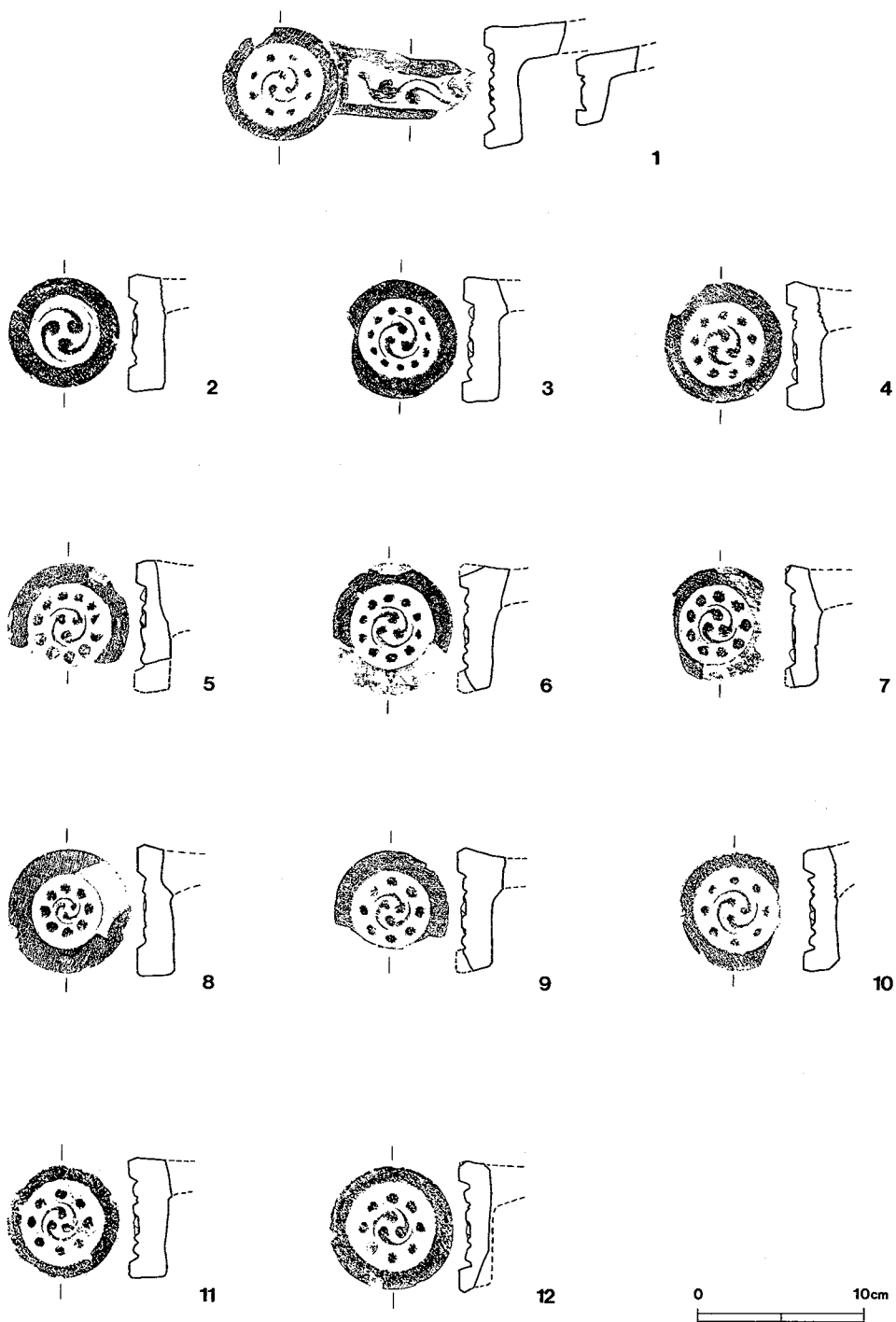
第401图 瓦(1)



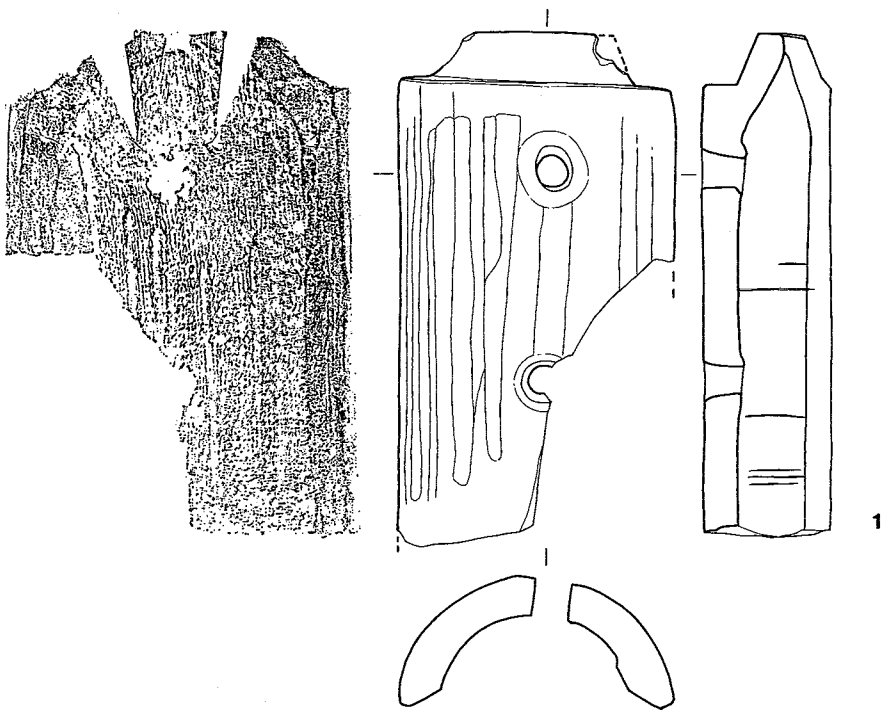
第402図 瓦(2)



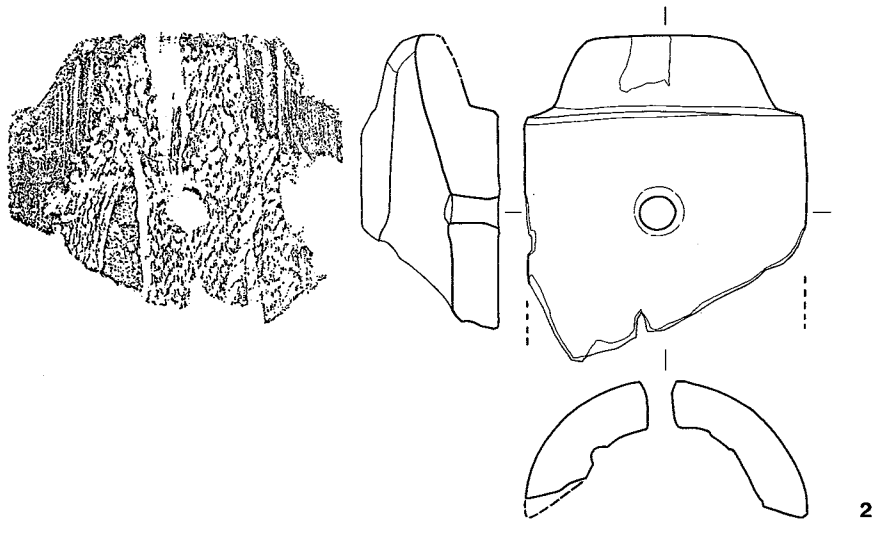
第403图 瓦(3)



第404図 瓦(4)



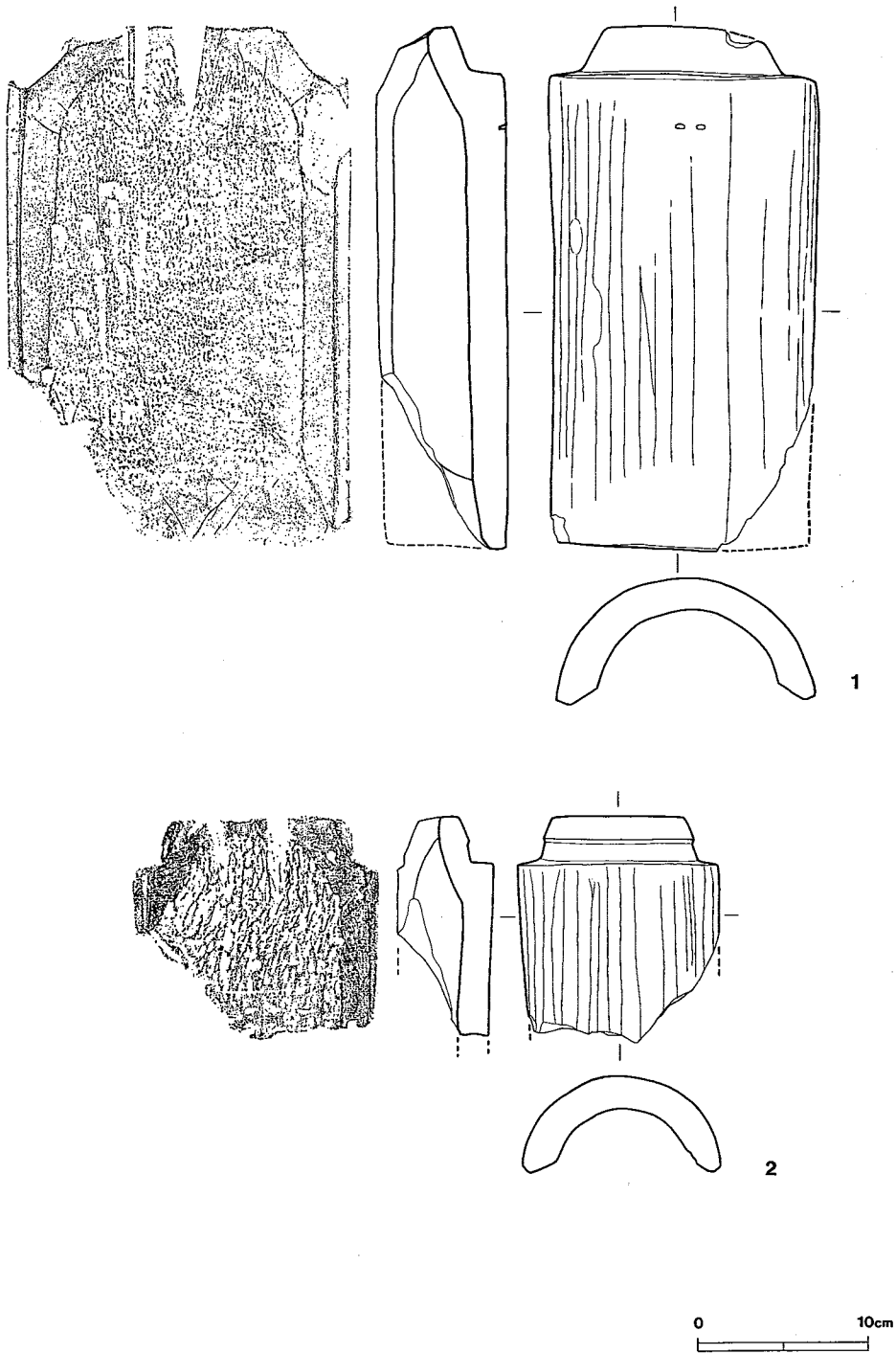
1



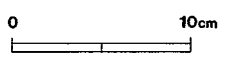
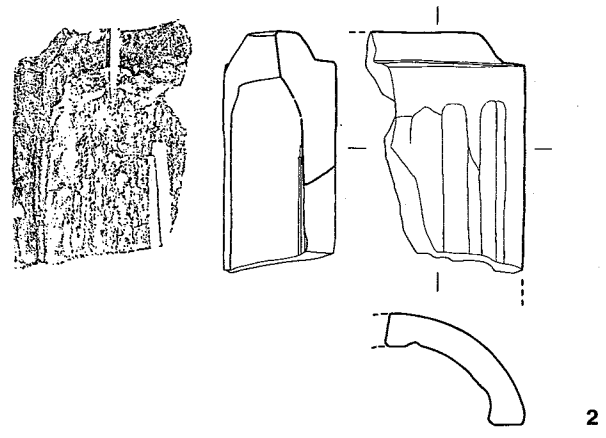
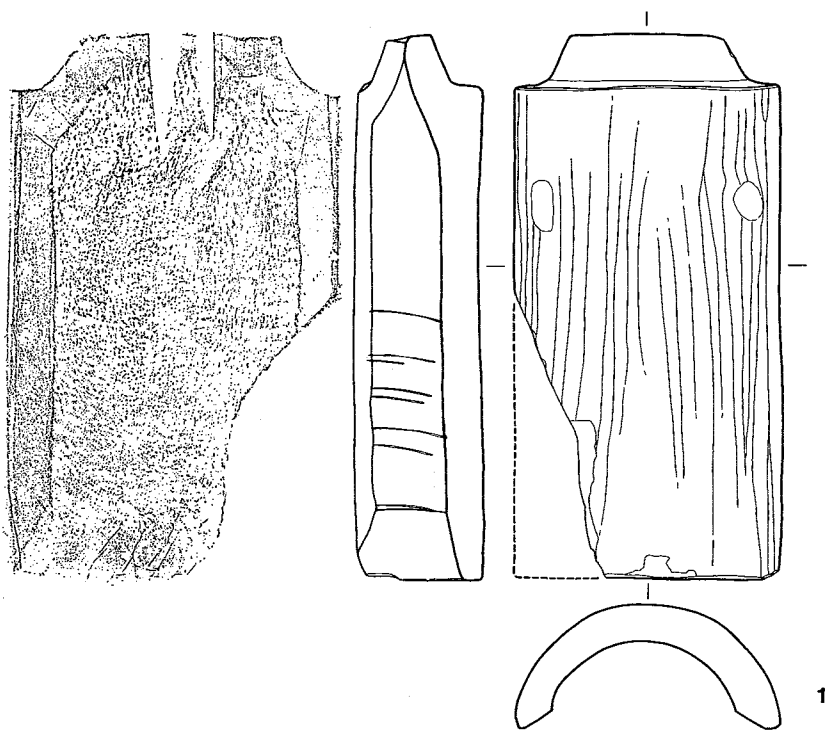
2

0 10cm

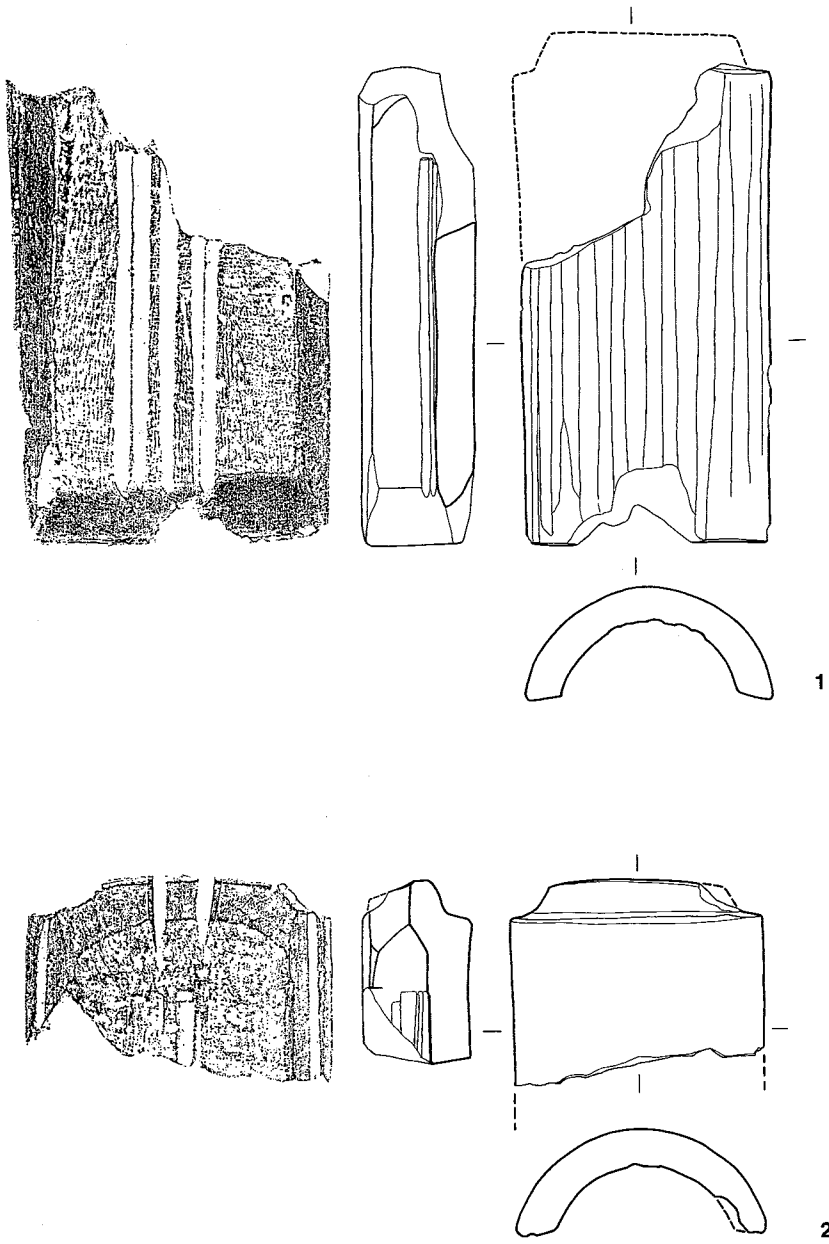
第405図 瓦(5)



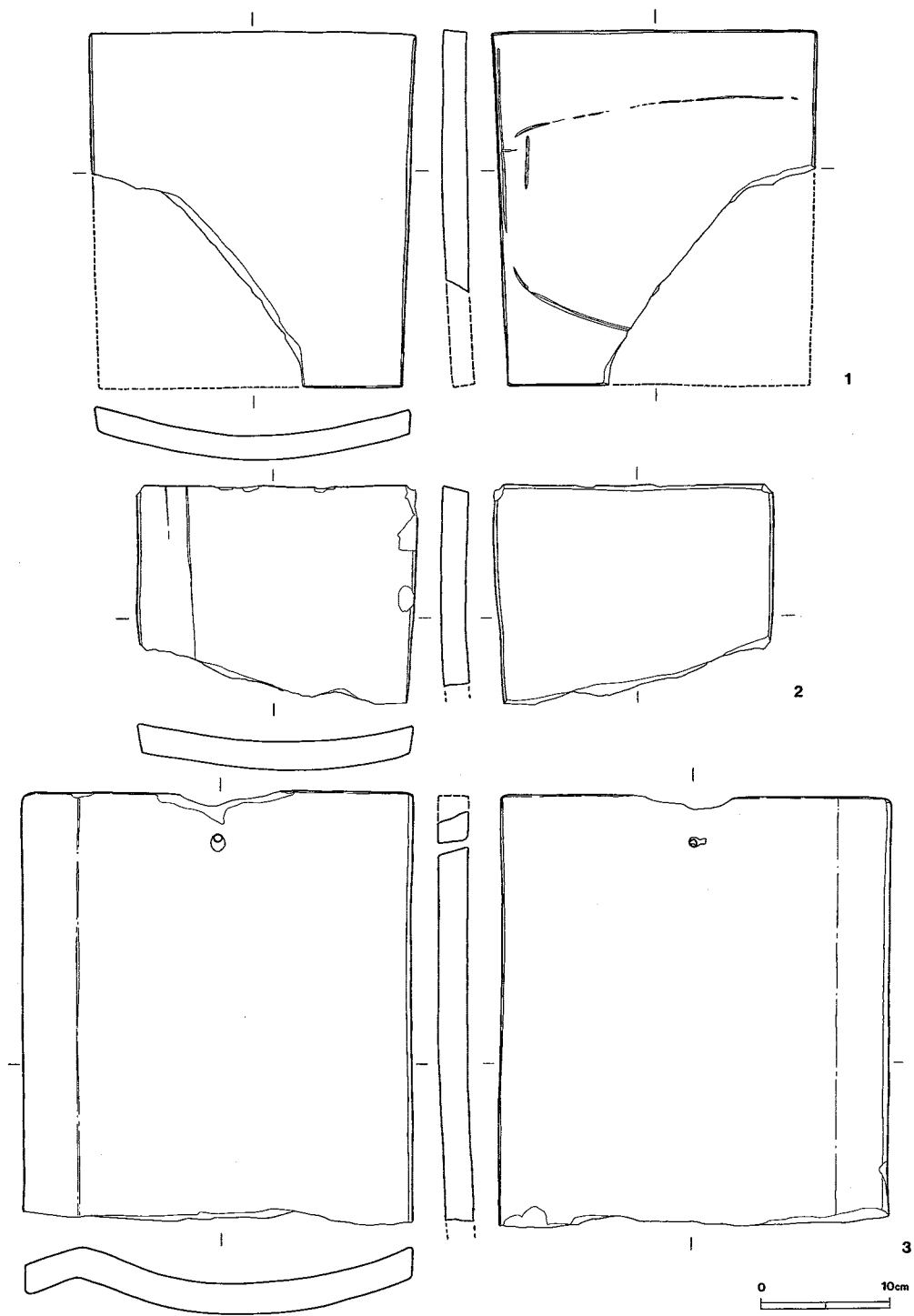
第406図 瓦(6)



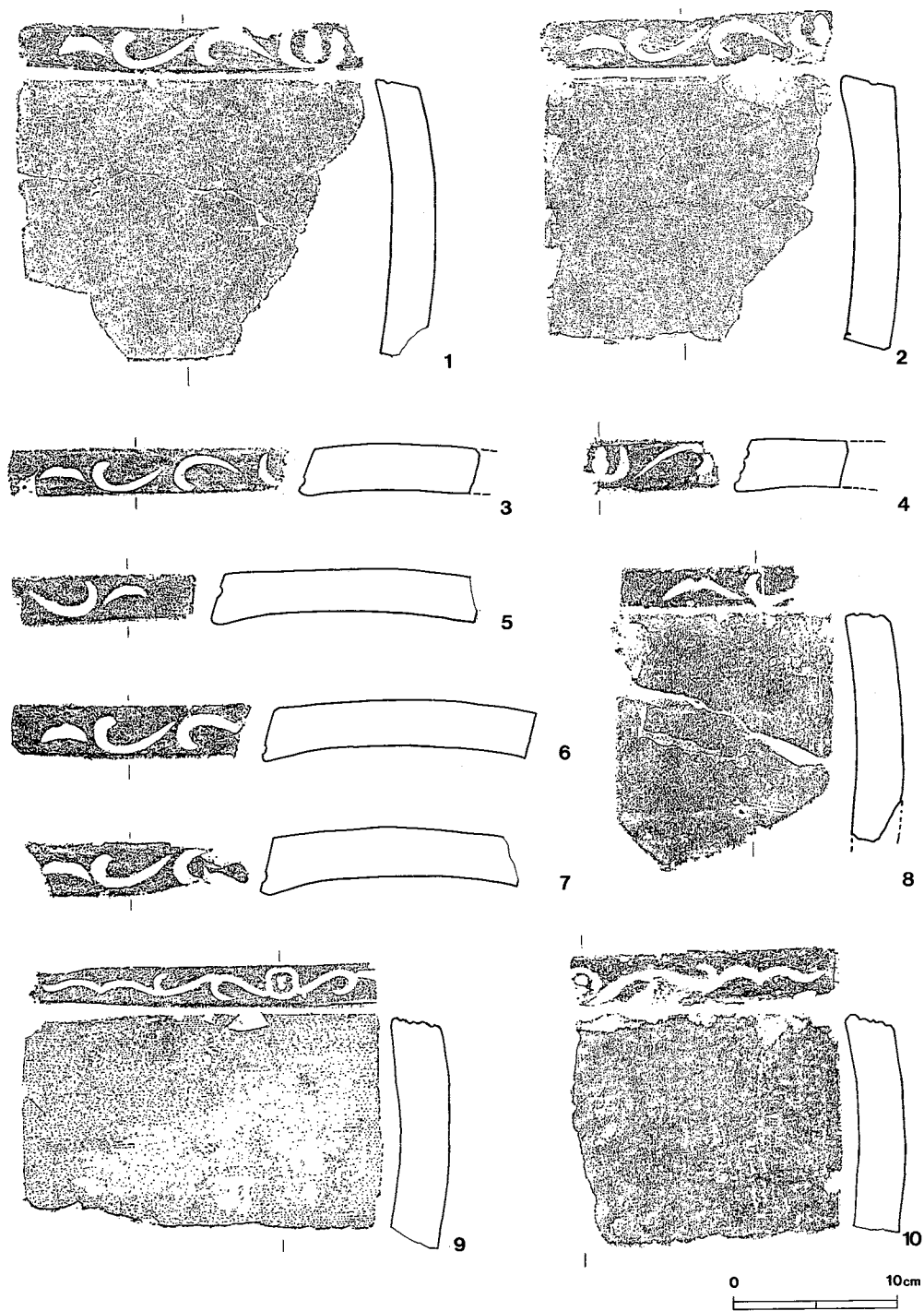
第407図 瓦(7)



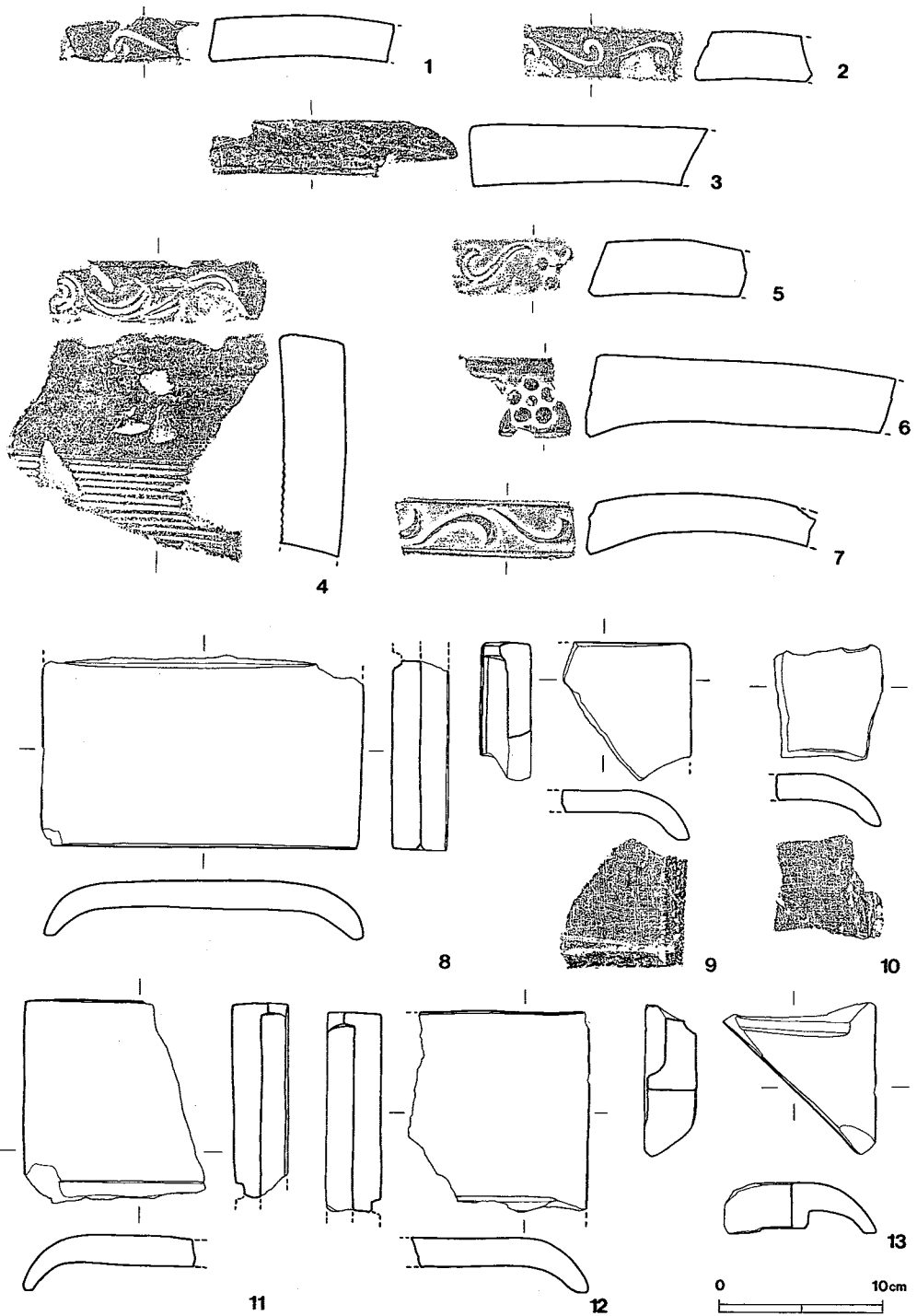
第408図 瓦(8)



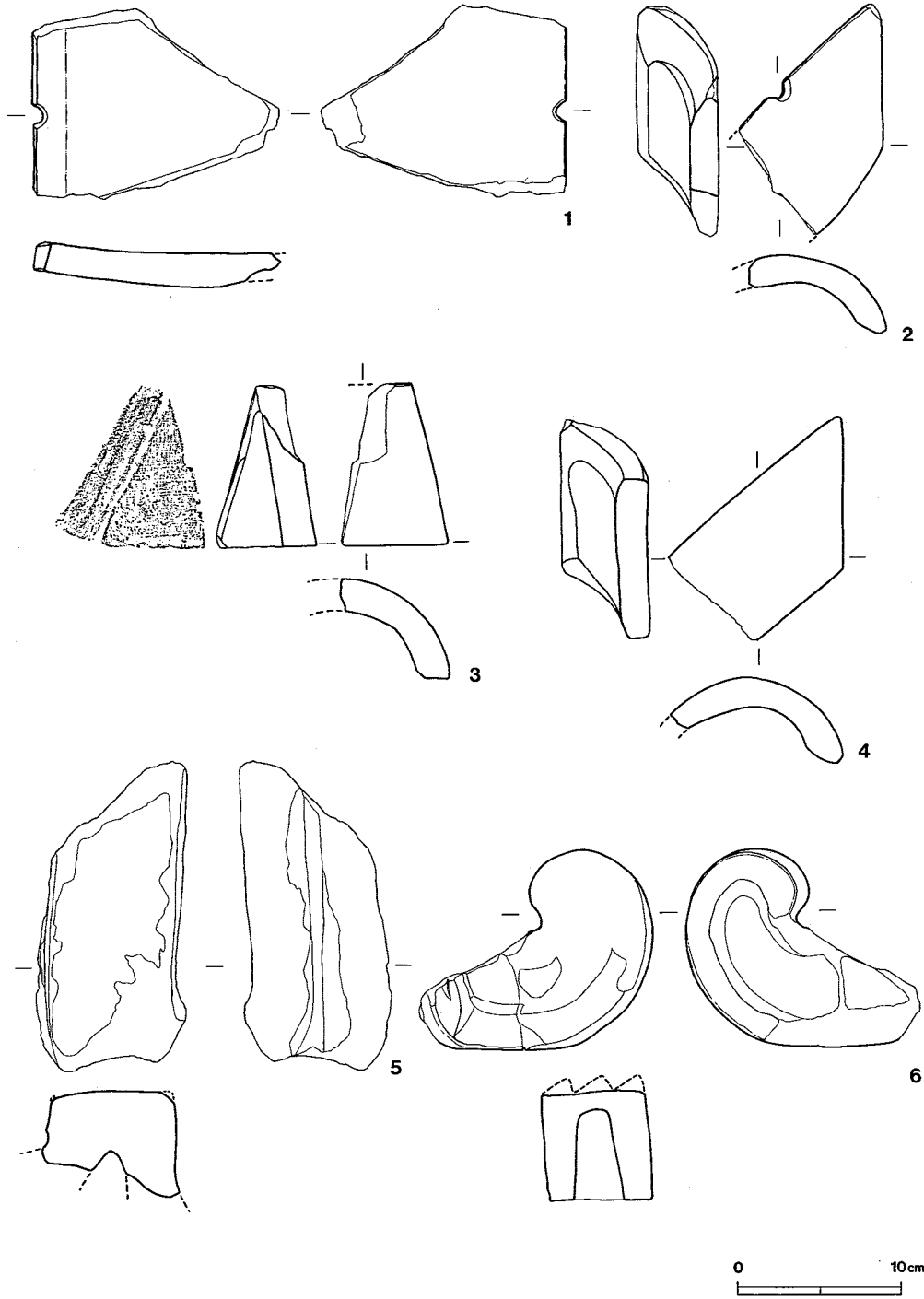
第409图 瓦(9)



第410図 瓦(10)



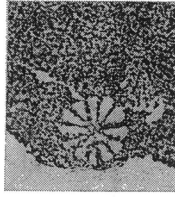
第411图 瓦(11)



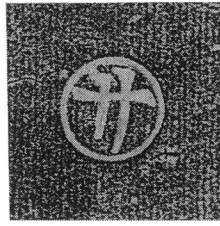
第412図 瓦(12)



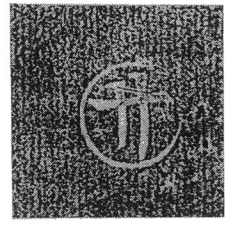
1



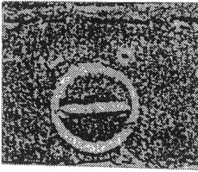
2



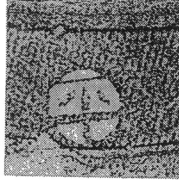
3



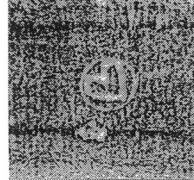
4



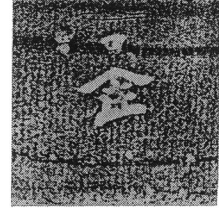
5



6



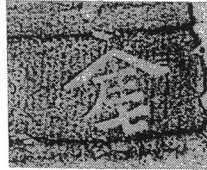
7



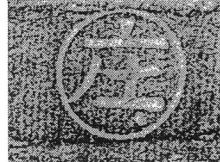
8



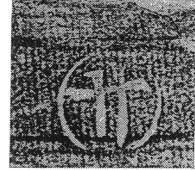
9



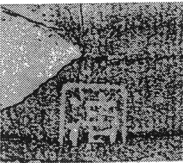
10



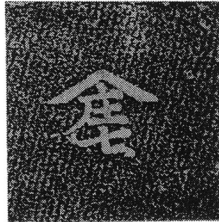
11



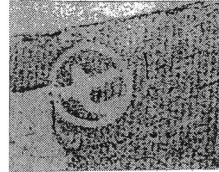
12



13



14



15

第413図 瓦の刻印

報告篇第四章 江戸時代の調査 II

表19 軒丸瓦梅鉢紋計測値

図版 番号	遺 構	分 類	瓦 当		文様 区径	周 縁 ・ 面 取 り				花 弁 径	中 心 径	軸		剣	
			径	厚		幅	高	内	外			長	幅	長	幅
1-2	Q7-6号土坑	無剣梅鉢1b	115	25	82	17	8	△	○	22	15	8	4	*	*
1-3	Q8-10号土坑	無剣梅鉢1c	<u>115</u>	21	81	17	8	△	○	*	*	*	*	*	*
1-9	表採	無剣梅鉢1d	<u>130</u>	21	<u>94</u>	18	5	△	○	27	*	*	7	*	*
1-6	江戸第一面中	無剣梅鉢1e	<u>141</u>	26	<u>101</u>	20	7	△	○	28	*	8	4	*	*
1-1	江戸第一面中	無剣梅鉢1f	153	30	115	19	7	△	○	35	20	9	7	*	*
1-5	江戸第一面中	無剣梅鉢1g	<u>163</u>	23	<u>123</u>	20	7	△	○	31	*	*	*	*	*
1-4	T6-7号土坑	無剣梅鉢3a	*	*	*	*	*	*	*	*	21	11	5	*	*
1-7	U4-3号土坑	無剣梅鉢3b	<u>164</u>	31	118	23	8	△	○	22	9	4	*	*	*
1-8	W9-2号土坑	無剣梅鉢3c	<u>137</u>	24	101	18	9	△	○	*	*	*	*	*	*
2-1	U7-1号土坑	剣梅鉢2a	162	29	112	25	9	△	○	30	21	11	5	12	7
1-12	表採	剣梅鉢2c	163	28	112	25	9	△	○	35	*	*	6	*	5
1-11	表採	剣梅鉢2d	161	26	110	25	8	△	○	33	22	9	3	13	6
1-10	表採	剣梅鉢2n	<u>164</u>	28	<u>114</u>	25	8	△	○	28	*	*	4	*	7
1-13	表採	剣梅鉢2o	<u>155</u>	29	<u>115</u>	20	8	△	○	35	*	*	6	*	9

表20 軒丸瓦連珠三つ巴文計測値

分 類	図版 番号	遺 構	瓦 当		文様 区径	内 区 径	周 縁 ・ 面 取 り				珠 文		巴	
			径	厚			幅	高	内	外	径	数	長	断 面
A右1類	2-2	U4-3号土坑	170	31	116	75	27	7	△	○	13	16	0.58	A
A右2類	2-3	W9-2号土坑	<u>171</u>	32	119	82	26	6	△	○	13	16	0.48	A
C右3類	2-4	T7-12号土坑	<u>154</u>	29	114	74	20	6	△	○	14	16	*	A
C右4類	2-5	S8-52号土坑	152	23	108	60	22	7	×	○	14	16	0.42	B
C右5類	2-6	W9-1号土坑	<u>158</u>	23	110	66	24	7	×	○	14	14	0.42	B

表21 軒平瓦計測値

分類	図版番号	遺構	瓦 当				文様区		周 縁 (面取り)								額			
			上弧幅	下弧幅	厚さ	弧深	幅	厚さ	上	内	下	内	左	内	右	内	高	上	下	厚さ
2a	3-4	U7-1号土坑	*	*	*	*	*	*	*	*	9	×	*	*	*	*	6	30	20	26
2f	3-1	Q8-3号土坑	*	*	44	*	142	22	11	×	11	×	*	*	*	*	5	29	15	25
2g	3-2	T6-1号土坑	*	*	46	*	*	26	13	×	9	×	*	*	*	*	6	33	25	28
4	3-3	Q8-10号土坑	*	*	43	*	*	23	10	×	10	×	*	*	*	*	6	28	18	22
4	3-5	S8-2号pit	*	*	*	*	*	*	*	*	10	×	*	*	*	*	6			
5	2-7	U7-1号土坑	*	*	48	*	*	36	7	8	5	△	*	*	*	*	4	26	15	30
6	2-8	U6-3号土坑	226	220	37	18	125	21	8	×	8	×	54	×	47	×	6	27	12	17

表22 軒棧瓦平部計測値

分類	図版番号	遺構	瓦 当				文様区		周 縁 (面取り)								額			
			上弧幅	下弧幅	厚さ	弧深	幅	厚さ	上	内	下	内	左	内	右	内	高	上	下	厚さ
13	3-11	T8-1号土坑	*	*	45	*	*	23	10	×	12	×	17	×	*	*	5	26	17	28
14	4-1	表採	*	*	42	*	*	21	12	×	9	×	10	×	*	*	6	21	15	29
15	3-6	S8-52号土坑	*	240	42	*	150	21	10	×	11	×	11	×	45	×	5	27	15	28
16	3-7	S8-52号土坑	*	*	40	*	142	22	8	×	10	×	*	*	49	×	5	25	15	24
17	3-8	S8-52号土坑	*	*	38	*	*	21	10	×	7	×	14	×	*	*	6	31	15	25
18	3-9	S8-52号土坑	*	*	*	*	*	*	*	*	8	×	*	*	*	*	6	*	15	*
19	3-10	S8-52号土坑	*	*	40	*	*	21	9	×	10	×	*	*	*	*	5	30	19	27
20	3-12	S8-52号土坑	*	*	42	*	146	22	12	×	10	×	*	*	*	*	6	25	15	25

報告篇第四章 江戸時代の調査 II

表23 軒棧瓦軒丸部計測値

分類	図版 番号	遺 構	瓦 当		文様 区径	内 区 径	周縁・面取り				珠 文		巴	
			径	厚			幅	高	内	外	径	数	長	断面
11C右	4-2	S8-52号土坑	71	22	43	36	14	5	×	○			0.33	A
軒平部14	4-1	表採	74	23	54	24	10	6	△	○	8	8	0.33	A
12C右	4-3	S8-52号土坑	76	23	49	28	13	6	△	○	8	11	0.44	B
13C右	4-5	S8-52号土坑	80	21	52	25	14	6	△	○	9	11	0.33	B
14C右	4-6	S8-52号土坑	78	21	52	27	13	6	△	○	8	10	0.46	B
15C右	4-7	S8-52号土坑	73	20	51	25	11	6	△	○	9	9	0.42	B
16C右	4-4	S8-52号土坑	77	23	51	25	13	6	△	○	8	9	0.33	A
17C右	4-10	S8-52号土坑	74	22	50	28	12	7	△	○	8	8	0.42	A
18C右	4-11	S8-52号土坑	73	23	51	25	11	6	△	○	8	8	0.38	A
19C右	4-12	S8-52号土坑	79	*	54	25	13	7	△	○	8	8	0.42	A
20C右	4-9	S8-52号土坑	75	22	46	23	14	6	△	○	8	8	0.36	A
21C右	4-8	S8-52号土坑	89	22	46	18	17	5	△	○	8	8	0.42	C

表24 丸瓦計測値

分類	図版 番号	遺 構	全長	体長	幅	高 さ	玉縁長		玉縁高		玉縁幅		側 縁		釘 穴		釘 穴	
							b	c	a	b	a	b	左	右	距離	径	距離	径
1	5-2	U4-3号土坑	*	*	160	76	40	43	44	60	85	127	33	34	56	19		
2	5-1	T8-6号土坑	*	*	155	73	29	29	40	53	85	113	30	30	50	17	166	16
3	6-1	T7-13号土坑	306	278	160	75	26	28	44	54	91	120	32	33				
3	7-1	T7-11号土坑	306	277	149	73	26	29	43	55	86	120	34	32				
4	8-1	S8-52号井戸	*	*	262	140	64	*	*	*	*	5	14					
4	8-2	S8-52号井戸	*	*	142	59	18	21	39	47	99	125	10	9				
4	7-2	S8-52号井戸	*	*	*	72	16	17	41	51	*	*	6					
5	6-2	Q7-6号土坑	*	*	118	56	28	29	36	43	76	94	25	31				

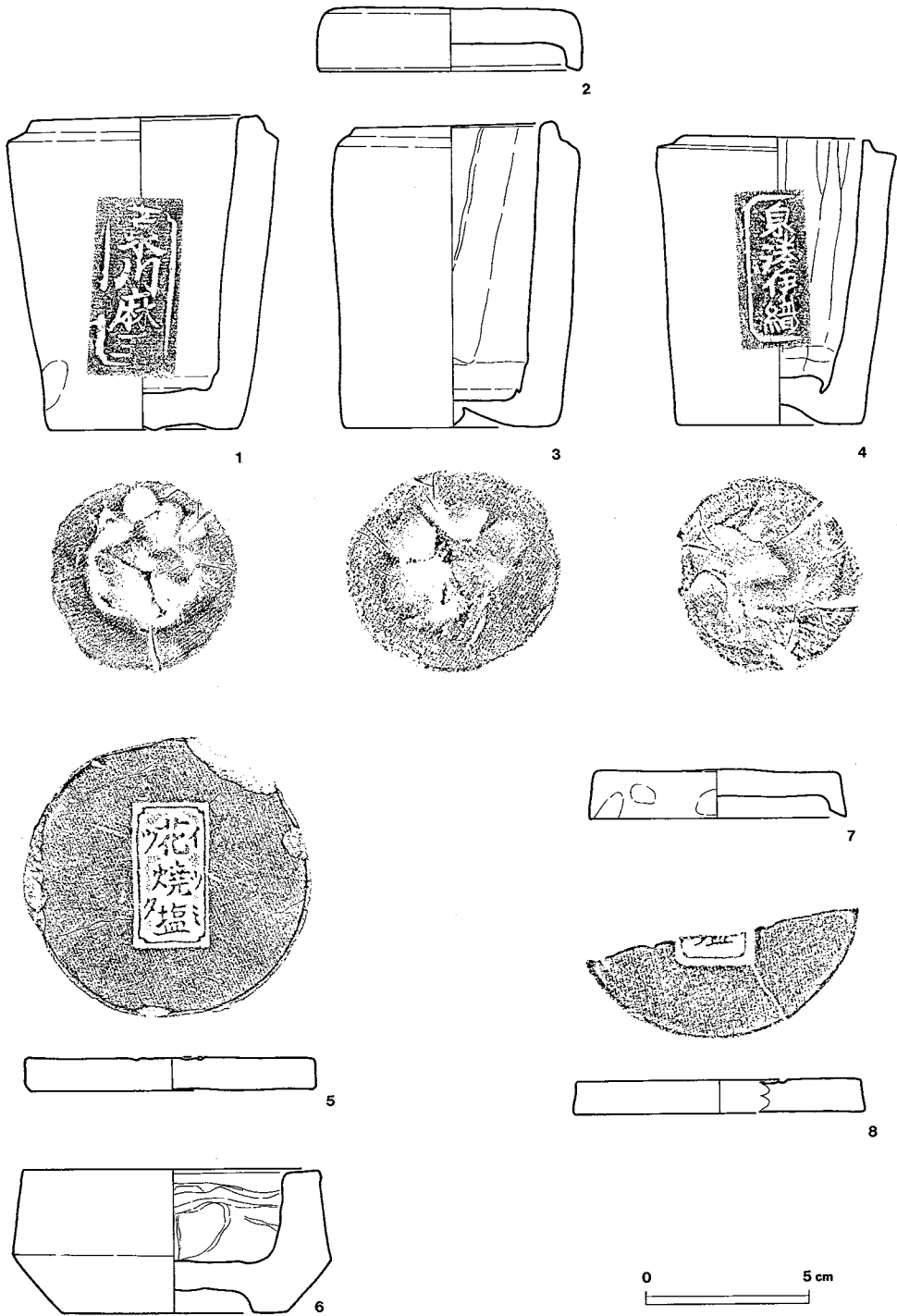
(4) 焼塩壺とその他の容器

本調査地区では焼塩壺の身が三个体、蓋が二个体出土している。第414図1はT 8—9号土坑, 同2・3はU 6—3号土坑出土で身と蓋が得られている。同4はトレンチを拡張している際に検出されたもので、遺構に伴うものではないようである。同7はT 7—13号土坑出土である。すべて「蓋掛リノアルモノ」に属する。この1～4の遺物は胎土、色調でよく似ている。すべて赤褐色を呈し近似した色調を呈すると同時に、雲母と白色微粒子が胎土に混入されていた。

1は「泉川麻玉」の銘をもつので、完形である。銘の枠は二段角切りの長方形となると思うが左側の枠は中程で途切れるようである。あたかも、「泉州麻生」銘の外側長方形・内側二段角切りの枠から内側の枠が独立したような変化をしめしている。口径6.8cm, 底径5.7cm, 最大径8.3cm, 器高9.6cmとなる。ヨコナデされている体部外面を観察すると、底から右回りに上がっている接合痕が見られる(図版36—11参照)。恐らく、型に粘土紐を巻上げているのであろう。粘土板を巻き付けるのとは別のやり方の例となる。内面には刺し縫いが縦に密に施された布痕が観察できる。底部は粘土栓を入れて工具で押す(粘土栓の周辺が捲くれ上がっている)一方、外から筒の端部を指頭で栓に向かってなでつけている。その上に、少し粘土を足し指頭で押しつけている。中にいれた粘土栓を工具による圧着のみで底部を作る「泉州麻生」銘焼塩壺とは違う方法で底部が作られているのである。粘土栓自体を器体に馴染ませるように指頭でなでつける「御壺塩師界湊伊織」銘焼塩壺(第269図3)とも少し違うが、技法的連続性はこの「御壺塩師界湊伊織」銘焼塩壺側に見出すべきと考える。換言すれば、「御壺塩師界湊伊織」銘焼塩壺(第269図3)の底部の作り方が「泉川麻玉」の銘焼塩壺の底部の作り方に関して、技法的に起源となるものであろう。その変容した段階が当例であろうと推定している。

3は口径6.1cm, 底部6.5cm, 最大径7.5cm, 器高9.6cmとなる。器表面は剝落が激しい。銘は判読できない。内面には刺し縫いが縦に密に施された布痕が観察できると同時に、粘土板の合わせ目が見え、はっきりと見える。底部は粘土栓を入れて工具で押す(粘土栓の周辺が捲くれ上がっている)一方、外から筒の端部を指頭で栓に向かってなでつけ、その上に、少しそこから粘土を足し指頭で押しつけている点で1の例と似ている。蓋(2)は口縁部の一部を欠くがほぼ完形で、口径8.1cm, 器高2.0cmとなる。天井部から口縁部にかけてロクロ(回転)ナデが施され、天井部から側面への移行する端部は稜を形成せず丸みを持ち、断面形は逆凹の字状だが7とは少し違うことになる。内面から口縁部にかけて、布の圧痕がついている。

7はT 7—13号土坑からは単体で出土した焼塩壺の蓋である。口径7.9cm, 器高1.5cmで、明褐色の色調を呈し、2に比してやや明るい色調に感じられたが、やはり雲母、白色状粒子が胎土に含まれている点では1～4例と共通している。断面形は逆凹の字状で、天井部は平坦で、端は稜をなしている。板目状の圧痕がみられ、側面はロクロ(回転)ナデと指頭圧痕が見られる。内面には布の圧痕が残っているが、一部ロクロ(回転)ナデで消えている。



第414図 焼塩壺とその他の容器

4は「泉湊伊織」銘をもつ。口径5.7cm、底部5.7cm、最大径7.3cm、器高8.9cmで、内面には、やはり刺し縫いが縦に密に施された布痕を残している。底の作り方は、粘土栓を入れた後、外側から指頭でなでつけているのであろう。色調は赤褐色で、胎土には雲母が含まれている。底部の作り方は1・3例と似ているが粘土が外から付け足されていないように見える。

第414図5・6・8は渡辺 誠氏によって花塩の容器とされているものである(渡辺1985a)。5・6はU 4-3号土坑よりセットで出土している。この身と蓋は明褐色の色調を呈し、胎土には雲母を含んでいる。蓋は平坦な円板状の形態を呈し、縁が一部欠けているが、口径8.8cm、器厚1.0cmで、天井内面に布目を残し、外面は平滑に仕上げられている。円板端部は面取りされている。「イツミ 花焼塩 ツタ」の銘が見られ、文字は突線で表現されていて、さらにこの銘は二段角切りの長方形の突線の枠で縁取られている。枠が二段角切りの長方形を表出している点では「泉川麻玉」の銘枠と共通している。身は完形で体部やや下位に稜をもち、言わば算盤玉状の形態を呈している。口径14.1cm、底径5.8cm、器高4.4cm、最大径9.1cmとなる。体部内面には布袋の痕があり、身は型作りによって形成されていることがわかる。外面は平滑に仕上げられている。

T10-1号土坑からは花塩の容器とされているものの蓋の破片が検出された。形態、胎土、色調、調整等々U 4-3号土坑例と同じであるが、銘の一部である「塩」の字の土偏がつくりに対してやや下に来ている点でU 4-3号土坑例の銘と違っている。推定口径9.0cm、器厚1.0cmである。

以上の遺物のうち、4以外はみな一定の配列に並ぶ遺構からの出土しており花塩の容器は「泉川麻玉」の銘の焼塩壺と近い時期にあると推定される。他方、「泉州麻生」銘焼塩壺は出土していない。恐らく、時期差が絡むからであろうと推察している。

ここで、本遺跡—法学部4号館建設地区・文学部3号館建設地区—の焼塩壺の変遷について概括しておこう。便宜的にI、II a、II b、III a、III bしておく(II a期はさらに古・中・新と三つに細分している)。I期:「筒状ノモノ」(第269図1)で「天下一御壺師堺見など伊織」銘の可能性が高い。II a期:「蓋掛リノアルモノ」のうち「泉州麻生」銘焼塩壺に代表される時期で(E 7-5号土坑例→C 7-2号・C 7-3号土坑例→B 7-2号土坑例)と先に触れたように三細分して考えている。II a(古)期のE 7-5号土坑例では難波屋の「御壺師堺湊伊織」銘焼塩壺を伴うが、その後のC 7-2号・C 7-3号土坑例に代表されるII a(中)期(単独出土のB 3-3号・B10-2号・G 5-3号土坑例と攪乱出土例も含める)や、後出のII a(新)期のB 7-2号土坑例が難波屋のどの焼塩壺と平行関係になるかは本遺跡ではわからない。II b期:「蓋掛リノアルモノ」のうち「泉川麻玉」銘焼塩壺に代表される時期で花塩の容器(第414図5・6・8)も同時期と考えている。「泉湊伊織」銘焼塩壺(第414図4)もこの時期に含めている。因みに、本遺跡では出土していないが、「サカイ 泉州磨生 御塩所」銘焼塩壺は「泉湊伊織」銘焼塩壺と同時期と考えている。III a期:ロクロによって成形される容器によって占められるが、退化的な「蓋掛リノアルモノ」を伴い、ロクロによって成形される容器自体口唇部が複数の形態をもつ。E 7-3号土坑例を当てている。III b期:ロクロによって成形される容器のみでかつ口唇部形態が

単純な E 8—5 号土坑例 (E 7—7 号土坑例も同時期である) を後半つまり III b 期に考える次第である (註: 引用文献は研究篇大塚論文を参照して頂きたい)。 (大塚 達朗)

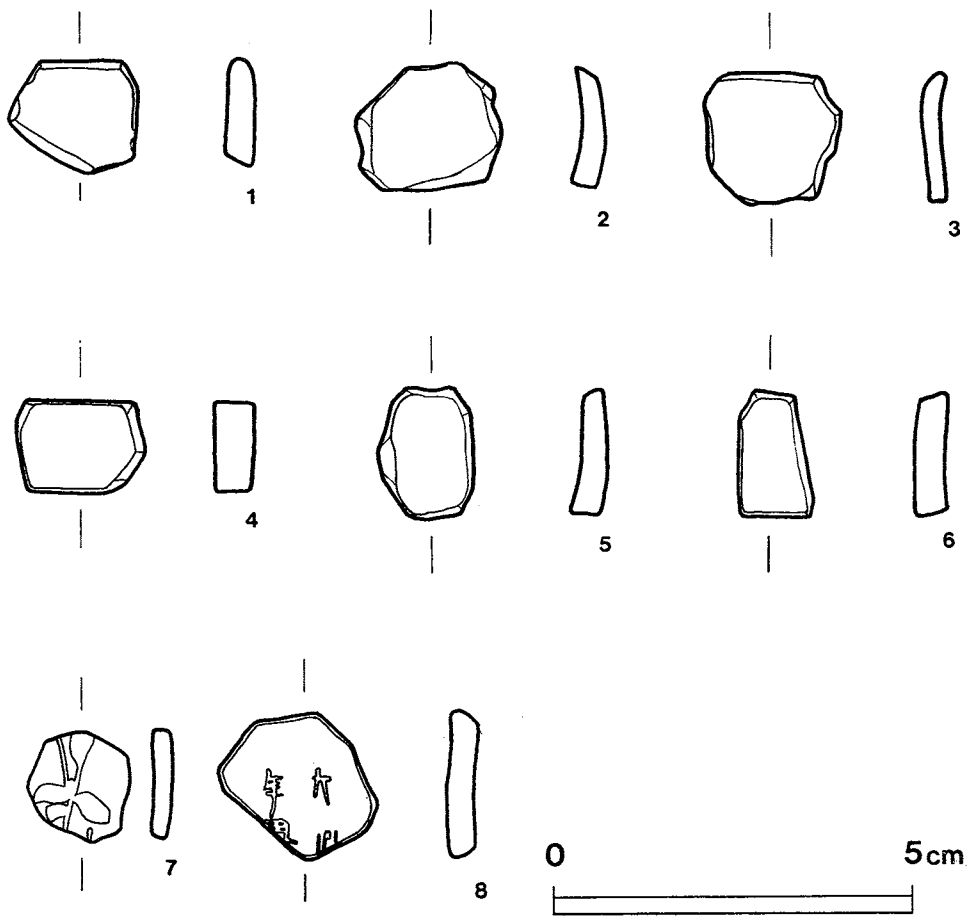
(5) 玩具類

本項では遺構から出土した、陶磁器類の玩具類を対象とする。(第415図)

本地区においては磁器の転用品が 8 点出土したのみである。いずれも小形で、周囲を打ち欠き平滑に調整しており、「おはじき」として利用したものであろう。

第415図 1 は径 1.7cm, 厚 0.4cm。染付の口縁部を転用している。U 6—3 号土坑出土。2 は径 1.9cm, 厚 0.3cm。染付皿を転用している。草文が見られる。T 7—13 号土坑出土。3 は径 1.8cm, 厚 0.3cm。染付皿の口縁部を転用している。草文が見られる。T 7—13 号土坑出土。4 はやや楕円形で径 1.8×1.3cm, 厚 0.5cm。染付のおそらく底部を転用している。T 7—13 号土坑出土。5 はやや楕円形で径 1.8×1.3cm, 厚 0.3cm。染付を転用している。T 7—13 号土坑出土。6 はやや楕円形で径 1.7×1.0cm, 厚 0.4cm。染付を転用している。T 7—13 号土坑出土。7 は径 1.4cm, 厚 0.2cm。染付を転用している。U 7—1 号土坑出土。8 は径 0.2cm, 厚 0.4cm。染付の底部を転用している。「大明年製」銘有り。T10—1 号土坑出土。

2～6 はいずれも T 7—13 号土坑から出土している。2 と 3 及び 4・5・6 は各々、文様及び呉須の色調から本来同一個体の染付を転用した物と推測される。 (小俣 悟)



第415图 玩具類

(6) 石・ガラス製品

本項では石製品及びガラス製品を対象とする。第416図1～12・第417図1～10が石製品であり、茶臼1硯、砥石の他に旧途不明の軽石等が出土している。ガラス製品は第417図12・14であり、共に鉛ガラスであり近世に属すると思われる。

第416図1は茶臼の下臼であるが、小片のために目数等は不明である。V7-1号土坑出土。

硯 第416図2は幅5.2cm、厚1.4cmで黄褐色を呈する。U7-1号土坑出土。同3は厚2.9cmで青黒色を呈する。T10-1号土坑出土。4は幅5.2cm、厚1.2cmで黄褐色を呈する。U7-1号土坑出土。同5は厚2.4cmで、硯側に刻字が見られる。人名とも思われるが、小片のために不明瞭である。T10-1号出土。同6は幅8.0cmで硯背に刻字が見られる。一部しか残存せず「石」の1字のみである。遺構外。

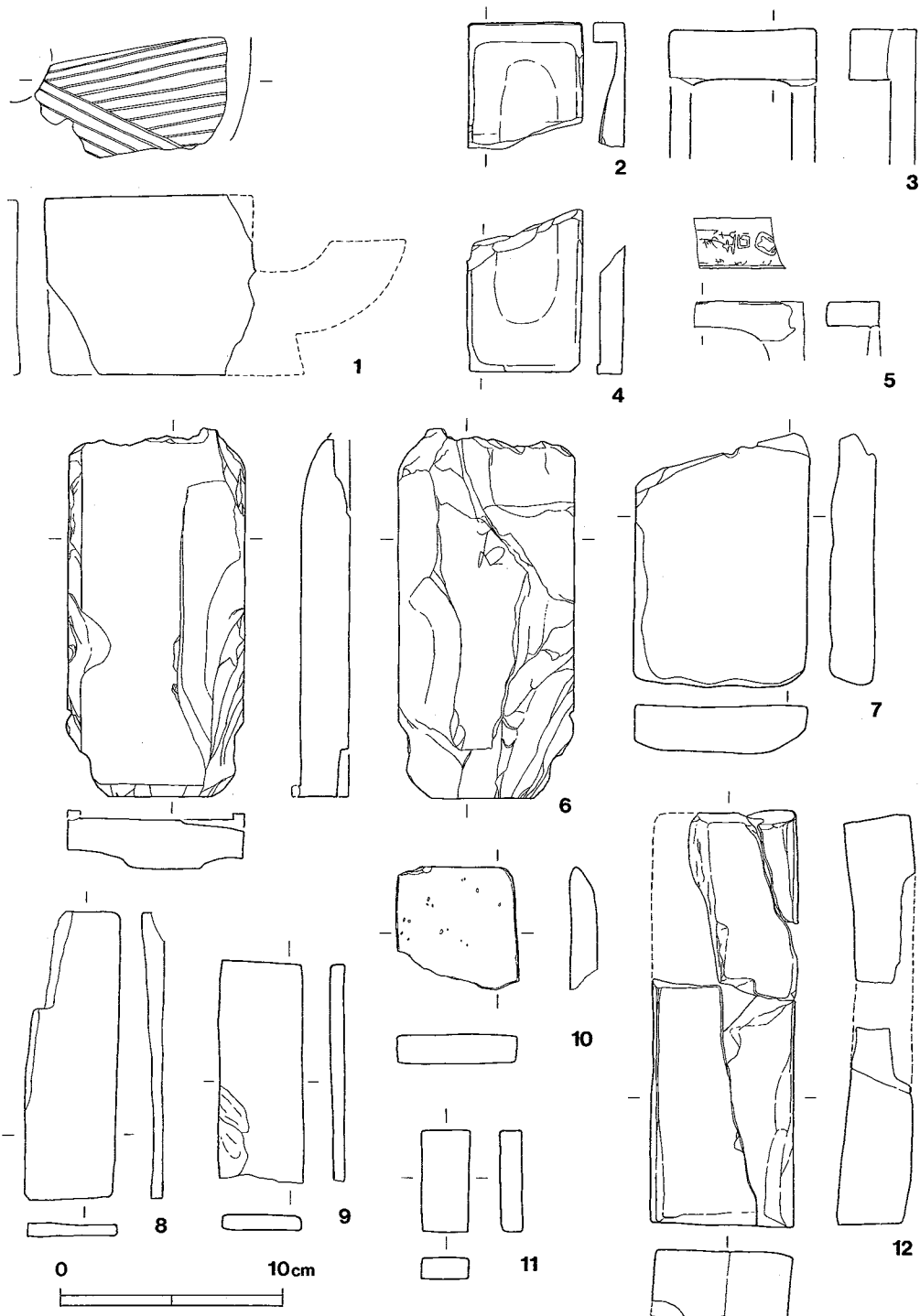
砥石 第416図7は長11.3cm、幅7.9cm、厚2.2cmで灰黒色を呈する。U7-1号土坑出土。同8は13.1cm、幅4.2cm、厚0.9cmで淡褐色を呈する。T10-1号土坑出土。同9は長10.0cm、幅3.8cm、厚0.7cmで淡褐色を呈する。U6-3号土坑出土。同10は幅5.5cm、厚1.8cmで灰青色を呈する。Q6-1号組石遺構出土。同11は長4.6cm、幅1.2cm、厚1.0cmで灰白色を呈する。T10-1号土坑。同12は長18.8cm、幅6.4cm、厚3.0cmで青黒色を呈する。P7-2号土坑出土。第417図1は長16.4cm、幅3.7cm、厚2.3cmで淡褐色を呈する。R7-3号溝出土。同2は長8.1cm、幅3.9cm、厚4.5cmで淡褐色を呈する。Q8-11号土坑出土。同3は長9.2cm、幅2.3cm、厚1.5cmで淡黄色を呈する。U6-1号土坑出土。同4は長9.9cm、幅3.7cm、厚2.3cmで淡褐色を呈する。T8-9号土坑出土。同6は幅5.6cm、厚3.4cmで淡黄色を呈する。U6-3号土坑出土。同7は幅5.8cm、厚3.2cmで淡黄色を呈する。U6-3号土坑出土。同9は長2.6cm、幅2.4cm、厚1.5cmで淡黄色を呈する。一方を切込んでいる。T8-9号土坑出土。

その他の石製品 第417図5・8は軽石状石製品である。5はほぼ方形で長6.2×6.1cm、厚2.1cmである。全面に磨滅が顕著である。遺構外、8は楕円形で一部欠損しているが、長9.9cm、幅6.2cm、厚3.5cmである。一面は平坦であり、両端に小溝が見られる。他面には一端に太い溝が見られ、縞状の物を掛けたものであろうか。T8-9号土坑出土。

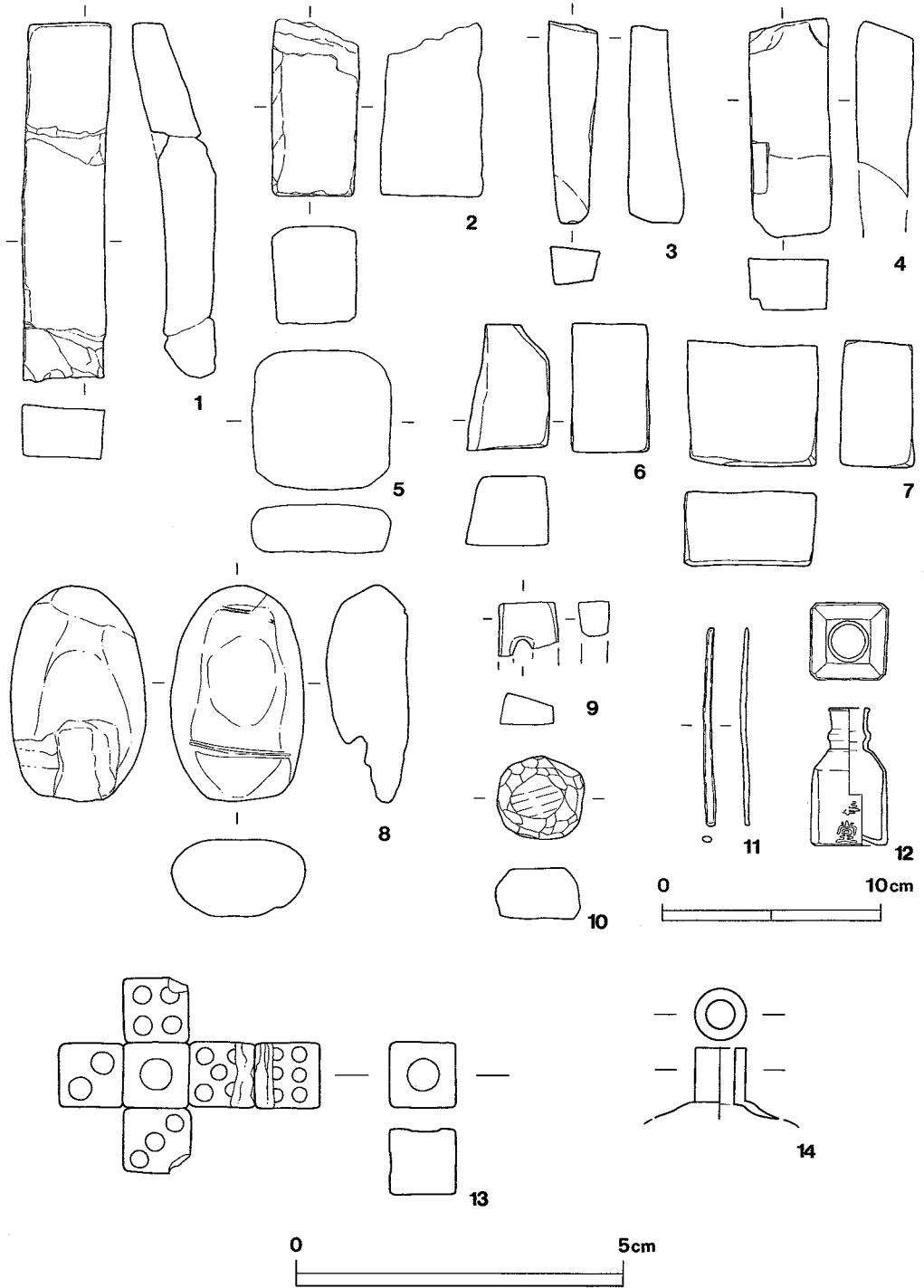
第417図10は円盤状で径3.8cm、厚2.3cmであり淡青色を呈する。一方の周縁部は細かく削平されている。T8-9号土坑出土。

ガラス製品 第417図12・14は共に瓶形である。12は体部を一部欠損するが、体部は四面体である。口径1.8cm、一辺3.5cm、器高6.3cmである。体部に文字が浮彫りされており「口華堂」と判読される。R9-1号土坑出土。14は口縁部のみ残存し口径0.8cmである。T10-1号土坑出土。

(小俣 悟)



第416図 石製品



第417図 石・ガラス製品及び角製品

(7) 金属製品

本地区の金属製品も法学部第4号館建設地区と同様、遺存状態の悪いものが多く、図示したのは全体の極一部である。(第418図)

鉄製品には和釘(1~21, 23)、鏝(22)、錠前(24)、刀身(25)、刀子(26~27)、小刀(28)がある。和釘は錆が著しかったが、S8井戸の出土品(1~14)は、状態が良かった。打ち付けてあったと思われる木が一部残っているものもあるが、釘の基部側1/2に限られ、打ち付けられたものから抜けて打ち付けた木だけが残ったと考えると、打ち付けるものの2倍の長さの釘を使用したことが知られる。小刀も同様に木製の鞘の内面が錆に依って残ったと考えられるものである。

煙管は、法学部4号館建設地区と異なって、肩に段の付くものは皆無で、この点からも両地区の利用時期の差が伺われる。

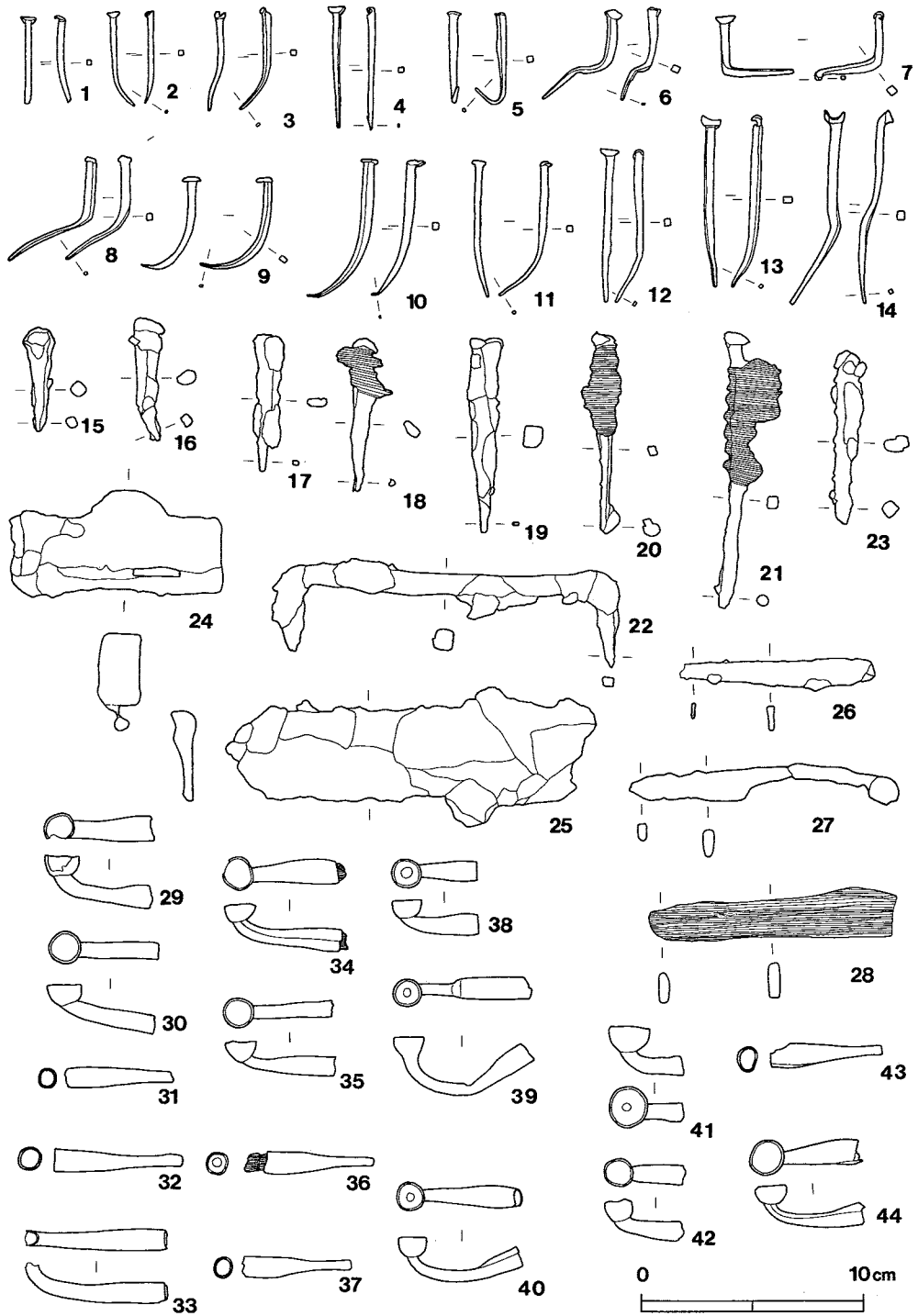
この外、銅製品は飾り金具や鋼線が少数出土しているが、いずれも小片で図示できなかった。

本遺跡出土の金属製品で最も点数の多いのは和釘である。遺存状態の良いものだけを図示したが、太さが1cm近くの錆の塊となり辛うじて釘であろうと推定できるものはその数倍に上った。しかしながら、2, 3の遺構出土のものは殆ど錆びてなく、特にE8包含層のものは計測に耐えるものである。計測値は各々かなりばらつくが、長さでは2.5cm, 4.4cm, 5.7cmにの所にピークがあり、各々前後0.1cmの範囲をみると9, 10, 15個で、2.1~3.538, 3.6~5.0cm, 5.1~6.5cmのもの個数各18, 20, 35個の43~50%を占め、ランダムな場合の確率3/15=20%を大きく上回り、出来上がりの長さを揃えようとした意図が見られる。但し、それを1寸, 1寸半, 2寸とするには1寸のものがやや短く、巻いてある頭の部分を加えても長さの比が2:3:4にならず、どのような基準を用いていたか不明とせざるを得ない。また重量では、2cm代の長さのものが0.4~0.7gの間に集中するのに対して、3.6~5.0cmのもの重量が1.4~2.1g間, 5.1~6.5cmのものが2.0~4.4gの間に広く分散し、原料である鉄の量に規定されているのでもないようである。但し、重量分布全体をみたとき、0.5, 1.5, 2.0, 3.0g付近にやや集中が見られ、鍛造前の鉄塊に0.5gという単位が存在したかもしれない。

和釘以外では、建築用材や日用品、またその部分と当然あってしかるべきものが殆どであるが、そのなかにおいて工具である鏝の存在は穴を穿った対象や他の工具が見られないところから謎である。今後構内の別遺跡にも注目していかなければならないであろう。(上田 真)

表25 金属製品出土遺構

図版番号	出土遺構	23	T9-2号	29~33	T7-13号	44	U4-1号
1~14	S8井戸	24	T8-9号	34~37	T10-1号		
15~20	T7-11号	25	T7-13号	38~40	U3-1号		
21, 22	S8-4号	26~28	T10-1号	41~43	T8-9号		



第418図 金属製品

(8) 古 銭

本地区出土の古銭は、唐銭、宋銭も含めて計65枚で、その中から比較的遺存状態のよい約半数の拓図を示した。法学部4号館建設地区と同様、渡来銭は磨滅が著しく、殆ど拓図を示すことが出来なかった。

本地区ではT7-13号から19枚、T10-1号から23枚と各々まとまって出土しているが、その他の遺構では1、2枚からせいぜい4枚と1遺構当たりの出土数は少ない。複数の古銭が出土した遺構では、新寛永銭のみ2枚出土したU6-3号、Q6-1石組遺構を除いて、鑄造年代が様々な古銭が伴出しており、特に出土数の多い先の2土坑では渡来銭から、新寛永銭の新しめのものまで幅広く出土している。

本項の古銭の分類も住谷昭洋氏の手を煩わし、数々の御教示を頂いた。 (上田 真)

(9) 角製品

本地区では角を素材とした遺物を2点検出した。(第417図11・13)

第417図11はQ6-1号石組遺構の覆土中より出土した角を素材とする偏平な棒状もしくは箸状の遺物で一端を欠損している。現存で長さ90mm、幅は最大で4mm、先端部で3mm、厚さは最大2.5mm、先端で2mmを計る。やや反っているのは素材の湾曲がそのまま製品に反映されたものであろう。全面丁寧に研磨され光沢を持っている。筭と思われる。

13はS6区の江戸第二面下で検出された角製の骰子である。縦・横・高さ共に10mm、重さ1.1gを計る。目は小刀の切っ先をあてて抉って付けており断面「V」字形である。目の中に色を塗ってあった痕跡は確認できない。各面での目の大きさは一定していない。角の摩耗がやや目立つ。

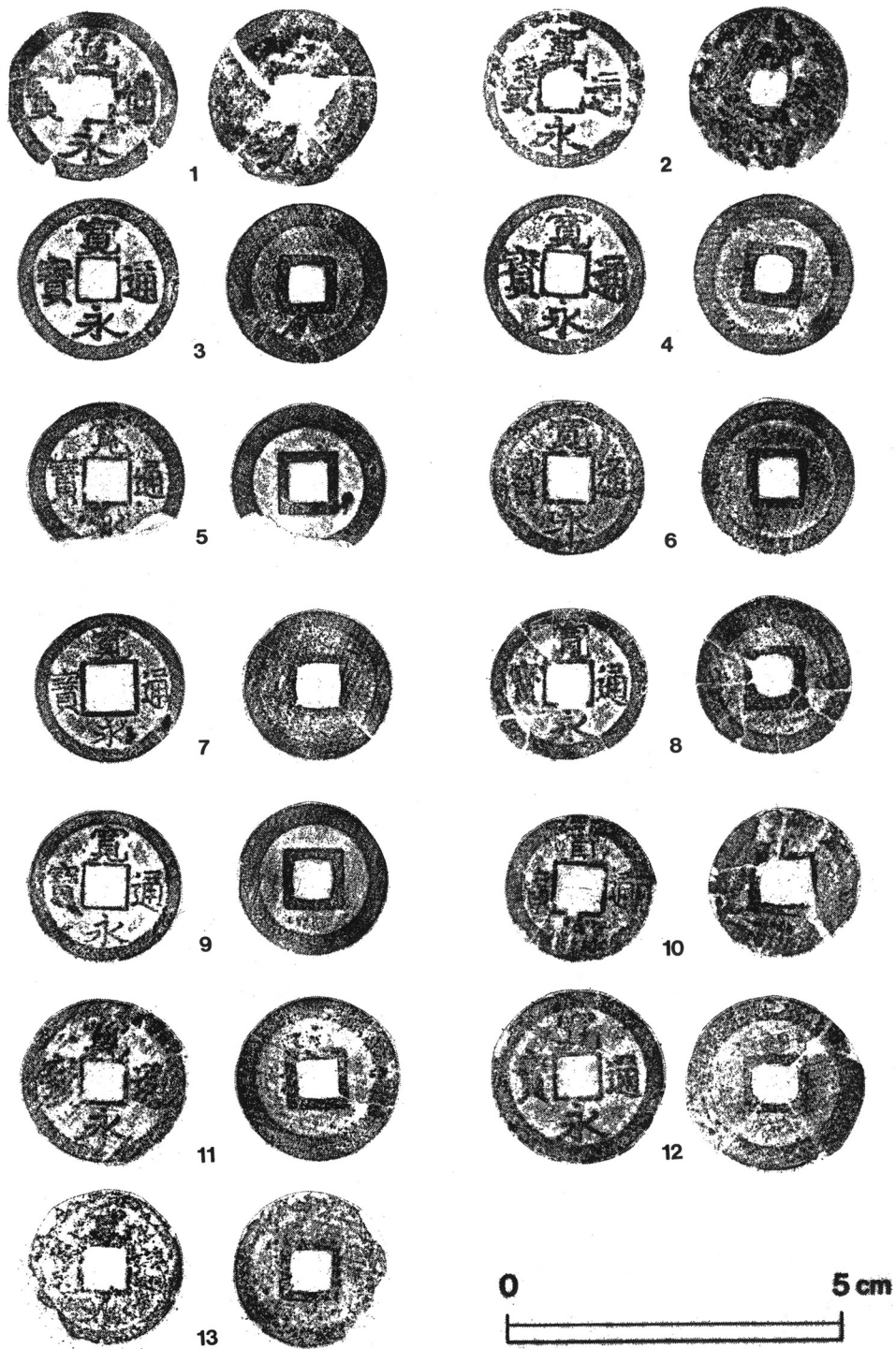
(菅谷 通保)

表26 古銭一覽

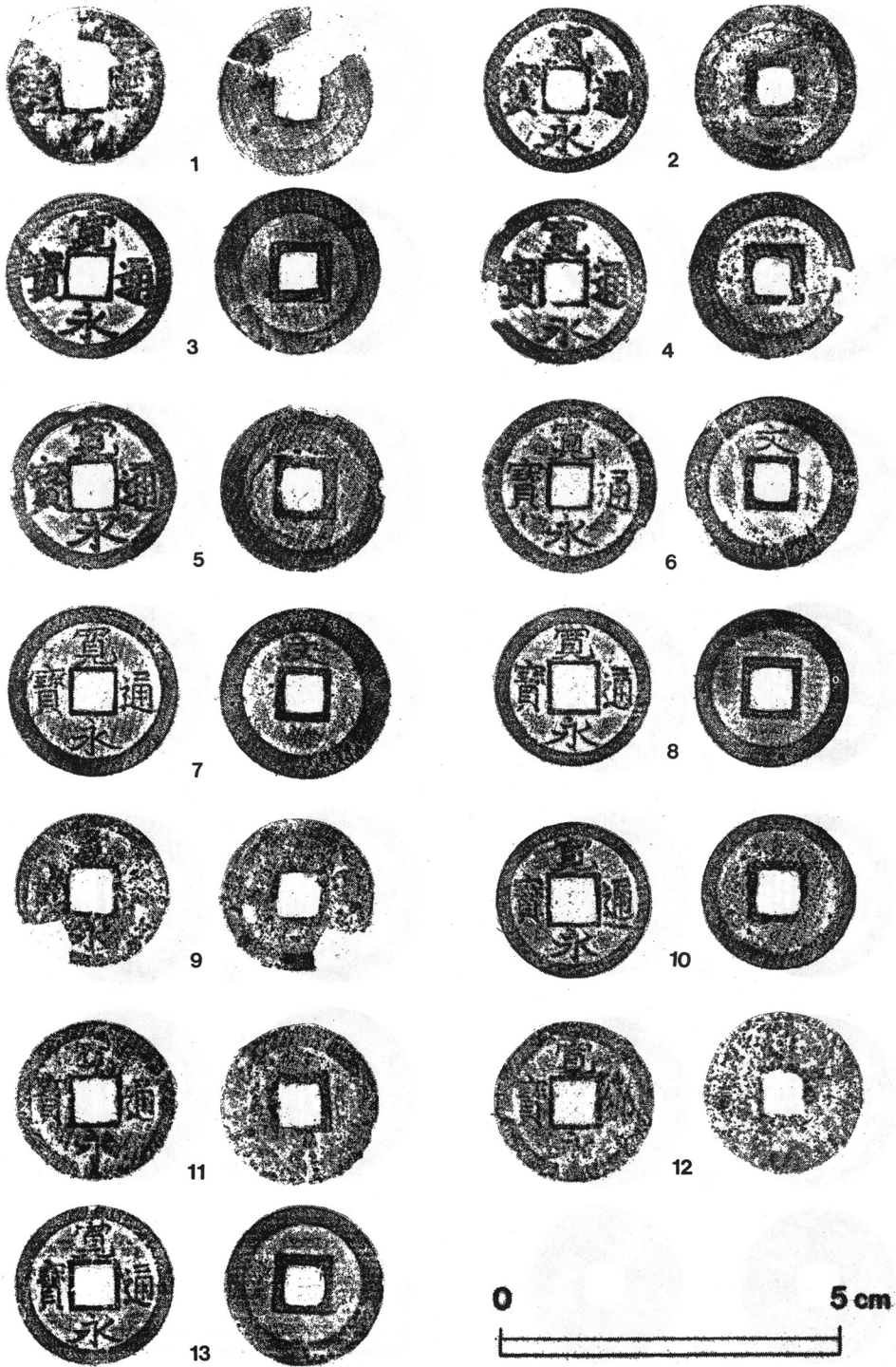
種類 出土遺構	宋 銭			古寛永銭							新寛永銭					不明寛永通貨	計			
	開元通貨	天聖天寶	天豐通貨	水戸銭	芝銭	仙台銭	松本銭	高田銭	岡山銭	鳥越銭	沓谷銭	文銭	濶縁文無背	荻原銭	四ツ宝銭			不旧手	上中島加島村鑄造	輪十後打
Q5-2号							1													1
Q6-7号																				1
T7-13号	1		1	1	1	1						1		2	8	1	1		1	19
T8-9号					1							1		1	1	1				4
T10-1号		1		2					1		1	4		1	9					23
U4-1号										1										1
U6-3号															2					2
Q6-1石組遺構 包含層出土	1			2				1				4		1	4					2
計	2	1	1	5	2	1	1	1	1	2	2	8	2	4	25	3	1	1	1	65

表27 古銭觀察表

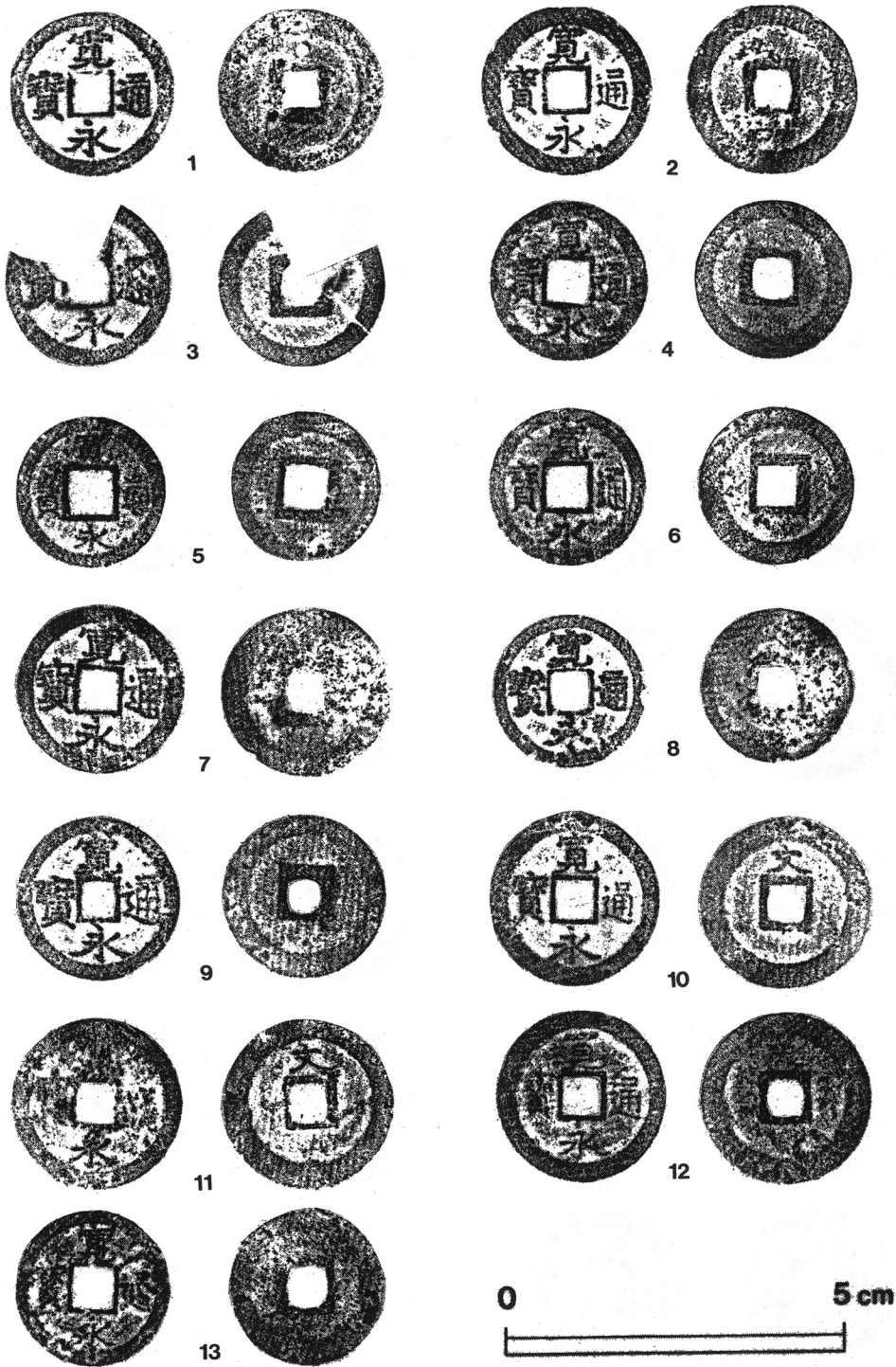
図版番号	出土遺構	種類	初鑄年代	銭径 (mm)	穿径 (mm)	銭厚 (mm)	重量 (g)	遺存状態	色調	備考
(1)-1	T7-13号	寛永通貨	寛永14(1637)年	24.0	5.8	0.8	1.4	中	緑灰色	「芝銭」、植物繊維附着
2	"	"	"	23.3	6.2	1.2	2.0	中	青灰色	「水戸銭」、表面腐食
3	"	"	"	23.0	5.7	0.9	2.4	良好	暗緑色	「仙台銭」、植物繊維附着
4	"	"	明暦2(1656)年	23.8	5.9	1.1	1.6	良好	青灰色	「沓谷銭」、植物繊維附着
5	"	"	元禄13(1700)年	23.0	6.0	0.9	1.7	良好	緑灰色	「荻原銭」、植物繊維附着
6	"	"	宝永5(1708)年	22.8	6.4	1.1	1.8	良好	緑灰色	「四ツ宝銭」
7	"	"	"	22.8	6.7	0.9	1.4	中	黒灰色	「四ツ宝銭」
8	"	"	"	22.8	5.8	1.1	1.2	中	緑灰色	「四ツ宝銭」、植物繊維付
9	"	"	天文3(1738)年	22.2	6.0	1.1	2.1	良好	緑灰色	上中島加島村鑄造 着
10	"	"	寛保元(1741)年	21.2	6.6	1.1	1.1	中	緑灰色	「小字背元」
11	T8-9号	"	寛永14(1637)年	25.0	5.8	0.9	1.5	中	青灰色	「芝銭」
12	"	"	延宝元(1673)年	22.6	6.3	1.0	1.5	中	緑灰色	「濶縁文無背」
13	"	"	宝永5(1708)年	24.2	5.8	0.9	1.7	中	緑灰色	「四ツ宝銭」
(2)-1	T10-1号	天聖天寶 寛永通貨	天聖元(1023)年	22.8	6.9	0.8	1.4	中	緑灰色	北宋銭 真書体 「天」字
2	"	"	寛永14(1637)年	24.0	5.8	1.2	2.9	良好	暗緑色	「岡山銭」、植物繊維附着
3	"	"	"	24.2	5.8	1.0	3.3	良好	黒褐色	「水戸銭」
4	"	"	明暦2(1656)年	24.0	5.7	1.0	2.2	中	茶灰色	「沓谷銭」、植物繊維附着
5	"	"	"	24.4	6.4	1.2	2.4	良好	黒褐色	「鳥越銭」
6	"	"	寛永8(1668)年	25.2	6.8	1.1	2.1	良好	暗緑色	「文銭」
7	"	"	"	24.8	5.8	1.1	2.8	良好	青灰色	「文銭」
8	"	"	宝永5(1708)年	23.0	6.8	1.1	1.5	良好	緑灰色	「四ツ宝銭」
9	"	"	"	22.2	6.7	0.9	1.1	中	緑灰色	「四ツ宝銭」、植物繊維付
10	"	"	"	22.8	5.8	0.9	1.6	良好	緑灰色	「四ツ宝銭」
11	"	"	"	23.2	6.1	0.9	2.1	中	褐色	「四ツ宝銭」、植物繊維付
12	"	"	"	23.6	6.1	1.1	2.6	良好	緑灰色	「四ツ宝銭」
13	"	"	"	23.0	6.0	0.9	1.5	良好	緑灰色	「四ツ宝銭」、通字上
(3)-1	Q5-2号	"	寛永14(1637)年	24.0	5.5	1.1	2.3	良好	暗緑色	「松本銭」
2	Q6-7号	"	延宝元(1673)年	25.0	5.6	1.2	3.3	良好	青灰色	「濶縁文無背」
3	U4-1号	"	明暦2(1656)年	-	-	1.0	1.6	劣	緑灰色	「鳥越銭」、寛字部分
4	U6-3号	"	宝永5(1708)年	23.2	6.1	0.9	2.8	良好	緑灰色	「四ツ宝銭」、厚肉 欠損
5	"	"	"	21.9	6.4	0.9	1.8	良好	黒褐色	「四ツ宝銭」
6	Q6-1石組遺構 包含層出土	"	"	23.0	6.0	0.9	2.5	良好	暗緑色	「四ツ宝銭」、通字上
7	"	"	寛永13(1636)年	24.2	5.5	0.8	2.4	良好	黒褐色	「水戸銭」
8	"	"	寛永14(1637)年	22.2	5.6	1.1	1.4	中	青灰色	「高田銭」
9	"	"	"	23.8	5.1	1.0	2.9	良好	青灰色	「水戸銭」
10	"	"	寛永8(1668)年	25.2	5.7	1.3	3.8	良好	緑灰色	「文銭」
11	"	"	"	25.2	6.0	1.2	3.2	中	黒褐色	「文銭」
12	"	"	"	24.9	5.6	1.1	3.9	良好	緑灰色	「文銭」、腐食進行
13	"	"	宝永5(1708)年	22.8	6.6	1.1	2.5	中	緑灰色	「四ツ宝銭」



第419図 古銭(1)



第420図 古銭(2)



第421図 古銭(3)

(10) 動物遺存体

1. 貝類

貝類の埋存が確認された土坑は16である。法学部4号館建設地区と比べてその数は少なく、また埋存する貝の量も少なかった。貝はすべてアワビ類、サザエの組合せであり、これにアカニシの加わる土坑1例、アカガイの加わる土坑2例があったのみであった。

その大部分は18世紀前半のもので、法学部4号館建設地側からのびるものの一部であったのであるが、その中でQ6-1号組石遺構とされたもののみが19世紀前半期のものとされている。この遺構からは、魚骨はかなりの量が出土したものの、貝については数個のアワビ、サザエ、アカガイが検出されたのみであった。その年代の資料が他になく、時期的な特徴をとらえることは出来ない。全般的な性格については法学部4号館建設地における調査報告に伴せて表示しておいたので参照いただきたい。

2. 魚類

Q6-1号組石遺構の魚骨

この遺構は文学部側の地域で、唯一まとまった魚骨を出土した場所である。魚骨は長くのびる組石のごく一部にブロック状をなして埋存していたものである。

ニシン目 ニシン科

マイワシ

良好な標本がのこされている。顎骨と主鰓蓋骨、耳骨の検出できたのはこのブロックだけである。保存の良い標本だからである。

ウナギ目 ウナギ科

ウナギ

ウナギの検出は本遺跡では稀であるが、ここではその数少ない標本が検出されている。

ダツ目 サヨリ科

サヨリ

腹椎と尾椎が検出されているが、顎骨を発見するまでに至っていない。

ボラ目 ボラ科

ボラ

椎体長5.5mmの尾椎体がある。

ボラ目 カマス科

カマス

腹椎一個と歯骨がある。カマスの出土は本遺跡では数少ないものである。

タラ目 タラ科

マダラ

マダイとともに大型になる個体のものである。左角骨，方骨，前鰓蓋骨，舌顎骨，あるいは右歯骨と角骨のそれぞれの一括検出が確認されている。

スズキ目 スズキ科

ハタ類

第一腹椎の小さい標本がある。

スズキ目 タイ科

マダイ

大型マダイの埋存は少ないようである。左側の歯骨，角骨，方骨そして前鰓蓋骨，さらに舌骨までが一括で検出されている。

チダイ

チダイの検出は本遺跡全体でも稀である。標本は小さい歯骨である。

スズキ科 キス科

キス

左右一対の歯骨があり，同一個体のもと考えられる。

スズキ科 アジ科

マアジ

歯骨が検出されている。標本として珍しいものである。

ムロアジ

歯骨と椎体が一括で検出されている。

ブリ

尾椎体の検出であるが，この遺跡では珍しい。

スズキ目 サバ科

サバ類

前上顎骨と腹椎4，尾椎10個の一括検出がある。別個体のもを含む。

ソウダガツオ類

椎体長7.0mm，ソウダガツオの検出も珍しい。

カレイ目 カレイ科

カレイ類

椎体の検出のみである。

この遺構から検出された標本は，上述のように多くの種類を含むものであった。本遺跡のこれまでみてきた土坑内魚骨のこれまでの特徴として，魚種の多いことが指摘できるが，本遺構(Q 6-1号)の場合には，特にそうした傾向をみてとることができるであろう。 (金子 浩昌)

報告篇第四章 江戸時代の調査 II

表28 貝類の遺構別出土量表

貝種 L R	アワビ	サザエ	アカ ニシ	アカ ガイ	マガキ	ヤマト シジミ	ヤマト シジミ	ハマ グリ	ミル クイ	サルボ ウガイ	備 考	計
				L R	L R	L R	L R	L R	L R	L R		
土坑				L R	L R	L R	L R	L R	L R	L R		
P 5-1		2										2
P 5-2		5										5
P 6-5		1										1
P 6-7			1									1
P 7-2		7										7
Q 5-2		1										1
Q 6-1組石	1	1	2	1	1							4
R 7-3		3	3									3
R 8-2ピット	1											1
S 8-4 (1)		8	3									11
” (2)	4			fr.1								10
” 計	4	8	3	fr.1								16
T 9-2		1										1
T10-1		3										3
U 3-1		3										3
U 6-3		1										1
U 7-1 (1)		3	1									3
” (2)		1										1
” (3)		1										1
” 計												5
V 8-9			1									1

第五章 遺物各説補論—印刻—

ここでは、都合で遺物各説（陶器・磁器・土器）で触れられなかった印刻について簡単に概要を説明し、気づいた点まとめ、担当者としての責務を果たしておきたい。

近世の陶磁器類には印刻が見られる物がかかなりある。特に碗・皿類に多いが、徳利・搦鉢等多様な器種に見られる。また土器にも時には見られる。刻印は一般に工人の個人名及び生産地名を表示する。土器では記号を刻印することも見られるがやはり工人の区別を表示すると推測される。一方磁器に見られる銘は年号や吉祥文字等が一般的であり相様が異なるが、優品や一部には工人・生産地を表示する物も見られる。

印刻は大半が法学部地点より出土している。器種では碗・皿が多いが、徳利・搦鉢から焙烙まで多種見られる。

第422図1は蓋物で底部のみ遺存し、高台内に「清水」銘有り。C 3—1号土坑出土。

同図2・3は皿で高台内に「清水」銘有り。C 4—1号土坑出土。

同4も皿で高台内に「清」銘が有るが、おそらく「清水」であろう。D 7—1号土坑出土。

同5は碗で高台内に「清水」銘有り。D 8—7号土坑出土。

同6・7は碗で高台内に「清水」銘有り。E11—1号土坑出土。

同8～11は同種の小鉢で高台内に「清水」銘有り。F 8—3号遺構出土。

同12は碗で高台内に「清水」銘有り。G 6—2号土坑出土。

同13は碗で高台内に「柴」銘有り。C 3—3号土坑出土。

同14は皿で高台内に「柴」銘有り。C 4—1号土坑出土。

同15は碗で高台内に「柴」銘有り。T 7—13号土坑出土。

第423図1・2は碗で高台内に、おそらく「雲」銘であろう。E11—1号土坑出土。

同3は皿で高台内に「木下弥」銘有り。C 4—1号土坑出土。

同4は碗で高台内に「下弥」銘が有るが、おそらく「木下弥」であろう。E 8—2号土坑出土。

同5は皿で高台内に「新」銘有り。G 6—4号土坑出土。

同6は碗で高台内に「富永」銘有り。E 8—5号土坑出土。

同7は皿で高台内に「次」銘有り。H 5—1号土坑出土。

同8・9は碗で高台内に「小松吉」銘有り。E11—1号土坑出土。

同10は碗で高台内に「森」銘有り。E 8—2号土坑出土。

同11は皿で高台内に銘を有するが、記号状で不明である。C 4—1号土坑出土。

同12は皿で高台内に「森」銘有り。遺構外の出土である。

第424図1は碗で高台内に、楕円形枠で「御室」銘有する。E11-1号土坑出土。

同2は碗で高台内に「朝日」銘有り。E8-2号土坑出土。

同3も碗で高台内に「朝日」銘有り。E8-5号土坑出土。

同4は碗で高台内に「岩倉山」銘有り。E7-3号土坑出土。

同5は堦で底部端に「音羽」銘有り。E7-3号土坑出土。

同6は碗で高台内に「清」銘有り。F7-6号土坑出土。

同7は碗で高台内に六角枠に「清」銘有り。押し直しているようである。G7-7号遺構出土。

同8は碗で底部のみ遺存する。高台部に楕円形枠に「新山」銘有り。法学部遺構外出土。

同9は碗で高台部に銘を有するが、記号状で不明である。E7-6号土坑出土。

同10は船徳利で底部端に円形枠で「本」銘有り。C4-1号土坑出土。

同11は碗で高台部に10弁の菊花を印刻する。E7-3号土坑出土。

第425図1は徳利で底部端に、円形枠に「井」銘有り。E8-2号土坑出土。

同2は徳利で底部に印刻状の物有り。「イ」か。E8-2号土坑出土。

同3は徳利で底部端に、円形枠に「万」銘有り。E8-2号土坑出土。

同4は播鉢で薄手、体部上半のみ遺存する。片口部に扇状枠に「長上」銘有り。法学部遺構外出土。

同5は播鉢で片口部に、扇状枠で「長上」銘有り。C10-4号土坑出土。

同6は播鉢で片口部に、扇状枠で「上」銘有り。E7-3号土坑出土。

同7は土瓶で底部のみ遺存する。楕円形枠に「丸い」銘有り。法学部遺構外出土。

同8も土瓶で底部小片である。楕円形枠に「回」銘有り。法学部遺構外出土。

同9も土瓶で底部小片である。底部端に「囧」銘有り。法学部遺構外出土。

同10は土製秉燭で肩部に、六角形枠に「吉」銘有り。B3-2号土坑出土。

同11は行平堦で把手部の遺存する。上・下面に唐草文を陽刻し、上面に「四喜楽」銘有り。文学部遺構外出土。

第426図1は土製の鉢あるいは皿の底部片である。内面に一部欠損するが円形枠に「楽」銘有り。E8-5号土坑出土。

同2は焙烙で底部内面に「⊖」の印刻を有する。B7-2号土坑出土。

同3は焙烙で底部内面に「○」の印刻を有する。C7-2号土坑出土。

同4は土製鉢状の小片でおそらく底部であろう。内面に欠損して不明瞭だが、円形枠に略字の「楽」銘有り。E7-3号土坑出土。

同5は焙烙の底部小片である。内面に「○」の印刻を有する。E7-3号土坑出土。

同6は片口で高台内にへラ記号と推測される物がある。U6-3号土坑出土。

刻印の検討

第422・423図は肥前産京焼風碗・皿・蓋物である。大半が碗・皿であり、碗は外面に、皿は見

込に鉄絵山水文が見られる。薄手で高台は方形、胎土は緻密で灰褐色あるいは黄白色を呈し、高台内に円刻し印刻する。「清水」が多いが多様な銘が見える。図示以外には「善」「市川」(大橋 1983~84)、方形枠に変体字(佐々木 1985)等がある。

同一銘でも書体に若干相違が見られる。特に「清水」は数種あるようであり、また「清水」のみ草書体である。

「清水」「木下弥」は京都清水産においても使用されているようであるが、肥前においても鍋島藩窯等多くの窯跡から「清水」以下の銘を有する碗・皿が多量に出土している。また高知県尾戸窯跡からも「清水」等の碗・皿が確認されている(丸山 1973)。鈴木重治氏は京都出土の京焼風陶器を、胎土・山水文等の相違から京都産と肥前産に分類している(鈴木 1985)が、江戸出土のこの種の京焼風陶器はほぼ肥前産と推定される。

肥前では17世紀後半に生産されているようで、18世紀になると無印で、胎土・作り・山水文等が粗雑になる(大橋 1984)。本遺跡では第Ⅰ~Ⅲ期(第三章第三節(1)のまとめ等参照、以下同)に出土するが中心はⅠ・Ⅱ期である。Ⅲ期には無印で粗雑な形態が多く見られる。

第424図1~5は京都系陶器である。1の「御室」は京都市御室窯を示す。野々村仁清により17世紀中葉に開窯され、清水窯等と共に京焼として著名である。瀬戸・美濃産京焼風碗を「をむ路」と称するが(仲野 1987)、御室産を意識したものであろう。

1は胎土は平滑で緻密、釉調も厚く青味を呈しており、肥前産とは若干相違する。また銘も楕円形枠を有する。他の京焼である清閑寺・音羽等も基本的に枠を有する。要するに肥前産と京都産の区分は印刻からも可能である。

同2の「朝日」は宇治市朝日窯を示し、遠州七窯として茶陶で著名である。2は茶道具と推定される遺物群に含まれていた。3とは胎土が異なるが、京焼は陶土をかなり入れている為であろう。

同4の「岩倉山」銘京焼は18世紀中葉~19世紀後半に限定される。第425図9の土瓶も「岩倉山」の可能性があり、胎土が一様ではない。9は同じ土瓶の同7・8の「丸い」と共に楕円形枠を有し、胎土も類似している。また第425図3「音羽」とも胎土が類似しているが、5は無枠である。音羽窯は17世紀~18世紀前半の京焼、19世紀前半の滋賀県産、17世紀~19世紀末の大阪府産が知られる。

同6~11は瀬戸・美濃産陶器である。6・7は京焼風御室茶碗で「清」を有する。前述の様に名称は御室窯を受け、印銘は清水窯を受けている。一般的には清水銘が著名である為に刻印は、肥前産同様清水窯を受けたものであろうか。第Ⅲ期に出土する。

8・9・11は碗の幅高台に印刻されている。8の「新山」は美濃駄知窯等に見られ(仲野 1986)、また「駄知」と共に円形枠に「本」が印刻されている例もあり、8・9は駄知窯の可能性もある。

第425図1~3は備前産徳利である。しかし2は無枠で底面中央に見られ異質であり、印刻としては不自然でもある。

同4～6は播鉢であり、従来口縁部等の形態から備前系と称されているが、近年堺産の可能性が高まっている(稲垣 1988)。片口部に扇状枠に「上」「長上」を有する。中世末葉の備前刻印に扇状があり、刻印も備前から影響されているものと推測される。「上」とは上質の意味か。第Ⅲ期以降に見られるが、文献上では1714年に押印が許可されている(稲垣)。

同10は小型の土製燵燭である。この形態は18・19世紀に見られ、施釉され肩部に六角枠で「吉」を有する例が多い。

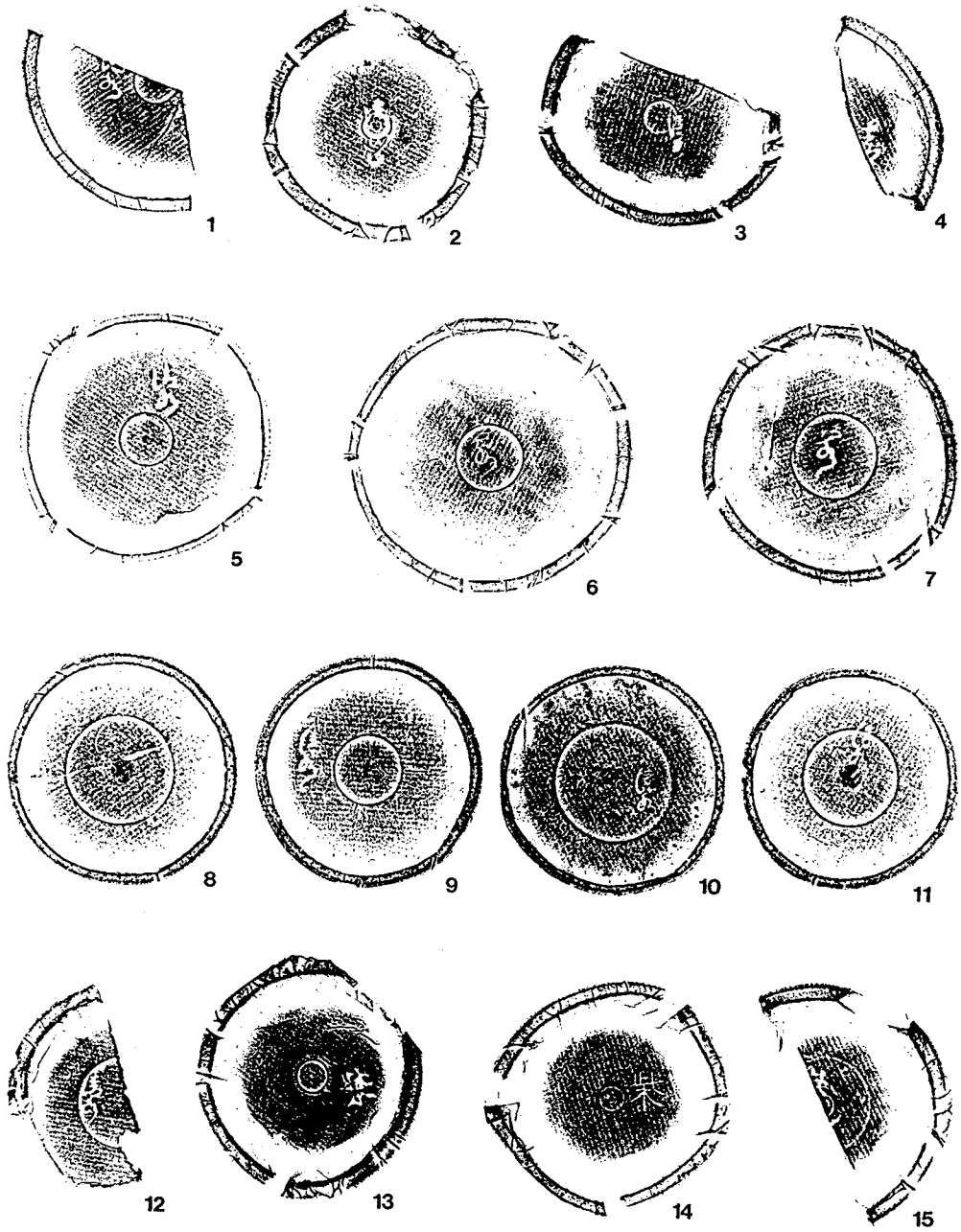
第426図1・4は土製の鉢あるいは皿である。胎土は緻密で硬質である。楽焼の系統は各地に見られ、工人が移動したり、技術を導入したりして成立するが、中には楽焼の名称だけを借用している場合もあるようである。「楽」銘は各々京楽焼に類似しているが、胎土は京楽焼とは相違し赤く、おそらく在地産であろう。今戸窯等も楽焼系統である。

同2・3・5は焙烙で底部内面に記号を印刻する。これらの刻印は瓦の物と共通する。瓦作りと焙烙等の土器作りは共通することがよく有り、同一工人あるいは同一窯場で製作されていた可能性が高い。

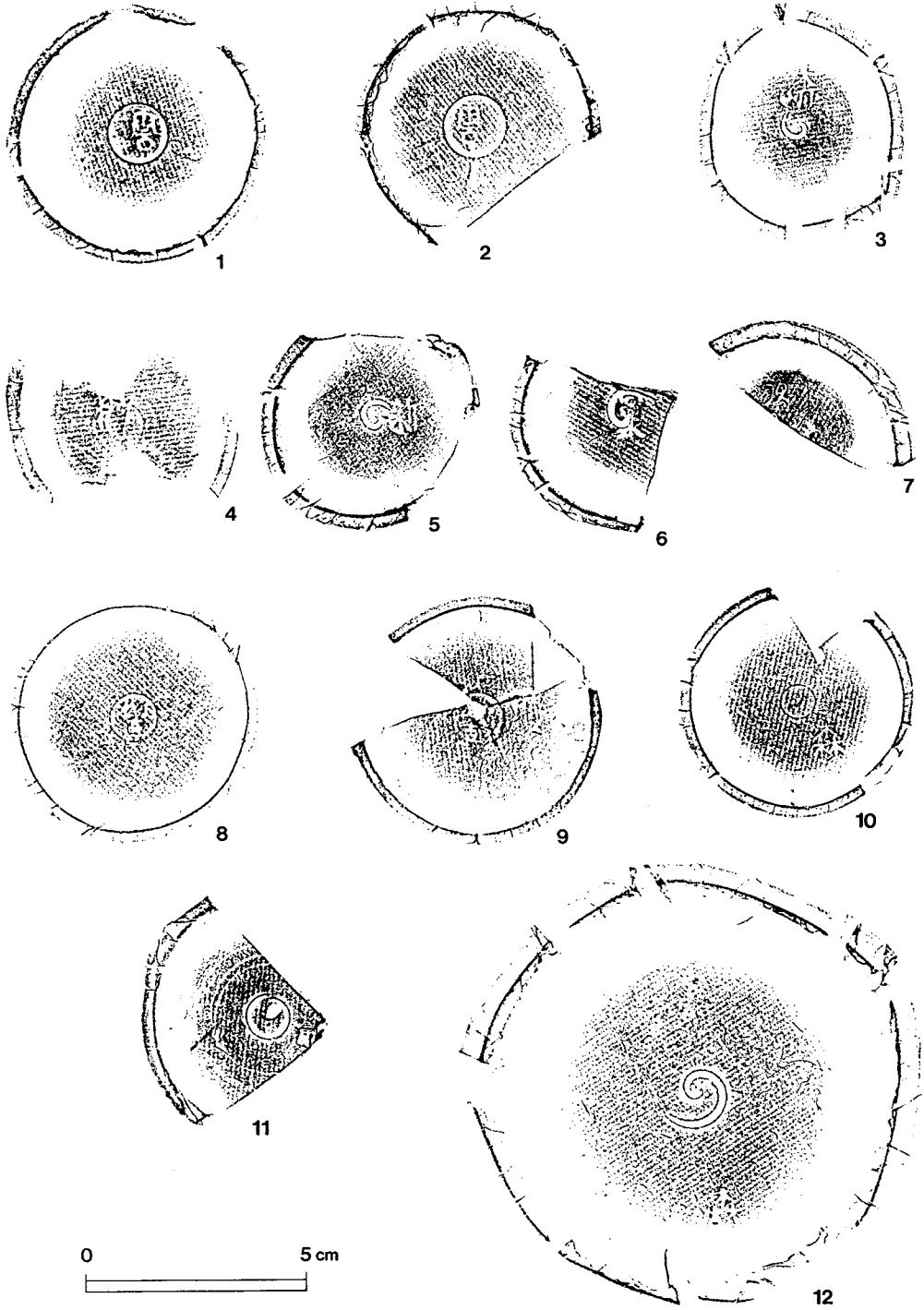
以上本遺跡出土の刻印を紹介した。刻印の研究は、陶磁器類の研究においては主要なものではないが、工人の移動や技術の問題、需要の問題、更に編年等を追及する手段となろうか。地味であるが今後研究が深化されることを期待したい。(小俣 悟)

文献

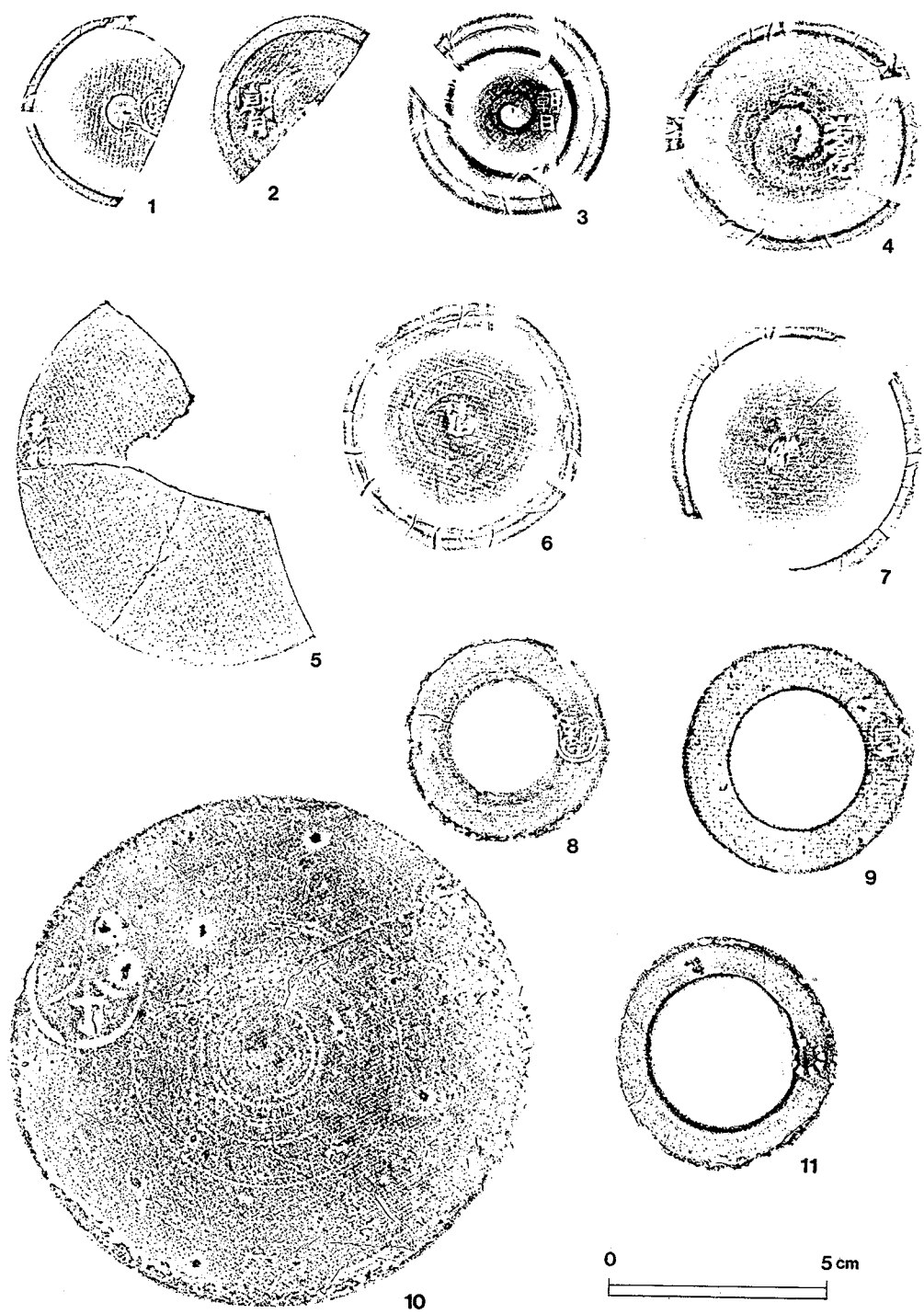
- 稲垣正宏 1988「関西の主要な遺跡出土の丹波、信楽、堺播鉢について」江戸遺跡研究会会報14
 扇浦正義他 1986『平河町遺跡』千代田区教育委員会
 扇浦正義他 1988『新宿区三栄町遺跡』新宿区三栄町遺跡調査団
 大橋康二 1983～84「鍋島藩窯跡出土の京焼風陶器上・中・下」セラミック九州7～9
 大橋康二 1984「肥前陶磁の変遷と出土分布」国内出土の肥前陶磁
 佐々木達夫他 1985『江戸』都立一橋高校内遺跡調査団
 佐々木達夫他 1978『動坂遺跡』動坂貝塚調査会
 小林克他 1987『真砂遺跡』真砂遺跡調査会
 鈴木重治 1985「京都出土の伊万里産「清水」銘陶器をめぐって」考古学と移住・移動
 鈴木公雄他 1986『郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会
 芹沢広衛他 1981『白山四丁目遺跡』白山四丁目遺跡調査会
 田口昭二 1983『美濃焼』ニューサイエンス社
 仲野泰裕 1986「浅間山の噴火に伴う泥流層下の瀬戸美濃陶器」研究紀要5
 仲野泰裕 1987「江戸時代中・後期の瀬戸窯」江戸遺跡情報連絡会会報10
 藤沢良祐他 1987「本業焼の編遷」研究紀要VI
 平凡社 1980～82『日本のやきもの集成1～12』
 丸山和雄 1973『土佐の陶磁』雄山閣



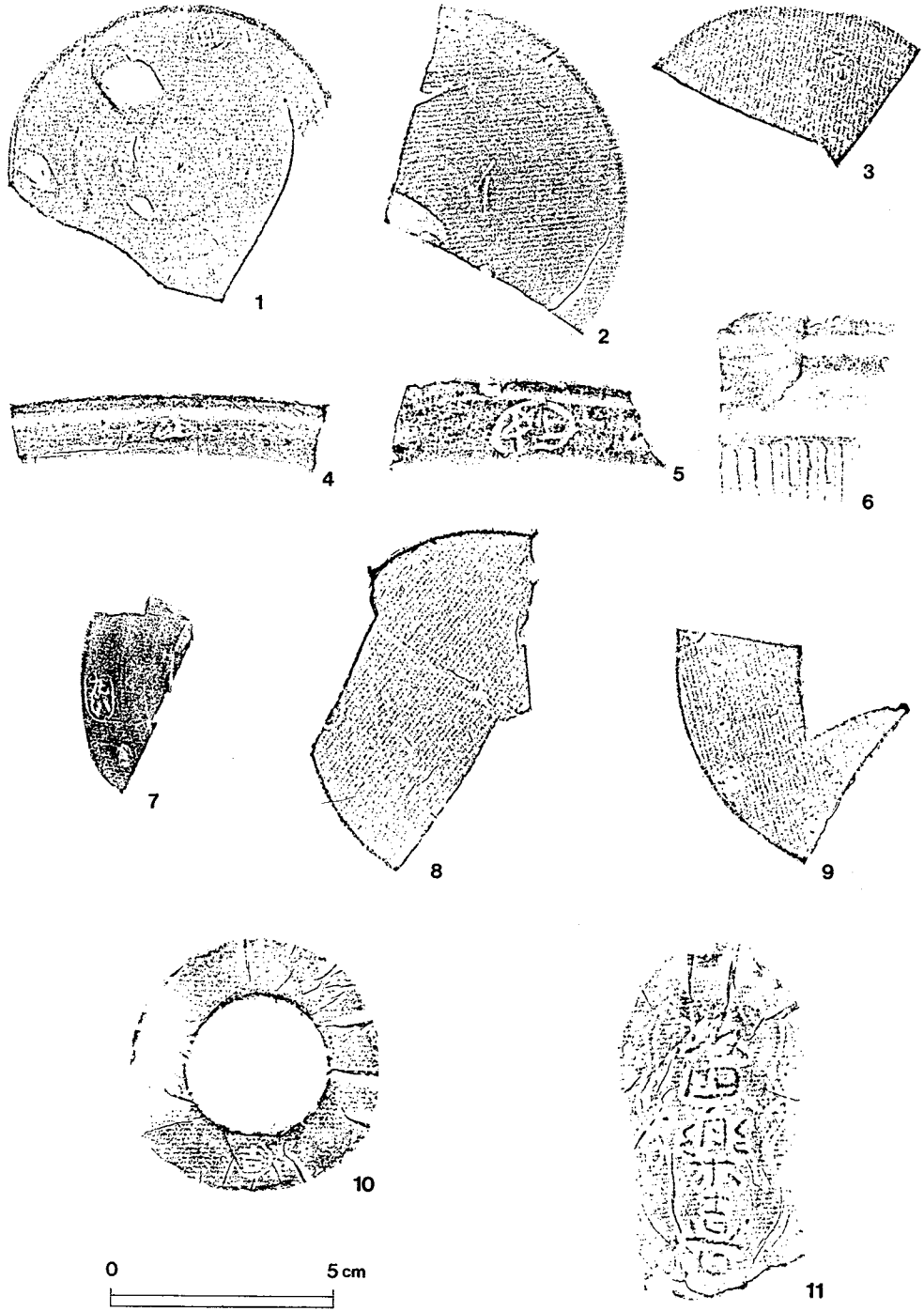
第422图 刻印(1)



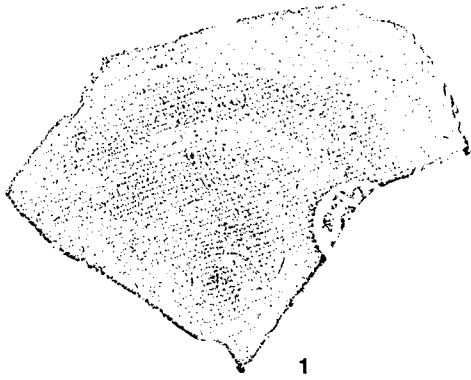
第423図 刻印(2)



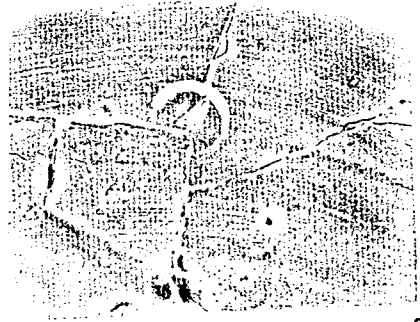
第424图 刻印(3)



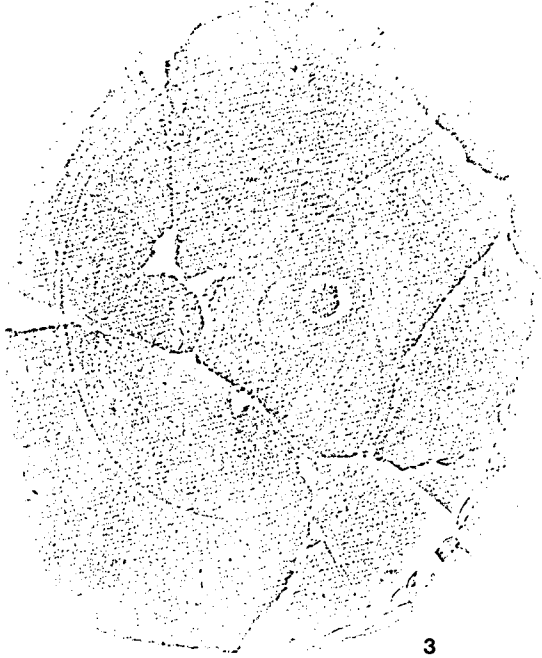
第425図 刻印(4)



1



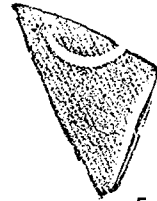
2



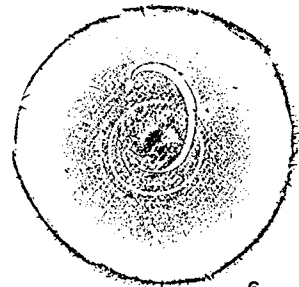
3



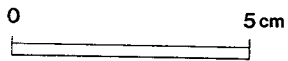
4



5



6



第426图 刻印(5)